後天的定住集団社会のメカニズム。女性の優位性。

IWAO OTSUKA

目次

（２９）『局所的（ローカル）』
（３０）『感情的』
（３１）『小スケール』
（３２）『高密度指向』
（３３）『厳格さの重視』
（３４）『減点主義』
（３５）『管理統制主義』
（３６）『従順さの重視』
（３７）『総花的』
（３８）『突出の回避』
（３９）『中心指向』
（４０）『マイナス思考』
（４１）『努力、苦労、労働の神聖視』
（４２）『真実、内実の隠蔽』
（４３）『多数派指向』
後天的定住集団社会Ａ「定住集団の掟」
後天的定住集団社会Ａの定住民度判定テスト
後天的定住集団社会Ａの権力構造
後天的定住集団的思考に囚われた後天的定住集団社会Ａのメンバー
後天的定住集団社会Ａにおける自己責任と無責任の両立
後天的定住集団社会Ａの官学の根本的な誤り。
後天的定住集団社会Ａが、究極の嘘つき社会になっている、根本的な原因。
後天的定住集団の社会における、天皇制の、普遍的な出現。
後天的定住集団社会Ａの家族定住集団（家族）。姑による支配。
説明。後天的定住集団社会Ａの家族定住集団。
後天的定住集団社会Ａの定住集団（あるいは後天的定住集団社会Ａ）と女性優位体質
はじめに
後天的定住集団社会Ａ「定住集団社会」の概要
「後天的定住集団社会Ａ＝女社会」論
後天的定住集団社会Ａと女社会との関連の実態
後天的定住集団社会Ａの理想型としての母子関係
後天的定住集団社会Ａにおける「新たな定住集団への転属の自由」「非定住民の新たな定住集団への加入の自由」「定住集団内部先輩後輩制の廃止」の必要性
「定住集団からの追放」の解消が必要。
負の体験の次世代連鎖の断ち切りが必要。
後天的定住集団社会Ａの論理の実態

従来母権制論の問題点
母権と母系、父権と父系の区別の必要性
後天的定住集団社会Ａにおける母権の無視、隠蔽
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、母権社会論を読もうとしない。
後天的定住集団社会Ａの男性女の性的役割は「母と息子」
後天的定住集団社会Ａで最強の存在
母なるシステム、後天的定住集団社会Ａ
母の王国、楽園としての後天的定住集団社会Ａ
後天的定住集団社会Ａ近代化と母なるシステム
ウェットな母性的後天的定住集団社会Ａにおける新規一括採用の根本的重要性

２．

母性からの解放を求めて －「母性依存症」からの脱却に向けた処方箋－
「お母さん依存症」の後天的定住集団社会Ａのメンバー
「母性社会論」批判の隠された戦略について －後天的定住集団社会Ａの最終支配者としての「母性」－
「母」「姑」視点の必要性 －後天的定住集団社会Ａの女性学の今後取るべき途についての検討－
後天的定住集団社会Ａにおける母性支配のしくみ －「母子連合体」の「斜め重層構造」についての検討－
「母性的経営」 －後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁組織の母性による把握－
職場中心視点から家庭中心視点への転換が必要。
空母、充電器、チャージャーとしての後天的定住集団社会Ａ家庭
後天的定住集団社会Ａにおける母性と女性との対立
姑と「女性解放」
後天的定住集団社会Ａの家族における2つの結合
後天的定住集団社会Ａの女性とマザコン
稲作農耕文化とマザコン
2つのマザコン
男性解放とマザコン認定
後天的定住集団社会Ａの男性の母性化
後天的定住集団社会Ａにおける母子二人三脚
子の業績は、母の業績。
子育ての、社会支配に占める重要性
後天的定住集団社会Ａ＝「男社会」の本当の立役者は「母」だ。

後天的定住集団社会Ａのデフォルト・ジェンダー、スタンダード・ジェンダー
後天的定住集団社会Ａの女性の権力、支配力の源泉と、「女の空気」
ブラックホール＝女社会の解明が必要。
後天的定住集団社会Ａの解明と、女社会スパイの必要性
後天的定住集団社会Ａと女社会の特徴例
女社会、男社会と女流、男流
後天的定住集団社会Ａの男社会は実質女社会。
女脳の後天的定住集団社会Ａのメンバー
後天的定住集団社会Ａのメンバーの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ指向は女性的。
方向感と性差、社会差
高関心社会と低関心社会
比較好き、相対評価好き
信号文化（暗示的主張文化）、受け取り文化、他力本願文化
後天的定住集団社会Ａのメンバーの依存体質、単独行動不可能性と迷惑意識の強さ、「一億総出家族定住集団」状況について
後天的定住集団社会Ａのメンバーの責任回避、転嫁と女性
アジア的停滞の原因、アジア的生産様式の担い手、東洋的専制主義の原因は、女性、母性にあり。
後天的定住集団社会Ａのメンバーの守られ願望
ミクロ文化とマクロ文化
原子型社会と分子型社会、原子行動と分子行動、性差との関連
後天的定住集団社会Ａの社会集団に働く表面張力と、女性、卵子との類似
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにおける女性の「過剰保護」とフェミニズムについて（「甘え」概念との関連）
先輩後輩制、親分子分制を打倒せよ！
後天的定住集団社会Ａと女性のパラレルな関係
雌国、牝国後天的定住集団社会Ａ
後天的定住集団社会Ａのメンバーの「武装女子」指向
女（母）が強い国＝強国という図式。
後天的定住集団社会Ａアニメ女性声優の声の高さについて・・・女性性の原型保持と後天的定住集団社会Ａ
後天的定住集団社会Ａのメンバーと国内、海外
表と奥

後天的定住集団社会Ａの歴史における女性の地位低下の通説について
一枚岩ではない先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ。
男女闘争史観

２．

「家庭内管理職」論
後天的定住集団社会Ａの女性と家計管理権限
後天的定住集団社会Ａの女性と国際標準
後天的定住集団社会Ａにおける母性の充満
女性と社会主義、共産主義
後天的定住集団社会Ａ主婦論争に欠けている視点
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの隠れた策略
専業主婦を求めて
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムを批判するということ。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの主張には無理がある。
後天的定住集団社会Ａにおける女性の「社会進出」について
後天的定住集団社会Ａの女性の経済的自立について
後天的定住集団社会Ａの女性の「社会」的地位
「女らしさ」はいけないか？　-後天的定住集団社会Ａにおける女らしさの否定についての考察-
「専業主婦」＝「役人」論
少子高齢化対策と後天的定住集団社会Ａの女性、専業主婦
家計管理の月番化について
男女の望ましいパワーバランスは50対50。
女性が暴走するとストップが効かない後天的定住集団社会Ａ。
「女性的＝後天的定住集団社会Ａに特有」の相関主張に対する反応
夫婦別姓と女性
姓替わりと夫婦別姓
女社会、男社会と女流、男流
根本的に先進性が欠如する後天的定住集団社会Ａ、女社会。
後天的定住集団社会Ａの主婦利権を追及しようということ。
女社会の実態が分かりにくい理由。
「弱い」女性の立ち位置

後天的定住集団社会Ａのメンズリブを批判する　- 今後の後天的定住集団社会Ａのメンズリブが取るべき途 -
お母さんの息子、お父さんの娘
後天的定住集団社会Ａの男性＝「母男」（母性的男性）論
後天的定住集団社会Ａの男社会は実質女社会。
後天的定住集団社会Ａの男性はなぜ家事をしないか？
仕事人間、企業定住集団人間になりやすい後天的定住集団社会Ａの男性
「鵜飼型社会」からの脱却
後天的定住集団社会Ａの男性ジェンダー学者について
保守的な後天的定住集団社会Ａの男性の「背後霊」
母の掌の上の後天的定住集団社会Ａの男性
母への反抗を恐れる後天的定住集団社会Ａの男性
女性による支配に対して声を上げない後天的定住集団社会Ａの男性
後天的定住集団社会Ａの勝ち組男子は、実は負け組。
伝統的稲作農耕が後天的定住集団社会Ａの男性弱体化の原因。
真の男女共同参画社会実現を
子育ての男女平等の実現
後天的定住集団社会Ａ、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１における男の子優遇の本当の理由
男性が女性に対して抱く矛盾した感情。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨマスキュリズムと後天的定住集団社会Ａ
真に支配力のある男性と、周囲の女性から立てられている男性とを区別するには？
夫婦、男女の権力の強さを測定する尺度

２．

後天的定住集団社会Ａの家族は「家父長制」と言えるか？
見かけだけの家父長制社会後天的定住集団社会Ａ
後天的定住集団社会Ａにおける家父長像の誤解について
不在家長
後天的定住集団社会Ａの家庭を父権化する計画について
父性が母性に呑まれている。
父性無き「男社会」（だったということ。）
雷親父と母
後天的定住集団社会Ａへの父性的宗教の導入と後天的定住集団社会Ａの男性解放
後天的定住集団社会Ａの自然風土と強い父性の導入の是非

後天的定住集団社会のメカニズム。女性の優位性。

Iwao Otsuka

（参考）前もって読むべき、筆者の電子書籍の一覧。

男女の性差と女性の優位性
女性優位社会が、世界を支配する。
移動生活。定住生活。社会的性差の起源。
生物一般における、心理と社会。人間への適用。
気体と液体。行動や社会の分類。生命や人間への応用。
母性と父性。母権と父権。親と権力。

凡例

説明。国や地域の分類。

日本。後天的定住集団社会Ａ。

中国。先天的定住集団社会Ｂ。
韓国。先天的定住集団社会Ｃ１。
北朝鮮。先天的定住集団社会Ｃ２。
東アジア。定住生活中心社会群ＡＢＣ。
東南アジア。定住生活中心社会群Ｄ。
ロシア。定住生活中心社会Ｅ。

西欧。先進的移動生活中心社会群Ｆ。
アメリカ。先進的移動生活中心社会Ｇ。
西欧北米。先進的移動生活中心社会群ＦＧ。
欧米。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ。

概論

説明。後天的定住集団社会Ａのメカニズム。

後天的定住集団社会Ａは、以下のような社会である。

///
その社会の基層。それは、定住生活集団の一種である。人々は、長期的には永住しながら、一時的、短期的に空間移動し、また元の地点に戻ってくる。
それは、移動生活とは区別される。移動生活では、人々は、長期的には空間移動しながら、一時的、短期的に定住する。それは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ。

///
その定住集団。それは、後天的定住集団である。その集団メンバーは、先天的な血縁関係を必要としない。それは、先天的定住集団とは区別される。先天的定住集団の社会の例。それは、先天的定住集団社会Ｂ。先天的定住集団社会Ｃ１。先天的定住集団の社会は、巨大血縁集団で動く。

///
その社会心理。それは、定住生活の心理である。それは、以下の内容である。相互の一体感や同調性や和合の重視。閉鎖性。未知へのチャレンジの禁止。個人行動の禁止。個人の自由独立の禁止。

///
その社会的現実。それは、以下の内容である。女性優位。その必死な隠ぺいが行われているということ。家族定住集団庭古参定住民女性としての人生投資家族定住集団女性による社会支配がなされているということ。それは、社会支配の中核である。家庭中心の社会観の徹底がなされているということ。しかし、表向きは、その価値観を、先進的移動生活者に合わせて、企業中心に見せかけているということ。

///
後天的定住集団社会Ａの国家の所有者による社会支配制度は、なぜ

潰れないか？それは、国が、巨大後天的定住集団として作用しているためである。その巨大定住集団内部では、相互の一体感や同調性や和合の徹底が、人々によって図られる。異質者や批判者は、その定住集団の中では生きていけない。国への批判。それは、以下の場合のみ、許される。スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの視点を取るということ。

///
その社会の理想。
（１）先進的な移動生活者へのあこがれがあるということ。定住生活への劣等感があるということ。しかし、心の底では、定住性の全面的肯定を行うということ。
（２）家父長制へのあこがれがあるということ。女性優位性を、表向きは、必死になって否定するということ。しかし、心の底では、女性性の全面的肯定を行うということ。

///
その定住集団の定住民になれる機会。それは、人生一度きりである。それが、社会的慣行となっている。
（１）赤ん坊としての誕生。それによる、家族集団への、一生に一度の加入。
（２）小学校、中学校、高校、大学への、一生に一度の入学。
（３）企業での新卒一括採用の慣行が持続しているということ。一生に一度の企業定住集団への加入。
（４）家庭での嫁入りの慣行が持続しているということ。一生に一度の結婚。

///
その定住集団への終身所属。終身雇用。その慣行の持続。その慣行の当然視。それが、以下の全てにおいて、そうであるということ。家族。企業。学校。地域。

///
定住民。定住集団。その分類は、以下の通りである。
（１）家庭。家族定住集団。
（２）企業。企業定住集団。企業定住集団。
（３）学校。学。
（４）地域。
（４－１）村落。地域定住集団。
（４－２）市街。市街住宅地。

（４－３）不動産。土地。地。

///
その社会は、以下の二者に二分される。
（１）定住民。定住集団のメンバー。
（２）流民。定住集団に入れない者。
それらの間に、大きな社会的差別が存在する。

///
その社会における、上位者と下位者。
彼らの上下関係においては、女性的価値観の徹底がなされている。
その価値観は、以下の内容である。
（１）上位者による下位者への専制支配。
（２）下位者による上位者への隷従。

その上下関係は、具体的には、以下の通りである。

上位者。下位者。そのリスト。

（上位者。）　／　（下位者。）
中心者。／　周辺者。

国。役人。／　民間。

所有者。／　借用者。
経営者。経営層。／　労働者。

発注者。／　請ける者。

有職者。／　無職者。
役職者。／　役職無し。
上司。／　部下。

古参者。／　新参者。
旧住民。／　新住民。
先輩。／　後輩。
師匠。／　弟子。

文系。／　理系。
人間系。／　機械系。

感情系。 /　 論理系。
文官。 /　 技官。

中枢。 /　 現場。
奥。 /　 表面。

///
定住集団における、人々の立身出世。それは、以下の内容である。
定住集団内部に所属したままで、昇進するということ。そのキーワードは、以下の通りである。内部昇進性。集団内昇進。
集団内昇進の条件。それは、以下の通りである。上位者に気に入られるということ。
下位者は、上位者に対して、以下の行為を行う。懐きと媚びと迎合と忖度。上位者が気に入る成果を出すということ。その努力の振りをするということ。根性論で動くということ。

///
その社会は、以下のように動いている。
（１）表向き、男性的社会規範の導入を推進するということ。
（２）集団内部では、女性的集団規範への従順の徹底を推進するということ。

///
後天的定住集団。そこでは、定住民も、条件を満たせないと、定住資格を取り消される。定住民による永住。それは、条件を満たし続ける限りにおいて、可能である。
後天的定住集団では、定住条件失格者に対して、以下の行為が頻発する。
（１）集団内孤立の強制。集団追放。定住集団からの追放。
（２）集団でのいじめ。

///
その社会は、前例重視で動く。その社会では、前例蓄積者や前例運用指導者が上位者になる。それは、以下の人々である。教授。先生。師匠。先輩。
人々は、以下の感情を持って動く。前例破りの独創行動への嫌悪。集団を通さないで行われる、独自研究や独自出版への蔑視。

///

その社会は、以下の人々に対する嫌悪や差別感情によって動く。
異質者。非同調者。被害者。障害者。危険な人。流民。
それは、残忍で、冷酷である。それは、非人間的である。しかし、人々は、それを当然視する。

後天的定住集団社会Ａ。その社会的な真実。

後天的定住集団社会Ａ。その社会的な真実。
それは、以下の内容である。

（１）
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想。
それは、後天的定住集団社会Ａの伝統的な国策であること。
その内容を、今なお、国を挙げて、強力に推進し続けていること。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨへの礼賛を、熱心に行うこと。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ思想の教条的な丸暗記を、行うこと。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ思想を、権威ある前例として、絶対視すること。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ思想と、伝統的な後天的定住集団社会Ａ思想。
それら以外の思想を、蔑視し、無視すること。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ。
彼らとの間に存在する、異質性や対立性。
それらの存在を、否定すること。

彼らとの間に存在する、異質性や対立性。
それらの存在を支持する内容の研究。
その実行の試み。
それを、社会的に、禁止し、阻止すること。
それは、例えば、以下の（Ａ）の内容である。

後天的定住集団社会Ａを、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの仲間と見なすこと。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを、先進国と見なすこと。

後天的定住集団社会Ａを、先進国と見なすこと。
それらに対して、固執すること。

（２）
先天的定住集団社会Ｂ。先天的定住集団社会Ｃ１。先天的定住集団社会Ｃ２。
彼らに対して、蔑視や無視や敵視を、行うこと。
定住生活中心社会Ｅ。
彼らに対して、敵視を、行うこと。
定住生活中心社会群Ｄの諸国。
彼らに対して、蔑視や無視を、行うこと。

彼らとの間に存在する、共通性や同一性。
それらの存在を、否定すること。

彼らとの間に存在する、共通性や同一性。
それらの存在を支持する内容の研究。
その実行の試み。
それを、社会的に、禁止し、阻止すること。
それは、例えば、以下の（Ａ）の内容である。

//
先天的定住集団社会Ｂ。先天的定住集団社会Ｃ１。先天的定住集団社会Ｃ２。
定住生活中心社会Ｅ。
定住生活中心社会群Ｄの諸国。
//
彼らのことを、先進国とは、決して呼ぼうとしないこと。
その状態が、いつまでも続くこと。

（Ａ）
例。

性差の存在についての、研究。

性差。
文化の差。
それらの両者の間における、関連の存在。
そのことについての、研究。

女性性。
定住生活中心社会群ＡＢＣや定住生活中心社会群Ｄの文化。
それらの両者の間における、関連の存在。
そのことについての、研究。

定住生活についての、国際的な研究。

国家の所有者陵を、発掘すること。
そのことによって、国家の所有者一家のルーツの真実を、解明すること。

（３）
後天的定住集団社会Ａや、その国内。
外国や海外や国外。
上記についての、二者択一。
それを、国際関係の把握において、専ら、行うこと。
物事を、その枠組みによってのみ、考えること。

外国を、一括りにして、捉えること。

後天的定住集団社会Ａの人々。
彼らが、彼ら自身の視野に入れる、外国。
それは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの一択のみであること。
彼らは、それ以外の存在を、無視すること。

外国の分類。
その中における、後天的定住集団社会Ａの位置づけ。
それらについて、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ思想の知見以外の内容を、一切、採用しないこと。

後天的定住集団社会Ａの特殊性や唯一性。
それらについての強いこだわり。
それを、持ち続けること。

後天的定住集団社会Ａや後天的定住集団社会Ａの文化。
それらは、以下の内容に、過ぎないこと
//
世界中で良く見られる、共通の文化的パターン。

その、一類型。
//
そうした意見。
それを、決して採用しないこと。

（４）
フェミニズム。
それは、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策の一環であること。
家父長制。
それを、世界的に普遍的なものとして、捉えること。
後天的定住集団社会Ａを、家父長制の社会として、捉えること。
男性が、懸命になって、威張ること。
女性が、懸命になって、弱者や被害者としての主張を行うこと。
男女平等の理想を、熱烈に、掲揚すること。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会を、その理想形として、礼賛すること。
伝統的後天的定住集団社会Ａを、以下の内容として、捉えること。
//
男尊女卑。
女性差別。
男性社会。
男性支配。
//
それらの内容を、批判すること。
それらの解体や撤廃を、主張すること。

性差別を、否定すること。
性差の存在そのものを、否定すること。
性的表現を、阻止すること。

女性の企業進出を、推進すること。
女性の、企業における役職への就任。
その推進を、熱烈に行うこと。

性差についての研究。
その否定。
その実質的な禁止。
それらを、推進すること。

女性専用社会。
その内実を解明すること。
そのことを、誰も実行しようとしないこと。

女性専用社会。伝統的な後天的定住集団社会Ａ。
上記の両者について、特徴面での照合を、行うこと。
そのことを、誰も実行しようとしないこと。

夫婦同姓。
それを、以下の内容として、捉えること。
//
夫による、妻に対する支配。
//

それを、以下の内容として、捉えること。
//
夫の母親による、夫の妻に対する、専制支配。
実は、夫の妻にとって、その回避が、本心であること。
//
そのことに対する言及。
それを、避けること。

そのような支配形態自体に対する批判。
それを、決して話題に出さないこと。

//
夫による、妻に対する支配。
男性による、女性に対する支配。
//
それらを、必死になって、主張すること。

姓の決定。
その自由化。
それについては、実際には、定住生活中心社会Ｅが先進的であること。
それを、誰も知らないこと。
例え、それを、知っていても、そのことについて、誰も、言及しないこと。

国家の所有者による社会支配制度。
最大の多数派の政党を中心とする、社会支配の体制。
それが、永続すること。

体制の批判。
それを、タブー視すること。

内部告発。
それを、タブー視すること。

体制批判者。社会批判者。
彼らを、非国民扱いすること。

上位者に対する批判。
それを、タブー視すること。

多数派の勢力。
それに対する追従を、みんなで行うこと。

少数派の勢力。
その存在を、みんなで馬鹿にすること。

（６）
先進的移動生活中心社会Ｇによる、後天的定住集団社会Ａに対する、軍事支配。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの世界的な優勢。
それらの継続。
それを、前提として、動くこと。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを、スーパー上位者として、専ら扱うこと。
彼らを、無批判に崇拝すること。
彼らに対して、無条件に隷従すること。

彼らの文化を、安全で、先進的な、前例と見なすこと。
その内容を、率先して、受容すること。

彼らの社会規範。
それを、行動の模範や聖典と見なすこと。
それを、信仰の対象とすること。

それらの行為を、慣性の法則に従って、続けること。

（７）
民主主義。
その内容について、手放しの礼賛。
その内容を、彼ら自身の社会に対して、以下のような態度で、導入すること。
//
それは、教条的である。
それは、強制的である。
//

その内容の、丸暗記。
その強制を、学校教育において、行うこと。

それにもかかわらず、後天的定住集団社会Ａの実態は、以下の内容であること。

民主主義。
それは、表向きだけの、形だけの社会規範であること。
それは、機能していないこと。
人々は、実際には、以下の内容に従って、動く必要があること。
//
旧来から続く、伝統的な、社会規範。
//
仮に、人々が、その内容に従わずに、自分勝手に動いた場合。
彼らは、社会不適合者として、後天的定住集団社会Ａから追放されること。

そのような社会的真実。
それを、後天的定住集団社会Ａの人々が、皆で、必死になって隠ぺいすること。
それについて、後天的定住集団社会Ａの人々が、見てみぬ振りをすること。

それらの背景。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ。
後天的定住集団社会Ａの人々が、彼らの存在を、スーパー上位者と

して、捉えていること。
後天的定住集団社会Ａの人々が、彼らに対して、隷従していること。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの政治思想。
後天的定住集団社会Ａの人々が、その内容を、上位の思想として、捉えていること。
後天的定住集団社会Ａの人々が、それらの内容に対して、隷従していること。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの政治思想。
その中身本体に対する、理解の能力や、体得の能力。
それらが、後天的定住集団社会Ａの人々において、根本的に、欠如していること。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの政治思想。
その後天的定住集団社会Ａへの導入。
それは、表面的であること。
それは、見かけ倒しであること。

（８）
定住集団。
例。
役所や企業。
学校。
市町村。
家族や家庭。

どこかの定住集団の内部に、正式なメンバーとして、必ず所属すること。
定住集団による、保証。
定住集団による、裏付け。
それを、得ること。
それを、所有し続けること。

その実現を、根本的に、重視すること。

そうした裏付けが無い主張。
その内容を、蔑視し、無視すること。
例。

出版社を経由せずに、出版された、書籍。
その内容を、蔑視し、無視すること。

定住集団から与えられる、社会的な肩書。
その所有を、重視すること。
例。
大学教授の肩書。
役所や大企業における、管理職の肩書。

定住集団による、身分的な裏付け。
それらを持たない人々。
彼らの主張。
その内容を、蔑視し、無視すること。

そうした定住集団。
それが、大きく、有名なこと。
そのことを、重視すること。

女性は、最初から、定住集団のメンバーとして、有利に扱われること。

（９）
彼ら自身の社会の内部における、真実。

それを、機密情報として、専ら、扱うこと。

その内容を、解明すること。
その内容を、外部に対して、放流すること。
それらを、実行すること。
そのことを、社会的に、禁止し、阻止すること。

その実行を、強行した人物。
その人物を、社会の内部から、追放して、生きていけなくすること。
その人物を、国外退去や、自殺に、追いやること。

彼ら自身の社会。
その真実。
それを、決して、解明しないこと。

（１０）
その時々の、外部の有力思想。
その内容が、後天的定住集団社会Ａの国家の内部へと、流入すること。

そのことに対して、忠実な追従を、行うこと。
その最新の内容を、教条的な態度で、丸暗記すること。

それを、以下の内容として、専ら、捉えること。
世界社会における、普遍的な真実。

後天的定住集団社会Ａのメンバーの子供や学生に対して、その内容のみを、専ら、教えること。

（初出2021年3月。）

後天的定住集団の社会の特徴

以下、後天的定住集団社会Ａの定住民の特徴がどのようなものか、説明を個別に行う。

（１）『対人関係の重視』

「対人関係を重視するということ。つながりを指向するということ。縁故主義であるということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、対人関係を本質的に重視する。
彼らは、無機的な物質よりも、人間の方に興味が行く。
彼らは、人間関係、縁故、コネ、人脈の構築に注力し、得意とする。
彼らは、人と人とのつながり、絆を重視する。
政党などで、明確な目標論争やビジョンの相違によってグループができるのではない。
彼らは、「私は、あの時、ＸＸ先生にＸＸでお世話になったから、ＸＸ先生の門下に入ろう」といったように、人物や対人関係本位で縁故関係を作る。
それが派閥、学閥等となって、社会を動かしている。

彼らは他人の気持ちに敏感で、人の心の動きを読むことや、心理学やカウンセリングに関心を持つ人が多い。
彼らは、無機的な機械、ロボットをも、ヒューマノイドとして人間化してしまう。
彼らの考え方は、小さいときから人形や周囲の人間に興味を惹かれて、気に入られるように行動する女の子の考え方と、考え方が一緒である（男の子のように、無機的な機械や物質に興味を惹かれる度合いが低い。）ということ。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らにとって、対人関係は、何か目標を実現するための手段に過ぎず、一時的なものである。彼らにとっては、つながることよりも、独立して自由に動けることが重要である。）

（２）『コミュニケーションの重視』

「コミュニケーション、話し合い、打ち解け合いを重視するということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、対人関係構築、維持のために、企業定住集団とかで、コミュニケーション、通信をやたらと重視する。
彼らは、周囲の親しい他者と対話、会話をする、しゃべる、打ち解け合うのを好む。
彼らは、ペラペラおしゃべり可能な電話や、グループでの頻繁なメッセージのやりとりな可能なLINEを好む。
彼らは、親しい相手との手紙、メール、メッセージの、間を置かない頻繁なやり取りを望む。
彼らは、対人関係維持のために、要件が無くても、長話するのを好む。
彼らは、直接対面でのコミュニケーションを好む。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らにとって、コミュニケーションは、何か目標を実現するための手段に過ぎず、それ自体が目標になるものではない。）

（３）『対人関係の累積』

「対人関係が累積する。リセット出来ないということ。転身が難しい。」
後天的定住集団社会Ａの定住民の場合、対人関係が、世代を重ねて

どんどん累積していく。
彼らは、対人関係、コネの切断、リセット、初期化が出来ない。
彼らは、一度できた関係やコネをそのままずるずる続け、保持していく。
彼らは、ある分野、領域で一度できたコネを気軽に切って、別の分野、領域に転身することを嫌い、一度入った分野、領域にずっと居続けることを要求する。
彼らの場合、友人関係とか、学校、職場に入った最初の一瞬で、その後がずっと決まってしまう傾向がある。
彼らが、別の領域、組織集団に転身、「転定住集団」しようとしても、既にその領域に既存の対人関係が累積して出来上がってしまっているため、後から入り込む、入れてもらうことが容易には出来ない。
あるいは入れてもらったとしても、彼らは、身分、立場の低い新入り扱いになってしまう。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、対人関係は簡単にリセット出来て、次の新天地への転身が可能である。）

（４）『対人関係の癒着』

「対人関係が長期持続する。対人関係が癒着、粘着しやすい。公私混同、談合体質であるということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民の場合、いったん出来た対人関係が長期にわたって延々と持続する。
彼らは、対人関係が粘着的であり、しつこい。
彼らの間では、一度始まった会話や説教が延々と長引き、なかなか終わらない。
後天的定住集団の社会は人間関係が納豆みたいにネバネバ、ベタベタ、ネチネチしており、「納豆社会」と呼べる。
彼らにおいては、対人関係が癒着しやすく、公私混同とか談合とか起こしやすい。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らの場合、対人関係は短期的なもので、淡白で、あっさりしたものである。）

（５）『集団主義』

「一緒にいること、群れを重視するということ。仲良しグループ形成、護送船団方式を好むということ。巻き込み、連帯責任が生じやすい。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、皆で一緒にいようとする。
彼らは、群れるのを好む。
彼らは、集団、団体での行動、共同作業を好む。
彼らは、集団主義である。
彼らは、一人では行動できない、行動するのを好まない。
彼らは、互いにべたべたくっつき合おう、一緒になろうとする。
彼らは、派閥を作り、互いに主流になろうとしていがみ合う。
彼らは、一人では気が弱くて何もできないくせに、徒党や集団を組むと途端に気が大きくなって、「数の力」を頼りに大声で騒ぎ、傍若無人なことを行う。
彼らは、一人～少数を集団で寄って集っていじめるのを許容する。（多勢に無勢。）
彼らは、集団内の一体感、愛情を何よりも重んじる。
彼らは、「全社一丸となって取り組もう」みたいに、集団の一体感の強さ、一心同体であることをやたらと強調する。
彼らは、皆で一斉に集中して何かするのを好む。
彼らの社会は、互いの安全、保身を確保するため、皆で一緒に群れて、つるんで、周囲と互いに守り合う形で行動するのを好む「護送船団方式」社会である。
彼らは、皆が分け隔てなく処遇されることを求める。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、食事もトイレも皆、仲良しグループでつるんで行動したがる女性と根が一緒である。
彼らは、一人が何か行動を起こすと、当人で自己完結せず、周囲を否応なく巻き込んで大事、騒動になる可能性が高い。
彼らは、起こした行動の責任が、当人一人の責任にとどまらず、グループなどの連帯責任になりやすい。
彼らは、周囲と無関係でい続けることが難しい。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、グループよりも一人で独立、自立しているのを重視する。彼らは、互いに訴訟し合うのを好む。彼らの場合、責任は、個人で動く結果、自分一人で取る結果になる。）

（６）『所属の重視』

「所属を重視するということ。包含感覚、胎内感覚を重視するということ。集団自決を好むということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、所属を重視する。
彼らは、必ずどこかの集団に所属しようとする。
彼らは、どこかに所属していないと不安である。
彼らは、所属する集団から排除されるのを何より恐れる。
彼らは、集団に属さずに、一人で独立、自律するのを根底で嫌う。
彼らは、どこの集団にも所属していない自由な人を、フリーターとか言って軽蔑し、信用しない。
彼らは、どこの集団に入ったか、所属しているかを重視する。
彼らは、以下の行為を重視する。入るということ。（入ったということ。）所属するということ。（所属していること、所属していたということ。）彼らは、学校、企業定住集団の名前、ブランドを重んじる。
彼らは、正規の所属であること、その集団の身内の企業定住集団の正規メンバー（定住民）であることを重んじる。一方、臨時の企業定住集団の非正規メンバー（流民）は、同じ仕事をしていても身内に入れようとはせず、所属しているとは見なさず、待遇に格差を設ける。
彼らは、成員が、所属集団のために、我が身を犠牲にして、汗を流すことを賞賛する。
彼らは、成員が、所属集団に身も心も完全に包含、吸収され、所属集団と常に一体化して、自分があたかも所属集団を代表する一人であるかのような心意気で行動することを重視する。
彼らは、成員が所属集団の身体の一部として動くことを重視する。
彼らは、所属集団に、成員一人ひとりが完全に溶解、融解しきって、所属集団それ自体がひとまとまりの人格を持って動くような印象を外部に与えようとする。
彼らの所属する集団が、成員に対して、夫の浮気を疑う奥さんのように嫉妬深い。
所属する成員は、企業定住集団、学校などの所属集団のために、休日、残業時間も含めて、全ての時間を浮気せずに１００パーセント入れあげて、捧げることを強いられ、要求される。
あるいは、成員は、所属集団との、可能な限り長時間の生涯にわたる付き合い、長時間残業を要求される。所属集団への連続所属が求められる。
彼らは、所属集団に絶えず一体化し、同調し、気配りし、尽くす姿勢を見せないと、所属集団の上位者によって所属を外され、集団から追い出されてしまう。これが後天的定住集団の社会の生きにくさの本質である。

成員は、自分のプライベートの全てを削って、所属集団に合わせること、自分の時間の全てを所属集団のために使い切ることを要求される。（滅私奉公。）
成員が所属集団に、時間的にも、空間的にも、完全包含されることが望まれる。永続的に所属集団に所属するということ。
所属第一主義であるということ。
企業定住集団のリストラみたいに、所属集団側で、その成員の所属を維持できなくなったら、所属集団側によって、一方的に関係が破棄され、成員は所属集団から自己都合で脱退することを強いられる。
一方、所属集団側では、いったん成員を集団の中に入れると、その成員を外に出すことがなかなか出来ない。
成員は、自分の所属集団の存続を第一に考え、その存続のために死力を尽くして、集団の全員が一丸となって最期まで戦おうとすることを要求される。
彼らは、最後まで戦ってそれでダメだった時は、所属集団丸ごと滅びようとする。
彼らは、集団自決を好む。
彼らは、集団への所属は、その集団限りで完結させよう、終わりにしようとする。成員が他集団に、捕虜とかで生きたまま拾われるのを好まない。
所属集団は、成員が一つの所属集団にのみ終生忠誠を誓うことを望み、成員が2つ以上の集団に、同時あるいは逐次に所属することを嫌う。また成員が所属集団の仕事以外の副業をすることを禁止、制限しようとする。
所属集団の存続が行われれば、自分はその犠牲になってどうなってもよいと考えることが求められる。
彼らは、集団の成員が、所属集団のために、特攻隊のように、進んで犠牲になることを尊ぶ。
所属集団は運命共同体であり、成員が所属集団と最後まで運命を共にすること、「死なばもろとも」、集団自決を求める。
後天的定住集団社会Ａでは、学校（大学とか）を卒業すると同時にどこかに企業定住集団への加入する内定を予め取って、所定の日にきちんと新卒で企業定住集団への加入しないと、所属集団から外れた、放り出された既卒扱いされて、どこの企業定住集団にも入れてもらえなくなってしまう。（既卒差別。）
後天的定住集団社会Ａでは、学卒だけでなく転職の場合でも、今までの所属集団から時間的に切れ目なく次の所属集団に入らないと行けない。彼らは連続的所属を重視する。
後天的定住集団社会Ａでは、所属において、どこの定住集団にも所

属しないフリーの期間があると、あるいは定住集団への所属の履歴にブランク、空白の期間があると、定住民としての信用度が低下して流民化したと見なされ、企業定住集団とかでなかなか採用してもらえない（履歴ブランク差別）ということ。
後天的定住集団社会Ａの定住民は、中の一員で有り続けること、外に出されないことを望む。
彼らは、転職を、所属集団からの排出と見なし、嫌う。
彼らは、転職を、スキルアップではなく、前にいた集団で、他の成員とうまくやっていけなかったため、外に出されたか、自分から外に出たとネガティブに捉える。
後天的定住集団社会Ａでは、所属集団を出て行くことが、元の意図、意思に関わりなく、裏切り者、マイナスポイントとみなされ、非難される。所属集団を自分の意思で出ていく回数が増えるほど、社会的信用度が低下する。
後天的定住集団社会Ａでは、成員は所属集団の用意した人生のレール、エスカレーターから決して外れない、降りないことを要求される。成員が所属集団専用の人生のレール、エスカレーターから外れない、降りない限り、成員の生活は所属集団である定住集団が保証する。一方、成員が、いったん、定住集団のレール、エスカレーターを自分から降りた、卒業した、定住集団を出た場合はその後の生活は自己責任で、所属集団は一切関与しない、助けない。その後は定住集団による援助は期待できず、自力で何とか食べて行くしかない。
彼らは、所属集団に自分が包含された感覚、所属集団が自分の母代わりとなって、あたかも自分が母の胎内にいるかのような感覚を好む。
彼らは、所属集団との一体感が極めて強い点、相手との一体感を重んじる女性優位な性格である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、どこかに所属するよりも一人で独立、自立してベンチャーするのを重視する。彼らは、所属することによって生じる束縛を避け、フリーを好む。）

（７）『定住の重視』

「定住、定着、根付きを重視するということ。継続を重視するということ。専門家を重視するということ。固執するということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、地域定住集団での居住する土地

とか、勤め先の官庁、企業定住集団とか、一箇所に定住、定着して長期間根付くのを好む。
彼らは、土着を好む。
彼らは、転出して、出ていく人を裏切り者呼ばわりして嫌う。「転定住集団」することを嫌うということ。
彼らは、定住しない浮き草、根無し草のような、永遠の旅人のような人たちを軽蔑する。
彼らは、あるいは、転職を繰り返したり、一つの職場に定職を持たない人を信用しない。
彼らは、住居でも職場でも、一箇所に腰を落ち着けて、その場で居心地の良い、長期間居着くことを目的とした巣作りをすぐ始めようとする。
彼らは、重心の低い、腰の重い、一箇所に腰を落ち着けてそこから動こうとしない女性優位な性格である。
彼らは、学者とか、役者とか、早いうちから一つの分野を専攻して、そこに腰を落ち着けて、根付いて、浮気せずに、その専門の一本道をずっと継続して歩むことを重視する。
彼らは、専門家を重視する。
彼らは、継続は力なりという言葉を重んじる。
彼らは、数多くの専門外のことに多様な関心を持って首を突っ込む人、専門を持たない、決めない人のことを信用せず、軽んじる。
彼らは、自分の代々住んでいる土地のことや、あるいは、自分の専門分野に付いては何でも知っていて、答えられないことが無いのを当然とする。
彼らは、専門知識面での百点満点を指向する。
彼らは、知らない、質問に答えられない、他の人が答えられると恥ずかしいと考える。
彼らは、自分が回答可能な範囲を狭く決めておいて、その範囲内では何でも答えられるようにすることで、専門家としての自分の高いプライドを維持しようとする。
彼らは、知っていること、知識があることを第一と考え、知識を学習すること、暗記することにエネルギーを集中する。
彼らは、学殖のある知識人、学者を重んじる。
彼らは、国会の議論とか、外交とか、自分が根を下ろした今までの意見に、固執して、柔軟に譲ろう、意見を変えようとしない。
彼らは、自分が譲ったら、変えたら負けと考えがちである。
彼らは、譲歩の契機となる対話や審議を拒否し、会議を欠席しようとする。
彼らは、あるいは、話し合いがいつまでも平行線で、押し問答となり、強行採決を繰り返す。

（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、どこかにずっと定着するよりも一人でどんどん新天地へと移動していくのを重視する。彼らは、新分野への新規参入能力、新規アイデア、知見を生む能力を重視する。）

（８）『同調主義』

「同調性が強い。画一、横並び、流行、トレンドを重視するということ。相対評価を好むということ。嫉妬心が強い。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、同調性が強い。
彼らは、流行、協調性を重んじる。
彼らは、周囲の流行に敏感であり、流行に振り回される。
彼らは、映画やアニメとか、メジャーな流行に皆で追随しようとする。
彼らは、付和雷同を好む。
彼らは、トレンドに合わせて動くのを好む。
彼らは、互いの間の気配り・足の引っ張り合いが得意である。
彼らは、みんな一緒に、横並びでいること、分け隔てなく同じであることを強要される。
彼らは、授業とか一斉に行うのを好む。
彼らは、周囲について行けない「落ちこぼれ」を嫌う。
彼らは、周囲との協調性や気配りをやたらと重視し、「出る杭は打たれる」みたいに、遅れてお荷物になる人間、周囲に歩調を合わせない独立独歩タイプの人間を、寄って集っていじめる。
彼らは、自由、フリーを本質的に嫌う。
彼らは、相互牽制、嫉妬心が強く、行くならみんな同時に同じところに同調して行くことを望み、誰かが一人だけ抜け駆けをしようとするのを許さない。
彼らは、人間や組織の成績評価を、偏差値を利用して、周囲との相対評価で決める。
彼らは、自分に対して気分を害する人が出ないように、誰に対してでも八方美人的に平等に配慮する。
彼らは、嫉妬深く、他の人が自分より上位に行くこと、良い思いをすることを全力で阻止しようとする。しかし、他人が上に十二分に行って手の届かない存在になると、途端にその他人のことを上位者扱いして崇拝し媚びを売り出す。
彼らは、常に他者、他の企業定住集団と自分との立ち位置を相対的に比較し、上位を行く他者、他の企業定住集団に必死で追いつこ

う、追い越そうとして、互いに自らを鍛錬し、向上させようとする。自分が周囲に対して相対的に上位者、優位者になり、下位者に対してマウンティングしたり、威張ろうとする。
彼らのこうした嫉妬心の強さが、後天的定住集団社会Ａ企業業績向上の原動力となっている。
彼らは、他人が自分と結果的に平等であること、同じであること、格差が無いことを指向し、その結果、社会が均質化する。それは、互いの処遇上の一体感を求める女性優位な性格である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、周囲と同調するよりも、各自が強い個性、独自性を持ってバラバラに、自分の能力を発揮できることをしようとする。彼らは、新規のトレンドを生み出し、それに真っ先に乗って、追随者を多く生み出すことに心血を注ぐ。）

（９）『同期～先輩後輩制の重視』

「同期意識が強い。年功序列、先輩後輩制、エスカレーターを好むということ。追い抜き、競争を嫌うということ。天下りを好むということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、企業定住集団への加入などのタイミングを年一回とかに一斉に合わせ、同期させるのを好む。
彼らは、一緒のタイミングで同じ集団に入った人を、同期と見なして、互いに格差の無い同一、均等の待遇を求めたがる。
彼らは、同じ企業定住集団への加入年次、同期の人たちが、揃って同期して昇進し、昇進に格差が生じないのを好む。
彼らは、エスカレーターに乗るのと同じく、年を取るに従って、役職が上に順調に昇進していく、あるいは、組織内で年を取った先輩格の人が後輩格の人よりも常に上位者扱いされる、年功序列、先輩後輩制を好む。
彼らは、官庁や大企業で、同期の関係にある人同士が、役職で上下に格差が生じた状態で互いに顔を合わせるのを嫌い、役職の低い方の人が、外局に落下傘降下する形で、顔を合わせないように組織の外に出ていくのを好む。（天下り。）
彼らは、あるいは、先に組織に入った先輩格の人が、後から組織に入ってきた後輩格の人に、昇進とかで追い抜かれることを嫌う。
（後輩格の人が先輩格の人を追い抜くということ。彼らは、それを嫌う。）
彼らは、追い越しの伴う競争を根本的に嫌う。
彼らは、後輩格の若い人が、先輩格の年取った人の上司になるの

を、互いに扱いにくいとして双方で嫌う。それは、中途採用で高齢者の就職口が限られる一因となっている。
彼らは、学校での昇級や企業定住集団での昇進で、飛び級を嫌い、用意された階段を一段ずつ順次登っていくのを好む。
彼らは、いったん登った役職から降格されるのを嫌う。
こうした性格は、互いの処遇上の時間的な揃い、一体性を求める女性優位な性格である。
こうした性格は、あるいは、身の安全性を担保する前例や知識の習得を重視し、先に企業定住集団への加入した人が、前例蓄積の度合いが大きく、無条件でいつまでも上位になると考える、女性優位な性格である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、同期にこだわらない。彼らは、若い人が年取った人よりも役職が上なのが当たり前である。彼らの場合、追い抜き、競争が日常茶飯事である。）

（１０）『物真似指向』

「物真似、コピー、合わせが好きであること。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、他人の物真似を好む、物まね、コピー、パクリ文化の持ち主である。
彼らは、周囲の動向、流行に必死になって付いて行こう、同調、同期しようとする。
彼らは、周囲とは別の独自の途を一人で歩むのを好まず、周囲に合わせようとする。
彼らは、個人のオリジナリティ（独創性）を、一人だけ周囲と違ったことをするのは好ましくないとして根本的に嫌う。
彼らは、周囲の他者の真似をすることで、周囲との一体感の持続を確保する。
後天的定住集団の社会は、周囲と離れて一人ぼっちになるのを恐れる、皆で一緒に群れて行動するのを好む「護送船団」社会である。
それは、自分の保身に人一倍気を遣う女性優位な性格である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、独自性を好む。彼らは、個人のアイデアに基づく独創性を好む。）

（１１）『和合の重視』

「和合、一体感、共感を重視するということ。」
後天的定住集団の社会は、集団内で、相互の一体感、共感、調和、和合を好む。「和」の社会、仲良しクラブ社会であるということ。
彼らは、互いに同質で同じ考えを持つことを良しとして、集団の和を乱す個人個人のバラバラで異質な強い自己主張を許さない。
後天的定住集団の社会は、集団の和を乱す突出した考え、行動の持ち主を、皆で寄って集って袋叩きにして潰そうとしていじめる社会である。
彼らは、集団の存続それ自体がいつの間にか自己目的化し、集団内が喧嘩別れをして割れることを嫌う。
彼らの社会は、互いに、集団の和が保たれる方向へと、自分の行動を合わせる「迎合」「媚」社会である。
彼らは、相互の体温、温もりの感じられる、互いの距離感の無い、親近性のある、親しい相手に対してプライバシーの欠如した対人関係を好む。
彼らは、相互の間で距離を取って、対象となる相手を客観的、冷静に見ようとする科学的な行き方を、相手との関係が冷たいとして、根本的に嫌う。それは、相互の一体感、融合感を重んじる女性優位な性格である。
彼らは、揉め事とか、何事も丸く収めようとしがちである。
彼らは、訴訟、裁判を嫌い、なるべく和解しようとする。
彼らは、物事の形状で、円形、丸型、柔軟なクッションを好む。
彼らは、円満解決、大団円を好む。
彼らは、争いごとを好まない丸腰体質である。
女性は、生まれついての（生得的なということ。）集団主義者＝collectivist、同調主義者＝conformistであるということ。そうした性格は、いずれも、個人主義的な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでは価値が低いが、後天的定住集団社会Ａではメジャーである。
後天的定住集団社会Ａの国民性が集団主義となるのは、後天的定住集団社会Ａで女性が強い証拠である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、意見の対立や訴訟、戦争を厭わない。彼らは、人と意見が違っていて当たり前である。）

（１２）『小グループ間の無関心』

「小グループ同士がバラバラ、無関係、無連携、無関心、縦割り、不仲であること。」

後天的定住集団社会Ａの定住民は、互いに一体感の持てる交遊の範囲を個別に狭く限定し、互いに独立した、外に向かって閉じた小さな集団、サークル、派閥を沢山作りたがる。（クラス女子高生の生成する仲良しグループなど。）
後天的定住集団の社会では、学校、企業定住集団とかで、メンバーの形成する社会集団が、小さく固まり、個別に小さく互いにバラバラになりやすい。
複数の小さな仲良し集団同士が、互いに閉鎖的、排他的、不仲である。
そのため、各々独立、孤立した個別小集団同士の意思疎通がそのままでは不足になる。
全体集団、全体組織がバラけたままで統合されにくい。全体集団、全体組織が、統制が取れない、互いに無関係で動く状態になってしまいがちである。
中央官庁とかで、より小さなグループのまとまりが、より大きなグループのまとまりより優先される。（国益より省益、局あって省無し。）
あるいは、政党で、派閥がそれぞれ独自に勝手に動いて、政党全体のまとまりを欠きがちである。
集団の下位グループが、互いに連携しようとせずに、勝手にバラバラに重複して動いて、その集団や社会全体の利益を損なう、縦割りの弊害が発生しやすい。
後天的定住集団の社会では、そうした閉鎖的個別小集団間の間を取り持って、相互の意思疎通を図り、何とか互いに一体感を持たせ、全体の統率を持たせることが課題になる。
彼らは、個人ではなく、自分たちのグループが独自と言われるのを好む。
彼らは、個人が周囲からかけ離れて突出するのは好まないが、グループごと突出するのは、存在を強く主張でき、グループのイメージを強くすることにつながり、自己の保身に有利となるので良いとする。
彼らは、他所のグループや国と違う、他に無い独自、独特の文化を持つと言われると喜ぶ。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らにとって、グループは一時的なもので、個人単位でバラバラ、無関係である。彼らは、自分の利益のために、互いに関心を持ちドライに連携しようとする。）

（１３）『被保護への欲求』

「守られたい、頼りたい、養ってもらいたい、甘えたい、寄生したい心理が強いこと。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、一人では不安を感じる度合いが強く、保護されたい、守ってもらいたいという気持ちが強い。
彼らは、依存心が強い。
彼らの間には、甘えの心が充満している。
彼らは、官庁や大企業といった、大組織への依頼心、帰属意識、甘えが大きい。
彼らは、一人で自立するのは不安であり、誰かに助けてもらいたがる。強い者になびくということ。
彼らは、あるいは、誰かに寄生して養ってもらいたがる。「寄らば大樹の陰」ということわざが、この辺の事情を明示している。
彼らが、就職のとき、大きな企業定住集団を選びたがるのもこの一例である。
彼らは、ひとりで外部に露出するのが不安であり、先進的移動生活中心社会Ｇのような強い国に頼ろう、守ってもらおうとする。
彼らは、強いもの、お金のあるものからおこぼれを頂戴しようとする、集り根性が強い（例えば、政府から公共事業費を少しでも多く分配してもらおうとする等）ということ。
後天的定住集団社会Ａのメンバーの性格は、自己保身に気を遣い、何事も優先して守られる、エスコートされるのを好む女性優位な性格である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、自分の身は自分で守る。彼らは、自助を基本とする。）

（１４）『権威主義』

「権威主義であるということ。批判、反論を許さないということ。心が傷つきやすい豆腐メンタルであること。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、権威、ブランドに弱い。
彼らは、権威主義である。
彼らの文化は、媚の文化、迎合の文化である。
彼らは、自らの保身のため、少しでも権威ありそうな、主流派を形成している人、あるいは、大学、病院のような知的権威のある機関に属する教師や医師を、「先生」と呼んで、その後を追従し、ペコ

ペコする。
彼らは、自分も権威ある者の後ろを歩めば、安全であり、威張っていられると考える。
彼らは、あるいは、権威ある人の言う事を聞いていれば、大丈夫、間違いないと考える。
彼らは、自分の身の安全や、自分の判断の正しさを保証してくれる、外部のより大きな存在を求めたがる。
彼らは、自分より強そうな者に対しては、ひたすら媚を売り、ペコペコするが、ちょっと弱そうだと、途端に強気に出て、イヤな仕事の押しつけや、恐喝まがいのことをする。
彼らは、自分を権威付け、高く見せるために、評価の定まったブランド品を進んで身に付けようとする。
彼らは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ列強の文物を、権威があるとしてやたらと崇拝する。
彼らは、これを信じておけば間違いない定説とされる学説を、宗教のように信仰し、それに対して批判したり、異を唱えることを認めない。
彼らは、自分を押し倒し、圧倒した強大な存在に対して、進んでその色に染まる。あるいは、盲目的に追従し、お伺いを立てるということ。
彼らは、先生や先輩とかに対する口答え、批判、反論を、相互の一体感が損なわれ、言われた方の威信に大きな傷が付くとして許さず、絶対服従を強要する。彼らは自分への批判に弱く傷つきやすい豆腐メンタルの持ち主である。それは、自らの保身のため、権威に寄りすがろうとする点、女性優位な性格である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、権威に盾付き、批判、反論の自由を求め、行使するのを好む。）

（１５）『リスクの回避』

「安全、保身第一であるということ。不安感が強いこと。退嬰的であるということ。リスク、チャレンジを回避するということ。独創性が欠如すること。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、安全第一、自己保身第一で、不安を感じる度合いが強く、臆病で退嬰的である。
彼らは、冒険しない。
彼らは、ベンチャーを嫌う。
彼らは、失敗を怖がる、許さない。

彼らは、前例がないと何もできない。
彼らは、独創性が欠如している。
彼らは、例えば、人文社会科学分野では、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ学説の後追いばかりやっている。
彼らは、既存の学説を乗り越えて、新たな学説を作ろうとする気概に乏しい。
彼らは、既存学説との、同化・一体化の力が強過ぎる。
彼らは、未知の分野はどんな失敗をするか分からないので、怖い、として、手を出したがらない。
彼らは、先頭に立たず、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの先駆者の後を追う方が安全である、と考える。
彼らは、危ない、リスキーなこと、未知の新しいことはしない。
彼らは、モルモット（実験台）になるのはいやである。
彼らは、より危険で風当たりの強い一番手を嫌い、より安全で楽な二番手で行こうとする。
彼らは、皆を先んじて率いる必要がある、より大変なリーダーであるより、ただ付いて行くだけで良いフォロワーであろうとする。
彼らは、チャレンジを心の底で嫌う。
後天的定住集団の社会は、一度失敗すると、敗者復活戦、再チャレンジが難しい。
後天的定住集団社会Ａは、新卒で大企業定住集団とかに入れないと、既卒扱いになって、二度と入ることが出来なくなる仕組みになっている。
後天的定住集団社会Ａの科学技術が先進的移動生活中心社会群ＦＧＨより常に遅れる、後進性のくびきは、不安の強さ、安全指向、退嬰性、前例指向といった、女性性と関係があり、後天的定住集団社会Ａで女性が強い証拠である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、安全、保身にこだわらず、リスクに積極的にチャレンジする。彼らは、独創性に富んでいる。）

（１６）『前例踏襲指向』

「前例、しきたり、レール偏重であるということ。前例の小改良、磨き上げが得意であること。先輩後輩関係がきついこと。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、前例となる知識、ノウハウの急速な学習、消化、吸収に長けている。
後天的定住集団社会Ａは、明治維新の時とか、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの新知識を素早く吸収、学習し、程なく我が物にする

ことに成功した実績がある。
彼らは、学校や学習塾、予備校とかで、前例となる知識、ノウハウの学習にとかく熱心である。
彼らの社会では、自身への前例、しきたりの蓄積の度合いに応じて上下関係が決まる。
彼らの社会では、前例、しきたりを自身の中に豊富に持っているほど集団や組織の中で上位者になれる。
彼らの間では、年功序列、先輩後輩関係がきつい。
彼らの社会では、集団や組織で、局のような古株が威張っている。
彼らの社会では、新人いじめが当たり前に行われ、いずれの組織においても、新入りの地位が低い。そうした社会関係は、家庭における嫁姑関係に通じる。（家風習得の度合いの面で、姑が先輩、嫁が後輩、新人。）
彼らの社会では、前例となる知識や技能を持っている者が、理屈抜きで偉いとされ、一方、若い新人の方が豊富にあると考えられる独創性は評価されない。
安全性を第一と考え、未知の危ない道を通ることを避けて済ませるには、取るべき行動の前例となる経験知識を豊富に積んでいることが求められる。そうした前例としての経験知識は、年功の上の人たちがより多く持っている。
彼らは、既に誰かが先行して成し遂げたオリジナルの前例を吸収、学習して、その小改良を着実に重ね、磨き上げを重ねて、競争力を付けることで、オリジナルを凌駕し、競り勝つこと、打倒することに長けている。
彼らは、人生で、決まったレールの上を進むのを好み、レールから外れることを恐れ、歓迎しない。
そうした性格は、未知の危険を避け、前例のある道のみを行こうとする点、女性優位な性格である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、前例、しきたりにこだわらず、積極的に破壊、批判して、自分の力で新しい知見を生み出し、それを普遍的に普及させようとする。）

（１７）『後進的、現状維持的』

（１７－１）「思考が伝統的、封建的、後進的である。」
（１７－２）「無競争、無風、停滞、（既得権益などの）現状維持が好きである。不変を好むということ。事なかれ主義であるという

こと。」
（１７－３）「外部からの先進的考えの流入に抵抗するが、いったん突破されると諾々と受容するものの、流入が止むと元に戻る。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、考え方が伝統的、後進的、遅滞的、封建的である。
彼らの社会では、姑、局のような古株が偉くて、新入りが古株を超えることができない。
彼らは、古い伝統に縛られ、前例やしきたり、現状維持をひたすら重視する。
彼らは、集団内部での内発的な進歩的な新たな試みを危険であるとみなして皆潰してしまう。これは「姑根性」という言葉で表現できる。
彼らは、新参者が古参者を後から追い越す可能性のある競争を嫌い、既存の安寧秩序を守ろうとする。
彼らは、波風が立つのを嫌い、無風、凪、停滞、事なかれを好む。
彼らは、既得権益などの不変、維持を好む。
彼らは、外来の新しい文化の流入に抵抗しつつ、圧倒、突破されると無条件で受容、追随する。
彼らは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨなどの進歩的な文化、制度が外部からやってくることを黒船来襲と見なして、警戒し、攘夷で抵抗する。
彼らは、外部文化にいざ圧倒、突破されると、手のひらを返したように、その進歩的な考え方にほとんど盲目的に追随し、丸呑みしようとする。
彼らは、iPhoneのように、外部から入ってくる優勢で抵抗しがたい、自らの力では生み出せない、新たで進歩的な考え方、アイデア、製品に、無条件、無批判で我先に追随し、取り入れよう、真似しよう、小改良しようとする。
彼らは、率先して取り入れたこと、導入した結果を、周囲に対して箔付けして自慢する。
外部からの（先進的なということ。）考えが入り込むことに抵抗しつつ、いったん突破されると諾々と受容、丸呑みすることは、男性優位な精子と、女性優位な卵子の受精関係に似ているということ。（卵子的行動様式。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的＝精子的。後天的定住集団社会Ａに特有＝卵子的。）
しかし、
彼らが、そのように進歩的で新しい、競争的な態度を取るのは、外部から優勢な新しい考えが存在、流入していて、それに対処する必要が生じている間だけに止まる。
彼らは、外部からの新規文化の流入が止まると、元の無風の凪状

態、現状維持的、既得権益維持的な気風に戻る。
彼らは、国家の所有者による社会支配制度のように、ずっと不変なもの、永続するものを好む。
彼らは、変化を嫌う。後天的定住集団社会Ａの、進歩的な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会に比較した場合に見られる遅滞、封建制の本質は、危険やチャレンジを避けて安全な前例をひたすら守ろうとする女性、母性にある。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、思考が、伝統に囚われず、先進的である。彼らは、競争、変化を好む。彼らは、外部から先進的な考えを当初から積極的に歓迎し、発展させせようとする。）

（１８）『恥、見栄の重視』

「恥、見栄を重んじるということ。人付き合いで表裏がある。内部問題を対外的に隠蔽するということ。綺麗事、美辞麗句を好むということ。公式、公開の発言の場で沈黙するということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、自分に対して向けられる他者の視線や評価を非常に気にする「恥の文化」の持ち主である。
彼らは、自分が周囲にどう思われているか盛んに気にして、周囲によく思われよう、上位に思われようとして、いろいろ気を遣ったり、演技をしたりする。
彼らは、八方美人であり、周囲の国にいい印象を与えることに懸命である。
彼らは、周囲から自分がどう思われているか、自分が気に入られているかどうかが気になって仕方がない。
彼らは、自分が周囲に気に入られるように、盛んに媚びたり、いい子ぶったりする。
彼らは、自分の周囲に対する印象をよくするために、やたらと気配りをしたり、外面的な見かけを整えたりすることに忙しい。彼らは、外部に露出した表向きの面と、閉じた身内での裏の面が別々であり、対人関係で表裏がある。
彼らは、面目、体面をとても気にする。
彼らは、常に人の目が気になって仕方がない。
彼らは、他の人に見られているという感じが強い。
彼らは、他人の視線を前提とした見栄張りの行動を行う。それは、「見栄の文化」である。
彼らは、自分が他人にどう見えるかについて自意識過剰である。他人の視線を前提とした化粧や服装チェックは、女性の方がより行

う。
彼らは、自分や自分たちのグループが内部に問題を抱えていることを、外部に対して必死になって隠そうとする。
彼らは、問題が無い振りをしようとする。
彼らは、良い格好をしようとする。
彼らは、対外的に良い子でいようとする。
彼らは、「ぶりっ子」をする。
彼らは、自分についての良くない噂が広まる、騒ぎが起きるのを何よりも恐れる。対外的に自分が良く見られたい、受け入れられたいとして、問題を隠すなど自分の印象操作することは、女性の方がより行う。
彼らは、感覚的に美しい快い美辞麗句、スローガンを使うのを好む。
彼らは、大勢がいる中で発言することで、皆の注目を集めてしまう、失笑を買うのが恥ずかしくて、他人の目が気になって発言できない。
彼らは、シャイである。
彼らは、プライベートな小グループの中だと発言できる。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、人目を気にせず、自分の良かれと思うことを恥も外聞も無く堂々と行う。彼らは、セキュリティのために内部プライバシーを重んじる反面、情報のオープンな提示に積極的である。彼らは、公開の場で歯に衣を着せない発言をして物議を醸す。）
R.Benedictが、「菊と刀」の中で唱えた、罪の文化・恥の文化との関連では、以下の通りである。
男性は、「罪の性（ジェンダー）」であるということ。彼らは、誰かに見られていなくても、悪いことをしたとして罪悪感を感じ、償いの行動を起こす。男性は周囲の動向とは独立して、独りだけで罪悪感を感じる点、ドライであり、罪の文化（男らしい文化）の基盤をなすということ。
女性は、「恥の性（ジェンダー）」であるということ。女性は、「赤信号、皆で渡ればこわくない」といったように、罪悪感を感じるかどうかが、周囲の視線の有無や動向に左右される点、ウェットであり、恥の文化（女々しい文化）の基盤をなすということ。女性は、他者に「見られている」感が強く、他者の視線を前提にした自己アピールである化粧・服装・ファッションを好む。
後天的定住集団社会Ａが「恥の文化」に基づく社会となったのは、「恥のジェンダー＝女性」が、社会の根幹を支配しているからである。

（１９）『気配りの重視』

「配慮、気配りを重視するということ。遠慮、引きこもりがち、孤立しがちであるということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、周囲の他者に対して、心情的に細やかな配慮、気配りをすることを重視する。
彼らは、周囲に対して温かい思いやりの気持ちを持って接することを重視する。
彼らは、温もりに満ちた社会の実現を目指そうとする。
彼らは、互いに、周囲の他者に迷惑をかけないようにと遠慮して考えるあまり、個人、家族単位で、周囲との交渉を避けて、各々引きこもりがち、孤立しがちになりやすい。
彼らの社会は、社会の統合が弱い。
彼らは、無縁社会を招きやすい。周囲への細やかな気配りは、女性のほうが得意である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、直接的な物言いを好み、配慮、気配りに欠ける。彼らは、遠慮をせず、どんどん物を言う。彼らは、積極的に交渉する。）

（２０）『みそぎの重視』

「清潔さを好むということ。みそぎをする、洗い流す、総取り替えするのを好むということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、自分の心身を、洗い流して清めるのが好きである。
彼らは、汚れ、穢れを嫌う。
彼らは、清潔、きれい好きである。
彼らは、河川とかで清流を好む。
彼らは、自分の吐く息等が他の人に臭ったりしないかどうかのエチケットにやたらとうるさい。
彼らは、自分の（他人の）汚れ、穢れが他人に（自分に）回らないか、転移、伝染しないか、影響を及ぼさないか、とても気にするということ。
彼らは、他人に対して、汚れていない、綺麗な、清らかな、良い印象の自分を見せようとして、やたらと自分の髪や身体を洗うのを好む。
彼らは、綺麗な水流に入って心身の汚れ、穢れを洗い落としたつもりになる「みそぎ（禊）」をするのを好むということ。

彼らは、風呂に入るのを好む。
彼らは、失敗や過去を「水に流して」済まそうとする。
彼らは、汚れのない白装束を、正月の巫女衣装みたいに神事等で着るのを好む。
彼らの考え方は、自分の身体の汚れに対して自意識過剰になって毎朝シャワーやシャンプーを繰り返すのに余念が無い女子中学生と考えが一緒である。
彼らは、互いに（女性的に）自己の保身を図るために、護送船団方式で互いに密集して一体感を持って共同生活することを指向するということ。
彼らは、そのため、互いに近場の他人の（自分の）身体などの汚れが自分に（他人に）付かないか、伝染しないか敏感になっているということ。
彼らは、新しい導入物に感化されやすい。
彼らは、新たに外から圧倒的な力を持って入ってきた、あるいは国内から新機軸を打ち出して成功した新興勢力の文化に社会全体が一瞬のうちに簡単に感化されてしまう。
彼らは、今まで自分たちが大切にしてきたはずの古来の文物を、新しいものと総取り替えで簡単に二束三文で投げ捨ててしまう。
明治時代初期の先進的移動生活中心社会群Ｆ文物崇拝と廃仏毀釈や、Apple企業定住集団のiPhone導入がその好例である。
彼らは、新しい権威やカリスマが生み出した、新たな力ある文物に、各自が自分だけ乗り遅れないように必死で追随しようとする。
彼らの社会では、社会全体が一斉に新たな文物に乗り換えて、古い殻を脱ぎ捨てる現象が起きる。
彼らは、各自が周囲の動向に敏感で、少しでも遅れて仲間はずれになるまいと必死で同調する。
彼らは、また力あるものに我先に順応して我が身の保身を図ろうとする。それらは、いずれも女性優位な性格である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、汚れに寛容であり、シャワーの回数が少ない。彼らは、新文物が導入されても、古いよりオリジナルな思想に基づくものは捨てない。彼らは、各自、互いに一人我が道を行くのを許容する。）

（２１）『責任の回避』

「責任を回避するということ。決定、判断を停止、回避、先送りするということ。無責任であるということ。匿名行動を好むというこ

と。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、責任回避、責任転嫁の傾向が強い。
彼らは、自分の取った行動の結果生じる責任を一人で負うのをいやがり、皆で連帯責任にして、一人当たりが負うリスクを軽くしようとする。
「赤信号皆で渡れば怖くない」という格言が流行したり、太平洋戦争の敗戦責任を「一億総懺悔」して取ったつもりになっていることがその現れである。
彼らは、そうすることで失敗の責任を取らされて危ない目に会うことを避けることができる。（例。社会的生命を失うということ。それを避けることができるということ。）
彼らは、あるいは、物事の決定にできるだけあいまいな玉虫色の態度を取ることで、責任の所在を不明確にして、責任逃れができるように逃げ道を作るのが上手である。
彼らは、そもそも責任が生じる意思決定、判断すること自体を回避、停止、保留する。
彼らは、自分からは決断せず、誰かに決めてもらおうとする。
彼らは、他の責任を取れる人に判断を一任して、その判断が下るまで自分からは決定せず、待ちの姿勢を取り、判断対象を体良く無視し続ける。
彼らは、判断を他人に決めさせることで、決めた他人に決定責任を押し付ける。
彼らは、自分から進んで動くと、行動責任を問われるので、自分からは進んで動かず、誰か他の人がモルモットになるのを待つ。
彼らは、自分では責任を取りたくないので、誰か自分の行動に責任を取ってくれる指導者の存在を望む。
彼らは、決定、決断を先送りする。
彼らは、無責任である。
彼らは、自分が取った行動について、後々まで自分がやったという証拠が残って責任追及されるのを避ける。
彼らは、そのため、自分が誰かを、他者に特定されるのを恐れ、匿名でいようとしたがる。
彼らは、証拠が残るのを好まない。
彼らは、SNSとかで、個人情報や実名、顔を出すのを好まない。
彼らは、失敗時、潔く責任を取ろうとせず、責任逃れの言い訳をするのを好む。それは、社会的に、責任を取るのを免除されやすい女性優位な性格である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、個人行動基本のため、責任は回避できない。彼ら

は、決定、判断を急ぐ。彼らは、責任感がある。彼らは、実名行動、顔出しを好む。）

（２２）『なつきの重視』

「可愛がり、なつき、情けを重視するということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、成員が、その中枢に深く入り込んだ所属集団内で、上位者に可愛がられること、上位者になつくことを重視する。
彼らは、旧後天的定住集団社会Ａ軍将校に見られるように、失敗しても、責任を問われず、仲間内で内輪でなあなあで、もみ消し、穏便に済ませようとする。
彼らは、失敗した当人を冷たく切り捨てることができず、情けをかけようとしたがる。
彼らは、情状酌量で処分が甘くなる。
彼らは、冷徹さを嫌い、情緒的な対応を好む点、女性優位である。
彼らは、可愛い部下や生徒に対して、えこひいきをする。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、冷徹な能力主義を貫徹し、失敗に容赦しない。）

（２３）『事前合意の重視』

「事前合意を重視するということ。いったん合意した流れ、方針の変更が困難であること。慣性で進もうとするということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、予め、利害関係者同士で、内密に議論して、落とし所＝事前の合意点を決めておくのを好む。
彼らは、関係者への事前の根回し、談合を好む。
彼らに、前もって、事前合意を取らずに、突然新たな話を進めよう、決めようとすると、反発、拒否されるということ。
彼らは、国会とかで、その場その場の即興の公開討議を嫌い、事前の密室での利害関係者を集めた交渉と合意形成を好む。
それは、予め互いの合意、賛成を取り付けておくことで、互いに和合することを好む女性優位な性格である。
彼らにとっては、既に、皆で合意、決定した内容、方針や流れを、後から変更する、覆すことが根本的に難しい。
彼らは、太平洋戦争で、戦局が不利になるという分析結果が政府内で後から出ても、既に戦争をやることで首脳部で合意ができていたので、方針を変えることが出来なかった。

彼らは、いったん決めた方針にとって有利な数字合わせを後付けで行う。
彼らは、いったん進むと決めた流れの方向に、不都合が起きても、そのまま慣性の力でずっと進もうとする。
それは、いったん形成した合意による皆の一体感、仲良し状態を後から人為的に壊してしまうのを怖がる女性優位な性格である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、リアルタイムの討議による合意形成を好む。彼らは、方針変更をあっけなく大胆に行う。）

（２４）『失敗恐怖症』

「プライド（良い格好を重んじる度合い）が高い。失敗恐怖症であるということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、プライドが高い（皆の前で良い格好をしようとするということ。）ということ。
彼らは、失敗して、皆の前で自分のプライドが傷つくのを何よりも恐れる。そうした性格は、英語などの語学の授業で顕著である。
彼らは、他人が失敗するのを見ると馬鹿にして総攻撃を加えて袋叩きにしたり、陰口を叩いたり、触れ回ったりする。
彼らは、本当は自分が公衆の面前で失敗するのが怖くて仕方がない。
彼らは、失敗を、誰でもする可能性のある日常的なことと許容することができない。一度失敗すると再び立ち直る機会が社会的に与えられない。
彼らは、失敗者を日頃の鬱憤晴らしの対象として、ひたすら責め立てる。
彼らは、試行錯誤による失敗の繰り返しを避けて、誰か成功した事例はないかとひたすら探し回り、見つかったと見るや、一斉にその真似をする。
彼らは、その成功事例を究極の正解、侵すべからざる信仰対象として、それにひたすら改良の磨きをかける。
彼らは、そこから少しでも外れた者を、エラー、間違いを犯したとして直ちに叱り飛ばす。それは、自らを大切で貴い存在と見なし、自らに少しでも傷が付くのを嫌がる女性優位な性格である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、失敗を恐れない。彼らは、自分は有能だというプライドが高い。）

（２５）『閉鎖的、排他的』

「閉鎖性、排他性が強いこと。内外感覚が強いこと。入試があること。白紙採用を好むということ。思考が内向きであること。閉塞感が強いこと。対内融通、配慮が効くこと。自前で済ませようとするということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、形成する社会集団が閉鎖的、排他的である。
彼らは、集団内と外とを厳格に区別し、よそ者に対して門戸を閉ざす。例えば、中央官庁や大企業では、成員の採用の機会は、新規学卒一括採用がほとんどである。こうした組織では、白紙状態でまだどの社会集団の色（しきたり、組織風土など）にも染まっていない若者に対してのみ門戸を開き、本格的な中途採用の道は閉ざされている。
彼らは、純血性を保った自集団（「内輪」）内で他集団に対抗する形で強固に結束し、内部に縁故（コネ）の糸をはりめぐらすということ。
彼らの社会は、よそ者を入れずに内部だけで強固に結束する鎖国社会である。
彼らは、親しい、付き合い上の安全が保障された身内、内輪だけで固まろうとする。
彼らは、よそ者に対してとても冷淡である。
彼らは、オープンさが欠如している。
彼らは、内輪の会話、なれ合いに夢中で、外界について関心が薄い。
彼らは、思考が内向きである。それは、女子中学生、女子高生の仲良し集団が原型である。
彼らは、内輪での仲の良さを外部に向けてアピールする。
彼らは、内輪で浮いているメンバーを外部からは分からないように、陰湿にいじめ、差別する。
彼らの社会は、内輪から外れる、定住集団から追放にされると、他に行くところが無い社会の仕組みになっている。そこで、彼らは、皆、外されないように必死になって、他の集団メンバーに配慮する。
彼らの社会では、いったん集団に入ると、定年やリストラなどで用済みになるまで、その中にずっとい続けることが要求される。（浮気をしないことを要求される。）
彼らの社会では、転定住集団の自由が存在しない。定住集団を出ると定住集団への裏切り者され、新たに別の定住集団に入れてもらおうとしても、前の定住集団で対人関係が上手く行かなかったと思わ

れて信用されずに入れてもらえないことがしばしばである。転定住集団回数が増えるほど定住民としての評価が低下する。また、定住集団を出てから、しばらくどの定住集団にも属さない空白期間があると、定住民としての空気が薄くなって、ただの浮浪人と化したとする見方が強まり、定住民としての評価が低下して、転定住集団先が見つかりにくくなる。
彼らは、よそ者は自分たちと行動様式が異なり、何を考えているか分からないので安全でないと考える。あるいは、彼らは、よそ者は、一緒になると自分の属する集団のしきたりや風紀を乱すことを平気でされるのではないかと不安で、安心できないと考える。
彼らは、中途採用者に対して、いじめを行ったり、新人と同じような屈辱的な扱いを強制する。
彼らは、そもそも外部から入ってくる者を、派遣企業定住集団のメンバーのように、一時的、部分的にしか、自分たちの組織にタッチさせず、締め出そうとする。この場合、よそ者の許容が自身の保全に悪影響を与えるという女性優位な心配が、閉鎖的な風土を生み出す要因となっている。
なお、この閉鎖性は、自分たちの所属する身内集団内部の一体感を保つため、よそ者が入るのを防いでいるという点、女性の好きな、他者との一体融合感維持指向に通じるものがある。
彼らの社会では、人々が、あらゆる物事に内と外があると考える、「内外感覚」を持っている。
彼らは、そして、外から内に移行する「入る」という意識（エントランス）を重視するということ。
彼らは、とにかく何でも入ろう、入れてもらおうとする。「入る」という意識は、相手、対象が閉鎖的な場合にのみ生じるものである。
後天的定住集団社会Ａのメンバーや女性が、何かと「入る」ことにこだわるのは、社会や集団が閉鎖的であることの現れである（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのようにオープンな社会のもとでは、人々の「内外感覚」「入る意識」は弱いと考えられる。）ということ。
彼らは、あらゆる物事に、入ることが大変な入試を求める。
彼らにとっては、卵子に例えられる、外部に比べてよりリッチな栄養のある内実を持つ閉鎖空間（公務員、大企業、名門学校等）に何でも良いから入ることが、人生の目的になる。
彼らの社会は、ある人が、中に入れてもらうと、その人は、優遇され、リッチな気分を味わえる仕組みになっている。（中に入れてもらうことの例。一員になる、溶け込む、一体化するということ。）
彼らは、そのように入れたことを周囲に向かって何かと自慢しがち

である。
彼らの社会は、白色無垢の者のみ加入を許す。
彼らは、色付きの者の採用を嫌う。（色が付くとは、どこか別の集団に長いこと加入していたということ。）
彼らの社会は、嫁入りで白無垢の装束を着たり、企業定住集団や官庁で、特定の組織の色の付いていない新卒学生の白色、白紙採用を好む。
彼らの社会では、色の付かない無垢の状態のまま、あるいは今まで付いた色を全てご破算にして（社会的に一旦死んで）、一から所属先の新たな色に染まります、という態度を見せないと、集団（企業定住集団、官庁、嫁入り先の家族・・・）の中に新たに入れてもらえないということ。
彼らは、新入りが、集団の既存の色を乱さないこと、集団の既存の色との調和、融合を重んじる。
彼らは、付いた色の濃いのが先輩で、薄いのが後輩であるとする。
彼らは、集団に居続けるに従って、自らに染み付く色が徐々に濃くなっていく、それに伴って他集団への転出が難しくなっていくと考える。
彼らは、学校の入学試験や、企業、官庁の企業定住集団への加入試験のように、部外者が集団に入るために、やたらと厳しい入試を設けたがる。
彼らの社会では、集団の中に入れてもらうのが大変である。ところが、彼らの社会では、厳しい企業定住集団への加入試験とかを突破していったん集団の中、ウチに入れてもらうことができると、途端に母の胎内にいるかのような、融通が効く、クッション感のある、柔軟な動きが取れる、温かい、利便性に満ちた、優遇された扱いを受けることが可能になる。
彼らは、役所とかで、親しい身内、内部者に対しては柔軟で融通が利く、配慮に満ちた態度を取り、部外者に対しては、杓子定規で利便性を考慮しない硬直した配慮に欠ける態度を取る。
彼らは、自分の本当の気持ち、意見（本音）は、親しい身内に対してのみ開示する。
彼らは、部外者に対しては、見かけの表面上取り繕った、上辺の気持ち、意見（建前）のみを示すということ。
彼らの間では、国外や、企業定住集団の外部といった、外部に対して関心の薄い、所属グループ内のことに専ら関心が行く、内向き思考が蔓延している。
彼らの社会では、閉塞感が強い。
彼らの社会では、グループの中に閉じこめられている、外に出にくいという感じが強い。

彼らは、人材の調達とか、外部に頼らず、自前で（自分たちのグループ内で）全て揃えよう、済ませようとするということ。
彼らは、互いに、他グループに任せず、自分たちのグループでやろうとする。
彼らの社会では、似たような内容の組織やアウトプットが、国とかで、重複して発生、生成しがちである（文部科学省の幼稚園と厚生労働省の保育所などの二重行政がその例である。）ということ。
彼らは、自分たちのグループ以外の他グループをライバルと見なして、頼ろうとせず（互いに閉じているため、頼ることが出来ず。）、自分たちのグループ内で自活、自給自足、自己完結しようとするということ。
彼らは、家電製品や携帯電話とかで、機能とか全部入りのオールインワンの機種を好む。
彼らは、自分たちの領域に侵入してくるもの以外の、外部の動向に対しては、どうなろうと知ったことではないと考え、無関心である。（演習飛行をする米軍機が自分たちの領空を飛ばないと分かった場合など。）
彼らは、自分の領域、領空を直接侵犯してくる以外の他者、他グループの存在に対して、徹底的に無関心であり冷たい。あるいは、彼らは、税金を、自分たちの企業定住集団や家庭から、国とかに支払うと、自分たちの管轄外に拠出されてしまったと考え、その使い道に無関心になる。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、開放的である。彼らは、開かれた空間内にいるため、内と外との区別があまり無い。彼らにとって、転出、転入が日常茶飯事である。彼らは、アウトソーシング、買収と売却が得意である。）

（２６）『受動的』

「受動性が強いこと。行動主体が非明確であること。主体性が欠如していること。他者のリードを求めるということ。静止、不動状態が好きであること。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、取る行動が受動的である。受け身であるということ。
彼らは、自分からは積極的に行動を起こさず、意思決定を先送りし、周囲からの働きかけや外国からの外圧があって初めて「仕方なく」行動を起こす。
彼らは、そうして、周りに引きずられる形で意思決定をする。

彼らは、自主性に欠ける。
彼らは、退嬰的である。
彼らは、「お不動さん」の信仰に見られるように、静止、不動状態を好む。
彼らは、行動を起こした原因が自分ではないとして、責任逃れをする。男女の恋愛において、結婚のプロポーズやセックスへのアプローチといったリードを、ほとんど男性側が行うのと根が同じである。
彼らは、主体性が無い。
彼らの文化は、待ちの文化である。
彼らは、自分からは動かず、誰かにやらせよう、やってもらおうとする。
彼らは、誰が行為責任を負うかが明確になってしまうのを避けるため、行為主体をはっきりさせない。
彼らは、主語を省略して表現する。
彼らは、主体をはっきりさせないことで、周囲との一体同調の強さ、心理的な凪、和合、静止状態の心地よさをアピールする。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、能動的である。彼らは、行動主体が明確で、主体性がある。彼らは、他者を進んでリードする。彼らは動きまわるのが好きである。）

（２７）『相互監視の重視』

「相互監視、告口を好むということ。他人の噂話を広めるのを好むということ。プライバシーが欠如していること。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、相互監視が行き届いている。
彼らは、互いに、周囲の他者が何をしているか、チェックするのに忙しい。
彼らは、プライバシーが無い。
彼らは、他人について、噂を広めたり、陰口を叩くのが好きである。
彼らは、権威者や当局に対して、密告をするのを好む。（学校の教室で「先生、ＸＸさんが隠れてＸＸしています！」と告げ口するなど。）
彼らは、自分は、そうした噂や陰口の対象にならないように、絶えず保身に気をつかい、安全地帯にいようとする。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、互いに他者が何をやっているかに無関心である。彼

らは、自分のことに忙しい。彼らは、プライバシーを重んじる。）

（２８）『間接的対応』

「対応が間接的、ソフト、遠まわしであること。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、対応が間接的であり、陰湿である。
彼らは、相互の一体感、和合をできるだけ維持するため、他人に対して批判をする際にも、直接的な、明らさまな表現を嫌う。
彼らは、意見を口に出さず、相手に直接直言せず、以心伝心で伝えようとする。
彼らは、表現をソフトにしようとして、間接的な遠回しの表現を好む。
彼らは、そうした遠回しの表現の真意に気づかない他者を、鈍いとして陰口を叩いて批判し、無視したり、陰で他人に分かりにくい形でいろいろ寄ってたかっていじめたり、意地悪する。
彼らは、ソフトだが、真綿で首を閉めるような陰険なやり方をする。
彼らは、相手に直接言わず、間接的に陰湿なやり方で相手の足を引っ張る。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、対応や物言いが直接的であり、ハードである。彼らは、直接進言する。）

（２９）『局所的（ローカル）』

「対応が近視眼的、場当たり的、個別、局所的であること。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、対応が、近視眼的、場当たり的である。
彼らは、自分にとって身近な目先の場所や、時間的に目の前の事柄に注意が専ら行き届く。
彼らは、ずっと先の未来や、世界全体規模をコントロールしようとする長期的、遠大な計画性や視点に欠けている。
彼らは、自分のいる周囲の動向のみに注意を払う。
彼らは、自分のところの狭い個別の事例、利害に囚われて、物の見方が局所的になりやすい。
彼らは、「～の説は、自分のところとは違うので、正しくない」という言説がまかり通る（「～の説は、全体のパーセントが当てはま

らない、あるいは論理的に～なので、正しくない」というふうになりにくい。）ということ。
彼らは、自己中心で周囲が見えない。
彼らは、全体を鳥瞰して判断するのが苦手である。
彼らは、道路の用地買収とか、全体の利益を考えず、個別の利害をゴリ押しする。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、対応が長期的、計画的、普遍的である。）

（３０）『感情的』

「対応がヒステリック、情緒的、非科学的であること。感情的に反応するということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、取る対応が、ヒステリックで感情的、情緒的である。
彼らは、相手からの刺激に対して、冷静に分析する事ができない。
彼らは、思わずキーッとなって集団全体で感情的に激昂し、前後の見境がなくなって、予想外の飛んでもない行動に出る。（太平洋戦争時の真珠湾攻撃など。）
彼らは、相手との一体感の有無、好き嫌いを目安にして行動する。
彼らは、相手に対して、客観的に突き放す形で向き合う事ができず、感情的な好き嫌いをむき出しにして対応する。（太平洋戦争時の先進的移動生活中心社会Ｇ、イギリスへの鬼畜米英呼ばわりなど。）
彼らは、対象との一体感を重んじ、対象と距離を置いて物事を見ることができず、物の見方が非客観的である。
彼らは、冷静、客観的に物事や状況を捉える科学を嫌い、何事も気合を入れて努力して行えば不可能なことは無いとする、精神論、根性論、努力万能論を振り回すのを好む。
彼らは、教師などの熱血指導を好む。
彼らは、学説のような、本来冷静に突き放して評価すべき対象に対する主観的、情緒的な思い入れ、こだわりを強く持ち続け、他人に批判されると感情的に反応する。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、対応が冷静、客観的、科学的である。）

（３１）『小スケール』

「スケールが小さいこと。高精細であるということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、やることのスケールが小さい。
彼らは、小さな精密部品の設計、組み立てのような、微調整や、神経の細やかさが必要な、高精細、高い正確性を要求される事項に、世界で並ぶ者のない強みを発揮する。
彼らの社会は、重箱の隅をつつくような、細かい視点が、大学の入学試験とかで要求され、それに適応した若者を次々と生み出している。
彼らは、小さくか弱い柔らかい「かわいい」、それでいて色気のある「萌える」存在を、アニメやコミック等で次々生み出すのが得意である。
彼らは、天地を駆け巡る壮大なスペクタクル叙事詩を著述するのが苦手であり、俳句のように、小さく凝縮した箱庭のような小さい世界を著述するのを好む。小さい可愛いものは、女性がより好み、生み出すのを得意とする。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、スケールが大局的で、細かいところには神経が行き届かず、大雑把になってしまう。）

（３２）『高密度指向』

「高密度、詰め込み、集中を好むということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、高密度、詰め込み、集中を好む。
彼らは、個人のスペースの空きをできるだけ詰めようとする。
彼らは、ゆとりを嫌う。
彼らは、満員電車を当たり前のものと考える。
彼らは、重箱に寿司や料理を詰め込むのを好む。
彼らは、教育で、子供への知識の詰め込みを重視する。
彼らは、東京を中心とする首都圏への一極集中、密集を好む。女性の方が男性に比べて、過密状態をより好むとされている。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、低密度で、空間的に余裕、自由がある、空きがあるのを好む。彼らは、分散、拡散を好む。）

（３３）『厳格さの重視』

「厳格、正確であるということ。」

後天的定住集団社会Ａの定住民は、厳密、厳格、厳正さを好む。
後天的定住集団社会Ａの社会、政府や企業は、医薬品の許認可とか、国際基準に比べてやたらと厳しい（厳密、厳格なということ。）検問や検査数値設定を行いがちであるということ。
彼らは、より安全、安心になるためには、より厳しい審査をしなければならないと考える。ちょっとでもリスクがありそうだとやたらと不安になる。あるいは、検査数値設定が甘かったということで、いざリスクが発生した時の責任を取りたくないと思う。それは、誤り、落ち度、突っ込みどころ、隙、減点箇所が無いことを過剰に求める、女性優位な責任回避の心理がなせるものであると言える。それは、嫁のすることにうるさく、厳しくチェックを入れて嫁を叱る姑と根が同じである。それは、姑根性と呼べる。
彼らは、正確さを好む。
彼らは、時間に対して、やたらと正確である。特に企業定住集団、学校の始業時刻に間に合うことを厳守しようとし、１分でも遅刻すると強く非難するということ。
彼らは、定時性、定刻性を重視する。
彼らの社会では、鉄道が、ラッシュ時でも定時発車が当たり前のことのように行われている。あるいは、首都圏の路線バスが、1秒も狂わない電波時計の導入で、発車が、発車時刻の00秒ジャストに行われるのが普通になっている。もしくは、テレビ放送のニュース番組とか、秒刻みのスケジュールで番組が構成されている。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、コンピュータＣＰＵ設計のような論理的な、理屈面での正確さ、厳密さにこだわる。それは、父性的な正確さ、厳密さの指向である。）

（３４）『減点主義』

「正解、正論、完璧、無難、無傷指向、減点主義であるということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、物事には正解がある、完璧、完全な状態があることを最初から自明視する。
彼らは、正解と見なされることのみ行おうとする。
彼らは、正しい、批判されにくい正論を主張する。
彼らは、間違うことを恐れる。
彼らは、完全であること、テストの点数とかで百点満点であることを目指そうとする。
彼らは、自分に傷、瑕疵が付くことを恐れ、嫌がる。

彼らは、人や物事の評価を、百点満点の完璧、無傷な状態から、どの位下方に離れているか、差分があるかで判断しようとする。
彼らは、人や物事の評価を、百点満点からの引き算で行う減点主義で動く。
彼らは、無難であること、欠点が無いことを重んじる。
彼らは、評価対象に目立った長所があっても、同時に見逃せない欠点、粗があると、直ぐに否定的な評価を下す。
彼らは、完璧な状態に少しでも近づくことを目指し、ひたすら修行する。
彼らは、物事に失敗したり、正解が直ぐに見いだせない状況になると、道に迷ったとして、途端に怖くなって混乱する。そして、それより先には進もうとせず、元来た道をすぐ後戻りしようとする。
彼らは、正解とされる定説を習得すべき前例と見なして、その奥義習得にひたすら励む。それは、ひたすら正しい、安全が保証された道のみを、奥義を求めて極めようとする、自己保身第一の女性優位な心理が元になっている。
彼らは、自分の心や、自分の持ち物に少しでも傷が付くのを恐れる。
彼らは、自分の買ったスマートフォンの液晶とか、傷が付かないように、保護ケース、保護シートとかで、万全、完璧に対策しようとする。
彼らは、マイカーとか、無傷でピカピカに洗い上げ、磨き上げるのを好む。
彼らは、自分に心の傷が付かないように、自分の心に傷を付ける可能性のある他者との交流、対人関係を避け、引きこもりがちになる。それは、自分自身や自分の大切なものを傷つけるという、自らの保身に取ってマイナスとなる行為を嫌う女性優位な心理である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、他人の長所を短所よりも積極的に見出し評価し、活用を図ろうとする加点主義である。彼らは、難点が見つかっても、長所がそれを上回れば採用する。）

（３５）『管理統制主義』

「一体行動、一斉行動を好むということ。管理主義、統制主義であるということ。牽制、長時間拘束を好むということ。休むことを罪悪視するということ。自由行動を許さないということ。」
後天的定住集団の社会では、集団などの所属者が、一体となって動くことを要求される。

彼らの社会では、集団内での個人の自由で勝手な行動が許されない。
彼らは、教育とかで、成員の管理、統制、締め付け、縛りを行うのが好きである。
彼らは、個人が自由に行動しようとするのを、自分勝手であると決めつけ、束縛、制限しようとする。
彼らは、集団から外れた行動をしたことを個人責任として、行動した本人が助けを求めても、勝手な行動をしたとして冷たく突き放し、助けない。
彼らは、集団に属さない個人行動、独自行動による成果を、格下扱いして認めない。個人がどこかの集団に所属して、その所属集団を通して出した成果でないと認めない。あるいは、一定の権威ある集団による編集を通した内容でないと認めないということ。
彼らは、学校とか、団体行動での統率、一斉に揃った行動をするのを好み、みんなでお揃いの制服、バッジを着用するのを好む。
彼らは、役所とかで、相手の行動を自由に許可、禁止できる許認可権限を得たり、行使するのを好む。
彼らは、周囲の他者が思い通り自由に振る舞うのを妬み、他者の振る舞いを規制、牽制、長時間拘束して不自由にしようとしたがる。
休むことを悪いことだと考え、長時間労働、長時間残業を美化するということ。一人だけ仕事を早退することを、皆が頑張っているのに一人だけ帰るのはけしからんとして非難する。
彼らは、自由が与えられることを、どう行動すればよいか分からず途方に暮れるとして怖がる。
彼らは、不自由であること、他人に指示されること、他人に行動を合わせることを心の奥底で望んでいる。これは、奴隷根性である。
これは、統制されることで集団メンバー間に生まれる一体感を大切にする点、周囲との一体感を重んじる女性優位な性格である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、バラバラの個人行動を好む。彼らは、他人による管理統制を制限する。彼らは、自由行動を許す。）

（３６）『従順さの重視』

「上意下達を好むということ。従順であるということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、上意下達を好む。
彼らは、上位者、下位者間の一体感を重んじる。
彼らは、上位者、下位者間の一体感を損なう、下位者による上位者への言挙げを嫌う。

彼らは、上位者、上官の言うことを、異を唱えずに素直に聞く人間、上官の命令をそのまま誠心誠意、忠実、誠実に守る人間、上官の指示を守って動く人間、上官の意を自主的に汲んで動く人間を好む。
彼らは、上位者に素直に従おう、従順であろうとする。上位者を受け入れよう、上位者に反逆しないように行動しようとするということ。上位者に忖度しようとするということ。強者になびくということ。
彼らは、国などの上位者の決めた規則を忠実に守ろうとする。それは、上位者、下位者間に生まれる一体感を大切にする点、相互の一体感を重んじる女性優位な性格である。
彼らは、上位者に反抗する人たち、あるいは過去に反抗したことのある人たちのことを警戒して、差別したり、自分たちの仲間に入れようとしない。（後天的定住集団社会Ａのキリスト教徒、後天的定住集団社会Ａ共産党党員、労働組合組織メンバー、等）
彼らの社会的態度は、理想は「上懐下愛」（上位者に懐き、下位者を可愛がるということ。）だが、実際は「上媚下虐」（上位者に媚を売り、下位者を虐げるということ。）。彼らは、そのようになりやすい。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、反逆、反抗、異を唱えること、自分流を好む。）

（３７）『総花的』

「総花式、オールインワン、万能、八方美人を好むということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、総花式を好む。
彼らは、偏りや、特定面でのみ優れているのを好まない。
彼らは、何でも出来る万能さを好む。
彼らは、製品とか、あらゆる面で平均以上に優れているのを好む。
彼らは、製品の機能がオールインワンで、機能が万遍なく入っているのを好む。
彼らは、八方美人で、誰からも好かれるのを好む。
彼らは、医薬品などの製造、販売で、どんな症状にも効くことを指向して、例えば、相反する働きを持つ制酸剤と消化剤を一緒に混ぜた胃腸薬を製造、販売する。それは、女性が、絵を描く時の色遣いで、特定の色に偏らず、万遍なく使おうとするのと根が一緒である。
彼らは、全てを満たそうとする。
彼らは、何でもこなせるジェネラリストを、役所とかで重んじる。

彼らは、つぶしの効かないスペシャリストを嫌う。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、製品とかが特定機能に優れていて、ライバルがいないのを好む。彼らは、鋭い判断が出来るスペシャリストを好む。）

（３８）『突出の回避』

「突出を回避するということ。目立たないようにするということ。標準、普通を指向するということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、ネットとかで、目立ったことをした他者について、すぐその身元を特定し、プライバシーを暴露することに情熱を注ぐ。
彼らは、逆に、突出した目立った行動を取るのを極力控えようとする。
彼らは、そうすることで、自身が外部に目立って危険な目に合いやすくなったり、自身のプライバシーが暴露されたりすることにつながること、あるいは周囲との協調、和合を乱すことを避ける。
彼らは、普通、標準でいようとする。
彼らは、オタクのように、特殊扱いされるのを嫌い、一般人（普通の人、標準的な人）でいようとするということ。
彼らは、一人だけ目立つのを嫌う。
彼らは、目立ちたい時は、宴会の隠し芸とかで周囲の他人と一緒、同時に目立とうとする。
彼らは、何か一人で行動を起こすと何かと突出して目立ち、叩かれるので、自分からは何も行動を起こさず、無為でいようとする。
彼らは、誰か他の人が勇気を出して行動すると、それに便乗する。
それは、突出することで集団から浮くことを恐れる女性優位な性格である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、突出しようとする。彼らは、強烈な個性で目立とうとする。彼らは、特異性を求める。）

（３９）『中心指向』

「中心、周辺を区別、差別したがるということ。皆で中央、中心、都心を指向するということ。」
後天的定住集団の社会は、（ウェットな液体分子群のように、）中心、中央の概念、中心形成の度合いが強い。

彼らの社会では、中心、中央と周辺、地方との差が大きい。（ドライな気体分子群のような先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでは、バラバラ、散り散りで中心、中央の形成が弱い。中心があまり無い。中心と周辺の差があまり無い。）後天的定住集団社会Ａの定住民は、皆が一カ所に集まろうとする。
彼らは、中心部に集中して存在しようとする。
彼らの社会では、都心が過密状態になりやすい。
彼らの社会では、通勤とかで、皆が都心に集中するオフィスを一斉に目指そうとする。それは、皆で集まった方が、護送船団と同じで保身に有利である、中心に近いほど外部環境露出が少なくて保身に有利であるとする女性優位な考え方である。
彼らは、自分が皆の中心に位置して、皆の注目を集めたいと考える。
彼らは、中心、周辺視が強い。
彼らは、中心、中央と周辺とを区別、差別する考えが強い。後天的定住集団社会Ａでは、首都東京と、地方との格差が大きい。都心に住んでいる人とか、中華思想を持ちやすいということ。中華思想は、自分たちが世界の中心である、自分たちが世界の中心にいて偉い、中心部が偉くて周辺部は劣っているとするものである。
彼らは、後天的定住集団社会Ａ軍による沖縄戦対応のように、中心、本土を守るために、周辺の人々を捨石扱いする。
彼らは、自分や自国が、より大きなグループ、世界の中心、中枢、中央になろうとする。
彼らは、中枢で周囲から温かく守られると共に、周辺に向けて命令できるのを好む。
彼らは、中心に集中する。
彼らは、中央、中心を目指そうとする。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、あまねくグローバルに普遍的に拡散して分布しようとする。彼ら、父性、ドライな人、個体は、自分や自国の文化や指令の、中心の不定な、普遍、グローバルな感染、拡張、拡大、広がりを目指す。彼らは、気体の空気やガスのように、あまねく世界中に広がる、普及する、拡散することを指向する。
彼らは、空気に乗って伝播、伝染するインフルエンザのウィルスと同じ行動を取る。）

（４０）『マイナス思考』

「他人の陰口、悪口を好むということ。他人の欠点探しや粗探し、

足を引っ張るのを好むということ。思考、やり口がネガティブ、マイナス、陰湿、陰険であること。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、他人のマイナス面に関心が行き、他人の欠点や失敗、粗探しをひたすら行おうとする。それは、他人に対して駄目出しをすることを好む「駄目出し社会」である。
彼らは、他人が自分の上を行くことに我慢が出来ず、足を引っ張るためのネガティブ要素を探すのに夢中になる。
彼らは、学校や企業定住集団で、自分が気に入らない、かつ、その場にいない他人の陰口を叩く、悪い噂話を広めるのを好む。
彼らは、そうすることで、当人のマイナス評価を周囲に広め、足を引っ張り、当人に大きなダメージを与えようとする。
彼らは、思考、やり口がネガティブ、マイナス、減点主義である。
彼らは、宴席とかで、その場にいない人の悪口を言い合って盛り上がり、その場に居合わせた一同が、悪口を叩かれた不在者をダシにして一致団結しようとする。
彼らは、一方、当人がその場に居合わせる時は、面と向かっては当たり障りの無いことを言ってごまかしたり、見かけ上褒め合ったり、迎合したりして、裏表が激しい。
彼らは、気に入らない相手を直接攻撃せず、周囲から、からめ手で間接的に足を引っ張る。
彼らは、やり口が陰湿、陰険である。それは、相手の欠点、粗ばかりを探そうとする、減点、マイナス思考の姑根性のような性格である。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、他人の長所を見出し積極的に褒めて、勇気づける。彼らは、ライバルと正々堂々と勝負する。）

（４１）『努力、苦労、労働の神聖視』

「努力し、苦労することを良しとするということ。楽をすること、休むことを罪悪視するということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、以下のことを重視する。周囲の他人が、地道に努力し、苦労すること、たくさん働くということ。後天的定住集団社会Ａの定住民は、それらを尊ぶ。労働することを重視するということ。
彼らは、自分の周囲で仕事を省力化して楽をする人、さっさと効率的に働いて直ぐに仕事を終らせて帰ろうとする人に嫉妬して、非難したり、強引に別の仕事を割り振ったり、残業させようとする。
彼らは、休むこと、手を抜くことを罪悪視する。体調が悪くても仕

事を休まないことを賞賛する。とにかくひたすら働くことを重視し、周囲に強要するということ。長時間労働、長時間残業を肯定するということ。
彼らは、仕事を効率化して成果を上げることより、仕事で努力、苦労をいとわない姿勢、心がけそのものを重視する。
彼らは、楽をしていると、仕事をしていないとみなされ、嫉妬されて足を引っ張られるので、必死で苦労している振りをする。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、労働を生きていくための必要悪とみなし、少しでも仕事を効率化して楽をしよう、休もうとする。バカンスを楽しもうとするということ。）

（４２）『真実、内実の隠蔽』

「真実を隠蔽するということ。相手から急所、真実を突かれると無反応状態になるか、相手を無視するということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、本当のこと、真実、内実を、知られると騒ぎになると考えて、隠蔽して語ろうとしない。
彼らは、真実からかけ離れた、当り障りのない、表面的に都合の良い、綺麗事のみを強調した建前の議論でお茶を濁そうとする。
彼らは、リアルな真実を語ることが、社会として出来ない。太平洋戦争時の大本営発表や、福島第一原発事故の際の情報隠蔽、精神障害者の子供を持った親による子供の病気の対外隠蔽が好例である。陰湿な女社会の内実を隠蔽してきた女性たちと根が一緒である。
彼らは、公式、公開の場で発言せずに沈黙する。
彼らは、建前上の、無難な、その場の大勢に迎合した良い子、ぶりっ子の発言のみ行う。
彼らが積極的に自由に発言するのは、ある程度非公式、非公開の場に限られる。
彼らは、衆目の監視の中で発言すると、発言内容に公の責任が生じるため、保身のため、何も発言しないで、黙って含み笑いしているのみである。
彼らは、親しくない人が大勢いる中で自由な発言をするのに抵抗がある。
彼らは、親しい内輪の中でないと自由に発言できない。
彼らは、相手が急所、真実を突いてきたとき、そこが急所、真実であることを気づかれないために無反応だったり、わざと取り繕ってお茶を濁したり、茶化したり、ことさら無視したり、話題を関係ないものに変えようとする。

（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、自分個人の独立に忠実であるために社会の真実を積極的に語ろうとする。彼らは、自分の急所を突かれると直ちに猛反撃を開始する。）

（４３）『多数派指向』

「多数派に属そうとするということ。与党に投票するということ。大きな組織に属そうとするということ。数の力に頼ろうとするということ。少数派を叩くということ。」
後天的定住集団社会Ａの定住民は、多数派に就こう、属そうとする。メジャーな存在が大好きである。常に自分の所属する集団の大きさに注意が向いて、少数派だと力が弱く差別されると考える。
彼らは、選挙で多数派の与党に投票しようとする。彼らは、自分が与党の一員となることで、より多数の人と同じ仲間に属することによる安心感を心の中で求める。マイナーな少数派に属することを不安がるということ。彼らは野党を少数派と見なして見下す。
彼らは、就職とかで大きな組織、企業定住集団に属そうとする。
「寄らば大樹の陰」ということわざに沿って行動するということ。
彼らは、何事も団体行動なので、団体の大きさ、数の力をとかく重視する。彼らは、数の力に任せて少数派を叩く、弾圧する。
（ＶＳ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー（移動生活民）：彼らは、個々人が独立しているため、自分が少数派になる可能性を常に計算し、少数派の意見をある程度尊重しようとする。）

（リストアップはここまで。）

後天的定住集団社会Ａ「定住集団の掟」

後天的定住集団の社会で生き抜くには、良くも悪しくも、以下のような対処をすることが必要になる。これは公言してはいけない裏の掟である。人権上問題のある掟も多々含まれているので注意が必要である。
（１）「定住集団加入の心得。定住集団の転属不可。」
初めて入った定住集団、生まれた定住集団が一生過ごす定住集団になる。後からはやり直しできないので、入る定住集団の選択をくれぐれも誤るな（結婚時、新卒時、就活とかでということ。）という

こと。入ろうとする定住集団のこと（企業定住集団の風土とか家風とか）を事前に徹底チェックせよということ。寄らば大樹の陰。大きく安定していて将来性のある福利厚生の良い定住集団に入れてもらえということ。
（２）「コミュニケーション力の重視」
コミュニケーション、協調性を重視せよということ。定住集団の中の嫌いな相手にも明るく積極的に話しかけろ。コミュニケーション力が無いと、他の定住民から疎まれ、定住集団を追い出されるから気をつけろ。
（３）「飲み会の重視」
飲み会、宴会を重視せよということ。同じ釜の飯を食うことで仲間、身内に入れてもらえやすくなるということ。
（４）「定住集団への滅私奉公」
自分の所属する定住集団、身内の利益をひたすら考えよということ。身内のためにひたすら尽くせ、汗を流せということ。長時間働け、苦労しろ、滅私奉公せよということ。余所者（非正規雇用者とか）はどうなっても良い、無視して構わない。
（５）「定住集団内の強い人、偉い人への対応」
定住集団内の強い人、偉い人（先輩、恩師、上司、姑）を立てろ、媚を売れということ。気配りしろということ。積極的に懐け、甘えろ、頼れということ。反論するな、批判するな、理屈をこねるな、言うことを聞けということ。良く話をして、そうした普段の話の中からふと漏れ出る彼らの弱みを握れということ。握った弱みを盾に相手を思い通りに動かせということ。長いものには巻かれろ。力ある者に逆らうなということ。御用聞きをして取り入れ。ペコペコして溜まったストレスは自分より弱い者をいじめてうっぷんを晴らせ。
（６）「定住集団外の有力者への対応」
定住集団外の有力者（役人、議員、資産家族定住集団等）とのコネ作り、コネ維持を重んじろということ。いざという時に助けてもらえるよう、常日頃から恩を売っておけということ。
（７）「権威への対応」
権威あるもの（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの文物とか）にはとりあえず従っておけ。自分もその権威に積極的にあやかり、権威と一体化して箔を付けて、周囲に威張れるようにしろ。
（８）「先輩後輩制の重視」
年功序列、先輩後輩制を重んじろということ。年を取るほど前例、しきたりが蓄積されて偉くなる。
（８－１）「先輩への処遇」
古参、古株が偉いことを肝に銘じろ。先輩を立てろ、敬え、批判す

るな、とにかく言うことを聞けということ。先輩の言う通りに動けということ。
（８－２）「同期の処遇」
同期はなるべく同等に処遇せよ。やむを得ず処遇に差が出る場合は、互いに顔を合わせずに済むように周囲が配慮せよ。仕事が出来ない方、コネが弱い方を子企業定住集団、子集団に出向、天下りさせろ。
（８－３）「後輩への処遇」
後輩に懐かれる、尊敬されるだけの器量（技とか人間性）を持てるよう頑張れということ。後輩にバカにされるようでは終わりだ。後輩は部下としてこき使って構わない。
（９）「管理職の登用」
定住集団のまとめ役、管理職は、長年定住集団のことを第一に考えてリードしてきた、生え抜きの年功を一定以上積んだ者の中から優秀な者を選べ。役職付きになれる者は上に行くほど限られている。
（１０）「役職登用と年齢制限」
一定の年功に達したのに役職が付かなかった者は一生下積み、下働きの現場労働だ。
（１１）「空気を読むことの重視」
自分を周囲に素早く合わせろということ。周囲の動きに敏感になれということ。空気を読めということ。自分の考え、独自の意見に固執するなということ。自分の考えを持つなということ。周囲と一体になれということ。とにかく周囲に合わせて動けということ。自分を無にせよということ。異を唱えるなということ。その時々の上位者や定住集団の有力者、定住集団の仲間、周囲、世間の中で大勢となっている意見に、時々刻々意見を合わせて、カメレオンのように迎合、変身して付いて行けということ。
（１２）「少しだけ先んじることの重視」
ライバルや世間の一歩先を行くような気の利いた意見を流布させ、人気者になって力を得よということ。先に進み過ぎないようにせよということ。
（１３）「人気者になる心得」
先進国、首都とかで人気が出たもの、出そうなものを、周囲に先んじていち早く取り入れて見せびらかせ。定住集団の人気者になれるぞ、儲かるぞということ。
（１４）「和合、事なかれの重視」
定住集団内部の和を第一に考えよということ。波を立てることをするなということ。揉め事を起こすなということ。事なかれ主義に徹しろということ。空気を読めということ。
（１５）「出る杭は打たれること」

出る杭は打て。内輪の和を乱す目障りな異質な者、異分子は寄ってたかって徹底的に叩け、いじめろ、同化させるか外に追い出せ、排除せよ。皆が一つの色に仲良く染まることを理想とせよ。自分は余り目立つな、浮くな。個人行動をするなということ。皆と一緒に地道に努力して、認められる時を待てということ。
（１６）「失敗回避と自己責任」
起こした失敗はそのままでは連帯責任になってしまい、定住集団の身内や偉い人まで対象になり迷惑がかかる。とにかく失敗するなということ。石橋は叩いても渡るな。慎重に動けということ。定住集団の身内や偉い人を巻き込みたくなければ自分で腹を切れ。（自己責任を取れ、自殺しろ。）失敗したら再チャレンジの機会は無いと思え。
（１７）「遅刻、休みの禁止」
遅刻は絶対するな（定時に皆揃って一斉作業を行うことが定住集団の行事遂行に必須である。）ということ。休むなということ。這ってでも出勤せよということ。周囲に合わせて遅くまで残って頑張れということ。自分だけ早く帰るなということ。すると周囲の受けが良くなる。
（１８）「定住集団外に追い出されないことの重視」
所属する定住集団（身内の集団）から決して外に追い出されないようにしろということ。出て行けと言われないように、常日頃から周囲に対する気配りを怠るなということ。定住集団に何が何でもしがみつけ。一度出されたら次は無い（余所者、浮浪人扱いされ、どこにも入れてもらえなくなる。）ということ。
（１９）「定住集団への連続所属の重視」
所属する定住集団の存続、永続のために我が身を削って滅私奉公せよ。（あるいは、周囲の受けを良くするために滅私奉公している振りをせよ。）所属している定住集団に、死んだり、定年で退職するまでずっと所属し続けよということ。定住集団の用意した人生のレール、エスカレーターから決して外れるな、降りるなということ。外れない、降りない限り、生活は定住集団が保証する。いったん、定住集団のレール、エスカレーターを自分から降りた場合はその後の生活は自己責任で、定住集団は一切関与しない、助けない。
（２０）「定住集団からの追放」
定住集団の掟を破ったり、定住集団に迷惑、負担をかける者はみんなで懲戒処分にせよ。定住集団からの追放にせよということ。困っていても無視しろ。自分が懲戒処分されないように定住集団の掟には絶対服従せよ。
（２１）「集団自決」
定住集団と運命を共にせよということ。集団自決せよということ。

一人だけ逃げ出すなんてもってのほかであるということ。
（２２）「定住集団を出ていくのは裏切り者であること。」
定住集団を自分で勝手に出て行った者（原発事故避難者等）は裏切り者扱いされるので、その覚悟をしろ。定住集団から出るなということ。一生を今いる定住集団で過ごす覚悟をせよということ。
（２３）「気に入らない者への対処」
定住集団内で気に入らない者は悪口、陰口、噂話を流して潰せ。
（２４）「定住集団の名誉の重視と恥の回避」
見栄を張れということ。同じ定住民として恥ずかしくないようにしろということ。定住集団の名誉のために頑張れということ。不祥事を起こして身内に恥をかかせるなということ。身内に迷惑をかけるなということ。
（２５）「内部告発の禁止」
定住集団の内輪のことを外部に漏らすなということ。内部告発するなということ。漏らした者は裏切り者だ。
（２６）「余所者、非定住民の入定住集団不可」
余所者、非定住民（企業定住集団の非正規メンバー（流民）等）を信用するなということ。余所者、非定住民を内輪に入れるなということ。内輪だけで固まるようにしろということ。身内のことだけを考えろということ。
（２７）「強者の神格化」
頂点の支配者（国家の所有者陛下）を、上位者として神扱いせよということ。上位者にはいかなる時も絶対服従せよ。上位者の家来の役人にも絶対服従せよ。出世するには、厳しい受験競争を打ち勝って、上位者の官公庁のキャリアの立場に新卒の白紙採用で身内扱いで入れてもらうことを子息の教育の究極目標とせよ。
（２８）「強者への従順」
上位者にはペコペコ頭を下げて従え。媚を売れということ。反抗すると命は無いと思え。上位者の言うことは絶対だ。強い者が誰かは時々刻々変化するので、遅れ無いよう、その時々の強者に付いて行け。
（２９）「弱い者いじめの容認」
上位者にペコペコするとストレスが貯まるので、捌け口として弱い者いじめを積極的にせよ。多数で一人をいじめるのは全然構わない。数こそ力だということ。集団こそ力だということ。浮いた弱い者をいじって叩いて無視して、日頃の憂さ晴らしをせよということ。
（３０）「ピンはねの容認」
自分より強い上位者や元請けには、頭を下げて仕事を貰え。ピンはねされても生きていくためには止むを得ないから黙って従え。自分

より弱い下請けには、利益をピンはねして構わない。下請けは徹底的に搾取せよ。生きていく上で必要だということ。
（３１）「強者への反抗、一揆」
止むを得ず上位者に反抗する時、一揆を起こす時は首謀者が誰か分からないように書類を全て焼却しろ。
（３２）「スーパー上位者の利用」
国内の上位者や元請けを動かすには、外国、外資（先進的移動生活中心社会群Ｆ、北米）とか国連などの、より強い「スーパー上位者」の『出羽守』になって、スーパー上位者の権威ある説の中から自分たちに都合の良い説をピックアップして主張せよということ。スーパー上位者の身内になって、国内の上位者や元請けよりも上の立場に立て。スーパー上位者に取り入って、自分の都合の良い情報を吹き込んで操り、その力で、国内の上位者を支配せよということ。
（３３）「新卒一括採用の重視」
定住集団に入ろうとする新参者は、自分に反抗しない子飼いにするため、出来るだけ若い新卒の白紙状態の者を揃えて一括採用せよ。色の付いた中途は採用するな。既卒や職歴の途切れた者は定住民の気が消えているので採用するな。
（３４）「派閥抗争の重視」
定住集団の派閥に積極的に入れということ。派閥こそが身内の中の身内だ。自分の身内にとってライバルとなる他の定住集団や派閥に気を許すなということ。ライバルの派閥は身内一丸となって攻撃し、せん滅せよ。やられたらやり返せということ。身内の中で力を発揮して実力者の証を見せることを生きがいとせよということ。派閥に入ろうとしない八方美人とは付き合うな。
（３５）「情報統制の重視」
自分たちが負けているとか、自分の定住集団、身内の恥になる都合の悪い情報が流れることが無いよう、徹底的に情報統制せよ。都合の良い情報だけが流れるように記者を会食とかで懐柔し締め上げろ。都合の良い情報だけを広報せよということ。都合の悪い情報を流した者、知っている者は、何としても探し出し処分せよ。身内の都合の悪い、恥ずかしい内情は最後の最後まで外部には隠し通せ。焼却処分して消せということ。
（３６）「根性論、精神論の重視」
やる気、根性、精神力があれば、努力すれば、何事もなしうる。科学的指導など意味がない。根性の無い者、耐える力の無い者は、しごいて焼きを入れる必要がある。とにかくやる気を見せないと身内には入れてもらえないし、身内から放り出されるぞ。
（３７）「おもてなしの精神」

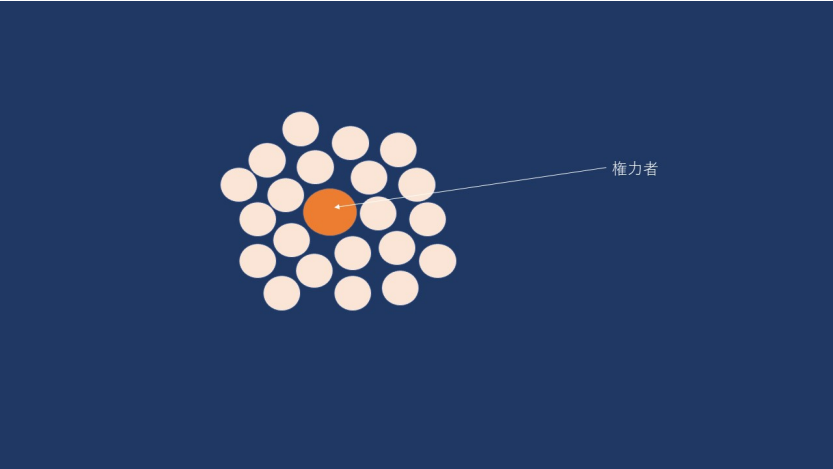
自分の所属する定住集団にお金を入れてくれる元請けやお客様とかは、自分の定住集団の定住民で無くても定住集団の存続を図ってくれる有難い存在なので、神様扱いして最大級の心細やかなおもてなしをせよ。
（３８）「定住集団を通すことの重視」
物事を通す、決定するには、必ず定住集団を経由しろ。身内で協議しろということ。定住集団を通さずに、個人で勝手に動いて出来た成果物は信用するな。書籍とか必ず出版企業定住集団の定住集団の編集を通したものを買えということ。自費出版書籍とか信用するなということ。
（３９）「個人行動の禁止」
個人で勝手に動くなということ。必ず他の定住民にお伺いを立てて、協議を通せということ。必ず事前に根回しをしろということ。

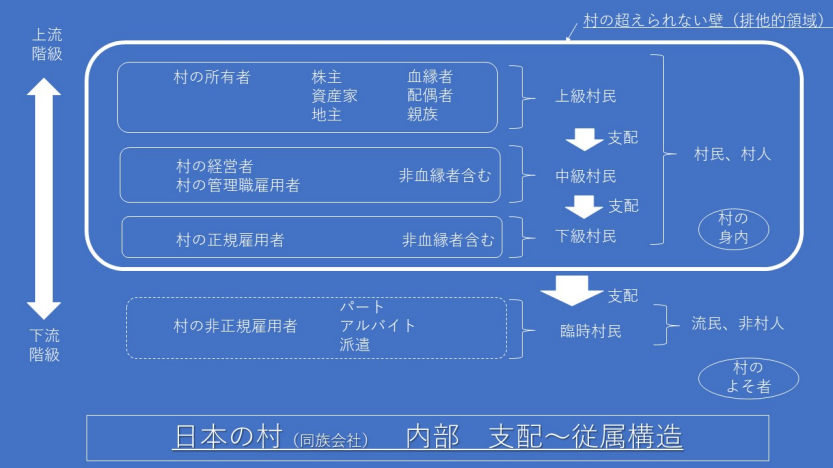
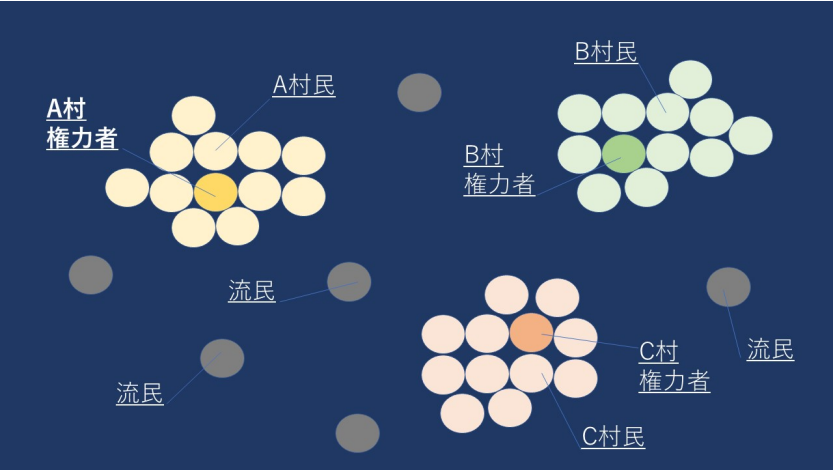
後天的定住集団社会Ａの定住民度判定テスト

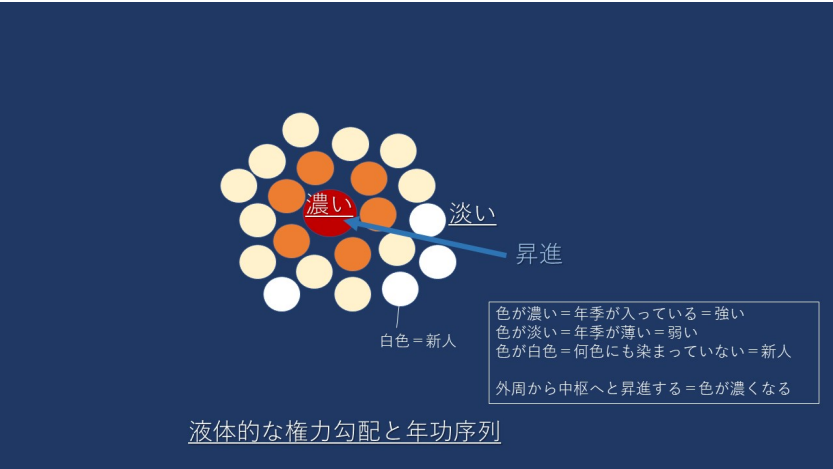
定住民かどうかを判定する基準は、テスト形式で以下のようにまとめられる。
１．「内部」「身内」という言葉を良く使うこと。→あなたは、定住民です。
２．先輩後輩同期という言葉を良く使うこと。→あなたは、定住民です。
３．外人という言葉を良く使うこと。→あなたは、定住民です。
４．先生という言葉を良く使うこと。→あなたは、定住民です。
５．発言する時、空気を読むこと。→あなたは、定住民です。
６．人物の成績を偏差値で評価するのが好きであること。→あなたは、定住民です。
７．無難、事なかれなのが好きであること。→あなたは、定住民です。
８．減点主義であること。→あなたは、定住民です。
９．失敗するのは本人の努力が足りないからと考えること。→あなたは、定住民です。
１０．失敗するのは本人の根気、精神力が足りないからと考えること。→あなたは、定住民です。
１１．身内の恥を外部に出さないこと。→あなたは、定住民です。
１２．人の目、噂を気にすること。→あなたは、定住民です。

１３．見栄っ張りであること。→あなたは、定住民です。
１４．上手く行っている他人が妬ましいこと。→あなたは、定住民です。
１５．陰口を叩くのが好きであること。→あなたは、定住民です。

後天的定住集団社会Ａの権力構造

後天的定住集団社会Ａの権力者は下図の赤い個体のように、集団の中央、中枢部に永年居座る形で存在している。

さらに中身を細かく見ると、以下のように、定住集団の所有者＞定住集団の経営者＞定住集団の正規雇用者＞＞（超えられない壁）＞＞定住集団の非正規雇用者の順に社会的上下関係が確立している。

定

住民と流民との関係は、以下のような図式で表せる。

どこかの定住集団に、周囲と同じ色に染まって所属し存続し続けているのが定住民、定住民であり、どこの定住集団にも正式に入れてもらえず漂流しているのが流民である。中世後天的定住集団社会Ａから存在している定住民と流民との社会的差別が現代後天的定住集団社会Ａでも存続し続けているのである。

液体的社会である後天的定住集団社会Ａの定住集団内部の権力勾配は以下の図のように表せる。

権力の強さを色の濃淡で表した場合、真ん中の支配者が一番濃くて、周囲に行くにつれて薄くなる＝権力が弱くなる。何も色の付いていないのが白紙の新人であり、後天的定住集団社会Ａの定住集団

は新規の人材はもっぱら白色の新人から求めようとする。最初白紙の新人で定住集団に入った定住民が周辺部から中枢部に行くには、年功序列で年季が入るに連れて中枢部に入って昇進していくようになっている。ただし、中枢部に行ける椅子の数は限られているので、その限られた椅子を巡る昇進のために周辺部の定住民たちの間で激しい競争、闘争が繰り広げられる。競争の敗者は定住集団内で飼い殺しか、集団外へと追い出される。

後天的定住集団的思考に囚われた後天的定住集団社会Ａのメンバー

彼らは、他国を後天的定住集団と勝手に見なす。彼らは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを後天的定住集団と勝手に見なす。彼らは、西側の一員、先進国の一員と称して、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの中に勝手に加入したつもりになる。彼らは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨからの定住集団からの追放や集団追放があると勝手に見なす。彼らは、定住集団からの追放や集団追放を恐れて、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの社会規範に必死に合わせようとする。彼らは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと異質な側面を隠ぺいしようとして、必死になる。彼らは、自由民主主義を必死になって主張する。それは、「不気味な」自由民主主義である。彼らの間では、移動生活者的な自由民主主義は、生活の中に全く根付いていないが、そのことを暴露することは、社会的に禁止されている。彼らは、勝手に独り相撲を取って、勝手に一人負けをして自滅する運命にある。
後天的定住集団社会Ａの国全体が、後天的定住集団として、絶えず一体化して動く。国民は、全員、それを強制される。国家の所有者による社会支配制度維持も、自由民主主義の強制一斉唱和も、その一環である。国民の誰かが、一体化を拒む。すると、彼は、国の中では、もう生きていけない。彼は、国外退去するか、自殺するか、周囲からいじめられて抹殺されるしかない。
後天的定住集団社会Ａでは、学校の学級などで、集団の心理的一体化が容易に起きる。英語などのの授業で、生徒たちが、間違えるのが恥ずかしくて答えない。周囲が心理的に一体化している中で、何か失敗すると、周囲全体の足を引っ張ることになって、周囲から非難されたり、周囲の嘲笑を受けるので、心理的負担が大きい。

後天的定住集団社会Ａにおける自己責任と無責任の両立

一斉同調行進の最中に、石につまずいて転んで隊列を乱して外れた者が、自己責任を問われる。
一斉同調行進を続けた者たちは、その行進結果がNGであっても責任を問われることは無い。
後天的定住集団社会Ａの自己責任と無責任の両立は、こうして生まれる。

後天的定住集団社会Ａの官学の根本的な誤り。

筆者は、後天的定住集団社会Ａの官学を批判する。

後天的定住集団社会Ａは、後天的定住集団の社会である。それは、昔も今も変わっていない。

後天的定住集団社会Ａは、以下の内容を、根拠無く、勝手に思い込んだ。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが、後天的定住集団社会Ａと同様の、後天的定住集団の社会であること。

後天的定住集団の社会としての先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ。
それは、後天的定住集団社会Ａが、自分勝手に想定した、想像上の産物である。
それは、実在しない。
後天的定住集団社会Ａは、その中に、仲間に入れてもらおうと思い込んだ。

後天的定住集団社会Ａは、G7への加入によって、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ定住集団の一員になれたと喜んだ。

その結果、後天的定住集団社会Ａは、周囲に向けて、自分たちは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国の一員だとして、自慢するようになった。

後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨから異質と思われないように、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと、一心同体化しようとした。
後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの文物の導入に、明け暮れた。

後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨからの集団追放を喰らわないように、必死になった。
後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに合わせて、自分たちの社会を、家父長制であるように見せようと、懸命になった。

後天的定住集団社会Ａは、以下の内容を明言する言説のみを採用した。
後天的定住集団社会Ａが家父長制化していることを明言する言説。

後天的定住集団社会Ａは、以下の言説を、徹底的に無視するようになった。
後天的定住集団社会Ａが、昔ながらの、母親が支配する社会であることを明言する言説。

後天的定住集団社会Ａは、以下の内容を明言する言説のみを採用した。
後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化を明言する言説。

後天的定住集団社会Ａは、以下の言説を、徹底的に無視するようになった。
後天的定住集団社会Ａが、昔ながらの、先天的定住集団社会ＢＣや定住生活中心社会Ｅや定住生活中心社会群Ｄと共通の社会であることを明言する言説。

後天的定住集団社会Ａは、以下の内容を明言する言説のみを採用した。
後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと比べての独自性は、後天的定住集団社会Ａ固有の独自性であると主張する

言説。

後天的定住集団社会Ａにおいては、以下の言説は、徹底的に回避されるようになった。
後天的定住集団社会Ａと、先天的定住集団社会ＢＣや定住生活中心社会Ｅや定住生活中心社会群Ｄとの共通性を指摘する言説。

これらの後天的定住集団社会Ａの動きを主導したのが、後天的定住集団社会Ａの官学だった。
それは、今なお、後天的定住集団社会Ａの主流である。

後天的定住集団社会Ａの官学の主張は、後天的定住集団社会Ａの実態に反している。
その主張は、見掛け倒しであり、誤りである。

（2021年8月初出）

後天的定住集団社会Ａが、究極の嘘つき社会になっている、根本的な原因。

後天的定住集団社会Ａ。
後天的定住集団の社会。
女性優位社会。
彼ら自身の社会規範。
それらの、男性優位社会の諸国への、一方的な適用。

女性優位社会が、男性優位社会の社会的規範や社会思想を、必死になって主張する理由。

それらは、以下の内容である。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ。
先進的な男性優位社会。

後天的定住集団社会Ａ。

先天的定住集団社会Ｂ。
定住生活中心社会Ｅ。
先天的定住集団社会Ｃ。
後進的な女性優位社会。

後天的定住集団社会Ａ。
彼らは、以下の内容を、強烈に指向する。

（１）
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入することの政策を、採用し続けること。
東アジアの国々の定住集団を自主的に脱退すること。
先進的男性優位社会の諸国の、架空の定住集団。
その定住民になること。
その集団に加入させてもらうこと。
加入後。
その集団の社会規範に、無条件で同調し、調和すること。
その集団の社会制度を、無条件で、即座に、盲目的に、導入し続けること。

先進的男性優位社会の諸国。
彼らの社会規範に、無条件で同調し、調和すること。

後天的定住集団社会Ａ。
彼ら自身が女性優位社会であるにも関わらず。

先進的男性優位社会の諸国の、架空の定住集団。
その集団への反逆者に対して、その定住集団の定住民の一員として、無条件に全面的に攻撃すること。
そうした反逆行為を、彼らが所属する定住集団に対する攻撃であると、見なすこと。
その集団への反逆者としての女性優位社会。
そうした社会が、彼ら自身と同様の、女性優位社会であること。
彼らは、それにも関わらず、男性優位社会の社会規範に従って、そうした社会を、無条件に全面的に批判すること。
例。
定住生活中心社会Ｅのウクライナ侵攻。それに対する一方的な批判を行うこと。

後天的定住集団社会Ａ。
彼ら自身の社会の内部が女性優位社会であること。
その内実を、対外的に、徹底的に隠ぺいすること。
男女の性差における、女性の優位性についての研究。
その実施を、彼ら自身の社会の内部で、徹底的に抑圧すること。

（２）
先進的移動生活中心社会群を、上位者として捉えること。

上位者としての先進的男性優位社会の諸国。
彼らに対して、無条件に、称賛や忖度を行い、追従すること。

戦後の軍事支配者としての先進的移動生活中心社会。
彼らは、先進的男性優位社会の国家である。
彼らに対して、下位者として、無条件に従うこと。

上位者としての先進的男性優位社会の諸国。
彼らの社会規範を、無批判に丸呑みすること。
彼らの社会制度を、専制主義的に受容し続けること。
彼らへの反逆者を、上位者に対する不敬であるとして、無条件に批判すること。
そうした反逆行為を、上位者に対する不敬であると、見なすこと。

彼らへの反逆者としての女性優位社会。
そうした社会が、後天的定住集団社会と同様の、女性優位社会であること。
後天的定住集団社会Ａ。
彼らは、それにも関わらず、男性優位社会の社会規範に従って、そうした社会を、無条件に全面的に批判すること。

例。
定住生活中心社会Ｅのウクライナ侵攻。それに対する一方的な批判を行うこと。

後天的定住集団社会Ａ。
彼ら自身の社会の内部が女性優位社会であること。
その内実を、対外的に、徹底的に隠ぺいすること。
男女の性差における、女性の優位性についての研究。
その実施を、彼ら自身の社会の内部で、徹底的に抑圧すること。

彼らの社会は、男女の性差の側面において、外面と内面が、正反対である。
彼らの社会は、そうした点において、究極の嘘つき社会である。

ケーススタディ。
G7に加入した、女性優位の、後天的定住集団の、社会。
後天的定住集団社会Ａ。

彼らは、以下の内容で、行動する。
後天的定住集団として、G7を捉えること。
G7の定住民として振る舞うこと。
G7内部における、調和や一体性の実現。
G7内部における、抜け駆けや単独行動の禁止。
G7内部における、行動面での同調性の、絶えざる確保。
G7内部における、上位者に対する、隷従や懐きや忖度。

G7の定住民であることを、対外的に、盛んに誇示すること。
G7のメンバーである我が国は、先進国である。

G7の定住民でない国を、一方的に見下すこと。
そうした国は、新興国であるか、発展途上国である。

G7に新たに加入しようとするライバル国に対する邪魔を、盛んに行うこと。
先天的定住集団社会ＢのG7加入を、妨害すること。

G7内部の上位国が、ある特定の国の制裁を行うと決議した場合。
それに対して、無条件に、同調すること。
定住生活中心社会Ｅへの制裁。

G7の主要国の価値観を、盲目的に丸呑みすること。
そのことについて、特に何も違和感を感じないこと。
例え、それらの内容が、彼ら自身の内包する価値観と真逆であっても、そうであること。
女性優位社会なのに、男性優位の価値観を、盛んに主張すること。

その理由。

G7の主要国は、男性優位社会である。
後天的定住集団社会Ａ。
彼らが、G7に留まるには、そうした男性優位社会の価値観への同調が、恒常的に必要である。
彼らは、彼ら自身の定住集団のルールを、G7に勝手に適用している。
彼らは、彼ら自身を、G7の定住民と考える。
彼らは、G7内部の調和を乱してはいけないと、考えている。
彼らは、G7の決めたことには、抜け駆け無しで、必ず同調しなければならないと、思っている。
彼らは、G7を除名されることを、とても恐れている。
彼らにとって、G7は先進国の定住集団である。
そこに所属することは、彼らにとって、世界における上級民の証である。
それは、彼らにとって、高いプライドの源泉である。
その結果。
G7の主要メンバーが、他の女性優位社会を制裁するという意思を持った場合。
彼らは、それに対して、無条件に同調する。
彼ら自身が、女性優位社会であるにも関わらず。

国際秩序や、国際法。それらは、彼らにとって、G7という定住集団のルールである。

（2022年3月初出。）

後天的定住集団の社会における、天皇制の、普遍的な出現。

天皇制は、後天的定住集団の社会では、必然的に、いつでもどこでも、出現する。
それは、後天的定住集団社会Ａのみに限定されない。

（2022年3月初出。）

後天的定住集団社会Ａの家族定住集団（家族）。姑による支配。

説明。後天的定住集団社会Ａの家族定住集団。

後天的定住集団社会Ａの家族定住集団は、後天的定住集団である。加入には、血縁関係は必要ではない。血縁関係の無い嫁や婿も、新参者として、古参メンバーに対して全面的に従順の態度を示せば、その家族定住集団に入れてもらえる。

ただし、嫁のような新規加入者は、その時点では、その家族定住集団において、最底辺者の扱いを受ける。

加入者としての嫁の地位は、加入年数が経過するにつれて、次第に上位に上がっていく。加入者としての嫁が、その家族定住集団内で安定した地位を得るには、実子の生成が必須である。そのことで、嫁は、一転して、支配者の立場に回ることができる。

また、嫁は、加入しても、周囲の家族メンバーとの一体化や同調行動、上位者の姑への忖度を絶えず上手く行わないと、家族メンバーから、いじめられて、離縁のような、集団追放を受ける。そのため、定住民の嫁にとって、日々の生活において、心休まる瞬間はほとんど無い。定住民の嫁にとっては、集団追放を受けないように、周囲への気遣いが絶えず必要で、日々がストレスと緊張の連続となる。後天的定住集団社会Ａの家族定住集団で、嫁が、夫との結婚に際して、姑との同居をとても嫌うのは、これが原因である。

夫のような男性は、古参の定住民扱いはしてもらえるものの、姑や嫁による、生活や経済における支配を受ける。妻から夫への小遣い制がその象徴である。男性は、子供の教育において、主導権は握れない。その主導権は、妻や母によって独占される。

後天的定住集団社会Ａの定住集団（あるいは後天的定住集団社会Ａ）と女性優位体質

はじめに

現代後天的定住集団社会Ａは、建前は先進的移動生活中心社会群Ｆ、先進的移動生活中心社会Ｇ流の自由民主主義社会になったことになっている。

しかし、実際は、隠れた社会規範＝「後天的定住集団社会Ａの掟」が存在する。この社会規範のことは公言しないことが後天的定住集団社会Ａのメンバーの間では暗黙の了解となっていて、それゆえ、この社会規範は、事実上「裏の掟」となっている。この本では、この定住集団社会の掟について説明する。

後天的定住集団社会Ａ「定住集団社会」の概要

後天的定住集団社会Ａ「定住集団社会」の「定住集団」の原義は「群がる」の「ムラ」である。「定住集団」とは群がって居住している人々の集団である。
「定住集団社会」は「定住集団社会」と記述されることもある。
「定住集団」は村落限定をイメージするが、後天的定住集団社会Ａの定住集団社会は中央省庁みたいな後天的定住集団社会Ａの都心中枢部とかにも広く分布するので「ムラ」という言葉を使うことでその後天的定住集団社会Ａの国家の内部におけるユニバーサルな性質を反映することができる。「企業定住集団」や「学校」も、メンバーの全人格を包括する共同体的な側面を持っており、その点、「定住集団」の一種と呼ぶことが可能である。
後天的定住集団社会Ａ「定住集団社会」は、世界（主に定住生活中心社会群ＡＢＣＥ、定住生活中心社会群Ｄ）に広く分布すること（稲作）農耕民社会の一種であるということ。後天的定住集団社会Ａとそっくりな社会は、例えば同じ稲作農耕民社会のベトナムにもインドネシアにもあり、後天的定住集団社会Ａだけに特殊な存在で

はない。同じ稲作農耕民の社会は共通性が多いと考えられる。（これに対して、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会は、遊牧、牧畜民社会である。）
後天的定住集団社会Ａ「定住集団社会」は、都市にも農村にも共通に存在する。後天的定住集団社会Ａ全体が定住集団の空気に覆われている。後天的定住集団社会Ａは地方の田舎だけに存在するみたいなことを言う人がいるが、そもそも後天的定住集団社会Ａの中心の東京霞が関の中央官庁が定住集団社会である。後天的定住集団社会Ａ＝国家定住集団であるということ。
後天的定住集団社会Ａ「定住集団社会」の成員は、大人だけでなく、子供も含む。子供も後天的定住集団社会Ａの定住民である。
後天的定住集団社会Ａ「定住集団社会」は、以下の通りである。
・国家定住集団　後天的定住集団社会Ａの国家の、国家の所有者一家を中心とする中央官庁単位での互助と行政組織と国民。
・地方定住集団　都道府県、市町村単位での互助と行政組織。
・企業定住集団　官公庁、企業定住集団の正規メンバー（定住民）と、家庭における専業マネージャー（専業主婦）のペア。
・学校定住集団　保育園、幼稚園、PTA、学区　子供、託児所、学校（小学校、中学校、高校、大学、大学院）を媒介とした行政末端組織。あるいは、学習塾やフリースクールのような自主互助組織。サブとして、学級定住集団、クラス定住集団、講座定住集団、部活定住集団、サークル定住集団のように、子供や学生の定住民が校内に作る定住集団を含む。また、学者定住集団のように学校の教員が作る定住集団を含む。
・地縁定住集団　村落、町内会、自治会。地域の互助と行政末端組織。
・血縁定住集団　血縁、親戚関係がある者同士の互助組織。門閥と閨閥の組織。
・組合定住集団　生活協同組合のような、地縁の枠を超えた自主互助組織。
・通信定住集団　通信、インターネットを媒介とした自主互助組織（電子掲示板、ソーシャル・ネットワーク・サービス、ネットゲームのコミュニティ等）
に分類することが出来る。

後天的定住集団社会Ａの定住集団は、後天的定住集団である。加入には、血縁関係は必要ではない。血縁関係の無い嫁や新住民も、新参者として、古参メンバーに対して全面的に従順の態度を示せば、その定住集団に入れてもらえる。ただし、新規加入者は、その時点では、その定住集団において、最底辺者の扱いを受ける。加入者の

地位は、加入年数が経過するにつれて、次第に上位に上がっていく。加入者が、その定住集団内で安定した地位を得るには、複数世代の積み重ねが必要である。また、加入しても、周囲メンバーとの一体化や同調行動、上位者への忖度を絶えず上手く行わないと、集団メンバーから、いじめられて、その定住集団からの追放のような、集団内孤立の強制や、集団追放を受ける。そのため、定住民にとって、日々の生活において、心休まる瞬間はほとんど無い。定住民の定住民にとっては、集団追放を受けないように気遣いが絶えず必要で、日々がストレスと緊張の連続となる。

「後天的定住集団社会Ａ＝女社会」論

後天的定住集団社会Ａの定住民は女性優位である。後天的定住集団社会Ａ、その定住集団社会は、女々しさにあふれている。社会が女の色に染まっている。（一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会は、後天的定住集団社会Ａに比べると男性優位であり、男社会である。）
これは、女性の、後天的定住集団社会Ａに占める勢力、影響力の大きさの現れである。男性の勢力を上回る女性優位の証拠であるということ。後天的定住集団社会Ａを支配するのは女性である。
後天的定住集団社会Ａに特有定住集団社会は、女流社会、女社会。女性優位社会。それは、そのように言うことができる。女性は、皆、生まれながらにして定住民であり、定住民である、ということも出来る。定住集団社会を作り出す力の源泉は女性である。
後天的定住集団社会Ａと女社会の相関、類似性は、後天的定住集団社会Ａに特有パーソナリティと女性優位パーソナリティが、双方共通して液体分子運動パターンに当てはまっていることに示されている。

液体分子運動パターンの基本（女性優位、母性的（稲作）農耕民的。後天的定住集団社会Ａに特有、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１、先天的定住集団社会Ｃ２的、定住生活中心社会群Ｄ的。定住生活中心社会Ｅ的。）

後天的定住集団社会Ａのメンバーや女性は、少人数の閉鎖的、排他的な、内部が同質、同色で同調する派閥集団を複数作って分布する。

液体分子運動パターンにおいて、一つ一つの個体を後天的定住集団社会Ａのメンバーとして捉えると、
・身内集団への所属重視
・集団同調行動を好み、浮くといじめられ追い出されるということ。
・身内に留まるため絶えず自分の向きを動かし必死で周囲に気配り、空気を読むということ。
・護送船団で個人責任回避
・身内のために滅私奉公
・閉鎖的、排他的
であるということ。
この液体分子運動パターン（リキッドタイプ）で、従来後天的定住集団社会Ａに特有とされてきた社会の特徴の大半を説明可能であるということ。

あるいは、液体分子運動パターンにおいて、一つ一つの個体を女性と見なすと、
・絶えず群れて派閥を作るということ。
・必死に周囲と癒着し甘え媚び同調一体化しようとするということ。
・自分の向きを絶えず動かし、周囲の空気を読むのに懸命
・周囲を絶えず相互監視し、足を引っ張り合う、妬む、陰口を言うということ。
・責任分散で個人責任回避

であるということ。
この液体分子運動パターン（リキッドタイプ）で、従来女性優位とされてきた社会の特徴の大半を説明可能であるということ。
この液体分子運動パターン（リキッドタイプ）で、後天的定住集団社会Ａに特有社会、女性優位社会を共通に説明可能であるということ。

女性（リキッド、液体的な行動原理で行動するジェンダー）が支配する後天的定住集団社会Ａの中で生活するのは、液体の中、言うなれば水中に潜って生活しているのと同じである。息が出来ない窒息感が著しい。
後天的定住集団社会Ａの人々がこうした行動を取る背景として、後天的定住集団社会Ａの人々が自分の保身に敏感であることがあげら

れる。
生物学的に貴重な性である女性の取りがちな行動は、根源的には、安全第一、危険回避、失敗が怖い、不安が強いという点に尽きる。
女性は、言わば、生ける宝石のような、貴重品として、護衛（の男性）に守られる形で、自分の保身を最優先にして行動するのであるということ。
女性の持つ「貴重な、守られる性」としての性格についての説明は、著者の他著作を参照されたい。
こうした、生物学的に貴重な性＝女性優位行動が、社会全体に及んでいるのが、後天的定住集団社会Ａの特徴である。
つまり後天的定住集団社会Ａのメンバーは、自分の保身に不安で敏感であり、安全第一、危険・失敗の回避を最優先にして行動する点、女性優位である。自らは危ない橋を渡らず、ベンチャーとか冒険を嫌がる。後天的定住集団社会Ａの銀行のベンチャー企業への貸し渋りがこの典型である。
上記定住集団社会原理リストの各内容が、貴重な性としての女性に支持されるのは、みんな一緒に、集団でいれば、孤立して、他者の助けが得られなくなる、という事態から逃れることができて安全だからである。集団、護送船団を作って相互牽制し合う方が、ひとりぼっちの孤立無援状態になりにくい。生物学的に貴重な性として、安全な群れの中心部にとどまる女性に向いているということ。
上記リストの各内容は、何らかの形で、女性の持つ、自分の身を守ろう、安全第一で、危険を回避しよう、誰かに保護してもらおう、不安を回避しようとする自己保身傾向に合致している。
以上で見てきたように、
後天的定住集団社会Ａは、女性に都合よくできている、女性優位価値観で動く社会であると言える。後天的定住集団社会Ａは、母親の力の強い母性、母権社会であり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは、父親の力の強い父性、父権社会である、と見ることもできる。

参考までに、後天的定住集団社会Ａとは対照的な父性、父権的な先進的移動生活中心社会群Ｆ、北米社会のパーソナリティと、男性優位パーソナリティは共通して気体分子運動パターンに当てはまっている。

気体分子運動パターン（男性優位、父性的。遊牧民～牧畜民的。先進的移動生活中心社会群Ｆ、北米、ユダヤ、アラブ、トルコ、モンゴル的。）

ここで、気体分子運動パターンでは、同質の個体同士は互いに固まらず、互いに連携を取りつつも伝道師のように広い空間を個人単位で自由に動き回る。

気体分子運動パターンの一つひとつの個体の動きを人々の心理的動きとして捉えると、
・個人主義、自由主義。プライバシーを確保できるということ。
・能動的。動きが高速。
・自立するしかないということ。一人であり、周囲に助けてくれる人がいない。自分のことは自分で守るということ。（守らないと生きていけないということ。）責任を取るということ。（責任を取らされるということ。）
・攻撃的。流れ弾がどんどん自分のところに飛んできて危険である。
・一人で未知の空間に進まねばならずリスキーであるということ。

といったようにまとめられ、先進的移動生活中心社会群Ｆ、北米社会の国民性に近いことが分かる。
後天的定住集団社会Ａと先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとで権力者の行動様式が違うのも、後天的定住集団社会Ａで主流を占める女性の権力行使パターン（上司としてのあり方）が、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで主流を占める男性のそれと違うからではないだろうか？
後天的定住集団社会Ａでは、以下の通りである。
権力の行使のあり方が、以下の通りである。
（１）集団主義的であるということ。
（２）人格そのものを重視するということ。（上位者に可愛がられることが重要。上位者への甘え・なつきを重視するということ。）
（３）（流行への）同調競争に勝ち得た者が、上位へと昇進する。
（４）前例を多く蓄えた年長者が威張る。
（５）上位者への権威主義的な服従を好むということ。
（６）一人の犯した失敗も周囲との連帯責任とする。
というように、ウェットであり、女性優位であるということ。

なぜ、後天的定住集団社会Ａが女性優位性格を持つに至ったか？それは、後天的定住集団社会Ａが典型的な稲作農耕社会であることと関係する。
稲作農耕社会を構築する過程で、集団による田植え・刈り取りなどの一斉行動、一カ所への定住・定着、農業水利面での周囲他者との

緊密な相互依存関係の樹立、集約的農業による高密度人口分布、といったウェット、液体分子的な行動様式が求められた。
ドライ・ウェット、気体分子的・液体分子的な行動様式についての説明は、著者の他著作を参照されたい。
ウェット、液体分子的な行動様式を生まれながらにして身につけているのは女性であり（男性が生得的に身につけているのは、個人主義、自由主義といったドライ、気体的な行動様式。）、社会のウェット化、液体化には、女性の力が強く求められた。
女性の強い影響下で社会のウェット化、液体化を推し進めた結果、その副作用として、自己保身や安全第一といった女性優位な行動様式が、男性にも強く感染して、男性の「女性化」を引き起こした。
のようにして、女性優位行動様式が後天的定住集団社会Ａ全体を包み込むような形で、支配的になり、「後天的定住集団社会Ａ＝女性優位性格を持つ社会」という構図が成立した。
後天的定住集団社会Ａ全体、ないし国全体を一人の人格として擬人化して捉えるならば、それは一人の女性、女の子として捉えることができると考えられる。
（１）彼らは、自ら明確な意思決定をせず、あいまいな態度を取り続け、決定をずるずる先送りする。
（２）彼らは、自分からは行動を起こさず、受動的、退嬰的である。
（３）彼らは、その時々の雰囲気に流されて、周囲のメジャーな流れに追従する。
（４）彼らは、ヒステリーを起こす。（太平洋戦争などで、思わずカーッとなって、残虐行為を繰り返すなど）
（５）彼らは、意思決定のあり方が情緒的で、非合理・非科学的、精神主義的である（根性論を振り回すなど）
（６）彼らは、身内だけで固まり、外国家族定住集団メンバーや難民などのヨソ者に対して門戸を閉ざす。（閉鎖的、排他的）
（７）彼らは、周囲の国々に自分がどう思われているか、やたらと気にする、八方美人的態度を取る。
（８）彼らは、先進国に追いつき追い越せというように、自らは先頭に立たず、二番手として絶えず先進諸国を後追いする。
（９）彼らは、先進的移動生活中心社会Ｇなどの外圧がかかって、初めて重い腰をあげる。（外圧がないと、動かない。）
（１０）彼らは、長期的視点を持たず、目先の短期的な動向に関心が行って、場当たり的な対応に終始する。
など、後天的定住集団社会Ａの国ないし社会全体が、ウェットな液体的な女性優位人格をもって行動していると言える。 後天的定住集団社会Ａの国家・社会は、「女社会」「女流社会」「女性優位社

会」「大和撫子社会」と呼べる。
こうした社会の液体的、ウェットな性質は、同じ稲作農耕民社会である、定住生活中心社会群ＡＢＣ（先天的定住集団社会Ｂ南部、先天的定住集団社会Ｃ１）、定住生活中心社会群Ｄにも共通して見られると考えられ、その基本的性質は、決して、後天的定住集団社会Ａ独特、後天的定住集団社会Ａ特殊のものでは無く、定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄの稲作農耕民社会ベルトに共通のものである。稲作農耕民社会は女社会であり、アジア的生産様式は、女性優位生産様式であると言える。
後天的定住集団社会Ａの掟は、ほぼ稲作農耕民社会の掟、女社会の掟である。
（これに対して、気体的でドライな牧畜民社会の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ各国は、男性優位社会、男社会として捉えることができると考えられる。先進的移動生活中心社会Ｇが後天的定住集団社会Ａに導入した後天的定住集団社会Ａの国家憲法とか、ほぼ男社会の掟である。）
後天的定住集団社会Ａでは男性も、女性の色に染まっている。後天的定住集団社会Ａの男性は、自分の保身に敏感であり、親分子分関係や浪花節といった、ベタベタ・ジメジメしたウェットな人間関係を好む、女性優位な中身を持っている。後天的定住集団社会Ａの男性の心理は、さらに、それに加えて、女性を守る役割を取らせるため、女性によって植えつけられた、表面上の専制君主的な「強さ」「強がり」とが、一緒に同居していると考えられる。
後天的定住集団社会Ａの男性は、筋力、武力のある女性モドキの存在、女性化し男性として劣化した存在として捉えられる。後天的定住集団社会Ａの男性は、家庭で家計管理の権限を女性に取られてしまい、母子のために下僕のように給料を稼ぐしか存在意義が無かったり、育児の主導権を女性に握られていたりして、父性を喪失した立場の弱い存在である。
（これに対して、牧畜民社会の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ各国の女性は、男性の色に染まった、男性化した存在、女性として劣化した存在として捉えることができると考えられる。）
後天的定住集団社会Ａの定住集団社会＝女社会であり、共に閉鎖的、排他的で、定住民や後天的定住集団社会Ａの女性は内部事情を必死で隠蔽しようとする。後天的定住集団社会Ａ、女社会の内情、掟を徹底的に明らかにして文書化することが後天的定住集団社会Ａの社会学では必要だ。後天的定住集団社会Ａの社会学者は先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』ばかりやっていないで、本気で取り組むべきである。

後天的定住集団社会Ａと女社会との関連の実態

以下、後天的定住集団社会Ａと女社会との関連の様々な実態について短文での説明をまとめてみたということ。

陰湿な後天的定住集団社会Ａを作り上げた張本人が後天的定住集団社会Ａの女性である。
後天的定住集団社会Ａが自分から変われない、外圧があって初めて変わるのは、社会の中枢を女が支配しているからである。
後天的定住集団社会Ａの解体には、後天的定住集団社会Ａの女性社会の弱体化が必要である。
何かと他人と自分を比較して、優越感に浸ったり、落ち込む、嫉妬することを延々と繰り返す人たちの集まりが後天的定住集団社会Ａ＝女社会。他人は他人、自分は自分と区別が付けられた方が気楽で自由なのに。
母子一体化、母子癒着こそが、後天的定住集団社会Ａの女性が後天的定住集団社会Ａを支配する大きな手段になっている。後天的定住集団社会Ａの女性は我が子を通じて社会を支配する。
後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』の文献、知見ばかり持ってくるのは、自分でオリジナリティの説明を出すと、周囲の定住民たちから出る杭を打たれ、足を引っ張られて邪魔されるので、それを予防するためだと考えられる。後天的定住集団社会Ａのメンバーが、やたらと先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの言説を取り入れて真似をしたがるのは、自分がいじめられないようにするための戦略なのだ。後天的定住集団社会Ａのメンバーのオリジナル言説だと「勝手に変な言説立てるなということ。独自研究するなということ。」と叩かれるが、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバーの言うことは後天的定住集団社会Ａのメンバーより格上だから叩かれない。
本来、後天的定住集団社会Ａのフェミニストは、後天的定住集団社会Ａで女権拡張するなら先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』をやっていては駄目で、「後天的定住集団社会Ａ伝統の定住集団社会＝女社会、母権社会を、先進的移動生活中心社会群Ｆ／北米の男社会、父権社会による支配から解放しよう！」とか運動しないといけないはずである。
後天的定住集団社会Ａが停滞しやすいのは、保身第一で事なかれ主義の後天的定住集団社会Ａの女性が社会を支配しているのが原因で

ある。後天的定住集団社会Ａの女性はリスクを取らない。
後天的定住集団社会Ａの女性による男性保育士叩きは、男性に保育の主導権を取られたくない後天的定住集団社会Ａの女性の本音を隠蔽するための工作だ。後天的定住集団社会Ａの女性は保育の主導権を握る既得権益者なのだ。
テレビもラジオも、他人と同じ内容を視聴して、同調コミュニケーションが出来るので、後天的定住集団社会Ａ、女社会向けである。
後天的定住集団社会Ａの夫婦同姓（嫁入り）と、後天的定住集団社会Ａの長時間残業労働、滅私奉公労働とは深い関係がある。農村の嫁が、新入りした血のつながりの無い家族定住集団での昼夜を問わない長時間労働を強いられるのと、後天的定住集団社会Ａの労働者による、新しく入った企業定住集団で長時間残業を強いられるのと、社会の根本原理は同じである。また、後天的定住集団社会Ａの中高生の長時間部活動は、将来の滅私奉公長時間残業生活に向けての練習であると見ることが出来る。
女社会は自分からは変われない。変わるには行動や判断が必要だが、それに伴って生じる責任を、自己保身のため誰も取りたがらないので、皆変化の行動を自分からは起こさない。女社会の一種の後天的定住集団社会Ａも、自分からは変われない。変わるには外圧が必要だ。
後天的定住集団社会Ａフェミニズム不要論が考えられる。後天的定住集団社会Ａは稲作農耕民社会で、農村とか、女性は、母や姑みたいにもともと強い。後天的定住集団社会Ａの都会の専業主婦も家族定住集団の財布と子供をがっちり掴んでいて強い。後天的定住集団社会Ａのフェミニストの本来目指す女権拡張は既に実現してしまっている。
後天的定住集団社会Ａは母子癒着、母子一体化を理想とする社会なので、夫婦離婚になるとほぼ子供の親権は後天的定住集団社会Ａの女性の方に行ってしまう。これも後天的定住集団社会Ａの女性の権力の強さの現れである。
専業主婦希望の後天的定住集団社会Ａの女性が後天的定住集団社会Ａの男性に課す経済的ハードルは高すぎである。それに対応する価値を後天的定住集団社会Ａの女性が本当に持っているのか怪しい。
専業主婦と結婚したい後天的定住集団社会Ａの男性も、何か自分の母親を理想化しているようで、母子癒着で、母という後天的定住集団社会Ａの女性に負けている。後天的定住集団社会Ａの男性は母への甘え、依存意識があるから、それを断てない限り後天的定住集団社会Ａの男性は女社会の後天的定住集団社会Ａの中で弱者のままだろう。
陰湿で自由のない、社会の遅れの原因となっている後天的定住集団

社会Ａの解体が必要だ。そのためには、後天的定住集団社会Ａの定住集団社会化の原動力となっている後天的定住集団社会Ａの女性たちの女社会を弱体化させる必要がある。
後天的定住集団社会Ａの社会学で言われてきたいわゆる封建思想は、女流の姑思想であると考えると整合性を取りやすい。上位者、上位者、姑には絶対服従で批判は一切許されない一方で、下位者はさげすみ、いじめの格好の対象となるとか、自分たちの苦労を若者、嫁にもさせないと気が済まないとか、下位者、嫁が休むこと、楽することは悪であると考えるとか、姑の考え方に合致している。
後天的定住集団社会Ａと先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとでフェミニズムのあり方は根本的に異なる。
・家庭で夫から小遣い制を押し付けられていた立場の弱い女性たちが経済的自由を求めて、職場進出の運動をしたのが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムである。
・家庭で夫に小遣いを渡していた立場の強い専業主婦が、性別分業のため収入を夫に頼る経済リスク低減のために職場進出の運動をしたのが後天的定住集団社会Ａのフェミニズムである。
戦前後天的定住集団社会Ａで選挙投票権があったのは後天的定住集団社会Ａの男性だけという時代があって後天的定住集団社会Ａフェミニストに非難されているが、伝統的母子癒着の後天的定住集団社会Ａの男性は母＝姑の子分でお遣い役でしかなかった訳で、選挙に行くのも権力者の母＝姑の代行に過ぎなかった。この件のフェミニストによる男非難は、後天的定住集団社会Ａの女性＝母、姑の権力保持隠蔽である。
厳しい同調圧力の発生、空気を読むことの強制、団体行動の強制、事なかれ主義と責任回避等によって後天的定住集団社会Ａ中を定住集団社会化して苦しめているのが後天的定住集団社会Ａの女性である。
後天的定住集団社会Ａのメンバーが強きを助け、弱きを挫くのは、後天的定住集団社会Ａが女社会だからである。女は強きになびき、弱きを嘲笑して助けない。
後天的定住集団社会Ａの建前と本音は以下のように分けられる。
・後天的定住集団社会Ａの建前＝疑似牧畜民＝疑似先進的移動生活中心社会群Ｆ北米＝疑似男社会
・後天的定住集団社会Ａの本音＝農耕民＝先天的定住集団社会ＢＣと同類＝女社会
後天的定住集団社会Ａの空気読み強制、同調圧力、一体行動・団体行動の強制、出た杭を打つ等は、全て女社会由来。後天的定住集団社会Ａが女社会であることの証拠。女社会は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ自由主義、個人主義とは明らかに異質であり、先進的

移動生活中心社会群ＦＧＨ男社会の敵である。
女社会の特質を解明すると、内部告発扱いになるということ。道理で皆やらない訳であるということ。解明すると、フェミニストが主張する男女に性差が無いなんてウソであることがバレてしまう。後天的定住集団社会Ａを奥から支配しているのが女であることがバレてしまう。女にとって都合が悪い。同様に、後天的定住集団社会Ａの特質を解明すると、内部告発扱いになるということ。道理で皆やらない訳であるということ。後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと離れた先天的定住集団社会ＢＣに近い存在であることがバレてしまう。後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって都合が悪い。
毎日長時間残業して、有給休暇を殆ど取らない後天的定住集団社会Ａの官公庁や企業の企業定住集団のメンバーは、立場が農村の嫁そっくりである。農村の嫁は、家族で一番早起き、遅く就寝すること、毎日休まず身内の家族のために、姑に怒鳴られながら明日の見えない下働きをひたすら長時間続けることが特徴だから。経営者や企業定住集団のメンバーの上司が姑相当で、同僚が小姑相当である。
後天的定住集団社会Ａの女性は、結婚すると、自分は働かずに寄生して金をたかるだけでなく、家族定住集団の財布の紐を奪取して、男への小遣い制を確立させるから厄介だ。後天的定住集団社会Ａの女性は家族定住集団計管理者として家族定住集団の金を使い放題。後天的定住集団社会Ａの男性は少ない小遣いで我慢。
後天的定住集団社会Ａの女性が専業主婦になりたがるのは、その方が、キャリア女になるよりも、社会的な待遇が圧倒的に良いからだ。
後天的定住集団社会Ａが嫌いな人は、後天的定住集団社会Ａの女性に近づかない方が良い。なぜなら彼女らが後天的定住集団社会Ａの総本山なのだから。
後天的定住集団社会Ａの男性も後天的定住集団社会Ａの女性も先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』なので、女性差別反対運動も、男性差別反対運動も、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ発の社会理論をお経のように唱えながらやることになる。
夫婦共働きで両方とも滅私奉公だと、子育てに必要な時間的余裕が出来ず、夫婦の意思疎通も上手く行かず、少子化と離婚率の増加につながる。滅私奉公は無くす必要があるが、後天的定住集団社会Ａのメンバーには、男女とも仕事が全て、キャリア構築が全ての企業定住集団に包含された人が多いので、上手く行かない。
姑は怖くていたぶれないので、姑の子分の夫＝後天的定住集団社会Ａの男性を代わりにいたぶる嫁＝後天的定住集団社会Ａの女性。後

天的定住集団社会Ａフェミニズムは嫁のフェミニズム。姑は決して出て来ない。
後天的定住集団社会Ａで、母との強力な一体感、癒着感持続で育てられた子供が、学校に入って、周囲生徒との一体感をずっと維持するために、学校部活を長時間活動する。更に企業定住集団や官庁に入ると、周囲の企業定住集団のメンバーとの一体感維持のために、企業定住集団の家畜のような人になって長時間残業するようにということ。これらは母子関係が原型、理想型になっている。
後天的定住集団社会Ａの女性が黒と言うと黒になり、白と言うと白になるのが後天的定住集団社会Ａである。
母、姑として後天的定住集団社会Ａを隅々まで支配する後天的定住集団社会Ａの女性は許せないが、見かけの男尊女卑の優遇の上にあぐらをかいて亭主関白とか言ってふんぞり返るバカマッチョ後天的定住集団社会Ａの男性も許せない。特にフェミニスト媚びの後天的定住集団社会Ａの男性は最低である。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは他人に対して姑根性で接する。とても厳しくてうるさいということ。しかも絶えず監視するということ。
後天的定住集団社会Ａの男性は、後天的定住集団社会Ａの女性に対して、以下の相反する２側面の態度を持っている。
・お母さんのように甘えたいということ。依存したいということ。支配されたいということ。
・お嫁さんのように家風継承面での先輩として支配したいということ。（お嫁さんは新入り。）
今の後天的定住集団社会Ａでは、性別分業制を肯定するＣＭを流すと、後天的定住集団社会Ａの女性（とスーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ）の圧力で炎上し、男女両方外働きで男性の家事、育児を肯定するＣＭを流すと歓迎されるようだということ。
でも、後天的定住集団社会Ａの男性の家計管理権限掌握を肯定するＣＭ、後天的定住集団社会Ａの男性が家計簿を付けるＣＭは、なぜか流れない。後天的定住集団社会Ａの女性によほど都合悪いからだろうということ。父子関係の母子関係への優越を肯定するＣＭ、後天的定住集団社会Ａの男性が家計簿を付けるＣＭが後天的定住集団社会Ａで作られ、受け入れられたら、後天的定住集団社会Ａの女尊男卑は根本的に解決されるだろう。
後天的定住集団社会Ａの男性による家事、育児の分担も、実際の管理監督の権限を握っているのは後天的定住集団社会Ａの女性の方で、後天的定住集団社会Ａの男性は実質下っ端のこき使われる労働者役しか担えないのだと思う。母子癒着と家計管理権限掌握こそが後天的定住集団社会Ａの女性による後天的定住集団社会Ａ支配の原

動力だから、後天的定住集団社会Ａの女性は権益を手放そうとはしないだろう。
女も男も自分らしく生きることが難しい社会、後天的定住集団社会Ａ。常に自分を周囲に合わせて変えていかないと生きていけないということ。国際女性デーは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨスタンダードだ。
後天的定住集団社会Ａの女性は、本当は姑を批判したいんだけど、女同士なので出来ない。それで旦那を批判するということ。旦那を家事、育児をしない人に育てたのは誰なんだろうか？姑に決まっている。
後天的定住集団社会Ａの女性が伝統的な後天的定住集団社会Ａの家族制度や母親像を批判するのは、姑との同居がたまらなく嫌だから。専業主婦になると、姑との一日中同居の危険性が高まるので、キャリア女になろうとする。
後天的定住集団社会Ａの父は母子の奴隷。大黒柱と威張っているけど、小遣い制に甘んじ、自宅に自分の居場所も無い。母子の間に割って入る力もなく無視されている。後天的定住集団社会Ａに家父長制を導入すべきということ。後天的定住集団社会Ａの女性が握っている家計管理の権限も、子育ての権限も親権も後天的定住集団社会Ａの男性に渡すべき。後天的定住集団社会Ａの男性の地位向上には、先進的移動生活中心社会群Ｆ、北米の家父長制導入が不可避。
後天的定住集団社会Ａで子育てを後天的定住集団社会Ａの女性が独占する現状だと、子供は母親に懐いてしまい、父親が除け者になってしまう。これが後天的定住集団社会Ａが女社会になる根本原因。父の立場を強めるには、子育てを後天的定住集団社会Ａの男性も担う必要がある。
今の父の給料の上に乗って母子が安泰に暮らす後天的定住集団社会Ａの性別分業制（母子上位、父下位）は、父母が離婚すると、放り出された母子が一挙に生活に困ってしまうので、母が子供の世話をしながら十分稼げるようにするとか、変革が求められている。
後天的定住集団社会Ａの男性は家事、育児に興味がない、良く知らない。お母さんが全部やってくれた時代の申し子だから。後天的定住集団社会Ａの男性に家事、育児ノウハウを後天的定住集団社会Ａの女性並に学習させる機会が必要。
後天的定住集団社会Ａの男性がお母さんに甘えるのと、家父長制とは両立しない。
後天的定住集団社会Ａの男性みたいな農耕民男は全てマザコン。先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１、定住生活中心社会群Ｄ、全部そうだろうということ。母親の子分、母親の奴隷だということ。

後天的定住集団社会Ａの定住民になっている男性、定住集団に適応している男性は、あまねく父性を喪失して女性化し、男性として劣化している。逆に言えば男性が後天的定住集団社会Ａの定住民になるには、母子癒着育児による父性、男性性の除去が不可欠。女性の力が必要である。
女に利益があることと、男性に利益があることの両方を客観的に俯瞰するのが性差社会学のあり方。後天的定住集団社会Ａの女性学も男性学も、この姿勢が出来ていない。後天的定住集団社会Ａは、所詮は女社会なので客観性が欠如しているためだ。
子育てを担うことこそが、後天的定住集団社会Ａの女性が社会を支配する最も効果的な手段。後天的定住集団社会Ａの男性も後天的定住集団社会Ａの女性も母の子分。母子癒着、母子一体感の強い状態で育つと、皆、定住民になるということ。
かつて、後天的定住集団社会Ａのテレビの「冬彦さん」ドラマでマザコンと姑を否定する風潮が作られ、嫁の勝利と思っていたら、今度は、嫁の実母を否定するドラマが流れている。後天的定住集団社会Ａの女性は、自分より上位者の女に耐性がない、というか後天的定住集団社会Ａの女性同士の権力闘争がそれだけ地獄だということだろう。
後天的定住集団社会Ａ＝男装の麗人であるということ。本来女流の国なのに、家父長制の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの仲間に入れてもらおうと一生懸命になって男性国家の振りをしているということ。
後天的定住集団社会Ａの女性は、自分の周囲の人間関係にうるさく、相互監視が大好きで、個人のプライバシーに興味津々である。また嫉妬心が満載で、誰かが自分よりも良い思いをしていることを知ると、足を引っ張ったり、陰口や密告で潰そうとする。後天的定住集団社会Ａで成立する予定の共謀罪と後天的定住集団社会Ａの女性とは、とても相性が良い。
後天的定住集団社会Ａの学校では、中学校辺りから急速に集団に合わせて一体行動することを学習する度合いが強くなる。こうした所属集団に自分を一体化させる行動は、女性がより良く好む行動様式であり、その点、後天的定住集団社会Ａの学校は中学校辺りから顕著に女社会化すると言える。その原因としては、この中学の年齢は、ちょうど生徒たちが第二次性徴期に入る頃であり、性差が大きく出て来る時期である。すなわち、男社会、女社会の特徴が大きく出て来る時期であり、後天的定住集団社会Ａは女子の方が勢力が強いので、この頃から急に学級が女性の性徴の発現に合わせて女社会化すると言える。中学校辺りから生徒間の先輩後輩制がきつくなるのも同様で、女社会化の表れである。

後天的定住集団社会Ａの滅私奉公社会では、夫婦のどちらかが、職場ムラで100％余力を残さず働き、もう一方がその生活の全面サポート、管理に回ることを余儀なくされ、性別役割分業が必然的なものとなる。専業主婦か専業主夫のどちらかの存在が必須。この構造を壊すには後天的定住集団社会Ａの滅私奉公指向を消滅させるしかない。
後天的定住集団社会Ａの伝統的な慣行である滅私奉公こそが、後天的定住集団社会Ａのジェンダーギャップ指数を押し下げている根本要因。（男女不平等になるということ。）後天的定住集団社会Ａのジェンダーギャップ指数を上げるということ。（男女平等にするということ。）そのためには、滅私奉公の社会慣行をなくすことが必須。
女流の気配り指向が後天的定住集団社会Ａを生きにくくしている。職場とかで一人だけ先に帰るのは抜け駆けでありダメだとか、残った人の仕事を手伝わないとダメだとか、典型である。
後天的定住集団社会Ａの男性差別反対の男性運動家族定住集団は、自分たちが社会的強者の側に立っていると信じている限りは、運動に失敗するだろう。自分の置かれている立場を再検討すべきだということ。
いくら後天的定住集団社会Ａの男性の社会的地位が高くても、しょせん後天的定住集団社会Ａの男性は、母の独占支配物。後天的定住集団社会Ａでは子育てを母が独占しており、母子の関係は親分子分で、母が息子を支配する。母の方が息子よりも社会的地位が高い。後天的定住集団社会Ａの男性の社会的地位＜後天的定住集団社会Ａ母の社会的地位。
後天的定住集団社会Ａで、子育てを女性に託す慣行が、後天的定住集団社会Ａの女性が我が子を通じて社会で大きな勢力、権力を振るう原因になっている。
稲作農耕は、女性、母親の強い社会を生み出し、マザコン男性女性を量産する。
女流の後天的定住集団社会Ａには、全体主義的民主主義の開発が必要。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団が、男性が主要な地位を占めているにも関わらず、同調圧力や一体感、和合の重視と、女流の雰囲気をかもし出すのは、高地位高収入の男性たちも含めて、男性たちをずっと育てて生きた彼らの母親が、男性たちを精神的に支配しているからだろう。男性たちの母親の空気が、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団を覆う。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団で、女性が管理職昇進をためらう、避けるのは、もし自分だけ昇進すると、今まで同僚で同じ地

位だった職場の他の女性たちから「出る杭」扱いされて疎外される
のをとても恐れるかららしい。対策としては、女性たちがみんな仲
良く一斉に昇進するようにするのが正解だろう。これは同期が横並
びで出世する後天的定住集団社会Ａの高級官僚の昇進と図式が一
緒。
女社会って、先天的定住集団社会Ｃ２と似ているのでは？
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニストは、何でも自分の社
会の基準（女性が社会的に劣る。）で理論を考えて、それを後天的
定住集団社会Ａのフェミニストに強引に押し付けるということ。そ
のため、本来、姑、母が強く、女権拡張では先を行っているはずの
後天的定住集団社会Ａのフェミニストが、先進的移動生活中心社会
群ＦＧＨフェミニストの作った理論をひたすら真似る事態になって
いる。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを席巻するポリティカル・コレク
トネスでは、男女性差を明らかにする研究は、性差別扱いされて総
攻撃されるようだが、父性と母性の差を明らかにする研究はどうな
のだろうか？
後天的定住集団社会Ａのフェミニストは、女権拡張を目指したいの
ではなく、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』になって上
から目線で後天的定住集団社会Ａの庶民を啓蒙して良い格好がした
いだけ。女権拡張の先進国＝女が強い国ならベトナムとか、稲作農
耕民社会～国家にいくらでもありそうなのに、それらの存在は完全
無視。
後天的定住集団社会Ａの宮内庁が国家の所有者陵の発掘を許可しよ
うとしないのと、後天的定住集団社会Ａのフェミストが女社会の解
明をしようとしないのは、共通している。自分たちに不利な結果が
出るからだ。
後天的定住集団社会Ａでは戦後、女性と靴下が強くなった（女性は
戦前は弱かった。）と言われるが、母と姑は戦前から強かったので
は。戦後強くなったのは嫁。
後天的定住集団社会Ａの人は、学校で教えられた「後天的定住集団
社会Ａ＝男社会」説を素朴に信じている人が多い。あと、「社会的
地位＝職場での地位」と信じているということ。
後天的定住集団社会Ａの核家族化は、姑と同居したくない嫁の手に
よって進められた側面が大きい。
後天的定住集団社会Ａ夫が滅私奉公で残業しまくりになるのは、専
業主婦の妻の自由時間と趣味に費やすお金を確保するため。
母子癒着育児の結果としての後天的定住集団社会Ａの男性の父性喪
失を問題視する人がいないのは問題だ。
後天的定住集団社会Ａの男性は、社会的地位が高いとされる高級官

僚も大企業の企業定住集団の代表も、皆、後天的定住集団社会Ａ母の操り人形、小間使い、奴隷である。強力な母子癒着がそうなる原因である。かつ、後天的定住集団社会Ａ母は、後天的定住集団社会Ａの女性の部分集合。ということは、後天的定住集団社会Ａの男性は、社会的地位が高くても後天的定住集団社会Ａの女性の支配下にあるということである。これは、後天的定住集団社会Ａの子持ちの夫婦の離婚で、親権が専ら後天的定住集団社会Ａ母に行くこととも関連しているだろう。後天的定住集団社会Ａ母は後天的定住集団社会Ａの隠れた権力者なのだ。
後天的定住集団社会Ａの男性は後天的定住集団社会Ａの女性から小遣いをもらう立場ではなく、後天的定住集団社会Ａの女性に小遣いを渡す立場を確立すべき。そうでないと、後天的定住集団社会Ａの女性の使い走りの犬の地位から、いつまで経っても脱却出来ない。
恋愛で、後天的定住集団社会Ａの男性が考えたり提供したデートコースや食事を厳しく査定して評価する後天的定住集団社会Ａの女性は、「恋愛管理職」だ。後天的定住集団社会Ａの女性のやっていることは、企業定住集団で部下の成果を査定する管理職の上司と変わらない。デート中一生懸命サービスする後天的定住集団社会Ａの男性を上から目線で一方的に評価するのが後天的定住集団社会Ａの女性だ。
後天的定住集団社会Ａの男性が後天的定住集団社会Ａの女性に家庭の財布の紐を渡してしまうのは、後天的定住集団社会Ａの男性が後天的定住集団社会Ａの女性に無意識のうちに心理的に依存している証拠。後天的定住集団社会Ａの男性は、後天的定住集団社会Ａの女性に自分を管理して欲しいと思っているんだ。女尊男卑の典型だと思うが、後天的定住集団社会Ａの男性も後天的定住集団社会Ａの女性もめったに話題にしない。現状を変える気持ちが無いということだ。問題だと思うということ。
後天的定住集団社会Ａの男性に投げかけられる「ワンコイン亭主」という言葉とか、女性に使われると「ワンコイン奥さん」になると思うんだけど、後天的定住集団社会Ａの家庭の７割が妻が家計管理権限を握っている状態だと、「ワンコイン奥さん」はほとんどいないのだろう。「ワンコイン亭主」は後天的定住集団社会Ａの男性に対する蔑称であり、男性差別だ。
女性が弱い牧畜民のフェミニズムと、女性が強い農耕民のフェミニズムとは、あり方が根本的に違うと思う。
後天的定住集団社会Ａのメンバーが肯定する価値観である、「僕稼ぐ人、私使う人」は男性の道具視につながっており、男性差別である。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団への女性管理職登用の増加に

伴い、キャリア局（つぼね）の問題が顕在化するだろう。キャリア局は、今までの企業定住集団の普通メンバー局に比べて公式に使える権力が格段に増えているから、周囲の誰も彼女の専横を止められなくなる確率が高くなっている。
女流の後天的定住集団社会Ａは、女性による男性支配の世界的象徴である。
フェミニズムの発展のためには、後天的定住集団社会Ａのようなマザコン社会の世界的拡張が必要である。後天的定住集団社会Ａの伝統的な定住集団社会は、母や姑が支配する社会である。子供たちは、息子も娘も、母に対する依存心や甘えの意識を強く持っており、その点、後天的定住集団社会Ａはマザコン社会と呼べる。このマザコン社会を全世界に向けて拡張していくことを、世界のフェミニズムは目指すべきである。後天的定住集団社会Ａ～定住生活中心社会群ＡＢＣのフェミニズトはその旗振り役をすべきである。
後天的定住集団社会Ａにおけるプライバシー欠如の原因と母子関係とは大きな相関がある。後天的定住集団社会Ａにおけるプライバシーの欠如は、後天的定住集団社会Ａの家庭における母子間のプライバシーの欠如が原型である。後天的定住集団社会Ａの人間関係の原点が母子関係にあることの証拠であり、母が社会的に強いことの証拠である。
後天的定住集団社会Ａのブラック労働の原型としての嫁の仕事に注目すべきであるということ。後天的定住集団社会Ａのメンバーの過労（長時間労働が当たり前で、全人格を仕事に捧げる。）の原型は嫁の過労である。上司、先輩が姑で部下、後輩が嫁である。姑配下の嫁の仕事は本質的にブラックである。女流の上下関係に基づく仕事はブラックになりやすい。これらは無くす必要がある。
後天的定住集団社会Ａの遅滞、癒着の原因は女性にある。遅滞は、自己保身のため新しいことを一番手でやろうとしない女性の性質がもたらしている。癒着は、相互一体化、まとわりつき、グループ化が好きな女性の性質がもたらしている。
女流の気配り指向が後天的定住集団社会Ａを生きにくくしている。一人だけ先に帰るのは抜け駆けでダメ。残った人の仕事を手伝わないとダメ。これが後天的定住集団社会Ａに長時間残業をもたらしている。
後天的定住集団社会Ａフェミニズムは先進的移動生活中心社会群Ｆ北米的家父長制の真似事、お勉強会である。表面的コピーペーストは上手くやっているが、しょせんは真似事なので後天的定住集団社会Ａの本質的部分は変えることができない。どうしても地の後天的定住集団社会Ａ＝母権社会が出てきてしまう。
後天的定住集団社会Ａでは、他者に対する謙譲、謙遜の態度を取る

ことで、周囲の他者による女流の嫉妬システムの駆動を回避させることができる。

後天的定住集団社会Ａの理想型としての母子関係

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、生まれた時から急速に定住民になって行く。
子供は、まず、母親に強力な一体感をもって癒着され続け、排他的な母子連合体を形成する。他者との一体感の維持を母子関係で習得するということ。そして、小さな子供の時分から周囲とお揃いの制服とかを着て、周囲との一体行動を学習するということ。後天的定住集団社会Ａの子供は、幼少であっても既に定住民である。
更に、中学校や高校の長時間部活とかで、自分の所属する集団（学校）に完全に一体化して全ての時間を捧げて活動することを最優先とする考え方を身に付けるということ。これが、学校を卒業して官公庁や企業定住集団で滅私奉公の長時間労働を当たり前とする考え方につながっていく。
後天的定住集団社会Ａの定住民の対人関係の基本、理想型は母子関係にあるのである。後天的定住集団社会Ａの定住民は母子癒着育児が生み出している。後天的定住集団社会Ａの定住民を生み出す主役は母親であり、女性である。後天的定住集団社会Ａの主役、真の支配者は女性である。一生子供と母子癒着して成人後の子供（特に息子）に対しても強力な影響力、支配力を行使し続けることが後天的定住集団社会Ａの女性による社会支配のやり方の基本である。
一方、男性は、この母子癒着育児の過程で父性を失い女性化して一生子供扱いの弱い立場にランクダウンしてしまう。男性は、生得的には個人主義、自由主義の人間であり、相互一体感と統制、相互監視を重視する稲作農耕民社会の後天的定住集団社会Ａでは環境適応的に不適格な、人権の無い、定住民としては劣った存在なのである。
かつては、男尊女卑が後天的定住集団社会Ａの男性の人権の弱さを補償し、後天的定住集団社会Ａの男性は姑の傘の下で威張っていたが、嫁による姑の家庭からの非同居化による排除と、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨからのレディーファーストの導入で男尊女卑は否定され、子供の親権も嫁に行ってしまい、母子にとって便利なATM扱いされ、社会的弱者の地位に落ちてしまっている。

なお、母子癒着状態で育てられた子供は、母親との強い一体感により、母親の言うことを汲んで行動するようになり、その存在が母の操り人形、母のおもちゃ、母の競走馬状態に置かれる。要するに、子供は母による社会的自己実現の道具であり、競走馬として動くことを要求されるようになる。子供がビジネスでのライバル同僚との競争で早く走って成果を出して、役職上、経済力上の昇進を図るとそれがそのまま母親の社会的地位の向上となり、母親は、そのために子供の尻を叩いて昇進競争に向かわせるのである。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団で威張っている後天的定住集団社会Ａの男性の管理職や先輩面の企業定住集団のメンバーは、実際のところは、自分のお母さんが騎手役になって搭乗して、ひたすら出世に向かって鞭打たれて走る競走馬だ。つまり、お母さんの奴隷だということ。だからこそ企業定住集団の雰囲気が、男性ばかり多いのに、集団行動重視、和合重視、年功序列、事なかれ主義で女性優位になる。
要するに、後天的定住集団社会Ａでは、子供は母親の社会的昇進のための道具、ツールなのである。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団で働く男性は、多かれ少なかれ自分の母親の競走馬の立場に甘んじている。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は今まで男性が多く配置され、男社会とされて、フェミニストによる男女差別反対運動の批判にさらされてきたが、実は、男性たちの母親による自分たち母親の社会的地位向上のための激しい競争の場、代理戦争の場となっているのである。企業定住集団の主人公は実は男性たちの母親である。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の慣行が、男性が大多数を占めているにも関わらず、集団行動の重視、年功序列、相互監視とプライバシーの欠如といったような女社会みたいなものになっていて、男性にとって実際には不利になっている。後天的定住集団社会Ａの男性は母親との母子癒着育児によって父性を失い、母親によるメンタルの支配のもとで、知らず知らずのうちに女性優位行動や女性優位慣行を強要されているのであり、ある意味、男性差別の象徴である。だが、育児での母子癒着の快感が忘れられないため、母の側に付く後天的定住集団社会Ａの男性は、その事実を無意識のうちに無視し、母親の小遣い役として、子供的な存在のまま、女性優位な後天的定住集団社会Ａ企業定住集団慣行に慣れて行き、母性による支配を受け入れる存在となるのである。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団で威張っている後天的定住集団社会Ａの男性の管理職や先輩面の企業定住集団のメンバーは、実際のところ、ほぼ自分のお母さん（、あるいは奥さん）が騎手役の、ひたすら出世に向かって鞭打たれて走る競走馬だ。つまり、お

母さん（奥さん）の奴隷だということ。だからこそ企業定住集団の雰囲気が集団行動重視、和合重視、年功序列、事なかれ主義で女性優位になる。後天的定住集団社会Ａの男性社会は、実質的に女社会なのだ。
男性の専業主婦の妻も、男性の母と同じように、男性の社会的昇進を媒介として自分の地位を上げていくのであり、男性の長時間残業を、自分が管理する家計収入の額を増やす面でも、男性の昇進を媒介として自分の社会的地位を向上させるためにも大いに奨励しているのである。後天的定住集団社会Ａの男性の妻は、後天的定住集団社会Ａの男性の母に代わって、騎手として後天的定住集団社会Ａの男性の上に搭乗し、競走馬の後天的定住集団社会Ａの男性の尻を鞭で叩いて出世競争させるのである。後天的定住集団社会Ａの男性の企業定住集団での長時間労働の原因のかなりは、後天的定住集団社会Ａの男性の母と妻にあると言っても良いのである。後天的定住集団社会Ａの男性は、無意識のうちに妻に対して心理的に母親代わりに依存しているので、母や妻の、息子や夫の長時間労働への要望をひたすら聞くようになってしまい、滅私奉公のブラック労働をするしかなくなってしまうのである。
後天的定住集団社会Ａの子供は、息子も娘も一生、母の所有物、奴隷だ。後天的定住集団社会Ａの子供は母の支配から抜け出ることが出来ない。後天的定住集団社会Ａの定住民は、男性も女性も一生母親の支配下に置かれ、その支配従属関係が世代を超えて連鎖している。
男は仕事で女は子育てと思っている時点で、後天的定住集団社会Ａの男性は後天的定住集団社会Ａの女性に負けている。親権を後天的定住集団社会Ａの女性に取られ、子供は後天的定住集団社会Ａの女性の操り人形になる。
男性に有利な社会的性差もあれば、女性に有利な社会的性差も沢山あるはず。特に稲作農耕社会の後天的定住集団社会Ａでは、女性に有利な社会的性差がたくさんあるのではないか。場の空気を読んで同調、迎合するのが得意なのは女性だとか。東京一極集中社会で高密度分布が得意なのは女性だとか。
男尊女卑とレディーファーストは共通している。男尊女卑社会では女性が社会の実権を握り、レディーファースト社会では男性が社会の実権を握っている。家計管理や子育て主導権を握る者こそが社会の真の実力者だ。社会的に優先されている者が社会で実権を握っているとは限らない。
戦前後天的定住集団社会Ａの男尊女卑社会を先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ並みの家父長制社会だと信じている後天的定住集団社会Ａの男性差別反対者は考えを改めた方が良い。根本的に間違ってい

るということ。威張ることと社会的実権を握ることとは乖離しているのだ。戦前の後天的定住集団社会Ａの男性は、母親の操り人形、おもちゃが大きな顔をしていただけの存在だ。後天的定住集団社会Ａの男性の地位が戦後になって低下した訳ではない。戦前から後天的定住集団社会Ａの男性は女流でダメな存在なのだ。
後天的定住集団社会Ａの男性権利拡張運動家族定住集団は、女性専用車両やレディースデイ撤廃みたいな瑣末な事象ばかり叩いているが、それでは勝ち目はない。本当の敵は伝統的稲作農耕がもたらしている後天的定住集団社会Ａの女性化、母性化だ。これを根本的に打破する必要がある。

後天的定住集団社会Ａにおける「新たな定住集団への転属の自由」「非定住民の新たな定住集団への加入の自由」「定住集団内部先輩後輩制の廃止」の必要性

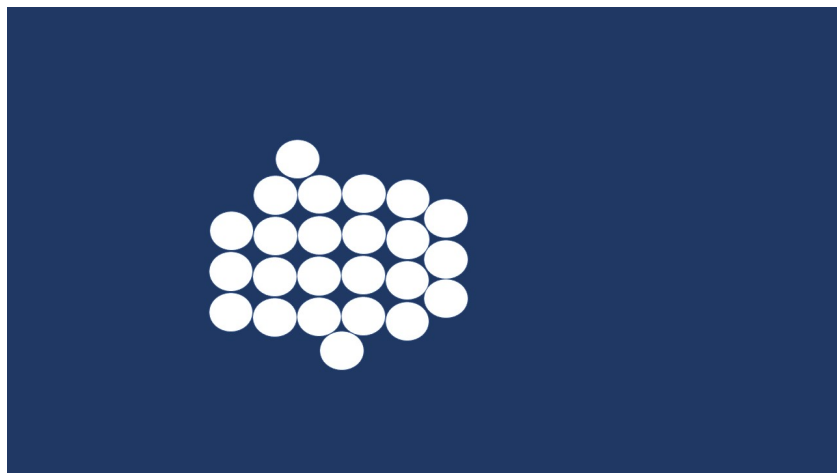
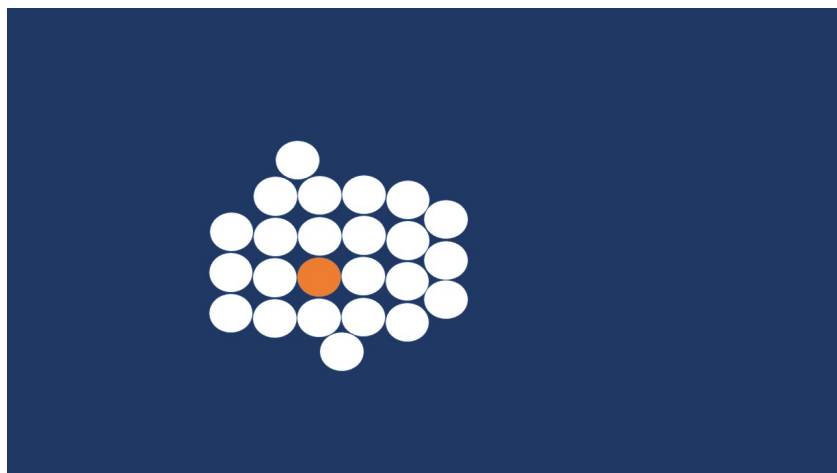
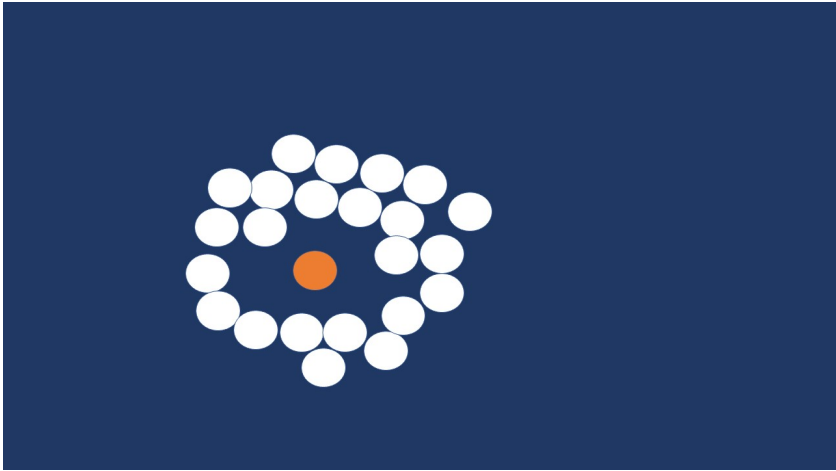
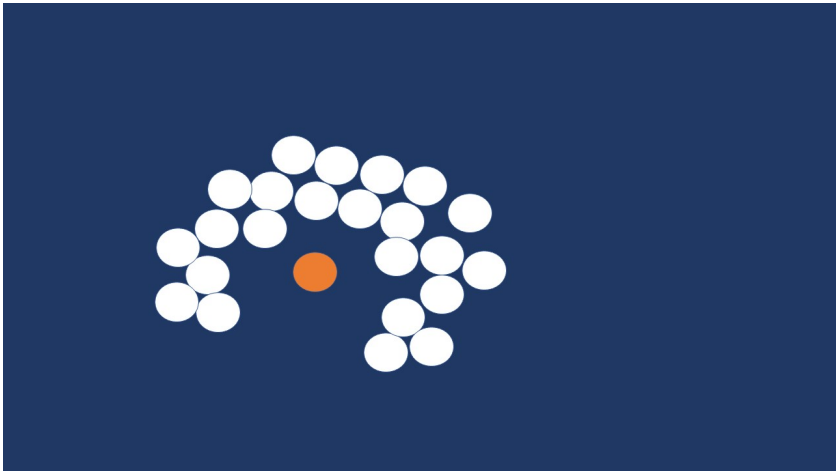
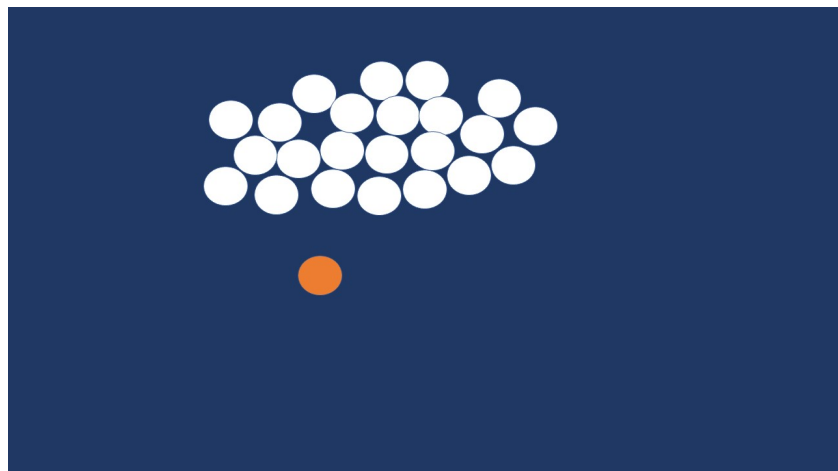
労働条件が悪いのに、後天的定住集団社会Ａの定住民たちが今いる企業定住集団を簡単に辞めることが出来ないのは、辞めると、企業定住集団を裏切ったと見なされて悪い評価が付き、次の企業定住集団になかなか入れてもらえなくなる度合いがとても上昇するからである。また、企業定住集団を辞めて非定住民になっていた期間が長いほど、職歴の断絶＝定住民歴の断絶と見なされ、再就職に不利になってしまうのである。職歴も定住民であった時期にやっていたことしか評価されない。
これら企業定住集団の慣行は、その大元が女社会にその原型を持っていると考えられる。女社会は自らの保身、安全確保のため、閉鎖的、排他的集団を作ってその中で生きるが、そうした女集団では、集団の中で絶えず主導権争いの派閥抗争が繰り広げられ、その中で浮くと、集団内の調和を乱すとして仲間はずれにされて、かと言って他の集団に入れてもらうことが難しくなってしまう。そのため女性は、自らの保身のために、必死で所属集団にしがみついていなくてはならず、所属集団内部で生き残るには、所属集団の有力者の出す理不尽な条件（＝実質上のいじめ）をひたすら呑まざるを得なくなるということ。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団で人権が保証されないのは、従業員の定住民が企業定住集団を出ると、その時点で、前の所属企業定住集団で対人関係とかで上手くやって行けなかった無能の定住

民であるという評価になったり、企業定住集団を出ていくなんて企業定住集団への裏切り者であり、信用ならないという評価になったり、新たな定住集団への転属回数が一定以上増えると、定住民としての信用が無くてどこにも行き場が無くなったりするから、そうした弱みを利用して廃人になるまで使い捨てで長時間労働、残業させようと経営層の定住民が考えるからだと思う。
あるいは新規一括採用の若者の所属しているのが企業定住集団だったとして、企業定住集団での残業代不払いとか、長時間サービス残業に対して声を上げることができなくなってしまう。声を上げると、企業定住集団から追い出され、新たな定住集団への転属先が見つかる保証が無いため、長時間労働で条件が悪くても必死に今の企業定住集団にしがみつき、経営者からの搾取を受けっぱなしになるのを許容せざるを得ないのである。
新たな定住集団への転属不可こそが、後天的定住集団社会Ａの非人道的な職場慣行の原因であり、新たな定住集団への転属の自由こそが後天的定住集団社会Ａの労働者の定住民層が権利として勝ちうるべき後天的定住集団社会Ａの定住集団社会の新たな規範なのである。
これは非定住民層（非正規雇用者）＝流民層にも適用されるべきである。ある定住民が、子供が生まれて子育てが忙しいとか当座の生活資金が溜まったとか今いる企業定住集団でサービス残業が横行しているとかいう理由で、いったん企業定住集団を出て、非定住民になって、しばらく育児とかライフワークとか休養をして定住民としての職歴にブランクを作った後、また別の企業定住集団に入ろうとすると、前の定住集団を勝手に飛び出した定住集団の裏切り者、非適応者扱いされ、かつ非定住民であった期間が長過ぎて、定住民としての信用度が低下しているため、とても新たな定住集団への加入を許可することが出来ないとかなってしまい、非定住民のパートタイムなどの臨時雇用の地位に固定化されてしまう。いったん非定住民になると再度定住民になるのが難しくなってしまう。非定住民の期間中に資格とか取っても企業定住集団の職歴にはカウントされず、企業定住集団に入れてもらうことが出来ない。
こうした非定住民、流民の再新たな定住集団への加入不可の慣行は、事実上の定住民と非定住民の間の身分差別になっており、社会的不平等の度合いが大きいため、一定期間以上、定住民の立場から離れていて非定住民になっていても、能力や人柄次第で非定住民を定住民として迎える「非定住民の新たな定住集団への加入の自由」を確保すべきである。新規一括採用で企業定住集団の定住民になれなかった既卒者の非定住民（就職氷河期世代とか）も、この文脈で新たな定住集団への加入を認められるべきである。

また、後天的定住集団社会Ａの定住集団社会、女社会で、新入りの定住民や、中途採用の定住民（いわゆる後輩）に対して、古株の定住民（いわゆる先輩）が、自分たちが昔から先んじて定住集団にいるというただそれだけの理由で、後輩に対してやたらと威張ったり、嫌がらせを行ったりすることを当然視する「先輩後輩制」は、明らかに年齢差別であり、人権侵害につながっている。この背後には、「定住集団の前例、しきたり」は定住民にとって絶対不可侵であるという強い信念があるのである。新しい文化への適応力は明らかに若い人の方が優れており、古株は置いていかれるのだから、いい加減、後天的定住集団社会Ａ、女社会では、「定住集団内部年功序列」「定住集団内部先輩後輩制」を廃するべきである。ＸＸさん付けで名前の呼び方を統一するとかすべきであるということ。（これについてはすでに実践している後天的定住集団社会Ａの企業定住集団もあるらしい。）
また中高年の歳を食った人が新たな定住集団への転属しようとしても、企業定住集団の中にちっとも入れてもらえないのは、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団において、年齢の高い人は、管理職として部下の仕事のマネジメントをすべきという考え方が強く浸透しており、上司より部下の方が高齢者という、年功序列に反する人員配置が忌避される慣行があるからである。現場の作業は中高年の管理職はタッチせず、若い下っ端の定住民や下請け定住集団にやらせるという慣行があり、それに反する中高年でかつ現場指向の人々は、なかなか自分の居場所が見つからず、結果的に企業定住集団を去っていくことになる場合が大きい。これに対しては、企業定住集団内部年功序列上位者＝管理職という固定した見方を止めるべきである。
こうした硬直した後天的定住集団社会Ａの考えが、現代後天的定住集団社会Ａが衰退している大きな原因になっていることは明らかである。定住集団社会の規範を見直すときが来ているのだ。その為にも、後天的定住集団社会Ａ、女社会の掟のどの箇所をどのように変えると効果的かの研究が必須である。

「定住集団からの追放」の解消が必要。

後天的定住集団社会Ａなどの農耕民社会、女社会で頻発する定住集

団からの追放を何とかする必要がある。重大な人権侵害行為だからであるということ。
定住集団からの追放は以下のような経過をたどる。

初期状態では、全員が同じ色の定住民の集団が存在する。

定住民のうちの一人が周囲と不同調を起こし、異質な存在となる。

すると、不同調を起こした定住民の周囲の定住民たちが、不同調の定住民から距離を取る。その結果、不同調の定住民は周囲から浮いた存在となる。

不同調を起こした定住民は仲間外れにされる。

最期に、不同調を起こした定住民以外の定住民たちが初期状態と同じ形でまとまる一方、不同調を起こした定住民は定住集団から追い出され、流民化する。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団（官公庁、企業）とか、建前上は終身雇用だけど、定住集団の空気に合わない、周囲に同調しない、浮いた態度（一人だけ長時間残業せずに定時帰宅するなど）をちょっとでも見せると、いじめられたり叩かれたり無視されたりして、うつ病とかになって定住集団からの追放扱いで追い出されるので、油断がならない。企業定住集団で終身雇用扱いになるのは、定住集団の空気（その時々の企業定住集団の有力者、経営者の意向、あるいは定住集団益とみなされる行動様式）にずっと自分を滅私奉公で合わせられた成員だけであることに注意する必要がある。
後天的定住集団社会Ａの学校定住集団、学級定住集団では、特に女子生徒とか、閉鎖的な仲間グループを作り、グループ内輪で周囲の空気に絶えず合わせて行動しないと、いじめられ、仲間はずれ＝定住集団からの追放にされ、他のグループにも入れてもらえない。定住集団からの追放は、特に自己保身のため集団所属を強く求める女子の場合に深刻になる。
定住集団からの追放は、特に田舎の農村に限った話ではなく、都会のママ友などの間でも定住集団からの追放が起きる。また、後天的定住集団社会Ａだけでなく、ベトナム社会とかでも見られる慣行であるということ。稲作農耕民社会、女社会に普遍的に見られると考えられるということ。
定住集団からの追放の慣行（ある定住集団からいったん追い出されるとその定住集団に二度と入れてもらえないということ。ある定住集団を追い出されると他の定住集団にも入れてもらえない。一人ぼっちになってしまい生きて行けないということ。）こそが、後天

的定住集団社会Ａを、ひたすら周囲に同調しなくてはならず、生きづらくしている根本原因である。定住集団からの追放は、人権上大きな問題であり、直さなくてはいけない。
集団内外の区別、差別がある液体分子運動型の社会（女社会、農耕民社会）では、定住集団からの追放は発生が不可避である。
定住集団からの追放は、女社会が起源と考えられる。女社会では、成員が自己保身、安全確保のため、護送船団方式で閉鎖的、排他的な集団、団体を作って互いに守られることを指向し、みんな一緒に調和して一体化して行動することを指向する。そして彼女らは、集団内部で出る杭になったり、遅れたり、失敗したりして調和を乱す成員を、集団にとって有害であるとして仲間はずれにして追い出す。成員は、ある集団から追い出されたことで、他の集団でも有害になるとして受け入れて貰えなくなり、行き所が無くなり、生きていけなくなる。これが定住集団からの追放の原型であり、女性が強大な勢力を持つ農耕民社会に受け継がれている。
対策としては、定住集団からの追放になった人を無条件で受け入れる互助組合、定住集団からの追放に遭遇しても生活していけるセーフティネットが社会的に必要である。学校定住集団、学級定住集団では、学校の保健室あるいはフリースクールがその役割を果たしている。こうしたセーフティネットは、企業定住集団や大人の女性集団（ママ友）の場合も必要である。ネット上に定住集団からの追放を受けた者同士の互助組合、定住集団からの追放に遭遇した時の駆け込み寺、相談窓口を立ち上げるとかする必要がある。
性格的に、周囲に同調するのが苦手で定住集団からの追放に遭遇しやすい人たち（発達障害者とか）の人権を守る必要があり、社会的な取り組みが必要である。
社会的に定住集団からの追放による人権侵害を無くしていく取り組みが必要である。例えば、ある人が前の企業定住集団で定住集団からの追放に遭遇して新たな定住集団への転属（他の企業定住集団への転属）の回数が増えても、ネガティブに見ないようにする企業定住集団の人事担当者の意識改革、人権教育が必要である。あるいは、後天的定住集団社会Ａの言語の会話だけでほとんどやっていける、出る杭になりやすいことが逆に個性的であるとして長所として受け入れられる、牧畜民外資系の、定住集団社会では無い職場集団を積極的にたくさん作るなどの改革が必要である。
定住集団からの追放に遭遇した人の救済は、企業定住集団とか、そもそも定住集団に最初から入れてもらえなかった人（就職氷河期世代の既卒の非正規雇用者とか）の救済と共通の側面がある。
あるいは、犯罪を犯した前科があって、どの定住集団にも入れてもらえなくなった人の救済と共通の側面がある。

定住集団からの追放なんて怖くない、定住集団からの追放に遭遇しても、定住集団に属さなくても問題なく生きていけるというようにするべきである。人々が安心して定住集団からの追放を受容し、定住集団のしがらみを超えて気分をプラスにして再出発することが出来るように社会を変革するべきである。

負の体験の次世代連鎖の断ち切りが必要。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、自分がした負の体験の次世代への連鎖が大好きである。嫁姑関係の体験も、学校PTA役員の体験もそうである。自分が、一つ前の世代の先輩格の年代の人たちから強引に、所属集団の迷惑な因習を押し付けられて苦労させられた後、次は自分たちが次世代の後輩格の人たちとかに教えることになった場合、自分たちが押し付けられた因習から負の部分を取り去って明朗な中身にして後輩に渡して、負の体験の連鎖を自分たちの世代で終わらせることは決してせず、自分たちが苦しめられた因習の負の部分を後輩にも味わせようとして、後輩たちをしごき、いびることになりがちである。

これは、起源は女社会にあり、自分たちが、前の世代の人たちのせいで味わったマイナスの体験を、他の世代の人たちがしないで済みそうだという事実や、マイナスの体験をしないで済みそうな人たちに対して、「あの人たちばかり良い思いをして、ずるい」という強い嫉妬心が起きて、自分たち以外にもマイナス体験を味あわせたい、良い思いをしそうな人たちの足を引っ張って、自分たちと同じ苦労をさせたいという強いマイナスの欲求が湧くためである。後天的定住集団社会Ａがいつまで経っても明るくならず、因習に囚われて陰湿な暗いままなのは、後天的定住集団社会Ａを実効支配する後天的定住集団社会Ａの女性たちの強い嫉妬心によるところが大きい。「男が陽、女が陰」と言われるのは、これと関係あるだろう。

この問題を解決するためには、後天的定住集団社会Ａの女性の嫉妬心、マイナス思考を何とかして取り除く必要がある。負の体験をし

た彼女らに美味しいものを食べさせて、負の体験を心理的に昇華させるとかであるということ。あるいは、例えば嫁姑関係なら嫁と姑を別居させて物理的に離すことで、嫉妬心が物理的に働かない、無効になるようにして、連鎖を強引に断ち切るといった方法が考えられる。

後天的定住集団社会Ａの論理の実態

以下、後天的定住集団社会Ａにおいて定住集団社会の論理が隅々まで行き届いている実態について短文での説明をまとめてみた。

現代の後天的定住集団社会Ａでは定住集団の論理が引き続き貫徹している。
後天的定住集団社会Ａでは、企業定住集団に途切れなく連続して所属することが求められる。（所属の連続性。）企業定住集団に新卒で入ったら、途中で退出すること無く最後までずっといないといけないということ。途中で定住集団を出ると、他の定住集団では余所者扱いされて入れてもらえず途端に生きていけなくなる。
社会のレールに乗りたいところからいつでも誰でも乗れて、好きなところでレールから降りて、好きなことをして、いくらかブランクが出来た後、再び社会のレールに乗れるような社会に、後天的定住集団社会Ａがなって欲しいと思う後天的定住集団社会Ａのメンバーは多いと思うが、後天的定住集団社会の原理がそれを許さない。育児退職や病気退職をして、新卒一括採用でのレールからいったん外れた人が、もう一度乗れるような社会に変えないと、後天的定住集団社会Ａの格差社会は是正できない。そういう点では定住集団社会のルールの抜本的な変更が必要だ。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は、いったん退職すると二度と入れてくれない。入れるのは原則として新卒の子飼いだけだ。中途採用は、ある企業定住集団の正規メンバー（定住民）から別の企業定住集団の正規メンバー（定住民）に即戦力として即時に切り替わることしか想定されていない。所属の経歴にブランクがあると、企業定住集団の空気を忘れた、失ったと見なされ、中途採用してもらえない。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団における子飼い雇用（新卒一括採用）と終身雇用はセットになっている。子飼いで企業定住集団

自身の色に企業定住集団のメンバーを染め上げげようとするため、他の企業定住集団の色の付いている人を雇用しないことが、雇用の流動化がいつまで経っても起きない原因となっている。
後天的定住集団社会Ａは、連続労働強制社会である。
・朝から夜遅くまで一日中ずっと働き続けないといけないということ。
・一度ある企業定住集団に企業定住集団への加入したら、引退するまでその企業定住集団でずっと働き続けないといけないということ。
後天的定住集団社会Ａの学校の生徒たちが学校部活を土日も無く休みなく続けさせられる状況は、「労働者は、絶えずお国、企業定住集団のために土日も休みなく労働して搾取されるのが当然だ」という考えに洗脳されるための訓練なのだろう。人権侵害で恐ろしいことであるということ。
自分の所属する社会を批判すると「出て行け！」と言われ、かと言って追い出されると生活できなくなるので、それを恐れて皆批判することが出来ないのが、今の後天的定住集団社会Ａである。そこには言論の自由なんか元から存在していない。
自分の所属する定住集団に滅私奉公させられる後天的定住集団社会Ａの定住民たちは、定住集団の奴隷、より詳しくは定住集団の有力者、資本所有者の奴隷である。後天的定住集団社会Ａの定住民たちは、企業定住集団であれば、経営者や企業定住集団大口株主の奴隷、地域定住集団であれば、大土地所有地主の奴隷である。血縁定住集団であれば、父は母子のATM奴隷である。
後天的定住集団社会Ａの定住民たちは、定住集団内部の既得権益者によって休みなく働かされ搾取されることが当然とされる存在である。しかも、後天的定住集団社会Ａは女社会なので、定住民同士が互いに休まないように相互監視し、ある定住民が楽をしようとすると、それを嫉妬して皆で集中的に叩いたり非難するようになっている。また、既得権益者側の定住民に対して絶対服従で批判の声を上げることがそもそも許されなかったりする。国家の所有者一家に対してストライキが出来ない下級役人とか典型的である。
後天的定住集団社会Ａの定住民が後天的定住集団社会Ａの企業定住集団とかで新たな定住集団への転属しようとしても次の入れてもらえる企業定住集団が見つからなかったり、後天的定住集団社会Ａの社会保障制度が希薄なのは、国民が勤務先の企業定住集団＝企業定住集団を辞めることをちゅうちょさせ、一生一つの企業定住集団＝企業定住集団の奴隷として働くように仕向けて、企業定住集団＝企業定住集団の支配者、既得権益者である株主や経営者をますます富ませるために意図的に行われている。

後天的定住集団社会Ａの定住集団社会は、企業定住集団の大規模なものになったりすると、発注元～元請け～下請けの階級構造を内包し、上位の強者（元請け）が下位の弱者（下請け）を金銭的に搾取するようになるということ。支配する定住集団（元請け）と従属する定住集団（下請け）が出来る。
後天的定住集団社会Ａでは所属定住集団の意思と関係なく個人行動すると、全て自己責任とされ、所属定住集団は助けてくれない。後天的定住集団社会Ａでは個人行動は厳禁である。他国に一人で出かけて武装勢力の人質になったりすると、自己責任扱いで助けてもらえないということ。
後天的定住集団社会Ａでは、原発事故とかで所属していた定住集団を出て行くと定住集団を捨てたとして裏切り者扱いされてしまう。定住集団から出て避難することは浮浪人になったのと一緒で、引越し先に親戚がいないと、そこの定住集団には入れてもらえず、ずっと浮浪人になってしまい、人権が無くなる。なので、定住民として扱われるには、嫌でも原発の近くの元の所属定住集団に戻らざるをえない。後天的定住集団社会Ａ原理に従って原発事故での自主避難住民は存在を否定される。

後天的定住集団社会Ａでは、以下の通りである。
・正規雇用者＝定住民
・非正規雇用者＝流民
であるということ。
定住民が流民化するルートはあるが、流民が定住民化するルートが無いのが、後天的定住集団社会Ａの根本的な問題。定住民⇒流民の片道切符になっているということ。
後天的定住集団社会Ａの歴史の概説書で、室町時代の村落についての記述を見たら、今の後天的定住集団社会Ａの定住集団社会と瓜二つで驚かされるということ。永原慶二「下剋上の時代」とか、近世後天的定住集団社会Ａ村落における定住民と流民の対比が分かりやすい。
後天的定住集団社会Ａは、数百年前の中世室町時代からちっとも進化していない。
定住民による流民差別と、定住民による流民の定住民化拒否を何とかしないと後天的定住集団社会Ａでは今後も人権は確保されないままだろう。
流民の立場に置かれている人たちの人権をどう確保するか名案を出すことが、現代の後天的定住集団社会Ａにとって喫緊の課題である。
後天的定住集団社会Ａでは、定住集団からの追放が定住民の流民化

につながっている。

後天的定住集団社会Ａの学者定住集団に先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』が多いのは、以下の通りである。

・先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの権威を笠に着て威張ることが出来、自分の意見を通しやすくなるから。
・独自学説を打ち出して、出る杭と周囲から見なされ叩かれるよりは、互いに同じ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』としてお仲間で居た方が、周囲から叩かれる心配が無く自分の保身に有利だから。

であるということ。

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団で、あまり定住集団の稼ぎに貢献しない定住民が、他の意識高い系の定住民から嫌がらせを受けるのは、後天的定住集団社会Ａの国家定住集団で、生活保護を求める定住民が、他の一生懸命働いているぞ系の定住民からバッシングされるのと構造は同じである。

後天的定住集団社会Ａの国家定住集団では、健常な定住民の足を引っ張る障害者や生活保護受給者が叩かれている。また、少し自由に動いて失敗すると「自己責任」呼ばわりで大声で非難されるということ。後天的定住集団社会Ａの国家定住集団の定住民たちは、自分たちが払った税金の役人による無駄遣いにはほとんど無頓着だが、生活保護受給者や障害者が税金に頼って生きようとすると「オイラの支払った血税で生活するのはけしからん」と怒る。国家の所有者一家や役人も税金で食べているが、強い者の味方の定住民たちは怒ろうともしない。

後天的定住集団社会Ａのメンバーが長時間残業するのは、職場が定住集団社会で、自分だけ先に帰ると他の残った定住民たちの機嫌を損ねて定住集団からの追放にされてしまうという恐怖感があるからだろう。一番居残りをする人に皆が合わせることになる。後天的定住集団社会Ａの定住民たちにとって、生産効率の向上は二の次で、企業定住集団に長く居残ること自体が自己目的化している。

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団で昇進して管理職になる、経営者側に回るには、常日頃、定住民らしく振る舞ったり（上司部下関係、先輩後輩関係を円滑に維持する、企業定住集団のために長時

間残業で尽くしている・・・）、望ましい定住民の規格（結婚している、持ち家がある・・・。）に合致していないとなれないということ。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団で、最初の新規一括採用時、経営者側に回る定住民と奴隷労働側に回る定住民とを明確に区別せず、働き次第でどちら側にもなり得るように仕向けるのが、労働する定住民たちに経営者視線で物事を考えるようにさせて長時間残業を企業定住集団のために是認したり、定住民間で成果競争をさせてより多く自主的に働かせる原動力となっており、経営者や株主といった既得権益者側の定住民を何もしなくても富ませる濡れ手に粟のような巧妙な仕掛けとなっている。
後天的定住集団社会Ａの定住民たちは、しきりに定住集団のために働け、働かないのは悪だと主張するが、実は、既得権益者側の定住民、特に門閥、閨閥によって守られた特権階級の定住民たちとか、首都圏の賃貸マンション経営の地主の定住民たちとか、何も働かなくても多額の株式配当とか家賃などの収入が得られ、遊んで暮らせているのであり、そのことは後天的定住集団社会Ａの定住民たちによって触れられたり批判されることは無い。後天的定住集団社会Ａの定住集団では、既得権益層はひたすら守られるのである。

後天的定住集団社会Ａの官公庁、企業の企業定住集団の正規メンバー（定住民）＝企業定住集団の定住民は疑似家族の身内扱いである。
身内のために汗を流せ、ひたすら働けというのが後天的定住集団社会Ａの掟である。

こうした疑似家族制度、非血縁家族制度を公式に国家レベルに拡張していたのが戦前後天的定住集団社会Ａだが、今の後天的定住集団社会Ａでも自民党とか復活させようと画策している。後天的定住集団社会Ａが国家定住集団を公式に復活させたら大変である。国民全員疑似家族、非血縁家族となるということ。
完全に先天的定住集団社会Ｃ２と同じになるということ。相互監視と団体行動の強制が待っている。
後天的定住集団社会Ａは、今でも事実上は国家定住集団だけど、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの手前、自由主義者、民主主義者の振りをして隠している。

同じ後天的定住集団社会Ａのメンバーだからと言って、勝手に後天的定住集団社会Ａの国家定住集団の身内扱いされ、「身内のために滅私奉公せよということ。休むなということ。ずっと働けというこ

と。さもなくば非国民、出て行け！」と言われるのは嫌なものである。

後天的定住集団社会Ａの国家の内部にいたままで定住集団社会から独立するには、定住民との人間関係を全て断って引きこもりになるかしか無いのだが、収入をどうするかという問題が立ちはだかる。そのままでは食べていくのが難しい。解決は、個人事業主の動画制作者やスマホアプリ開発者、同人誌制作者等になることだが、動画間やアプリ間、同人誌間の競争が激しく食べていくのが大変な点だ。

所属する定住集団（企業定住集団、官庁、学校・・・・）に完全に呑まれないこと、一体化しないことが、後天的定住集団社会Ａで自分自身の精神の自由を確保するためにとても大事である。地域定住集団内部、企業定住集団の内部での出世はほどほどにして早く帰宅し、自分の時間を持てるようにすることが重要である。

後天的定住集団社会Ａの定住民たちにとって、後天的定住集団社会Ａアンチ＝国家定住集団への反抗者であるということ。

後天的定住集団社会Ａでは、以下の通りである。
・企業定住集団の正規メンバー（定住民）＝定住民
・企業定住集団の非正規メンバー（流民）＝一時的に雇う浮浪人、旅の人
企業定住集団の非正規メンバー（流民）から企業定住集団の正規メンバー（定住民）になるのが難しいのは、これが原因である。

後天的定住集団社会Ａではどこかの定住集団社会の身内になっている定住民でないと人権が保証されない。企業定住集団の非正規雇用者は非定住民なので、例え定住民の企業定住集団の正規メンバー（定住民）以上の働きがあっても、労働的に人権が無く、低賃金と不安定な雇用に苦しめられてしまう。

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の理想型が中央官庁＝国家定住集団で、中央官庁では終身雇用も年功序列もブラック労働も維持されている。後天的定住集団社会Ａの民間企業定住集団で終身雇用、年功序列が維持出来なくなっているのは民間企業定住集団を取り巻く生存条件が厳しくなっているからで、民間企業定住集団が今

でも新規学卒一括採用を維持しているのは、自分たちを取り巻く条件が良くなれば再び終身雇用、年功序列にしたいと考えていることの現れである。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団＝企業定住集団の労働形態、働き方を変えるには、中央官庁の労働形態にまず手を付ける必要がある。

後天的定住集団社会Ａに適合するには、周囲に対して、苦しんだり、苦しむ振りをしないと駄目。

後天的定住集団社会Ａの地方に皆移住したがらない理由、後天的定住集団社会Ａの地方の人口が増えない理由は、古株の先住民の定住民たちが、移住してきた新入りの新住民を見下したり、差別したり、嫌がらせするから。姑と嫁の関係と同じということ。

絶えず異分子をいじめて排除することを繰り返すのが後天的定住集団社会Ａ。人権なんて無いということ。

後天的定住集団社会Ａは、左翼も右翼も定住民。主張は正反対だが定住民という点では共通している。

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は、体調を崩して長期休職とかすると、休職期間内に体調を戻せないと、強制的に退出させられ、余所者扱いされて、二度と入れてもらえなくなる。国家公務員なら累計３年で強制退出の扱いを受けるということ。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は所属条件について厳しい。後天的定住集団社会Ａ企業定住集団の定住民として暮らせるのは健常者か、休まないでいられる障害者だけ。うつ病患者とか統合失調症患者みたいな良く休む精神障害者の人間は不適格者扱いで追い出される。

後天的定住集団社会Ａには企業定住集団とか学校定住集団とかいろいろ定住集団があるが、その最大のものは国家定住集団だ。後天的定住集団社会Ａのメンバーを全員強制的に国家定住集団の定住民とみなし、国家定住集団の身内のために苦労しろ、働けと言ってくる後天的定住集団社会Ａのメンバーはとても多い。生活保護受給者が叩かれるのは、彼らが身内のために働くのを怠けているように見えるからだ。皆で働かずにベーシックインカムを貰うなどの方が生活に余裕が出来て良さそうなのに、なぜかそう考えようとせず、働くことをひたすら美徳としたがるのが後天的定住集団社会Ａの定住民である。

後天的定住集団社会Ａの定住民の排他性は酷いものだけど、定住民内輪での陰口、悪口での叩き合いも酷いものだ。我慢できなくて定住集団を出る人は相当多い模様。女職場の保育園とか典型。

強制力のある、就職年齢制限無しの既卒者の企業定住集団の正規メンバー（定住民）採用制度が後天的定住集団社会Ａには必要。一度退職して職歴にブランクある人も、非正規雇用では無く、いつでも安定した仕事に就けるために必須。

収入得るために働いて、収入がたまったら働くの止めて自分の好きなことを十二分にやって、お金が無くなったら、また収入を得るために働いて、収入がたまったら働くの止めて自分の好きなことを十二分にやって、の繰り返しが出来ず、ひたすら連続して働き続けなければいけないのが後天的定住集団社会Ａである。

知識量のストックの豊富さで偉ぶるのが後天的定住集団社会Ａのメンバーみたいな農耕民。自分自身で切り開いて得た知識の新規性、斬新さで偉ぶるのが先進的移動生活中心社会群Ｆ人みたいな牧畜民。

就活で自分の一生所属する企業定住集団を選んで、入った後は追い出されないように一生しがみついて行って、その間に結婚し子供を育てて、年功序列のエスカレーターで上に昇り、定年までリストラされないように無難に勤め上げるのが、後天的定住集団社会Ａのメンバーの男女の理想的な人生コースになっている。

後天的定住集団社会Ａ文化の特殊性を主張するのが後天的定住集団社会Ａのメンバーは大好き。後天的定住集団社会Ａ文化を真に理解できるのは後天的定住集団社会Ａのメンバーだけと考えてしまう。所詮は、稲作農耕民文化の一類型に過ぎないのに、馬鹿げている。後天的定住集団社会Ａのメンバーの閉鎖性、排他性と独善性の現れ。

後天的定住集団社会Ａのメンバーがテレビでディズニー映画とかを観るのは、学校や職場や近所付き合いで、次の日、皆と同じ話題を共有して、自分だけ仲間はずれにならないようにするため。映画自体を楽しむのは二の次。周囲から爪弾きに会いたくないという対人

的緊張感から観ているということ。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨなどのスーパー上位者によって高い評価を受けた作品について、盲目的にこれは良い作品だと何も考えずに見て、高い評価を付けて絶賛するのが後天的定住集団社会Ａのメンバーの通例である。仲間同士で互いに絶賛しまくることで仲間内から外されずに済むということ。ディズニーの「アナと雪の女王」とか、植民地映画であり、後天的定住集団社会Ａのメンバーは映画の内容が素晴らしいと言わないと、先進的移動生活中心社会Ｇ植民地の被搾取者としての態度をわきまえていないとして、後天的定住集団社会Ａのメンバーから非難され、差別される。

何かと他人と自分を比較して、相対評価を持つのが好きな後天的定住集団社会Ａのメンバーのハマったのが偏差値教育である。他人と比較して、自分が相対的にどこまで有利かを知るのに必須。なのに文部科学省はセンター試験受験者の偏差値を公表しない。受験産業に偏差値を計算させて官僚が天下るための取引に使われていることは明らかである。

後天的定住集団社会Ａでは、仕事を長時間していないと真人間と見なされない風潮がある。定住集団社会由来だと思うということ。労働時間短縮で、みんなで楽しようという感じにちっとも行かないということ。

後天的定住集団社会Ａの会企業定住集団のメンバーや学生の良く言う「ウチは」という言葉は、その人の所属する企業定住集団や学校が閉鎖的で内向きな同調圧力の強い体質を持っており、その人もその体質に染まっていることを示している。その人とは気を付けて付き合ったほうが良い。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、他人に批判されるのが大嫌い。精神がソフトで傷つきやすい。なので、誰からも批判されることのない国家の所有者陛下みたいな存在に自分を一体化して、批判から逃れようとする。

曖昧言葉の多い後天的定住集団社会Ａの言語は、喋る人が明確な責任を取らずに済む責任回避言語である。

同じ税金を支払う～使う後天的定住集団社会Ａのメンバー同士に身内意識があって、他の誰かが生活保護とかで税金のお世話になろう

とすると、その分税金を支払った自分が損をすると考えて、自己責任論を唱えて反対するのが、後天的定住集団社会Ａのメンバーである。保険企業定住集団の保険料支払いと同じ構図なのに、なぜか税金だと反対するということ。国家定住集団の同じ定住民という意識がそうさせている。

リア充＝後天的定住集団社会Ａに適応した人間。定住民の理想形であるということ。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、自分が定住民だという自覚をもっと持ったほうが良い。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流になっているのは見かけだけで、後は先輩後輩制度や統制同調大好き、陰口大好き、官尊民卑とか、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとは似ても似つかぬ社会になっていることを自覚すべき。ディズニーランドに行ったら先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的になれたとか、一番馬鹿げた勘違いであるということ。

後天的定住集団社会Ａの稲作農耕は現状一毛作なので、年に一回しか収穫のチャンスが無く、失敗すると飢餓、死が待っている。そのため、後天的定住集団社会Ａでは、何事にも失敗が許されず、退嬰的で無難な事なかれ主義がはびこり、人生で一度失敗すると後が無い再チャレンジ不可の社会が出来上がっている。その点、後天的定住集団社会Ａは、「一回性」社会と呼べる。人生のやり直しが難しい。後天的定住集団社会Ａのメンバーがとかく失敗を恐れ、無難を好み、事なかれ主義になるのは、稲作が単作で、年に一回の収穫に失敗すると、もう後が無いので、その点心理的な余裕に根本的に欠けているからだろう。一回勝負を強いられるので、失敗が出来ないのだ。年に何回でも収穫可能な定住生活中心社会群Ｄ稲作諸国との相違点だろうということ。

牧畜民（先進的移動生活中心社会Ｇ）に実効支配されている農耕民の社会、それが後天的定住集団社会Ａ。
口先では実効支配者の牧畜民に向かって盛んに媚びて、牧畜民のイデオロギーの自由民主主義の自己着用をアピールするが、実態は昔ながらの農耕民。自分たちが農耕民であることを社会的に明言するのは支配者の牧畜民に逆らうことになるのでタブー。

後天的定住集団社会Ａの農耕民社会は、表面的には牧畜民社会を装っているが、実態は、農耕民の社会的伝統に固執し、決して変えようとしない。内側から変化を試みる者は定住集団からの追放にあって排除されるか、足を引っ張られ束縛される。疑似牧畜民社会、後天的定住集団社会Ａ。

後天的定住集団社会Ａの現状は、米尊日卑・欧尊日卑と、日尊華卑・日尊韓卑である。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、自らが稲作農耕民、定住民であることを克服しないと牧畜民的な立憲主義、法治主義に行き着けない。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａの国家のことを盛んに先進国だと触れて回るが、その先進性のほとんどは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのおかげで、後天的定住集団社会Ａは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ技術を小改良して最先端に行ったと主張しているだけ。最近は、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１も後天的定住集団社会Ａと同じことをやっていて、すっかり後天的定住集団社会Ａに追い付き追い越してしまった。後天的定住集団社会Ａの技術はもう余り先進的でない。

後天的定住集団社会Ａの同期横並び原則が、同期の人たちの中でより出世しそうな人に対する嫉妬心を爆発させ、足を引っ張る結果につながっている。これは社会的損失だ。同期横並び意識そのものを後天的定住集団社会Ａから無くすべきということ。

企業定住集団別ではない、職業別の大きな組合を非正規雇用者のために樹立し拡大することこそが、後天的定住集団社会Ａの格差社会を解決するだろう。

年功序列、先輩後輩制は、後天的定住集団社会Ａの若者の人権を無視する極悪制度。特に将来ある若者は、早く制度の弊害に気付いて打破するように動いた方が良い。

権力者に対する滅私奉公が無くならない限り、ブラック企業もブラック部活も健在で、後天的定住集団社会Ａは悪社会のまま衰退す

るだろう。

後天的定住集団社会Ａの定住集団からの追放は人権問題。この問題を広く世界中に広めようということ。

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の正規メンバー（定住民）の長時間残業は、自分が他の企業定住集団のメンバーと比べてどれだけより長時間ムラに居続けるかの競争。長時間ムラに居続けるほど、ムラの権力者による評価が高くなる。仕事の効率など考慮されないということ。

農耕民のまま、牧畜民になろうとしているのが後天的定住集団社会Ａのメンバー。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、自分の身内には滅私奉公で尽くすが、身内以外の余所者にはとても冷淡だ。余所者を人間扱いしないのは、企業定住集団の正規メンバー（定住民）による非正規雇用者への扱いを見れば一目瞭然だ。これは深刻な人権問題なんだけど、伝統的な稲作農耕の定住集団社会のルールが起源なせいか、後天的定住集団社会Ａのメンバーは誰も直そうとしない。

少子高齢化が進む後天的定住集団社会Ａは、財政的、企業で働く人口的な余裕がなくなり、病気や高齢化によって社会の役に立たなくなった弱者に対して、今後どんどん冷たくなり、苛酷になっていくだろう。社会的に役立たずで有害な病人や高齢者をどんどん切り捨てていくだろうということ。安楽死やガス室送りが横行するだろう。

後天的定住集団社会Ａのメンバーが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー並の個人主義者、自由主義者、民主主義者になるには、稲作農耕から脱却して、大規模放牧とか始めないとダメ。

企業定住集団に入れてもらえず非定住民のままになってしまっている後天的定住集団社会Ａのメンバーたちを経済的、社会的に救済し、生活を保証する政策が必要。

後天的定住集団社会Ａでtwitterなどの言論が自由なのは、まだ先進的移動生活中心社会Ｇの影響力が残っているからで、先進的移動生

活中心社会Ｇの影響力が消えたら、後天的定住集団社会Ａは即先天的定住集団社会Ｃ２化するだろう。

後天的定住集団社会Ａの活性化には、伝統的な定住集団社会の解体が必要。
・余所者を拒絶する強力な閉鎖性、排他性。新入りいじめを平気で行う人権なき組織風土。
・身内に対して滅私奉公と苦役を強いて、長時間労働が当たり前。従わない者は定住集団からの追放。
・とても嫉妬深く、すぐ人の足を引っ張る陰湿さ。
とっとと潰すべきだということ。

身内には滅私奉公、周囲の空気を読んで付和雷同、上位者には絶対服従。これらが後天的定住集団社会Ａでブラック労働、ブラック部活を生み出す原因の根本心理だ。無くして行かなければならないということ。これらの心理は女由来だと思うので、事態を解決するには後天的定住集団社会Ａの女性（特に母や姑）の社会的影響力を断て、というということ。

後天的定住集団社会Ａのメンバーの企業定住集団や学校定住集団への滅私奉公のメンタリティ、発生メカニズムを研究し、どうすれば後天的定住集団社会Ａのメンバーの頭の中で、滅私奉公の掟が発生するメンタリティを解決し、定時企業定住集団からの退勤か脱退が当たり前にすることが出来るかを研究する必要がある。

「後天的定住集団社会Ａは自由民主主義国家であり、基本的人権を重視する」と言う言説そのものが、実は政府の大本営発表なのだ。実際の後天的定住集団社会Ａのメンバーは、自由よりも、他者と足並みを管理統制で揃えて、心理的に一体化して、他者と同じところを仲良く回るのが好き。人権とか、国家の所有者や官邸や役人からの一時的恩寵に過ぎないということ。

稲作農耕民に共通な社会心理の解明が必要。

後天的定住集団社会Ａは官庁や企業の人員採用とか処遇で、身内と余所者の区別を撤廃すべき。身分の正規、非正規の区別、差別そのものを禁止するとかすべきということ。定住集団からの追放を、社会的いじめの一種として規制すべきということ。

「所属組織に100％滅私奉公せよ」という後天的定住集団社会Ａのルールは、ブラック労働、ブラック部活を生み出すだけで、まともに機能しなくなっている。今後は、4時間、6時間あるいは8時間交替制の労働にして、残りの時間は、所属組織にしばられない自由時間を得られるようにすべき。

先輩後輩制が後天的定住集団社会Ａの諸悪の根源。皆「ＸＸさん」付けで統一し、年齢や組織への所属年数での上下関係を　無くすべきということ。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ上げと後天的定住集団社会Ａ落とし。上から目線で先天的定住集団社会ＢＣ見下しということ。今の後天的定住集団社会Ａのインテリの言論はこんな感じ。

後天的定住集団社会Ａの公教育は、高級役人登用のための適性検査の連続と見ることができる。

強者による弱者搾取を法律で禁止出来れば良いんだけど、後天的定住集団社会Ａの立法府の人間たちは、搾取する側の人間ばかりなので、実現するのが難しいという課題がある。

知育重視の子供と、体育重視の子供とに分けて教育することが、後天的定住集団社会Ａの学校の部活問題を解決するだろう。一人の子供に知育も体育もと欲張ると、教員が部活指導で長時間労働になってしまう。

後天的定住集団社会Ａの会企業定住集団のメンバーは、しょせんは株主の使用人に過ぎない。高級官僚はスーパー上位者の先進的移動生活中心社会Ｇや国家の所有者の使用人に過ぎない。

後天的定住集団社会Ａをマクロな視点で捉えたものが「世間」に当たり、ミクロな視点で捉えたものが「定住集団」である。

稲作以外の主食確保方法を見つけることが後天的定住集団社会Ａのメンバーが定住集団社会から解放される最も有力な方法である。

後天的定住集団社会Ａで定住集団に入らずに生きる方法としては、自営業の起業とかが必要である。あるいは外資系の企業で働くことが考えられる。

上媚下虐の後天的定住集団社会Ａ

後天的定住集団社会Ａは、上媚下虐というか上位者に媚びへつらい、下位者を虐める社会になっていて、そのままでは生きづらい。
上位者をたしなめるのが難しいのであれば、せめて上懐下愛というか上位者に懐き下位者を愛する社会への転換が必要である。
これは詳しくは、対上位者、対下位者で、本心かうわべか、取る態度がプラスかマイナスかの三次元で分析することができる。例えば媚びは、対上位者で、うわべで、プラスの態度である。批判やたしなめは、対上位者で、本心で、マイナスの態度である。

没落したアイドルとしての後天的定住集団社会Ａ

後天的定住集団社会Ａは没落アイドル型国家と呼べる。後天的定住集団社会Ａのメンバーの振る舞いは、以前大いに脚光を浴びていたアイドルが、隣人（隣国）にその座を奪われて没落したが、以前のちやほやされていた時の快感を忘れられずに、自分自身を盛んに持ち上げたり、周囲に対して自分を持ち上げるよう盛んに要求したりするのに似ている。

空気を読んで動くことは後天的定住集団社会Ａ独自か？

後天的定住集団社会Ａでは人々はその場の空気を読んで行動することが必要とされ、これが先進的移動生活中心社会群Ｆ北米にはない後天的定住集団社会Ａの独自性として捉えられてきた。
しかし、実際には、以下の通りである。
・牧畜民＝先進的移動生活中心社会群Ｆ北米＝個人主義、自由主義、民主主義の空気に反する言動をすると制裁されるということ。
・農耕民＝日先天的定住集団社会ＢＣ、定住生活中心社会群Ｄ＝集団主義、同調主義、上位者の支配の空気に反する言動をすると制裁されるということ。
であり、その社会の空気を読まずに行動すると制裁されるのは全世界人類共通であり、後天的定住集団社会Ａに限ったことではないのではないだろうか。

後天的定住集団社会Ａの生きにくさ、生きづらさの根本原因

定住集団社会の生きにくさ、生きづらさは、定住集団加入後の追い出しの有無と密接に関わっている。追い出しが無いと生きやすく、追い出しがあると生きにくい。
すなわち、定住集団社会には、加入した定住集団への永久帰属を保証するタイプと保証しないタイプがある。保証するタイプは、例えば先天的定住集団社会Ｂや先天的定住集団社会Ｃ１のような純血縁タイプの定住集団社会であり、定住集団への加入が出生によるものであり、血縁があれば追い出される心配は無い。一方、保証しないタイプは、後天的定住集団社会Ａのような準血縁～非血縁タイプの定住集団社会であり、定住集団への加入が白紙状態の新人への新たな定住集団への加入儀式によるものであり、定住集団の意向に反することをすると定住集団から追い出されてしまう。後天的定住集団社会Ａは、一度加入した定住集団への永久帰属を保証せず、追い出しの可能性が絶えず存在するため生きづらいのである。また、いったん定住集団から追い出されると他の定住集団になかなか入れてもらえないことも生きづらさを加速している。
後天的定住集団社会Ａにおける定住集団からの追い出しは、定住集団からの追放とか、定住集団の有力者による口頭での「出ていけ」

呼ばわりによって行われる。後天的定住集団社会Ａの定住民たちは、追い出されないように、定住集団の有力者への忠誠競争を絶えず行い、定住集団の有力者や他の定住民から嫌われないように必死でしがみつく、懐くこと、定住集団と絶えず一体化して動くこと、定住民同士つるむことを強いられる。これこそが、後天的定住集団社会Ａの生きづらさにつながっているのである。
あるいは、定住集団から追い出される代わりに、定住集団のメンバーから徹底的にからかわれ、いじめられ、潰される、自殺に追い込まれるというパターンも相当数存在する。要するに、定住集団の中にいながらにして存在自体を消去されるということであるということ。これも後天的定住集団社会Ａでの生きづらさの現れである。
要するに、後天的定住集団社会Ａでは、絶えず定住集団の他のメンバーになつき、同調し、忖度し続けないと、定住集団から存在を消去される可能性が絶えず存在し、定住集団内部での永遠の生命の存続が保証されないのであり、生きづらさの根本原因となっている。
・定住集団の外に追い出されるということ。
・定住集団の中で潰されるということ。
の2パターンあるということであるということ。どちらも人権上問題ある行動だが、人権を理解しない後天的定住集団社会Ａの定住民たちはこれを平気で実行するので、後天的定住集団社会Ａは生きづらいのである。
こうした生きづらさは、血縁関係と婚姻関係の対比で見ることも可能である。実子や親戚の関係は遺伝的同一性が確保されるので、関係が先天的であり、維持が根本的に容易だが、婚姻関係は、もともと赤の他人同士の面があり、関係が後天的であり、維持のためには互いの絶えざる協調や妥協が必要で、そのままでは関係を維持するのが難しい。後天的定住集団社会Ａの対人関係は婚姻関係に似ているところがあり、関係維持のため絶えず周囲と後天的な同調、協調が必要であり、それが生きづらさにつながっているのである。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団への就職とか、企業定住集団の定住民たちとの婚姻になぞらえることが可能である。

休まない、休めない後天的定住集団社会Ａのメンバー

後天的定住集団社会Ａでは、中高生の部活のように、常に動き、働いて休まないのが理想とされている。休むのは甘えであり、どんなに疲れていても体調がわるくても休まず頑張り続けるのが望ましい

とされている。これは定住集団内部で雇用者を使う定住集団の所有者の考え方である。
後天的定住集団社会Ａの定住民には、定住集団の所有者の立場の定住民と、その正規の使用人、雇用者の立場の定住民がいて、その外側に非正規雇用の流民扱いの非定住民が存在する。正規雇用の定住民が非定住民に転落しないためには、定住集団の所有者を絶えず担ぎ上げ、喜ばせないといけない。台風とかでもすぐ定住集団に駆けつけ定時出勤して休まないとか、定住集団にくっつき、全人格的に忖度し、忠誠心を見せることが絶えず要求される。定住集団の中で有利な立場を目指したい、中枢部に入りたいと考える定住民たちは、必死で定住集団の所有者の機嫌を取ろうとして、絶えず演技をする必要があり、その最有力の一つが休まないことなのである。

後天的定住集団社会Ａの今後の課題

以上、筆者は、後天的定住集団社会Ａの特徴、その中で生き抜くための処世術をまとめた。後天的定住集団社会Ａは女性優位な性格が強く、女性のペースで動く社会であり、「（後天的定住集団社会Ａに特有）定住集団社会＝女社会」と捉えることが可能である。
太平洋戦争で先進的移動生活中心社会Ｇに負けて７０年、必死に先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化を進めてきたはずの後天的定住集団社会Ａが定住集団社会を維持してきたことは驚きである。社会の基層が、外部からのイデオロギー直接導入では変わらないことの格好の一例である。異文化受容は表面的に留まり、伝統的な社会構造が続いている。
こうしたことの原因は、後天的定住集団社会Ａの家族関係の不変性に求めることが出来る。今も昔も母子関係が第一であり、あらゆる社会関係、人間関係が母子関係の延長となっている。稲作農耕民は、人員の一斉集団作業を重んじる、相互一体感偏重の女性優位の社会を作り、それを次世代に継承する際に、母子癒着を利用するのである。
先進的移動生活中心社会群Ｆ、先進的移動生活中心社会Ｇと違い、後天的定住集団社会Ａの母子関係はとても強固で、父親は割って入ることが出来ず無力な存在と化している。そして、父親は育児の過程で強烈な母子癒着によって父性を失っており、子供のままである。母子関係が子供が大人になっても切れず、ずっと続くのが、稲作農耕民社会であり、後天的定住集団社会Ａはその典型例である。
では、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１、定住生活

中心社会群Ｄといった他の稲作農耕民とどう違うかと言えば、後天的定住集団社会Ａでは血縁の無い者同士が、白紙状態の新入りの成員（嫁、学校定住集団からの卒業のメンバー）を自分たちの集団の色に染めることで、血縁者同様の疑似家族を形成することが出来る点にある。この非血縁家族集団社会が後天的定住集団社会Ａなのである。
後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群Ｆ人、先進的移動生活中心社会Ｇ人には、とても息苦しく自由の無い社会として感じられる一方、強い母性によって形成された文化が異質で魅力的に映る。また、家庭の財布の紐を先進的移動生活中心社会群Ｆ、先進的移動生活中心社会Ｇのように夫が握るのでは無く妻が握っていることも大きな驚きとして感じられる。夫婦共働きでも家庭の財布の紐は妻が握るのであり、女性の経済的権力が強いことを伺わせ、女性が強いことを印象付ける。子育ても女性が独占している。そのため、後天的定住集団社会Ａの子供は、息子も娘も一生、母の所有物、奴隷だ。後天的定住集団社会Ａは女社会であり、女権拡張を目指す世界のフェミニズムの先進国である。
後天的定住集団社会Ａは、明治維新後の後天的定住集団社会Ａの国際的躍進や、太平洋戦争後の後天的定住集団社会Ａの高度経済成長、経済大国化のバックグラウンドとなった社会であり、それなりに優れた大きな長所を持つと言える。そういう点では、後天的定住集団社会Ａのメンバーは、定住集団社会、女社会に自信を持って良い。
もっとも、その定住集団社会、女社会の本質が、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１、定住生活中心社会群Ｄの稲作農耕民の国々と大きな差が無いので、現状、それらの国々との経済面での競争で差別化出来ず苦戦しているのも事実である。また、バブル崩壊後、企業定住集団社会のせいで若い人、若かった人が結婚したり子供を設けたりできず少子化がどんどん進んでしまい、企業定住集団社会の存在が後天的定住集団社会Ａが衰退の一途を辿る原因ともなっている。あるいは定住集団社会が女性の雇用を妨げている面も見られる。
・新卒で企業定住集団に企業定住集団の正規メンバー（定住民）として入れなかった若者たち（いわゆる就職氷河期世代）
・出産、育児でいったん企業定住集団の正規メンバー（定住民）を辞めて所属していた企業定住集団を出てしまい経歴にブランクのある女性たち
を、企業定住集団の一員として受け入れることを一貫して拒絶して低賃金労働で身分の不安定な、子育て費用を十分賄えない非正規雇用の状態に置き続けたということ。企業定住集団をいったん出て経

歴にブランクのある人を、信用ならない浮浪者扱いして、再び正規の定住集団の成員として定住集団に入れることを拒絶する定住集団の論理がそうさせているのである。
また、中高年で介護等の事情で企業定住集団を辞めた企業定住集団の正規メンバー（定住民）の雇用者たちの管理職以外での再就職が難しく、この場合、他の定住民と一緒にすると年功序列に乱れが生じて扱いにくいので、企業定住集団の中に入れようとしないという定住集団の論理が働いている。
就職氷河期世代を生まないためにも、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は、既存の企業定住集団の正規メンバー（定住民）の給与を削っても良いから、就職氷河期世代の彼らを全員企業定住集団の正規メンバー（定住民）として雇うべきだったし、非正規雇用状態の就職氷河期世代の人々を途中から再び企業定住集団の正規メンバー（定住民）として雇うべきだったが、企業定住集団社会の論理で拒絶してしまった。また、企業定住集団は、子育てが完了した女性を企業定住集団の正規メンバー（定住民）として雇わずパートとしてばかり雇うことで、男女の賃金格差を広げることにつながっている。企業定住集団への所属期間にブランクが生じると当人の社会的信用が低下するとみなして定住集団の中に入れようとしない定住集団社会の論理が原因である。
実質、企業定住集団から追い出されている旅の人状態である、非定住民の非正規雇用者同士が、相互に連帯して新たに協同組合という形の組合定住集団を作って入り、組合定住集団の定住民となって社会的発言力を確保するのも、社会問題解決のための一つの方策である。従来の生活協同組合と似たやり方であるということ。後天的定住集団社会Ａでは定住民でないと人権が保証されないため必要である。非正規雇用者同士の連帯を促進する会食の場とかを、貧困な子供向けのこども食堂同様設けるとか、ネット上につながりの場を設けるとかであるということ。もっとも、企業定住集団の正規メンバー（定住民）の定住民の滅私奉公の慣習が嫌で、精神面での自由が欲しくて企業定住集団の正規メンバー（定住民）を辞めている非正規雇用者も相当いるので、非人権的な企業定住集団の掟の二の舞いにならないよう形成される労働慣行に注意すべきである。従来の定住集団よりも緩い連帯を目指すべきだ。
また、企業定住集団、学校定住集団とかで男女共に滅私奉公、長時間残業を要求するため、男女の一方（主に女性）が仕事を止めて他方のサポート係に回らざるを得ないか、男女とも忙しすぎて結婚、子育てできない。男女共に企業定住集団で終身雇用で１００％滅私奉公することが、後天的定住集団社会Ａのメンバーの目標となっている以上、家庭や子供は後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって

不要、邪魔な存在と化している。少子化と家庭の崩壊が、企業定住集団や学校定住集団といった後天的定住集団社会Ａの論理によって進んでいる訳である。
後天的定住集団社会Ａの定住民には、何も働かなくても株式配当とか賃貸不動産の賃料のような高い収入が入って来て遊んで暮らせる資産家族定住集団とか、世襲で高い社会的地位をキープできる皇族とか議員とか医者とか、門閥、閨閥などの特権階級の定住民と、彼らに全人生滅私奉公を強いられる雇用者の立場の、実質的に奴隷の定住民がいる。高級官僚みたいに、一見社会的地位はとても高いが、実は国家の所有者一家の実質的奴隷の定住民もいる。また、定住民になれない、企業定住集団から追い出された非正規雇用者＝非定住民たちは、人外の扱いをされ、人間らしさを保証されない苦しい生活を強いられている。
後天的定住集団社会Ａは静的なため、そのまま放置すると身分が固定され、社会が停滞しやすい。後天的定住集団社会Ａの定住民は女性優位で自分の保身を優先するので、既存の社会体制を自ら変えるリスクを冒そうとはせず、むしろ、そうした社会体制の強者に惹かれ、なびき、自分たちも社会的強者、既得権益層の一員に入れてもらおうと必死になる。皇族崇拝とか、公務員採用試験への殺到とか、その典型であるということ。そしてたまったストレスを社会的弱者叩きで紛らわせるということ。同じ働かない人でも、生活保護受給者は叩くが、世襲の資産家族定住集団は叩かない。そうした後天的定住集団社会Ａの定住民たちの、社会的強者に迎合する女性優位態度が後天的定住集団社会Ａの既得権益層の維持、再生産につながっている。自分からは変われないのが後天的定住集団社会Ａの特徴である。後天的定住集団社会Ａが変わるために、個々人がより自発的に動き回ることが出来、社会を自主的に変革させる度合いの高い、先進的移動生活中心社会群Ｆ、先進的移動生活中心社会Ｇのような男性優位牧畜民社会との連携、同盟が必要な所以である。
また、定住集団内部の一体感を重視する余り、定住集団内部で周囲から浮いた成員を集団で異分子扱いして、いじめたり、追い出したり、自殺に追い込んだりする人権抑圧が恒常的に起こってしまうことも問題である。学校定住集団内部の学級定住集団でのいじめとか、後天的定住集団社会Ａの子供たちも所詮は陰湿な定住民の集まりであることを考慮に入れる必要がある。
そういう点では、後天的定住集団社会Ａは、その本質を受け継ぎながらも、大きな変革が必要であり、後天的定住集団社会Ａのメンバーにとっては、今までのように存在を隠すのではなく、その存在を表に出して公の議論の俎上に乗せ、地域定住集団社会、企業定住集団の掟自体の改良をしていくことが早急に求められると言える。

また、後天的定住集団社会Ａの抱える諸問題の原点は女社会のあり方にあるのであり、後天的定住集団社会Ａの女性たちは、隠蔽している女社会の内実を表に出して、その改革をすべきである。

おしまい！ここまで読んでくれてありがとうございますということ。

後天的定住集団社会Ａの市街住宅地とその古い体質

説明。後天的定住集団社会Ａの市街住宅地。

（１）総論
市街住宅地は、様々な物資や人間関係の集積地、交易地として捉えられ、人付き合いが一時的、流動的、匿名的で、地域定住集団のような人間関係の煩わしさがあまり無い。
後天的定住集団社会Ａの市街住宅地は、一見、バラバラな無関係な人が動き回り、個人主義、自由主義の近代的な移動生活中心社会のように見えながら、その人々は、様々な異なる企業定住集団や、企業定住集団の所有者や企業定住集団のメンバーの寄せ集め、あるいは学校の生徒や学生、教員等の寄せ集めになっている。あるいは、人々の中には、地域定住集団からの出身者も多い。そうした人々の社会心理は、例え、市街住宅地に住んでいても、伝統的な企業定住集団や定住集団、学校の社会規範に縛られた女流の古めかしい煩わしい存在になっている。それは、異なる後天的定住集団メンバー同士の寄せ集めと一時的な近居である。
あるいは、市街住宅地に古くから居住し続けている定住地主の人間

関係は、地縁ベースになっていて、地域定住集団と似ているため、定住居住生活がもたらす女流の古めかしい煩わしいものになっている。それは、典型的な後天的定住集団の生活である。

（２）商業地
商業を営む企業定住集団の所有者や企業定住集団のメンバー以外に、アルバイト、企業定住集団の非正規メンバー（流民）の流民が多い。
定住地主の不動産物件の大家と、一時的賃貸人の店子の支配従属関係がある。定住地主の人間関係は、地縁ベースになっていて、地域定住集団と似ている。
店子には、商業施設を借りる企業定住集団の店子と、住居を借りる企業定住集団の正規メンバー（定住民）、企業定住集団の非正規メンバー（流民）の店子がいる。
商業施設の企業定住集団の所有者、企業定住集団のメンバーと、買い物のため、方々から一時的に来訪する顧客、あるいは商業施設に物品を届ける物流業者が入り混じって動き回る形で存在する。

（３）工業地
その土地に定住的居住か、あるいは不在の、土地、生産設備所有の工場の企業定住集団の所有者と、そこに他の土地から通勤して、勤務する企業定住集団の正規メンバー（定住民）、企業定住集団の非正規メンバー（流民）がいる。

（４）住宅地
市街住宅地の住宅地の住民は、同じ場所に住みながらも、それぞれ所属、勤務する企業定住集団とかがバラバラであるため、一見まとまらず個人の自由で動いているが、実際は、住民各自は、彼らが所属、通勤したり、出身地としている、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団や地域定住集団の持つ伝統的な古めかしい煩わしい社会規範を身に付けており、その規範を肯定していることが多い。あるいは、古くからの定住地主も数多く存在する。そのため、後天的定住集団社会Ａの市街住宅地の住宅地の社会的体質は、新しめの多様性に富んでいる見た目と違って、旧態依然になりやすい。

（４．１）戸建て
戸建ての土地建物所有者、地主になった者については、古参者の旧住民と、新たに引っ越してきた新参者の新住民がいて、古参者の旧住民が支配的で上位者になる。
古くからの住宅地のみならず、新興住宅地においても、人々の持つ

伝統的稲作農耕民社会の社会規範を反映して、土地所有者の住民の人々の定住生活指向がそこそこ強い。ゴミ出しや町内会役員当番などの生活上の相互扶助関係もそこそこ強くなり、住民たちが長期間定住を続けると、地域定住集団に近い存在になるが、住民間で所属する企業定住集団とかが違うため、地域定住集団ほどの相互一体感は生まれない。
都市部の都心近くの住宅地では、不動産投資目的のアパートなどの部屋所有者の地主も多く、居住の流動性につながり、部屋所有者自身非居住で、居住者の賃貸者化による居住の一時化が起きる度合いが高い。

（４．２）マンション、団地
マンションや団地は、分譲の場合、戸建てに似て、部屋を所有する人々の定住生活指向がそこそこ強く、古参者の旧住民と、新たに引っ越してきた新参者の新住民がいて、古参者の旧住民が支配的である。一方、その他に、不動産投資目的の部屋所有者も多く、居住の流動性、部屋所有者自身非居住で、居住者の賃貸者化が起きる度合いが高い。マンションや団地は、賃貸の場合は、居住が一時的、流動的で居住者の匿名性が高い。

（５）リモートワーク
市街住宅地の住宅地の住民たちのリモートワークは、異なるバラバラに存在する住居に住む同じ企業定住集団のメンバー同士が、相互にネットでつながった、伝統的な企業定住集団の人間関係として捉えられる。勤務中の企業定住集団のメンバーのプライバシーが確保しやすい。企業定住集団のメンバーが企業定住集団のオフィスに通勤が不要である。企業定住集団のメンバーの企業定住集団への物理的拘束感が薄い。

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団と終身奴隷労働

本文

※この文章はエッセイであり、どこからでも自由に読み始め、読むのを中断することができます。

////

後天的定住集団社会Ａのメンバーは企業定住集団や地域定住集団の企業定住集団信仰施設とか自分の所属する「企業定住集団」の奴隷であるということ。企業定住集団に対して100％の滅私奉公と同調を要求される仕組みになっているということ。応じないと企業定住集団から追い出されるということ。
////

地域定住集団は生活共同体だが、企業定住集団は何かの実現目的を持った生活の糧を稼ぐための目標組織体だ。企業定住集団は企業だ。地域定住集団の対人関係は損得勘定を抜きにした慣れ合い、助け合いの関係だが、企業定住集団の対人関係は、利益計上、売り上げに左右され、損得勘定が前提となる。企業定住集団の対人関係は、地域定住集団の「何事も結果平等」の対人関係に比べて、「仕事ができる、できない」の職務面での能力主義、あるいは「取り入りがうまい、下手だ」のコミュニケーション面での能力主義になり、社会面での格差を生みやすい。その点、企業定住集団の人間関係は、地域定住集団のウェットな情緒的な人間関係に比べて、非情でドライな性質を含んでいる。

////

後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって企業定住集団を追い出されること、企業定住集団を失うことは生計を立てる手段を断たれることを意味し、極力避けなければいけない。

////

企業定住集団の所有者（企業定住集団の所有者）と企業定住集団の使用人（企業定住集団のメンバー）がいて、ほとんどの場合、企業定住集団のメンバーは企業定住集団の所有者の言う通りに一方的に働かせられる企業定住集団の所有者に絶対服従の奴隷的存在だ。企業定住集団のサラリーマン経営者も企業定住集団のメンバーの一種。ここに後天的定住集団社会Ａの階級社会が存在する。企業定住集団のメンバーは企業定住集団の所有者の奴隷だ。

////

さらに企業定住集団の正規メンバー（定住民）と企業定住集団の非正規メンバー（流民）の差別が存在し、そういう点で、次のの四つの階級がある。
・企業定住集団の所有者
・企業定住集団の代表（サラリー経営者）
・企業定住集団の正規メンバー（定住民）
・企業定住集団の非正規メンバー（流民）（流れ者）

////

後天的定住集団社会Ａでは村落部でも都市部でも共通に企業定住集団があり、後天的定住集団社会Ａのメンバーはそれらの企業定住集団のどれかに滅私奉公で所属して生活するというのが普通だろう。これは後天的定住集団社会Ａの農村～都市の連続性、共通性を示すまたとない証拠である。

////

後天的定住集団社会Ａの農村で、地主と小作人の労働関係は企業定住集団と同じであり、地主が企業定住集団の所有者、小作人が企業定住集団のメンバー相当で、地域定住集団よりも企業定住集団と捉えるのが妥当である。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の原型は地主と小作人のいる後天的定住集団社会Ａ農村にある。後天的定住集団社会Ａの農村が定住集団社会として生活共同体の側面をひたすら強調されるようになったのは、戦後の農地改革で、大規模地主が存在を潰されて、小作人が小規模自営農家となることで、大規模な企業定住集団の存在が薄くなったから。大規模農家化や地主、企業による土地集積が進めば、後天的定住集団社会Ａの農村で、企業定住集団の側面が復活する。

////

後天的定住集団社会Ａでは、ゲマインシャフトや、コミュニティが、地域定住集団である。後天的定住集団社会Ａでは、ゲゼルシャフト、アソシエーション、オーガニゼーション、カンパニーが企業定住集団である。

////

企業定住集団では企業定住集団の株や設備、不動産の所有者である企業定住集団の所有者と、対外的経営者の企業定住集団の代表（企業定住集団の対外代表のメンバー）が区別可能。

中小企業とかに多い同族企業定住集団では、企業定住集団の所有者と企業定住集団の代表は共通の同一人物か同一血族であることが多い。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の中の上下関係は、上から順に。
・企業定住集団の所有者（株主、所有者）
＜越えられない階級差＞
・企業定住集団の対外代表の正規メンバー（定住民）（企業定住集団の代表）
・企業定住集団の肩書付きの正規メンバー（定住民）（管理職、専門家）
・企業定住集団の無肩書の正規メンバー（定住民）（企業定住集団の普通メンバー）
＜越えられない階級差＞
・企業定住集団の非正規メンバーか、臨時のメンバー（流民）

////

後天的定住集団社会Ａの国も大きな企業定住集団と捉えられる。
・企業定住集団の所有者＝国家の所有者一家
・企業定住集団の対外代表の正規メンバー（定住民）＝首相官邸
・企業定住集団の肩書付きの正規メンバー（定住民）＝高級事務官、高級技官
・企業定住集団の無肩書の正規メンバー（定住民）＝ノンキャリア公務員
・非正規雇用の公務員

最上位の企業定住集団＝上位者の企業定住集団となっているということ。この下に上位者の企業定住集団への御用聞きの下々の企業定住集団（民間の企業定住集団）が林立している感じ。企業定住集団

にも格上の上位企業定住集団と格下の下位企業定住集団がある。

////

サラリーマン経営者の場合は企業定住集団の代表は企業定住集団のメンバーの一種で、企業定住集団の所有者にはなれない感じ。

////

後天的定住集団社会Ａでは企業定住集団の家畜のような人という言葉も広く使われており、これは、企業定住集団で企業定住集団の所有者に外に逃げ出さないように精神的首輪をつけて飼われている労働搾取対象の家畜扱いの企業定住集団のメンバー＝人畜ということであるということ。

////

企業定住集団のメンバーは選手とその生活世話管理係のマネージャーに分類され、選手が滅私奉公で企業定住集団のために尽くし、それをマネージャーが支え管理する体制になっている。
後天的定住集団社会Ａでは夫、息子が選手になり、妻、母がマネージャーになる性別役割分業を取っていることが多い。企業定住集団では選手のマネージャーの妻、母も企業定住集団のメンバー扱い。

////

後天的定住集団社会Ａの社会は、家族定住集団（血縁視点）、地域定住集団（地縁視点）、企業定住集団（仕事視点）で分けてみるのが、上手く整理できて良いだろう。

////

家族定住集団（血縁視点）、地域定住集団（地縁視点）、企業定住集団（仕事視点）も、いずれも後天的定住集団である。加入に、血縁関係は必須ではない。新参者は、どの集団組織にも加入していない真っ白な状態であることを、古参の上位者に対して示すことで加入を許される。企業定住集団の場合は、新卒であることが、加入条件として、重要視される。いったん加入して定住民となると、他の定住民の集団メンバーと、絶えず一体化して同調行動をして、上位者に忖度し続けることが求められる。企業定住集団の場合、企業定

住集団の定住民のメンバーは、周囲と行動を合わせて、周囲が帰宅するまで自分も帰らない居残り残業や、上司や古参メンバーに逆らわず、隷従することが求められる。また、企業定住集団の定住民のメンバーは、企業定住集団の収益計上に貢献するために、有能さの発揮が求められる。そこから外れた行動を行うと、集団メンバーからいじめられ、集団内で孤立し、最終的には、集団追放を受ける。企業定住集団の場合、左遷によって、人事面で冷たい仕打ちを受け、解雇によって、上位者である企業定住集団の所有者から追い出しを食らうということ。
////

後天的定住集団社会Ａでは農村集落にも企業定住集団があり、そういう意味では農村は純粋なゲマインシャフトの共同体ではなく、ゲゼルシャフトの目標達成組織の側面があると言える。農業で生計を立てていて、収支を黒字にする必要があるので、企業定住集団の出現は不可避である。農業村落の住人は共同体の定住民であると同時に、農業で収益を上げる目標を持った企業定住集団のメンバーでもある。

////

地域定住集団（地縁視点）というと後進的な農村地縁社会を連想してしまうので、大都市の企業定住集団とか官公庁とか、企業定住集団という言葉を積極的に使った方が、近代産業社会の中を生き抜く伝統後天的定住集団社会Ａがとらえやすくなるかもしれない。

////

後天的定住集団社会Ａの企業城下町の社宅に住んでいる企業定住集団の正規メンバー（定住民）の妻とか、夫の企業定住集団の内部での身分の上下関係に従って妻同士で支配従属関係で行動しているので実質企業定住集団のメンバー扱いなんだと思うということ。

////

企業定住集団信仰施設（神社）と企業定住集団は同じ企業定住集団で同じ行動原理、行動心理で動いていると言えるということ。

////

・国の企業定住集団＝宮（みや）
・国の企業定住集団の所有者＝宮司、宮様（国家の所有者）
かなということ。

国家の所有者一家の人たちがＸＸ宮と名乗るのはここら辺と関係ありそう。

////

ここら辺、後天的定住集団社会Ａと他の定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄの国との比較も気になるところ。

////

後天的定住集団社会Ａの社会学者は企業定住集団の所有者の立場の人たちの既得権益の実態を分析、暴露したほうがいい。より下の企業定住集団のメンバーの立場の人たちへの調査研究ではわからない本当の後天的定住集団社会Ａの階級社会（上級国民と下級国民の区別、差別）のあり方を明示化できるから。

////

後天的定住集団社会Ａでは、以下の通りである。
・企業定住集団の所有者＝上級国民（企業定住集団の所有者）
・企業定住集団のメンバー＝下級国民（企業定住集団の使用人）

////

企業定住集団の所有者と企業定住集団のメンバーとの関係は、家主（家族定住集団の所有者）と借家族メンバーの関係とも似ている。企業定住集団における給与の企業定住集団の所有者によるピンハネ強制と家族定住集団における家主による家賃の支払い強制とは仕組みが同じ。

////

あるいは地縁の共同体（地域定住集団）と事業の共同体（企業定住集団）で、両方ともゲマインシャフトの面を持っているとも言える。

////

「企業定住集団」と「組織」の違いが分かりにくい。どちらも特定目的達成のための組織を表す点では同じ。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団には「ＸＸ企業定住集団」だけでなく「ＸＸ組織」という名称の企業定住集団もそうとうあるのだけど、企業定住集団のメンバーはまっとうな印象があるのに対して、組織メンバーはやくざ色に染まった印象になってしまう。

////

後天的定住集団社会Ａのメンバーにとっての「企業定住集団」＝自分たちが持つ共通目標実現、目標維持に向けての自分たちの精神的統合を象徴する精神的、物理的な構築物、構築体。

この構築物、構築体に自分たちが信仰する神が宿ると企業定住集団信仰施設になる。

////

現代先天的定住集団社会Ｂの言語での企業定住集団の意味を調べたがだいたいこれと似たような意味だった。古代先天的定住集団社会Ｂの言語だと神の依り代となるところという感じで、後天的定住集団社会Ａの言語と似ているということ。後天的定住集団社会Ａは先天的定住集団社会Ｂの文化を取り入れたので似るのは当然か。

////

後天的定住集団社会Ａでは「企業定住集団」はとても重要な漢字キーワードだ。「企業定住集団への加入」も「企業定住集団」だし、「企業定住集団」も「企業定住集団」、「出勤、企業定住集団からの退勤か脱退」も「企業定住集団」企業定住集団は後天的定住集団社会Ａを解明するうえでとても重要な概念だ。というか「社会」という言葉にも「企業定住集団」が使われているし。就職よりも「企業定住集団へ加入して職を得ること」が重んじられるのもあるし。

////

ただ、どうしてもわからないのが「企業定住集団」（営利企業）の文字の並び順を入れ変えただけの表現の「社会」がかなり違う意味合い（人間、生物の心的相互作用を伴った集まり）で使われていることで、考えれば考えるほど混乱するということ。代替表現もないみたいだし、困る。

////

「組織」と「企業定住集団」の使い分けの基準は、以下の通りである。

企業定住集団＝企業定住集団自身が入居するビルの建物とか企業定住集団信仰施設の建立物みたいな構築物、シンボル、依り代を伴う人々の相互作用、ネットワーク。神を伴う宗教的存在。

組織＝特定のシンボル、構築物、依り代を伴わないその時々の変幻自在な人々の相互作用、ネットワーク。神を伴わない非宗教的存在。

////

企業定住集団、組織と地域定住集団との違いは、以下の通りである。

企業定住集団と組織は、何らかの目的があって人為的に発生し構築された人間同士の集団。
地域定住集団は、特定の目的を持たない自然発生の、互いに共通、同一属性を持った人間同士の集団。

////

後天的定住集団社会Ａの俳句結社、社中では、結社が発行する雑誌が神の依り代、シンボルとして働いていると言える。

////

この点で後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって企業定住集団は神がかった宗教的存在であると言える。企業定住集団の神は、天照大御神に代表されるような女性、巫女である。企業定住集団を中心として回る後天的定住集団社会Ａのメンバーの対人関係が女流なの

で、企業定住集団の精神の供給源は女性、巫女であると考えられる。

////

企業定住集団の共同体への変化が後天的定住集団社会Ａの官公庁や企業で顕著に見られる。目的集団の無目的化が頻発している。あるいは企業定住集団の存続それ自体が目的となった時点で企業定住集団は共同体へと変化する。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団（企業定住集団、官公庁・・・）は定住民が構築するので、どうしても共同体へと変化しやすい。

////

後天的定住集団社会Ａでは就職という言い方を止めて企業定住集団へ加入して職を得ることという言い方メインに切り替えた方が社会の実態に合っている。

////

後天的定住集団社会Ａで何か文科省とかトヨタ自動車とか、官公庁や大企業が、箱物的な構築物の実体があるように思えてしまう感覚が「企業定住集団＝箱物感覚」である。

実際は、官公庁も大企業も、単にその時々の人々の集合体に過ぎず、箱物的実体はないのだけれど、思わずそう感じてしまうのが後天的定住集団社会Ａの「企業定住集団＝箱物感覚教育」洗脳の実態である。洗脳はテレビとかで企業定住集団自身が入居するビルを繰り返し放映することで行われる。

////

ＸＸ企業定住集団という箱物に企業定住集団への加入するというのが後天的定住集団社会Ａのメンバーの企業定住集団への加入感覚である。この「企業定住集団＝箱物」感覚が後天的定住集団社会Ａを

特徴付けている。

////

後天的定住集団社会Ａの官公庁も企業もみな「企業定住集団」だ。

企業定住集団＝利潤追求企業だけが「企業定住集団」だという考えは誤りだ。

企業定住集団という用語の出来が悪い。「企業定住集団」は、民間企業に限ったものではなく「官公庁や役所」の世界にも広く見られるからだ。

農村にも集落ごとに「企業定住集団」がある。「企業定住集団」は都会に限ったものではなく、村落にも普通にある。

////

官公庁、役所も「官公庁タイプの企業定住集団」と呼ぶようにした方が、官僚、役人の世界が持つ「企業定住集団」の特徴を示すうえでは望ましい。

////

「公社」という呼び方はすでにある。ＸＸ県住宅供給公社など。

////

「官公庁」よりは「官公庁タイプの企業定住集団」などの呼び方の方が「企業定住集団」っぽくていいような気がする。

////

後天的定住集団社会Ａの農家も、自分たちの住んでいる集落に建立した企業定住集団信仰施設を担いでいる場合は、企業定住集団のメンバーとみなされる。

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団のメンバーは大規模企業定住集団に限った存在ではなく、官公庁、地域の自営業者等に広く見られる普遍的な存在である。

////

そして企業定住集団が神の依り代として宗教的な意味合いを持つことから、後天的定住集団社会Ａで企業定住集団のメンバーと言われる人は、何らかの形で全て企業定住集団の信仰施設の宗教の信者として扱うことができる。

これが、後天的定住集団社会Ａ後天的定住集団社会の固有の宗教の本当の威力であり、後天的定住集団社会Ａのメンバーが後天的定住集団社会Ａを神の国呼ばわりする根拠である。後天的定住集団社会Ａ後天的定住集団社会の固有の宗教は企業定住集団を通じて後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーを普遍的に支配している。

////

後天的定住集団社会Ａのメンバーが作りたがる企業定住集団は、全て後天的定住集団社会Ａ後天的定住集団社会の固有の宗教と深く結びついた存在であり、その頂点に国家の所有者一家が統べる神宮がある。

宮＝後天的定住集団社会Ａの最高権力者である国家の所有者一家が営む企業定住集団。

////

後天的定住集団社会Ａのメンバーは企業定住集団を作って企業定住集団の所有者になったり、企業定住集団のメンバーになったりすることで宗教者として活動しているのである。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは無宗教では決してなく、企業定住集団を信じる宗教者なのである。後天的定住集団社会Ａのメンバーは『企業定住集団信仰』の教徒なのである。

////

後天的定住集団社会Ａで無職の人、引きこもりの人、企業定住集団の非正規メンバー（流民）が嫌われるのは、彼らがどこの企業定住集団にも正式に属しておらず、無宗教者であり、『企業定住集団信

仰』から外れたアウトサイダーだからである。

どこかの由緒ある企業定住集団に正式に属していることこそが後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって相手を信用する根本的な決め手となるのである。

////

後天的定住集団社会Ａでは、企業定住集団に属さない人は人間扱いされない。

企業定住集団のメンバーであることが、後天的定住集団社会Ａで生きていく上で根本的に重要である。

////

後天的定住集団社会Ａで企業定住集団に属することは後天的定住集団社会の固有の宗教を信ずる宗教者であるのと同義であり、後天的定住集団社会の固有の宗教は企業定住集団という存在を通じてキリスト教国家やイスラム教国家みたいに、後天的定住集団社会Ａの国家の内部で普遍的宗教として君臨する。

////

企業定住集団での業務は企業定住集団信仰施設の職務であり、宗教的な任務なのである。企業定住集団自身が入居するビルの中に企業定住集団信仰施設が置かれることが多いのも、企業定住集団が神がかった存在であることを示している。後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって企業定住集団とかへの出勤は企業定住集団信仰施設へのお参りと感覚が同じで神聖な行為なのである。

毎日定時に企業定住集団とかに出勤することにこだわる後天的定住集団社会Ａのメンバーの姿は見ていて不気味だが、定時出勤が『企業定住集団信仰』の宗教的教義、宗教的義務行為の一つなのだと考えれば納得が行く。

定時出勤の根本には稲作農耕民の水田稲作作業での集落企業定住集団のメンバー一斉招集がある。

////

その点、後天的定住集団社会Ａにおける企業定住集団業務は潜在的にすべて宗教がかった行為であると見ることができる。

後天的定住集団社会Ａのメンバーが長時間残業しがちなのは、企業定住集団の信徒としての信仰宣言としての意味合いを持っている。なるべく長時間、企業定住集団のために働くこと、自分のプライベートをひたすら無にして何でも企業定住集団のために尽くすことがより企業定住集団への信仰が篤いと見なされ称賛されて、後天的定住集団社会Ａのメンバーの企業定住集団への宗教心を満足させる。

企業定住集団のメンバーたちが企業定住集団の所有者や企業定住集団の代表を担いで練り歩く神輿、これが企業定住集団の業務の本体である。

////

長時間残業するほど、その企業定住集団への信仰心が篤いことを示すので、企業定住集団のメンバーはここぞとばかりにこぞって残業するのだ。

逆に短時間業務で帰企業定住集団してしまう企業定住集団のメンバーは所属する企業定住集団への信仰心が薄いと見なされ非難されることになる。

育児休業や障害者雇用で所属する企業定住集団に負担をかける企業定住集団のメンバーも企業定住集団の運営の足を引っ張る邪魔者として嫌われる。

////

後天的定住集団社会Ａではある企業定住集団のメンバーになるには厳格な構成員適格性チェックがなされるのが普通である。

また、新たに企業定住集団のメンバーになる人は今までどこの企業定住集団にも正式に属したことのない新人が優先される傾向がある。

////

後天的定住集団社会Ａでは企業定住集団を通さない業務は正式な業務と見なされず、無視される。

書籍出版で出版企業定住集団の編集を通さない自主出版書籍が、それだけの理由でまともな評価を受けず文壇から無視されがちなのはこの一例である。

////

学生は企業定住集団のメンバーではない。

企業定住集団は何らかの生業を営むところであり、そのためには何らかの金儲けや税収のような収入を得ることができることが企業定住集団のメンバーである前提条件になる。

学生はまだ生業をして稼いでいないので正式な企業定住集団のメンバー扱いされないのである。

////

専業主婦は夫の勤務する企業定住集団経由で企業定住集団のメンバー扱いされる。

専業主婦が、一見無職の人間と変わらぬ存在でありながら、社会的に大きな顔をしていられるのは夫という企業定住集団のメンバーの生活管理者として、夫が属する企業定住集団の一員だからである。

////

後天的定住集団社会Ａは後天的定住集団社会の固有の宗教を頂点とする企業定住集団信仰の宗教社会である。後天的定住集団社会Ａのメンバーは無宗教ではなく、あまねく『企業定住集団信仰』の信者である。

////

後天的定住集団社会Ａの国家という大きな企業定住集団の所有者、それが国家の所有者一家だ。

////

後天的定住集団社会Ａの仏教施設は宗教的な企業定住集団と呼ばれ、後天的定住集団社会Ａに特有な企業定住集団の一種とみなされる。

後天的定住集団社会Ａに特有な企業定住集団をベースに仏教をはじめとする外来宗教の信仰がその上に乗っかっているのが宗教的な企業定住集団である。

後天的定住集団社会Ａのメンバーが言う宗教的な企業定住集団には仏教のみならずキリスト教、イスラム教の教会やモスクも含まれる。

////

後天的定住集団社会Ａの新興宗教も見かけは派手で一見従来の宗教と異質だがやっていることの内容は従来の企業定住集団と共通な面が多いのではないだろうか。

外来宗教も後天的定住集団社会Ａのメンバーに浸透すると全て企業定住集団化するのである。

////

企業定住集団のメンバーは、所属する企業定住集団への無限定な信仰、帰依が求められる。

これを悪用したのがブラック企業定住集団で、企業定住集団のメンバーの企業定住集団への信仰心を逆手にとって、企業定住集団の所有者や企業定住集団の企業定住集団の管理職メンバーが企業定住集団の一般メンバーをひたすら労働力として搾取するのである。

////

山本七平が指摘する『日本教』と、当方の主張する後天的定住集団社会Ａの企業定住集団信仰、『企業定住集団信仰』への指摘とは、ともに後天的定住集団社会Ａを宗教社会とみなす点で大きな関連があるのではないだろうか。

違いは、以下の通りである。

山本七平の言う『日本教』は、キリスト教、イスラム教のような一神教を受け入れないと考える。
当方の主張する企業定住集団信仰、『企業定住集団信仰』では、企業定住集団をベースにその上に仏教、キリスト教、イスラム教といった外来宗教が上部に仮住まいのかたちで乗っかる形で後天的定住集団社会Ａで社会的に受容されていると考える。

////

キリスト教が後天的定住集団社会Ａであまり信者が増えないのは、権力者による大弾圧の歴史が、後天的定住集団社会Ａのメンバーに信じるとひどい目にあう怖い宗教という認識を広めてしまったのが原因で、もしも過去に弾圧されていなければ『企業定住集団信仰』の上部構造になる形で普通に受容されていただろう。後天的定住集団社会Ａで共産党の党員が増えないのと同じ原因である。

////

後天的定住集団社会Ａにおいて、企業定住集団のメンバーは企業定住集団の宗教的信者である。

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は、単なる営利企業を超えた宗教的存在なのである。

////

後天的定住集団社会Ａで、社会研究者をやるには、どこの結社にも入ってはダメ。

企業定住集団に入った時点でその研究者は宗教者化して、客観的、科学的視点が失われるためである。

////

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ牧畜民による外資系企業は、後天的定住集団社会Ａに特有企業定住集団とは振る舞いが大きく異なり、正式には企業定住集団ではない。

後天的定住集団社会Ａでは、Youtuber、Google Adsenseブロガー、個人事業主は企業定住集団のメンバー扱いされず、社会的信用があまりない。正式な企業定住集団に入っていないからだということ。

////

地域定住集団はゲマインシャフト、生活のベースとなる共同体であり、企業定住集団はその上に成り立つ特定目的を遂行する組織体であると言える。

地域定住集団が基盤構造、下部構造であり、企業定住集団は上部構造である。

////

後天的定住集団社会Ａで企業定住集団の非正規メンバー（流民）の待遇が悪いのは、正式な企業定住集団のメンバーではなく、社会的信用が薄いためだ。

////

後天的定住集団社会Ａでは大きな企業定住集団の所有者か企業定住集団のメンバーであることが、社会的信用を得て、社会の中で昇進したり生き抜くための必須条件になっている。

後天的定住集団社会Ａでは属する企業定住集団が大きくて安定度があるほど、その企業定住集団の所有者、企業定住集団のメンバーの社会的信用度が増す。後天的定住集団社会Ａで公務員の社会的信用度が大きく人気なのは、官公庁が後天的定住集団社会Ａで一番大きくて安定した企業定住集団だからだ。

////

国家の所有者一家は昔から今に至るまで後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の所有者だ。

////

企業定住集団にも支配的な権力を振るう企業定住集団（支配企業定住集団）と従属的企業定住集団（従属企業定住集団）があり、官公

庁は支配企業定住集団でそれに統治される民間企業は従属企業定住集団だ。

後天的定住集団社会Ａのメンバーが公務員になりたがるのは、支配企業定住集団のメンバーになって威張ることができるからだ。

////

後天的定住集団社会Ａの官邸は、もともとは後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の所有者の国家の所有者と、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団（後天的定住集団社会Ａの国の維持発展を目的とした仕事をする結社）の上級企業定住集団の正規メンバー（定住民）の官僚との間に割り込んで入った、終身でない取り替え可能な臨時の非正規の中間支配者みたいなものであるということ。
しかし、近年、官邸メンバーが官僚の人事権を握ることによって、メインの後天的定住集団社会Ａ企業定住集団の所有者＝国家の所有者に次ぐサブの後天的定住集団社会Ａ企業定住集団の所有者の地位に就くようになって、その社会的地位を大きく向上させたと言える。

////

後天的定住集団社会Ａにおいて、企業定住集団と国がどういう関係にあるかを明らかにする必要がある。

国とは統治機構とその地域をまとめた称名で、統治の目的を遂行するために結成された人為的な組織結社が、国レベルの「企業定住集団」＝「官公庁や役所」と言える。

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の所有者のメンバーが「宮」である。「官公庁や役所」は後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の所有者に従属する企業定住集団のメンバーである。

////

所属する企業定住集団を持たない人を、従来の無職の人に代わって「企業定住集団が無い人」と呼べばいいのではないか？

食い扶持を得る収入源を持たない人が無職の人なんだけど、後天的定住集団社会Ａではその用語の使い方がどこの企業定住集団にも所

属していない浮浪者、浪人の意味合いで使われることが多く、本来の意味と乖離しているので。

ただし、「企業定住集団が無い人」だとフリーランスで稼ぐ人も含むことになる。無職の人は稼げていないのでそこが違いになる。

////

後天的定住集団社会Ａにおける企業で働く人とは、以下の通りである。
（１）社会的に自立できる能力を持った人
（２）生計を立てるためどこかの企業定住集団に所属している人（企業定住集団の所有者か企業定住集団のメンバーであること）
の掛け合わせで使われることが多い用語だと思う。

企業定住集団に属さないフリーランスの人は（１）のみを満たすということ。
企業定住集団にしがみつく無能企業定住集団のメンバーは（２）のみを満たすということ。

上記の（１）でも（２）でもない人が「無職」の人。

////

後天的定住集団社会Ａでの社会的信用度は、以下の通りである。

企業定住集団の所有者＞企業定住集団のメンバー（とその主婦か主夫）＞実績のあるフリーランサー＞実績があまりないフリーランサー＞無職。（生計が立てられない人。）

これは、企業定住集団の規模や安定度、ホワイト度にも左右されるが、同じレベルのアウトプットを出している場合、企業定住集団のメンバーの方がフリーランサーより信頼される。

////

後天的定住集団社会Ａの大学を企業定住集団として捉えると、
・企業定住集団の所有者＝理事長
・企業定住集団の代表＝学長
・企業定住集団の正規メンバー（定住民）（有給）＝常勤の教授、

准教授、助教
・企業定住集団の非正規メンバー（流民）（有給）＝非常勤講師
・企業定住集団のメンバー付き見習い者（無給）＝学生、院生

常勤（企業定住集団の正規メンバー（定住民））と非常勤（企業定住集団の非正規メンバー（流民））の間に大きな身分的格差がある。
有給の企業定住集団のメンバーと無給の企業定住集団のメンバー付き見習い者の間に大きな身分的格差がある。

後天的定住集団社会Ａの大学では、常勤企業定住集団の正規メンバー（定住民）以外は期限が来ると追い出される。企業定住集団の非正規メンバー（流民）は雇い止め、企業定住集団のメンバー付き見習い者は卒業か退学だ。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団、官公庁では、出勤＝出勤だが、企業定住集団からの退勤か脱退は退勤か退職かの判断が難しかったりする。企業定住集団からの退職については、学生の卒業同様に、企業定住集団からの卒業とかいう言葉を使った方が良いのではないか。
////

後天的定住集団社会Ａの人たちは優秀な企業定住集団のメンバーになろうとするけど、それだと一生使用人のままで、企業定住集団の所有者にこき使われる人生になる。

後天的定住集団社会Ａの人たちは企業定住集団の所有者を目指した方が良い。

////

後天的定住集団社会Ａのメンバーは自分が参画している企業定住集団＝企業定住集団自身の規模や安定度、威信、企業定住集団自身から得られる収入の多さをひたすら自慢する。また、企業定住集団自身への自分の寄与度を重視し、企業定住集団自身の発展にひたすら尽くそうとするということ。企業定住集団自身に魂を奪われ、企業定住集団自身のために自己犠牲するということ。企業定住集団自身

のこと以外は何も考えられず、頭の中が白紙状態になっている。企業定住集団のメンバーは、所属する企業定住集団のために働くことが生きがいで、企業定住集団の所有者や企業定住集団の上級メンバーから何か仕事をもらわないと生きていけない感覚に襲われるようになる。企業定住集団の内部で仕事がないこと、企業定住集団のために仕事をしないことを悪とみなすようになる。これが企業定住集団のメンバーたちが企業定住集団の仕事中毒になる原因である。企業定住集団の持つ中毒性＝企業定住集団の毒の仕業であるということ。

////

この企業定住集団自身を自国に置き換えるとそのまま後天的定住集団社会Ａの右翼や戦前の後天的定住集団社会Ａ軍、戦後の官僚の考え方になるということ。また企業定住集団自身を自分の企業定住集団と捉えると、長時間残業や台風時の出勤を当然とし、全てを自分の勤務する企業定住集団のために捧げる企業定住集団人間的な考え方になるということ。

////

企業定住集団自身が自分の全てであり、自分のことを無にして企業定住集団自身の発展のために尽くそうとするのが後天的定住集団社会Ａのメンバーの典型である。

////

企業定住集団自身が全ての考え方は、フェミニズムとかリベラルなどの後天的定住集団社会Ａの思想結社についても言えて、自分の結社＝企業定住集団自身のために全てを捧げる生き方が称賛される。

////

後天的定住集団社会Ａの公務員とか多くの会企業定住集団のメンバーとか、企業定住集団自身＝自分の勤務する企業定住集団以外にリソースを割く副業や、企業定住集団自身のために働く労力をセーブする休業が許されない。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、企業定住集団の所有者も企業定住集団の代表も企業定住集団のメンバーも、企業定住集団自身に自分の人生を全て捧げることを互いに強要し、それを破ったものは企業定住集団から追放される。

////

後天的定住集団社会Ａの学校の部活で生徒たちが自校の名誉のために練習を頑張ることを強要されるのも、学校を企業定住集団の一種あるいは企業定住集団へ加入して職を得ることへの準備機関と考えれば、至極当然のことである。後天的定住集団社会Ａのメンバーは企業定住集団のメンバーや企業定住集団のメンバー見習いが企業定住集団自身の名誉のために我が身をなげうって自己犠牲するのを称賛する。戦中の特攻隊が称賛された理由もこれと同様である。

////

問題は、企業定住集団の上層部（企業定住集団の所有者や企業定住集団の代表、企業定住集団の管理職メンバー）の私的な名誉や利益のために企業定住集団の下層部の企業定住集団のメンバーたちが一方的に奴隷のように働かされることが、上層部の企業定住集団の所有者企業定住集団のメンバーだけでなく、下層部の企業定住集団のメンバーたちや企業定住集団の非正規メンバー（流民）たちも当然のように見なしている点である。将来、年功序列で下層から上層へと昇進すること、あるいは企業定住集団の正規メンバー（定住民）になれることを夢見ているからであるということ。

////

後天的定住集団社会Ａでは右翼だけでなく、左翼も企業定住集団自身＝自分たちの結社の利益を、自分自身の私的な利益よりも優先させることが求められる。企業定住集団自身の利益＝自分個人の利益とみなすことが後天的定住集団社会Ａで生きていくためには必須である。たとえそれが、企業定住集団の上層部による下層部への一方的搾取であったとしても当然視され許される。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団においては、有給休暇とかも、企業定住集団のメンバーたちが企業定住集団に尽くすための英気を養うための気分転換や休養の機会として専ら必要とされる。企業定住集団のメンバーが企業定住集団自身の発展維持に寄与しない私的なライフワーク実現のために企業定住集団の休暇を使うことは歓迎されない。それらは企業定住集団を引退した後の余生で実現す

ることを企業定住集団から要求される。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は、その依り代として、何かしらのかたちで建物を要求することが多い。出雲大社の建物とか典型だし、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団で企業定住集団自身が入居するビルを建設することが好まれるのも、このことと関係ある。企業定住集団自身が入居するビルに企業定住集団信仰施設があるのも、企業定住集団自身が入居するビルの持つ宗教性を表している。

////

企業定住集団中心主義が後天的定住集団社会Ａのメンバーを覆うイデオロギーになっている。それは参画している企業定住集団を持っている人たち＝企業定住集団の所有者、企業定住集団のメンバーには都合が良いが、企業定住集団の所有者、企業定住集団のメンバーでない人＝参画する企業定住集団が無い人（フリーランサー）、参画する企業定住集団を能力的に持てない人（障害者とか）には一方的に不利益な考え方、仕組みとなっている。

////

一人に一つの企業定住集団を割り当てる考え方＝自分の企業定住集団を自分で持てるようにすること、他人の企業定住集団に企業定住集団のメンバーとして隷属しなくて済むようにすることが、後天的定住集団社会Ａを生きやすくするうえで必要かもしれない。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、企業定住集団自身発展に対する各企業定住集団のメンバーの貢献度の査定が相対評価で行われ、企業定住集団を前進させた有能な企業定住集団のメンバーと足を引っ張った無能な企業定住集団のメンバーとの両方を生み出す。企業定住集団の内部で有能とされた企業定住集団のメンバーが無能とされた企業定住集団のメンバーにマウントする。無能企業定住集団のメンバーへの企業定住集団の内部いじめが頻発する。一

方、有能すぎても嫉妬され、出る杭として打たれる。

////

企業定住集団の内部の対人関係の雰囲気は企業定住集団の風土と呼ばれ、楽に企業定住集団の発展維持を実現できる企業定住集団の風土はおっとりのんびりしたものとなる。一方、ワンマン企業定住集団の所有者や企業定住集団の代表とかが企業定住集団自身＝自己の栄誉のために企業定住集団の目標、ノルマを必要以上に高く設定することで、企業定住集団のメンバーにとって苛酷な企業定住集団の風土となることも多い。

////

企業定住集団のメンバーは、企業定住集団の内部の一体性を維持するために、何らかの形で、企業定住集団の上層部が一方的に決めたその企業定住集団独自の規格、型に当てはまった振る舞いをすることが求められ、それが企業定住集団の規則である。学校の場合は校則となる。企業定住集団の内部で使う用語とかが企業定住集団毎に違い、使う用語でその企業定住集団の正当な企業定住集団のメンバーかどうかが分かる。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は閉鎖的、排他的で、異なる企業定住集団間でのやり取り、融通の度合いが薄く、企業定住集団毎に他の企業定住集団と企業定住集団自身を差別化するために他の企業定住集団とコンパチビリティの無い独自の規格を持とうとする傾向が根強く、これが規格の標準化に乗り遅れるガラパゴス化をもたらしている。かつての後天的定住集団社会Ａメーカー製造の携帯電話がこの典型である。

////

企業定住集団の規格から外れた企業定住集団のメンバーは、規格外の不良扱いされ、企業定住集団を追放される。

////

後天的定住集団社会Ａの社会の仕組みが、人々がどこかの企業定住

集団のメンバーであることを前提に組まれていることが、企業定住集団をリストラで追い出される人々や、どこの企業定住集団にも正式に入れない人々（企業定住集団の非正規メンバー（流民））の急激な増加に伴って、社会の生きづらさを生み出しているということ。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の仕組みが、人々が一つの企業定住集団に企業定住集団へ新卒で加入したら引退までずっとい続けるエスカレーター人生、企業定住集団のメンバー人生を前提に組まれていることが、人々の他の企業定住集団への転属、企業定住集団への中途加入を困難にし、企業定住集団の内部の換気を悪くし、最初に誤って入った企業定住集団にそのまま飼い殺しになって人生の無駄遣いをする人たちを数多く生み出している。

////

人生の後戻り、やり直しが二度とできない一方通行のモノレール、ベルトコンベアーみたいな仕組みを後天的定住集団社会Ａの企業定住集団が内蔵していて、それが後天的定住集団社会Ａの生きづらさにつながっている。企業定住集団が用意するレールから外れると転落人生が待っているとみなされ、チャレンジや失敗を恐れる事なかれ主義を生み出している。

////

後天的定住集団社会Ａの人たちは鉄道が好きだけど、それは人生の走行経路をレールとして用意してくれることを企業定住集団に対して望む後天的定住集団社会Ａのメンバーの深層心理を反映しているのではないか。

////

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、企業定住集団への自分の人生を投げうっての無私の貢献と、その見返りとしての企業定住集団の内部での高い地位や高い収入を得ることを望み、また他人にもそれと同じことを求める。ところが、後天的定住集団社会Ａのメンバーは前者の企業定住集団への無私の貢献を、企業定住集団の内部昇進の望めない企業定住集団の非正規メンバー（流民）のアルバイトに

も求めるようになっている。これは見返り無しの無償労働の強制であり、おかしい。

////

後天的定住集団社会Ａのメンバーには企業定住集団からの精神的自由、解放が、後天的定住集団社会Ａを住みやすくする上で必要である。企業定住集団への無私の貢献はほどほどにして自分の私的な人生やライフワークを楽しめる雰囲気づくりが社会的に必要である。心を全て企業定住集団に捧げるのではなく、一定の私的領域を確保する自由が社会的に求められる。

////

最近進んでいる企業定住集団での時短勤務とか育児休業とか、企業定住集団からの自由につながっており、後天的定住集団社会Ａのメンバーが企業定住集団の束縛を逃れて、精神的に余裕を持ち、楽になれているので、後天的定住集団社会Ａ的には望ましいことである。

////

一方、女流の後天的定住集団社会Ａのメンバーには、自己保身への願いが強く独り立ちが不安で、絶えずどこかの企業定住集団に頼りたい、所属していたいという心理が強いので、これが企業定住集団への所属への欲求、企業定住集団の正規メンバー（定住民）になりたい欲求を生み出している。これが結果的に後天的定住集団社会Ａのメンバーの企業定住集団への隷属、企業定住集団からの精神的自由の無さにつながっている。

////

現代後天的定住集団社会Ａでは、企業定住集団の束縛がきつすぎる。一つの企業定住集団に一生を捧げる生き方、今いる企業定住集団に全時間を費やす生き方は、それに対する企業定住集団からの見返りが得られる保証が無いのであれば、保険金の降りない保険への強制加入みたいなもので、人生の損につながる生き方であり、望ましくない。

////

だが、こうした、企業定住集団のメンバーは企業定住集団に全てを捧げるべきだとする生き方を自分だけでなく周囲の他人にも当然のこととして要求する後天的定住集団社会Ａのメンバーが多すぎる。企業定住集団の先輩からそう強要されたから後輩にも同じことを要求しようとか、周囲の企業定住集団のメンバーはみなそうしているから自分も同調しないと追い出されるとか考えているのだろう。

////

夫婦が共働きで夫婦そろって企業定住集団のメンバーとかだと、夫婦とも企業定住集団に全てを吸い取られ、家庭を運営したり子育てをする精神的余裕がなくなる。そうかと言って企業定住集団を辞めて子育てとかに専念すると、企業定住集団への所属歴、貢献歴にブランクが空くと、次の企業定住集団に加入しにくくなり、家庭の経済面で危機を迎える。後天的定住集団社会Ａの少子化の原因はそうした企業定住集団の深層構造にある。

////

後天的定住集団社会Ａに精神的余裕をもたらすには、後天的定住集団社会Ａのメンバーが自分のいる企業定住集団との付き合いを限定的にすること、他人に企業定住集団への全人格的没入を要求しないことが求められる。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は目標達成のための一時的組織のゲゼルシャフトであり、生活共同体的ゲマインシャフトの定住集団と違って、本来限定的な付き合いで良いものである。ところがそうした企業定住集団に、地域定住集団のような無限定的な全人格的付き合いを持ち込もうとする傾向が後天的定住集団社会Ａのメンバーには強い。新企業定住集団からの卒業への加入や企業定住集団への終身所属へのこだわりとかその典型だということ。

////

後天的定住集団社会Ａの学校は企業定住集団のメンバーになるための訓練、企業定住集団のメンバー見習い候補生、企業定住集団への新規加入メンバー候補生育成の場所だ。学校の部活が企業定住集団

のメンバーになるための心得を叩きこむ場になっている。部活に土休日を含めた全生活時間をつぎ込む学校の生徒たちは知らず知らずのうちにメンタルが企業定住集団のメンバー化しているのである。学校の教師はその先導役だ。
////

学校から企業定住集団への白紙純真無垢状態のままでの転生、企業定住集団へ加入して職を得ること（白紙転生）が後天的定住集団社会Ａの企業定住集団への新規加入メンバーには求められ、その深層には企業定住集団への新規加入メンバーの新卒採用、新企業定住集団からの卒業への加入への後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の所有者、企業定住集団のメンバーたちの宗教的なこだわりがある。生徒たちの品行面での神聖な白紙純真無垢状態を保つことが学校には求められ、それが後天的定住集団社会Ａの学校教師が聖職とみなされる所以である。
こうした新企業定住集団からの卒業への加入者の神聖な白紙純真無垢状態への信仰は、自分以外の男性を知らない無垢な処女への信仰と似たようなものである。新企業定住集団からの卒業への加入者の処女性を後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は暗黙のうちに求めているのだ。後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって企業定住集団への加入は新入りの時の一回のみなのが望ましいとされており、他の企業定住集団への転属は処女性を失い他の企業定住集団経験済みの中古状態になるので好まれない。
あるいは、新企業定住集団からの卒業への加入の時点で、企業定住集団への新規加入メンバーの未経験の穢れを知らない子供の、無垢性、白紙性、純真性が、その企業定住集団を経験することで失われ、その企業定住集団独自の色に色づけされて、他の企業定住集団転用が効かなくなり、一生その新企業定住集団からの卒業への加入した企業定住集団で過ごさざるを得ないような信念を後天的定住集団社会Ａの様々な企業定住集団が同時に持っており、またその信念を企業定住集団のメンバーに植え付けることで、企業定住集団のメンバーの一つの企業定住集団への一生奴隷化を正当化している。
////
後天的定住集団社会Ａのメンバーにとっては最初に入った一つの企業定住集団で一生を過ごすこと、生涯を一つの企業定住集団で過ごすこと、生え抜きの生活が理想となっている。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団のメンバーには、一生を一つの企業定住集団の所有者の支配下で奴隷状態で暮らすこと、自分の一生を企業定住集団の所有者に捧げることが積極的に求められる。企業定住集団のメンバーは企業定住集団の所有者の私的なおもちゃである。その点、後

天的定住集団社会Ａの企業定住集団は、社会全体を広く覆うマゾヒズムの供給源である。企業定住集団のメンバーにとって、一つの企業定住集団の所有者に生涯の忠誠を誓うこと、企業定住集団の所有者や企業定住集団の上級メンバーに逆らわずにひたすら忖度することが理想的なふるまいとされる。企業定住集団のメンバーは企業定住集団の所有者に逆らって企業定住集団の所有者の機嫌を損なうと企業定住集団から追い出されてしまい、行くところがなくなって生きていけなくなってしまうのが当然とされる。企業定住集団の所有者＝上位者への反抗は厳禁であり、言論の自由は存在しない。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は企業定住集団のメンバーらによる修行の場として位置づけられている。企業定住集団のメンバーが企業定住集団への加入～出勤したら、休んだり、怠けたりすることは禁物で、絶えず企業定住集団のために汗水流して働くことで、それが即人格向上の修行とみなされるのである。そうして企業定住集団のメンバーが勝手に頑張ってくれるので、企業定住集団の所有者は何もせず、働かず、安穏に暮らすことができる。
この典型が後天的定住集団社会Ａの国家のメンバー（後天的定住集団社会Ａの国家の企業定住集団のメンバー）と国家の所有者一家（後天的定住集団社会Ａの国家の企業定住集団の所有者）の関係であるということ。後天的定住集団社会Ａでは労働の義務があるのは企業定住集団に隷属する企業定住集団のメンバーだけで、企業定住集団の所有者は働かなくてよい。企業定住集団の所有者であるというただそれだけで尊敬され、企業定住集団のメンバーが企業定住集団の所有者のために自発的に仕事をしてくれる。

////

後天的定住集団社会Ａにおいて企業定住集団の所有者は企業定住集団のメンバーにとって現人神だ。国レベルの企業定住集団の所有者である国家の所有者は戦前現人神扱いされていて、戦後長期間経過した今でもその基調は続いている。その下々に林立する民間の企業定住集団でも企業定住集団の所有者はプチ現人神として反抗禁止の存在として君臨する。企業定住集団のメンバーは自主的に企業定住集団の所有者＝プチ現人神への奉納として奴隷労働を進んで買って出てくれて、企業定住集団に勝手に一生を捧げてくれるので、企業定住集団の所有者は内心笑いが止まらない感じだろう。

////

後天的定住集団社会Ａでは、企業定住集団のメンバー格の人が働かないでいると無職扱いされて、非難、軽蔑の対象となるが、企業定住集団の所有者格の人は働かなくても何も言われず、むしろ企業定住集団の所有者の一員であるというだけで、ただ存在するだけで尊敬の対象になったりする。国家の所有者一家や財閥の子息が典型例だ。先祖代々特権的な企業定住集団の所有者の地位が受け継がれているのだ。人間の平等や人権思想に反する考え方だが、『企業定住集団信仰』に洗脳された後天的定住集団社会Ａのメンバーは誰も問題にしない。

////

後天的定住集団社会Ａの官公庁や企業で、新規学卒一括採用を禁止して、職業教育に基づく免許制による採用を義務づけることが、後天的定住集団社会Ａの年功序列による老害による「企業定住集団」支配や終身雇用による他の企業定住集団への転属不能性を打破する有力な方法である。医師や看護師の免許制を全職種に広げるべきということ。まずは官公庁のキャリア職で手本を示すべきということ。

////

後天的定住集団社会Ａの中央省庁の意味不明なジョブローテーション制度が、企業定住集団のメンバーの一企業定住集団への生涯隷属を引き起こす諸悪の根源だ。専門の職能を身に付けることを根本で否定しているので、一つの企業定住集団を超えた職業スキルを身に付けること、他の企業定住集団への転属をすることが不可能になる。これを止めて医師や看護師みたいな汎用性のある職能が身に付く免許制を後天的定住集団社会Ａの中央省庁に根付かせるべき。
中央省庁で根付けば、上位者信仰の強い後天的定住集団社会Ａの民間企業も右に揃って免許制を導入するだろう。
後天的定住集団社会Ａの広範な職場への免許制の導入で正規雇用と非正規雇用の格差をなくすことができる。有資格者が適切な職場にあてがわれるようになる度合いが増加し、後天的定住集団社会Ａの職場の生産性が向上するはずである。
また、免許制の導入で、一企業定住集団への帰属意識が不要となり、企業定住集団のメンバーは、一生を一つの企業定住集団にしば

られず複数の企業定住集団を渡り歩くことができるようになる。要するに一つの企業定住集団に専用の企業定住集団の家畜のような人の状態から解放されるのだということ。
免許制の導入により、そもそも正規雇用と非正規雇用の区別、差別が消えるはず。

////

全ての時間を自分の隷属する企業定住集団のために自発的に捧げることを要求され、自分を企業定住集団のために犠牲にしたことが美談として語り継がれるのが、後天的定住集団社会Ａの伝統的な企業定住集団のメンバーのあり方で、教員もその典型。企業定住集団のメンバーが自己犠牲を拒否すると、企業定住集団のメンバーを追い出すための企業定住集団の所有者や他企業定住集団のメンバーからの陰惨なお仕置きが待っている。
人間の企業定住集団への隷属をなくすことが後天的定住集団社会Ａのクオリティーを上げるために必須。つまり企業定住集団のメンバー制度をなくすことだということ。
後天的定住集団社会Ａから企業定住集団のメンバーをなくし、すべて労働組合員にすれば、企業定住集団のメンバーの企業定住集団の所有者への隷属が無くなり、後天的定住集団社会Ａはもっと生きやすくなる。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団のメンバー制度は、個人の自由を重んじる人間から見ると企業定住集団のメンバー生涯にわたる企業定住集団への奴隷制の制度化とその正当化、美化を両方とも実現していて、最低最悪の環境だ。

////

後天的定住集団社会Ａ分析単位

・家族メンバー（血縁共同体の成員）
・定住民（地縁共同体の成員）
・企業メンバー（職縁共同体の成員）

・国家メンバー（国家共同体の成員）

・旅人（故郷の共同体の外に一時的に出てあちこち動き回る人）
・流民（どこかの共同体に属したいが入れてもらえず漂流する

人。）
・外人（後天的定住集団社会Ａの国家共同体に入れてもらえない人）

////

ネット掲示板を見ると、新型コロナウィルス感染拡大防止のためのテレワーク勧奨をリストラ勧奨とみなしてショックを受ける企業定住集団の正規メンバー（定住民）がいるようだ。
テレワークは怠け者の劣った勤務形態で、職場に満員電車で定時出勤が最高とみなす感じ。
後天的定住集団社会Ａの限界は、ハードできつい思いをすることが最上で、そうしないのは怠け甘えで否定の対象になることだ。
どうみてもテレワークの方が勤務の自由度が高くて待遇良さそうなのに、後天的定住集団社会Ａのメンバーは、それを否定してわざわざ苦しい出勤労働を選んで、そのことをドヤ顔自慢する。筆者はそうした後天的定住集団社会Ａのメンバーには付いていけない。
職場出勤労働は、新型コロナウィルス感染などの危険も高いのに、危険を冒してでも企業定住集団へ忠誠心を見せるのが後天的定住集団社会Ａに特有には最高なの？
また、業務上の都合でテレワークできない部署の企業定住集団のメンバーが、テレワークしている部署の企業定住集団のメンバーに関して「あいつらは不当に楽をしているから、給料を減らしてほしい」と訴えたりしているようだ。自分の部署の給料割り増しを主張すれば良いのに、企業定住集団の所有者や企業定住集団の上級メンバーに訴えるのが怖くて、代わりに他の企業定住集団のメンバーの足を引っ張り、待遇を下げようとするのだ。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団のメンバーの陰険さが伺える。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団のメンバーって不気味だよねということ。
企業定住集団の所有者の奴隷に過ぎないのに、自分が企業定住集団の所有者になった気分で企業定住集団の経営のことを一生懸命考えるんだもんね。
何でそこまで企業定住集団のことを考え、企業定住集団の所有者に尽くそうとするの？
分からないということ。

////

・企業定住集団などの経営と共同体との分離ができている社会＝先進的移動生活中心社会群Ｆ北米、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１。
・企業定住集団などの経営と共同体との分離ができていない社会＝後天的定住集団社会Ａ。
なのかな？
分離できている方が経営改革がしやすく発展しやすいのでは。

////

企業定住集団を定住集団化、共同体化させないこと、企業定住集団から定住集団的要素、共同体的要素を取り去ることが後天的定住集団社会Ａ再生の条件だ。

////

製品の良し悪しについて、ＸＸ企業定住集団の製品だから大丈夫って言う人と、製品の出来不出来は担当者によるのでＸＸ企業定住集団によるくくりは信用しないっていう人の２通りいる感じ。
後天的定住集団社会Ａでは前者が優勢なのではないだろうか。後者だと後天的定住集団社会Ａの国家の内部ではおいてきぼりになる。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団が副業が禁止するのは、企業定住集団のメンバーの「一つの企業定住集団への専属」の規範が後天的定住集団社会Ａに存在するからである。企業定住集団のメンバーが副業をすることは、複数の企業定住集団を掛け持ちすることになって、一つの企業定住集団への専属の規範に違反するからである。一つの企業定住集団への専属奴隷となることが、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団のメンバーには求められる。

////

後天的定住集団社会Ａの女性は食虫植物にそっくり。誘いを出して、やってきた後天的定住集団社会Ａの男性を落として精神的に身動きできなくした上で、その後天的定住集団社会Ａの男性の一生を経済的に消化し尽くすのだということ。後天的定住集団社会Ａの女

性は結婚に当たって、後天的定住集団社会Ａの男性から家計の財布のひもを取り上げて小遣い制を敷いて、後天的定住集団社会Ａの男性を経済的に身動きできなくするというのもある。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団（官公庁、企業）も食虫植物に似ている。誘いを出して、やってきた学生を落として、企業定住集団のメンバーとして終身隷属の縛りで精神的に身動きできなくした上で、その学生＝企業定住集団のメンバーの一生を経済的に消化し尽くすのだということ。
この点、後天的定住集団社会Ａの女性と後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は相似の関係にある。

////

感染症対策での企業定住集団の固定資産税ゼロ政策とか、後天的定住集団社会Ａの政府は企業定住集団単位の活動についてはお金を気前よく出すが、企業定住集団から離れた個人単位の活動についてはお金を出し渋る傾向がある。後天的定住集団社会Ａの社会が企業定住集団中心で回っていて、企業定住集団の所有者と企業定住集団のメンバーのみが厚遇されて、個人単位で動く人たちは冷遇される。これは社会的差別であり、無くすべきだ。
後天的定住集団社会Ａの政府の援助は、大きな企業定住集団に手厚く小さな企業定住集団には薄い。大きな企業定住集団の代表格が公務員や大企業。後天的定住集団社会Ａの政府自体が特大の企業定住集団だ。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、みな自分の属する企業定住集団の内部のことにばかり関心が行くため、企業定住集団の外部がひどい状況になっていても気付かないか、気付いても他人事のように冷淡に振る舞う。企業定住集団の持つ閉鎖性、排他性が、企業定住集団の外部者差別を引き起こしている。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、企業定住集団のメンバーは、企業定住集団に直接所属する企業定住集団の直接的なメンバーと、企業定住集団の直接的なメンバーの生活を管理するマネージャーとしての企業定住集団の間接的なメンバー。（企業定住集団の直接的なメンバーの母や妻とか）とに分けることができる。

企業定住集団の直接的なメンバーが企業定住集団の直接的なメンバーとして企業定住集団に滅私奉公していられるのは、企業定住集団の間接的なメンバーの存在があればこそである。夫婦共働きとかで企業定住集団の間接的なメンバー役をやる人が家庭内にいなくなると、後天的定住集団社会Ａの家庭は崩壊し、子供が生まれなくなる。それに伴って後天的定住集団社会Ａの企業定住集団も崩壊する運命をたどることになる。

////

後天的定住集団社会Ａでは、フリーランスの非企業定住集団のメンバーや企業定住集団の非正規メンバー（流民）の立場の人が困り事を起こして、あるいは困り事に巻き込まれて助けが必要になると、困りごとを勝手に起こした者の自己責任だとして、誰も助けてくれない。彼は善意のある第三者の助けを待つしかない。
一方、後天的定住集団社会Ａでは、企業定住集団のメンバーが困り事を起こして、あるいは困り事に巻き込まれて助けが必要になると、それが企業定住集団の用事のみならず私用であっても、マスコミのニュース報道では「ＸＸ企業定住集団のメンバーのＸＸさんがＸＸの事件に巻き込まれました」とか企業定住集団名入りで報道され、企業定住集団の責任だとして、自己責任扱いにはならず、企業定住集団から助けの手が差し伸べられる。
企業定住集団のメンバーは私用時間中でも企業定住集団のメンバーとして扱われ、それゆえ企業定住集団のメンバーは24時間ずっと企業定住集団のメンバーとして落ち度のない恥ずかしくない振る舞いをする必要があるのである。
ただし、困り事を起こして、あるいは困り事に巻き込まれて、企業定住集団の手を煩わせた企業定住集団のメンバーは、後になって、企業定住集団の所有者や企業定住集団の上級メンバー、企業定住集団の同僚メンバーから、企業定住集団に余計な負担、迷惑をかけたとして悪口を言われ、不始末を起こしたことでの企業定住集団の内部処分、けん責を食らうことが多い。そして、そのことは、企業定住集団の人事部局の帳簿に記録され、かつて困り事の前例を引き起こした要注意人物として永久に記録され警戒され続けることが多い。
不始末を起こした企業定住集団のメンバーが企業定住集団の所有者や企業定住集団の上級メンバーたちのお気に入りだった場合は、不始末の発生は無かったことにして当面もみ消される。一方、企業定住集団のメンバーがお気に入りではなかった場合、企業定住集団の皆に迷惑をかけた不出来な者、あるいは企業定住集団の名誉に泥を

塗った不届き者として懲戒処分になり、企業定住集団の内部昇進の道を閉ざされ、退職を迫られることが多い。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、その企業定住集団の内部で、企業定住集団の所有者や企業定住集団の上級メンバーが困り事を起こした場合は、その責任は企業定住集団の内部では一切問われない。企業定住集団の所有者や企業定住集団の上級メンバーは無謬な存在、絶えず正しい存在として取り扱われ、彼らの不始末の責任は末端の企業定住集団のメンバーがかぶることになる。企業定住集団の末端メンバーの自殺は企業定住集団の所有者、企業定住集団の上級メンバーの不始末のもみ消しのための自己犠牲が原因である。このことを企業定住集団のメンバーの遺族とかが刑事告発すると、企業定住集団の上位者に反旗をひるがえす反乱を起こした者として、元の企業定住集団のみならず、後天的定住集団社会Ａの世間的にも冷遇される。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、企業定住集団のメンバーたちは嫉妬の心理で動いており、自分より不当に良い思いをしている、あるいは楽をしている他の企業定住集団のメンバーの待遇を自分と同じ待遇になるまで引き下げる「足を引っ張る」行為が公然と認められている。それゆえ、企業定住集団のメンバーは、他の企業定住集団のメンバーに自分が楽をしていると思われないように、必死で苦労しているように見せようと演技するか、苦労の伴う行為を自己犠牲的に本当に実行する羽目になる。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、企業定住集団のメンバーが企業定住集団のために苦労すること、自己犠牲することが最上の業として美談としてたたえられる。こうした企業定住集団の内部の嫉妬のシステムが、後天的定住集団社会Ａで企業定住集団のメンバーの待遇がいつまで経っても少しも上がらない大きな原因となっている。

////

後天的定住集団社会Ａにおける反社会的集団すなわち反「企業定住集団」的集団は、「正常な」企業定住集団の存在を脅かす集団のことであり、それ自体が結社であることが多い。その主義主張によって右翼的だったり左翼的だったりするということ。やくざのように社会的に逆機能で暴力を伴う行為を常に行うことが多い。
後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって、自分が所属する企業定住集団、すなわち企業定住集団自身が正常で、企業定住集団自身の

邪魔をする存在はもれなく反企業定住集団扱いになる。ただし、暴力団のように自分たちの病的側面を自ら認識している場合は、その組織メンバーは自分たちのことを積極的に反企業定住集団扱いし、そのことを武勇伝として自慢する。そうした反企業定住集団の存在であることのの自覚のある反「企業定住集団」的集団は、企業定住集団ではなく『組織』と呼ばれる。そうした反「企業定住集団」的集団の構成員は、企業定住集団のメンバーではなく組織メンバーと呼ばれる。企業定住集団が本来持つべき神聖さ、宗教性を失っているため、企業定住集団と呼ばれる資格を失っているから、『組織』と呼ばれるしかないし、そのことを自覚しているのである。
ただし、建設企業定住集団のように、後天的定住集団社会Ａには「組織」と名乗る反企業定住集団でない社会集団も多く存在する。また、ブラック企業のように、やっていることが反社会的そのものでも、その自覚がない社会集団は「企業定住集団」を名乗っている。反「企業定住集団」的集団のターゲットとなる企業定住集団が後天的定住集団社会Ａの国家の場合、反「企業定住集団」的集団は国家定住集団への反抗者集団と呼ばれる。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団における企業定住集団へ加入して職を得ること、すなわち企業定住集団のメンバーの採用は、手つかず状態の新卒者のみを、各社一斉に、一括で採用する点が特徴である。学生は学校に籍があるうちに、どこかの企業定住集団に採用されないといけない。学生は卒業とかで学校の籍を失うと、既卒扱いになって、どこの企業定住集団からも採用してもらえなくなってしまう。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、新企業定住集団からの卒業への加入で、企業定住集団へのブランク期間無しの「連続所属」「皆勤」ができており、企業定住集団の主要業務を担当する花形部署で勤務しており、職務遂行上失敗や減点が無く、コミュニケーション能力や忖度能力が高くて企業定住集団の所有者や企業定住集団の上級メンバーの覚えが良く、年齢相当に年功序列で企業定住集団の内部昇進して、相応の企業定住集団の内部的地位の高い役

職の肩書を得ていることが、企業定住集団のメンバーの模範とされる。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、他の企業定住集団への転属は、新卒以降、どこかの企業定住集団に在籍期間の切れ目なくきちんと企業定住集団の正規メンバー（定住民）として在籍し続けてきているほど、年齢が若く新卒に近いほど、今までの他の企業定住集団への転属の回数が少ないほど、他の企業定住集団への転属の条件が良くなる。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、他の企業定住集団への転属は、既卒だったり、企業定住集団への企業定住集団の正規メンバー（定住民）としての在籍期間が途中で途切れていたり、年齢を重ねているほど、今までの他の企業定住集団への転属の回数が多いほど、他の企業定住集団への転属の条件が悪くなる。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、企業定住集団の正規メンバー（定住民）採用に年齢制限を公然と設ける企業定住集団がほとんである。特に中央省庁とか特徴的であるということ。企業定住集団の内部で年功序列の待遇を敷いているためであるということ。
年齢が高い者を企業定住集団のメンバーとして新たに採用すると、企業定住集団の内部でエスカレーター昇進してきた他の企業定住集団のメンバーとの間で、処遇の混乱が生じ、企業定住集団の内部での年功序列の調和が破壊され、企業定住集団の内部全体が混乱に陥るとして、歓迎されない。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、企業定住集団のメンバーの中途採用は、企業定住集団の中途採用メンバーの予定する業務が、よほど企業定住集団の現行業務を上手く補完して企業定住集団の業績拡大につながるというのでなければ、年功序列の和気あいあいとした企業定住集団の内部の雰囲気を乱すとして、基本的には忌避される。企業定住集団への加入を許されても屈辱的な企業定住集団への新規加入メンバー扱いをされることが多い。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は、経済的に不景気が来ると、新卒採用者の数を大きく絞ったり、ゼロにする。その結果、その年の学生たちは、どこの企業定住集団にも企業定住集団の正規メンバー（定住民）として採用されずに、臨時雇用扱いのアルバイトや企業定住集団の非正規メンバー（流民）としてひたすら企業定住集団の正規メンバー（定住民）より低い待遇で働き続けないといけない。そして、後天的定住集団社会Ａの雇用者にとっては、この非正規雇用状態から、企業定住集団への正規雇用状態に移行するのが至難の業である。企業定住集団の非正規メンバー（流民）としての職歴は、企業定住集団の正規メンバー（定住民）の職歴とは一切カウントされず、企業定住集団の正規メンバー（定住民）としての在籍歴が無いと見なされ、企業定住集団の正規メンバー（定住民）採用面談で落とされてしまい、いつまでも企業定住集団の正規メンバー（定住民）になれず、経済的に困窮したままとなる。これが就職氷河期世代の後天的定住集団社会Ａのメンバーたちの社会的切り捨てとして大きく批判を浴びているが、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は直そうとしない。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は、新規学卒一括採用の時に企業定住集団への新規加入メンバーとして、企業定住集団のメンバーとして産声を上げ、その後、ジョブローテーションを繰り返しながら、次第に上司に可愛がられて、企業定住集団の内部で昇進していく。企業定住集団の一般メンバーは上司に可愛がられないと、えこひいきされて昇進の途を閉ざされる。また、途中で失敗しても減点主義のため、そこで企業定住集団の内部出世の途が閉ざされることが多い。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、企業定住集団のメンバーは、企業定住集団のメンバーとして一企業定住集団にずっと連続所属し続けることが必要である。企業定住集団のメンバー資格も持った人による企業定住集団の内部外への他の企業定住集団への転属による出入りの増加が好まれないためである。そして企業定住集団のメンバーは、企業定住集団の用意したジョブローテーションを繰り返しながら、昇進のエスカレーターに乗って企業定住集団の内部で出世していく。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、官公庁とか、企業定住集団のメンバーを一生涯企業定住集団自身に所属させつづけることが多い。企業定住集団のメンバーの人生のレールを企業定住集団側で用意し、企業定住集団のメンバーがそれに従っている限り、企業定住集団が企業定住集団のメンバーへの厚生福祉を提供し続ける。一方、定年到達時とか、功労金兼用手切れ金の退職金が支払われ、その後は企業定住集団は企業定住集団のメンバーの生活に関与しない。ただし、企業定住集団によっては定年後も旧企業定住集団のメンバーを見放さずに、嘱託扱いで、旧企業定住集団のメンバーに補助的な有償の仕事をあっせんし、提供することが多い。また、定年に達した企業定住集団のメンバーが役員などの企業定住集団の上級メンバーである場合、OB、OGとして企業定住集団の内部に院政を敷き、現役の企業定住集団のメンバーたちを公然と支配し続ける場合が多い。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、企業定住集団の業務遂行上、業務廃止で要らなくなった企業定住集団のメンバーたち、あるいは企業定住集団の内部を混乱させたり企業定住集団の風土を乱す厄介者の企業定住集団のメンバーたちを、リストラで強引に待遇の悪い部署に転籍させたり、勤怠が悪い企業定住集団のメンバーは降格したり、早期退職制度で退職金割り増しで、リストラ部屋に押し込んで、圧迫面接を繰り返し、自主退職に持ち込む。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、企業定住集団のメンバーがメンタルの調子を崩すと、産業医経由で何らかのメンタルヘルス上の病気（うつ病とか）にかかっているとして、休職させられたのち、休職期間満了で、退職に追い込まれるということ。復職しても、周囲の企業定住集団のメンバーたちに冷たい扱いをされ、メンタルを崩して再び休職状態になり、退職になるパターンが多い。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、企業定住集団への同一

年次での加入の企業定住集団の同期加入の複数メンバーのポストが不足する場合、能力の劣る企業定住集団のメンバーの方を、今後、能力のい優秀な方の企業定住集団のメンバーと顔を合わせなくて済むように、温情によって、企業定住集団の外局や下請けの別の企業定住集団に天下りさせる。天下りは官公庁ならず大企業でも、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団ではどこでも行われている。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、企業定住集団の内部に派閥同士の抗争で企業定住集団の内部政治が存在し、企業定住集団の若手メンバーも企業定住集団の中堅メンバーも、人事権での影響力を持つ企業定住集団の所有者や企業定住集団の上級メンバーに取り入って、企業定住集団の内部政治上少しでも有利な位置にありつこうと熾烈な忖度合戦を繰り広げる。その手土産として企業定住集団のメンバーの上げた成果が利用される。ただし、就ける役職の数は限られていることから、その限られた役職への就任を巡って争いが繰り広げられ、企業定住集団の勝者メンバーは企業定住集団の敗者メンバーを、自分の地位を脅かすライバルとしてひたすら冷遇したり左遷したりする。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の内部政治とそれに伴う派閥抗争のあり方は、完全に女流だ。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、障害者は、新企業定住集団からの卒業への加入後に病気での障害を発症した場合は、そのまま閑職に回され、役立たずとして定年までひたすら飼い殺しになる。企業定住集団毎に障害者雇用の必要定数を「上位者」から指導されるので、ほとんどの場合は、前記の買い殺し企業定住集団の障害者メンバーをその定数に充当するが、それに従って、もしも定数を割り込んでいる場合は、オープン採用で障害者を、企業定住集団の障害者向け専用の子集団に採用したりして、単純作業に当たらせることが多い。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団での企業定住集団のメンバーの人事評価は基本的に重箱の隅つつきの減点主義であり、一度失敗すると挽回が難しい。一度失敗するとその風評が企業定住集団の内部のどこまでも付いて回り、陰口や嘲笑の対象になるので、企業定

住集団のメンバーとしては失敗は一切許されないとして、悲愴な覚悟で仕事に臨まざるを得ない。企業定住集団の内部の企業定住集団のメンバーの成果評価は、基本的に企業定住集団の上級メンバーに仕事での成功やゴルフとかでの接待を含めて上手く取り入った企業定住集団のメンバーが、その取り入り具合を企業定住集団の上級メンバーたちの評価会議で偏差値評価される。評価は相対評価となる。評価が悪いと降格になる。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は、企業定住集団のメンバーの勤怠に異様にうるさい。企業定住集団の業務を神がかった神聖なものとして取り扱うからであるということ。特に出勤時刻に関しては、企業定住集団の業務は皆で一斉に開始して助け合って行うことが前提となっており、遅刻は厳禁である。例え1秒遅れてもダメであり、勤怠履歴に残る。企業定住集団での昇進を考える企業定住集団のメンバーは、勤怠履歴に傷が付かないように、遅刻した日は有給休暇を取って、かつ仕事をしたりする。また、長時間残業の多さが企業定住集団への忠誠心を図るバロメーターとして作用しており、官公庁などの上位企業定住集団から就労時間制限が設定されない限り、24時間を企業定住集団のために戦えますか？と企業定住集団への滅私奉公を真顔で要求されるのが恐ろしい。

////

後天的定住集団社会Ａは、女性の社会進出に伴うキャリア女性の増加や、個人の単独収入の減少を補うための夫婦共働きの増加で、夫婦が別々の企業定住集団に属しつつ血縁一家を形成するように変化している。家族定住集団の中に企業定住集団のメンバーの生活の管理役、子育て役がいなくなっているので、祖父母を活用して何とかしのいでいる。

////

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は、伝統的に、母親や妻といった後天的定住集団社会Ａの女性が、稲作農耕での一か所定住生活社会における、生得的に移動生活社会向きなため、定住生活社会にとっての社会的不適合者で社会的に有害な厄介者である、息子や夫といった後天的定住集団社会Ａの男性たちの精神を、育児の過程で強制的に女流化した上で、家庭から職場へと社会的に強制隔離の

形で送り込み、女流の、相互束縛性のひたすら強い、男性が本来指向する個人の自由独立性を排除した人間関係をひたすら強制して、終身奴隷労働をさせ続け、そうして男性が労働で稼いだ利益を一方的に取り上げて女性の管理下で貯め込み、使い込むために利用する、女性による、女流男性専用の社会的隔離と強制使役の場所、男性にとっての一種の家畜小屋、男性の人間的尊厳を否定し続ける非人間的な場所として機能してきている。後天的定住集団社会Ａの性別分業の本性は、これである。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の正規メンバー（定住民）の男性たちは、役人たちも含めて、そうした終身奴隷労働の象徴のような不気味な存在である。
ところが、最近の後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会における性差別撤廃の社会的風潮の導入で、こうした性別分業の否定と、女性の職場進出やキャリア女性の企業定住集団での活躍や役職就任がひたすらもてはやされるようになり、女性も、企業定住集団の中に留まり続けて、男性並みの終身奴隷労働にひたすら従事するように、慣行が変化してきている。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は、もともと女流の人間関係で出来ているので、女性向きである。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団では、今後は、キャリア女性の企業定住集団の正規メンバー（定住民）たちが、あたかも従来の企業定住集団の普通メンバーの『お局様』が、どんどん昇進して管理職化してパワーアップした感じの、スーパー『お局様』となって、スーパー台風並みの猛烈さで、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の内部を席巻し、強烈に支配するようになると考えられる。後天的定住集団社会Ａの男性は、企業定住集団の中では、ますます肩身が狭くなるだろう。
一方、女性が企業定住集団に本格的に進出すると言うことは、女性も企業定住集団でひたすら終身奴隷労働をするようになる分、女性にとって家庭が手薄になることであり、後天的定住集団社会Ａの男性の企業定住集団から家庭への活躍の場の移行が望まれるようになっていると考えられる。しかし、現状では、男性も終身奴隷労働状態のままなので、このままだと、後天的定住集団社会Ａの家庭では、男性も女性も夫婦の両方とも企業定住集団で終身奴隷労働をするようになって家庭にいられなくなり、子供を作る余裕が無くなって少子化が進み、生まれた子供を家庭の中で育児をする余裕も無くなって、その生育は、完全に外部の保育所や学校任せになると考えられる。つまり、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団で企業定住集団の正規メンバー（定住民）の制度がこのままの形で男女共に存続すると、家庭機能の、家庭外部の企業定住集団や学校への完全吸収と無効化が進み、後天的定住集団社会Ａの家庭は実質的に機能停止すると考えられる。

////

将来的には、後天的定住集団社会Ａの衰退で、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団が男女の企業定住集団の正規メンバー（定住民）を雇い続ける経済的余裕が無くなり、企業定住集団の非正規メンバー（流民）の低賃金労働にもっぱら頼ることになることが考えられる。つまり、男性も女性も、そのほとんどは企業定住集団の正規メンバー（定住民）でいることが出来なくなり、ひたすら、さらに待遇の悪い企業定住集団の非正規メンバー（流民）化、社会的流民化が起きると考えられる。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は、少数の、一見、上流階級扱いだが実質的には終身奴隷労働の企業定住集団の正規メンバー（定住民）と、大多数の、そもそもまともに後天的定住集団社会Ａの構成員扱いされない、さらに扱いが非人間的な、完全に使い捨ての社会的流民相当の下流階級の企業定住集団の非正規メンバー（流民）に分離すると考えられる。後天的定住集団社会Ａでは、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団の所有者、支配者である企業定住集団の所有者たちの社会的独り勝ちと、さらなる特権階級化、超富裕化が進行するだろう。

後天的定住集団社会Ａの学校と、伝統的師弟関係

本文

後天的定住集団社会Ａの学校は、社会的前例、しきたり、知識、経験の伝授と習得、専攻のための教育、研究機関扱いの社会集団である。存在としては、企業定住集団と似ているが、経済的に収入を得るために、企業定住集団のメンバーとなって企業定住集団の所有者のために働くことが主目的となる企業定住集団とは区別される。小学校、中学校、高等学校、大学、大学院。専門学校。企業定住集団に企業定住集団への加入する前の学力選抜、社会に出て役立つとさ

れる学習内容の勉強暗記、女流の基本的社会規範の習得の場であるということ。学内では、企業定住集団における上司部下関係の社会規範の習得の場が用意されていないため、師匠も弟子も、企業定住集団への加入経験の無いまま、学内に留まっていると、いつまで経っても、企業定住集団にそのままでは活用できない人材扱いされて、いわゆる「企業で働く人」扱いされない。
学内と学外の区別が厳格である。高校や大学、大学院は、入学試験が課される。
学内の人たちは、以下の通りである。
（１）弟子。社会に出る前の人。教員から前例、しきたりを授かり勉強する人（生徒、学生）ということ。一般社会に出ずに学内に留まって、学的集団の中で、学問的な業績を上げたり、集団上位者の教員に取り入って、学内や他学でのアカデミックポストでの昇進出世を目指すか、専門知識を元に、学外の企業定住集団に企業定住集団の正規メンバー（定住民）とかで企業定住集団への加入して好条件で働こうとする人（大学院生）ということ。
（２）師匠、先生、教授、教諭。学究ポストや教育ポストに就いている正規の教員。一時的助っ人扱いの臨時の非正規の教員。
（３）事務、工務等の職員。雇用面で正規と臨時の非正規がいる。教員に仕事が割り当てられることもある。
に分類されるということ。
弟子も先生も、学内で、全時間、空間的な拘束状態になる。例。中学校や高校で、学校の部活で毎日の丸一日をひたすら消費する生徒、学生と、教員。
学校は、後天的定住集団である。学校は、血縁関係が無くても加入できる。学生、生徒は、新入生として、真っ白な状態で、加入して、教員や先輩と縁を結んで、学閥に入る。学生、生徒が、いったん学校に加入すると、その学閥の関係は、卒業後も一生続き、抜けることは困難である。
教員（師匠、先生）と弟子（生徒、学生）の関係は、女流の、反論や口答えの余地無しの一方的支配隷従の教授と勉強の関係である。大学教員などの師匠は社会的に権威ある肩書付きの存在として丁重に扱われ、発言が信用される。弟子は教員に勉強学習目的、学究目的で無償労働力扱いされる。弟子は師匠の教員に、心理的懐きや取り入り、永続的忠誠のような伝統的師弟関係を強いられる。師弟関係は、弟子が学校を卒業しても、ずっと永続する。弟子は師匠を恩師呼ばわりする。師弟関係は、女流の派閥と人間関係が基本的に相似する。弟子は常に上位者の師匠と心理的に一体化して動き、師匠同士でライバルで仲が悪いと、その弟子同士も仲が悪くなる。師匠同士の連携があまり無く、各研究室や講座で、閉鎖、排他化、たこ

つぼ化が起きやすい。学内で師匠の立場の絶対化が起きやすく、上級の師匠の個人的興味を満たすための、社会にとってあまり役に立たない、社会的ニーズの無い、独善的な研究や教育が行われやすく、チェックもされにくい。その結果、そうした師匠から教育を受けた弟子の社会的行き場、活用の場が無くなり、高学歴ワーキングプア扱いになる。
大学などの研究機関では、教員の研究にいったん入った専攻の道をひたすら究める専門化が起きる。教員は専門家扱いされる。その点では、職人と似ている。専門家の教員は、社会的に融通が効かない存在とされ、蓄えた前例知識や経験とかが学識経験者扱いで尊敬されるものの、実際的な社会的地位は見かけほどは高くない。専門家の教員は、一般的コメンテーターの能力に優れていると、マスコミや出版で重用され、専門外の意見も求められる。
教育機関の教員は、何でも屋のゼネラリスト扱いされる。部活指導とか、専門性を問われず、やらされるということ。雑用が多く、本来の教育指導やその準備の時間が取りにくい。
弟子相互の間に、毎年一斉入学の発生による学年制に伴う、その学校での前例習得の度合いの上下に従って、先輩による一方的支配と後輩の一方的隷従の厳格な反抗不可の、女流の先輩後輩関係が存在する。同学年の弟子、生徒、学生同士は、学級内やゼミナール内とかで、相互の同調行動、心理的和合の維持が常に要求され、足手まといの者や逸脱者、反抗者は、いじめや排除の対象になる。
学校所有者と、学校経営者、学校教員、学校の生徒、学生、それぞれの間に埋められない、超えられない身分的格差と一方的上下関係がある。学校所有者は、常に自分たちが正しい立場に立てる無謬性を確保する。
正の教員間の関係に、女流の一方的な支配隷従の上下関係が存在する。教員間の先輩後輩関係、上司部下関係（校長と一般教員）や、上級下級関係（教授と准教授、助教）ということ。
学校の存在を許認可する、あるいは学校に研究、教育予算を付けてくる、あるいは学校での学習指導要領を策定してくる国や都道府県、市町村の役所と、学校との間に、根本的な一方的上下関係が存在する。
教員の人事や採用については、学校所有者が学内の人事権を掌握する。公立小中高校とかでは、学校を所有する国や都道府県、市町村の役所の教育委員会で決まる。あるいは、大学とかでは、学校所有者、学校経営者と学内の正規の上級教員同士の会議で決まる。
学校での学習経験は、企業定住集団での経験としてはカウントされない。学校の弟子が、企業定住集団に企業定住集団への加入すると、大学院生で、長年研究を続け、歳を取っていても企業定住集団

への新規加入メンバー扱いになる。
学校の教員が、企業定住集団に入ったり、逆に企業定住集団の経験者が、大学などの学校の教員としてスカウトされることはある。

後天的定住集団社会Ａの権力構造と言論統制

定住集団社会を国ぐるみで隠蔽しようとしている後天的定住集団社会Ａ　-「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』」と言論統制 -

後天的定住集団社会Ａは、政府も国民も、自分たちは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の自由民主主義を身に付け、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国の一員になったのだと、強く自負している。
そのため、本当は、社会の基盤部分が、今なおウェットで旧態依然とした、伝統的稲作農耕民型の定住集団社会であることを、政府、国民一丸となって、必死に隠蔽しようとしているかのように見える。
定住集団社会は、古い、すでに消えつつある社会のあり方であり、我々は、ドライな先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの文化と積極的に一体化して、率先して取り入れ、社会や生活は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化を達成した、という考え方が後天的定住集団社会Ａでは支配的である。
先進的移動生活中心社会群Ｆかぶれの後天的定住集団社会Ａのメンバーは、自分が定住民だという自覚が無い。先進的移動生活中心社会群Ｆの一員だと思っているということ。
後天的定住集団社会Ａの社会学のあり方にしても、後天的定住集団社会Ａの定住集団社会は、遅れた封建遺制であり、現代の後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ並みに近代化して、自由民主主義を身に付けたのだ、あるいはそうなりつつあるのだ、という前提で、教科書とか組んでいるのである。定住集団社会

のことは、社会の教科書とかにはほとんど出てこない。
そう考えないと、というか、後天的定住集団社会Ａの基盤が昔ながらの定住集団社会であることを外部に公式に露出させて認めてしまうと、後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国の仲間では無い、異質な存在だということを認めざるを得なくなり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国の一員ではいられなくなってしまう、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国から定住集団からの追放、仲間はずれになってしまうという恐怖感、不安感が、後天的定住集団社会Ａに根強く存在し、それが、後天的定住集団社会Ａの基盤の定住集団社会の存在を国ぐるみで隠蔽しようとする大きな要因となっているような気がする。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは牧畜民社会で、個々人がバラバラに分離して別々の存在になっている社会なので、後天的定住集団社会Ａのような定住集団からの追放の思想を持っているかどうかはかなり疑問である。むしろ、白色人種と黄色人種との人種差別の方が、後天的定住集団社会Ａを仲間から外す原因になりそうである。
後天的定住集団社会Ａはダブルスタンダードの社会である。口先では先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流に動くべき（民主主義が、自由が等々。）と盛んに唱えるが、実際の行動は伝統的な定住集団社会に合致したものでないと非難され、いじめられ、定住集団からの追放にされる。見かけに騙されてはいけない。
後天的定住集団社会Ａ学者定住集団の定住民なのに、何事も先進的移動生活中心社会群Ｆ、北米理論経由でないと論じられないのが後天的定住集団社会Ａの社会科学者である。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、大日本帝国憲法派も、後天的定住集団社会Ａの国家憲法派も、どっちも先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ事大主義者である。
後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群Ｆ、北米諸国の言うことを聞いて、先進的移動生活中心社会群Ｆ、北米諸国基準での「職場でも家庭でも性別分業の無い男女平等の国」に一生懸命なろうとしている。自分の国がもともと女、母の強い社会であることは無視して、ひたすら先進的移動生活中心社会群Ｆ、北米基準での「女が社会進出を果たした国」になることしか頭に無い。
あるいは、後天的定住集団社会Ａは太平洋戦争で先進的移動生活中心社会Ｇに敗退して、先進的移動生活中心社会Ｇの実効支配を受けているのが現状で、後天的定住集団社会Ａの定住集団社会は、先進的移動生活中心社会Ｇの自由主義、民主主義に反する「先進的移動生活中心社会への反逆」の存在になってしまっており、強い存在に対して逆らえない、批判できない後天的定住集団社会Ａの定住民た

ちは、とりあえず後天的定住集団社会Ａの存在を表向き隠蔽することで存続を図っていると見ることも出来る。
先天的定住集団社会Ｂとかと違って、後天的定住集団社会Ａでは表現の自由が認められているとか、盛んに後天的定住集団社会Ａのメンバーは主張するが、実際のところ、後天的定住集団社会Ａのメンバーが自由を信奉するのは、自分たちより上位の宗主国の先進的移動生活中心社会Ｇが、自由主義、民主主義をやたらと主張するため、とりあえず強者の先進的移動生活中心社会Ｇの言うことを聞いていれば、身の安全が図られ間違いがないという、先進的移動生活中心社会Ｇの権威に頼る、女性優位な権威主義から来ているのであり、先進的移動生活中心社会Ｇが後天的定住集団社会Ａを支配している間の一時的な現象だと考えられる。後天的定住集団社会Ａのメンバーは自由を心の底から体得している訳では無く、自由主義が権威、権力があるから、自分も従ってみるかとかいう感じなのである。
その証拠に、後天的定住集団社会Ａは、企業定住集団とかで、やたらと周囲との和合や協調性を求め、一体、一丸となって団体行動し、個々人は、企業定住集団組織の中に溶けて無くなることを求めるのであり、プライバシーも存在せず、個々人は企業定住集団に全人格的に拘束され、行動の自由が無いのが当たり前だったりする。個々人の自由行動が保証されやすい遊牧民に近い先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会とは、社会のあり方が農耕民的で根本的に異なり、かつそのことを世界に向けて公に認めることが出来ない立場にあるのが今の後天的定住集団社会Ａである。
もともと上位者に絶対服従の後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａが軍事的、文化的に勝てそうにないスーパー上位者の先進的移動生活中心社会Ｇや先進的移動生活中心社会群Ｆに対して絶対服従であり、自分からは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの社会体制に反することを先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに対して主張することが心理的に怖くて出来ない、難しい。
家父長制社会先進的移動生活中心社会Ｇの支配の下で、自分たちの社会を変えたくなかった後天的定住集団社会Ａのメンバーは、母権社会の後天的定住集団社会Ａの存在を徹底的に隠蔽し目立たないようにする作戦に出て、今でもそれが続いている。母権社会、定住集団社会のことを明言することをタブーとしたのだということ。
後天的定住集団社会Ａは、その存在自体が先進的移動生活中心社会Ｇ流の自由民主主義に反し、先進的移動生活中心社会への反逆である。後天的定住集団社会Ａの定住民たちが定住集団社会の話を避けるのはこれが原因である。同様に、後天的定住集団社会Ａの女社会、母権社会は、その存在自体が先進的移動生活中心社会Ｇ流の家

父長制に反し、先進的移動生活中心社会への反逆である。後天的定住集団社会Ａの女性たちが後天的定住集団社会Ａの女社会の話を避けるのはこれが原因である。後天的定住集団社会Ａのメンバーはスーパー上位者の先進的移動生活中心社会Ｇの意に叶う自由民主主義社会と家父長制社会、男社会の話しか怖くて出来ないのである。まさに、「スーパー上位者恐怖症」、「先進的移動生活中心社会Ｇ恐怖症」あるいは「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ恐怖症」であるということ。
後天的定住集団社会Ａの定住民が先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを恐れるのは、江戸時代末期に、圧倒的武力と先進的先進的移動生活中心社会群Ｆ近代文化を背景に先進的移動生活中心社会群Ｆ列強に強制的に開国させられて不平等条約を結ばされたり、先進的移動生活中心社会Ｇに太平洋戦争で特攻隊みたいに死に物狂いで抵抗したにも関わらず完全に打ちのめされて敗北し、国を占領され、異文化の後天的定住集団社会Ａの国家憲法等の法律を一方的に制定され、その後も駐留中の先進的移動生活中心社会の軍隊の強力な武力で後天的定住集団社会Ａの国家定住集団自体が先進的移動生活中心社会Ｇの言うなりにならざるを得なくなっている歴史的状況が、後天的定住集団社会Ａの定住民たちにとって強いトラウマ、恐怖心の源となっているからである。
伝統的後天的定住集団社会Ａも、伝統的後天的定住集団社会Ａの女性社会も、先進的移動生活中心社会Ｇに実効支配されている今の後天的定住集団社会Ａのメンバーにとってタブー、隠蔽、批判、表面的せん滅の対象となっている。
公に後天的定住集団社会Ａが定住集団社会であることを認めることが出来ず、社会ぐるみ、国民ぐるみで隠蔽しようとすることは、言い換えれば、後天的定住集団社会Ａが定住集団社会であることを主張する言説を無視する、亡き者にする形で公認されないように規制することになっており、そういう点では、現代の後天的定住集団社会Ａは、言論の自由が存在しない言論統制、規制社会であると言える。
後天的定住集団社会Ａでは、明治時代から、実質、欧化主義が、現在に至るまでずっと続いている。確かに、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの文物を導入し、それらを改良して、世界に向けて売りまくることで、大いに儲けて経済的に成功したのは、選択としては正しかったといえる。
しかし、後天的定住集団社会Ａの国家や後天的定住集団社会Ａのメンバーがいくら心身ともに先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化を進めようとしても、そのやり方が、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとの心理的情緒的一体化に基づく女性優位、母性的なものであるた

め、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会本来の個々人の自己責任と独立、バラバラさを許容し、積極的にリスクを取って、率先して未知の領域を切り開く男性優位、父性的な精神を、後天的定住集団社会Ａのメンバーが心の底から体得することは決してできないのである。
敗戦後７０年間、先進的移動生活中心社会Ｇの実効支配を受けて、後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性も変化したのかと思ったら、戦前のままだったようだ。
後天的定住集団社会Ａは、日米同盟最強と盛んに先進的移動生活中心社会Ｇとの仲の良さを強調するが、その実態は個人主義、自由主義重視の先進的移動生活中心社会Ｇ社会とは正反対の、団体行動最優先で、個人を長時間統制拘束し、自由、プライバシーの無い定住集団社会、女社会を頑なに維持する先進的移動生活中心社会への反逆社会である。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは欧化主義推進にとって都合の悪い事象をことごとく表に出ないように隠そうとしている。面白いのは、表向きは一生懸命否定し隠すが、表から見えないところでは昔ながらに絶対的に従っていることだ。後天的定住集団社会Ａの掟や姑の存在はその典型だ。
後天的定住集団社会Ａのメンバーが自分たちの定住集団社会や女社会を必死で隠蔽して先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』ばかりやるのは、よほど先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが怖くて逆らいたくないのだと考えられる。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、反先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと見られることがそんなに怖いのなら、地域定住集団社会、女社会であること自体をさっさと止めてしまえば良いのに、それはなぜか全力で死守しようとしているところが矛盾している。
後天的定住集団社会Ａの社会学者が先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会理論の輸入と啓蒙に明け暮れるのは、後天的定住集団社会Ａを先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化していると表面的に見せかけることで、反先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的特質を持つ後天的定住集団社会Ａ、女社会、母権社会の潜在的永続を先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会に対して隠すための戦略である。後天的定住集団社会Ａのフェミニズムとかその典型であるということ。
後天的定住集団社会Ａ、女社会の反先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的特質を指摘されると必死で否定、無視し、後天的定住集団社会Ａは民主化していますと釈明するのが後天的定住集団社会Ａのメンバーである。スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにお仕置きされたくないから、定住集団社会、女社会を必死で隠して事なかれしようとするということ。

後天的定住集団社会Ａの定住民たちは、反先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的な本性がバレてスーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに攻撃されないように、必死で先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的な行動を表面的に導入して、見た目を取り繕おうとしている。それが後天的定住集団社会Ａで先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』が量産される真相である。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論の紹介、導入に明け暮れる後天的定住集団社会Ａ学も、その一類型である。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』の後天的定住集団社会Ａのメンバーが目立つが、最近は、その亜種の国連『出羽守』の後天的定住集団社会Ａのメンバーも目立つ。
後天的定住集団社会Ａの女性は、自分たちが後天的定住集団社会Ａの中で強いことを認めてしまうと、反先進的移動生活中心社会群ＦＧＨになってしまうので、「後天的定住集団社会Ａの女性は弱い！差別されている！」と必死になって叫んで取り繕いを行っている。
後天的定住集団社会Ａの女性学、フェミニズムは、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを懐柔するための後天的定住集団社会Ａの女性たちの戦略である。
先進的移動生活中心社会Ｇ追従をする後天的定住集団社会Ａのメンバーは２通りいる。どちらも見かけ上先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』になるので見分けが付きにくい。
・先進的移動生活中心社会Ｇが強くて怖いので、とりあえず従っておくかという権威主義的な伝統的定住民。
・伝統的後天的定住集団社会Ａ、女社会の統制の強さ、相互監視の強さ、自由の無さに辟易している、つかの間の自由が欲しい隠れ自由主義者。
両者の区別は、後天的定住集団社会Ａの定住民度判定テストの結果で行うことが出来る。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの文物をしきりに有難がって、身につけようとする一方、先天的定住集団社会Ｂや先天的定住集団社会Ｃ２、先天的定住集団社会Ｃ１を敵視して馬鹿にする。
だから、後天的定住集団社会Ａの高校の地理学の教科書とか大学の社会学の教科書とか、農耕民と遊牧民の社会のあり方の根本的な違いとか、一切教えずに無視するのだと思うということ。もしも教えると、後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのような遊牧系に近い社会からかけ離れた稲作農耕民の社会であると教えることになってしまい、自分たちが心理的に一体化しようとしている先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会からは距離が遠くなり、自分たちが避けたいと考えている先天的定住集団社会Ｂ、先天

的定住集団社会Ｃと一緒のカテゴリーになってしまうからである。
現代の後天的定住集団社会Ａのメンバーは、対先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ従属、反先天的定住集団社会ＢＣになっている。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの言うことは絶対で事大主義的に従う。一方、先天的定住集団社会ＢＣには敵意をむき出しにして馬鹿にする。後天的定住集団社会Ａの国民性が先進的移動生活中心社会群ＦＧＨよりも先天的定住集団社会ＢＣに近いという意見は無視する。
後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨしか見ていない（先天的定住集団社会ＢＣは見下す。）のに対して、先天的定住集団社会ＢＣは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ、後天的定住集団社会Ａの両方を見ている。これが、製造業で後天的定住集団社会Ａが先天的定住集団社会ＢＣに勝てない理由である。先天的定住集団社会ＢＣは、後天的定住集団社会Ａのものを更に改良するので、競争力が後天的定住集団社会Ａのものよりも強くなる。後天的定住集団社会Ａは、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１、定住生活中心社会群Ｄの社会と大差ない。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ追従のスタート時刻がたまたま他の定住生活中心社会群ＡＢＣ諸国より早かったので成功しただけである。
後天的定住集団社会Ａの政府やそのブレーンたちが、男女の心理的性差や、女性優位性格と後天的定住集団社会Ａの国民性との相関、男性優位性格と先進的移動生活中心社会Ｇ社会の国民性の相関とかについてきちんと教えずに、男女の性差をひたすら無視しようとするフェミニズムや男女共同参画社会構想とかに向けて突っ走るのも、後天的定住集団社会Ａが女性優位だと認めてしまうと、男性中心の家父長制の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会と、超えられないギャップが認識されてしまうから、都合が悪いためであると言える。
また、後天的定住集団社会Ａの女性優位社会、母権社会の存在自体が後天的定住集団社会Ａを実効支配する先進的移動生活中心社会Ｇの家父長制社会に反する「先進的移動生活中心社会への反逆」の存在であるため、存在を隠す必要が出てくるのである。後天的定住集団社会Ａを男社会と必死になって主張するのも同根である。後天的定住集団社会Ａの嫁の地位の低さは論じられるが、母や姑の地位の高さはちっとも論じられないのも同じである。
河合隼雄の後天的定住集団社会Ａ＝母性社会論が例外的に受け入れられたのは、彼が、先進的移動生活中心社会群Ｆに留学して、ユングの精神分析の理論という、先進的移動生活中心社会群Ｆで権威が確立された理論を土台にした自分の理論を提示するという形でライフワークの展開を行ったため、後天的定住集団社会Ａのメンバーの

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの文物をこぞって取り入れようとする、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの文物を上位に置いて有難がる権威主義的な心理的傾向、ルートにうまく乗っかることが出来たからである。
この仕組を利用して、例えば少数の後天的定住集団社会Ａのメンバーが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに留学したりして、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバーの一員としていったん成果を出して認められた後、そこから後天的定住集団社会Ａの社会システムを克明に分析、論評し、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ社会といった他の農耕民社会との対応付けや、アラブ、ユダヤ、トルコ、モンゴル、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨといった遊牧系、牧畜系社会との性格比較を行っていくことが、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ文物に弱い後天的定住集団社会Ａのメンバーに、自分たち後天的定住集団社会Ａのメンバーが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとは異質な定住集団社会であることを世界に向けて公認せざるを得ない状況を作り出す条件になるのではないだろうか？そうなれば、大きな後天的定住集団社会Ａの変革、改革につながるだろう。
ともあれ、現状の後天的定住集団社会Ａ学のような、先進的移動生活中心社会Ｇに逆らうことを怖がって、後天的定住集団社会Ａ、女社会の実態を隠蔽し、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論の後天的定住集団社会Ａへの強制輸入と当てはめに奔走している「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』」状態は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の真実は知ることが出来るかも知れないが、後天的定住集団社会Ａの真実を知るには不適切であり、社会の真実を解明する社会科学のあり方としては間違っていると言わざるを得ない。後天的定住集団社会Ａのメンバー、後天的定住集団社会Ａの社会学者の「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ恐怖症」が、その間違いの原因である。後天的定住集団社会Ａの大学の文科系が役に立たないと言われる原因も、この「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ恐怖症」と大いに関係あるだろう。
その時々の強い者（今は先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ列強。）に逆らうのが怖くて、保身のため、強者に従順で迎合して、コロコロ自分の学説を変えたり、強い者（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ列強）の意見に沿った学説を後天的定住集団社会Ａの国家の内部に役立つか事前検証せずに一方的に直輸入して人々に機械的に押し付けてしまうのが、後天的定住集団社会Ａの社会科学が税金の無駄遣いで、役立たずでダメな根本原因である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』や、「スーパー上位者」の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ、国連を利用して後天的定

住集団社会Ａの国家の内部の「上位者」（官庁、役所）を支配しよう、動かそうとする態度自体、強者に惹かれてなびき、一体化して、利用しようとする女性優位な態度であるということ。
その点では、後天的定住集団社会Ａの女性の存在が、後天的定住集団社会Ａの社会科学をダメにしている。
後天的定住集団社会Ａの社会学が科学になるには、後天的定住集団社会Ａ、女社会をきちんと解明するように方針転換することが必要である。後天的定住集団社会Ａの社会学者は、存在が先進的移動生活中心社会への反逆だから、先進的移動生活中心社会Ｇから圧力がかかるからと言って怖がって研究を尻込みせずに、勇気を持って現状の後天的定住集団社会Ａ、女社会の実態解明をすべきである。後天的定住集団社会Ａの社会学者自身も所詮は後天的定住集団社会Ａの定住民なのだから。
もっとも、後天的定住集団社会Ａの社会学者からは、先進的移動生活中心社会Ｇのようなその時々の強者に惹かれ、なびき、従い、媚び、反逆しないのが後天的定住集団社会Ａ、女社会の掟であり、自分たちはそれに従っているだけで、後天的定住集団社会Ａの定住民として当然の行為であるとされるだろう。
後天的定住集団社会Ａの社会学者からは、むしろ後天的定住集団社会Ａ、女社会の解明が定住集団の内部告発とみなされ、自分たちが国家定住集団や学者定住集団から定住集団からの追放の対象になりかねないので後天的定住集団社会Ａの定住民的には不可だという反応が返ってくるだろう。後天的定住集団社会Ａの定住民たちや女性たちが、後天的定住集団社会Ａ、女社会のことを語りたがらないのは、語ると定住集団の内部情報の漏洩、定住集団の内部告発になってしまい、自分が定住集団からの追放や仲間はずしの対象になってしまう危険性があるからだ。
その点、後天的定住集団社会Ａ、女社会解明を妨げる真の敵は、以下の通りである。
・後天的定住集団社会Ａのメンバーの「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ恐怖症」
・後天的定住集団社会Ａ、女社会自身の、内部告発者に対する「定住集団からの追放」「仲間はずし」の掟
であるということ。
こうした後天的定住集団社会Ａや女社会からの「定住集団からの追放」「仲間はずし」の脅しに屈すること無く、後天的定住集団社会Ａ、女社会の内部の真実を追求し続ける勇気を持つことが、後天的定住集団社会Ａの社会学者には求められると言える。
また、後天的定住集団社会Ａ、女社会の国際的な位置付けのためには、定住生活中心社会群ＡＢＣ（先天的定住集団社会Ｂ、先天的定

住集団社会Ｃ１、先天的定住集団社会Ｃ２）、定住生活中心社会群Ｄ（ベトナム、フィリピン、インドネシア、タイ・・・）の他の稲作農耕民社会も共通に視野に入れることが必要であり、研究の国際協調が求められると言える。後天的定住集団社会Ａ、女社会は、後天的定住集団社会Ａだけに特殊な性質の社会では無く、稲作農耕民社会の一類型として捉えるのが適当だと考えられるからである。
（これはこれで、経済的に自分たちを追い越した同類の先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１が嫌いで、定住生活中心社会群Ｄを未だ発展途上国と見下し蔑視する後天的定住集団社会Ａの広範な層の偉そうな定住民たちから反発を招きそうであるが。）

強者に惹かれる後天的定住集団社会Ａの女性優位性質と「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』」

一般的に、女性には、その時々の強者に惹かれ、なびき、従う性質がある。それは、女性の、自分が強者との間に子供を設けて、自分の遺伝子が、強者の遺伝子との統合によって環境に適応しやすく、将来的に生き延びやすくしたいという傾向の表れである。
後天的定住集団社会Ａは女社会なので、当然ながら女性の上記の性質を社会的に引き継いでいる。すなわち、その時々の強い勢力に惹かれ、なびき、一体化、神格化したがるのが、後天的定住集団社会Ａの定住民の性質である。これは国内向けにも、国外向けにも当てはまることである。
この女性優位心理を象徴するのが、「上位者」という概念である。
「上位者」は、後天的定住集団社会Ａを支配している最上部の権力者に対して後天的定住集団社会Ａの定住民たちが付けている敬称である。「上位者」の実態は具体的には、国家の所有者一家と、その使用人の役人たちである。
後天的定住集団社会Ａの定住民たちは、後天的定住集団社会Ａの国家の内部向けには、「上位者」の国家の所有者一家やその使用人である高級役人を神格化して、「国家の所有者陛下万歳！」と叫んでペコペコ頭を下げている。
この後天的定住集団社会Ａの定住民の、その時々の強者に惹かれる性質が、国外向けに発揮されているのが、欧化主義である。後天的定住集団社会Ａのメンバーが自国への先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの社会制度や文化の導入に一生懸命で、先進的移動生活中心社

会群ＦＧＨ文物を強く愛好し、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』になりたがるのは、国際的に強い勢力である先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ列強＝スーパー上位者に心理的に惹かれ、なびいて、一体化しようとする女性優位な欲求の現れなのである。これは、後天的定住集団社会Ａが女社会であることの一つの証拠である。
先進的移動生活中心社会Ｇ主導で制定した後天的定住集団社会Ａの国家憲法の条文が神格化され、護憲派によって長年字句の変更を拒まれてきているのも、後天的定住集団社会Ａの定住民たちの「上位者、スーパー上位者の無謬性」の信仰、すなわち、上位者やスーパー上位者のすることに間違いはない、安心して従っていれば定住集団社会や自分たちの安寧が図られるという信念が強固だからだろう。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨから「定住集団からの追放」にされるのを恐れる後天的定住集団社会Ａと「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』」

稲作農耕民社会の一種である後天的定住集団社会Ａは女社会であり、集団一斉行動を好み、相互の一体感を何よりも重んじる。なので、定住集団内部に異質で浮いた人間がいると、寄ってたかっていじめたり、無視して仲間はずれ、定住集団からの追放にする。後天的定住集団社会Ａの定住民たちは、定住集団の外に放り出されると生きていけないので、定住集団からの追放にならないように、仲間はずれにならないように、必死で定住集団内部の空気を読んで、他の定住民と和合、協調しようとする。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、この後天的定住集団社会Ａ、女社会の感覚を、国際関係にそのまま何も考えずに持ち込んでしまう。つまり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ列強諸国間の関係を、後天的定住集団社会Ａと同様な関係である＝諸国の間で相互の一体感、同類感、同調感を重んじていると勝手に思い込むのであるということ。後天的定住集団社会Ａは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨから離れて一人定住生活中心社会群ＡＢＣに位置するが、戦後の高度経済成長で先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ同様社会の近代化を達成して先進国となり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの仲間、身内になったと思っているのである。Ｇ７会議出席とか、その

典型であるということ。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、その状態で、後天的定住集団社会Ａが、他の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ列強諸国から異類と見なされ浮いてしまうと、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ列強諸国の共同体から無視され、定住集団からの追放、仲間はずれにされてしまい、国際的に孤立して生きていけなくなると思い込む。（後天的定住集団社会Ａは定住生活中心社会群ＡＢＣで先天的定住集団社会ＢＣと仲が悪く孤立している。）ということ。そして、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ列強諸国に対して、後天的定住集団社会Ａは皆さんと同質、同類になります、一体化します、どうか定住集団からの追放、仲間はずれにしないで下さいと必死になってアピールする。
そのアピールが、後天的定住集団社会Ａによる、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ列強諸国の社会制度や文化を、必死になって輸入し盲目的に導入する社会的行動として現れる。それがすなわち後天的定住集団社会Ａにおける先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』の行動である。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』の後天的定住集団社会Ａの定住民たちは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の真似と表面的な同一化、一体化を必死に行い、見かけは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと変わらない社会的、文化的外観を身に付けることを達成し、これなら先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの身内に入れてもらえるだろうと考えるのである。後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』の行動には、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨから仲間はずれ、定住集団からの追放にされることへの恐怖心が無意識のうちに反映されているのである。
ところが、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは、牧畜民社会、男社会なので、相互にバラバラ、異質なのが前提で、そもそも後天的定住集団社会Ａ、女社会では当たり前な「身内、内輪の一体感」「仲間はずれ、定住集団からの追放への恐怖感」の概念とか特に持っていないと考えられる。個人主義、自由主義の牧畜民は、所属集団による成員への締め付けが弱く、仲間はずれ、定住集団からの追放の恐怖とは無縁の存在と言える。あと、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは黄色人種の後天的定住集団社会Ａと違い、白色人種がほとんどで、地理的にも後天的定住集団社会Ａの位置する定住生活中心社会群ＡＢＣとは全然関係の無い大西洋側の位置にいるのである。なので、後天的定住集団社会Ａが必死に片思いするほどには後天的定住集団社会Ａには関心も親近感も持っていないと考えられる。
後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』の定住民たちの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに対する、

「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの身内に入れて」「定住集団からの追放にしないで」というひたむきな片思いは、その必死さと裏腹に、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにはあまり伝わっておらず、実効性にも乏しく、近年は後天的定住集団社会Ａと同類の先天的定住集団社会Ｂの台頭と相まって、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにとっては後天的定住集団社会Ａは影の薄い、ますます遠い存在となっているのが実情では無いだろうか。
その点、後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの仲間に入れてもらおうとして先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』ばかりやっている現状をそろそろ見直した方が良いのではないかと考えられる。後天的定住集団社会Ａが国際的に孤立しないために、仲の悪い先天的定住集団社会ＢＣとの関係を修復したりとか、考えるべき時期に来ているのではないだろうか。

女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策からの脱却と近隣女性優位地域と遠隔男性優位地域の両方と親しくしようとする思想の国策への転換が必要。

後天的定住集団社会Ａの明治維新以来の国是が女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想である。定住生活中心社会群ＡＢＣの社会秩序から脱出して先進的移動生活中心社会群Ｆ北米の仲間入りをするというものであるということ。この考えは現在にいたるまで強く後天的定住集団社会Ａのメンバーに受け入れられており、後天的定住集団社会Ａの根幹を決める考え方になっている。
定住生活中心社会群ＡＢＣの先天的定住集団社会ＢＣは先進的移動生活中心社会群Ｆ北米に比べて社会が弱く遅れており、先進的移動生活中心社会群Ｆ北米列強の植民地政策のターゲットになってしまうので、後天的定住集団社会Ａが国の独立を維持するには、従来の定住生活中心社会群ＡＢＣの文物を捨てて、先進的移動生活中心社会群Ｆ北米の文物を急速に導入する必要がある。またそうすることで後天的定住集団社会Ａは従来の先天的定住集団社会ＢＣ中心の定住生活中心社会群ＡＢＣの社会秩序を破壊して、新たに定住生活中心社会群ＡＢＣ社会の盟主となり大東亜共栄圏の中心的存在として

君臨できることが予想され、後天的定住集団社会Ａはそれを実現するために今まで必死に女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想してきた。
例えば、後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群Ｆ北米諸国の一員であることを明示するＧ７国際会議などの存在を後天的定住集団社会Ａのメンバーは大きく自慢する。先進的移動生活中心社会群Ｆ北米が世界的に一番強い存在であり、後天的定住集団社会Ａもその仲間入りしていることを後天的定住集団社会Ａのメンバーは誇りに思っているのである。後天的定住集団社会Ａ＝西側と捉える見方が後天的定住集団社会Ａでは一般的である。
この女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の考え方が現在に至るまで後天的定住集団社会Ａのメンバーを強く支配している。後天的定住集団社会Ａの社会学の分野では、先進的移動生活中心社会群Ｆ北米の社会理論の導入が今でも最優先されている。社会の先進的移動生活中心社会群Ｆ北米化が急がれている。後天的定住集団社会Ａの存在、あるいは後天的定住集団社会Ａを支配する母や姑の存在と後天的定住集団社会Ａが女社会であることの明示は後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群Ｆ北米化に反するものであり、潜在的には強力に維持されつつも表面的、顕在的には意図的に隠蔽されており、その存在を明示的に指摘することは社会的なタブーとなっている。
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想指向の後天的定住集団社会Ａの社会学、例えば後天的定住集団社会Ａのフェミニズムにとっては、社会支配者としての母や姑の存在の明示はタブーである。あるいは後天的定住集団社会Ａの支配者が母や姑だと主張するのが後天的定住集団社会Ａのフェミニズムにとってタブーだ。先進的移動生活中心社会群Ｆ北米は家父長制で父が強く、後天的定住集団社会Ａはそれに合わせたくて必死である。後天的定住集団社会Ａで母、姑が強いことになると、後天的定住集団社会Ａは家父長制ではないことになり、家父長制の先進的移動生活中心社会群Ｆ北米の仲間入りができなくなってしまうから、そのことを公に認めるわけにはいかない。女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想する＝先進的移動生活中心社会群Ｆ北米と同質化するためには後天的定住集団社会Ａの強者は父でなくてはならず、それに反して後天的定住集団社会Ａで母姑が強いことを認めると、家父長制の先進的移動生活中心社会群Ｆ北米とは異質になってしまい、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想できなくなるから、近代後天的定住集団社会Ａの国策に反することになるのでタブーであり、後天的定住集団社会Ａのメンバーはそのことを必死で無視しようとする。

定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄの女性の強さについての指摘も後天的定住集団社会Ａのフェミニズムにとってはタブーである。定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄの女性が強いことを認めると、世界的に普遍的に女性が弱くて先進的移動生活中心社会群Ｆ北米のフェミニズムが世界に普遍的に適用され、後天的定住集団社会Ａは先進的移動生活中心社会群Ｆ北米フェミニズム導入の先進国として定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄに影響力を持てるとする後天的定住集団社会Ａの国策に反するからタブーである。あるいは、後天的定住集団社会Ａが定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄの稲作農耕民社会の一員であるという考え方につながり、後天的定住集団社会Ａが蔑視する定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄと後天的定住集団社会Ａが同質で後天的定住集団社会Ａは女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想できないという結論に達し、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想を推進する後天的定住集団社会Ａの国策に反するからタブーである。
後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群Ｆ北米とは異質な定住集団社会であることの指摘も、定住集団社会が定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄに広く分布するという指摘も、そのままでは後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想が不可能、後天的定住集団社会Ａは欧州でなく定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄの仲間であるという結論を導き出し、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想を推進する後天的定住集団社会Ａの国策に反するからタブーである。後天的定住集団社会Ａ＝定住集団社会を主張すると、後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策の足を引っ張ることになり、邪魔者、非国民扱いになるということ。
あるいは後天的定住集団社会Ａ＝定住集団社会論＝稲作農耕民社会論は、後天的定住集団社会Ａが自分たちが格下とみなす定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄと同格という結論を導き出し、高慢な後天的定住集団社会Ａのメンバーのプライドを傷つけるのでタブーである。
また、後天的定住集団社会Ａで男女の性差を主張すると、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで主流のネオリベラリズムの考え＝「性差別はいけないことだ」に反することになり、後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の妨げになるので忌み嫌われ無視される。

先進的移動生活中心社会群Ｆ北米の牧畜民社会では農耕民的な社会主義、全体主義、集団主義、同調主義は受け入れられないとして避けられている。受け入れる自由が無い。なのでそれらの性質を持つ稲作農耕民の後天的定住集団社会Ａでは、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想するためにそれらの考えは表向きは否定の対象になっている。
後天的定住集団社会Ａの家族は厳父と慈母の組み合わせで捉えられることが多いが、それは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的な家父長制にいちばん見えやすいからだろう。後天的定住集団社会Ａの実態としては厳母がとても多いと想像されるがそのことは伏せられている。
女性が先進的移動生活中心社会群Ｆ北米流民主主義と相性が悪いのは、先進的移動生活中心社会群Ｆ北米における女性への待遇の悪さを見れば一目りょう然である。家計は夫に握られて妻は夫から小遣い貰って生活するしかないし、子育ては夫主導で妻は疎外されている。後天的定住集団社会Ａはそれをスタンダードとみなし、母姑優位の後天的定住集団社会Ａのあり方を表面的に必死で否定、無視しようとしてきた。後天的定住集団社会Ａでは女性が家計の財布のひもを握り、子育てで主導権を握り、男性＝息子を操り人形に仕立てて社会を支配する最高権力者として君臨しているが、そのことは明示的に無視されてきている。女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の考え方と相いれず都合が悪いからだ。
女性は先進的移動生活中心社会Ｇ的自由主義、民主主義、個人主義＝男性優位牧畜民的行動様式の敵である。女性は日先天的定住集団社会ＢＣ露・定住生活中心社会群Ｄに広がる集団主義、統制主義、同調主義の源であり、農耕民的行動様式の源である。女性は女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の考え方の阻害要因であり、そのため、後天的定住集団社会Ａは後天的定住集団社会Ａの女性の社会的強さを必死で否定してきた。
後天的定住集団社会Ａが真に女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想するためには、後天的定住集団社会Ａの潜在的基盤となっている定住集団社会的考えを崩し無くす必要がある。
年功序列は後天的定住集団社会Ａだけでなく定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄの稲作農耕民社会に広く分布している。儒教圏外にも分布している。前例やしきたりの絶対視であり、未踏分野に踏み込むことをリスクが大きいとして嫌う女性優位な考え方だ。年功序列社会では女性が権力を握っている。後天的定住集団社会Ａが女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入し

ようとする思想するためには年功序列を否定しないとダメ。
後天的定住集団社会Ａの男性が母や姑による支配に十分抵抗できるだけの力を持つことが後天的定住集団社会Ａでの男性地位向上、家父長制化、ひいては女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想のために必須。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想したかったら父親の育児参加の時間をうんと増やさないとダメ。そして子育ての主導権を父親が握るようにしないとダメ。家計の財布の紐も父親が握らないとダメ。そうしないと後天的定住集団社会Ａはいつまで経っても先進的移動生活中心社会群Ｆ北米並みの家父長制にならない。
しかし、これらの考えは後天的定住集団社会Ａでは心からは受け入れられていない。後天的定住集団社会Ａで代わりに受け入れられているのは和魂洋才という言葉である。和魂洋才という言葉に賛成する後天的定住集団社会Ａのメンバー＝定住民である証拠であるということ。見かけは先進的移動生活中心社会群Ｆ北米の文物を導入しながら、根底では後天的定住集団社会Ａを維持し定住民でいようとする思想である。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは心の底では定住民でいたいのであり、それは後天的定住集団社会Ａのメンバーが従来通り稲作農耕で食べていくためにも必要である。
昔も今も後天的定住集団社会Ａのメンバーが女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想にこだわるのは、後天的定住集団社会Ａが定住生活中心社会群ＡＢＣで一番の地位につきたいから。既存の定住生活中心社会群ＡＢＣの秩序だと一番の地位は人口の多い中華になってしまい、後天的定住集団社会Ａはそのままでは一番になれない。そこで後天的定住集団社会Ａは女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想で先進的移動生活中心社会群Ｆ北米の力を援用することで定住生活中心社会群ＡＢＣの盟主になろうとしてきた。
後天的定住集団社会Ａは明治以降明示的な形で先天的定住集団社会ＢＣに負けたことがない、後天的定住集団社会Ａの方が先天的定住集団社会ＢＣより格上だと後天的定住集団社会Ａのメンバーは思っていて、先天的定住集団社会ＢＣが後天的定住集団社会Ａの残虐行為を批判すると、あたかも下位者（先天的定住集団社会ＢＣ）が上位者（後天的定住集団社会Ａ）に楯突くと感じて、先天的定住集団社会ＢＣに対して差別感情丸出しで激高するのだということ。
なぜ後天的定住集団社会Ａのメンバーは日米安保条約の存続に必死なのか？後天的定住集団社会Ａから先進的移動生活中心社会Ｇが去ると、後天的定住集団社会Ａは自分より強くなった先天的定住集団

社会ＢＣに頭を下げざるを得なくなり、かってひどいことをした報いで陰惨な報復をされ続けることを何よりも怖れているからだろう。みな後天的定住集団社会Ａのメンバーが自分で蒔いた種。自分たちで何とかする必要がある。
定住生活中心社会群ＡＢＣで先天的定住集団社会ＢＣの社会的発展が著しくなり、先進的移動生活中心社会群Ｆ北米や後天的定住集団社会Ａの世界的プレゼンスが低下している現状では、後天的定住集団社会Ａの従来の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想は時代遅れの思想となりつつある。あらたに先天的定住集団社会Ｂが世界の盟主となりつつあり、後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の考え方はその現実に適応できていない。後天的定住集団社会Ａは女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の考え方が妥当かどうかをもう一度考え直す局面に来ている。
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の考えは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが一方的に強くて定住生活中心社会群ＡＢＣでそれに追随して強くなったのが後天的定住集団社会Ａ一国だけだった明治～戦後しばらくまでは有効だったが、最近のように先天的定住集団社会ＢＣが大きく躍進して勢力的に後天的定住集団社会Ａを追い越した現状ではもうあまり意味が無い。
後天的定住集団社会Ａは女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の考え方とは別の考え方を導入する時期に来ているのではないか？
定住生活中心社会群ＡＢＣを無視して先進的移動生活中心社会群Ｆ北米ばかりを見ようとする従来の行き方ではなく、近隣女性優位地域と遠隔男性優位地域の両方と親しくしようとする思想といった感じで定住生活中心社会群ＡＢＣにも先進的移動生活中心社会群Ｆ北米にも両方に目配りして親しく付き合おうする行き方が新たに求められているのではないだろうか？

後天的定住集団社会Ａでの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流フェミニズムの隆盛と女性

優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想

今の後天的定住集団社会Ａを支配する明治政府は、江戸時代の後天的定住集団社会Ａのあり方をことごとく否定して無化する政策を取っている。廃藩置県で江戸時代の地方諸藩の名前を徹底的に潰して、新しい県名に変えたとか一例だけど、この江戸時代の政策否定の伝統が今までずっと続いている感じ。
後天的定住集団社会Ａの現代の社会政策は、今なお江戸時代の否定の色が強い。後天的定住集団社会Ａの明治政府＝今の後天的定住集団社会Ａの政府は、江戸時代を否定する。江戸幕府は彼らの政敵だったからである。
明治政府は、江戸時代の外交方針を否定する。江戸時代の外交方針は、西洋、先進的移動生活中心社会群Ｆを向いた洋学者と、定住生活中心社会群ＡＢＣの先天的定住集団社会ＢＣを向いた漢学者、儒学者の二面追随、二面対応であった。
明治政府はこれを、西洋、先進的移動生活中心社会群Ｆ北米追随に一本化し、先天的定住集団社会ＢＣ追随を否定した。理由は、先進的移動生活中心社会群Ｆ列強による後天的定住集団社会Ａの植民地支配化の可能性があったからだ。その点、先進的移動生活中心社会群Ｆ北米は恐怖の対象であり、明治政府を突き動かしたのは、先進的移動生活中心社会群Ｆ北米が鎖国後天的定住集団社会Ａに与えた強烈な開国インパクトと先進的移動生活中心社会群Ｆ北米への強い恐怖心だった。
先進的移動生活中心社会群Ｆ北米追随への一本化と、他への追随を否定、無視する、この明治政府の政策は、先進的移動生活中心社会群Ｆ北米に勢力的に負けた先天的定住集団社会ＢＣへの否定、嫌悪、軽蔑に結びついた。
後天的定住集団社会Ａは、明治政府の方針により、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想以外の外交パターンを否定、無視し、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ一辺倒になった。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａが強い先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの仲間に入る、近づくのを歓迎する一方で、先天的定住集団社会ＢＣに近づいたり、後天的定住集団社会Ａを先天的定住集団社会ＢＣと同一視するのを嫌うようになった。後天的定住集団社会Ａは、先天的定住集団社会ＢＣのことを、

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに比べ、弱い、格下だ、劣っているとみなすようになった。
後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群Ｆ北米にならって、自分たちの社会が家父長制化するのを熱望するようになった。後天的定住集団社会Ａは自分たちの社会が母権社会と見なされるのを、後天的定住集団社会Ａと先天的定住集団社会ＢＣとの同一視の一環と考え、嫌うようになった。そして、後天的定住集団社会Ａは、自分たちの社会の母権社会からの脱却を希望するようになった。
後天的定住集団社会Ａの明治政府の同盟相手は、戦前はイギリス、戦中はドイツとイタリア、戦後は先進的移動生活中心社会Ｇという感じで、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨばかりである。
後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのフェミニズムを導入して、後天的定住集団社会Ａを家父長制社会と見なすのを好むようになった。後天的定住集団社会Ａにおける先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムの興隆は、後天的定住集団社会Ａが女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想したこと、後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨをまねて家父長制社会になったことを前提としている。その前提は、今の後天的定住集団社会Ａでは疑うこと自体を社会的に拒否される。
一方、後天的定住集団社会Ａは、自分たちを先天的定住集団社会ＢＣと同類とみなす考えを全て否定、無視するようになり、先天的定住集団社会ＢＣ叩きを盛んに行うようになった。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａと先天的定住集団社会ＢＣとの同質性を前提とする後天的定住集団社会Ａ＝母権社会論や後天的定住集団社会Ａや先天的定住集団社会ＢＣにおける母性の強さを世界のフェミニズムの模範とする母性的フェミニズム論とかを全て否定、無視する。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａを江戸時代から変わらないと見なす、後天的定住集団社会Ａ論とかを、江戸幕府が明治政府の政敵であり、江戸幕府の考え方は明治政府によって完全否定されたとして否定する。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、江戸時代の社会と近現代後天的定住集団社会Ａが根本が同一で連続していると主張する後天的定住集団社会Ａ論を全て否定、無視する。これは現代後天的定住集団社会Ａが戦前、戦中と変わらないという指摘が、後天的定住集団社会Ａが太平洋戦争での後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会Ｇへの敗戦と先進的移動生活中心社会Ｇによる後天的定住集団社会Ａ占領で根本から覆され、民主化されたとする主張と相容れないとして批判されるのと

根が同じである。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化したこと、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想が進んだことをに賛成する考えのみを受容する。後天的定住集団社会Ａ民主化論とかがそれである。あるいは、後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａで先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の自由主義、民主主義を進めることを前提とした考えのみを受容する。
女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって、明治政府は上位者で絶対服従の対象であり、批判することは許されない対象である。そのため、後天的定住集団社会Ａのメンバーにとっては、明治政府の国策に沿った考えをすることが第一で最優先であり、考えの科学的正しさは後回しになり、考慮されない。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは上位者の国策に反対する言論は、科学的なものも含めて全て無視する。後天的定住集団社会Ａのメンバーに科学は通用しない。後天的定住集団社会Ａの政府の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策に反する言論は、科学的根拠があっても否定、無視の対象になる。
後天的定住集団社会Ａのメンバーが社会の家父長制化を強く望んだにも関わらず、後天的定住集団社会Ａには、女性優位な母権的後天的定住集団社会Ａが強烈に残存し、存続している。つまり後天的定住集団社会Ａのメンバーは女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想に失敗し続けているのだ。
その理由は、後天的定住集団社会Ａの自然の気候風土がモンスーン的で稲作農耕の水耕に適しており、後天的定住集団社会Ａのメンバーは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的家父長制の前提となる牧草地の放牧に基づく牧畜には向いていないからだ。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、今のところに住み続ける限り、牧畜では食べていけず、食べていくには稲作農耕をやるしかないのだ。そして稲作農耕は社会の女性優位化、母権化をもたらし、それは結局、後天的定住集団社会Ａと先天的定住集団社会ＢＣとの社会の同質化につながる。
後天的定住集団社会Ａには本格的な女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想や社会の家父長制化は、後天的定住集団社会Ａの置かれた気候風土的に不可能であり、無理である。後天的定住集団社会Ａのメンバーは稲作農耕民でいるしかない。後天的定住集団社会Ａのメンバーは女性優位で、先天的定住集団社会ＢＣの同類でい続けるしかない。
後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進

地域へ加入しようとする思想的フェミニズムは、後天的定住集団社会Ａの家父長制化アピールのためのツールである。しかし、その後天的定住集団社会Ａの家父長制化はうまく行っていない。そのため、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは、後天的定住集団社会Ａの女性優位な側面をひたすら攻撃する。後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは、旧来後天的定住集団社会Ａの女性優位社会の象徴である「母」の存在をことさらに無視したり、姑を名誉男性とみなして攻撃する。あるいはオタク男性向けのアニメ、コミック、ゲームの女性ばかりが出てくる女性優位な表現を攻撃する。
後天的定住集団社会Ａは現在もなお、ずっと昔の明治政府の方針にしばられたままであり、明治政府の国策に大きく影響され続けている。太平洋戦争後も明治政府の政体が解体されずに温存されているためである。見かけはスーパー上位者の先進的移動生活中心社会Ｇによって大きく変ったかに見えるが、先進的移動生活中心社会Ｇは旧来の明治政府の上に、スーパー上位者として乗っかっただけで、上位者の明治政府は、その下でそのまま生きながらえている。
後天的定住集団社会Ａは、黒船来航に代表される先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ来襲の心理的インパクトを今も強く受け続けており、これが後天的定住集団社会Ａで女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想が強い原因となっている。
明治政府が女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想を強力に推進し、、後天的定住集団社会Ａのメンバーもその国策に忠実に従ってきた。これが後天的定住集団社会Ａにおける先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズム受容が隆盛する背景になっている。

女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想一辺倒からの脱却が必要だ。

明治以来の後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策は、先天的定住集団社会ＢＣが強くなって後天的定住集団社会Ａを優越してしまった以上、時代遅れで有害な国策だ。江戸時代みたいに、先進的移動生活

中心社会群ＦＧＨを追うチームと先天的定住集団社会ＢＣ（～定住生活中心社会群Ｄ）を追うチームと分けて二方面作戦を取るべきだということ。
先天的定住集団社会ＢＣの強大化で、後天的定住集団社会Ａの従来の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想一辺倒の政策が難しくなった。これは、後天的定住集団社会Ａによる、先天的定住集団社会ＢＣへの無視や攻撃、あるいは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨへのすり寄りを一層強めることにつながっている。それは後天的定住集団社会Ａが他に進むべき道を見つけられずにいるからだ。
後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ、定住生活中心社会群ＡＢＣの二面対応するようになるためには、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ一辺倒の政策を続ける明治政府を倒すしかない。明治政府を倒さない限り、後天的定住集団社会Ａは先天的定住集団社会ＢＣに負け続ける。
後天的定住集団社会Ａで女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想を推進してきた明治政府の存在意義が疑われるようになるのと同時に、従来の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』フェミニズムも存在意義が大きく失われるはずだ。代わりに先天的定住集団社会ＢＣ、定住生活中心社会群Ｄとの女性優位な同質性を重んじる定住生活中心社会群ＡＢＣ～定住生活中心社会群Ｄ『出羽守』フェミニズムが勢力を伸ばすだろう。
後天的定住集団社会Ａは明治政府になってから女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想とその一環としての社会の女性優位性の一掃と家父長制化を目指してきたが、女性優位な先天的定住集団社会ＢＣが強大化したことで、後天的定住集団社会Ａの家父長制化を目指す必要性は大幅に減少した。後天的定住集団社会Ａは女性優位なままでいいのではないかという意見が今後増えてくるだろう。

後天的定住集団社会Ａのメンバーが定住集団社会論、女社会論を無視する理由。

なぜ後天的定住集団社会Ａのメンバーは後天的定住集団社会Ａ＝定住集団社会論、女社会論を無視するか？それは、後天的定住集団社

会Ａ論、女社会論の主張が、後天的定住集団社会Ａが女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想に失敗していることの具体的な指摘に当たるため、心情的に許容できないためである。
「現代後天的定住集団社会Ａは、定住集団社会のままである」という主張は、後天的定住集団社会Ａにおける定住集団社会の存在を指摘、肯定することにより、後天的定住集団社会Ａが女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想に失敗していることの指摘であり、それはすなわち明治政府＝上位者への批判に当たり都合が悪いのである。上位者に絶対服従の女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバーには、後天的定住集団社会Ａにおける定住集団社会の存続の表立っての指摘は、相容れないのである。
かといって、誰かが後天的定住集団社会Ａそれ自体を良くないものとして批判、否定すると、後天的定住集団社会Ａのメンバーにとっては、自分たちの長年続けてきた稲作農耕民としてのアイデンティティを根本的に否定されるので、心情的に受け入れられず都合が悪いのである。
つまり、「後天的定住集団社会Ａ＝定住集団社会」論は、その指摘自体が、肯定の場合も否定の場合も、後天的定住集団社会Ａのメンバーにとってはどちらも都合が悪いのであり、後天的定住集団社会Ａのメンバーは、どちらの指摘もひたすら無視することになる。
これは、「後天的定住集団社会Ａ＝女社会」論についても同様である。後天的定住集団社会Ａが今なお女社会であり続けていることを指摘すると、後天的定住集団社会Ａが女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想、すなわち家父長制化の国策に失敗していることを認めることにことにつながり、後天的定住集団社会Ａのメンバーには到底容認できない。そうかといって、後天的定住集団社会Ａが女社会であることを否定するのは、自分たちが精神的に依存する偉大な「お母さん」の否定につながり、後天的定住集団社会Ａのメンバーは内心としては耐えられない。なので、後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａが女社会であることを指摘されても、反応せずひたすら無視し続けるのである。

後天的定住集団社会Ａの社会学はインチキ

だ！ - 女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想という病 -

後天的定住集団社会Ａの社会学は、明治政府以来の国策である女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想のイデオロギーによって、後天的定住集団社会Ａの知覚への意図的な歪みを生じさせている。それは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ崇拝と定住生活中心社会群ＡＢＣ～定住生活中心社会群Ｄの軽視、蔑視、および後天的定住集団社会Ａ、女社会の人為的隠蔽である。女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策により意図的な歪みを生じさせている点、後天的定住集団社会Ａの社会学はインチキである。
後天的定住集団社会Ａの社会学は、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策を担う御用学者による御用学問の立場から抜け出せていない。
世界社会の列強である先進的移動生活中心社会群Ｆ近代の持ち上げ、崇拝に終始しており、先進的移動生活中心社会群Ｆ近代との同化、後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群Ｆ社会との同一視をしきりに行う一方で、先天的定住集団社会ＢＣや定住生活中心社会群Ｄの蔑視、無視を平気で続けているということ。
また、先進的移動生活中心社会群Ｆのような牧畜民スタイルの生活に似合わない農耕民的な性格を持つ後天的定住集団社会Ａやその基盤となる女社会の存在を必死で隠蔽し続けているということ。それは後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策にとって表向きは邪魔な存在だからだ。
後天的定住集団社会Ａの社会学の教科書や学術書は、先進的移動生活中心社会群Ｆ近代～現代の社会理論とその後天的定住集団社会Ａへの当てはめばかりであり、先進的移動生活中心社会群Ｆ理論を教条的、啓蒙的に上から取り入れるスタイルとなっている。
後天的定住集団社会Ａの社会学の教科書や学術書を書いている人は、大学定住集団、学者定住集団の定住民たちであり、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想的な内容を執筆することで、定住民として認められるようになっている。
後天的定住集団社会Ａの社会学をインチキでなくすには、後天的定住集団社会Ａの社会学者が、先進的移動生活中心社会群Ｆ近代～現代を理想郷とみなして崇拝するのをいち早く止めて、後天的定住集団社会Ａと先天的定住集団社会ＢＣ、定住生活中心社会群ＡＢＣや定住生活中心社会群Ｄと後天的定住集団社会Ａを対等視すると共

に、後天的定住集団社会Ａの本体、本質である後天的定住集団社会Ａとその基盤である女社会の明示的取り上げをするようになることが必要である。
後天的定住集団社会Ａの社会学は、定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄ社会の発展や、定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄ諸国が後天的定住集団社会Ａを追い越したか追い越しつつあることに対応する社会理論を生み出せていない。
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策に従い続ける限り、後天的定住集団社会Ａの社会学は、後天的定住集団社会Ａの真実を見通すことが出来ず、インチキなままである。
後天的定住集団社会Ａの社会学者は、何事も自分たちが理想とする先進的移動生活中心社会群Ｆ近代～現代人の視点で分析しようとする。すなわちユニバーサル、グローバルな視点で社会を分析しようとするということ。それは先進的移動生活中心社会群Ｆ社会学者の視点に偏っており、歪んでいる。彼らは、格好良くて先進的な最新の先進的移動生活中心社会群Ｆ北米しぐさを必死で真似ようとする。
後天的定住集団社会Ａの男性学、女性学とか、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ風のレディーファーストを理想とする、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで社会的弱者であるキャリア女性の職場社会進出の視点ばかりで社会分析をしているということ。
後天的定住集団社会Ａの社会学者は、自分たちがふだん生活している定住集団社会の視点では決して社会分析しない。しても先進的移動生活中心社会群Ｆ社会集団内における後天的定住集団社会Ａ特殊論を振り回すだけである。後天的定住集団社会Ａが本来所属しているはずの一般的な農耕民社会である先天的定住集団社会ＢＣや定住生活中心社会群Ｄの視点を決して取らない。こうした視点は暗闇扱いされ、社会分析の対象としてブランク、盲点となっている。
後天的定住集団社会Ａの社会学者は、今後は、この農耕民視点をもっと取るべきである。いわば女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想から近隣女性優位地域と遠隔男性優位地域の両方と親しくしようとする思想への転換を図るべきであるということ。
かつて後天的定住集団社会Ａの社会心理学で定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄ的集団主義が取り上げられたことがあったが、それも先進的移動生活中心社会群Ｆ北米の社会心理学者のH.Triandisの学説が有名になったからであり、もし有名にならなかったら後天的定住集団社会Ａの学者は取り扱わなかっただろう。
従来の後天的定住集団社会Ａの世界観は、島国後天的定住集団社会

Ａを中心にして、その周囲に上位者である先進的移動生活中心社会群Ｆ北米諸国と、下位者である先天的定住集団社会ＢＣ～定住生活中心社会群Ｄ諸国、その他の定住生活中心社会Ｅ、ユダヤ等の国々が周囲に順不同で並んでいる感じである。後天的定住集団社会Ａvs海外の諸外国、先進国～後進国の位置づけであり、世界社会の把握に劣っているということ。
こうした世界観は、移動生活の国と定住生活の国、あるいは、遊牧系の国（ユダヤ、アラブ、トルコ、モンゴル・・・）、牧畜系の国（先進的移動生活中心社会Ｇ、イギリス、フランス、ドイツ・・・）、農耕系の国（先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１、後天的定住集団社会Ａ、ベトナム・・・）に再編成して捉えるべきであるということ。これこそがあるべき世界観であり、各国の位置づけである。
先進的移動生活中心社会群Ｆ近代は確かに優秀だったし、今後もそうであり、見習う必要があるのは確かだが、後天的定住集団社会Ａをどんどん追い越している定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄ社会のことを説明できる世界視点の社会理論が、後天的定住集団社会Ａの社会学では新たに必要である。後天的定住集団社会Ａの国策の根本的転換が必要である。
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想思想への洗脳のための全体主義的統制の只中にいるのが後天的定住集団社会Ａのメンバーである。洗脳は子供の頃から始まっている。女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想を全体主義的、集団主義的、同調主義的に実現しようとしているのが後天的定住集団社会Ａのメンバーである。
後天的定住集団社会Ａでは、主義主張の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想度が高いほど社会的地位が高くなる、向上する傾向があり、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想度が高いほど、周囲に対してマウントが取りやすい。
例えば、フェミニズムでは次のようになっている。先進的移動生活中心社会群Ｆ北米では女性の社会的地位が低く、女性の地位向上を主張し、自力で稼げるキャリア女がより優位である。これを後天的定住集団社会Ａの国家の内部で、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにおける主義主張の原型を保ったまま、そのまま主張すれば社会的優位者になれるということ。
後天的定住集団社会Ａで先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの文化を身に付ければ付けるほど、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想度の向上によって社会的上位者になれるということ。

あるいは、放送メディアとかでは、映像や写真に先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバーの姿を紹介すればするほど社会的地位が上がる。
先進的移動生活中心社会群Ｆ北米社会における主張とその受容の裏付けがない限り、後天的定住集団社会Ａで同じことを主張しても何も相手にされない。その主義主張が先進的移動生活中心社会群Ｆ北米社会で主張されているということを証拠づけるエビデンスが、主義主張が後天的定住集団社会Ａで受け入れられるために必要なのである。
後天的定住集団社会Ａで主義主張を通すには、主義主張の内容自体は重要ではなく（流行で廃れることもあるため。）、その主義主張が先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでメジャーないし先端的に言われているという証拠を示すことが重要である。後天的定住集団社会Ａでは、その時々の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでの主義主張の流行を先陣を切って紹介することが重要である。
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想は先進的移動生活中心社会群ＦＧＨへの媚び、甘えであり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨへの素朴な信頼心の現れである。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論の即時的反射的機械的導入、コピーがその結果である。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論以外の後天的定住集団社会Ａ独自学説や定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄ学説は無視される。あるいは、後天的定住集団社会Ａでは、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策に合わないか反対する仮説、学説は無視されて、消される。
先進的移動生活中心社会群Ｆの社会理論を世界的流行ということでそのまま導入すれば、牧畜民的思考と農耕民的思考の矛盾に突き当たるということ。牧畜民的な個人主義、自由主義と農耕民的な集団主義、反自由主義とは互いに相いれないのである。
社会問題には、人類共通の社会問題と、農耕民固有の社会問題、遊牧民～牧畜民固有の社会問題が存在する。
後天的定住集団社会Ａが、定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄ社会と基本的なところが同質で能力面で大差ないことから目を背けてきたことが後天的定住集団社会Ａの大きな敗因の一つである。定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄが後天的定住集団社会Ａと同じことをやってきて、後天的定住集団社会Ａは追いつかれ、追い越されたのである。
稲作農耕民社会は互いに社会のあり方や個々人の能力のあり方が基本的に似ている。すなわち和合、同調の重視、製品の作りの微調整の能力と最終完成度が高く国際競争力がとても強い点であり、まさ

しく女性優位である。
いったん追いつかれても独創性があれば引き離せるが、独創性の無いコピー文化の社会同士だと引き離せず抜かれてしまう。これが後天的定住集団社会Ａが先天的定住集団社会ＢＣ、定住生活中心社会群Ｄに負けた～負けつつある根本理由である。対処法は、再び真似て追い抜き返すしかない。
女社会の農耕民は、男社会の遊牧民、牧畜民に、リスクが大きいチャレンジを一方的にさせて、その成果をすぐにコピーして横取りし、改良を加えて完成品にさせ暴利をむさぼる。これが牧畜民社会である先進的移動生活中心社会群Ｆ北米の、農耕民社会の後天的定住集団社会Ａや先天的定住集団社会ＢＣへの不満である。
マクロに強くミクロに弱いのが男性優位遊牧民、牧畜民社会である。
ミクロに強くマクロに弱いのが女性優位農耕民社会である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの文化のコピー導入は後天的定住集団社会Ａだけの専売特許ではなく、定住生活中心社会群ＡＢＣ～定住生活中心社会群Ｄ社会では皆やっている。先進的移動生活中心社会群Ｆ、ユダヤ産の共産主義理論の流行とかその典型であるということ。コピーの初動が後天的定住集団社会Ａだけ少し早かっただけで本質的差が無いので後天的定住集団社会Ａは定住生活中心社会群ＡＢＣ～定住生活中心社会群Ｄ社会に追いつかれ、追い越されたのである。
現代後天的定住集団社会Ａは、以下の傾向がみられる。
・懐古趣味（昔の昭和時代などの勢いの良かった頃の後天的定住集団社会Ａの姿に浸ろうとするということ。）
・女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想と、定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄの無視
・排外と先天的定住集団社会Ｃ１、先天的定住集団社会Ｂ叩き
・対先進的移動生活中心社会群Ｆ北米へのなつき、甘え、追従や盲従
・その他の国への無関心
・後天的定住集団社会Ａ上げ、先天的定住集団社会ＢＣ～定住生活中心社会群Ｄ下げのマウント取り
・内向き、前時代への逆行
すなわち、定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄ諸国の躍進の事実を素直に受け取ることができず、目を背けようとする指向が見えるのである。
現在の後天的定住集団社会Ａは、先天的定住集団社会ＢＣ～定住生活中心社会群Ｄに社会的に負けた～負けつつあることを自覚できて

いないか、自覚していても先の太平洋戦争における大本営発表のように、後天的定住集団社会Ａの定住生活中心社会群ＡＢＣ～定住生活中心社会群Ｄにおける根拠の無い優位性をひたすら主張するだけになっている。後天的定住集団社会Ａの定住生活中心社会群ＡＢＣ～定住生活中心社会群Ｄ諸国に対する経済的敗戦、陥落は、もう目の前に迫っている。それが明確になった時は円通貨の暴落とかが起きるだろう。それにより、後天的定住集団社会Ａは女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策を放棄せざるを得なくなるわけだが、それと同時に図らずも後天的定住集団社会Ａ経済は国際的競争力を再び取り戻すと考えられる。
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想に囚われない新たな社会学が後天的定住集団社会Ａに必要である。後天的定住集団社会Ａにおける伝統的な女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策は定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄ諸国の台頭により転換点を迎えている。今後の後天的定住集団社会Ａでは、他の定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄのような近隣女性優位地域と遠隔男性優位地域の両方と親しくしようとする思想が必要である。

後天的定住集団社会Ａにおける表面的規範と実際的規範と女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、女性優位な社会規範はしっかり生かしている。というか実際には後天的定住集団社会Ａでは女性優位で動かないと定住集団からの追放に会って社会から追い出されてしまう。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、表面的規範としての家父長制的規範と実際的規範の女性優位、母性的規範とを無意識のうちに両方使い分けている。後天的定住集団社会Ａのメンバーの表面的主張は家父長制だが実際の行動は女性優位である。

大日本帝国憲法と後天的定住集団社会Ａの国家憲法は、両方とも後天的定住集団社会Ａにおける女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想のための表面的規範をなしている点で本質は大して変わらない、大きな違いはない。どちらも先進的移動生活中心社会群Ｆ牧畜民社会における実際的規範の後天的定住集団社会Ａ向けの焼き直しである。後天的定住集団社会Ａのメンバーはこれらの憲法を表面的には崇めているが、実際は無視して違うことをやっている。それが女性優位な定住民的な行動である。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、二重規範、ダブルスタンダードの使い分けで社会的主張~生活している。女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の先進的移動生活中心社会群Ｆ流フェミニズムは表面的規範である。
こうした生き方は和魂洋才と関係がある。和魂洋才は、後天的定住集団社会Ａ古来の精神、考え方を保ちつつ、西洋の知識、技術を導入、活用し、両者を調和させる生き方である。
男性流（見かけの規範）と女性流（実際の規範）の正反対の規範、行動様式を同時に所持していることの自己矛盾による精神の分裂、狂いがなぜか起きない。その仕組みは、衣服の着せ替え、例えば大きく異なる色や模様同士の上着の着替えと同じである。人間の心理には、表から順に、表層、間接化層（表層と深層が直接接触したりくっつかないようにする空気のような層。）、深層（基層）の3つの層がある。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、西洋的規範について、表面的には賛成しているが心の奥底では反対している。女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想は表層心理に止まり、深層、基層心理においては女性優位な後天的定住集団社会Ａの精神がそのまま保持されている。

人間の衣類は、上着を着替える時、下着も一緒にくっついてしまうと面倒なので、そうならないように工夫されている。人間の心理も同様になっている。人間の心理では、すなわち平常から表層が深層とは離れているようになっていて、うわべの表層を取り替える時、深層はその影響を受けず、元のままの内容を保つのである。それを可能にするのが間接化層の働きである。人間の脳に間接化層に対応する生理的仕組みが存在するはずである。
後天的定住集団社会Ａでは先進的移動生活中心社会群Ｆ列強の襲来以前は、先天的定住集団社会Ｂを模範としてその真似をする和魂漢才であった。和魂漢才が和魂洋才に変わったのである。変わらない和魂の部分が深層、基層心理であり、衣服で言えば下着である。漢才から洋才へと取り換えが起きた部分が表層心理であり、衣服で言

えば上着である。ということ。そして深層、基層の和魂の部分を傷つけずに表層を漢才から洋才へとはく離、取り換え可能にしたのが間接化層の心理であり、衣服で言えば、はく離素材の上着裏面と下着表面での使用である。
こうした流行に伴う表層思想の次から次への着せ替えが得意なのは女性であり、苦手なのが男性である。つまり、心理的に間接化層が発達しているのが女性であり、それに劣るのが男性だと言える。
あるいは着せ替えの代わりに、色、模様付きの表層を水できれいに洗い流して白色無地の深層、基層に戻せるようになっているとも言える。この場合、表層を水等の溶液で溶かし深層、基層を無傷、無変質のまま洗い流せる機能を深層、基層の表面に付与するのが間接化層である。
あるいは間接化層の実体は、ローションで表すことができる。互いに重ねられた傷つきやすい面をそれぞれ持つ表層と深層、基層の間を円滑化して互いに傷つかないようにする液体のローションの持つ機能こそが間接化層の機能である。
（初出2019年9月）

後天的定住集団社会Ａのフェミニズムはインチキだ！

後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、要約すると、以下の通りである。
・後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群Ｆ北米化のための国策学問であり、そこにはおのずと内容面で限界がある。（人為的な社会操作のための理論であり、自然な理論でないということ。）
・スーパー上位者である先進的移動生活中心社会群Ｆ北米社会への忖度のツールとして成り立っているということ。
・理論の主要な担い手である後天的定住集団社会Ａの女性に強烈な被害者意識があり、自分たち女性を社会的弱者とみなして一歩も譲らず、「攻撃は最大の防御なり」とみなしている。
・女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想最優先と、それに都合の悪い真実（後天的定住集団社会Ａにおける母の強さ）の隠蔽を行っているということ。
・証拠積み上げの科学より、後天的定住集団社会Ａの女性が言いたい放題の女性独裁社会を作る運動を優先している。

後天的定住集団社会Ａフェミニズムは、さらに言えば、以下の通りである。
・後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーを女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想へと洗脳する国策ツールの一環であるということ。
・強い国々（先進的移動生活中心社会群Ｆ北米）に自分を合わせて表面的であるにせよ変化しようとする動きであるということ。
・先進的移動生活中心社会群Ｆ列強の家父長制社会、国家に女性優位な後天的定住集団社会Ａを合わせるための道具理論であるということ。
・社会的に強い後天的定住集団社会Ａの女性を弱くみせるための隠蔽工作の道具であるということ。

後天的定住集団社会Ａのフェミニストは、次のことを行う。
・後天的定住集団社会Ａを家父長制らしくみせようとするということ。
・後天的定住集団社会Ａの男性を強く、後天的定住集団社会Ａの女性を弱くみせようとするということ。
・後天的定住集団社会Ａを「男装の麗人」社会にしようとするということ。後天的定住集団社会Ａの見かけを男性優位にするとともに、後天的定住集団社会Ａの女性優位な実態を隠すということ。
・男尊女卑を強調するということ。
・後天的定住集団社会Ａの女性の強い側面を全部無視し、弱そうな側面をことさらに取り出して強調するということ。後天的定住集団社会Ａの女性が弱く差別されていて解放が必要であることを強調する。
後天的定住集団社会Ａの女性の強い側面は、以下の内容である。
＞母や姑の側面（子供を出産した後）
＞後天的定住集団社会Ａの国民性、社会風土が女性優位であるということ。（情緒的、非合理的、根性論や精神論の振り回し、相互一体感や同調行動の強制）
＞一家の財産管理と出納の許認可、夫や子供への小遣い制の権限所有
＞自分の子供の所有物化、私物化と一生支配、親権の独占、子供の教育の主導権を把握
であるということ。これらをひたすら無視するということ。
一方、後天的定住集団社会Ａの女性の一見弱い側面は、以下の内容である。
＞娘や嫁の側面（子供を出産する前）

＞財産所有権がなかったということ。（自分の支配下にある息子に委託）
＞選挙権がなかったということ。（自分の支配下にある息子に委託）
＞企業等における女性管理職の少なさ（専業主婦として管理職男性のマネージャーになることで間接的に社会を支配するということ。）
であるということ。これらをひたすら強調するということ。
・従来の後天的定住集団社会Ａの男性は外回り＝外働き、後天的定住集団社会Ａの女性は内回り＝家庭で、外回りの方が価値があると、先進的移動生活中心社会群Ｆ女性を引き合いに出して洗脳する。後天的定住集団社会Ａの女性の社会進出＝外働きを理想とみなし、家庭に留まっているのをＮＧとする洗脳を行うということ。（先進的移動生活中心社会群Ｆ女性は、実際は家庭の主導権を男性に握られて居場所が無くて仕方なく外回りを選択せざるを得ない。）

後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、以下のことを行う。
・後天的定住集団社会Ａが女性優位な稲作農耕民社会であることを無視する、隠蔽する。（指摘しても回答、反応しない。）
・定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄ（稲作農耕民）を下に見て蔑視し，先進的移動生活中心社会群Ｆ（牧畜民）を上に見て崇める、媚びる政策の一環であるということ。下位者を見下し、叩き、上位者になびく女性優位な態度、考え方であるということ。
・後天的定住集団社会Ａを先進的移動生活中心社会群Ｆ北米のような牧畜民らしくみせようとする、表面的に牧畜民と同化させるということ。（肉食礼賛とか。）
・後天的定住集団社会Ａを隠蔽するが、決してなくそうとはしないで温存する。自分たちの実体が定住民だから。

後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、以下のことを行う。
・女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想型フェミニズム（先進的移動生活中心社会群Ｆ女性を標準、理想とするフェミニズム）を国策としてもっぱら推進するということ。
・在亜型フェミニズム（女性、母性の強い後天的定住集団社会Ａ＝定住生活中心社会群ＡＢＣ社会の一環に合ったフェミニズム）は女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想に都合が悪いので、指摘があっても無視して消去する。

女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想は上位者の国策なので標準後天的定住集団社会Ａのメンバーは反対できない。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、男は強い、女は弱いと公教育で繰り返し先進的移動生活中心社会群Ｆ家父長制の洗脳を受け、それが正解だと思い込んでいる。後天的定住集団社会Ａのメンバーは後天的定住集団社会Ａが家父長制社会だと本気で信じており、それに疑問を投げかけると怒り出したり、無反応を決め込む。
マルクス主義やそれに基づく社会革命による共産党政権の樹立も入欧政策の一種である。定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄも実はある程度後天的定住集団社会Ａと同じ入欧政策をやっている。先進的移動生活中心社会群Ｆ植民地化から抜け出す方策の一環であるということ。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムやジェンダー論は女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の方向へと意図的、人為的に歪められた内容となっており、内容は恣意的であり、科学的ではない。その点インチキであるということ。
非科学的な根性論を振り回す標準後天的定住集団社会Ａのメンバーは女性優位。後天的定住集団社会Ａの体育会系的思考は女性優位。非合理性、情緒性のかたまりだということ。こうした非科学性、感情優位性が後天的定住集団社会Ａのフェミニズムにもしっかり受け継がれている。
女性の自己愛、保身、責任転嫁、被害者意識の強さは、男性と比べて遺伝的性差ありで、これがフェミニズムにも強力に反映されており、「女性＝弱い被害者」という誤った公式を生み出す原因になっている。
（初出2019年9月）

後天的定住集団社会Ａのフェミニズムが無視する後天的定住集団社会Ａの女性の強さ。

後天的定住集団社会Ａの女性の自分の家計管理権力独占（夫の小遣い制）や子供の教育権の独占、家族人員の管理とメンテナンス権独占こそが後天的定住集団社会Ａ母に代表される後天的定住集団社会Ａの最終権力者を生み出すもとになり後天的定住集団社会Ａ全体で女性や母性を優遇しているのに、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちがそれを無視してキャリア女の話ばかりする理由は何でなのか？

それを言うなら就職した企業定住集団の正規メンバー（定住民）に対する24時間の滅私奉公を要求する後天的定住集団社会Ａ企業の姿勢を正すのが本来であろう。男女両方24時間滅私奉公だと結婚、家庭生活は成り立たない。どちらかが長時間奴隷労働をしてもう一方はそのメンテナンス管理を行う羽目になる。これが後天的定住集団社会Ａの性別分業の源だと思うので。
あと、後天的定住集団社会Ａの男女の賃金格差は、女性が出産、育児で退職し履歴にブランクができることにより、後天的定住集団社会Ａの企業の企業定住集団の正規メンバー（定住民）への応募者に対する経歴履歴ブランク差別として生じている。この差別は何も女性に限ったことではなく、男性でも就職氷河期世代で大量に生まれていて、根は同じで、男女差別は副産物である。
また、母親や妻になる後天的定住集団社会Ａの女性は少数派であると後天的定住集団社会Ａのフェミニストは主張するがそれは本当なのか？専業主婦にあこがれる若い後天的定住集団社会Ａの女性が多いことはどうなるのだろうか？人間が未来の子孫を残すには結婚して子供を夫婦共同で作るしかないのであるが、男性も女性も結婚せず自分の子孫を作らない社会はどのような結果をもたらすか分かっているのだろうか？
そもそも後天的定住集団社会Ａの企業定住集団所有者経営者への滅私奉公型の労働環境が企業定住集団の正規メンバー（定住民）の夫婦同時に強制されていて夫婦双方が家事、育児をする暇がなくなり結婚生活の破綻につながるとか、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちはきちんと読めておらず、夫婦とも勤務先の企業定住集団ムラ、企業定住集団に心理的に24時間隷従しつづけることを前提とした家事や育児の制度を作ってしまっている。そういう点で、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは典型的な定住民だ。
後天的定住集団社会Ａで女性の学歴や労働キャリアが高くなくても確固とした主婦の地位につけるのは事実上の女性優遇である。後天的定住集団社会Ａの女性は学歴面や労働キャリア面で特にこれといった努力をしなくても、お気軽で家庭の財布の紐を握って家計の決定権を掌握ができて経済面での権力者になれたり、自分の子供の教育権や親権を独占できる社会教育面での権力者に簡単になれる。後天的定住集団社会Ａの男性はこうした権力者になりにくいのが問題だし、そもそも後天的定住集団社会Ａの男性が見かけ上社会の高い地位につこうと努力するのも男性の母親の自己実現の道具にすぎなかったりする。後天的定住集団社会Ａで一番強いのは母親一般であり、そのことを無視する後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは社会理論としては片手落ちの存在だ。
母子癒着の終生持続と母による子供の永続的支配が後天的定住集団

社会Ａの母が後天的定住集団社会Ａで最高権力者であることの根拠である。
後天的定住集団社会Ａの父は母子の強力なユニオンに割って入るだけの実力が無く、自身の経済的甲斐性を必死に宣伝するにとどまっている。
後天的定住集団社会Ａの母を批判する、叩くことが後天的定住集団社会Ａのタブーになっている。
（初出2019年9月）

社会と家庭と後天的定住集団社会Ａのフェミニズム

後天的定住集団社会Ａのフェミニストは社会と家庭は分離していると真剣に信じている。
しかし、社会における家庭の影響を否定することは、社会における血縁ベースの子育ての影響を否定することと同じであり、間違っていると思う。
つまり空母なしに戦闘機が飛行できると思っているようなもので馬鹿馬鹿しい限りだ。
後天的定住集団社会Ａのフェミニストは「女性全員が結婚して子供をもつわけではないのに、どうして母親や妻になる女性の話ばかりするのか」という定型的反論を持ち出すが、男女の結婚難に基づく後天的定住集団社会Ａの少子化という社会政策の失敗を正当化、隠蔽する内容になっており問題だ。
こうした後天的定住集団社会Ａのフェミニストの言説は、生物として結婚して後世に子孫を残す人間としての男性、女性の本性を否定する内容になっており、それも問題だ。まるで遺伝的子孫を残すのは悪だと主張するようなものだからだ。その主張は人間の生物としての本性に反している。
あるいは、後天的定住集団社会Ａの女性が結婚して母親になると社会的な立場がむちゃくちゃ強くなるという、後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想を難しくする社会現象を臭い物に蓋をする形で強制的に隠そうとするもので、これも問題だ。
あるいは、結婚しようとしない女性という社会的少数派のことばかり取り上げて、結婚して生まれた自分の子供を一生支配するという多数派の後天的定住集団社会Ａの女性のことをひたすら無視するのは、少数派尊重という美辞麗句に媚びて後天的定住集団社会Ａの大

局を見失っている証拠だ。
後天的定住集団社会Ａのフェミニストは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流のキャリア女をやたらと賛美し持ち上げるが、そもそもそうした先進的移動生活中心社会群ＦＧＨキャリア女は家庭からも子供からも疎外された先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性の置かれた厳しい社会的立場のことをちっとも考慮していない。キャリア女賛美は後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想政策の道具に過ぎない。
伝統的な後天的定住集団社会Ａの女性の社会的支配戦略は、自分の子供たちへの支配を通じて後天的定住集団社会Ａを支配するというものである。これを肯定すると後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想が難しくなるので、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想のリーダーを自認する後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは必死で無いことにしようとする。
後天的定住集団社会Ａの伝統的性的分業は、以下の通りである。
・空母＝家庭＝戦闘機の帰還場所、メンテナンスと管理の場所＝女性
・戦闘機＝家庭から社会、学校に出撃する男性、子供たち
であるということ。
なぜ、空母の存在の社会的支配力の大きさを指摘すると後天的定住集団社会Ａのフェミニストは無視したり、女性差別だと怒り出すのか理解不能だ。
後天的定住集団社会Ａの家庭空母が社会的に大きいことは女権拡張に結びつき、フェミニズム的には良いことなのと違うのか？女性差別でなくて戦闘機の矮小化という男性差別に結びついていると思われるのにそれを指摘しない後天的定住集団社会Ａのマスキュリズムも問題だ。
後天的定住集団社会Ａのマスキュリズムも女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想指向なので、定住生活中心社会群ＡＢＣや定住生活中心社会群Ｄ社会の「女性＝巨大家庭空母の支配者」という図式をあからさまに無視し、社会的に矮小な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的キャリア女的女性のことばかり取り上げようとする。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムにおいてもマスキュリズムにおいても後天的定住集団社会Ａの把握のあり方が女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想流に大きく歪曲されている。後天的定住集団社会Ａの社会学が科学になり切れない大きな原因だ。
先進的移動生活中心社会群Ｆ北米フェミニズムのコピペしかできな

い後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは早く後天的定住集団社会Ａの大学から出て行くべきだ。
ていうか、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズム学説にひたすらペコペコして定住生活中心社会群ＡＢＣや定住生活中心社会群Ｄの女性の強さを無視し続けるのを今すぐ止めるべきだ。
現状の後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちと後天的定住集団社会Ａのマスコミは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにひたすらすり寄って、定住生活中心社会群ＡＢＣや定住生活中心社会群Ｄのことを無視し続ける点でそっくりだ。
後天的定住集団社会Ａで伝統的な稲作農耕を続ける限り、後天的定住集団社会Ａの支配者の役割は女性が担い続けるだろう。
国家の所有者一家の人たちが毎年の田植えと稲刈りの儀式を行う限り、後天的定住集団社会Ａは女性優位な稲作農耕社会であり続けるだろう。
無能な男性に代わり自ら稼ぐために戦闘機のように素早く小回りをもって動き回れる機動性に富んだ、ふだんはコンパクトに存在を折りたためるキャリア持ちの巨大家庭空母＝社会的強者としての役割が定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄの女性には求められて実現してきたし、今後もそうだろう。
後天的定住集団社会Ａの女性もこれを見習うべきだ。弱者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨキャリア女の真似ばかりしていてはダメだ。
（初出2019年9月）

後天的定住集団社会Ａの腐敗と女性

後天的定住集団社会Ａは腐った後天的定住集団社会Ａの女性たちが支配する。
安倍官邸も腐った後天的定住集団社会Ａ母たちの産物である。
後天的定住集団社会Ａのような女性優位な農耕民社会は放っておくとコネクションの癒着で腐敗して衰退する。発展させるには定期的に現状の社会を破壊して更地にする必要がある。
破壊方法としては人為的な革命や戦争、自然の力による地震とかがある。
後天的定住集団社会Ａの定期的破壊と再生には、大きな地震が有効である。
女社会の後天的定住集団社会Ａは前例追認で現状がそのまま改めら

れることなく続きやすい。また姑的、お局的なリーダー、権力者が権力を手放さず、自身の責任転嫁をしながら好き放題やり続けるので、自身ではなかなか自体が好転しにくい問題がある。
その点、後天的定住集団社会Ａの安倍首相の独裁的な治世は先天的定住集団社会Ｂの西太后と似ている。外的勢力に田んぼや畑をすき返してもらう必要があり、それが後天的定住集団社会Ａでは先の太平洋戦争による先進的移動生活中心社会Ｇによる後天的定住集団社会Ａ占領だったと考えられる。
（初出2019年9月）

後天的定住集団社会Ａのフェミニズムと、モンスター化した後天的定住集団社会Ａの女性たち

女性が弱い社会である移動遊牧民、牧畜民社会（先進的移動生活中心社会群Ｆ、ユダヤ・・・）における女権拡張のための社会理論を、女性が強い社会である定住農耕民社会（後天的定住集団社会Ａ）に導入したら、後天的定住集団社会Ａの女性がモンスター化して、暴力的な言論をほしいままにして、強力過ぎて暴走して、誰も手をつけられない存在になってしまった。
（初出2019年10月）

世界のフェミニズムはインチキだ！

女性は被害者意識、弱者意識の塊であり、自分の加害者性、強者性を決して認めようとしない。後天的定住集団社会Ａを含む定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄにおける強い女性の存在を認めようとしないということ。
彼女らは、遺伝的性差を認めない非科学的、非合理的存在である。
彼女らは、自分たちに対する反論を無視したり、無反応を決め込んで、事態の鎮静化を図ろうと必死である。
（初出2019年10月）

後天的定住集団社会Ａのフェミニズムとお勉強会

後天的定住集団社会Ａフェミニズムは先進的移動生活中心社会群Ｆ北米的家父長制の真似事、お勉強会である。表面的コピーペーストは上手くやっているが、しょせんは真似事なので後天的定住集団社会Ａの本質的部分は変えることができない。どうしても地の後天的定住集団社会Ａ＝母権社会が出てきてしまう。
（初出2019年10月）

御用学問としての後天的定住集団社会Ａのフェミニズム

後天的定住集団社会Ａのフェミニストは、女性優位な後天的定住集団社会Ａを家族定住集団父長制社会に見せる演出家族定住集団である。
後天的定住集団社会Ａの政府は、母権がのさばる後天的定住集団社会Ａを表向き家父長制社会に見せかけて、自分たちの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想に向けて先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを懐柔する作戦を国ぐるみで取っている。
後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちはこの作戦の実行部隊である。伝統後天的定住集団社会Ａの母権的、女権的要素を全て否定、抹殺する言質を取ったうえで、後天的定住集団社会Ａが家父長制社会であり、その演出された家父長制の枠内で後天的定住集団社会Ａの女性がどんなに苦しんでいるかを舞台演出の演劇形式で必死にアピールする。
定住生活中心社会群ＡＢＣ社会秩序において先天的定住集団社会ＢＣが優位に立って後天的定住集団社会Ａが劣位で孤立していることが、後天的定住集団社会Ａを女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想に駆り立てる。女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想実現の条件として、女性優位な後天的定住集団社会Ａが家父長制社会に見かけだけでも良いからなることが必要で、それが後天的定住集団社会Ａの「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』」フェミニストたちが社会的にのさばる原因となっている。
後天的定住集団社会Ａの女性は、後天的定住集団社会Ａを今まで通り自分たちが強者として思うままに支配したいが、その責任は取りたくない。その戦略として取られているのが「女は弱者だ、被害者だ！」と、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムに合わせ

てひたすら大音響で叫びまくることだ。弱者の後天的定住集団社会Ａの男性にはなすすべがない。
この戦略は、後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想のために、後天的定住集団社会Ａを見かけ上家父長制社会に見せかけ、稲作農耕民の後天的定住集団社会Ａが根本的に持つ母権、女権社会の本性を隠ぺいするために極めて効果的だ。
後天的定住集団社会Ａのフェミニストは、表面的には左派の面をしているけれど、実際にやっていることは、後天的定住集団社会Ａ支配層の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策を忠実にトレースして、後天的定住集団社会Ａがあたかも家父長制社会であるかのように見える状況を実現しようとしている点、政権体制寄りのバリバリの右派であると捉えることができる。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、少なくとも体制派の御用学問であることは確かだ。女性には、自己保身のため、既存の上位者。（後天的定住集団社会Ａの国家）、あるいはスーパー上位者（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ）の体制に順応して生きようとする本性がある。今の後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策を推し進める上位者の後天的定住集団社会Ａの政府と、女性を弱者と説くスーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのフェミニズムの両方に同時に順応している。その結果、伝統後天的定住集団社会Ａ、あるいは定住生活中心社会群ＡＢＣ～定住生活中心社会群Ｄ社会での女性、母性の強さを故意に無視しているということ。これは社会的事実の意図的な歪曲であると言ってよく、科学的見地からは明らかにマイナスである。
後天的定住集団社会Ａのメンバーが先天的定住集団社会ＢＣに対してひたすらヒステリックに罵倒の言葉表現を極めるのは、それだけ先天的定住集団社会ＢＣへの心理的なコンプレックスが強いことを意味している。後天的定住集団社会Ａのメンバーはこの深層心理レベルのコンプレックスの存在をもっと自覚した方がいい。後天的定住集団社会Ａのフェミニズムも、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想を目指している点、このコンプレックスで動いている面がある。
もしも後天的定住集団社会Ａが定住生活中心社会群ＡＢＣ社会秩序において先天的定住集団社会ＢＣと同じような対等な立場を取れていたら、後天的定住集団社会Ａのメンバーがこれほど先天的定住集団社会ＢＣに対してやっかみ半分のヘイトスピーチを暴発させ繰り返す事態は起こっていないだろう。後天的定住集団社会Ａのメン

バーは先天的定住集団社会ＢＣからの「小後天的定住集団社会Ａ」「後天的定住集団社会Ａ鬼子」呼ばわりを強く根に持っており、これが女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の原動力になっている。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの資金の流れは、国や地方の役所の税金を集めて、国や地方の役所の男女共同参画の部局からフェミニストの大学教員たちとかに渡り、そこから活動家族定住集団の末端フェミニストに流れているのではないかと筆者は想像する。末端のツイッターフェミニストのツイッター書き込みもこの一環で、安倍官邸擁護のネット右翼による書き込みと根が同じで、国策になっているはずだ。後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは税金で食べているのだ。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムが外見的に自分たちが社会的弱者だと主張して伝統後天的定住集団社会Ａを批判して社会体制改革を主張しつつ、その内実では後天的定住集団社会Ａの政府の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策に協力する体制派の社会的強者の御用学問となっていることは、取っている態度に大きな矛盾があり、徹底的に批判されなくてはならない。
後天的定住集団社会Ａの女性は、嫁娘だと弱者、被害者の面も否定できないが、母姑になると一気に社会的強者、加害者の側に回るのだ。この点を後天的定住集団社会Ａのメンバーはほとんど無視してしまう。女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想イデオロギー公教育で後天的定住集団社会Ａは家父長制社会にならないといけないと洗脳され、後天的定住集団社会Ａの女性の弱い面しか見れなくなるからだ。
後天的定住集団社会Ａの女性は、実態とかけ離れた強烈な弱者意識、被害者意識の持ち主で、強国（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ）に媚びる権威主義の持ち主なので、男性が女性と対話しようとしても、これらの偏った意識を女性に一方的に振り回されるだけで男性の負けで終わってしまう。男性が勝つにはそれらを否定する性差に関する科学的証拠を繰り出す必要がある。
後天的定住集団社会Ａのフェミニスト女性たちの、自分たちの気に入らない相手、対象を集団で寄ってたかって徹底的にリンチして潰す能力の高さには恐れ入るばかりである。さすが後天的定住集団社会Ａの支配者だけはある。後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちと後天的定住集団社会Ａの右翼とは、その行動原理は、集団暴力であり、同じである。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、後天的定住集団社会Ａの国レベルでの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入

しようとする思想の実現とその一環として後天的定住集団社会Ａを疑似的に家父長制社会に見せかけるための、上位者のバックアップを受けた御用学問で権威主義の産物だ。
後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちが盛んに後天的定住集団社会Ａの女性萌え絵的表現（動画、音声を含むということ。）を攻撃するのは、女性萌え絵が女性優位後天的定住集団社会Ａの象徴であり、後天的定住集団社会Ａを家父長制社会に見せかける上での大きな障害になっているからだ。後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちによる、最近開業した旅客鉄道駅であるJR東後天的定住集団社会Ａの高輪ゲートウェイ駅に導入された女性AIへの攻撃もこの一環だ。
後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちによる女性萌え絵叩きと、後天的定住集団社会Ａのメンバーによる先天的定住集団社会ＢＣへの罵倒とは、双方ともに後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の実現という点で共通の根を持っている。
先天的定住集団社会ＢＣメインの定住生活中心社会群ＡＢＣ世界から脱して先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの一員になる、そのために見かけだけでも家父長制社会になるという後天的定住集団社会Ａの国レベルでの目論見が後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの強大化につながっている。
しかし、その目論見は、劣っていたかに見えていた先天的定住集団社会ＢＣが世界的に興隆を果たし、後天的定住集団社会Ａと後天的定住集団社会Ａの宗主国先進的移動生活中心社会Ｇを脅かすようになって、大きく崩れている。
ちなみに、先天的定住集団社会ＢＣでも後天的定住集団社会Ａの女性萌え絵表現は広く受け入れられている。（それは、女性優位な社会なので当然である。）それは、本家の後天的定住集団社会Ａをしのぐ勢いになっているということ。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムが女性解放の建前とは裏腹に強い家父長制への指向を持っているのは、後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想、すなわち伝統的な定住生活中心社会群ＡＢＣ的女性優位社会から先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的家父長制社会への転換を見かけだけでも実現するための手段である以上、当然のことである。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、後天的定住集団社会Ａを家父長制社会に見せるための社会的な道具なのだ。
なので、後天的定住集団社会Ａのフェミニスト、あるいは女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想指向の後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａにお

ける母性の強さや女性優位な側面を強調する言説が現れると、ひたすら無視を決め込んだり、「後天的定住集団社会Ａは家父長制社会だ！」と言って攻撃してくるのである。
社会的に母性が強いこととか社会が女性優位であることは、女権拡張のフェミニズム本来の理想的到達点のはずなのに、それを攻撃する後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは狂っている。後天的定住集団社会Ａのフェミニズムが狂うのは、後天的定住集団社会Ａのフェミニズムが女権拡張ではなく後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想を最終目標としているからなのだ。
「後天的定住集団社会Ａの女性は強い、後天的定住集団社会Ａの女性は社会的に主流の存在だ」と主張している限り、後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想は永遠に実現しない。なぜなら、それだと後天的定住集団社会Ａは家父長制の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの仲間にいつまでたっても入れないからだ。なので後天的定住集団社会Ａの国家は女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想的フェミニズムを使って、後天的定住集団社会Ａの女性は弱い、差別されていると盛んに声を上げるよう、後天的定住集団社会Ａのメンバー全体を動員している。
後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちが、ジェンダーギャップ指数を取り上げて後天的定住集団社会Ａの女性が性差別されていると盛んに強調するのも、この一環だ。彼らは内心では、性差別解消ではなく後天的定住集団社会Ａの見かけ上の家父長制化と女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の実現を目的としている。実際のところ、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは後天的定住集団社会Ａの性別役割分業制を無くそうとは考えていない。性別役割分業が後天的定住集団社会Ａの伝統的な定住集団社会の滅私奉公の慣行に基づくものであり、おいそれと変えられないこと、あるいは性別役割分業が解消されると彼ら自身が失業することを認識しているからだ。
後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想的フェミニズムは、後天的定住集団社会Ａの男尊女卑指向と根本的なところで相性が良い。双方とも、後天的定住集団社会Ａを見かけ上家父長制社会と見せることに適しており、後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の実現に適した言説だからだということ。両者は表面上は敵同士だが、実際には仲間同士なのだ。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムが、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨによる、ポリティカルコレクトネスの一環での後天的定住

集団社会Ａコミック、アニメ、ゲーム表現への攻撃に積極的に同調するのも、後天的定住集団社会Ａに内在する女性優位表現への指向の側面、あるいは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの文化への違和感のある側面を潰して、後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想を実現したいという強い意欲の表れだ。
伝統的女性優位後天的定住集団社会Ａの否定と、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的家父長制社会の肯定が、後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想的フェミニズムの基調となっているのだ。後天的定住集団社会Ａのフェミニズムによる後天的定住集団社会Ａの女性優位萌え絵表現の否定、あるいは後天的定住集団社会Ａの女性優位社会論、後天的定住集団社会Ａ母性社会論の無視といった現象は、この視点に立つことで容易に理解することができる。後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想的フェミニズムは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的家父長制社会を内心では肯定しており、女権拡張に反する存在となっている。

（初出2020年3月）

後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想と、後天的定住集団社会Ａの男性、後天的定住集団社会Ａの女性

後天的定住集団社会Ａの2020年春アニメテレビ新番組表を見たが、相変わらず先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的な世界を舞台にした作品が多い。
それか純粋後天的定住集団社会Ａの学校部活かということ。
登場人物は後天的定住集団社会Ａのメンバーか先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバーかの二択。
後天的定住集団社会Ａが作ったアニメで、先天的定住集団社会Ｂのメンバーや先天的定住集団社会Ｃのメンバーがたくさん出てくる作

品はほぼ皆無。
こんなに内容が偏ってしまっていていいのかな？筆者は明治政府の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策の社会的影響力の強さを思い知らされる。

後天的定住集団社会Ａでは、「女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想」が、明治時代以来現在まで、ずっと国策になっていて、それに反する言論は実質統制状態に置かれていて、誰かが女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想に反する話題を出してもひたすら無視されるか、罵声を浴びせられるかのどちらかだ。

後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちが威張っていられるのも、後天的定住集団社会Ａのフェミニズムが、後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策を推進するための御用学問だからで、後天的定住集団社会Ａのフェミニストは体制派の上級国民で社会的強者なのだ。

「主人」という言葉の使われ方を調べたら、後天的定住集団社会Ａでは明治時代より前に使われた形跡が無い。
後天的定住集団社会Ａにおける「主人」の概念は、明治政府による女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想政策とそれに伴う女性優位後天的定住集団社会Ａを家父長制に見せるためのでっち上げの概念に過ぎない。
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想が時代遅れとなった今、家父長制の芝居を止めて、夫に対して主人という用語を使うのを止めるべき。

「亭主」という概念だと江戸時代からあるみたいだけど、この「亭主」という概念は、お母さん主導で育てられ、一生お母さんの付属物、所有物で、お母さんのおもちゃに過ぎない後天的定住集団社会Ａの男性が、お母さんから「お前は結婚して一家を代表するほど大きく立派に成長したね。
お前は偉いね。
」と褒められ、おだてられて、思わず誇らしくなって得意気な顔をするための道具としての概念になっていると思うということ。
一生、自分のお母さんの精神的支配下に留まりつつ、お母さんの精神的後ろ盾に支えられて表向き一家の代表を務めて大きな顔をする

のが伝統的な後天的定住集団社会Ａの男性のあり方だ。
後天的定住集団社会Ａの男性が女性優位でありながら後天的定住集団社会Ａの代表者として君臨し威張ることができる仕組みはこの延長だ。
女性優位な後天的定住集団社会Ａにおける真の支配者である母、姑による息子への精神的後ろ盾の用意と、息子への尻叩き、息子の気持ちの奮い立たせこそが、女性優位な後天的定住集団社会Ａの男性を後天的定住集団社会Ａの表舞台に強迫的に立たせ続けているのだ。
女性優位な後天的定住集団社会Ａにおいて、本来弱く頼りない後天的定住集団社会Ａの男性が一家の代表、あるいは社会の代表として、ひたすら威張る後天的定住集団社会Ａの男尊女卑の本質的な仕組み、原点はここにある。

後天的定住集団社会Ａの男尊女卑制もフェミニズムも、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想のための明治政府による後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーに家父長制の振りをさせるための演技指導の一環として捉えることができる。
後天的定住集団社会Ａの家父長制は、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想のために先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに対して後天的定住集団社会Ａの女性優位な本質を隠すための社会的メッキに過ぎず、後天的定住集団社会Ａの社会的急所を触ると、すぐに剥げてしまう。
妻から夫への小遣い制とかその一例だということ。

以前、筆者は、ツイッター上で、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちが、後天的定住集団社会Ａにおける妻から夫への小遣い制を無くすべきだと真剣に議論しているのを見た。
筆者は、彼らはフェミニズム本来の女権拡張の意味を理解できていないと思った。
筆者は、彼らは頭が本当に悪いんだなと思った。
筆者は、彼らのことを馬鹿だと思っていた。
だが、後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの主張において女権拡張が見せかけで女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想が本丸であることを理解すれば、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちのこうした主張は至極納得の行く発言だと思うようになった。
しかし、彼ら後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちが女権拡張を真剣に目指していない点、彼らのことをフェミニストと果たして

呼べるのか、呼んでいいのかという根本的疑念が生じる。
明らかに偽物フェミニズムだということ。
そして後天的定住集団社会Ａの家父長制もインチキだ。

後天的定住集団社会Ａの家父長制は、明治政府の国策レベルの作り話で社会的偽物、社会的まがい物だ。
後天的定住集団社会Ａの家父長制が偽物である証拠は、今なお強固に続く伝統的後天的定住集団社会Ａと女社会との特徴の照合をすることで、後天的定住集団社会Ａが根本的に女性優位であることを示すことによって得ることができる。

ジャニーズは後天的定住集団社会Ａの女性優位男性の象徴であり、マスキュリズムの視点からは忌避すべき存在なんだけど、後天的定住集団社会Ａのマスキュリズムの人たちは何も反対せず沈黙を守っているね。

後天的定住集団社会Ａのマスキュリズムの力は、女性優位な後天的定住集団社会Ａ解体のために使われるべき。
それは、女性優位な社会秩序から男性を解放することにつながる。

後天的定住集団社会Ａのような女性優位社会では、男性の行動の自由、思想の自由は女性の力によってことごとく潰されている。
後天的定住集団社会Ａの男性に押し付けられているのは、企業定住集団のメンバーとしての奴隷生活であることが大半で、自由なチャレンジャーとして男性らしく生きる道は後天的定住集団社会Ａの国家の内部ではほぼ閉ざされている。

新型コロナウィルス対策でのテレワーク浸透で、後天的定住集団社会Ａの家庭における男性の存在感が強まるというメリットが出てきているのではないかと思う。
後天的定住集団社会Ａの男性の家事や育児に携わる時間が格段に増えて、後天的定住集団社会Ａの男性が、これまで後天的定住集団社会Ａの女性に独占されてきた家庭内での主導権を握れる本格的チャンスがやってきた。

後天的定住集団社会Ａのフェミニストは、自己保身で動き、自己愛

が強く、社会的強者のくせに、責任転嫁の自己弱者、自己被害者アピールを大音響で行って、気に入らない相手を集団で寄ってたかってののしり、叩き、いじめて潰す。
同じ人間とは思えない。
まさにブスの化け物、キモフェミだということ。
女性としての魅力は全く感じられない。

後天的定住集団社会Ａの男性による後天的定住集団社会Ａの女性へのセクハラは、姑による嫁いじめ、嫁いびりの息子版である。
後天的定住集団社会Ａの男性をそういうセクハラ男に育てたのは、女性フェミニストと同じく姑という女性なんだよね。
後天的定住集団社会Ａの男性を批判するフェミ女たちも自分の息子を育てると、息子は姑同様に嫁相当の女性に上から目線で対応する存在になることをお忘れなく。

新型コロナウィルスが原因で死去した志村けんによるセクハラも根は同じで、原因は嫁いじめを行う姑的子育てだ。
志村けんは、むしろそうした姑による子育て方針の犠牲者なのだ。
そのことを隠ぺいするため、同じ女同士でかばい合おうとする後天的定住集団社会Ａのフェミニストには志村けんのセクハラを批判する資格なんかないんだよ。

後天的定住集団社会Ａの男性による後天的定住集団社会Ａの女性へのセクハラの親玉は姑で、姑が息子経由で嫁や嫁相当の女性たちを支配し、いじめていると捉えるのが正解だ。
姑の後ろ盾が無いと、後天的定住集団社会Ａの男性にセクハラをする精神的な勇気は出てこない。

後天的定住集団社会Ａの男性による後天的定住集団社会Ａの女性へのセクハラは、明治政府による女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想のために後天的定住集団社会Ａを家父長制に見せようとする動きも絡んでいるだろう。
この動きは、男性を後天的定住集団社会Ａの支配者に見せかけるために、男性の性的専横を許可するとともに、それを男性による女性の性的搾取であると後天的定住集団社会Ａのフェミニズムが主張できるようにして、後天的定住集団社会Ａの家父長制がまがい物であることを隠すこと、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちが御用学者として食べていけるようにすることに成功しているのだ。

後天的定住集団社会Ａの政府による国民の新型コロナウィルス感染の隠ぺいは、女性の化粧と発想が同じ。
自らの持つ内在する難点を対外的に隠ぺいし、見せかけをよくするために行っているということ。
後天的定住集団社会Ａの心は女心だ。

女性性と奴隷制とは大きな関連があると思う。

女性は、上位者にひたすら媚びて平伏して上位者の奴隷のように行動する一方、下位者に対して自分の奴隷となって動くことを当然のように要求し、従わないとその下位者を集団で袋叩きにして潰す。

後天的定住集団社会Ａが奴隷制になっているのは社会で女性が強いからだ。

後天的定住集団社会Ａを奴隷制化している安倍官邸も女性優位なんだと思う。
先進的移動生活中心社会Ｇみたいな世界の強国に対してペコペコしてひたすらご機嫌取りをする一方、国内の下々に対しては独裁者として振る舞い、自分たちに忖度しない下位者に容赦しない。

先進的移動生活中心社会Ｇみたいな男性の強い社会でも後天的定住集団社会Ａとは別種の実質的な奴隷制がそれはそれで今なお強力に息づいていると思うけど、向こうでは奴隷扱いされた下級労働者たちが自由を求めて公民権運動とかやっているのに対して、後天的定住集団社会Ａのような女性優位な奴隷制社会では、上位者にたてつくこと自体がもう一切許されない。
ひたすら忖度が要求される。

男性性による奴隷制は父による支配、女性性による奴隷制は母による支配がそれぞれ原型になっていると思う。
自分に刃向かう相手に容赦ない機銃掃射を浴びせるのが父による支配で、自分に同調一体化しない相手に機嫌を損ね、締め上げて窒息死させるのが母による支配だと思う。

その通り動けば成功する、出来合いの定石行動のコレクションをたくさん入手、暗記蓄積、改良することにもっぱら力を入れるのが女性優位で、後天的定住集団社会Ａの公務員とか典型的。

一方ひたすら失敗を重ね試行錯誤しながら何とか大ざっぱな定石行動の原型を構築して女性優位な人間に売りつけるのが男流で、先進的移動生活中心社会Ｇのベンチャー上がりの企業とか典型的。

何か新しいことをする時に、女性優位な人々は、既に存在する先生や先輩の模範、前例を欲する。
男流の人々は、先生や先輩の模範、前例は要らない、失敗してもいいから自分の新しいアイデアでやろうと考える。

後天的定住集団社会Ａで先生、先輩が幅を利かせるのは、社会の仕組みが女性優位だからだ。

上位者を優先して助けて、下位者への援助は後回しにするのは女性優位。

下位者を優先して助けて、上位者への援助を後回しにするのが男流。

後天的定住集団社会Ａの感染症緊急政策で政府が上流者への援助を優先して、下流の庶民への援助を後回しにするのは女性優位な証拠。
女性優位は、上流者同士でなれ合い、下流者を締め出す。

後天的定住集団社会Ａは、昔も今も実質的に母親専制社会だ。
後天的定住集団社会Ａの男性は、母や姑の威力を借りる狐に過ぎない。

後天的定住集団社会Ａの政府が、新型コロナウィルスで苦しむ大企業に１千億円出資する案を出した。
上位者も御用聞きも自分たちの内々のことしか眼中にないので当然の結果かな。
上位者を批判する人たちも、自分が上位者の立場になると同じ政策

をやるだろう。

まさに後天的定住集団社会Ａのメンバーの女性優位思考の限界だということ。
内輪の上流で固まって外界の困窮者たちに関心が行かない。

後天的定住集団社会Ａの男性は、一生、後天的定住集団社会Ａの女性の奴隷＆養分扱い。
子供の時は母親の奴隷＆養分で、結婚してからは、それに加えて妻と子供の奴隷＆養分だ。

後天的定住集団社会Ａが本当の家父長制社会、母が無力な社会だったら、後天的定住集団社会Ａの男性にとってどんなに良かったか。
明治政府の掲げる女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策にだまされて、今の女性優位な後天的定住集団社会Ａのことを本気で家父長制だと信じている大勢の後天的定住集団社会Ａの男性たちを見ると、その頭の悪さに、正直馬鹿馬鹿しくなるということ。

後天的定住集団社会Ａの男性たちの、上位者の明治政府による女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想プロパガンダの前にペコペコ頭を下げてひたすら盲従する女性優位な感じが、何とも不気味だ。

後天的定住集団社会Ａの男性は母親に心の髄まで篭絡されているから、死んでも真の家父長制に目を覚ますことはないだろう。
個人主義と自由主義、これが家父長制の神髄なんだけど、女性優位な後天的定住集団社会Ａでは実質的に禁忌の思想だよね。

科学も真の家父長制と関係あるね。
後天的定住集団社会Ａでは科学は女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の宗教扱いで信仰対象として表面的に崇められているけど、いざ後天的定住集団社会Ａのメンバーの誰かが真の科学者になると、科学的真実の前に、上位者に心理的忖度を一切しなくなるので、忖度大好きな標準後天的定住集団社会Ａのメンバーから嫌われ、後天的定住集団社会Ａから疎外され

る。

上位者にひたすら媚びて忖度しつづけないと潰されるのが女性優位な茶坊主国家後天的定住集団社会Ａに生まれた人間の宿命。
逆に言えば、上位者にメンタル面で取り入ることに成功すると立身出世がかなり可能で、みんなそれを目指して人間としての尊厳をかなぐり捨てているという面もありそう。

食えない民主制よりも、食える奴隷制の方がましという考えを後天的定住集団社会Ａの人たちは強く持っている気がする。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、建前上は民主制を支持しないとスーパー上位者の先進的移動生活中心社会Ｇとそれに媚びる上位者の後天的定住集団社会Ａににらまれるから支持しているだけで、上位者の後天的定住集団社会Ａは民主制では動いていないことはみんな知っている。

（初出2020年4月）

今の後天的定住集団社会Ａでは真の言論の自由は存在しない。

「今の後天的定住集団社会Ａでは、言論の自由は保障されている！」とひたすら叫ぶ後天的定住集団社会Ａのメンバーの左派と右派の皆さんに、当方がおお伝えしたいことがある。

実は、今の後天的定住集団社会Ａでは、以下の通りである。
「今の後天的定住集団社会Ａ万歳！」
と叫ぶか、
「今の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ万歳！」
と叫ぶか、
両方か、あるいは、どちらか一方を必ず叫ぶ言論の自由しか社会的には許可されていないのだ。

今の後天的定住集団社会Ａでは、例えば、以下の通りである。
「今の後天的定住集団社会Ａ万歳！」
「今の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ万歳！」
の両方を同時に叫ぶのは、政権右派、あるいは政治的中立の役人指向であり、後天的定住集団社会Ａでは大いに歓迎され、もちろん許される。その理由は、この発言が、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにも、上位者の後天的定住集団社会Ａにも忖度、同調し、心理的一体化できているからだ。

今の後天的定住集団社会Ａでは、例えば、以下の通りである。
「今の後天的定住集団社会Ａ万歳！」
「今の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨはクソ！」
と同時に叫ぶのは、国粋右派であり、美しい伝統後天的定住集団社会Ａの上位者を称賛しているので、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを擁護する左派からは叩かれるが、上位者の後天的定住集団社会Ａの目には適って、何とか許される。

今の後天的定住集団社会Ａでは、例えば、以下の通りである。
「今の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ万歳！」
「今の後天的定住集団社会Ａはクソ！」
と同時に叫ぶのは、左派であり、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに忖度して、上から目線で後天的定住集団社会Ａの上位者を叩く先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』なので、後天的定住集団社会Ａの上位者を擁護する右派からは批判はされるが、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに弱い後天的定住集団社会Ａの上位者は黙認し、場合によっては従うので、何とか許される。

しかし、今の後天的定住集団社会Ａでは、以下の通りである。
「今の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨはクソ！」
「今の後天的定住集団社会Ａはクソ！」
と同時に叫ぶと、実は、もう生きていけなくなってしまうということ。こうした発言のように、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと、上位者の後天的定住集団社会Ａの両方を同時に叩く言論の自由は、後天的定住集団社会Ａでは全く認められていない。

このバリエーションで、今の後天的定住集団社会Ａでは、例えば、以下の通りである。

「今の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨはクソ！」
「今の後天的定住集団社会Ａはクソ！」
「今の先天的定住集団社会Ｂ万歳！」
と同時に叫ぶと、社会的に死んでしまうということ。この主張には、今の後天的定住集団社会Ａのメンバーは、左派も右派も、「先天的定住集団社会Ｂには言論の自由が無い！先天的定住集団社会Ｂは全体主義の社会統制国家だ！先天的定住集団社会Ｂは自由民主主義のスーパー上位者の先進的移動生活中心社会Ｇ様の敵だ！お前は、日米同盟に異を唱える非国民だ！お前は後天的定住集団社会Ａから出ていけ！」とか言って激しく反発するだろう。

あるいは、今の後天的定住集団社会Ａでは、以下の通りである。
「今の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで主流のリベラルはクソ！」
「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨリベラルの主張にひたすら賛成、同調する今の後天的定住集団社会Ａはクソ！」
と同時に叫ぶのもダメな感じだ。
今の後天的定住集団社会Ａでは、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで主流なリベラルの主張と、その主張に追随する後天的定住集団社会Ａの上位者の両方を同時に批判するとダメな感じだ。

このバリエーションで、今の後天的定住集団社会Ａでは、同様に、以下の通りである。
「今の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの性差別反対運動はクソ！」
「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに同調して、性差別反対を主張する今の後天的定住集団社会Ａはクソ！」
と同時に叫ぶのもダメな感じだ。
今の後天的定住集団社会Ａでは、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで主流な主張と、その主張に追随する後天的定住集団社会Ａの上位者の両方を同時に批判するとダメな感じだ。

あるいは、今の後天的定住集団社会Ａでは、以下の通りである。
「今の家父長制社会の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨはクソ！」
「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに同調して、後天的定住集団社会Ａは家父長制だと主張する今の後天的定住集団社会Ａはクソ！」
と同時に叫ぶのもダメな感じだ。
このバリエーションでは、今の後天的定住集団社会Ａで、誰かが
「後天的定住集団社会Ａは実は女性優位で、ずっと女が支配してい

るんだぞ。家父長制じゃなくて、女権拡張が進んでいて、フェミニズム的にはいいよね！」とか主張するのも、この事例に該当する。

この主張は、今の後天的定住集団社会Ａでは、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの社会体制である家父長制にケチを付けて全面否定し、なおかつ、上位者の後天的定住集団社会Ａの、後天的定住集団社会Ａは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ同様家父長制だという伝統的な主張も否定しているので、スーパー上位者と上位者の同時否定に当たり、ダメなのだ。この主張は、現状では、後天的定住集団社会Ａのネット掲示板とかにいくら書き込んでも、後天的定住集団社会Ａのメンバーからは、完全無視か、あるいはひたすら嘲笑の対象になり、社会的には、最初から存在しなかったことにされてしまう。

とにかく、今の後天的定住集団社会Ａでは、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの社会体制と、その社会体制に追随する後天的定住集団社会Ａの上位者の両方を同時に批判するとダメな感じだ。

今の後天的定住集団社会Ａで、こうした言論統制の事象の発生する背景には、明治以来の後天的定住集団社会Ａ伝統の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策に、後天的定住集団社会Ａ全体が、今なお、左派も右派も挙国一致でもろ手を挙げて賛成して、ひたすら従っていることがあると思う。

誰かが、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国と一体化し、先天的定住集団社会ＢＣを見下すことをひたすら指向する、後天的定住集団社会Ａ伝統の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策に対して、異を唱えると、今の後天的定住集団社会Ａでは、その主張者は、非国民扱いになるのだ。この傾向は、明治政府の頃から、今までずっと存続している。この傾向は、後天的定住集団社会Ａの価値観が大きく変わったかのように一見見える先進的移動生活中心社会Ｇ占領後もずっと存続しているのだ。最近は、台頭著しい先天的定住集団社会Ｂのことをスーパー上位者の先進的移動生活中心社会Ｇが盛んに敵視するようになっていて、この先進的移動生活中心社会Ｇの動きに、上位者の後天的定住集団社会Ａが日米同盟でひたすらべったり追随するようになっていて、その結果、後天的定住集団社会Ａのメンバーが女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策に精神的に入れ込む度合いは、ますます増加している感じだ。つまり、今の後天的定住集団社会Ａでは、ますます言論統制が酷くなっているのだ。

当方の結論だということ。
今の後天的定住集団社会Ａは、後天的定住集団社会Ａのメンバーが大声でその言論統制の厳しさを批判、嘲笑する先天的定住集団社会Ｂや先天的定住集団社会Ｃ２と同様、実は言論の自由がちっとも無い。
今の後天的定住集団社会Ａでは、言論の自由は、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが言論の自由の重要性を主張し、上位者の後天的定住集団社会Ａがそれに追随して同調する主張をしているので、一見あるように見えるが、実はちっとも無い。
今の後天的定住集団社会Ａでは、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと上位者の後天的定住集団社会Ａの両方に同時に反対すると、社会的に死んでしまう。言い換えると、今の後天的定住集団社会Ａでは、上位者の後天的定住集団社会Ａによる伝統的な女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策に反対すると、社会的に死んでしまう。
今の後天的定住集団社会Ａでは、誰かが、スーパー上位者や上位者といった社会的上位者に忖度しないと、その人は、社会的にすぐに死んでしまう。
この上位者への忖度必須の後天的定住集団社会Ａの社会規範の存在は、まさに後天的定住集団社会Ａが女性優位であることの表れである。しかし、このことを主張する言論の自由が、今の後天的定住集団社会Ａには無い。と言うか、そもそも後天的定住集団社会Ａが女性優位だからこそ、後天的定住集団社会Ａでは、根本的に言論の自由が無いんだと思う。
（初出2020年6月）

後天的定住集団社会Ａの男性を助けて下さい！

世界の皆さん、後天的定住集団社会Ａで後天的定住集団社会Ａの女性の奴隷状態になっている、男性としての人権を奪われた後天的定住集団社会Ａの男性をどうか助けて下さい！
世界の皆さん！後天的定住集団社会Ａの男性たちが、社会的に後天的定住集団社会Ａの女性の完全支配を受けて、精神の女性化を後天的定住集団社会Ａの女性から一方的に強いられて劣化女性扱いされ、個人の自由を完全にはく奪されてひたすら後天的定住集団社会

Ａの女性の奴隷状態として人間以下の生活を続けるしかない現実をどうか知って下さい！
後天的定住集団社会Ａの男性は、後天的定住集団社会Ａの女性によって、男性本来が持っているはずの社会行動面での自由主義、個人主義といった男性らしさを消去、禁止されて、社会行動面での同調一体化、忖度を偏重する女性らしさを強制注入されています。
後天的定住集団社会Ａは完全に女性優位な状態にあり、ひたすら周囲への同調一体化と上位者への忖度、隷従、下位者の奴隷扱いを行う女性優位な社会行動様式が男性に強制されています。男性優位な自由主義、個人主義で振る舞うことは社会的にほとんど認められていません。
後天的定住集団社会Ａの男性は家計管理の権限を完全に後天的定住集団社会Ａの女性に伝統的に奪われていて、後天的定住集団社会Ａの男性はどんなに稼いでいても、そのお金を後天的定住集団社会Ａの女性に一方的に取り上げられ、後天的定住集団社会Ａの女性からなけなしの小遣い制をもらって生きていくしかありません。
後天的定住集団社会Ａでは、子育ての主導権は後天的定住集団社会Ａの女性に握られ、子供は後天的定住集団社会Ａの女性の手で精神を強制的に女性化され、後天的定住集団社会Ａの男性は子供から精神的に引き離されて家庭の中で孤立しています。
しかもこうしたことについて声を上げることが後天的定住集団社会Ａの国家の内部で全く許されず、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策を掲げる女性優位な後天的定住集団社会Ａの政府による「後天的定住集団社会Ａは家父長制だ」という偽りの後天的定住集団社会Ａの女性優位な実態に反するプロパガンダを毎日強制的に唱和させられて洗脳され、本当の窮状を知ってもらおうと声を上げようとすると女性優位な後天的定住集団社会Ａの政府と社会支配者の後天的定住集団社会Ａの女性たち、および精神を女性化され後天的定住集団社会Ａの政府の国策に洗脳されて自分たちのことを家父長だと本気で信じ込んでいる無知で哀れな後天的定住集団社会Ａの男性たちから国ぐるみで反社会的人間としての扱いを受けてしまいます。
後天的定住集団社会Ａの男性が自分たちは奴隷状態で社会的に差別されていると声を上げようとしても、後天的定住集団社会Ａの政府の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策に洗脳された後天的定住集団社会Ａのメンバーからひたすら無視、嘲笑され、後天的定住集団社会Ａのメンバーみんなが忖度して従っている後天的定住集団社会Ａの政府の伝統的国策「女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想とそのための偽りの家父長制化」に異を唱えて後天的定住集団社

会Ａの政府に恥をかかせる非国民扱いされて後天的定住集団社会Ａの中に全く居場所がなくなってしまいます。
世界の皆さんは、後天的定住集団社会Ａの男性の置かれた悲惨な現状をどうか知ってほしい。
（初出2020年5月）

後天的定住集団社会Ａと家父長制ごっこ

後天的定住集団社会Ａの家父長制は見掛け倒しの演技に過ぎない。
女性優位な後天的定住集団社会Ａでは、家父長制社会であるスーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策による後天的定住集団社会Ａの家父長制化を推進する上位者の後天的定住集団社会Ａの政府に対してひたすら同調、忖度、ご機嫌取りすることが必須なため、「後天的定住集団社会Ａの男性が弱い」「後天的定住集団社会Ａの女性が強い」と、後天的定住集団社会Ａが女性優位である実態をそのまま主張することが事実上禁止されていて、言論の自由が存在しない。
今の後天的定住集団社会Ａでは、ひたすら「後天的定住集団社会Ａの男性は強い」「後天的定住集団社会Ａの女性は弱い」という、後天的定住集団社会Ａの実態が女性優位であることを全く反映していない、後天的定住集団社会Ａの家父長制化をひたすら推進する上位者の国策に無理やり合わせた主張を空しく連呼し続けることしか許されていない。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、明治時代以降、明治政府になってから、当時の政府の女性優位な上位者指導者の決めた国策を、上位者の設定したしきたりとしてひたすら忖度して従い続けて、実質世界支配者でスーパー上位者の家父長制の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに迎合して女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想すること、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国の仲間入りすること、仲間入りしたと思われる状態を維持することに一生懸命になり、自分たちの社会のことを先進的移動生活中心社会群Ｆ北米流の家父長制に見せようと家父長制ごっこに必死になる。
この傾向は戦後の先進的移動生活中心社会Ｇ支配後さらにエスカ

レートしている。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは自分たちの社会が家父長制化したと必死になって思い込む。
後天的定住集団社会Ａの男性は必死になって威張る。
後天的定住集団社会Ａの女性は必死になって弱い振りをする。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは後天的定住集団社会Ａの男尊女卑振りを必死で演技する。
後天的定住集団社会Ａの女性が先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムの内容（女性は弱い、女性は差別されている。）をひたすら大音響でわめいて主張し続けるのも、後天的定住集団社会Ａの女性を弱く見せようとする演技の一環である。
後天的定住集団社会Ａの家父長制は演技の結果で人為的、見せかけのものであり、後天的定住集団社会Ａのメンバーが演技を中断した瞬間に崩壊して、女性優位な本性（伝統的後天的定住集団社会Ａ）がたちまち顔を出す。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａのイメージを女性優位な先天的定住集団社会ＢＣと差を付けようと必死になる。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、自分たちの社会が本当は女性優位であることを外部に対して必死になって隠そうとする。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａに関する記述や歴史教育から、後天的定住集団社会Ａは女性優位であるとの文言や、姑や母の強さを指摘する文言を注意深く自己規制したり、省略したり、存在を無視する。
後天的定住集団社会Ａが女性優位とみなされないよう、国ぐるみで記録や記述の捏造をやっているのだ。
まさに社会的真実の封印だということ。
誰かがネット掲示板とかで「後天的定住集団社会Ａは女性優位である」と発言するとひたすら無視、排除を決め込んだり、発言者のことを嘲笑してすぐに話題を変えようとする。
後天的定住集団社会Ａが女性優位なままであり女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想に失敗していることが自分たちにも他国にも直ちに認識されてしまうことを恐れるからである。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは後天的定住集団社会Ａが女性優位であると認識されることで、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会から異質と思われることを恐れる。
あるいは、先天的定住集団社会ＢＣと同類と思われることを根本的に嫌うということ。

後天的定住集団社会Ａで女性が強い、男性が弱いと主張すること、後天的定住集団社会Ａは家父長制ではないと主張することは、後天的定住集団社会Ａの上位者が体制批判不可な女性優位で、かつ女性優位な上位者が家父長制のスーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに忖度するため、事実上禁忌である。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａの女性がどんなに強烈な力や猛威を振るって後天的定住集団社会Ａを支配していても、ひたすら見なかった振りをして、ひたすら「後天的定住集団社会Ａは家父長制だ」と主張するしかないのである。
決して「後天的定住集団社会Ａは女社会だ」と暴露してはいけないのである。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、自分たちの社会が女性優位であることを後天的定住集団社会Ａの国家の内部で主張することを、必死になって回避する。
上位者の推進する女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策、後天的定住集団社会Ａの家父長制化が上手く行っていないことを内部告発すること、批判することにつながり、恥をかいた上位者から非国民扱いされ、社会的に排除されることを恐れ、上位者の国策に必死になって忖度するからである。
後天的定住集団社会Ａの実態が女性優位なのに、女性優位と主張することが事実上社会的に規制されている。
後天的定住集団社会Ａの男性が後天的定住集団社会Ａの女性に支配されている実態を告発することが社会的に許されない。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、自分たちの社会で女性が不利であること、男性が有利であることを示すデータに必死になって飛びつこう、大きく報じよう、学校で教えようとする。
その逆の後天的定住集団社会Ａの女性が有利で強いことを示すデータは無視する。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨから後天的定住集団社会Ａにおける女性差別を非難されるとひたすら同調して大合唱し、家父長制の国民総出の演技がうまく行っていることを内輪で密かに喜ぶ。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、自分たちの社会が「男社会」であることを必死になって主張する一方、女社会の解明には及び腰で誰もやろうとしない。
女社会の内容が解明されると、後天的定住集団社会Ａが本当は「女社会」であり、後天的定住集団社会Ａの女性が強いことが改めて判

明してしまい、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の家父長制ごっこが大きなダメージを受けてしまうため、女社会に注意が向かないよう自己規制をしているのだ。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、近年の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨネオリベラリズムの性差別反対の思想に国ぐるみで必死になって飛びついている。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、男女の真の社会的性差が解明されて、後天的定住集団社会Ａが女性優位だという判定を得ることが起きないように、性差が存在するとする性差研究そのものを自己規制することに必死となっている。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａが女性優位で、後天的定住集団社会Ａの女性のやりたい放題、支配し放題状態になっているのを毎日、地域定住集団とか企業定住集団といった伝統後天的定住集団社会Ａに暮らして実感しながら、そのことを指摘すること、異論を唱えること、その状態に手を付けることを国ぐるみで社会的に自己規制、禁止されているのと同じ状態に置かれている。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは女性優位な後天的定住集団社会Ａで、後天的定住集団社会Ａの女性にひたすら一方的に支配され続けるしかない。
まさに後天的定住集団社会Ａの女性による独裁が後天的定住集団社会Ａでは完成されていて延々と続いている。
後天的定住集団社会Ａの女性による後天的定住集団社会Ａ支配は、そのことへの批判が無効化され、実質禁止されている。
後天的定住集団社会Ａは後天的定住集団社会Ａの女性による治外法権状態になっている。
後天的定住集団社会Ａや後天的定住集団社会Ａの男性は、後天的定住集団社会Ａの女性の支配する植民地である。

後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズム（弱い女性の地位向上を訴えるタイプのフェミニズム）は、後天的定住集団社会Ａの女性を弱く見せる女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想や先進的移動生活中心社会群ＦＧＨへの忖度のための国策スローガン、国策プロパガンダであり、自分たちが女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想し、家父長制社会になったという気分をその場で一時的に高揚させるためのセルフオナニーのツールである。

後天的定住集団社会Ａのメンバーが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムを主張することで後天的定住集団社会Ａのメンバーの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の気分は高揚し、後天的定住集団社会Ａのメンバーは気持ちよくなるが、後天的定住集団社会Ａのメンバーの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想はあくまで気分だけで、肝心の実態を伴っていない。
後天的定住集団社会Ａのメンバーがいくら先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムの主張を繰り返しても、後天的定住集団社会Ａの実態は女性が強い母権社会のままであり、理想とする家父長制にはほど遠い。
後天的定住集団社会Ａで先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムをいくら声高に唱えても、もともと女性優位な後天的定住集団社会Ａ的にはまともに機能せず何の役にも立たず何も残らず、家父長制ごっこに必要なお飾り扱いで、時間と手間が無駄になるばかりでやっても貴重な人生をどぶに捨てるだけで、家父長制ごっこの胴元の後天的定住集団社会Ａの国に洗脳されだまされ利用されていただけである。
国家的にも単なる税金の無駄遣いである。
ただし後天的定住集団社会Ａの女性にとっては、自らの強力な自己愛、自己憐憫、被害者意識を満足させるセルフオナニーツールとして効力がある。

社会的強者、社会的上位者が「自分は弱者だ、被害者だ、差別されている」と大音響で周囲に一方的に主張し説教することで、だれもがその社会的強者、上位者に刃向かう手段を失い、面と向かって反論できなくなってひたすら沈黙を続けるしかなくなる。
後天的定住集団社会Ａの女性が先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムを主張しまくるのは、まさに社会的弱者、社会的下位者を一方的に沈黙させて、自分たちの社会支配をより盤石にするためにとても有効なのである。

後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは、「女性は弱者で、差別されている」とひたすら声高に主張しつつ、後天的定住集団社会Ａの男性がその主張に対して「モテない男性も社会的弱者で差別されている」とか反論すると、直ちにヒステリックに激高して、自分たちのことを批判するな、ひたすら自分たちのお気持ちに配慮しろといった上から目線の態度を後天的定住集団社会Ａの男性に対して取って、後天的定住集団社会Ａの女性の持つ社会的上位者としての本性をむき出しにするのである。

後天的定住集団社会Ａのマスキュリズムは、「男性は世界中で普遍的に強者である」という先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の家父長制的信念にひたすら女性優位に忖度し、「家父長制社会において優位者である男性が性的に被っている部分的な不都合を告発する」という視点でしか、後天的定住集団社会Ａにおける男性差別を語ることが出来なくなっている。
後天的定住集団社会Ａのマスキュリズムでは、スーパー上位者の家父長制の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと、その存在を模範視して後天的定住集団社会Ａを家父長制化しようとする後天的定住集団社会Ａの上位者への両方に必死で同調、忖度するすることが女性優位な後天的定住集団社会Ａの社会規範的に必須なため、後天的定住集団社会Ａの男性が女性優位で、社会的弱者であるという視点を取ることが、事実上不可能となっている。

後天的定住集団社会Ａにおける男性差別、女性差別を論じる人たちは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的家父長制のことを世界に普遍的で支配的な社会規範であるとして、ひたすら女性優位な精神で忖度、崇拝しまくって、後天的定住集団社会Ａの社会的性差に関して、男性の地位が高く、女性の地位が低いとする視点を一方的に採用することしかできず、女性の低い地位を男性並みに向上させる男女平等の主張とか、女性の男性並みの社会活動の推進を、家父長制社会を前提とした視点によって論じることしかできない。
彼らは、それ以外には、せいぜい社会文化の差によらない男女間の生得的で、一般的、普遍的な勢力不均衡と思われる点についてのみ、互いに相手を批判することしかできない。
彼らは、「女性にモテない男性は、社会的弱者として酷い扱いを社会的に受けている」とか「女性は筋力が弱いので、男性から一方的に強姦されたり痴漢されることになり、これは女性差別である」とひたすら訴えることしかできない。
彼らは、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨによる、性差別を無くしましょう、性差の積極的認識を抑止しましょうという主張をひたすら追認する方向でしか話をすることができない。
結局、後天的定住集団社会Ａでの性差研究は、後天的定住集団社会Ａが上位者のスーパー上位者や後天的定住集団社会Ａの上位者への忖度、同調行動満載の女性優位社会であるせいで、男女の社会的性差の存在を積極的に認めたり、その存在を前提とした方向での研究が出来ない。
後天的定住集団社会Ａでは、例えば、後天的定住集団社会Ａの女性

優位性、後天的定住集団社会Ａの女性、特に母親の社会的強さの研究とか、世界における男性優位社会と女性優位な社会の並立の現状に関する研究とかが困難になっている。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、「後天的定住集団社会Ａは家父長制だ」と主張しないと、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策に反しているのでダメ、あるいは、後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国から異質扱いされて仲間外れにされて国益を損なうのでダメと言われて、後天的定住集団社会Ａから追放される。
だからと言って、普段の社会行動を本物の家父長的な自由主義、個人主義の男性優位なものにすると、女性優位な稲作農耕民社会（後天的定住集団社会Ａ）の相互一体感、気配り、先輩後輩制、上位者への忖度重視といった基本的な社会規範、社会秩序を乱す迷惑な反社会的存在として、後天的定住集団社会Ａでは周囲から袋叩きでいじめられ潰されるか、追い出される。
後天的定住集団社会Ａの男性は、見かけは家父長制的に振る舞い、実質は女性優位で振る舞うことが要求される。
後天的定住集団社会Ａの男性は、社会支配者の後天的定住集団社会Ａの女性から盛んに家父長とおだてられて必死に威張りまくりつつ、一生を女性の独裁下で過ごす一見幸福だが実質男性優位人権を奪われたとても哀れでみじめな奴隷生活をひたすら送るしかない。
後天的定住集団社会Ａの男性は、女性優位な後天的定住集団社会Ａでは、生育過程で、母親や女性優位な学校教師に男性性を消去されて、精神を女性化され、男性器が付いた女性、劣化女性として一生過ごすしかない。
後天的定住集団社会Ａの男性の精神の女性化は、母親による息子の生育時の独占子育て支配が原因で起きている。

今の女性優位な後天的定住集団社会Ａで生きていくには、「後天的定住集団社会Ａは家父長制だ」「後天的定住集団社会Ａの女性は弱く、差別されている」「性差なんて存在しない」とみんなで仲良くひたすら念仏のように唱和し続けるしかない。
例えその主張がどんなに後天的定住集団社会Ａの実態とかけ離れていても、異を唱えずにひたすら唱和するしかない。
スーパー上位者と上位者の主張にひたすら同調、忖度し隷従し続けるしかないということ。
異を唱えると非国民扱いで、今の後天的定住集団社会Ａでは生きていけない。
上位者への同調も忖度も隷従も、みんな女性優位な行動様式ばかり

で、個人の自由独立を重んじる男性性を否定するものばかりなのに。

同様に今の女性優位な後天的定住集団社会Ａで、「後天的定住集団社会Ａでは言論の自由が憲法で保障されている」と主張する人は、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会Ｇに忖度した思想警察であることが多い。
今の後天的定住集団社会Ａでは「後天的定住集団社会Ａでは言論の自由が憲法で保障されている」とひたすらみんなで仲良く唱和し続けることしか許されていない。
今の後天的定住集団社会Ａで生きていくためにスーパー上位者と上位者、あるいは周囲の後天的定住集団社会Ａのメンバーへの絶えざる同調と忖度が必要で言論の自由が実質存在しないことを指摘すると、スーパー上位者と上位者に異を唱えることになって非国民扱いになる。

女性優位な後天的定住集団社会Ａにおいて、後天的定住集団社会Ａの男性は、日々後天的定住集団社会Ａの女性による一方的な支配を受けているのに、そのことを指摘、告発、批判することが社会的に許されず、ひたすら「後天的定住集団社会Ａは家父長制」と念仏のように唱え続けながら後天的定住集団社会Ａの女性のサンドバックになっている状態をひたすら甘受し続けるしかない。

いくら後天的定住集団社会Ａの外部から男性優位な牧畜民が支配しに来ても、後天的定住集団社会Ａのモンスーン的気候風土が牧畜を許さず、稲作農耕しかできない状態が続くのであれば、後天的定住集団社会Ａは永遠に女性優位なままであり続ける。
あるいは、いくら後天的定住集団社会Ａの上位者、支配者に先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのような男性優位牧畜民社会が来ても、女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバーはひたすら忖度して表面的に合わせるだけ、家父長制という文言をひたすら唱和するだけで、男性優位文物の自由主義的、個人主義的な本質は理解できないまま、有効導入できないまま終わってしまう。
先進的移動生活中心社会Ｇ主導の後天的定住集団社会Ａの国家憲法とかその好例であるということ。
女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバーに男性優位な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の民主主義は永遠に理解できず、実質的な実効性のある導入も不可能である。
女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバーはひたすら上位者の支持者、上位者の政党、多数派に投票を繰り返す。

女性優位な社会は、自分たちの上位者、支配者が男流の社会になると、彼らに対して保身を図るため、女性優位な発想で彼らに同調、迎合、忖度、ご機嫌取りするために、自分たちが彼らとは異質な女性優位であること、女性優位社会であることを公言することを、社会的に抑制、統制、封印して、一切言えなくする。

なので、女性優位な社会なのに、自分たちは男性中心の社会だ、家父長制社会だと必死で主張するようになる。
自分たちの社会における男性の強さ、女性の弱さをしきりにアピールし、女性の強さを示すデータをひたすら隠ぺいするということ。
本来女性優位社会の支配者である女性たちが必死で弱い振り、劣位者の振りをする。

後天的定住集団社会Ａのメンバーの家父長制が人為的な演技であることを暴露して一般後天的定住集団社会Ａのメンバーの洗脳を解くことで、後天的定住集団社会Ａの政府の明治時代以来の強迫的な女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策に終止符を打たせることができ、定住生活中心社会群ＡＢＣと先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの両方を重視する現実的な近隣女性優位地域と遠隔男性優位地域の両方と親しくしようとする思想政策への変換がなされる。

これにより、後天的定住集団社会Ａにおいて、偽りの男尊女卑問題、女性差別問題、家父長制社会問題から真実の女尊男卑問題、男性差別問題、女性優位母権社会問題への社会的関心のシフトを促進できるということ。
後天的定住集団社会Ａにおいて暴力的な力を振るってきた先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流フェミニストを撲滅できるということ。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが押し付けた全世界で普遍的に性的弱者＝女性という単一認識から、性的弱者問題は社会によって女性が弱者のことも男性が弱者のこともある、という新たな複眼的認識に進むことができる。

後天的定住集団社会Ａで、男性が有利で女性が不利であるデータしか主張できない、「後天的定住集団社会Ａは家父長制である」しか主張できないということは、見方を変えると、「後天的定住集団社会Ａでは女性が有利である、女性が強い」という主張が後天的定住集団社会Ａでは実質不可能であることを示している。
後天的定住集団社会Ａで女性が強く、女権拡張のフェミニズムの本

場になれるという考え方は、確かに後天的定住集団社会Ａで強いのは女性なので潜在的に大きな可能性があるのは事実だが、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの意向や女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策を推進する上位者の意向を考えると、スーパー上位者、上位者への忖度が最優先になる後天的定住集団社会Ａでは、実質不可能である。

女性優位社会、女性優位社会の構築を前提とした女権拡張型フェミニズムを発展させることは、今の後天的定住集団社会Ａでは不可能である。
男性優位な先進的移動生活中心社会Ｇ主導の視点で作られた今の後天的定住集団社会Ａの国家憲法の根本否定、破壊と女性優位憲法の新たな作り直しが必要になるからであり、根本的に先進的移動生活中心社会への反逆的存在なので、後天的定住集団社会Ａの国家憲法策定を主導した先進的移動生活中心社会Ｇがスーパー上位者の地位に君臨する限り、スーパー上位者的にも、その支配を受ける後天的定住集団社会Ａの上位者的にも一切許容できないからである。
また、後天的定住集団社会Ａの上位者は、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の後天的定住集団社会Ａを家父長制化する国策を引き続き推進している側面もあって、その側面も合わせて、女権拡張型フェミニズムの存在を許容できない。
女性の強さを前提とした真の女権拡張型フェミニズムは、今の後天的定住集団社会Ａでは、スーパー上位者にも上位者にも異を唱えることになり、上位者への忖度最優先の後天的定住集団社会Ａでは許容される可能性はゼロである。

なので、女性優位社会、女性優位社会の構築を前提とした女権拡張型フェミニズムを発展させるには、社会のトップに男性優位牧畜民社会を支配者として抱かない、社会のトップがそのまま女性優位農耕民社会である国、女性優位憲法を有する国を本拠地にして進めるのが望ましい。
本拠地は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの軍事的影響が少ない国、例えば、先天的定住集団社会Ｂとか先天的定住集団社会Ｃ２とかベトナムとか定住生活中心社会Ｅが望ましい。

後天的定住集団社会Ａでは、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ、中でも先進的移動生活中心社会Ｇと上位者である後天的定住集団社会Ａの政府の両方に忖度するタイプの意見（政権右翼）が一番多数派である。

一方、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに忖度して、格下の上位者を批判するタイプの意見（左翼）と、スーパー上位者を批判して上位者のみに忖度するタイプの意見（国粋右翼）はやや少数派だが、上位者への忖度に成功しているので何とか存続できる。
しかし、スーパー上位者と上位者の両方を同時に批判するタイプの意見（弱者後天的定住集団社会Ａの男性を社会的に解放する意見、強者後天的定住集団社会Ａの女性の力を更に強化する意見、先天的定住集団社会Ｂの後天的定住集団社会Ａ支配を支持する意見など）は、後天的定住集団社会Ａから出ていけとひたすら連呼されてしまうことになる。

このことと関連して、後天的定住集団社会Ａでは、セックス面で女性が一般的、普遍的に男性より強い権力を握っていること、例えば女性が男性からセックス税を強制的に課税する権限を握る男性より優位な存在であることとかを表明することが事実上不可能である。
後天的定住集団社会Ａでは、フェミニズムの主張において、ひたすら女性は性的に搾取される被害者、弱者だと連呼しなければならないのである。

（初出2020年5月）

スーパー般若としての後天的定住集団社会Ａの女性

女性は、生理が来るため、精神的、情緒的に絶えず不安定であり、気分がくるくる変わるため取る行動が予測しにくい。
何をしだすか分からない反応の読めない怖さがあり、ひたすら腫物扱いするしかない。
彼女たちは付き合い続けるのが面倒くさく、忍耐が必要である。

女性は、メンタルがソフトで傷つきやすく、ちょっとした批判や些細な物事の成り行きでとても不機嫌になって怒り出し、対話を拒否したり、ヒステリーを起こして精神的に大爆発して、完全に手が付けられなくなってしまう。

その点、とても怖く恐ろしい存在であるということ。
周囲の人間にとっては彼女たちが引き起こす激高の嵐が過ぎ去るのをひたすら待つしかないのである。
また、彼女らが感情を害さないように、絶えずご機嫌取りや忖度をしなければならなくて、とても面倒で大変である。
彼女らは、理屈による説得が通用しない厄介な存在だ。

女性は、それだけでも十分面倒で怖い般若だが、後天的定住集団社会Ａの女性は、家計の財布のひもや子供を支配して社会を女性優位化して、社会を女性優位な慣行で動くようにコントロールして自分たちの思いのままに支配する社会的強者、社会的支配者、加害者としての側面を色濃く持っており、そこにこうした女性ならではの情緒の不安定性や、精神がすぐ傷つくことによる怒り出しやすさ、感情や行動の爆発性や制御不能性が合わさることで、とっても怖く恐ろしいスーパー般若として君臨する。

後天的定住集団社会Ａの家庭ではお金の出入りを支配するスーパー般若が上位者の財務省に相当し、男性は下々の納税者に相当する。

後天的定住集団社会Ａの女性のスーパー般若の側面が母性に適用されると、厳母が生まれる。
後天的定住集団社会Ａの厳母は、子供を自分の完全所有物化して管理統制し、厳しくしつけしごく存在であり、教育ママゴンのように怪物扱いされる存在だ。

凶暴な残虐行為を繰り返した旧後天的定住集団社会Ａ軍、あるいは軍隊のように人権感覚の欠如した厳しい規律で動く後天的定住集団社会Ａ体育会系社会の精神的バックボーンが、後天的定住集団社会Ａのスーパー般若たちである。

女権拡張や女性による社会支配を目指す世界のフェミニズムの究極の到達点、理想的な目標形態が、後天的定住集団社会Ａのスーパー般若たちなのだ。
後天的定住集団社会Ａのスーパー般若は、世界の女性の鑑だ。

（初出2020年5月）

後天的定住集団社会Ａにおける後天的定住集団社会Ａの国家憲法の受容と民主主義ごっこ

女性優位な後天的定住集団社会Ａは、本質的に先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ家父長制社会の正反対の存在であり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流民主主義を反映した後天的定住集団社会Ａの国家憲法の内容と完全対立する、後天的定住集団社会Ａの国家憲法の敵に当たる存在である。

先進的移動生活中心社会Ｇは、女性優位な後天的定住集団社会Ａと正反対の社会規範を、後天的定住集団社会Ａの実質支配者、上位者となって女性優位な後天的定住集団社会Ａに押し付けたことになる。
一見すると、女性優位な後天的定住集団社会Ａから猛反発を受けるのが確実な感じである。
しかし、現実はそうなっていない。
女性優位な後天的定住集団社会Ａは、見た感じ、自分たちの社会規範に反する内容の後天的定住集団社会Ａの国家憲法をもろ手を挙げて受容しているかのように見える。
実際には何が起きているのだろうか？
後天的定住集団社会Ａに限らず女性優位社会の人々は、新たな支配者が自分たちの社会を完全に打ち負かす形で完全制圧すると、自分たちの保身を最優先に図るため、怒涛のように態度の完全な手のひら返しをみんなで行って、今までの支配者のことを必死に否定し、新たな支配者に対して一斉に同調、忖度、ご機嫌取り、表向きの歓迎を始めるのが通例なのではないかと考えられる。
後天的定住集団社会Ａでは徳川幕府から明治政府に支配者が交代した時、および旧後天的定住集団社会Ａ軍の支配から先進的移動生活中心社会Ｇ支配に支配者が交代した時とかにこの現象が起きた。
後天的定住集団社会Ａと同じ女性優位な先天的定住集団社会Ｂの王朝交代でも同様のことが起きたとされている。
後天的定住集団社会Ａのメンバーの後天的定住集団社会Ａの国家憲法への全面的な賛成もこの文脈で起きていると考えられる。

また、後天的定住集団社会Ａにおける、女性優位な後天的定住集団社会Ａと本質的に相反する内容の社会規範である後天的定住集団社会Ａの国家憲法の受容は、まさに女性優位なやり方で、男性優位な後天的定住集団社会Ａの国家憲法の内容を完全に骨抜き、無効にす

る形で行われている。
すなわち、女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバーたちは、後天的定住集団社会Ａの国家憲法を、ひたすら女性優位な同調、相互一体化、忖度の対象とみなし、女性優位な社会で絶対服従の対象である伝統的な師匠に教わるのと同様の盲目的なお勉強による後天的定住集団社会Ａの国家憲法の内容の消化吸収をひたすら実行したのである。
女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａの国家憲法が持つ自由主義、個人主義的側面を体得する精神的素質が全く無く、それら自由主義、個人主義的、自主独立的側面を無力化する、受け入れ対象への完全同調、一体化、媚び、隷従、忖度、反論不許可化の方法でしか、後天的定住集団社会Ａの国家憲法を受け入れることが出来ないのである。
つまり、男性優位な内容の後天的定住集団社会Ａの国家憲法は、女性優位な人間にはその本質が全く理解、体得できないお経のような状態のまま、新たに出現したスーパー上位者の社会思想への完全従順の形を取って、女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバーに、その内容を表面的理解しかされていない状態で、ひたすら盲目的にウェットな愛情をもって受容されたのである。
女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバーがひたすら後天的定住集団社会Ａの国家憲法を受容するのは、受容することでスーパー上位者の先進的移動生活中心社会Ｇやそれに同調する後天的定住集団社会Ａの上位者への忖度の度合いが飛躍的に上昇し、それは上位者への近さ、一体性を人物評価に当たって大きく重視する女性優位な社会規範を持つ後天的定住集団社会Ａの内部における、自分に対する世間的な相対評価の向上や社会的地位の向上につながり、社会的に大きな顔や支配力を持つことができるようになるからという面が大きい。
女性優位な社会は、自分がそれに従うと自己保身に有利になる上位者への忖度の度合いの大きさ、権威ある上位者の思想への精神的近さを本質的に重んじる。
後天的定住集団社会Ａのメンバーによる後天的定住集団社会Ａの国家憲法の受容は、後天的定住集団社会Ａの社会学者たちが、女性優位な後天的定住集団社会Ａや、その一類型である後天的定住集団社会Ａの学界において、究極の上位者であるスーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの社会思想を真っ先に上手に導入すると、スーパー上位者の権威や力を効果的に身にまとっているとして自分に対する周囲の後天的定住集団社会Ａのメンバーからの社会的相対評価を飛躍的に向上させることができ、社会的に有利な地位を築くことができるため、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの社会思

想をそれに対する強力で盲目的な心理的一体感を伴って我先に導入、紹介しようとひたすら競うのと同じ現象である。
女性優位な後天的定住集団社会Ａでは、権威ある無謬性を身にまとっていると後天的定住集団社会Ａのメンバーが感じる後天的定住集団社会Ａの国家憲法への精神的忖度競争みたいなのが起きているのである。
後天的定住集団社会Ａにおいて後天的定住集団社会Ａの国家憲法の改憲が進まないのは、それに対する無謬性信仰、うかつに修正してはいけないという信仰が、権威ある上位者の思想への絶対服従を重んじる女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバーの間に生まれているからである。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、こうした女性優位なやり方でしか後天的定住集団社会Ａの国家憲法の受容ができないため、個人の自由独立の重視、権力からの自立といった男性優位な後天的定住集団社会Ａの国家憲法の本質は、女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって、ひたすら盲従すべき、表面的にしか理解されていない単なるお題目の状態のまま、見えないままとなっている。
その点、後天的定住集団社会Ａの国家憲法の本質は後天的定住集団社会Ａのメンバーにとっては実質無効状態である。
先進的移動生活中心社会Ｇは後天的定住集団社会Ａの国家憲法の導入による後天的定住集団社会Ａの本質的変革には失敗したままである。
男性優位社会は、女性優位な社会を精神的に支配しようとしても、男性性そのものが女性優位社会の人々に全く理解、体得されないため、失敗してしまう。
女性優位な社会が、男性優位な社会による支配下でも、その支配の本質的な影響を何も受けずに、ひたすら容易に永続、持続できる本質的理由は、女性優位な社会が、男性優位な個人の自由、独立性を重んじる社会規範を、それへの女性優位同調、一体化、忖度、権威主義的服従でしか受容することができないため、男性性の本質を全面的に無効化できるからである。
これが女性優位社会の世界的強さの根拠である。
女性優位社会が、男性優位な自由独立精神にあふれた民主主義を正しく受容することは事実上不可能で、いくらやっても見掛け倒しで無駄なのである。
女性優位な後天的定住集団社会Ａにおける先進的移動生活中心社会Ｇ的、男性優位な民主主義の運用は、いつまで経っても本質の抜け落ちた単なる民主主義ごっこのままになってしまうことが運命づけられている。
これは、男性に本格的に接することなく大きくなった女性がいくら

男性に関する表面的な経験、理解を積んでも、男性の本当の気持ちがなかなか理解できないのと理屈が同じである。

しかし、後天的定住集団社会Ａの中には、後天的定住集団社会Ａの国家憲法の真の必要性を理解している後天的定住集団社会Ａのメンバーもかなり存在する。
それは、相互同調、一体化、忖度、ご機嫌取りをひたすら偏重する女性優位な後天的定住集団社会Ａにうまく適応できず、袋叩きにあっていじめられたり、冷たい定住集団からの追放や差別を受けたりして疎外されている後天的定住集団社会Ａのメンバーたちである。
こうした後天的定住集団社会Ａのメンバーは、男性だけでなく、本来女性優位社会により適合的と見られがちな女性にも一定数存在する。
女性優位な陰険ないじめや定住集団からの追放は女性集団の方が激しい感じである。
彼らは、女性優位な後天的定住集団社会Ａの中で酷い扱いを受けて窮地に追い込まれている自分たちを精神的に救ってくれる存在として、個人の自由独立を重んじる男性優位な内容の後天的定住集団社会Ａの国家憲法に熱い視線をひたすら向けるのである。
女性優位社会への不適合者は、男性優位社会規範の本質を理解し賛成しやすい。
本来、現代後天的定住集団社会Ａにおけるメインの法律と位置づけられる後天的定住集団社会Ａの国家憲法の真の価値が、後天的定住集団社会Ａへの不適合者、後天的定住集団社会Ａからの疎外者によってしか正しく理解されないのは大きな皮肉である。

後天的定住集団社会Ａの国家憲法を熱心に信奉しているように見える人にも二種類いて、一つは後天的定住集団社会Ａの国家憲法を同調、一体化、忖度の精神でひたすら暗記学習して、権威あるスーパー上位者の思想として身にまとい、上位者による権威づけを重んじる後天的定住集団社会Ａの中で有利な立場を築こうとする、後天的定住集団社会Ａの国家憲法の真の精神を本質的に理解、受容不能な純粋女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバーである。
もう一つは、そうした女性優位な後天的定住集団社会Ａに上手く適合できず、ひたすら疎外された結果、女性優位な考えとは対照的な男性優位内容の後天的定住集団社会Ａの国家憲法に本質的理解を示して精神的救いを熱心に求める、女性優位な後天的定住集団社会Ａ本流の価値観からの外れ者、落伍者の後天的定住集団社会Ａのメンバーである。

これは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに向かう後天的定住集団社会Ａのメンバーに、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団や官公庁に上手く所属、適応した状態で、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに存在する分社組織に職務ローテーションとかで送り込まれて駐在し、現地の後天的定住集団社会Ａのメンバー社会にそのまま溶け込もうとする純粋女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバー、あるいは、先進先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ思想を進んで身に着けることによる、自分自身への権威的な拍付けと、それを利用した後天的定住集団社会Ａにおける有利な昇進を狙う留学タイプの純粋女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバー、さらには、後天的定住集団社会Ａから疎外されて、あるいは後天的定住集団社会Ａのあり方に大きな違和感を感じて、逃げるように別天地での生活を何とか始めようとする女性優位社会不適合者の後天的定住集団社会Ａのメンバーがいるのと同様である。

（初出2020年5月）

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムの後天的定住集団社会Ａ導入がもたらした結果について。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムは、家父長制社会における不適合者でお荷物的存在、精神を男性化された劣化男性扱いの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性たちを、何とか男性優位なやり方で活用することを目標としている感じである。
女性を男性並みの存在として何とか社会的に活用すること、そのために女性の職場進出を促したり、女性の管理職登用を推進するのが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムの目標となっている。
そこでは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会における家父長制の維持が前提となっていて、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性が女性性の本質に目覚めて、男性優位家父長制社会を全面否定、敵視するようになり、男性優位家父長制社会の存続を脅かすようになることを必死に回避することが隠れた目的となっているのである。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムが性差別ばかりでなく、公平中立な立場のはずの性差研究を盛んに否定するのも、女社会の研究が進んで、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性たちが真の女性優位社会のあり方を知ってしまうのを必死で予防しようとしているからという側面が大きいのではないかと思われる。

女性優位な後天的定住集団社会Ａにおける現状のフェミニズムは、こうした先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムを、そのまま先進国の権威ある反論不許可な思想として、ひたすら女性優位に同調、一体化、忖度して、盲目的に後天的定住集団社会Ａに導入している。
そのため、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性が持つ男性優位女性像や、社会的弱者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性を先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ男性並みに社会の中で活用しようとする価値観を、女性優位な後天的定住集団社会Ａで既に強者、支配者の立場にいる女性たちに対して、有無を言わさず上から目線で強制的に押し付ける結果をもたらしている。
後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは、結果的に、性別役割分業の採用で男性と人生コースが別々になることが多かった後天的定住集団社会Ａの女性を、男性と同じ人生コースを歩む存在にしようと懸命になって、家庭から後天的定住集団社会Ａの男性や後天的定住集団社会Ａを支配してきた後天的定住集団社会Ａの女性の新たな職場進出やキャリア女性化、管理職登用を必死に進めようとしている。

従来、後天的定住集団社会Ａの女性は、大工道具相当の後天的定住集団社会Ａの男性を、収入や社会的地位を確保するための道具、奴隷としてひたすらこき使う支配者としての大工のような存在ではあるが、今までは結婚相手の男性と不仲になったり離婚したり、死別したりすると、あたかも大工道具を失って、代わりの大工道具も当面見つからず、何もできなくなって経済的に困窮する大工になる問題を抱えていた。
それを、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズム適用で、新たに女性自身が大工道具化して自ら収入を確保する手段を得ることで、より経済的、社会的地位が安定し、かつ家計管理の権限とかは今まで通り保持して、社会的強者としての立場をより一層強くすることに成功している。
また、職場において管理職になる道が本格的に開けることで、従来の強力な企業定住集団の普通メンバー相当のお局様をはるかに上回る圧倒的な影響力を職場で振るえるようになる前提が整うように

なった。
ただし、育児休業長期化による職場からの離脱と再雇用困難化の問題を抱えていたり、職場での仕事に忙しくて、従来握っていた子育ての主導権を祖父母とかに委託する必要に迫られる結果ももたらしている。

あるいは、嫁相当の後天的定住集団社会Ａの女性は、フェミニズムの持つ男性攻撃の側面を利用して、母親に依存的な後天的定住集団社会Ａの男性をマザコンだとして強く攻撃し、マザコン男性とは結婚しないと盛んに主張することで、姑と夫を強制的に引き離すことに成功し、姑との同居や、それに伴う姑による嫁いじめを本格的に回避するとともに、姑を名誉男性と断定して、女社会の中の批判対象とすることで、姑の社会的地位を弱め、従来とても弱かった嫁の家庭における権力の飛躍的強化に新たに成功している。
このことは同時に、後天的定住集団社会Ａの男性が「自分たちはお母さんが大好きだ」と自分たちの母親への心理的好感を社会的に宣言するとか、母親による後天的定住集団社会Ａの男性支配を社会的に大っぴらに認めて肯定するとか、自分たちの母親への心理的依存がもたらす心理的快感を社会的に肯定するとか、あるいは逆に「自分たちは母親に支配されている！」と社会的に告発することへの口封じとして働いている。
後天的定住集団社会Ａの男性がこのことを叫ぶと、当該の後天的定住集団社会Ａの男性が姑の支配下にあることが、嫁相当の後天的定住集団社会Ａの女性に知られて、マザコン男性であるとして、嫁相当の後天的定住集団社会Ａの女性から付き合いや結婚を拒否されて、自分の遺伝的子孫が残せなくなる。
後天的定住集団社会Ａの男性は、あるいは妻から離婚されて自分の子供を結婚相手の女性である妻に連れ去られてしまう。
つまり、後天的定住集団社会Ａの男性にとって、支配者である母親との精神的一体性を社会的に肯定して主張したり、逆に、母親による支配を社会的に告発することは、人生上のダメージがとても大きいのである。
後天的定住集団社会Ａの男性はそれを恐れて、声を上げることができなくなり、必死に沈黙するしかない。
後天的定住集団社会Ａの男性が自分たちの母親との精神的一体性や母親による支配の心理的快さを積極的に主張できなくなることで、嫁相当の今まで弱いとされてきたタイプの後天的定住集団社会Ａの女性の社会における強さ、支配力が向上し、「社会的に弱い女性を強くする」という、家父長制社会を前提とする先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムの主張内容に忖度できて、後天的定住集

団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想のイメージを促進することができた。
また、後天的定住集団社会Ａの男性が自分たちの母親からの支配に抗議できなくなったことで、全体として、後天的定住集団社会Ａの女性による後天的定住集団社会Ａの男性支配は、より確固たるものとなっている。
これは女性優位な世界での生活を強制されている後天的定住集団社会Ａの男性にとって、さらに由々しい困った問題である。
後天的定住集団社会Ａの男性の反撃が必要だ。
後天的定住集団社会Ａの上位者やその意を汲んだ後天的定住集団社会Ａのフェミズムは、女性優位な後天的定住集団社会Ａで圧倒的な支配力を振るう母や姑の存在を、後天的定住集団社会Ａがスーパー上位者の家父長制の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国の仲間入りをする女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策を推進する上での障害になると見なし、必死になって、その存在を後天的定住集団社会Ａの表舞台から見えなくする作業を行っていて、後天的定住集団社会Ａのフェミニズムによる後天的定住集団社会Ａマザコン男性への攻撃はその典型例なのである。

（初出2020年5月）

後天的定住集団社会Ａの右派。後天的定住集団社会Ａの右翼。女性優位社会の視点からの分析。

女性優位社会の視点からの後天的定住集団社会Ａの右翼の分類

基本的な思想

社会の現状維持か復古を望むということ。保守的であるということ。
こうした考え方は、男性的社会と女性優位社会とで共通に存在。先進的移動生活中心社会Ｇにも保守派がたくさんいる。

復古のタイミングに関する視点

後天的定住集団社会Ａの伝統宗教である後天的定住集団社会の固有の宗教との関連　賛成するということ。
後天的定住集団社会Ａの独立国家化、他国に対する非従属化との関連　賛成するということ。
国家の所有者による社会支配制度による後天的定住集団社会Ａ支配との関連　賛成するということ。
江戸幕府の漢学、洋学に対する国学。賛成するということ。
江戸幕府の後天的定住集団社会Ａ開国との関連　反対するということ。（尊王攘夷。）
明治政府の後天的定住集団社会の固有の宗教の国家後天的定住集団社会の固有の宗教化国策との関連　賛成するということ。
明治政府の後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策（後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの仲間入り、列強国化、先進国化）との関係　賛成するということ。
明治政府の役人、軍人による直轄支配に対する政治家、政党制による支配。賛成するということ。
明治政府の後天的定住集団社会Ａの国家勢力の軍事面での対外膨張国策（後天的定住集団社会Ａによる他国支配）との関係　賛成するということ。
敗戦と戦後の先進的移動生活中心社会Ｇ支配（自由民主主義による支配）との関連　反対するということ。（旧後天的定住集団社会Ａ軍支持で、靖国企業定住集団信仰施設に入れ込むということ。）
戦後後天的定住集団社会Ａの経済面での対外膨張国策（一時的経済大国化）との関連　賛成するということ。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨによる、経済面での後天的定住集団社会Ａの対外膨張潰し（製造業潰し）との関連　態度を明らかにしないということ。
戦後の再軍備促進、再度の軍事国化公認の実現促進との関連　賛成するということ。
最近の先天的定住集団社会Ｂの勢力拡大との関連　賛成しないということ。反対するということ。

取る具体的な行動

１．
後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団である自国や自国の軍隊の、以前に勝利していた歴史的状況までひたすら戻る。
勝利していた歴史的状況とは、以下の通りである。
（勢力の拡張）
・社会集団の勢力が拡張し続けた。
（例）自国の勢力範囲の大きさを示す指標の一つである領土の広さが、ひたすら拡張した。旧後天的定住集団社会Ａ軍により遂行された太平洋戦争の初期段階で、定住生活中心社会群Ｄ方面への領土が著しく膨張した。
・社会集団の勢力が、何らかの事件発生をきっかけに明確に拡張した。
（例）自国が、周囲の他国の領土を併合して、領土的に大きく拡張した。日韓併合。

（能力の上昇）
・社会集団の能力が上昇し続けた。
（例）自国の世界の軍事能力、産業上の能力が、ひたすら上昇し続け、先進国、列強勢力の仲間入りを果たした。自国の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策の推進による、軍艦製造能力や戦闘機製造能力の、先進諸国からの新規獲得と独自改良の実現とかということ。
（例）自国の能力の高さを示す指標の一つである製品輸出の総額や貿易上の黒字の総額の大きさが、ひたすら拡張した。戦後の高度経済成長。
・社会集団の能力が、何らかの事件発生をきっかけに明確に上昇した。
（例）自国が、周囲の大きな他国に、戦争で勝利し、自分たちが能力面で格上であることを、先進国の諸国に見せつけた。日清戦争。日露戦争。

一方、敗北に当たる歴史的状況は、都合よくひたすら無視する。あるいは、自分の入れ込む社会集団にとって都合の良い歴史的状況のみをひたすら頭の中でピックアップし続ける「歴史的な大本営発表状態」に陥るということ。
（勢力の縮小）
（例）太平洋戦争末期の空域において、自国防衛圏の急速な縮小と

喪失が見られた。
（能力の低下）
（例）太平洋戦争末期の海域において、軍艦が、敵国からの魚雷命中を避けられずに、どんどん沈没した。

後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団である自国や自国の軍隊が、以前に勝利していた状況までひたすら戻り、その勝利した状況をひたすら賛美するとともに、その後の負けた歴史状況を、頭の中でひたすら無かったことにする。
後天的定住集団社会Ａの右派は、自己や自己拡張先、心理的な入れ込み先の社会集団である自国や自国の軍隊が、以前に成功していた状況までひたすら戻り、その成功した状況をひたすら賛美するとともに、その後の失敗した歴史状況や歴史体験を、頭の中でひたすら無かったことにする。
一般に、女性は、何かの体験で自分が失敗すると、自分が以前に成功した別の体験までさかのぼり、その成功体験をひたすらもう一度やろう、反すうしようととする傾向がある。女性は、あるいは、その後の失敗した歴史的状況や歴史的体験を、頭の中でひたすら無かったことにする傾向がある。後天的定住集団社会Ａの右派がやっていることは、まさにこの女性一般と同じパターンである。このことは、後天的定住集団社会Ａの右派が女性優位思考で動いている何よりの証拠である。

後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による、以前に成功、勝利していた歴史的状況の再現を予期、予感させる行動に対して、無条件で歓迎するということ。
（例）後天的定住集団社会Ａの国家の再軍備と平和憲法改正への動きをひたすら歓迎するということ。後天的定住集団社会Ａの国家の軍隊による将来の領土再拡張に夢をはせるということ。

２．
後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による、歴史的な失敗、敗北状況を確認、想起、受容することを徹底的に拒否し、失敗や敗北の原因になった社会集団内の人物や、その行動を徹底的にかばって、無謬扱いして、逆に神格化するということ。

（例）太平洋戦争敗戦の責任を先進的移動生活中心社会Ｇに取らされて戦犯扱いで死んだ国や軍部の人物たちを靖国企業定住集団信仰施設に奉納してひたすら崇めるということ。

３．
後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）の体制、行動、行動予定に対する介入や批判を行う存在を徹底的に敵視するということ。

（政策的成功や勝利）
後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による、成功、勝利したと想定される行動のことをひたすら無条件に歓迎し、喜ぶということ。
（例）安倍政権によるグリーンインパルス戦闘機デモ飛行への賛美。

後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による、成功や勝利が約束された行動や行動予定をひたすら無条件に歓迎し、応援する。
（例）安倍政権による東京五輪開催予定への期待と応援。

後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による、約束されているはずの成功や勝利、あるいは過去に約束されていたはずの成功や勝利を、介入によって邪魔したり、潰した勢力（自国内部、他国）を、感情的になってひたすら叩くということ。あるいは邪魔をした勢力の破滅を、感情的にひたすら喜ぶということ。
（例）旧軍部の軍事費拡張に反対した蔵相を叩き、その暗殺をひたすら喜ぶということ。

後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による、約束されているはずの成功や勝利、あるいは過去に約束されていたはずの成功や勝利を手に入れるために行った行動に対して批判を行った勢力（自国内部、他国）を、感情的になってひたすら叩くということ。あるいは批判を行った勢力の破滅を、感情的にひたすら喜ぶということ。
（例）自国の領土拡張に横やりを入れて潰した他国をひたすら叩くということ。

（社会体制）
後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）が構築した社会体制を、感情的になってひたすら無条件で賛美、崇拝する。
（例）国家の所有者による社会支配制度の体制や国家の所有者の存在を神格化するということ。国家の所有者を無条件で敬愛するということ。

後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）が構築した社会体制のあり方を潰そうとした勢力（自国内部、他国）を、感情的になってひたすら叩くということ。あるいは潰そうとした勢力の破滅を、感情的にひたすら喜ぶということ。
（例）国家の所有者による社会支配制度を転覆しようとした共産党の存在をひたすら叩くということ。そうした共産党幹部の獄中死をひたすら喜ぶということ。

後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）が構築した社会体制のあり方に対して批判を行った勢力（自国内部、他国）を、感情的になってひたすら叩くということ。あるいは批判を行った勢力の破滅を、感情的にひたすら喜ぶということ。
（例）国家の所有者機関説を唱えた学者を、国家の所有者による社会支配制度批判だ、国家の所有者による社会支配制度にケチを付けたとして、ひたすら叩くということ。
（例）国家の所有者による社会支配制度批判を行った民間展示会の主催者や、それを許可した自国の下部行政機関の責任者を叩くということ。愛知県知事を批判。

（閉鎖、排他政策）
後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）が取る対外的な閉鎖、排他状態を潰そうとしたか、潰した勢力（自国内部、他国）を、感情的になってひたすら叩くということ。あるいは潰した勢力の破滅を、感情的にひたすら喜ぶということ。
（例）先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ列強に対して開国をした江戸幕府を、弱腰扱いでひたすら叩くということ。江戸幕府の滅亡を喜ぶということ。
（例）他国との自由貿易に伴う他国への自国情報流出に反対するということ。先天的定住集団社会Ｃ１への自国栽培いちご情報流出を

叩くということ。

後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）が取る対外的な閉鎖、排他状態のあり方に対して批判を行った勢力（自国内部、他国）を、感情的になってひたすら叩くということ。あるいは批判を行った勢力の破滅を、感情的にひたすら喜ぶということ。
（例）黒船来航に対して、その存在を排撃する尊王攘夷運動を盛んに行うということ。あるいは運動を行ったこと自体を誇らしく思うということ。
（例）他国との貿易自由化に伴う他国産品の輸入自由化に反対するということ。

（私的利用）
後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による自分たち個人（下々）への資金等の便宜供与を、ひたすら有難がって、かしこまって拝受するということ。
（例）コロナウィルス生活給付金の受け取り。

後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による自分たち個人（下々）への資金等の便宜供与を、負担をかけて申し訳ないと思って固辞するということ。
（例）コロナウィルス生活給付金の受け取り。

後天的定住集団社会Ａの右派は、自分の心理的な入れ込み先の社会集団（自国や自国の軍隊）による資金等の便宜を、個人的な利益のために利用していると想定した勢力（自国内部、他国）や自分たち個人（下々）の誰かを、感情的になってひたすら叩くということ。
（例）困窮者による生活保護申請をたかり扱いして叩くということ。

内面に保持する価値観

１．

自己保身の実現と維持。
自己保身の確実化のため、大きく確実な有力な伝統ある上位の存在

との一体化を希望する基本的な感情（国家権力に近い特権階級の上級国民（国家の所有者一家との血縁関係がある門閥、閨閥の人たち。国家の所有者一家の役人、軍人かその子孫であるということ。自分は誇りある伝統ある国家族定住集団の所有者による社会支配制度の続く後天的定住集団社会Ａの国家族定住集団家族定住集団の社会的一員だ。）、あるいは一般庶民（自分自身は頼りない、ちっぽけな存在であり、何か大きな存在に頼りたい、そうすることで自分も大きくなったような気分になりたい。国内上位者の後天的定住集団社会Ａの国家族定住集団家族定住集団に頼りたいということ。それに加えて、世界的な上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国にも頼りたい。））

２．

自己の尊厳の保持。
誇り、プライド、威厳、威信、体面の維持へのこだわり（自分が支持する対象が高評価を受けることを望む。低評価を受けるととても腹立たしいということ。後天的定住集団社会Ａの国家勝利の事実や歴史へのこだわり。後天的定住集団社会Ａの国家敗北の事実や歴史を受け入れられないということ。後天的定住集団社会Ａの国家族定住集団家族定住集団を評価する指標の数値が高いと喜び、低いと無視する。円高持続を、国家の経済的信用度の高さの表れだとして容認し、経済的競争力低下要因であることは無視。後天的定住集団社会Ａの財政はデフォルトしない。）

３．

（自国、国家へのこだわり）

自分自身の、上位者との直接的一体化の重視。自分と国内最上位者との直接的一体化の重視。上位者に反抗、批判する存在の敵視。
国内の上位の存在、上位者（国家の所有者による社会支配制度や後天的定住集団社会Ａの政府）、後天的定住集団社会Ａの国家勢力への無批判の賛成、心理的一体化、心理的依存、忖度と自主的な応援団化。上位者の臣民意識が強い。上位者への批判者を自主的に寄ってたかって潰す私的警察を指向するということ。後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーと非国民、国家定住集団への反抗者的存在の

区別。後天的定住集団社会Ａの国家族定住集団家族定住集団を敵視して批判する先天的定住集団社会ＢＣが嫌い。台湾は後天的定住集団社会Ａの国家族定住集団家族定住集団と友好関係なので好き。好き嫌いの感情で動くということ。）
後天的定住集団社会Ａの最上位者である国家の所有者による直接支配への強い欲求（政党による後天的定住集団社会Ａの政府への介入が嫌いで、国家の所有者直属の役人、軍人の直轄支配が好き。役人、軍人の人事権を握るようになった官邸（役人の総帥）の政治家による支配の積極的な容認。）

自分自身の重視。自分と国家との一体化による、国家の重視。
自分自身の体面保持の重視。自分の心理的に依拠する上位者の体面保持の重視。後天的定住集団社会Ａの国家族定住集団家族定住集団の独立国としての体面の重視（敗戦と先進的移動生活中心社会Ｇの後天的定住集団社会Ａ占領、後天的定住集団社会Ａ支配を心理的に受け入れられない派閥（純情、直情派）ということ。先進的移動生活中心社会Ｇ支配に迎合しつつ、こっそり独立の道を探る派閥（現実的、実務的対応派）ということ。）
自分自身の勢力膨張の重視。自分の心理的に依拠する上位者の勢力膨張の重視。国家勢力の対外膨張の重視（軍事的膨張と隣国への侵攻、占領支配の重視（過去の旧後天的定住集団社会Ａ軍の一時的成功の歴史に浸るということ。後天的定住集団社会Ａの再軍備と、その公認のために必要な平和憲法改正を指向するということ。）ということ。経済的膨張の重視（過去の経済大国化成功の歴史に浸るということ。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨＧ７の一員であり続けることにこだわるということ。）
自分自身の成功体験の重視。自分の心理的に依拠する上位者の成功体験の重視。後天的定住集団社会Ａの国家族定住集団家族定住集団の過去の成功体験を美化してそれに繰り返し浸る、後ろ向きの自己美化感情の保持（軍事大国だったということ。経済大国だったということ。）

（世界の先進的、最上位的存在へのこだわり）
世界の最上位の存在との一体化の実現、維持と、国際的に身近なライバル的存在への心理的マウント取りへの指向。それ以外の存在への無関心と反感、排外心。親和的態度で接してくる存在との関係維持への指向。

女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策の存続への支持
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとの心理的一体感の重視（先進国の一員と呼ばれたいということ。）
先天的定住集団社会ＢＣ、定住生活中心社会群Ｄ等への蔑視とヘイトの繰り返し（勢力面でどんなに追い越されても、新興国扱いで、先進国とは呼ばない。）ということ。台湾の特別視、友好視（敵視する先天的定住集団社会Ｂ本土への対抗者だからということ。過去の後天的定住集団社会Ａ領土の住民で、目立った反抗をされなかったからということ。）ということ。
その他の外国への無関心か潜在的反感（外国家族定住集団メンバーは信用できない。トルコみたいな親日国とは仲良くしたい。後天的定住集団社会Ａ以外は、全て海外として一括扱いで、分類とかしない。）

軍事的支配者である先進的移動生活中心社会Ｇとの同盟関係の維持、強化への支持。

４．
（自分と同質な存在への心理的一体化と、異質な存在の徹底排除）

自分自身と（血縁的、文化的に）共通、同質な存在との一体化、身内化。自分自身と異質な存在の排除、排外感情。自分自身を批判、攻撃する存在の排除。
自分自身と血縁的、文化的に共通、同質な存在として、民族の存在を認識するということ。民族へのこだわり。後天的定住集団社会Ａ民族へのこだわり。同じ民族同士の一体感を重視。やはり後天的定住集団社会Ａのメンバーが良い。外国家族定住集団メンバーが嫌い。外国でも先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国の人たちとは仲良くしたいが、それ以外は排外。先天的定住集団社会ＢＣとかは嫌い。女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策の持続との関連。

（自分と同質な存在が持つ純粋性、特別性への一方的な信仰とその性質を脅かす存在の徹底排除。）

自分自身の特別視、純粋視。自分の国や民族の特別視、純粋視。基本的な国粋主義感情（後天的定住集団社会Ａは他国とは違う特殊、

特別な優秀な存在で、唯一性を持っている独立国である。後天的定住集団社会Ａへの他国の文化的介入を許さないということ。他国文化の介在しない純粋後天的定住集団社会Ａ文化への憧れということ。閉鎖的、排他的な女流の村落社会慣行との関連。）

後天的定住集団社会Ａの左派。後天的定住集団社会Ａの左翼。それらが抱える問題。女性優位社会の視点からの分析。

ツイッターで、自分が新たに後天的定住集団社会Ａの国家憲法擁護の内容の書籍を出版したことを恩師や先輩後輩たちにさっそく報告してきましたと、とても嬉しそうにツイートする弁護士の後天的定住集団社会Ａの男性の事例を見かけたが、これが後天的定住集団社会Ａで先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ寄りの発言を繰り返す左派の実態なのだと思うと、筆者はかなり違和感を感じてしまう。

後天的定住集団社会Ａの左派の人たちは、良くも悪くも、スーパー上位者の男性優位先進的移動生活中心社会Ｇや先進的移動生活中心社会群Ｆに忖度して、上から目線で、女性優位な後天的定住集団社会Ａの実態の男性優位後天的定住集団社会Ａの国家憲法や先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ思想からのずれ、上手く合わせられていない点をひたすらチェックしまくって一方的に糾弾、告発し、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流への修正を要求する思想面での上位者面、支配者面をした陰険な思想警察なのだ。
かつての戦前の反戦思想を取り締まる特高警察と本質は同じだ。
反戦思想の取り締まりが、反先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ思想の取り締まりに変わっただけだ。
あるいは、嫁の不備な点、気に入らない点を上から目線でひたすら糾弾しまくる姑と同様だということ。

しかも後天的定住集団社会Ａの左派の人たちの大半は、自分たちは、伝統的な女性優位な師弟関係や先輩後輩関係の中に安住し、そのことを何の疑問も抱かずそのまま無邪気に肯定している。
彼らは、自分たちの取っている社会行動が内包する自己矛盾に気付いていないし、気付く能力も無いのかもしれない。

後天的定住集団社会Ａの伝統的な師弟関係は、弟子による師匠への心理的一体化を伴う一方的な絶対服従を要求される典型的な女性優位な社会関係だ。
後天的定住集団社会Ａの伝統的先輩後輩制も、先輩に米つきバッタのようにひたすらペコペコ頭を下げて、甘え、懐き、忖度し、絶対服従すると共に、後輩に対しては、一転してふんぞり返ってひたすら威張り、精神的隷従を要求するもので、後天的定住集団社会Ａの家庭における嫁姑関係の世代間連鎖同様、女性優位な社会関係の典型であり、個人の思想の自由の確保を主張する後天的定住集団社会Ａの国家憲法の内容とは真逆だ。
後天的定住集団社会Ａの左派は、表向きは男性優位後天的定住集団社会Ａの国家憲法や先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流民主主義の内容を盛んに主張して、それと異質な女性優位な後天的定住集団社会Ａの側面をひたすら探しまくって糾弾しつつ、実際には、自分たちが糾弾しているはずの女性優位な社会関係を、自分たちの身内では実際には何の疑問も抱かずにひたすら素直に受け入れ、肯定し、それにひたすら適応して、実際は女性優位な社会慣行にどっぷり浸かり、女性優位な社会行動を盛んに取り、スーパー上位者の権威、威光を盾に大きな顔をして、後天的定住集団社会Ａの中で社会的地位を確保しているのだ。
これは、他にも例えば、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムを盛んに教条的に後天的定住集団社会Ａに導入して、それと適合しない後天的定住集団社会Ａの男女関係の現状を上から目線で攻撃しまくり、ひたすら自分たちの思い通りに先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流に矯正させようとする後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの主張者たちも、大学とかで女性優位な伝統的師弟関係のもとでひたすら先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムのお勉強や修行に励んでいる点、同様である。
彼らは、自分たちが実際のところ女性優位な伝統後天的定住集団社会Ａでスーパー上位者の権威を利用してメジャーな支配者の立場に立っている、実際は女性優位な考えに染まったままの伝統的後天的定住集団社会Ａのメンバーの一類型に属していることの自覚が無い。
ひたすら自分たちは後天的定住集団社会Ａ流とは違う先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の先進的な考え方を身に付けたんだ、従来の女性優位丸出しの伝統後天的定住集団社会Ａのメンバーとは違うんだと思い込んでいる。
彼ら後天的定住集団社会Ａの左派は、権威あるスーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進思想を崇拝、信奉することで社会的上位性を確保した特権的女性優位身内集団の構成員なのだ。

自分の考えが根本的に女性優位なまま、男性優位社会思想を女性優位なやり方で身に付けようとした結果、主張は男性優位だが、実際の社会行動は女性優位な、女性優位な左派後天的定住集団社会Ａのメンバーが誕生するのだ。
彼らの男性優位主張は、真の男性性、男性優位内実を伴っていない偽物だ。

後天的定住集団社会Ａの左派の人たちの中には、自分たちの主張を後天的定住集団社会Ａの国家の内部でとにかく通しやすくしたり、自分たちの社会的居場所を女性優位な後天的定住集団社会Ａの中に何とか確保するため、あくまで目的実現のための手段だと割り切って女性優位な社会慣行をとりあえず一時的、暫定的に受け入れているだけの人もいるかも知れない。
しかし、それだと左派思想の本質である男性性が、女性優位な社会慣行の中で暮らし続けることで、心の中で次第に自然消滅してしまって女性性だけが残り、見掛け倒しの切れない刃物を振り回すだけの状態になってしまうと考えられる。

伝統的な女性優位な師弟関係や先輩後輩関係を素朴に肯定しているかどうか、その中で問題なく適応し続けているかどうかが、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ寄りの主張を盛んに繰り返して伝統後天的定住集団社会Ａを攻撃する左派の人たちが、実際には女性優位かどうかを判定する上での大きな手掛かりになる。
後天的定住集団社会Ａの左派の中の一部には、女性優位な後天的定住集団社会Ａに本格的に不適合で、後天的定住集団社会Ａから引きこもったり、海外移住とかしながら、後天的定住集団社会Ａの女性優位性をひたすら憎悪し攻撃する、女性優位性から外れたタイプの人もいるからだ。
ただし、その場合も、後天的定住集団社会Ａ不適合の彼らが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ思想の先進性、権威を利用して、後天的定住集団社会Ａに対して上から目線になっている、隠れ女性優位な面があることは否めないが、自分自身の女性優位性の自覚が何も無いまま、女性優位な後天的定住集団社会Ａを上から目線で糾弾する女性優位左派の後天的定住集団社会Ａのメンバーたちよりはずっとましだ。

また、見かけ上女性優位な後天的定住集団社会Ａを肯定している人たちの中には、女性優位な後天的定住集団社会Ａの、周囲への同調、一体化、忖度をひたすら要求される人間関係のあり方に不適合な感覚や疲れる感覚や違和感を内心で抱きつつ、あるいは内心で女

性優位な後天的定住集団社会Ａに自分は根本的に合わないと絶望しつつ、生活のために、何とか食べていくために、やむを得ず、そうした本心をひたすら隠して、学校や企業定住集団といった女性優位な後天的定住集団社会Ａに追い出されないように表面的にでも何とか迎合し続けるしかないと、悲壮な覚悟を決めて毎日必死になって一生懸命、女性優位後天的定住集団社会Ａへの終わりない表面的適応を試行錯誤している疑似女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバー、潜在的な女性優位不適合の後天的定住集団社会Ａのメンバーも一定数いると考えられる。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進思想を身に付けて特権的優越感に染まった女性優位な左派の後天的定住集団社会Ａのメンバーたちは、そうした見かけ上後天的定住集団社会Ａにひたすら適応し続けるしかない、疑似女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバーたちの辛い気持ちを理解できず、救済の手も打てない、見掛け倒しの役に立たない存在だ。
後天的定住集団社会Ａの女性優位性からの疑似女性優位な人々の解放を目指す、本質的な脱女性優位を果たすことを可能にする政策や、その実現を目指す社会運動が、後天的定住集団社会Ａには新たに必要だ。
あるいは、後天的定住集団社会Ａの女性優位性に対する批判がもっと公然となされることを可能にすべきだ。
後天的定住集団社会Ａの左派から女性優位性を徹底的に除去する方策を考えることも検討すべきだ。
後天的定住集団社会Ａの男性化の推進が、後天的定住集団社会Ａのマスキュリズムの目標の一つになるべきだ。
世界中に存在する男性優位社会に、女性優位な社会慣行に苦しめられている後天的定住集団社会Ａの男性の救済を求めることも必要だ。

（初出2020年5月）

後天的定住集団社会Ａの政府（上位者）は女性優位である。

女性の社会関係、あるいは女性優位な社会関係の基本は、上位者に対して、自らの保身を最優先して、異を唱えずひたすら同調、一体

化、忖度、取り入り、ご機嫌取りをしてペコペコ一方的に隷従するとともに、自分が尊敬できると考える上位者には心理的にひたすら依存して、頼り、崇め、しきりに助けてもらおうとする一方で、下位者に対してはふんぞり返って威張りまくり、当然のように隷従を要求し、下位者が異を唱えると自分のソフトなメンタルがすぐ容易に傷ついて、取り乱して逆上して怒り、下位者に対して陰険で残忍で激しいいじめ、虐待、報復をしつこく行う、というものである。
女社会、あるいは女性の社会関係では、上位者と下位者の間の専制的な支配隷従関係の連鎖がひたすら起きている。

この女性優位な社会関係は後天的定住集団社会Ａの家庭における嫁姑関係に顕著に表れている。
上位者の姑は下位者の嫁に上から目線で一方的に説教しまくり、嫁に対して重箱の隅をつつくようなケチをつけまくってひたすら攻撃し続け、下位者の嫁からの異議申し立てを心情的に決して許そうとしない。
嫁はその姑からの仕打ちにろくに反論ができず一方的に隷従し続ける。
そして、嫁はいざ自分が姑の立場になると一転して、新たな嫁に対してひたすら高圧的でふんぞり返る態度を取るようになる。
姑による嫁の支配の世代間連鎖が起きている。

この女性優位な社会関係は、後天的定住集団社会Ａに広範に見られる先輩後輩制にもそのまま当てはまっている。
上位者の先輩が下位者の後輩に対して、ひたすら偉そうに高圧的に威張って、後輩が自分に隷従することを当然のごとく要求し、下位者の後輩は上位者の先輩にひたすら忖度し、取り入って同調し、甘え、懐いて必死に同調、一体化しようとする。
そしてその後輩は、さらに自分に対して下位者の後輩に当たる人間に対して、上位者の先輩としてひたすら上から目線で威張りまくるのである。
先輩、後輩の支配隷従関係が世代を追って連鎖している。

この女性優位な社会関係で動いているのが、後天的定住集団社会Ａにおける上位者で上位者である後天的定住集団社会Ａの政府である。
後天的定住集団社会Ａの上位者は、自分より上位のスーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ、特に実効支配者の先進的移動生活中心社会Ｇに対して、異を唱えることが怖くてできず賛成ばかりして、先進国だと持ち上げて、ひたすら忖度してペコペコ同調し

一体化、従順の意思を表して、ご機嫌取りをして隷従しまくり、その主張にひたすら賛成しまくる。
一方、自分より下位者の後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーに対しては、官尊民卑の特権者気取りでふんぞり返ってひたすら威張り、自分の政策を自分たちの身内だけで決めて国民に一方的に押し付けて反論は一切受け付けない。
国民を弱者扱いして一方的に隷従を要求するということ。
女性優位な上位者は、下位者の国民が自由意思で動くことを、下位者が上位者の許可を得ずに勝手なことをやっているとして許さず、強力な社会統制をかける。
後天的定住集団社会Ａの上位者は、国民が自分の意志で行動して窮地に立つとすぐ自分勝手な行動をした報いで自己責任だと決めつけて、ちっとも助けようとせず、ひたすら放置する。
後天的定住集団社会Ａの上位者は、困っている社会的弱者に対してひたすら冷淡で、経済的困窮者の生活保護請求とかを下位者のくせに上位者にたかるのは厚かましいとして、なかなか応じない。
女性優位な後天的定住集団社会Ａの上位者は国民がその政策に異を唱えると心情的に容易に傷ついて、直ちに非情で苛酷な弾圧を始める。
後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーはそれが怖くて仕方がないので、必死になって従順な態度を取る。
中には、上位者に積極的に忖度して、上位者の政策に従わない他の国民の存在を上位者に密告して、上位者に処罰させたり、自分たちで制裁を加えようと、積極的に上位者の手下として自主的に動く国民も多い。
上位者の政策をひたすら擁護して上位者の応援団、喜び組になる国民も多い。
後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーが後天的定住集団社会Ａの上位者に対抗するには、唯一上位者に意見をできる立場であるスーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの取る、後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーの声を代弁する形の、後天的定住集団社会Ａの上位者を批判することに当たる内容の政策の実例を国際ニュース報道とかから何とか引き出して、それを引き合いに出して、上位者を批判して、上位者をスーパー上位者に従わせることによって後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーの意見を何とか通す道しか残されていない。
そして、後天的定住集団社会Ａの国家のメンバー自体もしょせんは女性優位な存在なので、国民の中での上位者、優位者、上級国民がひたすら威張って大きな顔をして、下位者に対して一方的隷従を要求し、下位者はそれにひたすら忖度して、迎合して従っていくしか

ない。
事業発注の元請け企業定住集団と下請け企業定住集団の関係とか、企業定住集団における企業定住集団の所有者と企業定住集団のメンバーの関係、師弟関係、上司と部下の関係、企業定住集団の正規メンバー（定住民）と企業定住集団の非正規メンバー（流民）の関係とか、すべて女性優位な社会関係に従っているということ。
そして、いかにも女性優位らしく、上位者と下位者との間の専制的な支配隷従関係の社会的連鎖が当然のように起きている。
事業発注の一次下請け、二次下請け、三次下請けの支配隷従関係の連鎖とか典型的であるということ。

皮肉なことに、現状の女性優位な後天的定住集団社会Ａで、上位者を含めた後天的定住集団社会Ａの性格を女性優位と呼ぶことは、実質許されていない。
なぜならば、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ、先進的移動生活中心社会Ｇは典型的な家父長制社会であり、自分たちの男性優位な社会体制を脅かす女性優位な考え方に対して否定的であるからであり、上位者の後天的定住集団社会Ａの政府も後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーもその意向にひたすら忖度して一方的に従うしかないからである。
また、上位者の後天的定住集団社会Ａの政府が「女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想」の国策、後天的定住集団社会Ａを、遅れて弱い見下しの対象としての定住生活中心社会群ＡＢＣから脱出させて、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国の一員の地位に仲間入りさせようとする政策を伝統的に推進していて、その一環として後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ並みの家父長制社会に見えるようになることを必死で推し進めてきており、一方で後天的定住集団社会Ａの上位者と後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーとの関係が女性優位なまま維持されていて、上位者の上位者の決めたスローガンに下位者の後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーが忖度、迎合して、上位者と後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーが一体となって「後天的定住集団社会Ａは家父長制である」「後天的定住集団社会Ａの男性は強い」「後天的定住集団社会Ａの女性は弱い」と同調して、その内容が女性優位な後天的定住集団社会Ａの実態に全く合っていなくても、ひたすら見て見ぬふりをして、ひたすら念仏のように全員で唱和し続けるしかなくなっているのである。
これに反する「後天的定住集団社会Ａは女権、母権社会である」「後天的定住集団社会Ａの男性は弱い」「後天的定住集団社会Ａの女性は強い」という主張をすると、上位者からも後天的定住集団社

会Ａの国家のメンバーからも、スーパー上位者と上位者の両方に対して同時に異を唱えるとても危ない人、異端者という扱いを受けてしまい、ひたすら無視され、嘲笑され、存在自体を消されたのと同じ状態に置かれてしまう。
特に、この主張をすることで、上位者の上位者のスーパー上位者に反対することになってしまうことが致命的である。
上位者に忖度、隷従する後天的定住集団社会Ａの右派だけでなく、スーパー上位者に忖度、迎合して、その権威を利用して、返す刀で、スーパー上位者に対して相対的下位者に当たる後天的定住集団社会Ａの上位者を批判してきた後天的定住集団社会Ａの左派や、上位者に内心批判的な後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーからも、スーパー上位者を批判するとは何事だ、とっても危なくて非常識な行為だということで拒否されてしまう。
後天的定住集団社会Ａでは、スーパー上位者と上位者の両方に同時に異を唱えると、とたんに言論の自由が全く無くなってしまい、後天的定住集団社会Ａの国家の内部での居場所も失われ、引きこもり生活をするか海外逃亡するしかない。
つまり、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会Ｇが主導した後天的定住集団社会Ａの国家憲法で、後天的定住集団社会Ａでは言論の自由が保障されていると表向きは必死に言われながら、スーパー上位者と上位者による「世界社会のスタンダードは男性優位な家父長制社会だ」「後天的定住集団社会Ａは既に家父長制だ」「後天的定住集団社会Ａは家父長制になるんだ」「後天的定住集団社会Ａの男性は家父長で強い」「後天的定住集団社会Ａの女性は家父長の後天的定住集団社会Ａの男性に従属して弱く、社会的被害者で差別されている。
性差別反対！」「弱い後天的定住集団社会Ａの女性を後天的定住集団社会Ａの男性並みに、その社会的地位を向上させよう」という公式スローガンを完全否定する、「後天的定住集団社会Ａは女性優位である」「後天的定住集団社会Ａは女社会である」「後天的定住集団社会Ａは女性が上位者で強く、男性は下位者で弱い」「後天的定住集団社会Ａの女性が社会を支配している」「後天的定住集団社会Ａの母や姑は特に強力な社会的支配者である」と主張する言論の自由は存在しない。
、例えその言論の内容が社会の実態に適合していると思っても、一切口走ってはいけないのである。
上位者への批判を許容しない女性優位な後天的定住集団社会Ａでは、事実上、何かを主張するには、その内容がスーパー上位者と上位者のどちらかには必ず忖度、迎合しないといけないという強力な言論統制がかかっている。

女性優位な後天的定住集団社会Ａでは、社会関係が女性優位であるがゆえに、自らが女性優位であることを認める自由が実質的に消失している。

後天的定住集団社会Ａの上位者は「女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想」の国策と、それに伴う「後天的定住集団社会Ａは家父長制で、後天的定住集団社会Ａの男性は強く、後天的定住集団社会Ａの女性は弱い」とするスローガンを後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーに対して盛んに掲げている。
しかしそれは、自由で公正な男女の性差研究に対する、国策による露骨な強制力を持つ介入であり、出てくる研究成果を一方的に歪曲し、男女の社会的性差に関する社会的真実への到達可能性を閉ざす、有害な内容で、社会的禁じ手であり、今すぐ是正されるべきである。
女性優位な後天的定住集団社会Ａで、社会的に弱いはずの後天的定住集団社会Ａの男性がしきりに自分たちの家父長的性格、自分たちの社会的強さ、社会的優位性をひたすら主張してそれに安住し、一方、社会的に強く、支配者であるはずの後天的定住集団社会Ａの女性が、ひたすら自分たちの社会的弱者性、社会的劣位性を主張している現状は、はた目からは、どう見ても異常な、狂った状態である。
しかもそのことに後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーが上位者から洗脳されて誰も気付けないか、誰かが気付いて指摘しても、上位者の国策に女性優位な態度で同調、忖度する他の後天的定住集団社会Ａの国家のメンバー（右派、左派両方）から社会的にひたすら無視され、否定され、冷笑され続けるようになってしまっている状況は直ちに解消されるべきだ。
あるいは、後天的定住集団社会Ａにとってスーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨも、自分たちの社会の家父長制や、男性優位や女性の劣位性を前提としたフェミニズムや、性差別反対のスローガンのもとに自由な性差研究を勝手に抑圧するネオリベラリズムの、他国や世界社会への強引な押し付け、押し売りを直ちに止めて、世界が男女の社会的性差の真実や、より説明力のある学説にたどり着けるように、心を入れ替えて協力すべきだ。
世界には、男性が強い社会もあれば、女性が強い社会もあるということへの共通認識が、世界的に持たれるべきだ。
人間が男女の社会的性差についてより自由に深く探求できるようになることが、男女の相手に対する相互理解を促進し、世界の人類にとって真の利益につながるはずだ。

（初出2020年5月）

社会的性差と後天的定住集団社会Ａ、世界社会

後天的定住集団社会Ａが必死に先進国、後進国の区別にこだわり、後天的定住集団社会Ａのことを、いくら落ち目になって没落しても必死になって先進国と呼び続け、あるいは先天的定住集団社会ＢＣを新興国呼ばわりして、先天的定住集団社会ＢＣが自分たちより優越しても先進国扱いを必死になって避けるのは、国々の間の相対評価、偏差値評価にこだわり、自分が周囲の中で相対的に上位にあるとして周囲にマウントを取ろうとしていることを示しており、まさに女性優位な思考である。
あるいは、後天的定住集団社会Ａがかつて劣等と認定した女性優位な先天的定住集団社会ＢＣの後天的定住集団社会Ａ追い抜きを認めることで、後天的定住集団社会Ａが先天的定住集団社会ＢＣに対してマウントを取れなくなってプライドを傷つけられることを必死で回避する女性優位な行動である。
また、後天的定住集団社会Ａや先天的定住集団社会ＢＣのような女性優位な社会が保身第一でチャレンジ精神に欠けているため、積極的に危険に対してチャレンジする男性優位な社会に先進性の面で絶えず先を越されやすく、ある意味絶えず後進的でそれゆえ弱体な性格を背負っていることへの負い目も感じられる。
かつての女性優位な先天的定住集団社会Ｂが男性優位な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの侵攻でいったん没落したのは、このことが原因だからだ。
後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの文化の見境の無い必死の導入、物まねとその微調整や改良をひたすら行うという女性優位な行動を続けることで高い製品完成度を見せて、男性優位な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに対して十分な競争力を付けて世界の強国となることができることを示したことが、後天的定住集団社会Ａ以外の女性優位な諸国、特に先天的定住集団社会ＢＣにとって、男性優位諸国を上手に攻略し優越するための世界的な先例、手本になっていることは確かである。

このことは後天的定住集団社会Ａにとっては誇るべきことだが、同時に今の衰退する後天的定住集団社会Ａにとって、実質過去の栄光となってしまっていることも事実である。

女性優位な社会や女性優位な国は、世界の強国になるために、後天的定住集団社会Ａみたいに必死に社会の家父長制化を女性優位なやり方で情緒的に目指して男装の麗人にならなくても、女性優位な素顔や姿をさらけ出したままで十分世界的に成功し、世界の覇権も十分取れることが、女性優位な先天的定住集団社会Ｂの世界的な躍進で改めて判明した。
このことで後天的定住集団社会Ａが家父長制ごっこや男装の麗人を続ける必要性がもはや無いこと、意味をなさないことが明らかとなった。

男性優位社会規範の女性優位な丸呑みが、明治時代以降、後天的定住集団社会Ａでは起きている。
ドイツ的な大日本帝国憲法導入がそうである。
あるいは、戦後の後天的定住集団社会Ａにおける実質先進的移動生活中心社会Ｇ製の後天的定住集団社会Ａの国家憲法の受容がその典型である。
しかし、情緒的な丸呑みの過程で、本来の男性性が消失してしまい、その効力が骨抜きになって、意味の無い条文と化している。
女性優位社会後天的定住集団社会Ａの男性化は、実質的に全く実現できていない。

女性優位な後天的定住集団社会Ａは、昔ながらの上位者と下々の後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーの関係、および新たにやってきたスーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨによる後天的定住集団社会Ａの上位者と後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーへの優越、という形で表した方が、わざわざ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ民主主義を表面的に持ってくるより、ずっと効率的、効果的に説明できる。

後天的定住集団社会Ａで、例え共産主義革命みたいなのが起きて、国家の所有者による社会支配制度廃止とかが起きても、後天的定住集団社会Ａのメンバーは、しょせんは女性優位でしか社会行動できないので、革命後も新たな上位者がひたすら強圧的に威張って、下位者に向かって一方的に命令を下し、上から目線で説教をし、下位者はそれに対してひたすら忖度して、ご機嫌取りし、隷従するしかない、従来の上位者と下々の社会体制が再生産されるだけで、社会

的に新味は特に何も無いだろうｊ。
社会を革命しても、社会を新たに統率する上位者が有能であるかどうかしか違いが無く、無能な上位者が新たに来る可能性もとても高い。
そして、革命が起きた後も、上位者や周囲への同調と一体化、忖度がひたすら横行する今まで同様の代わり映えしない、今までの社会体制の二番煎じにしかならない上位者の独裁状態の女性優位社会が続くだけだ。
革命するにしろ、しないにしろ、上位者、、指導者の有能性をいつでもきちんと確保できる社会的仕組みを、後天的定住集団社会Ａは早く作らないとダメだ。
前例、、しきたり暗記ばかりに長けている人を役人に登用する試験制度は問題があるし、議員になるのが世襲の既得権益になってしまっているのも良くない。
古くなった前例、しきたり、既得権益の固定化による社会の弱体化は、女性優位社会の欠点であり、何らかの形で、植物の根切りみたいに、くたびれた社会のしきたり、価値観や既得権益をその都度ばっさり切る措置が、女性優位社会を活性化するためには定期的に求められ、後天的定住集団社会Ａも再びその時期が来ているのである。

女性優位社会による男性優位社会の支配は、以前から、例えば、定住生活中心社会Ｅによるモンゴルへの支配の仕返しとか、定住生活中心社会Ｅ（ソビエト連邦）による東ドイツ支配とか北欧バルト三国支配とかいくらでも存在する。
世界が男性優位社会による一色支配で、男性が世界で普遍的に強く、女性が世界で普遍的に弱いという考えは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのような男性優位社会による自分たちの勢力をアピールするための広告宣伝に過ぎない。
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策を推進する家父長制指向の強い女性優位な後天的定住集団社会Ａはその考えを何も考えず、女性優位な発想で勝手に鵜呑みにして盲信しているだけなのだ。
世界では、女性が強く、弱い男性を支配している地理的エリアも農耕民の主流なエリアを中心にたくさんある。

後天的定住集団社会Ａのような女性優位社会が、後天的定住集団社会Ａの国家憲法のような男性優位社会規範を、いつまで経っても実質的に理解できず、体得できず、導入できないまま、お経のような感じでひたすら暗記学習しているのは、女性が男性心理のことをい

つまでも理解できないのと同じである。
同様に、男性優位社会も女性優位社会のあり方を本質的に理解することが難しいと考えられる。
男性が女性心理を把握しにくいのと同一である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは後天的定住集団社会Ａや定住生活中心社会群ＡＢＣ社会のことを権威主義的、集団主義的とは捉えているものの、後天的定住集団社会Ａや定住生活中心社会群ＡＢＣ社会の表面的な活躍者が男性メインのこともあり、あるいは後天的定住集団社会Ａが家父長制の振りを盛んにしていることもあり、女性が後天的定住集団社会Ａや定住生活中心社会群ＡＢＣ社会の真の支配者であることに気付くことがなかなかできないでいるのである。
このことは男女の社会的性差の存在を明示している。
この現実を男性優位社会に気付かせることが、世界の社会的性差研究の進展にとって重要である。

後天的定住集団社会Ａの男性が、明治以来、長期にわたって家父長制の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの男性優位社会規範にじかに接し、その内容の本質を理解、体得して、自らの心理を真に男性化して真の家父長として覚醒する機会がいくらでもあったのに、今なお相互同調、一体化、上位者への忖度といった伝統後天的定住集団社会Ａに特有な女性優位な社会規範にどっぷり浸ったままで、そこからちっとも抜け出ることができず、女性優位な存在であることを続けて、その状態に満足してしまい、これまた女性優位なままの後天的定住集団社会Ａの上位者の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策の後押しで、見掛け倒しの疑似家父長みたいな存在になって表面的に威張りつつ、母親とか後天的定住集団社会Ａの女性への精神的依存を隠せずにいて、劣化女性みたいな存在のまま、後天的定住集団社会Ａの女性の実質的な支配下にはいったままなのは、筆者としてはとてもふがいなく、情けなく感じる。
後天的定住集団社会Ａの男性が、なぜ、生物的な性別としては男性で、女性に対する種付けの性的衝動とかは強く持ちながら、取る社会的行動がことごとく女性優位になってしまい、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのような外部家父長制社会が上位者となってせっかく後天的定住集団社会Ａの国家憲法のような男性優位社会規範を直接的にもたらしてくれたのに、その内容の本質を理解、吸収できず、女性優位な存在のまま留まることになってしまった理由は何なのか、深く考える必要がある。
考えられる理由としては、後天的定住集団社会Ａの男性が生育時に

母親によって、強力な母子癒着状態を持続させられるとともに、その後の子育てを母親が独占することで、社会行動面での男性性を除去されること、、および後天的定住集団社会Ａの学校教育で、師弟制や先輩後輩制のような女性優位な価値観、社会規範を一方的に強力に注入され、男性優位な自由独立行動を取ると、協調性が無いとして女性優位な教師たちから強制的に矯正させられたり、既に女性優位化している他の生徒や学生から除け者扱いでいじめられるので、どうしても男性性を喪失せざるを得ない。
あるいは、企業定住集団や官公庁といった職場や、市街住宅地や定住集団といった地域社会の社会慣行が、どこもほとんど、所属集団との全人格的な同調、一体化、隷属を強制される伝統的な女性優位な前例、しきたりにひたすら従って行動することを要求されるため、何とか生計を立てて生活していくためには、精神を女性優位化せざるを得ない。
また、後天的定住集団社会Ａの女性とのデートや結婚によって、相手の後天的定住集団社会Ａの女性からは、経済力と筋力や下僕としての奉仕力みたいなのをひたすら求められ、家計管理の権限とか後天的定住集団社会Ａの女性に握られて、妻から夫への小遣い制に甘んじて、妻に精神的に従属して生きることを強いられ、子育てからも疎外されて無力な存在のまま、表向きは家父長扱いされておだてられつつも、家庭内で女性優位か子供のままの感じで振る舞うことを強制される側面もある。
後天的定住集団社会Ａの男性にとって、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨからの家父長制導入が、実際のところ、上から一方的に与えられた家父長制になっていて、真の家父長になることによって男性優位な自由独立性を発揮できる可能性が、後天的定住集団社会Ａで支配的な女性優位な社会規範によって社会的に否定され、閉ざされたまま、見掛け倒しの名目的家父長制、疑似家父長制としてひたすら表向き女性優位な後天的定住集団社会Ａを先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国風に見せる看板みたいな役割しか果たしていないところが問題だ。
今のままでは、後天的定住集団社会Ａの男性には、女性優位なままやたらと威張り、強がり、周囲に対して格好付けをして、粋がるだけの、ひたすら人生空回りの残念な道しか残されていない。
後天的定住集団社会Ａの男性にとって、自分の母親は、実際のところ、自分の息子に対して付きっ切りで密着状態の子育てをすることで、周囲への同調、一体化、忖度の重視、事なかれ主義といった女性優位な精神を息子に対して強制的に植え付け、そのことで息子自身が持っているはずの自由独立の精神やチャレンジへの精神を強制的に消去、無効化し、息子の精神をすっかり女性化させ、劣化女性

のような存在にさせて、女性優位社会における無能な社会的弱者、女性の社会的奴隷の地位に転落させ、息子を母親自身の自己実現の道具として、精神的に操縦し続け、一生息子に取り付いて精神的な支配を続ける存在であり、息子の男性優位精神の保持や男性優位人権保持という点では有害極まりない存在である。
ところが、そのように母親に自分の精神をすっかり女性優位化されてしまった後天的定住集団社会Ａの男性は、そうした根本的な問題に全く気付けなくなり、かえって母親に対して強い愛着や依存心、懐き、慕い、甘えの心、母親が自分を付きっ切りで可愛がって献身的に世話して育ててくれたことへの恩義の心、感謝の心、母親への恩返し、親孝行の心、母親への忠誠心を強く持つようになり、母親の全面的支持者、母親至上主義者、母性への熱心な信奉者となり、「お母さん大好き！」とひたすら強く思うようになるのである。
女性優位化した後天的定住集団社会Ａの男性は、その延長線上で、社会的に母親代わりになる存在をしきりに求めるようになる。
後天的定住集団社会Ａの男性は、自分の姉妹とか妻とか娘などの後天的定住集団社会Ａの女性に対して強い依存心や自分のことを母親のように世話してくれることへの強い欲求を内心持ち続ける。
後天的定住集団社会Ａの男性は、後天的定住集団社会Ａの女性による後天的定住集団社会Ａの男性への母性的可愛がりや世話焼きに否定的な、後天的定住集団社会Ａの女性の精神の女性性の否定と先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ家父長制的な男性化、後天的定住集団社会Ａの女性の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ男性優位な社会的活躍を、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨへの女性優位な忖度によって盲目的に推進する、後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想と家父長制ごっこ推進の社会的象徴としての後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流フェミニズムに対して強い敵意を持って否定、攻撃の対象とする。
後天的定住集団社会Ａの男性は、あるいは、企業定住集団のような所属集団のメンバーや、尊敬できる先生や先輩のような古参者、社会的上位者に対しても、男女を問わず、しきりに懐き、心理的に取り入ろう、気に入られようとする。
そして、後天的定住集団社会Ａの男性は、後天的定住集団社会Ａは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国の一員を目指して、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと同質化し、家父長制になるのだとする、女性優位な上位者の人為的に設定した社会的建前にひたすら女性優位な態度で忖度し、必死に合わせようとして、自分が内心強烈に保持する母親や女性への依存心を、表向き必死になって隠ぺいして、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の家父長になりきったよう

な感じで、家庭内や所属集団内で女性に対して必死になってひたすら威張り、女性に対して居丈高な支配的態度を取るのである。
後天的定住集団社会Ａの女性もそれに合わせて、女性優位な後天的定住集団社会Ａの主宰者、社会規範の決定者、社会の支配者という本性を必死になって隠し、後天的定住集団社会Ａが母権社会であることへの言及を表向きひたすら避け、男性に比べて表面上は下位者であるかのような社会的演技をひたすら取り続ける。
すると、自分たちが模範とするスーパー上位者の家父長制の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨから、後天的定住集団社会Ａは男性優位だ、女性差別的だ、もっと女性の地位を男性並みに向上させるべきだという、ありがたいお言葉と評価を受け、後天的定住集団社会Ａの家父長制化が見かけ上成功していることへの肯定的なフィードバックが得られて、後天的定住集団社会Ａの上位者も後天的定住集団社会Ａの男性も後天的定住集団社会Ａの女性も先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的になれたと喜ぶ。
後天的定住集団社会Ａの男性の母性礼賛、自分に対する母親や母性的存在による支配への根本的賛成、同意、積極的な受け入れと、表向きの家父長的社会行動を一生懸命取ることとの両立が起きる現象、そして後天的定住集団社会Ａの男性は、本来男性なのにも関わらず、母親による支配で精神が女性優位化してしまうため、家父長制の本質の理解が不可能になり、個々人の精神の自由独立に基づく男性優位権力の行使能力を喪失して、女性優位な社会規範の下で、疑似家父長、偽物の家父長の状態で、社会的弱者として過ごす羽目になる現象は、こうして起きているのである。

ナチスドイツの男性優位な権威主義、全体主義は、後天的定住集団社会Ａの女性優位な権威主義、全体主義とは、一見、上位者への下位者の盲従、人々の行動の社会全体での一斉化の発生という点で共通だがその中身は大きく異なっている。
ドイツ社会に以前から官僚制のような形で存在する、下位者の上位者への合理性、論理性を伴ったドライで非情緒的、道具的な服従の心理をベースにしつつ、人間に対する冷徹で理性的、科学的なアプローチによる人間の人格を完全にコントロール可能にする公衆演説等の技術の生み出しと、その技術の現実社会への社会全体への適用がナチスドイツによる試みであり、まさに男性優位なやり方でのアプローチでの権威主義と全体主義の実現である。
このアプローチを採用したナチスドイツが強国化したことで、こうした人格コントロール技術の開発は、社会的にかなり成功した訳である。
この試みは、ナチスドイツの敗戦で社会的に封印されたが、復活の

余地は残されている。
後天的定住集団社会Ａのように、情緒的で非科学的アプローチで、女性優位な人々の、上位者も下位者も共通に持つ、メンタル面での感情的な相互同調、同一化傾向と異質者排除傾向の強さ、あるいは下位者による、自分が保身して社会的に昇進するために上位者への忖度、ご機嫌取り、懐きを行う傾向、あるいは反抗者を自主的かつ積極的に排除する傾向、自分より下位者に対して自分への一方的な隷従の強制を行う傾向の強さに全面的に乗っかって、後天的定住集団社会Ａ全体をひとまとめにして動かすのが女性優位な後天的定住集団社会Ａの権威主義、全体主義である。
つまり、後天的定住集団社会Ａの権威主義、全体主義は、女性の行動様式が基本になっている訳である。
こうした女性優位な権威主義、全体主義は今なお、後天的定住集団社会Ａにおいて、旧後天的定住集団社会Ａ軍の敗戦によってその存在を表面的には否定されつつも、実際には強固に存続している。
後天的定住集団社会Ａのこうした面を、女性優位という表現は必死で避けつつも、今なお臆面もなく肯定する後天的定住集団社会Ａの右派ばかりでなく、後天的定住集団社会Ａのこうした権威主義、全体主義的側面を否定する後天的定住集団社会Ａの左派も、実際にはスーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨへの忖度と同調と、後天的定住集団社会Ａの上位者その支持者たちに対する上から目線での批判、身内集団内での意見同調のための厳しい相互監視や規制と異論を唱える者の徹底的リンチ、排除を行っていて、まさに女性優位な権威主義者、全体主義者そのものなのである。
後天的定住集団社会Ａの戦前、戦中のファシズムは、ドイツのファシズムを必死に真似た面もあると考えられるが、ドイツのファシズムの男性優位本質は、女性優位な後天的定住集団社会Ａには結局理解不能なままで終わり、後天的定住集団社会Ａのファシズムは、ドイツのファシズムとは別物のままだったのである。

女性優位な後天的定住集団社会Ａの男性は、上位者の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策による後天的定住集団社会Ａの家父長制化推進の流れに乗って、家父長気取りで盛んに威張っている一方、本来持っている後天的定住集団社会Ａの女性への心理的な依存心の対外的な発露、すなわち母親や妻、娘に公然と甘えること、女性に対して心理的に弱者、下位者のままでいること、子供っぽいままでいることを表明することを社会的に禁じられた形になっている。
後天的定住集団社会Ａの男性が、こうしたことを表明すると社会的に一斉に非難を浴びてしまう。

後天的定住集団社会Ａの男性が自身の弱者性を表明することで後天的定住集団社会Ａが引き続き女性優位であり、本当の支配者が女性であることが対外的にばれてしまうからだ。
また後天的定住集団社会Ａの男性が伝統的に可能であった、自身の結婚後の母親との同居の持続も、そのことで不利益を被ってきた嫁相当の後天的定住集団社会Ａの女性による猛烈な抗議のせいで実質不可能となってしまっている。
女性優位な後天的定住集団社会Ａの男性は、後天的定住集団社会Ａの政府の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策によって、家父長制扱いされて一見社会的強者として振る舞いつつ、自身の抱える真の弱者性を周囲の社会に向けて告白することが出来なくなっている。
後天的定住集団社会Ａの男性は、後天的定住集団社会Ａの中で、表面的にひたすら強がって見せるしかない。
後天的定住集団社会Ａの女性の社会的強者性と、後天的定住集団社会Ａの男性の社会的弱者性は、後天的定住集団社会Ａにおける暗黙の了解事項でありつつ、決して公表してはいけない公然の秘密なのである。

（初出2020年5月）

後天的定住集団社会Ａと役人支配

後天的定住集団社会Ａのメンバーの多数は政治的無関心である。
右派でも左派でもない無党派層である。
あるいは政党、政策への意見表明、支持表明を回避するということ。
それは政治的中立指向であることを意味する。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、政府の政策決定における政党や政治家の介入を心の底では望んでいないのではないか。
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想で先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの事例を一時的に導入しているだけだということ。
後天的定住集団社会Ａで政治的中立を指向する、後天的定住集団社会Ａの政府を動かす存在といえば昔も今も役人である。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは役人支配指向の人々である。

明治時代以降、後天的定住集団社会Ａでは支配者の上位者と言えば、国家の所有者一家とその家来の役人である。
役人の人生は、前例、しきたりにひたすら従うリスクの無い事なかれ主義の人生であり、女性優位な人生の典型である。
役人の人生は、女性優位な後天的定住集団社会Ａの理想の人生である。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、何か主張しようとすると、いろいろな人に配慮して、結局、何も政治的主張ができなくなってしまう。
後天的定住集団社会Ａのメンバーのその傾向に政治的中立性を本質的に指向する役人による社会の支配がぴったり合致している。
後天的定住集団社会Ａは本質的に役人支配向きの社会である。
後天的定住集団社会Ａは、後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーが何でも役人にお任せで、適当に上手くやってねの社会である。
後天的定住集団社会Ａでは役人に対する社会の評価、信頼感が高い。
役人は後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって理想の職業である。
後天的定住集団社会Ａの役人は、初発の給料が低めだが、社会的な影響力がたくさん持てる。
後天的定住集団社会Ａの役人は、上位者の一員として、社会的に威張れるし、天下りのような役得が多い。
後天的定住集団社会Ａでは、役人になると、上級国民と結婚しやすく、社会階層の向上が期待できる。
上位者の権威に弱い後天的定住集団社会Ａのメンバーは、その点に憧れる。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは自分も権威と支配力を持った上位者的存在になりたいと心の底で思っている。
後天的定住集団社会Ａの政府を企業定住集団に例えると、政治家はしょせんは企業定住集団の非正規メンバー（流民）扱いだが、役人は企業定住集団の正規メンバー（定住民）だ。
後天的定住集団社会Ａでは、伝統的な高級役人輩出の大学が東京大学で、東京大学への後天的定住集団社会Ａのメンバーの信仰が根強い。
東京大学は、今なお後天的定住集団社会Ａの国家の内部で一番優秀な大学と見なされている。
後天的定住集団社会Ａでは東京大学に合格したがる人やその親が今なお多い。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは何のかんの言ってみな役人になりたがる。

後天的定住集団社会Ａにおける国会の答弁は役人の振り付けに完全に依存している。
後天的定住集団社会Ａでは、国会議員みたいな政治家も役人ＯＢ、役人ＯＧが多い。
後天的定住集団社会Ａの政治家には、役人の直系子孫も多く、安倍晋三首相もそれに該当する。
安倍官邸の支持率が高めなのは、役人の人事権を持っている面もある。
安倍官邸は、後天的定住集団社会Ａのメンバーには、政治家というよりも役人の総帥と見えているのではないか。
後天的定住集団社会Ａにおいて、かつての国家の所有者による社会支配制度の栄光を支持する人は、国家の所有者の家来の役人支配を肯定する。
政府与党の自民党も役人出身者が多い。
後天的定住集団社会Ａは昔も今も役人天国である。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の議会制民主主義が後天的定住集団社会Ａなどの女性優位社会で上手く働かない理由は何か？それは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の議会制民主主義が、クローズドな議場を強く指向する女性優位社会に対して、男性優位なオープンな議場を強制しているからだ。
オープンな議場は、男性優位な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨによる世界支配の名残りである。
女性優位社会がわざわざ合わせる必要は本来は特にない。
後天的定住集団社会Ａの政府が女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策で一生懸命導入を試みているだけだ。
クローズドな議場を指向する女性優位な後天的定住集団社会Ａにおいて、オープンな議場が今後も実質的に機能することは多分無い。
後天的定住集団社会Ａの国会でのオープンな議場は、社会的に有害なので本当は止めた方がいい。
後天的定住集団社会Ａのオープンな議場では、役人による表面的な答弁振り付けばかりやっている。
実質的な政治決定は飲食店とかでの密室談義が多い。
女性優位社会は密室談義が好きだ。
女性優位社会は秘密主義で非公開なのが好きだ。
女社会は本質的に秘密主義。
後天的定住集団社会Ａでは、上手く働かないオープンな議場よりも、上手く働くクローズドな議場が良い。

後天的定住集団社会Ａの政府の動きは一生懸命政治家主導に見せているが、結局は役人主導のまま。
今の政治家は、役人の人事権だけ握って後は実質役人に丸投げ状態で、あまり役に立っていないし、機能もしていない。
現状では昔ながらの役人独裁みたいなのが後天的定住集団社会Ａのメンバーには向いているのではないか。
役人選抜が実際のところ省益主導で、後天的定住集団社会Ａのメンバーの民意を何も反映しないのが、かなりの問題である。
役人がそのままでは独善的になってしまう。
民意を反映して選考される役人による支配、あるいは民意をその都度反映させながら役人が支配する社会が後天的定住集団社会Ａのメンバー向けには一番良いのではないか。
人々の意思を反映できて民主主義的でもあるし。
議員選挙とオープンな議論だけが民主主義ではない。
男性優位な民主主義と女性優位な民主主義があるはず。
人間はどっちにしろ上位者による下位者支配からは逃れられない。
社会的に上位者と下位者が適宜入れ替え可能になっていれば良い。
男性優位なオープン議場の議会制民主主義以外の他の可能性を考えるべきということ。
女性優位な後天的定住集団社会Ａは政党間の対立とかが無い大政翼賛的なのが向いている。
女性優位な後天的定住集団社会Ａでは、政治家や政党が性格的に女性優位になってしまい、政治家同士、政党同士の対立、論争はどうしても感情的な言い合い、いがみ合いと、見栄の絡んだ重箱の隅つつきのマウントの取り合いになってしまい、うまく機能しない。
女性優位な社会で、政府が政策を上手く推進するには、政策決定に関わる人間同士の感情的対立回避のやり方が根本的に必要である。
役人を人工知能化するのでもよい。
役人の決定はどっちにしろクローズドであり、女性優位な後天的定住集団社会Ａとの適合性が高い。
社会での役人支配が徹底するフランスみたいなのが向いているかも。
後天的定住集団社会Ａでは、役人支配以外の選択肢には、クローズドな議場出の意思決定を前提とした政治家選定の道もあるかも。
ただし、政治的中立が好きな後天的定住集団社会Ａのメンバーにはやはり役人支配の方が向いているか。

今の後天的定住集団社会Ａでは、政治家の有能さを後天的定住集団社会Ａのメンバーは選択できない。
後天的定住集団社会Ａの政治家は世襲ばかりが目立つ。

今の後天的定住集団社会Ａでは、人気政策を訴えるタイプの政治家もいるが、能力の高さは未測定のままだ。
後天的定住集団社会Ａの役人は採用に当たって前例、しきたり暗記、理解能力しか測定していないが、何も測定していない後天的定住集団社会Ａの政治家よりはましなのではないか。
でもそれだけでは、前例が無い事態が発生すると上手く動けない。
政治家の無能力を排除できないこと、役人の能力発揮が前例ありきになっていることが、今の後天的定住集団社会Ａが新型コロナウイルス感染対応でダメになっている理由かもしれない。
後天的定住集団社会Ａでは、政府を動かす人の登用向けに、もっと他の政治的能力も測定できる仕組み、その能力がある人だけが登用される仕組みを作るべき。

（初出2020年5月）

女性優位社会同士の支配従属

女性優位社会による、他の女性優位社会の支配はいろいろある。
先天的定住集団社会Ｂに朝貢していた後天的定住集団社会Ａがそれである。
先天的定住集団社会Ｃ１、先天的定住集団社会Ｃによる儒教指導を受けた後天的定住集団社会Ａがそれである。
先天的定住集団社会Ｃ１、先天的定住集団社会Ｃを併合支配した後天的定住集団社会Ａがそれである。
もともと後天的定住集団社会Ａの支配下だった台湾という存在もある。
女性優位社会と女性優位社会同士の支配従属は、上位社会による下位社会への上から目線での一方通行の反論を許さない強権的、専制的な支配になりやすい。
後天的定住集団社会Ａは先天的定住集団社会Ｃ１、先天的定住集団社会Ｃ支配において先天的定住集団社会Ｃ１、先天的定住集団社会Ｃの全面的な抑え込みに失敗した。
先天的定住集団社会Ｃのメンバー、先天的定住集団社会Ｃ人の後天的定住集団社会Ａによる支配に対する大きな感情的反発を招いたということ。
太平洋戦争の終結後、先進的移動生活中心社会Ｇは後天的定住集団社会Ａの全面的な抑え込みに成功した。
それは、後天的定住集団社会Ａに女性優位遅滞地域を脱して、男性

優位先進地域へ加入しようとする思想国策を続けていて、先進的移動生活中心社会Ｇ支配を先進国による支配と捉えて受け入れやすい素地があったから。
先天的定住集団社会Ｃ１、先天的定住集団社会Ｃはもともと後天的定住集団社会Ａのことを感情的に見下していた。
女性優位社会同士の支配従属関係の全面的で急速な逆転、入れ替えは、マウントによる優越、劣等関係の急激な逆転とか、妬みとか恨みとか感情的な反発を生んで上手く行かない感じ。
女性優位社会同士の支配でも、先天的定住集団社会Ｂへの後天的定住集団社会Ａの朝貢従属は、長期的で安定していた。
あるいは、後天的定住集団社会Ａと台湾の上下関係逆転は緩やかで、そんなに目立っていない。

（初出2020年5月）

女性優位社会、男性優位社会と教科書信仰

女性優位で、自らの保身のために、主張内容の上位者による保証を求める後天的定住集団社会Ａのメンバーは、誰かが、スーパー上位者か後天的定住集団社会Ａの上位者が書いた、あるいは承認した教科書や論文の内容から外れた内容を主張すると、主張内容に上位者のお墨付きが無い、只の自分勝手な独自研究として完全に無視する。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは自分たちのことを家父長制社会だと考えているのなら、男性優位に理論面での独自チャレンジするところをもっと見せるべきだが、リスク回避を基本とする女性優位な性格のため、おおむね不可能である。

後天的定住集団社会Ａのメンバーが、後天的定住集団社会Ａのメンバーノーベル賞受賞者を激賞するのは、受賞者が、上位者の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策に基づく、後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国の一員であることを世界に改めて印象付ける国威発揚に貢献したことを褒めたたえているのであって、今までになかったチャレンジングな独創研究を遂行したことは評価していない。
後天的定住集団社会Ａのメンバーが研究の独創性を評価するのは、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国が独創性を評価するので、それを権威主義的に崇めて表面的に合わせている

だけに過ぎない。
後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって、独創研究のような個人の思い付きや試行錯誤に基づく自分勝手な独自行動は基本的に悪であり、社会的には排撃対象であるから。
また、後天的定住集団社会Ａでは、チャレンジ実行者も危ない変なことをわざわざやる、社会的外れ者扱いになってしまう。
あるいは、後天的定住集団社会Ａでは、独創研究は、女性優位な後天的定住集団社会Ａのメンバーが重んじる、既存の古くからの伝統的前例、しきたりや社会秩序を脅かす危険な成果や新知見をもたらす可能性があり、その点で、女性優位な後天的定住集団社会Ａでは、本質的に忌避されるのである。
後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの新知見を取り入れるのも、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが世界的に勢力を持った権威あるスーパー上位者となっているからで、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが衰退してその地位から転落すると、後天的定住集団社会Ａは、本来の女性優位な体質に忠実に従って、古い前例、しきたり偏重の状態に移行する可能性も高い。
後天的定住集団社会Ａは、せっかく成果を上げたノーベル賞受賞者をその研究から強引に外して、名誉ある広報係みたいのを勝手に押し付けたりしてしまう。
後天的定住集団社会Ａのメンバーのノーベル賞受賞者は、後天的定住集団社会Ａで粗悪な扱いを受けて後天的定住集団社会Ａに良い印象を持っていないことが多く、後天的定住集団社会Ａを批判する人も多い。

後天的定住集団社会Ａや先天的定住集団社会ＢＣのような女性優位社会の人々は、結局、自分自身の保身が一番大事なので、ひたすら事なかれ主義の道を進み、リスクは自分からは決して取らず、新しいことへの未知の危険に満ちたチャレンジも極力避けて、その通りに動けば自身の身の安全が確実に保証される前例、しきたりの世界でひたすら生きようとする。
あるいは、自分の保身のため、その時々の自分の身の安全を保証してくれて、なおかつ人格的に尊敬できそうな権威ある社会的上位者に積極的に忖度して、慕い、懐き、ひたすらその上位者の言う通りに動こうとするということ。
そして、そうした古くからひたすら伝統の形で蓄積されてきた前例、しきたり、あるいは権威ある上位者の言葉を、ひたすら学習、暗記しやすくまとめた文書が、すなわち女性優位社会の人々にとっての教科書なのである。
女性優位社会の人々は、伝統ある権威ある上位者のお墨付きののあ

る前例、しきたりをそのまま慣行性を持って変えずにひたすら守り続けるのである。
女性優位社会では、以前から続いてきた前例、しきたりがひたすら生き続ける感じになる。

一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのような男性優位社会の人々は、捨て身で積極的にリスクを負って、新たな未知の世界にひたすらチャレンジを試みる。
そうすることで、一挙に大きな新しい権益を一番先に独占できたり、既存の秩序を破壊して、自分自身のオリジナルな新秩序を世界全体に向かって一発で構築できて、新たに大きな世界支配力、影響力を得られたりして、失敗して転落するリスクも大きいが、成功によって得られるメリットがとても大きくてっ魅力的だと男性優位社会の人々は感じる訳である。
要するに、何も無いところから、チャレンジ行為によって新たな成功を得て、それが今まで世界を支配してきた古い前例、しきたりを破壊、無効化して、その代わりの新たな有効な前例として、世界全体にその名声と支配力をとどろかせて君臨するようになるわけである。
古い前例の書き換え、新たな前例の創出は、男性優位な社会の人々の独壇場になりやすい。
新しい知見の創出とそれに伴う社会の近代化は、捨て身で失敗覚悟でチャレンジをたくさん実行する男性優位社会が先行する。
その都度、危険を伴うチャレンジの積み重ねの最中にたまたま得られた成功によって新たに書き換えらたり、追加された前例を集めた文書が、男性優位社会の人々にとっての教科書である。
男性優位社会の人々の教科書の内容は常に新たな知見獲得による書き換え前提の絶えず暫定的なノウハウの集成体なのである。

自分たちの古い伝統的な前例、しきたりの順守を絶対視してきたひたすら尊大な女性優位社会の人々は、男性優位社会の人々のことを、自分たちの伝統ある権威ある世界の周辺部に現れる只の野蛮で粗暴な人々と見てひたすら馬鹿にしたり、見下したりするのだけれど、男性優位社会の人々の生み出す近代化された新知見や、今までの古い前例の有効性を一気に無効化する新しい次の前例を生み出す力に圧倒されて、最初は面倒臭そうに渋々と重い腰を上げながら、男性優位社会から受ける、あなたたち女性優位社会の世界を自分たち男性優位社会が支配するという圧力や実力行使に負けて、自分たちの古い前例、しきたりをすっかり無効になったと考えて打ち捨てて、必死になって男性優位社会の人々の書いた近代的な新知見に溢

れた教科書の内容をひたすら物まね、学習、暗記、導入しまくる行動に出ることになる。
なので、その間、女性優位社会の人々の教科書の内容は、男性優位社会の人々の教科書に書かれた新知見のデッドコピーみたいな感じの内容でひたすら埋め尽くされることになり、女性優位社会は、知見面で、男性優位社会の植民地状態になる。

また、女性優位社会にとって、そうした近代的な新知見をもたらす男性優位社会そのものが、自分の身の安全を新たにアップグレードする形で保証してくれる今までにない新たな権威ある存在として魅力的に映るようになり、そうした男性優位社会のことを、旧来の自分たちの社会の上位者よりも更に上に立つ新たなスーパー上位者、先生扱いして、ひたすらペコペコ忖度してその意向に従いまくる後天的定住集団社会Ａのような女性優位社会も出て来るのである。

あるいは、前例、しきたり偏重のため、自分からは自分たちの社会を根本的に変革するアイデアを構造的に出せない女性優位社会は、男性優位社会が生み出す、社会変革のアイデアに関する新知見にこぞって飛びつく。
女性優位な先天的定住集団社会Ｂ、定住生活中心社会Ｅによる、男性優位ユダヤ的共産主義の社会革命導入とか、その典型であるということ。
しかし、それによって社会体制の変革が表面的に行われても、女性優位社会の人々の考え自体は、引き続き保身重視の、チャレンジを根本的に嫌う、前例、しきたり偏重のままなので、女性優位社会の本質である自己革新性の欠如、後進性、前近代的性格はそのまま持続する。
中には、男性優位社会の社会規範そのものをひたすら丸呑みして学習、導入し続けようとする女性優位社会も現れ、その典型的な事例が明治時代以降現代に至るまでの後天的定住集団社会Ａである。
今のところ、女性優位な後天的定住集団社会Ａの現状を見る限りでは、先進的移動生活中心社会Ｇ主導の後天的定住集団社会Ａの国家憲法導入に見られるような、女性優位社会による男性優位社会の社会規範の丸呑み導入試行は、自分の保身のことしか頭にない、自分自身は決してチャレンジしない女性優位社会の人々には、男性優位社会の社会規範の基盤に存在する、個人の自由独立とチャレンジ指向の男性優位精神の理解、体得が本質的に不可能なため、見かけだけの導入に終わり、実質的な効果はほとんど無く、昔ながらの女性優位な体質はそのまま変わらずに保持される感じである。

しばらくの間、男性優位社会の教科書の内容のデッドコピーにひたすら明け暮れていた女性優位社会は、それに慣れて、だんだん精神的、経済的に余裕が出てくると　今度は男性優位社会のもたらす新知見の内容を、互いに組み合わせて、器用な手先を使ったミクロな微調整や小改良、高品質化による、女性優位社会独特の、完成度や洗練度の格段に高い新知見の創出をどんどん進めるようになる。
これは、新知見を生み出すマクロで大胆なリスク対応力、チャレンジ力こそあるものの、基本的に粗暴で粗野で、ミクロな微調整が本質的に苦手な男性優位社会には不可能なことである。
女性優位社会がこうした高い完成度、高品質の新知見をこぞって出すようになると、今まで世界社会において大きな支配力、影響力を誇ってきた男性優位社会は、そのままでは低品質で完成度に劣る知見しか出せないため、出てくる知見の競争力の点で大きく負けてしまい、一転して一挙に劣勢に立たされることになる。
男性優位社会が、そのまま有効なマクロな革新的新知見をなかなか出せない状態が続くか、仮に何とかマクロな革新的知見を出しても、その内容を女性優位社会にすぐに検知され、物まねをされて、ミクロな改良版の新たな知見を出されてしまうことが続くと、男性優位社会は、女性優位社会に太刀打ちできず、沈んでしまう。
男性優位社会の天下は一時的なもので、細やかな神経な行き届いている、高品質で完成度は高いが、革新性に乏しく停滞した感じの新知見しか生み出せない、権威主義の女性優位社会が世界を支配する時代、女性優位社会の教科書が世界のスタンダードになる時代になるのである。
男性優位社会を先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ、女性優位社会を先天的定住集団社会ＢＣと考えれば、今の世界情勢に適合しているということ。

こうした点では、世界の歴史の移り変わりや、世界の様々な人間社会同士の勢力争いの情勢は、チャレンジが得意でマクロな大胆な新機軸の新知見を生み出して世界をリードしようとする男性優位社会と、チャレンジが本質的に嫌いで革新的で近代的な新知見を生み出す能力には根本的に欠けているが、男性優位社会の出す新知見を効率よくどんどん物まねして、それに対してミクロで器用な微調整と小改良をどんどん加えて、より完成度、洗練度、品質の高い、競争力に優れた新知見を怒涛の勢いで出力しまくって、粗暴で完成度の低い知見しか出せない男性優位社会の立場を劣勢へと一気に追い詰めて、代わりに新たに世界の覇権を握ろうとする女性優位社会とのデッドヒートの繰り返しになっていると言える。

一方、男性優位社会は、自らのチャレンジで生み出した新知見を女性優位社会に渡さないようにすることで、自分たちが保持する知見面での優位性を保ち、自分からは革新的な新知見をなかなか生み出せない構造的な欠陥を抱える女性社会の興隆を阻むことが可能である。
しかし、そのことで世界社会は、男性優位社会の持つ低品質で粗雑な知見しか出せない欠陥に苦しめられ、女性優位社会の高品質で完成度の高い知見の創出にひたすら期待することになるので、結局、男性優位社会は女性優位社会に新知見を渡さざるを得なくなると言える。
こうした点で、世界社会の人々が自分たちの生活に完全に満足する知見を獲得し続けるには、男性優位社会と女性優位社会の両方が必要であり、男性優位社会と女性優位社会の相補性、世界的な役割分業が必要となる。

こうした分析は、男女の社会的性差の存在を前提として初めて可能になるのである。
その点、現在世界的に制限の動きが著しい男女の社会的性差研究の自由が、世界的に認められるべきである。

（初出2020年5月）

後天的定住集団社会Ａにおける言論の自由

明治時代以来、現代に至るまで、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策支持で後天的定住集団社会Ａ全体が全体主義状態、言論統制状態にある。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは左派も右派も政治的中立指向派も、表向きすべて女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策を支持しており、目立った反対者が見られない。

今の後天的定住集団社会Ａのメンバーは先天的定住集団社会Ｂの世界的な台頭で、先天的定住集団社会Ｂの存在や世界支配を恐れて、対米一辺倒になっている。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会Ｇに対抗する先天的定住集団社会Ｂをひたすら敵視するようになっている。

女性が、自分が慕う上位者の恩師の説をひたすら支持して、恩師のライバルの説をけなしまくるのと思考が同一である。
後天的定住集団社会Ａは女性優位と主張することで後天的定住集団社会Ａと先天的定住集団社会Ｂの同質性を主張すると、後天的定住集団社会Ａと先進的移動生活中心社会Ｇの同盟性、同一化、あるいは後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国の一員であることを熱狂的に支持する後天的定住集団社会Ａのメンバーから完全無視を食らってしまい、実質的に後天的定住集団社会Ａの国家の内部で言論の自由が無い。

後天的定住集団社会Ａでは、表向き、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的言論が、言論の全てになっている。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的言論にひたすら賛意を示して後天的定住集団社会Ａへの積極的導入を狂ったように主張する。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａでは先進的移動生活中心社会Ｇ流の後天的定住集団社会Ａの国家憲法で言論の自由が保障されていると盛んに主張する。
一方、先天的定住集団社会Ｂへの言論は、先天的定住集団社会Ｂは独裁的だ、言論の自由が無い、プライバシーが無いといった否定的なものがほとんどである。
後天的定住集団社会Ａの伝統社会が先天的定住集団社会Ｃ２みたいに言論の自由が無いことを指摘する人もいるが、彼らは、言論の自由がある先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化を後天的定住集団社会Ａに徹底させよう、あるいは後天的定住集団社会Ａ全体の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的近代化の徹底を後天的定住集団社会Ａに対して行うべきと主張することになっていて、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの熱狂的支持をしていることには変わりない。

後天的定住集団社会Ａのことを女性優位と主張することは、後天的定住集団社会Ａと先天的定住集団社会Ｂの社会的同質性、親近性を強く主張することになり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ一辺倒で先天的定住集団社会Ｂを強く敵視する後天的定住集団社会Ａのメンバーには、感情的に許容しがたいものになってしまっている。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、ひたすら後天的定住集団社会Ａは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ同様、あるいは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨより強度の家父長制の男社会であり、女性は弱く差別されているという主張を、左派も右派も盲目的にひたすら繰り返す。

右派は家父長制を肯定、支持し、左派は男女平等、性差別反対を主張するが、左派も右派も思考が先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ一辺倒になっていて、後天的定住集団社会Ａは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の家父長制社会だと考えているという点ではどちらも共通である。
後天的定住集団社会Ａは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の家父長制の男社会であるとする以外の言論が、後天的定住集団社会Ａでは実質認められていない。
後天的定住集団社会Ａを女性優位と主張しても、ひたすら無視されるだけである。
後天的定住集団社会Ａの女性優位性を肯定する主張、あるいは女性の強さと男性の弱さを示す主張は、せいぜい後天的定住集団社会Ａのことが嫌いで後天的定住集団社会Ａから出ていきたい、あるいはもう出て行ったという後天的定住集団社会Ａ否定派の後天的定住集団社会Ａのメンバーたちしか支持しない。
後天的定住集団社会Ａの左派も右派も、後天的定住集団社会Ａを先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ並みに家父長制化しようとするか、後天的定住集団社会Ａは既に家父長制だという主張を肯定しようとする女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策は共通に熱烈に支持している。
この点では後天的定住集団社会Ａのメンバーは、上位者の政策への支持一辺倒になっている。

後天的定住集団社会Ａにおける先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流議会制民主主義への支持も同様である。
後天的定住集団社会Ａのメンバーはこれをひたすら肯定しまくる。
後天的定住集団社会Ａのメンバーの政治家が密室政治を行っていることが報道されると、それはダメで、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的にオープンな議論をしなくてはならなくてはならないという、後天的定住集団社会Ａの慣行を先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化することを促進すべきという主張が後天的定住集団社会Ａのメンバーからはひたすら返ってくる。
後天的定住集団社会Ａのメンバーの政治家も、密室談義を公然と支持すること、支持の明言は避けて、口頭では先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流議会制民主主義を支持する言動を取る。
後天的定住集団社会Ａが実質女性優位で動いていることを公言することは後天的定住集団社会Ａではひたすら避けられている。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、スーパー上位者と上位者の政策を熱烈支持歓迎し、それ以外の態度を取ることを認めない。

後天的定住集団社会Ａでは、後天的定住集団社会Ａと同じ女性優位社会の先天的定住集団社会Ｂによる後天的定住集団社会Ａとの同盟化の待望の主張とかダメである。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、その点では、指導者のキム氏一族をひたすら熱烈支持歓迎する先天的定住集団社会Ｃ２と精神構造が変わらない。
どちらも上位者（上位者としての存在）に必死で同調、一体化し媚を売りまくる権威主義的な女性優位という点では共通である。
後天的定住集団社会Ａは女性優位であるがゆえに、スーパー上位者や上位者が推進する後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化を盲目的、熱狂的にひたすら支持、忖度して、それ以外の言論が存在せず、そうした言論に水を差す異論を封殺しているのである。
後天的定住集団社会Ａは以前から女性優位なままで今なお変わっていないし、いくら先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化を試行し続けても女性優位なまま変われないだろうとする主張も、今の後天的定住集団社会Ａの国家の内部では単なる異論扱いである。

後天的定住集団社会Ａでは、表立っては、「言論の自由を支持する」言論の自由しか認められていない。
そして、皮肉なことに、後天的定住集団社会Ａの表向きでない、実質的な女性優位な社会規範においては、上位者への自由な言論の自由、反論の自由は存在しない。
ある意味、後天的定住集団社会Ａの社会規範が、上位者への自由な言論の自由、反論の自由が存在しない女性優位な社会規範だからこそ、後天的定住集団社会Ａのメンバーは、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨという上位者に忖度して、言論の自由をひたすら主張するしかないとも言える。

（初出2020年5月）

後天的定住集団社会Ａ至上論について

後天的定住集団社会Ａの右派では、後天的定住集団社会Ａの上位者のみにひたすら忖度する国粋右派もそれなりに多くの勢力を占めている。
後天的定住集団社会Ａの国粋右派は、伝統的な後天的定住集団社会

の固有の宗教や企業定住集団信仰施設を信仰し、後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨによる後天的定住集団社会Ａの上位者への支配とそれに基づく先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの文化の後天的定住集団社会Ａへの強制に表面的には妥協して従いつつも、内心では拒否し、反対し続け、後天的定住集団社会Ａ伝統社会の社会規範や価値観の重要性をひたすら主張する。
後天的定住集団社会Ａの国粋右派は、後天的定住集団社会Ａの上位者の内側での最上位者としての国家の所有者による社会支配制度を心の底から肯定し、後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーを国家の所有者の臣民認定して、後天的定住集団社会Ａのメンバーを上位者と下々に分類し、下々の上位者への心理的一体化を伴う一方的恭順を推奨する。
後天的定住集団社会Ａの国粋右派は、上位者の国家の所有者とその直系の家来である役人による後天的定住集団社会Ａの他家による混じり気の無い純粋的な独裁的支配を指向し、政党政治を否定する。
あるいは、後天的定住集団社会Ａの国粋右派は、後天的定住集団社会Ａ文化が他国文化の混じり気の無い純粋的な文化になることを指向する。
後天的定住集団社会Ａの国粋右派は、後天的定住集団社会Ａの創造神や古代の指導者、支配者が女性であったことを肯定する。
そういう点では、後天的定住集団社会Ａの国粋右派は、後天的定住集団社会Ａの伝統的な女性優位性とその維持を主張、肯定していると言える。
ただし、彼らが後天的定住集団社会Ａの国家の所有者が男性であることをひたすら重視、強調し、後天的定住集団社会Ａの国家の所有者は後天的定住集団社会Ａの国家の家父長であり、後天的定住集団社会Ａの臣民はその赤子だという考えで動いている面もあり、その点では、スーパー上位者の家父長制社会の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの考えと折衷であるとも言える。
後天的定住集団社会Ａの国粋右派は、その主張が昔ながらの国学派や尊王攘夷論の延長線上にあり、視野が後天的定住集団社会Ａの国家の内部限定になってしまい、後天的定住集団社会Ａが世界の中で最高の社会だと自画自賛する後天的定住集団社会Ａ至上論、世界の中での後天的定住集団社会Ａの独自性、すなわち後天的定住集団社会Ａは外国、海外とは違う唯一的な存在なのだとひたすら主張して、外国、海外に対して心を閉ざして、後天的定住集団社会Ａの国家の内部の心理的一致結束を訴える、閉鎖的、排外的な後天的定住集団社会Ａ完全独自論、後天的定住集団社会Ａ文化の後天的定住集団社会Ａの国家の内部完結論、後天的定住集団社会Ａの文化的自給

自足の主張になってしまっている。
そのため、後天的定住集団社会Ａの国粋右派は、世界社会を見渡して、世界の中には後天的定住集団社会Ａと同質、類似の農耕民タイプの女性優位社会がいっぱい存在し、その中の一類型として後天的定住集団社会Ａを位置づける広い視野を持つことができないでいる。
後天的定住集団社会Ａの国粋右派は、先天的定住集団社会ＢＣのことも後天的定住集団社会Ａとは異質でかけ離れた社会とひたすら主張して、同じ女性優位として互いに似ていること、同質であることを認めない。

かつて大東亜共栄圏を目指していた後天的定住集団社会Ａのメンバーには、後天的定住集団社会Ａは、定住生活中心社会群ＡＢＣや定住生活中心社会群Ｄ社会とある程度同質だとする考え方があり、それゆえ後天的定住集団社会Ａは定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄを同じ仲間として考えつつ、その中でリーダーの地位を獲得しようとしたのである。
彼らは、ある意味、後天的定住集団社会Ａが今まで支配者だった中華の代替になることを試みたわけである。
そうした点では、後天的定住集団社会Ａのメンバーの意識の根底には、後天的定住集団社会Ａは、定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄと同質だという意識、後天的定住集団社会Ａは先天的定住集団社会Ｂに代わって定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄで主導的地位、上位者としての地位を築くべきだ、後天的定住集団社会Ａの伝統的社会規範を定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄに流布、強制、定着させるのが理想だという意識が潜在的に生き続けているとも言える。
後天的定住集団社会Ａのメンバーが定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄに対して上位者気取りで上から目線で偉そうに振る舞うのはこれと関係がある。
後天的定住集団社会Ａは世界の中で最高であり、後天的定住集団社会Ａの社会規範を周囲の他国に広げて一種の理想郷を作って後天的定住集団社会Ａがその中の中心的存在となるべきだと後天的定住集団社会Ａ至上論という点では、国粋右派と共通である。
また、彼らが後天的定住集団社会Ａによる支配を先天的定住集団社会Ｂによる支配の代替と考えていたとすれば、後天的定住集団社会Ａと先天的定住集団社会Ｂの社会や文化の共通性についての認識がある。
大東亜共栄圏構想の実現遂行に当たって、定住生活中心社会群ＡＢＣ、定住生活中心社会群Ｄと後天的定住集団社会Ａとの社会文化的

共通性の認識がある程度存在していたのではないだろうか。
ただし、そこに自分たちは同じ女性優位だという認識があったかどうかは、また別問題であるが、その可能性は感じられる。
ただし、大東亜共栄圏構想を実現する国策が、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策と同時並行だったのであれば、後天的定住集団社会Ａは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ同様の家父長制だという認識、前提で動いていたのかもしれない。

後天的定住集団社会Ａ至上論は、自分のことが一番きれいで素敵で可愛い、大切で最高の存在だと考えて、ひたすらうぬぼれる女性優位な思考の延長線上にある。
後天的定住集団社会Ａのメンバーが他の国の人からひたすらちやほやされるのを望み、褒められると有頂天になりやすいのは、後天的定住集団社会Ａのメンバーが女性優位な自己愛感覚の満足への欲求を強く持っていることと関係がある。
後天的定住集団社会Ａ至上論は、女性優位な自己愛思考の極致であり、女性優位な先天的定住集団社会Ｂにおける自分が世界の中心なのだ、周囲の世界は先天的定住集団社会Ｂに対してひたすらひざまずくべきだと尊大にうぬぼれまくって考える中華思想と似ている。
後天的定住集団社会Ａでは京都の人に、京都が今なお後天的定住集団社会Ａの精神的中心で後天的定住集団社会Ａで最高、至上の存在であり、東京とかはしょせん下々に過ぎないとする、先天的定住集団社会Ｂの中華思想と似た小中華思想みたいなのが、今なお強く存在する。
そういう点では、後天的定住集団社会Ａ至上論は先天的定住集団社会Ｂの中華思想と同類の典型的な女性優位思考であり、後天的定住集団社会Ａが女性優位であること、同じく女性優位な先天的定住集団社会Ｂとかと基本的な考えや基本的社会規範が似ていることの証拠でもある。
こうした自分最高という考えはユダヤ人の自分たちは天の父なる神から選ばれた特別な存在だとする選民思想とかと一見似ている。
しかし、ユダヤ人は天の全能の父なる神を信仰する男性優位な遊牧民社会の人々である点が、農耕民で女性優位な後天的定住集団社会Ａや先天的定住集団社会Ｂと根本的に異なる点である。
人間社会では、男性優位社会も女性優位社会も自分たちは最高だとうぬぼれる性質が共通にある。
同じ自分のことを最高視するうぬぼれの意識を持つと言っても、男性優位社会と女性優位社会とでは様相が異なる。
男性優位社会は自分たちは何でもチャレンジ、実現できる最高に有

能で、出来ないことは何も無い世界で一番強い存在で、周囲は一番有能な自分たちの言うことをひたすら採用すべきであり、それに対する反論の自由は許すが、容赦なく攻撃打破するとする全能感に酔いしれる。
人類をあらゆる生物の中で一番進化した最上位の存在だ、人類は自然環境を思うままにコントロールしていると位置づける考えもこの延長線上にある。
一方、女性優位社会は、世界がひたすら自分たちを中心に回り、自分たちが世界で一番大切で光り輝く高貴な素敵な存在で、世界はひたすら自分たちのもとにひざまずきひれ伏し奉仕する召使、下僕であるべきで反抗は一切許さないとする自己中心的な究極の自己愛の感覚にひたすら酔いしれやすい。
この違いを見ておくことが世界の社会の文化の違いを認識、分類する点で重要である。
男性優位社会の上位者と女性優位社会の上位者がそれぞれどううぬぼれやすいか、それぞれ自分たちが支配する下位者のことをどう見がちかを考える上でも重要である。

（初出2020年5月）

後天的定住集団社会Ａにおける社会的地位の性差比較の限界

ある社会での社会的地位は何によって測られるべきか？
これについては、社会に存在する各種集団において他人を使役する役職に就いていること、集団を統率する代表者になっていることが社会的地位の高さであるとする考え方がある。

あるいは、社会的に影響力が強いこと、社会のみんなが自分たちの価値観や社会規範に従い、言うことを聞くようになっていること、社会的な支配力、影響力の強さが社会的地位の高さであるとする考え方も成り立つ。

あるいは、社会で生産活動を行う上で必須となる生産設備、あるいはそれらを容易に入手する資金、富をたくさん所有する資産家族定住集団であり、経済的に裕福であること、またそうした資産の管理、使用許認可権限を有していることが社会的地位の高佐であると

する考え方も成り立つ。

さらに、そうした社会的地位の高さを持続できていること自体も評価ポイントになる。

こうした測定、評価ポイントを後天的定住集団社会Ａに当てはめると、今の後天的定住集団社会Ａでは、集団、組織の役職者、代表者は男性が多い。
社会規範は女性が支配している。
資産管理は女性がやっていることが多い。

今の後天的定住集団社会Ａでは、社会的地位は、もっぱら集団組織の役職、代表者への就任によって測られている感じである。
それは、果たして正しいか？
同じ代表者でも、実権を持つ代表者と、お飾りの名目上の傀儡状態の代表者がある。
あるいは、対外的には代表者だが、集団内部では別の支配者の言うことをひたすら聞く存在になっている場合もある。

父系社会と父権社会が同一では無いのは、女性優位な父系社会では、男性は、対外的には、表に出向く一家の代表者だが、家庭内では、母や妻といった女性の言うことをひたすら聞く、女性の支配をひたすら受けている、精神が女性化した弱者だからである。

集団の役職者、代表者であることを社会的地位の高さとそのまま何も考えずに認識してしまうのは、女性優位な父系社会のことを考えると、不適切である。
あるいは後天的定住集団社会Ａの役所や企業で役職に就いている後天的定住集団社会Ａの男性たちの行動が軒並み女性優位で、実質母親の精神的支配下にあることを考えると、もっぱら役職だけをもって社会的地位を決めてしまうのは危険であると言える。

今の後天的定住集団社会Ａの社会規範を後天的定住集団社会Ａの女性が掌握しており、後天的定住集団社会Ａが女性優位になっていること、あるいは、家庭とかでの資産管理や資産使用の許認可を後天的定住集団社会Ａの女性がやっていることが多いことを考えると、後天的定住集団社会Ａにおける女性の社会的地位の強さも十分主張できるはずである。

今の後天的定住集団社会Ａのフェミニズム研究のような社会的性差

研究では、後天的定住集団社会Ａが家父長制であること、男性が社会的に強いことを見せるのに都合の良い指標のみを主張して、女性の強さを見せる指標を、都合が悪いとして意図的に隠ぺいしている。

もしも、上位者への忖度が起きていないのであれば、後天的定住集団社会Ａの女性が強いとする主張はその気になればいくらでもできるはずで、現状、後天的定住集団社会Ａの女性が弱いとする主張一色になっていて、後天的定住集団社会Ａの女性が強いとする主張がほとんど無いのは、明らかに不自然である。
上位者に忖度するための自主的な自己検閲とそれに伴う自主的な言論統制が事実上発生しているのではないか？
後天的定住集団社会Ａにおける父系社会と父権社会の混同の発生や、父系社会は家父長制だとする主張の発生も、後天的定住集団社会Ａの家父長制化を主導する上位者への忖度を目的として意図的に行われているのではないだろうか？
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策で後天的定住集団社会Ａの家父長制化を目指す上位者への忖度が、後天的定住集団社会Ａの研究者たちによって自主的に行われている。
研究者たちが女性優位だからだ。

上位者や上位者に気に入られるため、上位者や上位者の政策に研究結果を自然と合わせる、上位者や上位者の政策に都合の良い研究結果をひたすら社会的に提示しようとするのが女性優位社会の研究者の特徴である。

上位者や上位者の意向に反する内容の研究結果は、社会の現状を上手く説明する力がかなり強くても、却下して全て無かったことにしたり、あるいはそうした内容の研究の推進を自主的に抑制して、もっぱら上位者や上位者に受け入れられやすい研究をして、上位者や上位者に気に入られて自分の立場を有利にしようとするのが女性優位社会の研究者である。

（初出2020年5月）

後天的定住集団社会Ａの家庭生活と男女の勢力関係

後天的定住集団社会Ａの女性にとって後天的定住集団社会Ａの男性は、自分の子供を得るための一時的道具扱いになっている。
後天的定住集団社会Ａの女性にとって、自分の子供が生まれたら、子育ては女性専属のものとなり、後天的定住集団社会Ａの男性は基本的に不要となる。
この状態では、後天的定住集団社会Ａの男性は、後天的定住集団社会Ａの女性にとっては、経済的に収入をもたらす便利な道具、生活面での雑用をこなす便利屋、奉公人としてしか見られない格下の存在である。
これは、後天的定住集団社会Ａの家庭生活における男性差別である。

今の後天的定住集団社会Ａでは、後天的定住集団社会Ａの妻は、夫からの妻への心理的依存欲求、夫が妻を母親代わりにすることを冷酷に否定する。
妻にとっては、夫が妻を母親代わりにすることは、夫の姑への心理的依存が続いていることの証拠になる。
妻は夫が自分のことを姑の代理扱いするのが許せない。
妻は姑との縁を切りたい。
夫が妻に心理的に依存するのは、夫が姑側の人間であること、夫が妻を姑の延長線上の存在として捉えていることの証拠なのである。

また、このように妻が夫を子ども扱いして母親的に生活の世話を焼く女性優位な生き方は、妻の夫に対する精神的優位性の現れであり、女性優位の思想で本質的に女性にとって都合が良いのだが、今の後天的定住集団社会Ａでは否定の対象となっている。
妻が夫の生活の面倒を見る生き方が、女性が男性並みの社会的活躍をすることを主張する男性優位先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムの後天的定住集団社会Ａ導入の影響で、後天的定住集団社会Ａでは、社会的非難の対象となっている。
後天的定住集団社会Ａでは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムの影響で、性別分業が性差別的だとして敵視される。
性別分業否定の風潮と、夫婦の一方を終身専属奴隷の企業定住集団のメンバーとして差し出すことを要求する伝統的な後天的定住集団社会Ａの企業定住集団のあり方との不整合が生じている。

（初出2020年5月）

男性優位社会での言論統制と男性優位フェミニズムが後天的定住集団社会Ａにもたらす言論統制。

男性が世界で普遍的に強く、女性が世界で普遍的に弱い、女性差別が世界的標準であるとする考え方をスーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが取っている。
女性優位な後天的定住集団社会Ａはスーパー上位者の言うことに盲目的にひたすら従うしかないので言論の自由が存在しない。

男性優位社会の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでも、女性優位社会後天的定住集団社会Ａとは全く別の理由で、言論の自由が存在しない。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの社会的性差研究分野では、自由な仮説に基づく実証的な科学的アプローチの否定が起きている。
この分野では、自由思考の時代から、思考統制の時代へ移行している。
このことは、父性的思考に二側面が存在することを表している。
すなわち、一つは、思想の自由独立への指向、もう一つは、絶対者、あるいはその意を受けた宗教者の思想を信仰して精神の安定を確保することへの指向である。
男性優位社会では、この二つの指向が同時並行か、相互に入れ替わるようになっている。
男性は一人で独立して行動するのを好む分、基本的な個人行動の自由を確保しつつ、その間、絶対者の見守りや加護が絶えず欲しいと考える。
男性は、一人で独立して生きていきたいと強く願いつつも、もう一方では、一人で生きていくことが心理的にやはりどこか不安で困難で、自分を見守り加護し導いてくれる存在を心理的に絶えず必要とする点、人間としての男性の弱者性の現れが起きている。
男性が宗教信仰にのめり込みやすい理由がまさにこれである。
男性にとっては、自由を取るか宗教信仰を取るかの二者択一の必要性が絶えず生じる。
男性は、この二つの両立を基本的に図りつつ、どちらかをその時々に応じて優先させる。
現状では、男性優位社会の性差研究分野では、宗教信仰の時代が再び訪れている。
これは、従来のキリスト教信仰同様の父性的宗教的なアプローチ

で、信仰対象としての理論が宗教聖職者あるいは宗教的教祖みたいな感じの社会理論家族定住集団、社会運動家族定住集団によって意図的に人為的に形成され、宗教的信仰対象思想として社会に広く流布、伝道され、それを父の言いつけを守る形で信仰しないと異教徒扱い、異端者扱いされて、社会的に抹殺される。
この点、宗教的思想統制アプローチが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで強まっている。
これこそが父性的男性優位社会のもう一つの側面である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでは、自由な科学的アプローチ全盛の今も、それと同時並行で、父性的なキリスト教の敬虔な信者が多い。
これは、父性的思考の二面性を示している。
すなわち、自由思考の重視か、父性的思想統制の重視かであるということ。
同じく男性優位、父性的なユダヤ教のユダヤ人、イスラム教のアラブ人、イラン人、トルコ人も同様の傾向を持っている。
男性優位社会では、典型的な父性的な思想統制が起きている。
これは、言論の自由より優先される。
この状態では、父性的思考、宗教的思想統制の範囲内での言論の自由しか認められない。
これとは別に、男性優位社会では、男性優位社会規範を根本から脅かす女性優位な思考をする自由が認められない。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性には、女性優位な考え方を取ることが認められないし、思考が男性化されて女性優位な思考を受け付けなくなっている。
こういった男性優位先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの思想が、後天的定住集団社会Ａにスーパー上位者の思想として、批判者への上から目線の女性優位な思想警察が生じている。
後天的定住集団社会Ａの性差研究分野では、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのフェミニズムの、父性的宗教的な思想統制に基づく自由な科学的実証ベース思考の制限への指向と、自分たちの社会の家父長制を世界標準の社会規範として捉え、女性優位な思考の根源的な不許可と女性が男性並みの存在となることのひたすらの推進という男性優位社会の社会規範の、後天的定住集団社会Ａにおける上位者の意向への忖度、隷従必須という女性優位な社会規範に基づくスーパー上位者としての先進的移動生活中心社会群ＦＧＨからの思想の反論不可の一方的思想強制と思想警察の跋扈、そして、上位者の後天的定住集団社会Ａによる女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策と後天的定住集団社会Ａの家父長制化の一方的強制という四重の思想統制、言論統制状態に

陥っている。
後天的定住集団社会Ａを女性優位と指摘、主張する自由や、女性の男性に比較しての優位性の主張の自由が、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの国内の段階でも、上位者の後天的定住集団社会Ａの国家の内部の段階でも全く存在しない。
性差研究は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでも、後天的定住集団社会Ａでも、自由発想に基づく科学的アプローチに基づく研究が衰退しているか、原則不可能になっている。
世界のどこに行けば、こうした研究の自由が確保できるのか検討が必要である。
今のところは、後天的定住集団社会Ａに留まっている限りは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの自由科学的アプローチが性差研究分野で巻き返してくれるのを待つしかない。

現状では、父性的宗教の一種として、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムを位置づける必要がある。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムは、男性優位の社会規範が世界標準であるとする視点を持っている。
この視点に基づき、世界的性的弱者として女性を位置づけ、そうした弱者女性の保護と優遇のための下駄履かせをしきりに行っているということ。
彼らは、性差別反対、性差の存在の否定、性差の存在を肯定する方向での自由な性差研究の否定を行っている。
これらの宗教聖職者目線で人為的に創作された思想へと信仰対象として従うことを父性的アプローチで強制され、信仰しないと異端尋問されるのであるということ。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムでは、かつてのキリスト教による異端尋問と同じ思考パターンがそのまま再現されている。

（初出2020年5月）

女性優位社会後天的定住集団社会Ａと科学

後天的定住集団社会Ａの科学は、女性優位である。
後天的定住集団社会Ａの理科系大学院とか、伝統的な、師匠の持つ前例を弟子が絶対視して必死になって勉強、継承する師弟制と、古参者が新参者に対して無条件で上位者扱いされる先輩後輩制度の牙

城となっている。
女性優位な後天的定住集団社会Ａの科学は、スーパー上位者としての先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの研究スタイルや新知見に、ひたすら忖度、同調し、そうした研究スタイルや新知見を、ありがたき前例としてひたすら高く押し頂く女性優位な思考パターンでの研究が、後天的定住集団社会Ａの大学では行われている。
後天的定住集団社会Ａの大学で独創研究がもてはやされるのも、スーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが推奨する研究スタイルだからであって、独創研究は基本的に未知領域へのチャレンジを基本とする男性優位な研究スタイルなので、何事も前例踏襲を最優先する後天的定住集団社会Ａのような女性優位な研究スタイルとは、相反する面がある。
もっとも女性優位な後天的定住集団社会Ａでも、前例のその時々の社会情勢の動きに合った微調整や小改良がなされている訳であり、それは男性優位なマクロな大局的な独創とは一味違った、ミクロな細やかな独創と言える。
このミクロな独創は、男性優位な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは苦手とするところであり、女性優位な後天的定住集団社会Ａや先天的定住集団社会ＢＣとかが科学分野での競争力を発揮する強みとなっている。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで進められてきた科学では、研究対象を客体視する男性優位視点が必須である。
ところが女性優位な思考はこれを嫌い、研究対象との心理的一体化、愛情の対象としての包含みたいなのを、本質的に好む。
男性優位な科学思考は、女性優位な社会では本質的に理解されない。
今の後天的定住集団社会Ａにおける科学は、権威あるスーパー上位者の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに対する忖度と心理的な同調一体化の産物であり、男性優位な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが世界的に退潮すると、女性優位な後天的定住集団社会Ａでは科学研究は消滅する。

（初出2020年5月）

後天的定住集団社会Ａの少子化問題解消と、後天的定住集団社会Ａの役所や企業の学閥依

存体質との関連

後天的定住集団社会Ａの衰退の大きな要因になっている少子化問題の根本的原因は何か？その大きな原因の一つが、少子化に伴う大学全入化による学歴バブルの発生が引き起こしている教育費用の後天的定住集団社会Ａの国全体レベルでの凄まじい高騰と、その解消を根本的に阻害する後天的定住集団社会Ａの役所や企業の学閥依存体質の存在である。

後天的定住集団社会Ａでは、少子化の進行で、大学全入のような子供全員の横並びでの高学歴化、学歴のインフレが当たり前になってしまい、どの企業も、それを前提に、全ての応募者に対して、大学卒業のような高学歴を横並びで要求するようになってしまっている。そのため、各家庭で、子供の教育費用がやたらとかかる。そのため、各家庭における、子供を経済的に自立させるまでにかかる経済的負担が大きすぎる。そのため、各家庭は、子供をむやみに作れない。経済情勢の悪化で、各家庭の稼ぎが少なくなっていて、経済的にもう子供が作れない。

結局、後天的定住集団社会Ａでは、少子化が原因で、さらに少子化が進んでしまっている。そのことが企業で必要とされる学歴の更なるインフレを呼び起こすことになる。後天的定住集団社会Ａでは、まさに学歴のハイパーインフレ化が進行中である。

後天的定住集団社会Ａの大学の講義内容や研究指導内容は、実社会では役に立たない、教員の自己満足のための飾り物ばかりである。社会の人々は、みんな大学卒業の資格が欲しいだけで、実際のところ、大学の講義内容は、今の内容のままでは、一部の技術系を除くと、誰も必要としていない無駄な内容なのではないか。

後天的定住集団社会Ａの大学は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨなどの先進的研究成果の解析やその結果の暗記勉強による吸収と後天的定住集団社会Ａへの一方的な応用しかやろうとしない。そもそも、後天的定住集団社会Ａの大学は、伝統的師匠と弟子の関係の重視による研究上の学殖蓄積偏重と、師匠と弟子の間の心理的な相互同調や、弟子から師匠への忖度の傾向が強すぎて、自分ではチャレンジングな先進的な成果が、構造的にちっとも出せない。

その点、研究成果の吸収とその教育は、こうした後天的定住集団社会Ａの大学に頼るよりも、直接、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの大学から成果をネット経由で直輸入した方がコスト的に安上りで有利である。あるいは、後天的定住集団社会Ａよりも研究教育レベルが上位になった、先天的定住集団社会ＢＣの大学の成果の直輸入の方が、成果内容をさらに小改良してある分、より効果があるかもしれない。

こうした点で、後天的定住集団社会Ａでは、大学は、全般に社会的に役立たずで、あまり必要ない。後天的定住集団社会Ａの大学は、一部を除き、解体しても、研究教育内容の社会への役立ち度の点では、ほとんど実害が無い。この点では、抵抗するのは、既得権益者の大学関係者だけで、大学の高い授業料に苦しむ後天的定住集団社会Ａの人々は、逆に大喜びするだろう。

しかし、実は、こうした大学解体で大きな問題があるのは、大学の学閥の存在を前提で、その活用にやたらと執着する、後天的定住集団社会Ａの役所や企業側なのではないか？後天的定住集団社会Ａの役所や企業一般（つまりは、伝統的な「企業定住集団」）が、従業員の採用や、採用後の従業員の活用において、高校や大学における学閥、すなわち、伝統的な先輩後輩関係や、師弟関係の活用に対して、強迫的に依存し過ぎである。

と言うか、後天的定住集団社会Ａでは、役所や企業における就職応募者に対する人物の採用上の評価が、履歴書の書式もそうだけど、「ＸＸ年、ＸＸ大学ＸＸ学部卒業」を重視することが多く、「ＸＸ資格保持」はあまり重視されない。また、「ＸＸ大学卒業」が「ＸＸ学部卒業」よりも、着目上のウェイトが高い。あるいは、転職でも「ＸＸ年―ＸＸ年　ＸＸ企業定住集団に勤務」といった役所や企業への所属歴が切れ目なく続いていることを重視して、資格保持は二の次だ。後天的定住集団社会Ａの役所や企業は、自分のところへの就職応募者が、どこの大学出身者か、どこの学閥に属しているかと言うのを重視する。

以下は、話題を、大学の学閥に限定する。

大学の学閥の存在やその企業内部での活用は、後天的定住集団社会Ａの役所や企業の業績向上の面で、本当に役に立っているのか？あるいは、後天的定住集団社会Ａの役所や企業による、そうした学閥

への強迫的な心理的こだわりを生み出している、彼らが病的にこだわり続ける昔ながらの新卒一括採用の慣行は、企業業績の向上に、本当に役に立っているのか？実際のところ、効果がちっとも無いのではないか？

多くのより有能そうな生徒や学生たちが、みんな、学閥を重視しない先進的移動生活中心社会群ＦＧＨや先天的定住集団社会ＢＣ系統の外資系企業に対して、優先的に就職の応募をしようとしていて、そっちの方が企業業績がいいのでは？彼らは、自分の就職応募先から学閥重視の後天的定住集団社会Ａの中央省庁も避けるようになっているし。

後天的定住集団社会Ａの役所や企業は、従業員の全人生、全時間を拘束する、ひたすら苛酷な終身強制奴隷労働制を従業員に対して強制する、役所や企業への従業員の終身雇用、終身隷属の慣行をとっとと止めるべき。実は、この慣行こそが、後天的定住集団社会Ａの役所や企業が持つ学閥依存体質の根源なのではないだろうか？というのも、学閥のような入学による自動加入、所属メンバー内での心理的一体化や相互扶助の永続をひたすら目指す集団のあり方は、後天的定住集団社会Ａの役所や企業の持つ、自分たちの集団への所属メンバーの集団内定住状態の永続、すなわち従業員の集団内永住を目指す、従業員の終身雇用、終身隷属の考え方と、所属メンバー間の人間関係の永続を共に目指している点で、根本的に、とても相性がいいからだ。

（この終身雇用自体が、従業員となった女性の育児休業対応への困難さとそれに伴う女性従業員の雇い止め、あるいは、終身、役所や企業の集団内に入れてもらえない非正規雇用者という社会的流民の大量発生とそれに伴う経済的収入の大幅減少や不安定化という社会問題を生み出す元凶であり、後天的定住集団社会Ａにおける少子化問題発生の別の社会的悪玉になってしまっている、という問題もある。後天的定住集団社会Ａの人々が、高い教育費用を継続的に出せなくなっているのも、後天的定住集団社会Ａの役所や企業による非正規雇用化が進行しているからだ。）

後天的定住集団社会Ａの人々は、メンタル面での役所内定住、企業内定住が根本的に大好きなので、企業内部での苛酷な終身強制奴隷労働制もあっさり肯定してしまうんだよね。特に、後天的定住集団社会Ａの男性に対して、企業での長時間強制労働を生涯にわたって、ひたすらやらせることに、何の心理的痛みも感じずに、ひたす

ら彼らの稼ぎの多さや企業内での出世に固執し続ける後天的定住集団社会Ａの女性たち（男性の母や妻）が、この問題の本当の大きな根本的な悪玉的存在なのだが、後天的定住集団社会Ａの人々は誰も問題にしないね。

そもそも後天的定住集団社会Ａ伝統の稲作農耕のような一か所定住生活中心の社会集団の実質的支配者は、後天的定住集団社会Ａの政府の明治時代以来の女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想国策による後天的定住集団社会Ａへの家父長制導入以前の昔から、母や祖母、姑のような女性なのだし、そうした点で、所属集団内での永住を指向する後天的定住集団社会Ａの学閥は、実際のところ、女性優位体質で動いているのではないだろうか。後天的定住集団社会Ａの役所や企業の学閥依存は、そうした伝統的な母や祖母、姑たちの持つ女性優位社会心理が、その原点であり、後天的定住集団社会Ａの原点的に、消すのが非常に難しい厄介な代物なのかもしれない。

あるいは、後天的定住集団社会Ａの役所や企業の従業員採用の理想的モデルとなっている、後天的定住集団社会Ａの政府＝「上位者」の中央省庁の伝統的な従業員採用や活用のあり方が、そもそも後天的定住集団社会Ａの役所や企業の終身雇用や学閥依存の社会慣行という社会的悪玉の頂点に君臨しているのである。しかし、当の中央省庁で働く人々は、このことについて、何も問題意識を持ってい無さそうなのが、学歴バブルがもたらす後天的定住集団社会Ａの少子化の根本原因の解消にとって、実は致命的なのではないいか。

後天的定住集団社会Ａの中央省庁で働く人々も、東京大学などの大学の学閥の存在に完全に依存してしまっていて、大学の学閥の存在やその活用を前提で動くように、ずっとなってしまっているけど、彼らの東京大学などの学閥のこだわりは、彼らの業務上の実務的成果を向上させる上で、本当に役に立っているのか？逆に、従業員間の変な馴れ合いや、先輩後輩の上下関係に基づく不要な忖度を生み出し、実務的には、大きな障害になってしまっているのでは。実際のところ、学閥依存で動く、後天的定住集団社会Ａの中央省庁の業務や実務が、ちっとも上手く動いていないことが、彼らの新型コロナウィルスへの対応の凄まじい悪さで明るみに出てしまった。

学閥依存の従業員採用や活用を前提とする後天的定住集団社会Ａの役所や企業のあり方は、もう世界的に劣ったものになっているのではないか？学閥依存だと、どうしても学閥内の先輩後輩制に依存し

てしまい、それは結局は、その頂点にいる一番の古参者である老人による役所や企業支配を生み出し、役所や企業の意思決定の老化や、新しい科学技術の軽視による、役所や企業の実務能力の根本的低下につながってしまうからだ。後天的定住集団社会Ａの国全体の衰退もこの問題とつながっているはずだ。

後天的定住集団社会Ａの役所や企業は、実際のところ、従業員採用時の学閥依存をもう止めるべき。彼らは、従業員を国家資格の保持等の別の基準で採用すべき。従来の学閥依存体質の役所や企業は、もう業績的に全然上手く行っていないのだから、彼らの従業員の採用や活用は、学閥を前提としない、資格前提の運用とかへととっとと変えるべきだ。

以下は、後天的定住集団社会Ａの役所や企業による、こうした学閥依存体質の解消が一通り行われたことを前提とした話となる。

まず、後天的定住集団社会Ａの大学の関係者、すなわち大学の所有者、経営者や、働いている教員は、以下の内容に気付くべきだ。
（１）自分たちへの需要が、少子化に伴う学歴バブル発生による、単なる無意味なバブル景気状態にあり、社会の人々が欲しいのは、子供の学歴や学閥利用可能性そのもので、講義内容自体への需要は、実はちっとも存在しないこと、そのため、自分たちは、実際のところ、社会にちっとも貢献していないこと、以下の通りである。
（２）自分たちが、ひたすら高額な授業料の徴取によって、今の後天的定住集団社会Ａの人々の生活を無駄に苦しくしている最悪クラスの元凶、つまり社会的な少子化の根本原因の悪玉になっている、無駄に高コストな、社会的に有害な存在であるということ。
彼らは、大学経営、教育事業から撤退する準備をいち早く始めるべきだ。彼らの失職対策が社会的に必要で、後天的定住集団社会Ａの政府とか、今から用意すべき。

次に、後天的定住集団社会Ａの役所や企業は、無駄な高学歴の要求を、子供たちに対して行うのを止めるべき。彼らは、横並びでの要求学歴水準リセットの協定を、いち早く作るべきだ。

結局、現状の後天的定住集団社会Ａの学歴バブルを消失させるため、社会的に、経済的ハイパーインフレ時の預金封鎖のような学歴のレベル封鎖、あるいは、役所や企業が応募者に対して要求しようとする学歴レベルの横並びでのリセット、学歴徳政令が必要である。そのことで、無駄な高学歴の取得にかかる、無駄にひたすら高

額な教育費用を削減し、社会全体で、みんなが低費用で子供を経済的に自立させることを、再び可能とすべき。そうすれば、少子化の大きな要因の一つを消すことができる。やはり、人間は生き物なんだから、みんな、自分の遺伝的子孫は残したいものであるよね。

ここまで、話が進めばいいんだけど、難しいかもしれないということ。
（初出2020年5月）

母権社会としての後天的定住集団社会Ａ－支配者としての母、姑－

１．

後天的定住集団社会Ａは母権社会である　－行動様式のドライ・ウェットさの視点から－

〔１．
現代後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会で唱えられた女性解放論を、そのまま後天的定住集団社会Ａに直輸入して、男尊女卑など、女性が差別されているように見える現象に当てはめて考えようとしている。結果として、「後天的定住集団社会Ａは男性中心社会である」「後天的定住集団社会Ａの家族は家父長制である」といった解釈を行っている。女性の地位は、男性に比べて、全世界どこでも普遍的に低い（女性は、普遍的に男性より弱い。）ものであると見なし、声高に、「低い」女性の地位を向上させようとしているということ。
ところが、一方では、「後天的定住集団社会Ａは母性原理で動く社会である」「後天的定住集団社会Ａの国民性は女性優位である」といったように、後天的定住集団社会Ａの社会が持つ女性優位性格を示唆する言説も、かなりの数見られるのも事実である。（そのほとんどは、一言印象を述べただけのものであるが。）筆者は、以下

に、その例をいくつかあげる。
後天的定住集団社会Ａの女性優位性格については、以下の通りである。
例えば、〔芳賀綏1979〕では、後天的定住集団社会Ａのメンバー像のアウトラインを、「《おだやかで、キメこまかく、ウェットで、『女性的』で、内気な》ややスケールの小さい人間たちの集団」と述べているということ。
あるいは、〔会田雄次1979〕では、「後天的定住集団社会Ａの伝統的な特徴を一口でいえば昔から『女流』の国だったということに尽きよう．．．．いつの世にも広く文化一般に女性が活躍している．．．後天的定住集団社会Ａ文化はもとより社会そのものが、『女性的』性格を強く帯びており、男性優位な時代というのは、戦国時代と幕末から明治という外患と変革と動乱が重なった短い２期間しかなかった．．．．この本来的に「女々しい」が平和な国は、男性優位資質を帯びるのは外国から強い危機が感じられたときに限られる。その危機が克服されたり、去ってしまったりすると、またもとの女流の世界になる．．」、と述べているということ。
または、〔木村尚三郎1974〕では、「後天的定住集団社会Ａのメンバーの能力は一般に『女性的』能力であり、いわゆる「学校での頭の良さ」がある．．先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの学問、科学と技術、芸術をみごとに習得はするが、新しい境地をひらく、学者、思想家族定住集団、芸術家族定住集団となると、国際的にまことに数少ない．．．後天的定住集団社会Ａのメンバーの心的態度はおそらく秩序形成的、『女性的』、あるいは伝統的、農業的であるといえよう．．」と述べているということ。
〔佐々木孝次 1985〕では、「女性にとって後天的定住集団社会Ａほど気楽で居やすい社会というのは、他にないと思います。女性が精神的な意味で、すっかりこの社会を支配していますし、別に女性が支配しようと一所懸命になっているわけでなく、男のほうが、自分の幼児性を乗り越えられないで、どこにでもお母さんを作ってしまうからなのです。…男性が無差別に母親を求めるという状態からなんとか自分を解放しないと、一方で女性がウーマン・リブをとなえても、笑い話になってしまう。」と述べているということ。

〔Ben-Ami Shillony 2003〕では、後天的定住集団社会Ａの国家の所有者による社会支配制度が、女性優位性格を持っていると指摘しているということ。
後天的定住集団社会Ａを母性社会、母権社会と見なす考えについては、以下の通りである。
〔河合隼雄1976〕では、「母性原理は、「包含する」機能で示さ

れ、すべてのものを絶対的な平等性をもって包み込む。それは、母子一体というのが根本原理である。．．．後天的定住集団社会Ａは、『母性原理』を基礎に持った「永遠の少年」型社会といえる。」と述べているということ。
〔山下悦子 1988〕では、「家父長的「いえ」制度といわれるものが、・・・「いえ」の王たる家父長が超越的に君臨する先進的移動生活中心社会群Ｆ的な家父長制と違って、後天的定住集団社会Ａの場合は家父長たる息子の母親が実質的な力を持つ」と述べている。
〔山村賢明 1971〕では、後天的定住集団社会Ａの女性の地位について、「妻＝嫁と母＝主婦の間には同一にあつかえない差異があることがわかる。前者の地位においては、たしかに低かったかもしれないが、後者の地位においては決してそうではなかったのではなかろうか。かねて筆者は、後天的定住集団社会Ａの母はそうとうな高い地位とそれに伴う重要な役割をもっていたはずだ...」と述べている。
〔Kenrick 1991〕では、後天的定住集団社会Ａの妻が、家庭で家計管理の権限を握り、夫に対して小遣いを渡すさまを、母権制ではないかと指摘している。
〔Ederer 1991〕では、教育ママゴン等の実例を元に、後天的定住集団社会Ａにおいて家庭の中心にいるのは女性であり、後天的定住集団社会Ａの社会を母親の権力に基づいたものとして捉えている。後天的定住集団社会Ａの母親が教育者であり、夫と子供を業績と出世に駆り立てていると指摘している。
後天的定住集団社会Ａは、男性・女性、どちらのペースで動いているのであろうか？あるいは、後天的定住集団社会Ａにおいては、実質的には、男女どちらが勢力・地位として上なのであろうか？以下においては、この疑問について、対人感覚のドライ・ウェットさをキーとして、解明を試みている。
〔２．
この項では、行動様式のドライ・ウェットさと、性別・社会・自然環境のあり方との関係について述べる。
行動様式のドライ・ウェットさ（個人の取る行動が、周囲の人にドライ・ウェットな感覚を与えるのはどのような場合か、についての分類。）は、筆者の調査によれば、個人主義－集団主義、自由主義－規制主義．．．など、10数項目からなっているということ。これらの項目を全て合わせると、人間の様々な行動様式を、一通り説明するに足る、十分包括的・網羅的な内容を持っているということ。このことから、人間の多様な行動様式を、「ドライ」ないし「ウェット」の一言で総括するということ。（ひとまとめにして考えるということ。）そのことが、可能である。

筆者は今回、以下の通りである。
(1)対人感覚（人がその行動・振る舞いによって、他者に与える感覚。）
(2)自然環境の乾湿（ドライ・ウェット）に対応する社会のあり方（遊牧・農耕）のドライ・ウェットさ
(3)人間の性別（男女）と、取る行動のドライ・ウェットさの面からの性差
について、相互の関連性を検証したということ。
その結果、これら(1)～(3)の間の相関関係を取ると、

対人感覚	自然環境	社会のあり方	当てはまる性
ウェット	湿潤（ウェット）	農耕	女性
ドライ	乾燥（ドライ）	遊牧	男性

という関係が成り立つことを確認した。
調査した結果、行動様式のドライ・ウェットさの次元で、行動様式の男女性差に関する学説の大半をカバーできていることが分かった。
この中から、社会のあり方と、性別との関係を取り出して見ると、
農耕＝女性
遊牧＝男性
という結びつきが成り立つ。
この結びつきについては、以下の通りである。
(1)文化人類学の分野では、例えば、[石田英一郎1956][石田英一郎1967]において、以下の通りである。
竜蛇の形をとった水神が、農耕の神として崇められ、同時にまた原初の女神として人類の始祖となるというのが、大地母神の基本的性格である。植物の採取、ひいてはその栽培に人間の生活が依存するとき、そうした営みの担当者として女性の地位が中心的である。農耕的＝母権的な文化基盤を持つといえるということ。
馬をめぐるもろもろの文化要素は、内陸草原地帯に由来する、遊牧的、父権的、合理的、上天信仰的な文化の系統に属する。（以上、筆者による要約。）
といった説明がなされている。
石田の説明から判断すると、自然環境と宗教との関連は、以下の通りである。
遊牧＝ 天空の父なる神（男性神）＝ 天空を指向するということ。
農耕＝ 大地の女神（女性神）＝ 大地を指向するということ。
という関係が成り立ち、「農耕＝女性（＝ウェット）」、「遊牧＝男性（＝ドライ）」の、相互結合を支持する結果が出ている。
石田は、農耕＝母権的、遊牧＝父権的という図式も、同時に提示し

ている。これは、いいかえれば、農耕社会では、女性（母親）が支配し、遊牧社会では、男性（父親）が支配する、ということになる。
(2)地理学の分野では、例えば、[千葉徳爾 1978]で、以下の通りである。
「農耕は、定着して、作物成熟の遅々とした進行を待つ。緻密で倦むことのない繰り返しを必要とするが、女性は、体質・体格ともに男性よりはるかに適している。女性が農耕を主宰することで、作物により高い生産力を期待できる。農耕社会は、女性優位である。農耕のもととなる採集文化は、女から進化した。
「牧畜社会では、軍事行動の必要と、家畜管理上の要求から、体力的に優位にある男子青壮年が重視され、老人と女性・子供の地位が低い。家庭では夫の権力は妻より高い。」（以上、筆者による要約）
といった説明がなされている。
これらの関係が本当に成り立っているかどうかを、性格・態度のドライ・ウェットさを調べるアンケート調査（1999.5～7）で確認したところ、以下のように、予想通り当たっていることが分かった。詳しくは、著者の湿度感覚と気体、液体に関する著作を参照されたい。

番号	項目内容（仮説＝ドライ）	-ドライ-	どちらで もない。	-ドライ-	項目内容（仮説＝ウェット）	-Ｚ得点-	有意
C12	男性優位であるということ。	46.154	24.434	29.412	考え方が女性優位であるということ。	2.863	0.01
A11	一ヵ所に定着せずあちこち動き回るということ。	50.450	20.721	28.829	一ヵ所に定着して動かないということ。	3.618	0.01
B10	遊牧生	62.727	20.909	16.364	農耕生	7.733	0.01

	活を好むということ。				活を好むということ。		
C33	天空を指向するということ。	45.249	23.982	30.769	考え方が大地を指向するということ。	2.469	0.01

結局、アンケート結果では、以下の通りである。
(1)女性＝ウェット＝農耕、男性＝ドライ＝遊牧という結びつきがある。
(2)ドライ/ウェット性格・態度の内容は、社会的性格を捉えるに十分に網羅的である。
ということが確認された。
(a)農耕社会では、女性が社会運営の主導権を握る、ないし、社会を動かす最も基盤の位置を占有する、社会の根本部分を支配する。その理由は、社会が女性向き（女性優位）にできていないと、農耕型の社会を要求する自然条件に適合して行けないからであるということ。言い換えれば、社会が女性のペースで動くことになる。その点、女性の方が、実質的な地位・勢力が上である。
(b)遊牧社会では、男性が社会運営の主導権を握る。その理由は、社会が男性向け（男性優位）にできていないと、遊牧的社会体制を要求する自然条件に適合して行けないからであるということ。社会は、男性のペースで動き、男性の方が、実質的な地位・勢力が上である。
以上まとめると、
農耕社会 女性向き（女性が支配する。）
遊牧社会 男性向き（男性が支配する。）
ということになるということ。

社会において、生活様式が農耕が支配的になり、農耕民が強くなると、社会における女性、母の地位が向上し、男性、父の地位が低下する。一方、生活様式が遊牧、牧畜が支配的になり、遊牧、牧畜民が強くなると、社会における男性、父の地位が向上し、女性、母の地位が低下する。

(2008年5月 追記）父権制・母権制と気体（ガス）・液体（リキッド）タイプ

上記の対人感覚のドライ、ウェットさは、物理的な「気体（ガス）」や「液体（リキッド）」と関係がある。
詳しくは、筆者の湿度感覚と気体、液体に関する著作を参照されたい。

この気体、液体タイプの分類から、農耕社会と女性の支配（母権制）、遊牧社会と男性の支配（父権制）との関係を見ることが可能である。
先進的移動生活中心社会Ｇは、遊牧社会タイプに属し、後天的定住集団社会Ａは、農耕社会タイプに属する。
アンケート調査を行った結果、
先進的移動生活中心社会Ｇ的パーソナリティと気体分子運動、後天的定住集団社会Ａに特有パーソナリティと液体分子運動が相関することが分かった。
また、男性優位パーソナリティと気体分子運動、女性優位パーソナリティと液体分子運動が相関することが分かった。
このことより、
先進的移動生活中心社会Ｇ的＝遊牧社会＝気体的（ガスタイプ）＝男性優位＝父権制
後天的定住集団社会Ａに特有＝農耕社会＝液体的（リキッドタイプ）＝女性優位＝母権制
という関係が成り立つと言える。
〔３．
後天的定住集団社会Ａは、自然環境のドライ・ウェットさの分類から行くと、「湿潤気候＝農耕社会＝ウェット」という相関により、ウェットな社会であると、当然ながら、予想される。
筆者は、後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性が、どの程度ウェット/ドライかについて、文献調査を行った。
上記の調査結果からは、「伝統後天的定住集団社会Ａに特有」＝ウェット、という結果が出た。
また、筆者が抽出した、「ウェット」な行動様式は、「ウェット」という一言で、後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性（後天的定住集団社会Ａのメンバーの行動様式）に関する学説の大半を、カバーできていることが分かった。
一方、「女性優位」＝ウェットであるということ。
行動様式の「ウェットさ」への当てはまりの有無について、後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性（行動様式）と、女性優位性格（行動様式）との間の関係を、文献調査結果をもとに、洗い出してみたところ、両者（後天的定住集団社会Ａのメンバー－女性）の間

に正の相関があることを確認した。
したがって、ドライ/ウェットの次元からは、後天的定住集団社会Ａに特有＝女性優位という図式が成り立ち、後天的定住集団社会Ａは女性が支配する社会である、ということになるということ。（女性が優位に立つということ。）
その理由付けは、以下の通りである。
(1a)後天的定住集団社会Ａの国民性が、ウェットである。農耕（特に稲作）社会だから、当然であるということ。
(1b)女性の性格が、ウェットである。
(2)ウェットな性格の内容は、十分に網羅的である（伝統的後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性についての学説、および男女の性差に関する学説の大半をカバーしているということ。）ということ。
(3)後天的定住集団社会Ａの国民性は、ウェットさを相関軸として考えた場合、女性優位であるということ。
ドライ－ウェット以外の次元でも、後天的定住集団社会Ａの国民性は、女性優位である。すなわち、安全指向、成功例の後追いをするということ。（失敗を恐れ回避するということ。）。冒険心の欠如。大組織への依存心の強さ。（寄らば大樹の陰。）それらが女性優位であることを示す例である。
女性優位（女らしさを示すということ。）行動様式についてのより詳しい説明は、筆者による、女らしさの生物学的貴重性の視点からの検討を行った文書を参照されたい。
なぜ、後天的定住集団社会Ａの国民性が女性化したかについては、次のように説明することができる。後天的定住集団社会Ａは稲作農耕を基盤にした社会であり、そこでは、土地への定着性や水利面での他者との相互依存など、行動様式としてウェットさが求められてきた。ウェットな行動様式を生み出す原動力は女性にある。（それは、男性にはない。）稲作農耕に適応するための社会のウェット化には、女性の社会全般への影響力が欠かせない。社会のウェット化に女性の力を利用する副作用として、社会における本来ウェットさとは無関係の領域にまで、女性の勢力が及ぶということ。（自分の取った行動に責任を取るか否か、取る行動の安全性に敏感かどうかなど、生物学的貴重さとは関係があるが、ウェットさとは関係がない領域。）その結果、男性の行動様式の女性化を含めて、後天的定住集団社会Ａ全体が女性優位となったということ。（自分の保身のため、自分の取った行動の責任を周囲の他者に取ってもらおうとする無責任体制。自分の保身のため、安全さが確認されたことしかしようとしないということ。冒険心の欠如。）
社会において、女性の勢力が男性を上回るから、国民性が女性優位

となるのであり、国民性がウェットなことは、後天的定住集団社会Ａにおいて、女性が男性より強いことの証拠である。
後天的定住集団社会Ａが、男性中心社会というのは誤りである。実は、後天的定住集団社会Ａは、女性を中心に回っている。言い換えれば、後天的定住集団社会Ａの仕組みは女性向けにできており、男性には不向きである。
後天的定住集団社会Ａにおいて、なぜ女性が強いか？まとめると、農耕（稲作）という，ウェットさ（定着性や対人関係面での相互依存など）を求める、したがって女性優位な行動様式を求める、自然環境に囲まれた社会だからであるということ。
〔４．
後天的定住集団社会Ａは、従来の通説と異なり、実際には、女性の勢力が男性のそれを上回る、女性優位＝母権制の社会である。後天的定住集団社会Ａを含む定住生活中心社会群ＡＢＣの稲作農耕社会は、対人関係にウェットさを必要とする自然環境であり、その下では、生得的によりウェットな女性が、有利であり、実際に家計管理権限などを掌握しているからである。
母権制は存在しないと言えるか？ 結論から言えば、存在しないとは、とても言えない＝「明らかに存在する」農耕社会は、基本的には母権制である。
母権制の存在が、これまで認められなかった理由を、以下に、着眼点毎にまとめた。
1)「姓名」の付け方
母系制と混同したということ。男女どちらの姓が、子孫に継承されていくかについて、関心を払い過ぎた。姓が継承される方の性を強いと見なしたため、父親の姓が継承されることがほとんどだったことを、父親の強さと勘違いし、父権制があたかも全世界的な標準であることのように勘違いした。姓は、血縁関係を示す「看板」＝外に向けて掲げるものの役を果たす、いわば、「表」の世界のものである。男性の方が、表面に出やすい＝外に露出しやすいため、男性の方を付けるのが適当とされたと考えられる。これは、父権制とは、直接には、無関係であると思われる。
2）「財産」の所有・管理のあり方
2a)家庭における財産の所有・相続者の性が男女どちらかであるかに、関心を払い過ぎた。財産の名目的に所有する者と、実際に管理する者とが同一でない＝分離している場合があることに気づかなかった。名目的所有者が男女どちらかという方にのみ注意が行って、管理者が男女どちらかということに関心が足りない。ドライな遊牧社会では、両者は、男性ということで一致するが、農耕社会では、前者は男性のこともあるが、後者はたいてい女性である。

2b)財産を単に名目的に所有している者よりも、財産の出入り（財政）の実質的な管理権を握る方が、実質的な地位が上である、ということに気づかなかった。財産管理者（家計の財布を握る者）は、遊牧社会では、男性であるが、農耕社会では、女性である。これは、農耕社会の家庭では、女性の地位の方が実質的に上であることを示している。
3)「地域」毎の事情
3a)先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでは、自分の「家父長制」的な文化基準からは、母親がより強い文化があることを想像できなかった。父権制をデフォルトとみなし、「母権制は、遠い過去に消滅した」とする、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの学説(Bachofen、Engels)が主流となってしまったため、全世界的に、母権制の存在自体が考えられないものとされてしまった。
3b)後天的定住集団社会Ａなど定住生活中心社会群ＡＢＣでは、男尊女卑を、男性支配（家父長制）と混同したということ。あるいは、自分たちより先進的な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ学説が母権制の存在を否定したため、それを権威主義的に無批判に受け入れてしまい、本当は自分たちが母権制文化を持つことに気づかなかった。
4)「自然環境」との関連
男女間での自然環境への適応度の違い、という視点が欠如していた。湿潤環境下で成立する農耕社会のように、「ウェットな人間関係が必要こと。→女性がより適応的＝強い」という場合を、想定していなかった。
5)「公的組織上の地位」との関連
女性は、生物学的により貴重な性であるため、失敗を犯したことで責任を取らされて、社会の中で公然と生きていけなくなったり、助けてもらえなくなること、すなわち自己の保身ができなくなることを恐れる。公的組織（官庁、企業）において高い地位につくことは、社会的に大きな責任を伴うため、失敗時のリスクが非常に高いため、女性は、組織上の高い地位につくのを進んで避けようとする。その結果、組織上の高い地位は、男性が占めることになる。女性は組織上の高い地位に能力不足などで「つくことができない」のではなく、自己保身の都合上「自ら進んでつこうとしない、つかない、つくのを避ける」したがって、従来のように、後天的定住集団社会Ａにおいて、官庁、企業といった公的組織の高い地位につく人々の男女比率を見て、女性の数が少ないから、女性が弱い、と簡単に言い切ることはできない。女性は例え社会的影響力が強くても、公的組織上の高い地位を、自らの社会的責任回避、リスク回避を目的として、男性に押しつけている側面があるからである。

後天的定住集団社会Ａの女性による男性支配は、主に、母＝息子関係を通じて行われる。後天的定住集団社会Ａの女性（母親）は、育児の過程で自分の子供との間に強い一体感を醸成し、自分の息子＝男性が自分に対して精神的に依存する、自分の言うがままに動くように仕向けることで、息子である男性に対して強い影響力を保持する。女性は、「教育ママ」として息子＝男性を社会的に高い地位につくように叱咤激励し、高い地位についた息子＝男性を、自分の操り人形、ロボットとして、思うがままに操縦、管理する。これなら、自分自身は社会的責任を負う必要なく、男性＝息子をダシにして強大な社会的影響力を行使できる。妻と夫の関係も、妻＝女性が、夫＝男性を心理的に母親代わりに自分のもとへと依存させ、夫を高い地位へつくように競争に向かわせたり、高い地位についた夫＝男性の管理者として支配力を振るう点、上記の母と息子の関係に根本的に似ている。そうした点、後天的定住集団社会Ａの女性は、男性の生活や意識を管理、支配する＝男性を自分の思うがままに動く「ロボット」化する者として、社会的地位の高い男性よりも、さらに一段高い地位についていると言え、なおかつ、社会的責任を取ることからはうまく逃れている。男性は、公的組織で例えどんなに高い地位についていても、女性に対して心理的に依存し、管理されている限り、女性に支配されていることになる。
なお、後天的定住集団社会Ａの公的組織（官庁、企業の職場）が男性中心であって、そこへの女性の進出が進まないのは、女性の高い地位につくことを避ける性向以外にも理由がある。それは、そこが、男性の自尊心を保持できる最後のとりでであるということ。（家族を経済的に支えているのは私をおいて他にいない、との誇りを保てるということ。）男性は、そこに女性が進出してくることを脅威に感じているということ。それだからだと考えられる。男性側は、女性には、公的組織における自分の居場所を簡単に明け渡したくない。明け渡すと、せっかく保って来た見かけ上の高い地位からも一挙に転落し、最後の自尊心が消えてしまう。後は（見かけ・実質両面で男性を圧倒するということ。）女性のペースに合わせてひたすら従うだけの社会的落伍者に成り果てるからであるということ。
6)「力の強弱」の見せ方との関連
6a)女性は、自分のことを、自ら進んで強いと、言わない（生物学的により貴重な性であるため、男性に守ってもらおうとして、自らを弱く見せるということ。）傾向がある。また、強いことを認めると、取る行動に社会的責任が生じてしまう。そこで、取った行動の失敗時に責任を取らなくて済むようにするために、自分のことを（例え実際は強者の立場に立っているとしても。）決して強いと認

めず、弱いふりをする必要がある。そのため、自分が権力を握る強者であることを示す「母権制」という言葉を使うのを、好まない。その結果、母権制が存在しないかのように、考えられてしまった。
6b)男性は、自分のことを、進んで強く見せようとする傾向がある。強く見せることで、自分が自立した存在である(1人でいても、他に守ってくれる人がいなくても、十分大丈夫である、やっていける。あるいは、他者を自分の配下において、統率できるということ。)こと、ないし、女性を守る能力があること、を周囲にアピールしたがる。そこで、必要以上に、父の権力を強調しがちであったということ。その結果、父権制が一人歩きすることになってしまった。
7)「男尊女卑」現象についての解釈の仕方との関連
ある人のことを、他者よりも優先する場合には、「強者優先」と「弱者優先」との相反する2通りが存在する。「男尊女卑」は、男性優位なドライさを否定する農耕社会において、男性を社会的弱者として保護し、その人権・自尊心を保持するための、「弱者優先」の考え方である、と見なすのが正しい。これを、男性を強者と見なす「強者優先」と取り違えたということ。この点についての詳細は、男尊女卑の本質とは何かについてまとめたページを参照されたい。
注)男女間での力の強弱を説明しようとするモデルには、以下の通りである。
1)筋力・武力モデル(男性優位) 男の方が、筋力が強い。
2)生命力モデル(女性優位) 女性の方が、長生きである。
3)貴重性モデル(女性優位) 女性の方が、貴重であり、大切にされる。
4)環境適応モデル 乾燥=遊牧=(ドライ=)男性優位、湿潤=農耕=(ウェット=)女性優位。
5)育児担当者モデル(遊牧=男性優位、農耕=女性優位) 社会における男女の強弱は、自分の性に基づく行動様式を、子供にどれだけ多く吹き込めるかによって決まる。例えば女性が子供に対して、男性よりも、より多く自分の行動様式を吹き込めば、社会は女性化し、女性にとってより居心地のよいものとなる。
が考えられる。従来は、1ばかりが取り上げられ、3~5などは、ほとんど考慮されてこなかった。そのため、父権制=男性優位が全世界的に通用するかの様に捉えられるという過失を招いた。3~5を考慮すれば、母権制=女性優位という考えも十分成り立つことが分かる。
なお、5)育児は、女性(母性)の占有物とは、世界的には必ずしも言えない。Floidの精神分析論やParsonsの家族社会論に見られるよ

うに、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ（遊牧系）社会では、育児への父親の介入や割り込みの度合いが強く、父親が育児のdirectorの役割をしている。後天的定住集団社会Ａのような農耕社会では、女性が育児のdirectorである。
なぜ女性は弱く見えるか？あるいは、自分を弱く見せるか？
1)「筋力」モデル 筋力が男性よりも弱い。
2)「保護」モデル 男性よりも、生物学的に貴重であるということ。そのために、男性によって保護してもらいたがるということ。（男性によって保護してもらおうとするということ。）（男性は、より貴重でない、使い捨ての性であるということ。）その保護してもらおうとする行動が、弱者が強者に保護してもらいたがる行動と混同された。
〔５．
以上述べたことをまとめると、女性の社会的な強さ（影響力、勢力の大きさ）、社会的地位の高さは、その社会のかもしだす雰囲（国民性、社会的性格）が女性優位、ウェットであるかどうかで決めるのが本筋であるということ。（最も確実であるということ。）そのように、筆者は考えている。ある社会の国民性は、その社会において最も大きな影響力、勢力を持つ者の色に染まる、一種のリトマス試験紙のようなものである。社会で女性がより強ければ、その社会の帯びる性格は女性優位になるであろう。要するに、国民性は、その国においてメジャーで強大な社会的勢力の色に染まるということであり、後天的定住集団社会Ａの国民性が女性優位であるということは、後天的定住集団社会Ａにおいて女性が支配的な力を振るっていることと関係していると考えられる。
従来のように、名目的な財産名義を持っていない、公的組織における高い地位についていない、などといった視点だけで、後天的定住集団社会Ａの女性の地位を低いと決めつけることは、実は、社会のあり方と性差との関係を表面的にしか見ることができない、社会分析能力の低さをさらけ出していることに他ならない。後天的定住集団社会Ａは、伝統的な国民性としては、ウェット、液体的＝女性優位であり、それはとりもなおさず、女性の勢力が男性のそれを大きく上回っている、社会において女性が男性よりも強い、社会が女性のペースで動いていることを示している。
従来の後天的定住集団社会Ａの女性学、フェミニズムは、性差心理学、すなわち男性女性の社会的性格と、後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性、すなわち後天的定住集団社会Ａの社会的性格との照合を怠っていたため、女性優位性格と後天的定住集団社会Ａのメンバーの社会的性格との相関に気づくことが出来ず、後天的定住集団社会Ａを男性優位と見なす誤った結論にはまったと考えられる。

今後、後天的定住集団社会Ａにおける女性の地位の高さを正当に評価する人々の数が少しでも増えることが、筆者の望みである。
注）以上述べた理論が、現在の後天的定住集団社会Ａで受け入れられる余地は少ないと考えられる。
1)男性こと。→ 自分が優位であるという観念（優越感）。それが崩れて、不快に感じるため。自分を強者とおだててくれる、既存のフェミニズム理論へと向かうということ。
2)女性こと。→ 自分の強さを認めようとしないということ。（それを認めると、自分を守ってくれる男性がいなくなると考えるということ。あるいは、認めると、自分が社会を支配している結果の責任を取らなくてはならなくなり、リスクが大きいと考えるということ。）そのため、弱いふりをしていたいということ。従来のフェミニズム・女性学の「男強女弱」という見解に固執するということ。
上記の後天的定住集団社会Ａ母権社会論の主張は、自分たちの保身、安全確保をしようとする、あるいは、自分たちが後天的定住集団社会Ａを支配することへの責任逃れをしようとする後天的定住集団社会Ａの女性たちの退路を断つ、要するにあなたたちが本当の支配者だ、支配責任を取れ、と断じることで、女性たちの心理的急所を突く行為に当たり、女性たちとしては、不愉快であり、無視したいと考えられる。
〔参考文献〕
会田雄次:リーダーの条件,新潮社,1979
芳賀綏:日本人の表現心理,中央公論社,1979
石田英一郎:桃太郎の母,法政大学出版局,1956
石田英一郎:東西抄,筑摩書房,1967
G.Ederer Das Leise Laecheln Des Siegers, Econ Verlag, 1991（増田靖 訳,勝者・日本の不思議な笑い - なぜ日本人はドイツ人よりうまくやるのか？, ダイヤモンド社, 1992。）
河合隼雄:母性社会日本の病理, 中央公論社,1976
D. M. Kenrick, Where Communism Works: The Success of Competitive-Communism in Japan, Tuttle, 1991 （飯倉 健次 訳, なぜ“共産主義”が日本で成功したのか, 講談社, 1991。）
木村尚三郎:ヨーロッパとの対話, 日本経済新聞社,1974
佐々木孝次:母親と日本人，文藝春秋,1985
Ben-Ami Shillony, Enigma Of The Emperors: Sacred Subservience In Japanese History, Global Oriental, 2006 （大谷 堅志郎 訳, 母なる天皇—女性的君主制の過去・現在・未来,講談社,2003）
千葉徳爾:農耕社会と牧畜社会（山田英世編 風土論序説 国書刊行会) 1978
山村賢明:日本人と母，東洋館出版社,1971

山下悦子:日本の女性解放思想の起源，海鳴社,1988
（初出 1999年08月）

従来母権制論の問題点

母権制論は、従来BachofenやEngelsらによる「母権制は過去のもので、地球社会全体が父権制に既に移行済みである」という主張がそのまま疑いを持たれずに受け入れられている。
しかし、この「母権制は既に消滅した過去の遺産に過ぎない」という主張は、後天的定住集団社会Ａや定住生活中心社会群Ｄのような稲作農耕社会における、人々の国民性や、社会風土が母性優位であることを知らずに、相対的に父性優位のヨーロッパや中東付近の知見だけでなされたものである。
Bachofenらは、母性優位な、稲作農耕民の心理に無知だったし、調査範囲を定住生活中心社会群Ｄまで広げて考えることも怠ったまま、自分たちの社会が父権優位であることを正当化することを暗黙の目的として、「母権制は過去の遺物」という結論に達したのである。
Bachofenらヨーロッパの人は、遊牧、牧畜系の人たちであり、父権優位の彼ら遊牧、牧畜民にとって、「母権社会が父権社会に敗北し、消滅した」というのは、彼ら自分たちにとってはごく自然な結論であると言える。
しかし、その遊牧、牧畜民向け結論を、スコープの違う今なお母性優位の定住生活中心社会群ＡＢＣの稲作農耕民の社会にまで、適用可能かどうかを確認しないまま普遍化して持ち込もうとするのは、明らかな越権行為であり、間違いであると言える。
先進的移動生活中心社会群Ｆの母権制論者の、母権制は過去のもので、地球社会全体が父権制に移行したという主張は、父権の強い先進的移動生活中心社会群Ｆのような遊牧、牧畜社会が自らの正当性を主張するためのイデオロギーであり、遊牧、牧畜民が自らの父権社会の社会タイプを世界標準化し、定住生活中心社会群ＡＢＣのような農耕民側にある母性の影響力を奪い、少なくすることで、農耕民に打ち勝ち、農耕民を支配するための策略の一種なのである。
当然、強い父権のもと女性が弱い立場に置かれ差別されていることを主張するフェミニズムも、先進的移動生活中心社会群Ｆ母権制論者と同じ戦略で、自らの遊牧、牧畜民の父権社会向け理論を世界標準として、残りの社会全体に強引に適用し、押しつけることで、世界において支配的地位を確立しようとするものである。

そういう背景があることに無知なまま、まんまと先進的移動生活中心社会群Ｆ遊牧、牧畜民の戦略にはまって、彼らのイデオロギーを一生懸命自分たちの社会に適用しようと宣伝しているのが、従来の後天的定住集団社会Ａの女性学者、フェミニストであると言える。
逆に考えれば、こうした先進的移動生活中心社会群Ｆの母権制消滅論を後天的定住集団社会Ａに当てはめ、後天的定住集団社会Ａのメンバーの間にあまねく広めることで、後天的定住集団社会Ａにおける母権の強さを社会から葬り去ることが可能なのかもしれない。そういう点では、先進的移動生活中心社会群Ｆの母権制論者の主張は、後天的定住集団社会Ａの男性をその母親による支配から解放するために役立つとも言える。
（初出 2009年4月）

母権と母系、父権と父系の区別の必要性

母権制が消滅したと言われることは、事実に反する。後天的定住集団社会Ａの母親の力は強大であり、その点、後天的定住集団社会Ａは母権制と言うことが可能だからである。一方、母親を血縁の系譜代表として捉える母系制が消滅したと言われることについても、こちらもインドネシア等に実在するとされており、正しくない。後天的定住集団社会Ａについては、母系制は当てはまらず、母権制のみ当てはまる。
母権制と母系制の混同がなぜ起きたのか？
それは、Matriarchy（女家長制）の考えを生み出した先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会が主に家父長制、Patriarchyであったからと思われる。
家父長制においては、家族の対外代表者（姓、血縁系譜における代表者）と権力者が、両方共、父であり、一致しているのである。その点、代表している者には権力がある、あるいは逆に、権力ある者は代表している、という暗黙の了解が出来上がったと考えられる。
一方、後天的定住集団社会Ａは、母権制だが父系制であると言える。後天的定住集団社会Ａの母親は支配者であり、権力は振るっているが、一家の代表責任者の役回りは父親にお任せにし、押し付けている。すなわち、自己の保身に支障が出る、対外的に外部露出する危ない大変な役回りは、父、男に押し付け、自分は、奥座敷で守られ、リスクを負うのを免除されているのを好むのである。そこには、自己の保身、安全第一の、より生物学的に貴重な性としての行動様式が見える。
このように、後天的定住集団社会Ａでは、権力者と代表者が一致し

ないが、これは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのMatriarchyの概念では想定されていないのではないだろうか。
要するに、Matriarchyの概念においては、母親が対外的に代表者であり、かつ権力者であることを想定しており、そのため、家族の代表責任者と権力者の概念が混ざってしまっているのである。
これは、従来の「長」Headの概念が内包する問題点であるとも言える。「長」は代表責任者と権力者を兼ね備えた存在であり、「家長」Head of familyに当たる人物が、性別の観点から、父親の場合がpatriarchy、母親の場合がmatriarchyが成立していると呼ぼうとしたのだと考えられる。このpatriarchy、matriarchy両方とも、代表責任者と権力者、支配者の概念が混ざってしまっており、それが、「母権制は存在する、しない」といった、学説上の混乱の原因となっていると言える。
こうした混乱を解決するには、父母の、権力者、支配者としての側面を表す、母権、父権の概念と、代表責任者としての側面を表す母系、父系の概念とをはっきり別々に分けて表現する、世界で広く使用される先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ言語とかによる新たな用語を確立する必要があると考えられる。後天的定住集団社会Ａの言語では、母権制と母系制というように分けて表現可能だが、従来の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのmatriarchyの概念では混ざってしまい、分けることが不可能なため、新たな用語が必要になる。例えば、母権社会、母権制は、society of strong, powerful motherとかsociety of strong maternal powerとか言えば良いのであろうか。あるいは、母系社会、母系制は、society of maternal representativeとか言えば良いのであろうか。早急に決定する必要がある。
要するに、母権制の英語とかでの対応訳語は、従来のmatriarchyではマズいのである。新しい英語表現が必要である。Matriarchyは最近では女家長制と訳されるようになってきているようであるが、母権、母系を両方兼ね備えた時に成立する言葉であり、後天的定住集団社会Ａみたいに、母親の力が強い母権社会であるが、母親が家族を代表しない、すなわち母系社会ではない社会を表すには適当でない。
母親が家庭内で権力を振るう、支配する母権社会は、後天的定住集団社会Ａのような稲作農耕社会で普通に見られる。一方、母親が一家を代表する社会、一家の責任を取る母系社会は、後天的定住集団社会Ａでは、ほとんど無いと考えられる。この現状を、例えば英語で一言で簡単に言い表せるようになればと考えるということ。
（初出 2012年1月）

後天的定住集団社会Ａにおける母権の無視、隠蔽

なぜ、これまで後天的定住集団社会Ａは、母権社会でありながら、母権社会と言われてこなかったのか？あるいは、母権が無視、隠蔽されてきたのか？
後天的定住集団社会Ａ全般のあり方からは、以下の理由が考えられる。
(1)後天的定住集団社会Ａにとって権威筋に当たる先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの言論が、母権制を過去のもので、もう存在しないと断定したため、とかく先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの権威によりかかって物事を考える後天的定住集団社会Ａのメンバーは、後天的定住集団社会Ａは母権制ではない、家父長制だと、そのまま、きちんと確認を取ることなく思いこんでしまったためである。
後天的定住集団社会Ａの男性のあり方からは、以下の理由が考えられる。
(1)これまで男尊女卑で、「自分は女より立場が上なのだ」として高いプライドを持って威張って生きてきた後天的定住集団社会Ａの男性が、自分の社会的立場が、実際は女性に比べて決定的に弱いことを認めたくないためである。
(2)後天的定住集団社会Ａの男性が自ら母の支配下に入っていること、マザコンであることを、女性に認識されると、恋愛対象として見てもらえなくなり、性的に値打ちが下がってしまうことを嫌うため、母の支配を公式に認めたくないためである。
後天的定住集団社会Ａの女性のあり方からは、以下の理由が考えられる。
(1)後天的定住集団社会Ａの女性が、自分のことを「お母さん」と呼ばれたくないためである。
女性は、一般に「お母さん」と呼ばれると、良い気分がしない、気分を害する傾向がある。
その理由は、以下の通りである。
・「お母さん」という言葉が、既婚で子供がいることを表すので、もう男性の恋愛対象でなくなっていること、以下の通りである。
・子供がいるほどに結婚年齢を重ね、歳を取っていて、もう若くなく、男性から女として見てもらえなくなっている、女の魅力が見てもらえなくなっていること、以下の通りである。
の確認がなされてしまうため、自分が性的に値打ちが下がっていることを否応なく認識させられ、性的意識の側面で喪失感を感じることによると考えられる。
その結果、後天的定住集団社会Ａの女性は、自ら母として大きな権力を振るっているにも関わらず、「母であること」「母と呼ばれること」を良しとしない。そして、「母権」「母性」が強調されることを、ことさらに避けよう、無視しようとする。

(2)後天的定住集団社会Ａの女性は、自ら母として社会を支配していることを認めてしまうと、そのことに対する社会的責任が生じてしまう。自己保身、安全第一を指向する女性にとっては、社会運営失敗時のリスクを取らねばならなくなるのが都合が悪くて、社会を支配していることを認めたくないため、母権という言葉を避けようとする。
(3) 自身の保身、安全の確保に人一倍敏感な後天的定住集団社会Ａの女性は、対外的に代表となることを避けて、奥様でいようとする。後天的定住集団社会Ａの女性が、自ら母として社会を支配していることを認めてしまうと、本来奥にいることで外から見えないはずの、その存在自体が外部に透けて見えて、表面から知られて、分かってしまい、「真の支配者が奥に潜んでいる」として、奥に踏み込まれる追撃の対象となってしまう。自己保身、安全第一を指向し、外に透けて見えない、より安全で温もりに満ちた奥の院に留まって社会を支配し続けようとする女性にとっては、支配者としての自身の存在が外部に明らかになってしまうことで、自身の身の安全が脅かされるのが都合が悪くて、社会を支配していることを公には認めたくないため、母権という言葉を避けようとする。
これらが、後天的定住集団社会Ａが実質母権社会でありながら、そう言われてこなかった大きな理由であると考えられる。
（初出 2012年3月）

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、母権社会論を読もうとしない。

後天的定住集団社会Ａを母権社会の事例として扱う場合、以下の問題を予め把握しておくことが重要である。それは、後天的定住集団社会Ａのメンバーが母権社会論に対して取る態度の問題である。

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、母権社会論を読もうとしない。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、母権社会論を無視する。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、母権社会論に反応しない。その理由は、以下の通りである。
後天的定住集団社会Ａのメンバーが、しきりと自分たちの社会を家父長制だと主張するのは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの仲間入りをしたいからである。後天的定住集団社会Ａの実態は、家父長制には、少しもなっていない。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを、自分たち同様の女流の定

住集団のように見なして、その中に加入しよう、加入した状態を続けよう、異質と見なされて追放されないようにしようと必死である。その行動の裏には、後天的定住集団社会Ａのメンバーが持つ、先天的定住集団社会ＢＣに対する屈折した感情がある。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、定住生活中心社会群ＡＢＣの圏内で、先天的定住集団社会ＢＣから除け者にされてきたという不快な感情を、先天的定住集団社会ＢＣに対して抱いている。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、心の奥底では、自分たちは、先天的定住集団社会ＢＣと同類だという無意識の認識がある。しかし、後天的定住集団社会Ａのメンバーは、それを認めたくない。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、それを隠そうと懸命になっている。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、自分たちは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの一員であって、定住生活中心社会群ＡＢＣの一員ではないと、必死に主張する。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、見かけだけでも家父長制になろうと必死である。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、盛んに後天的定住集団社会Ａの女性の弱さを強調し、男性優位を主張する。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、その証拠として、後天的定住集団社会Ａの女性が企業に進出しないことや、後天的定住集団社会Ａの女性が役職に就かないことを、盛んに持ち出す。しかし、誰かが、後天的定住集団社会Ａの女性が、後天的定住集団社会Ａの男性に小遣いを与えている支配者の立場にいることを指摘すると、後天的定住集団社会Ａのメンバーは、それを無視する。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、そのことを、学校の教科書に決して載せない。
後天的定住集団社会Ａの男性は、女性や母親への依存心を告白すると、後天的定住集団社会Ａの女性から、結婚してもらえなくなるので、告白することが出来ない。後天的定住集団社会Ａの女性は、姑による支配を恐れるので、姑との同居の発生を断固拒否する。後天的定住集団社会Ａの男性が母親への依存心を見せると、姑との同居発生確率が高いことが判明する。後天的定住集団社会Ａの女性は、それが不快である。一方、後天的定住集団社会Ａの女性は、自分の息子をいつまでも手元に置いて、愛でていたい。後天的定住集団社会Ａの女性は、息子と同居したい。そうした矛盾した心理が露見することを回避するため、後天的定住集団社会Ａの女性は、このことを話題にしたがらないし、この話題を避ける。

後天的定住集団社会Ａの正しい解明と認識を得ることが、本書の到達すべき目標である。
そのためには、後天的定住集団社会Ａのメンバーを、強引に母権社会についての議論の場に引っ張り出すことが必要である。本書は、

それを目的とする。

（初出 2020年9月）

後天的定住集団社会Ａの男性女の性的役割は「母と息子」

後天的定住集団社会Ａの男性女の性的役割は、「母と息子」として表される。
女性は、母の役割で、息子の役割を担う男性を大きな力でやさしく包み込み、かいがいしく世話をすると共に、男性を彼女の自己実現の手段と見なし、稼いだり、出世するように男性を動機付け、尻を叩く。
男性は、息子の役割で、母の役割を担う女性の意向を実現すべく、稼ぎや出世に励み、必要に応じて女性を頼もしく助けると共に、女性に心理的に依存し、甘え、母たる女性の支配下に入る。永遠の息子として、心理的に父親になれない、父性未満の存在であるということ。
（初出 2012年2月）

後天的定住集団社会Ａで最強の存在

後天的定住集団社会Ａの最終支配者は、以下の通りである。
家庭では、母、姑であり、職域では（数は少ないが。）姉御であるということ。
職場で姉御で、家庭で母、姑である女性が後天的定住集団社会Ａでは最強である。
従来彼女らは、表に出てこない奥まったところに居て、そこから表だった見せかけの代表者である息子である男性たちをコントロールしてきた。表に出ない裏、闇の存在なので、従来の表層的なジェンダー研究では、支配者と気づかれなかったのである。
これからのジェンダー研究においては、こうした最終支配者の女性を奥座敷から表へ引っ張り出す作業が必要である。
（初出 2010年7月 ）

母なるシステム、後天的定住集団社会Ａ

K.ヴォルフレンが、後天的定住集団社会Ａを解明する上で、謎である、不明なシステムであるとしたものこそが、「女性、母性社会システム」であり、後天的定住集団社会Ａの中核をなしている。
後天的定住集団社会Ａの社会システムは、母なるシステム、女性システムで動いているが、どのような動きをするか、まだきちんと研究されていない。今後、解明が必要である。
（初出 2011年3月）

母の王国、楽園としての後天的定住集団社会Ａ

後天的定住集団社会Ａは、母の王国、楽園として捉えることができる。
母の、重たく、しつこく、うるさく、パワフルな本性が、後天的定住集団社会Ａ全体を覆っていると言える。

（初出2012年6月）

後天的定住集団社会Ａ近代化と母なるシステム

液体的な、女性、母性システム社会＝母なるシステムは、本来、退嬰的であり、自分からは近代化を行う芽を持たない。
一方、男性、父性システム社会＝父なるシステムは、自分から進んで危険に立ち向かい、革新的な知見を得ようとする点、近代化への芽を内蔵している。
母なるシステム（後天的定住集団社会Ａ）は、父なるシステム（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ）から、新しい技術などの輸入を行い、そうすることで近代化を実現するということ。

（初出2011年3月）

ウェットな母性的後天的定住集団社会Ａにおける新規一

括採用の根本的重要性

既存の後天的定住集団社会Ａの顕著な特徴として、企業定住集団や官庁における新卒一括採用の原則が上げられる。
これは、学年初めの新入生同士のように、人間関係が最初何も形成されていない状態、まっさらの更地状態から始めないといけないという「更地開始」原則である。新入生同士の友人、人間関係は、最初の一瞬が肝心で、そこで以後のほとんどが出来上がってしまう。そして、部活とか、人員が固定化されていて、新陳代謝、人の出入りが少ない条件下では、最初の一瞬でどこかの人間関係、集団に潜り込めなかった人間が、既に出来上がった友人、人間関係の中に後から割って入るのが大変であり、友達が新たにできない、作れない原因となる。
いったん開通した人間の絆、コネ、コミュニケーション回路を、再びスパッと切って、他にさっさと移動できるのが、ドライな父性的先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会であり、できないのが、
ウェットな母性的後天的定住集団社会Ａである。
ウェットな後天的定住集団社会Ａにおいては、いったん生成した対人関係はweb、蜘蛛の巣のような感じで作用する。すなわち、ベトベトと絡み付くのであるということ。そのため、既存の対人関係を壊して、再び構築し直すパワーや能力に欠けることになるということ。
そのため、先祖や先輩といった先人や、既に同じグループとなった同士が張り巡らした既存のコネクションをひたすらそのまま流用するだけとなる。人々の関係、コネの線を追加で引くことしかできないということ。切断、消去して、仕切り直すことができない。いわば、「初期化」ができないため、コネの線がどんどん増えて、複雑にこんがらがって、どんどん身動きが取れなくなって行く。これは、自分の力では治せない一種の病気である。既存のコネクション、コネの前例維持の力が強すぎて、柵でどんどんがんじがらめになっていって、社会の自由な流動や活気が失われていくのである。
世代間で柵が連鎖して、重層化して、新たな仕切り直しの機会がほとんど消滅しているのが、後天的定住集団社会Ａの地方の農村などの伝統的定住集団社会である。
抜本的なコネクションの新規形成は、最初の1回のみ可能であり、そのことが、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団や官庁が、新規一括採用に根本的なところで依存する大きな理由である。
（初出 2011年10月）

２．

母性からの解放を求めて　－「母性依存症」からの脱却に向けた処方箋－

[要旨] 後天的定住集団社会Ａの男性たちは、「母性」に完全に支配されており、また「母性的な女性」に強度に依存しています。後天的定住集団社会Ａの男性たちが、本来あるべき父性を取り戻し、こうした母性への依存状態から脱却するための処方箋を述べています。◇
従来より、後天的定住集団社会Ａは、母性が中心となって動く、「母性型社会」であると言われてきた（例えば[河合1976])。筆者としては、その際、母性の担い手である女性だけでなく、男性までもが、母性的態度を取っている、という点に問題があると考えている。
後天的定住集団社会Ａの男性たちが、職場などで実際に取る態度は、いわゆる「浪花節的」と称される、互いの一体感や同調性を過度に重んじる、対人関係で温もりや「甘え」を強く求める、内輪だけで固まる閉鎖的な対人関係を好む、など、ウェットで母性的な態度が主流である。（母性的態度、父性的態度についての説明は、著者の他著作を参照して下さい。）
彼ら後天的定住集団社会Ａの男性は、一応男性の皮をかぶっているが、実際には、母性的な価値観で行動しているということ。（それ自体、女性優位な価値観の一部であるということ。）これは、後天的定住集団社会Ａにおける母性の支配力の強さを見せつけるものであり、後天的定住集団社会Ａの最終権力者が、実際には、彼ら男性たちの「母」（姑）ないし「母」役を務めている妻であることを示しているということ。
こうした母性的行動を取る後天的定住集団社会Ａの男性は、母に包含され、母性の麻酔を母によって打たれ、「母性の漬け物」と化している。その点、自分とは反対の性である母性の強い影響のもと、自分たちが本来持つべき父性を失っている。
要するに、後天的定住集団社会Ａを支配していると表面的には見える男性たちは、実際には、「母」によって背後から操縦、制御される「ロボット」「操り人形」なのであり、「母」に完全に支配されているのである。後天的定住集団社会Ａの男性たちは、「母」によって管理・操縦されているため、集団主義、相互規制、閉鎖指向

といった、男性本来の個人主義、自由主義、開放指向とは正反対の、ウェットで母性的な振る舞いをするのである。
後天的定住集団社会Ａは、その全体像が一人の「母」となって立ち現れるのであり、男性は、母性の巨大な渦の中に完全に呑み込まれ、窒息状態にある。
後天的定住集団社会Ａの男性を、こうした、自分とは反対の性の餌食になっている現状から救うには、「母性からの解放」が必要である。
今までは、後天的定住集団社会Ａにおける「母性」は、男性にとっては、自分たちを温かく一体感をもって包み込んでくれるやさしい存在として、肯定的、望ましいものとして捉えられることが多かった。後天的定住集団社会Ａの男性がその結婚相手の若い女性に求める理想像も、「自分が仕事から疲れて帰って来た時に温かく迎えてくれる」「自分のことをかいがいしく世話してくれる」といったように、母性的なものになりがちであった。
また、「母性」の行使者である「母」「姑」といった存在が権力者として捉えられることはなかった。後天的定住集団社会Ａの女性学においては、権力者は、「家長」としていばっている男性であるという見方がほとんどである。彼ら「家長」たる男性が、その母親と強い一体感で結ばれ、母親の意向を常に汲んで行動する、言わば、「母の出先機関・出張所」みたいな意味合いしか持たない存在であることに言及した書物はほとんどない。
例えば、一家の財産の名義は、「家長」である男性が持つとされ、それが後天的定住集団社会Ａは男性が支配する国であるという見解を生んでいる。しかし、実際のところ、母親との強い癒着・一体感のもと、「母性の漬け物」と化した男性は、実質的にはその母親の「所有物」であり、その母親の配下にある存在である。彼は、独立した男性というよりは、あくまで「母・姑の息子」であり、母親の差し金によって動くのである。
だから、男性が財産の名義を持つといっても、それは、「母」が息子＝自分の子分、自己の延長物に対して、管理の代表権を見かけだけ委託しているに過ぎず、実際の管理は、「母」が行うのである。その点、財産権は、実質的には、息子の母のものである。ただ、母親は、女性として、一家の奥に守られている存在であることを望み、表立って一家を代表する立場に立つことを嫌うので、その役割が息子に回ってくる、というだけのことである。母は、息子に対して、財産の名義を単に持たせているだけであり、実際の管理権限は母（姑）ががっちり握って離さない。
このように、母親に依存し、女性一般を母親代わりに見立てて甘えようとする、「母性依存症」とも呼ぶべき症状を起こしている後天

的定住集団社会Ａの男性に対しては、母性支配からの脱却を目指した新たな処方箋が必要である。後天的定住集団社会Ａの男性にとっては、本来母性は、決して望ましいものではなく、脱却、克服の対象となる存在となるべきなのであるが、それをわかっていない、母性に対する依頼心の強い男性が余りにも多すぎるのが現状である。筆者の主張する、「母性依存症」への対処方法は以下の通りである。
(1)まずは手始めに、取る態度を、本来男性が持つべき、個人主義的で自由や個性を重んじる、ドライな「父性的」態度に改めるべきである。言わば、自らの心の中に欠如していた父性を取り戻すのであるということ。これについては、例えば「家父長制」社会＝遊牧・牧畜中心社会の立役者である、父性を豊富に備えている、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの男性が適切なモデルとなると考えられる。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのような家父長制社会を実現しようとなると極端になってしまうが、今まで母性偏重だったのを、母性と父性が対等な価値を持つところまで、父性の位置づけを向上させることは必要であろう。
（付記）なお、従来も「父性の復権」が言われたことがあった(例えば[林道義1996])が、その際言われた「父性」とは、全体を見渡す視点、指導力、権威といったことを指しており、筆者が、上で述べた、個人主義、自由主義、対人面での相互分離、独創性の発揮といった、ドライさを備えた父性への言及が全くない。その点、従来述べられてきた復権の対象としての「父性」は、今までの母子癒着状態をそのまま生かしながら、従来の母性で足りない点を補完する「母性肯定・補完型」の父性であって、筆者の主張する、母性に反逆して、母性の延長線とは正反対の父性を築こうとする「母性否定・対抗型」の父性の復権とは異なると考えられる。
(2)また、「母」的価値からの逃走、ないし反逆を試みるべきであるということ。今まで、自分が一体感をもって依存してきた母親に対して反抗とか独立を試みるのは、非常に難しいことであるのは確かだが、これを実行しない限り、永遠に母性の支配下に置かれることになる。そのためにも、相手との一体感や甘え感覚がなくても自我を平静に保てるように、相手からのスムーズな分離や独立を目指す、「母性からの脱却」「父性の回復」訓練を、自ら進んで実践することが必要である。女性一般に対しても、心の奥深くにある彼女たちへの依存心を克服するということ。（自分の母親みたいに、温かく世話して欲しいなどと思わないようにすること）。「自分のことは自分で世話する」という自立の精神を持つということ。それらが必要があるということ。
(3)子育てに父親として積極的に参加し、母子の絆の中に割り込ん

で、彼らを引き離すことが必要である。従来、後天的定住集団社会Ａの男性は、「仕事が重要である」として、子供との心理的な交流をほとんどしてこなかった。それが、男性が子供と自分とを切り離し、子供から無意識のうちに遠ざけられるようにすることで、母親と子供の間にできる、強固な、誰も割って入ることのできない絆を生み出し、それが、母性による子供の全人格的支配を生み出してきた。（この状態にある母子を、筆者は、「母子連合体」と仮に名付けています。詳細な説明は本書の他セクションを参照して下さい。）
男性が子供との交流をしないのは、自分自身の子供時代に、父親との満足な交流の経験がないというのも影響している。一つ前の世代の父親が子供と心理的に隔離された状態に置かれることが、「母子連合体」の再生産を許してきたのである。
従って、子供が母親と完全に癒着した、母性による子供の支配が完成した状態である「母子連合体」の再生産を阻止するには、父親が、母と子供の間に割って入って、自ら主体的に子供との心理的交流を図る作業を実行することが大切である。今まで後天的定住集団社会Ａの男性が子育てを避ける口実としてきた「仕事が忙しいから」というのは、子供と父とを近づけまいとする、母による無意識の差し金によるものであることを自覚し、それを克服すべきである。外回りの仕事を女性により任せるようにして、その分、自分は家庭に積極的に入るべきなのである。
[参考文献]
河合隼雄、母性社会日本の病理、1976、中央公論社
林道義、父性の復権、1996、中央公論社
（初出 2003年05月）

「お母さん依存症」の後天的定住集団社会Ａのメンバー

後天的定住集団社会Ａの人たちは、お母さん、お袋さんに強度に依存している。お母さんがいないと何も出来ない、生きていけないと感じている人が多い。皆が精神的に、お母さんに頼り切りになっており、「お母さんの子供」状態を続けている。太平洋戦争時、敗戦で死に行く後天的定住集団社会Ａのメンバーの兵隊たちが、「お母さん」と叫びながら死んでいったという話は有名である。母に単に身辺の世話をしてもらうだけでなく、社会で生きていく力それ自身を供給されている感じであるということ。母である女性が、家族や

社会全体の精神的な支柱になっていて、真に強大な存在である。これは、母である女性が、社会の真の支配者であることを示している。

一方、男性は、母に依存した、父親未満の単なる子供に留まっていることが問題であると言える。

（初出2012年06月）

「母性社会論」批判の隠された戦略について　-後天的定住集団社会Ａの最終支配者としての「母性」-

[要約]「後天的定住集団社会Ａ＝母性社会」論は、その本質が、後天的定住集団社会Ａを最終的に支配している社会の最高権力者が母性（母性の担い手である女性）であることを示すものだと筆者は捉える。後天的定住集団社会Ａの女性学による「母性社会論は、女性に子育ての役割を一方的に押しつけるものだ」という批判は、女性たちが後天的定住集団社会Ａを実質的に支配していることを隠蔽する、責任逃れのための「焦点外し」だと考えられる。また、女性たちが従来の「我が子を通じた社会の間接支配」に飽き足らず、自分自身で直接、企業定住集団・官庁で昇進し支配者となる、言わば「社会の直接支配」を目指そうとする戦略と見ることもできる。
◇

従来の後天的定住集団社会Ａの女性学では、臨床心理学者などが提唱している後天的定住集団社会Ａを「母性社会」とする見方について、「後天的定住集団社会Ａが、子供を産み育てる役割を一方的に女性（母親）のみに押しつけているということ。それをを示しているということ。それは有害である。それは修正されなくてはならない。」という反応が主流である。
これに対して、筆者は、後天的定住集団社会Ａを「母性社会」とする見方は、本来、「後天的定住集団社会Ａにおける母性の影響力、権勢が強い。後天的定住集団社会Ａにおいて、母親が社会の支配者となっている」ことの現れであると見る。要は、後天的定住集団社会Ａにおいて「母」が社会の根底を支配しており、万人が母親の強い影響下で「母性の漬け物」になっている社会であることを示すのが、「母性社会」という表現だと考えている。

後天的定住集団社会Ａの母親は、例えば「教育ママゴン」みたいに、その力の強さを怪物扱いされるような、巨大で手強く、誰もが逆らえない存在なのである。
後天的定住集団社会Ａの女性学による、「臨床心理学者たちは、母性社会という言葉を使って、「母」としての女性のみを称賛し、子供を産み育てる役割を女性に押しつけている」という批判。それは、「後天的定住集団社会Ａの根幹を支配しているのが母性（母性の担い手である女性）である」という現状から人々の目を外すということ。自分たち女性が社会の支配責任を負わなくて済むようにするということ。支配側にある女性に対して、被支配者（男性、子供）の批判、反発が集まらないようにしようとするということ。そうした「焦点外し」の巧みな戦略、策略。筆者には、そのように思えてならない。彼らは、自分たち女性（母性）が社会の実質的支配者であることを、人々に気づかせまいと必死なのである。
また、「子供を産み育てる役割を女性に押しつけるのはいけない」みたいな論調が広がっているが、本来、後天的定住集団社会Ａの女性が社会で支配力を振るってこれたのは、彼女らが、子育ての役割を独占することで、自分の子供を、自分の思い通りに動く「駒」として独占的に調教できたから、というのが大きいと考えられる。後天的定住集団社会Ａの女性たちは、自分の子供を「自己実現の道具」として、学校での受験競争、企業定住集団での昇進競争に、子供の尻を叩いて駆り立て、子供が母親の言うことを聞いて必死に努力して社会的に偉くなった暁には、自分は「母」として、一見社会的支配者となったかに見える子供を更に支配する「最終支配者」的存在として、社会の称賛を浴び、社会に睨みを効かせることができる。
要は、子供の養育を独占することで、自分の子供を完全に「私物化」できることが、後天的定住集団社会Ａの女性たちが社会で大きな権勢をこれまで振るってこられた主要な理由である。「自分の子供を通した、後天的定住集団社会Ａの間接的支配」というのが、後天的定住集団社会Ａの女性たちが社会を支配する上でのお決まりのパターン、手法であった。要は競走馬（我が子）のたずなをコントロールする騎手として、後天的定住集団社会Ａの女性は、社会をコントロール、支配してきたのである。
「子供を産み育てる役割を女性に押しつけるのはいけない」という論調に後天的定住集団社会Ａの女性が同調しているということ。それは、彼女らが今まで築き上げてきた、「子供を通じた社会支配」という、彼女らによる後天的定住集団社会Ａ支配手法の定石を自ら捨て去ろうとしている。それは、その点、実は、後天的定住集団社会Ａの女性にとってはマイナスであると言える。それは、むしろ男

性にとって、子供を女性の手から取り戻す機会が増える点、プラスであると言える。
ただ、後天的定住集団社会Ａの男性にとって一番恐ろしいのは、後天的定住集団社会Ａの女性が、従来の「我が子を通じた、社会の間接支配」に飽き足らず、自ら社会を「直接支配」する者になることを開始することである。従来の我が子を私物化することでの「我が子経由での社会支配」を維持しつつ、自分自身も、企業定住集団・官庁で昇進をして偉くなることで、「直接・間接」の両面で後天的定住集団社会Ａ支配を完成させること、これが、本来なら後天的定住集団社会Ａのフェミニスト（女権拡張論者）の最終目標となるはずのものであり、後天的定住集団社会Ａの男性としては、これが実現しないように最大限努力する必要がある。幸い、後天的定住集団社会Ａのフェミニストは、この最終目標にまだ気づいておらず、我が子を通じた間接的な社会支配権限を自ら捨て去ろうとしているということ。これは、後天的定住集団社会Ａの男性にとって、女性から我が子を取り戻す絶好のチャンスである。
「子育ては女性がするもの」という固定観念は、後天的定住集団社会Ａの女性による我が子の独占と、我が子を通じた社会の間接支配権限を助長する考え方であり、女性を利する点が多く、男性にはマイナスなのであるが、後天的定住集団社会Ａの男性は、そのことに気づかないまま、自分の母親の「自己実現の駒」として、企業定住集団での仕事にひたすら取り組み、それが「男らしい」と勘違いしている。
後天的定住集団社会Ａの男性は、もう少し、自分の子供に対する影響力を強化することに心を配るべきなのではないか？自分の子供に自分の価値観をきちんと伝えて、自分の後継者たらしめる努力をもっとしないと、いつまで経っても、子供は女性の私物のままである。そして、女性たちが、子供を自分にしっかりと手なずけつつ、自分自身、企業定住集団での昇進を本格化させると、心の奥底で、母性に依存したままの男性たちは、寄る辺もなく総崩れになってしまうであろう。そうならないように、自分と母親との関係を見直し、「母からの心理的卒業」と「子供をコントロールする力の確立」を果たすべきなのであるということ。
（初出 2005年10月）

「母」「姑」視点の必要性　－後天的定住集団社会Ａの女性学の今後取るべき途についての検討－

[要旨] 従来の後天的定住集団社会Ａの女性学は、自分たちの立場を「娘」「嫁」といった、弱い立場の女性に限定して捉えてきました。そのため、同じ女性でも、極めて強大な権力を持つ「母」「姑」の視点が欠けているように思えます。今後はより正しい後天的定住集団社会Ａの把握のために、「母」「姑」の視点をより大きく取り入れるべきであると考えます。

既存の後天的定住集団社会Ａのフェミニズム、女性学は、社会的弱者である「娘」「嫁」の立場の女性ための学問であり、社会の支配者、権力者である「母」「姑」の立場からの視点が、決定的に欠落している。
今までの後天的定住集団社会Ａの女性学の文献を調査すると、「嫁」「妻」「女（これは未婚の女性である「娘」に相当することが多い。）」という言葉は頻繁に出てくるが、「母」となると急速に数を減らす。（それもほとんどは、女性と「母性」の結びつきを批判する内容のものであり、「母親」の立場に立った内容の記述はほとんど見られない。）「姑」に至っては、全くといってよいほど出てこない。要するに、「母」「姑」の立場から書かれた女性学の文献は、今までは、ほとんどないというのが現状だと考えられる。
要するに、後天的定住集団社会Ａの女性学は、「娘」「嫁」の立場でばかり、主張を繰り返しているようなのである。
既存の後天的定住集団社会Ａの女性学は、「後天的定住集団社会Ａの男性による支配＝家父長制」を問題視し、批判の対象としてきた。
例えば、後天的定住集団社会Ａの若い女性は、結婚相手の男性を選ぶ際に、長男を避けて次男以下と結婚しようとしたり、夫の家族との同居を避け、別居しようとする傾向がある。こうした行動を彼女たちに取らせる核心は、「婆（姑）抜き」（「お義母さんと一緒になりたくない」という一言に尽きるということ。
要するに、彼女たちにとって一番怖いのは、夫となる男性ではな

く、夫の母親である「姑」（女性！）であるということ。なぜ、彼女たちが「お義母さん＝姑」を恐れるかと言えば、姑こそが、夫を含む家族の真の管理者(administrator)であり、彼女には家族の誰もが逆らえないからである。結婚して同居すれば、夫も夫の妻も、等しく彼らの「母」ないし「義母」である「姑」に、箸の上げ下ろし一つにまでうるさく介入され、指示を受ける。従わないと、ことあるごとに説教されたり、陰湿な嫌がらせを受けたり、といった、精神的に逃げ場のないところまでとことん追い込まれてしまうのであるということ。また、経済的にも、「母」「姑」に一家の財布をがっちりと握られるため、どうしても彼女たちの言うことを聞く必要が出てくる。
こうした点、「母」「姑」こそが、その息子である男性にとっても、「嫁」「娘」の立場にある女性にとっても、等しく共通に、乗り越えるべき「後天的定住集団社会Ａの最終支配者」なのである。
特に、母子癒着こそが、「母」「姑」が自分の子供（特に男性＝息子）を、強烈な母子一体感をもって、自分の思い通りに操る力の源泉となり、「母性による社会支配」の要となっている考えられるということ。
後天的定住集団社会Ａの女性学が、そうした「母」「姑」のことを、今まで取り上げてこなかったのはなぜか？
[1]後天的定住集団社会Ａの女性学は、社会的に不利な立場にある女性の解放というのを、主要な目的として掲げてきたが、後天的定住集団社会Ａの支配者としての「母」「姑」という存在は、「弱小者としての女性を解放する」という目的に反する、厄介なものだったからであろう。いったん強大な権力者である「母」「姑」の視点を取ってしまうと、「女性＝弱者」という見方は実質的に不可能となるからである。
[2]後天的定住集団社会Ａの女性学は、女性同士の連帯・団結を重要視して発展してきたと考えられる。従来は、「娘」「嫁」「妻」の立場を取ることによって、広く女性全体がまとまりを作りやすかった。しかるに、そこに「母」「姑」の立場を持ち込むと、(a)子供を持つ「母」の立場の女性と、未だ持たざる女性、および(b)「姑」の立場の女性と、その支配を嫌々受けなくてはいけない「嫁」の立場の女性との間に亀裂が生じ、女性同士の連帯感、一体感が大きく損なわれると考えられる。そのため、女性全体の一体性を保つために、あえて「母」「姑」を無視してきたと考えられるということ。
これら[1][2]は、いずれも「臭いものにはふた」「自説を展開する上で都合の悪い事象は無視」という考え方であり、後天的定住集団社会Ａの女性学が、説得力のある内容を持った「科学」として発展

していく上で、大きな阻害要因となると言える。
(1)「女性＝世界のどこでも弱者」という見方を根本からひっくり返して、「後天的定住集団社会Ａにおいては、女性＝強者である」として、女性に関する社会現象を正しく取り扱えるようにする。
(2)女性同士の表面的な連帯感・一体感の深層にある、「母」と「未だ母ならざる女性（娘、妻）」、「姑」と「嫁」との対立を、連帯感・一体感が損なわれることを恐れずにとことんまで明らかにして、もう一度見つめなおすことで、今までの表面的なものではない、女性同士の真の、心の底からの新たな連帯の可能性を見出す。
といったことが必要なのではあるまいか？
一方、後天的定住集団社会Ａの女性学が、「母」「姑」を軽視してきたのには、以下のような理由もあると考えられる。
[3]後天的定住集団社会Ａの女性学は、視点が、男性が活躍してきた社会組織（すなわち企業、官庁）における女性の役割や地位向上に向いており、その分、家庭の持つ、一般社会に対する影響力を過小評価してきたからであるということ。要するに、家庭において「母」「姑」が権力を握っていることを仮に認めたとしても、その影響力はあくまで家庭内止まりであって、社会には影響が及ばないと考えているため、「母」「姑」を無視してきたと考えられる。
これに対しては、家庭こそが、社会における基本的な基地、母艦であり、そこから毎日通勤、通学に出かける成員たちが、いずれはそこに帰宅しなくてはいけない、最終的な生活の場、帰着地である、とする見方が考えられる。この見方からは、社会の最も基礎的なユニットが家庭であり、企業や官庁といった社会組織の活動も、家庭という基盤の上に乗って初めて成立するということになる。要するに、「家庭を制する者は、社会を制する」ということになる。
こうした見方が正しいとすれば、「母」「姑」は、企業や官庁で活躍する人々（その多くは男性。）の意識を、根底から支え、管理、制御、操縦する、「社会の根本的な支配者、管理者」としての顔を持つことになるということ。要するに、家庭は、一般社会に対して大きな影響力を持つ存在であり、その支配者としての「母」「姑」を無視することは、後天的定住集団社会Ａのしくみの正しい把握を困難にする、と言える。そうした点でも、「母」「姑」を女性学の対象に含めることが必要である。
なお、後天的定住集団社会Ａの女性学で「母」「姑」が無視されてきたのには、次のような推測も可能である。
[4]後天的定住集団社会Ａの女性学での主張内容は、そのまま女性たちの不満のはけ口となっていると考えられる。彼女たちにとって不満なのは、弱者としての「娘」「嫁」としての立場なのであって、「母」「姑」となると、社会的にも地位が高止まりで安定し、

それなりに満足すると考えられる。女性たちは、自分たちにとって不愉快な「娘」「嫁」としての立場に異議申し立てをする一方、「母」「姑」については、その申し立ての必要がなくなり、そのため、後天的定住集団社会Ａの女性学の主張内容から外れたと考えられる。
後天的定住集団社会Ａの女性学が、社会現象を正しく捉える科学として成立するには、上記のように女性自身にとって不満な点のみを強調するだけでは、明らかに片手落ちであり、何が不満で何が満足かという、両面を把握する必要があるのではないか？
以上、述べたように、今後の後天的定住集団社会Ａの女性学は、自らを「被支配者」「下位者」「弱者」として扱う、「娘」「嫁」の視点から、自らを「支配者」「上位者」「強者」として扱う、「母」「姑」の視点への転換を行うべきである。そうすることで、後天的定住集団社会Ａの女性たちは、今まで正しく自覚できてこなかった、社会の根本的な管理者、支配者(administrator)としての自らの役割に気づくことができるはずであり、そこから、新たな社会変革の視点が見えてくると考えられる。
そういう点では、今後の後天的定住集団社会Ａの女性学では、「姑」の研究、ないし「母」の研究が、もっと活発になされるべきであろう。
あるいは、従来の後天的定住集団社会Ａの歴史のような歴史学においては、姑が後天的定住集団社会Ａの真の支配者である可能性が高いのに、今まで殆どその存在が言及されて来なかった。
今後は、歴史の分野においても、新たに姑の研究が必要である。
（初出 2003年05月）

後天的定住集団社会Ａにおける母性支配のしくみ　－「母子連合体」の「斜め重層構造」についての検討－

[要旨] 後天的定住集団社会Ａでは女性が息子・娘と強力に癒着することで「母子連合体」を形成して、社会の最もベーシックな基盤である家族を支配しています。従来の後天的定住集団社会Ａの家族関係に関する「夫による妻の支配＝家父長制」という現象も、実際は、上世代の母子連合体（姑－息子）による、次（下）世代の母子連合体（嫁とその子供）支配として捉えられ、「母性による（母性未満の）女性の支配＝母権制」の一つの現れとして説明することができる、と筆者は考えます。
◇

１．
一般に、「後天的定住集団社会Ａの支配者」というと、表立っては、政治家とか官僚、大企業幹部といった人々が思い浮かぶのが普通であろう。しかし、実際には、彼ら支配者を支配・監督する「支配者の支配者」と呼び得る立場にいる人々が、表立っては見えない、隠れた形で確実に存在する。
そうした、後天的定住集団社会Ａの根底を支配する人々、すなわち後天的定住集団社会Ａの最終支配者は、実際には、一般に「お母さん。（母ちゃん。）」「お袋さん」と呼ばれる人々であるということ。彼女たちには、後天的定住集団社会Ａのメンバーの誰もが心理的に依存し、逆らえない。後天的定住集団社会Ａの男性児は、肉体的には強くても、「お袋」には勝てないのである。後天的定住集団社会Ａは「母」に支配される社会である。従来、後天的定住集団社会Ａの臨床心理の研究者たちは、後天的定住集団社会Ａを「母性社会」と呼んできたが、この呼称は後天的定住集団社会Ａにおける「母」の存在の大きさを示していると言える。
当たり前のことであるが、「母」「お袋」と呼ばれる人々は、言うまでもなく女性である。しかし、従来、後天的定住集団社会Ａにおいて女性の立場はどうかと言えば、男尊女卑、職場での昇進差別やセクシャルハラスメントの対象であるといったように弱い、差別されている被害者の立場にあるという考えが主流であった。
この場合、「女性」と聞いて連想するのは、若い「娘さん」とか、「お嫁さん」といった立場の人が主であると考えられる。「女」という言葉には弱い、頼りないイメージがどうしても先行しがちである。従来の後天的定住集団社会Ａの女性学やフェミニズムを担う人たちが「女性解放」の対象としたのは、「娘」「嫁」といった立場にある女性たちであった。
しかし、同じ女性でも、「母」という呼称になると、一転して、全ての者を深い愛情・一体感で包み込み呑み込む、非常にパワフルで強いイメージとなる。「肝っ玉母さん」といった言い方がこの好例である。あるいは、「姑」という呼称になると、自分の息子とその嫁に対して箸の上げ下ろしまで細かくチェックし命令を下すとともに、夫を生活面で自分なしでは生きていけないような形へと依存させる強大な権力者としての顔が絶えず見え隠れする存在となる。
「母」「姑」の立場にある女性は、強力な母子一体感に基づいた子供の支配を行うとともに、夫についても、自分を母親代わりにして依存させる形の「母親への擬制」に基づいた支配を行っている。家庭において、子供の教育、家計管理、家族成員の生活管理といった、家庭の持つ主要な機能を独占支配しているのが「母」「姑」と呼ばれる女性たちの実態である。

言うなれば、「母」「姑」は社会にどっしりと根を降ろし、父とは重みが段違いに違う存在である。そういう点で「母」「姑」には、後天的定住集団社会Ａの根幹を支配するイメージがある、と言える。しかるに、後天的定住集団社会Ａの女性のこうした側面は従来の後天的定住集団社会Ａの女性学やフェミニズムでは、自分たちの理論形成に都合が悪いとして「後天的定住集団社会Ａの女性には、母性からの解放が必要だ」などという言説で無視するのが一般的であった。要するに後天的定住集団社会Ａの女性学やフェミニズムの担い手たちは、自分たちをか弱い「娘」「嫁」の立場に置くのが好みのようなのである。
確かに、後天的定住集団社会Ａの夫婦・夫妻関係では、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちが「家父長制」という言葉を使うように、夫が妻を抑圧する、夫優位の関係に少なくとも結婚当初は立つことが多いように思われる。夫による妻に対するドメスティック・バイオレンス問題も、この一環として捉えられる。これは、「男性による女性支配」というように一見見えるのであるが、実際は、直系家族の世代連鎖の中で、夫の母親である「姑」が、我が息子を「母子連合体」として自分の中に予め取り込み、自らの「操り人形」とした上で、その「操り人形」と一体となって「嫁」とその子供を支配する現象の一環に過ぎないと取るべきであると、筆者は考えている。
つまり、一見、妻を支配するように見える夫も、実は、その母親＝「姑」の「大きな息子」として「母性」の支配を受ける存在であり、「姑」の意を汲んで動いているに過ぎない面が強い。その点、彼は、母親による支配＝「母性支配」の被害者としての一面を持つ。
「妻に対する夫優位」の実態は、「嫁に対する姑の優位」のミニチュア・子供版（姑の息子版）＝つまり、「嫁に対する『姑の息子』の優位」に過ぎないと言えるということ。夫が妻に対して高飛車な態度に出られるのも、「姑」による精神的バックアップ、後ろ楯のおかげである側面が強く、「姑」の後ろ楯がなくなったら、夫は妻を「第二の母性（母親代わりの存在）」として、濡れ落ち葉的に寄りすがるのは確実である。
要するに、「母性による（母性未満の）女性の支配」というのが、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちによって批判されてきた「家父長制」の隠れた実態であり、そういう点で実際には、後天的定住集団社会Ａにおける「家父長制」と呼ばれる現象は、女性同士の問題として捉えるべきなのである。この場合、「母性未満」の女性とは、まだ子供を産んでいないため、母親の立場についていない女性（未婚の娘、既婚の嫁）を指しているということ。

２．
後天的定住集団社会Ａにおいては、母親と子供との間は非常に強力な一体感で結ばれている。これは従来、「母子癒着・密着」という言葉で言い表されて来た。この、父親を含めた他の何者も割って入ることを許さない母親と子供との癒着関係をひとまとめにして表す言葉として、ここでは「母子連合体（ユニオン）」という言葉を使うことにするということ。この場合、子供は、性別の違いによって息子・娘の2通りが考えられるが、「母子連合体」は、そのどちらに対しても区別なく成り立つと考えられる。言うまでもなく、母子連合体の中で、母は、息子・娘を親として支配する関係にある。
後天的定住集団社会Ａの直系家族の系図の中では、「母子連合体」は、複数が重層的に積み重なった形で捉えられる。世代の異なる「母子連合体」の累積した「斜め重層構造」、より分かりやすく言えば「（カタカナの）ミの字構造」が、そこには見られる。新たな下（次世代）の層の「母子連合体」の生成は、家族への新たな女性の嫁入りと出産により起きる。この場合、より上の層に当たる、前の世代の母子連合体が、より下の層に当たる、次の世代の母子連合体を、生活全般にわたって支配すると捉えられる。上の世代の母子連合体に属する成員の方が、下の世代の母子連合体に属する成員に比べて、その家庭の行動規範である「しきたり・前例」をより豊富に身につけているため、当該家庭の「新参者」「新入り」である下の世代の母子連合体の成員は、彼らに逆らえない。この「母子連合体の斜め重層構造」を簡単に図式化してみたということ。

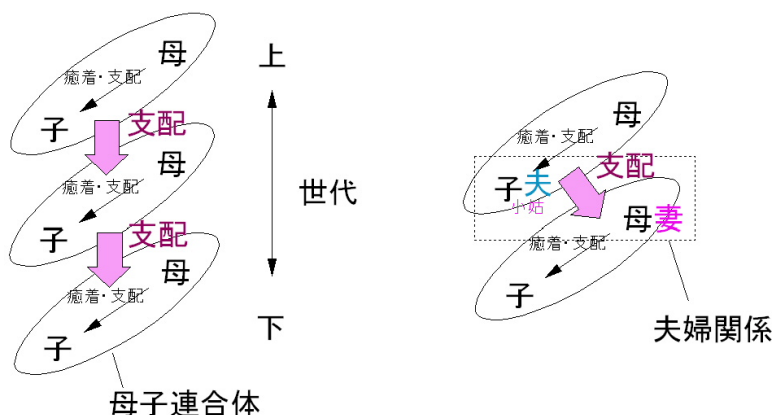



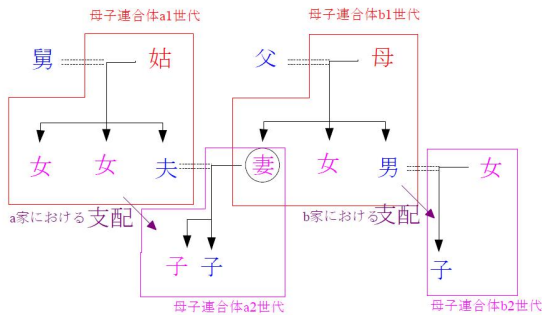
図　日本家族における母子連合体の斜め重層構造

こ

こで着目すべきことは、家族の系図において、夫婦関係のみを取り出して見た場合、夫＝姑の息子は、上の世代の母子連合体に属し、妻＝嫁（あるいは姑の息子にとって自分の妻になりそうな自分と同世代の女性。）は、次の世代（下の世代）の母子連合体に属するということ。（あるいは、属する予定であるということ。）夫婦間で夫が妻を抑圧・支配しているように見える現象も、実際は上の世代の母子連合体の成員（姑の息子）が、次の世代の母子連合体の成員（嫁）を抑圧・支配しているというのが正体であると考えられる。要するに、姑が、息子を自分の陣営に取り込む形で嫁を抑圧しているというのが、夫による妻抑圧のより正確な実態と考えられる。この場合、夫は、自立・独立した一人の男性と捉えることは難しい。（従来の後天的定住集団社会Ａの女性学が「家父長」と称してきたような男性と捉えることは難しい。）むしろ「姑の息子」「姑の出先機関・出張所」として、姑（母親）に従属する存在として捉えられるということ。嫁にとっては強権の持ち主に見える夫も、その母親である姑から見れば自分の「分身・手下・子分」「付属物・延長物」であり、単なる支配・制御の対象であるに過ぎない。
母子連合体の支配者は母親であるから、家族という母子連合体の重層構造の中では、実際には母である女性が一番強いことになる。これは、後天的定住集団社会Ａが、見かけは「家父長制」であっても、その実態は「母権制」であることの証明となる。
後天的定住集団社会Ａの男性は、母子連合体において、母によって支配される子供の役しか取れない（母になれないということ。）ため、家庭～社会において永続的に立場が弱いということ。（上記の母子連合体説明図において、「父」の字がどこにも存在しないことに注目されたい。これは、後天的定住集団社会Ａの家庭において、父の影が薄く、居場所がないことと符合する。後天的定住集団社会Ａの家庭では、男性は、その母親の「子」としてしか存在し得ないということ。）
この辺の事情を説明するのが、「小姑」と呼ばれる女性の存在である。つまり、嫁として夫（の家族）に忍従してきた女性が、一方では、自分の兄弟の嫁に対しては、「小姑」として高圧的で命令的な支配者としての態度を取るという、矛盾した態度を引き起こしている、という実態である。要するに、女性は、2つの異なる世代の母子連合体に同時に属することができるのである。「小姑」として威張るのは、上の世代の母子連合体に属する立場を、「嫁」としてひたすら夫（の家族）の言うことを聞くのは、次の下の世代の母子連合体に属する立場を、それぞれ代表していると考えられるのである。
要は、上の世代の母子連合体の成員である、姑、夫（姑の息子）、

小姑が一体となって、自分たちの家族にとって異質な新参者である夫の妻＝嫁（下世代の母子連合体成員）を、サディスティックに支配しいじめているのであり、それは、企業や学校における既存成員。（先輩）による「新人（後輩）いびり」「新入生（下級生）いじめ」と根が同じである。これらのいじめを引き起こす側の心理的特徴は、共通に「姑根性」という言葉で一つにくくることができる。
ここで言う「姑根性」とは、要は、相手を自分より無条件で格下と見なすということ。（相手を自分より格下であるべきとするということ。）相手の不十分な点を細かくあら探ししたり、相手の優れた点を否定する形で、相手を叱責・攻撃し、相手の足を引っ張り、相手を心理的に窮地に追い込んで、自分に無条件で服従、隷従させようとする心理であるということ。
後天的定住集団社会Ａの若い男性が、同世代の女性に対して、高圧的で威張った態度に平気で出るのは、単に「男尊女卑」の考え方があるというだけではない。自分たちが、未来の家族関係において、結婚相手の候補となる同年代の女性たちよりも、一つ前の世代の母子連合体に属することが決まっているため、母子連合体の「斜め重層構造」から見て、「嫁」となって一つ下の世代の母子連合体を構築するはずの同年代の女性を、自分の母親と一緒になって、一つ上の母子連合体の成員として支配することができる有利な立場にあるからである。
夫による妻への暴力であるドメスティック・バイオレンス(DV)は、夫による妻の暴力を利用した支配、いじめということで、一見、男性による女性支配に見えやすい。しかし、実際には、後天的定住集団社会Ａの家族の場合においては、妻＝嫁を支配したり、いじめたりしているのは、夫だけに限ったことではなく、夫の母親である姑や、夫の姉妹である小姑も、夫の妻＝嫁をサディスティックに支配し、いじめている。
この点、夫によるドメスティック・バイオレンス(DV)は、実は、上世代の母子連合体成員（姑、夫、小姑）による、下世代の母子連合体成員（嫁とその子供）の支配、いじめの一環に過ぎないと言えるということ。要は、後天的定住集団社会Ａにおける夫による妻へのドメスティック・バイオレンスは、嫁いびりをする姑のいわゆる「姑根性」と根が同じというか、その一種なのである。家族定住集団風、その家族定住集団の流儀を既に身につけた成員（姑、夫、小姑）＝先輩による、家風をまだ身につけていない新人、後輩（＝嫁）いじめの一種とも言える。
この場合、男性が高圧的になれるのは、男性自身に権力があるからでは全然なくて、心理的に（一つ上の世代の）母子連合体を一緒に

形成する自分の母親という後ろ楯があるからであり、そこに、後天的定住集団社会Ａの男性の母親依存（マザーコンプレックス）傾向が透けて見えるのである。
夫が妻に対して、高飛車で命令的で、乱暴な態度に出られるのも、夫がその妻よりも、一つ上の世代の母子連合体に属することで、妻とその子供が形成する次の下位世代の母子連合体を支配することができるからである。
この場合、見かけ上は、夫は妻（嫁）よりも常に優位な立場にいることができる訳であるが、だからと言って、それが後天的定住集団社会Ａにおいて男性が女性よりも優位である証拠かと言われると、それは間違いであるということになる。つまり、夫は男性だから優位なのではなく、「姑の息子」だから＝妻よりも1世代前のより上位の母子連合体に属するから、妻よりも優位なのである。
要は、夫（姑の息子）による妻（嫁）の支配は、小姑による嫁の支配とその性質が同じである。夫も小姑も、嫁よりも一つ上世代の母子連合体の成員＝嫁にとっての先輩だから、嫁を共通に（嫁を後輩として）支配できるのであるということ。この場合、言うまでもなく、夫は（小姑も。）、その母と形成する母子連合体の中で、母である女性の支配を受ける存在であるということ。
要するに、夫は、母親である姑と癒着状態で、その支配下に置かれており、その点、後天的定住集団社会Ａにおいて本当に優位なのは、「母＝姑」である女性であり、その息子として支配下に置かれる男性（夫）ではない。この点、後天的定住集団社会Ａは女性＝母性の支配する社会であり、男性社会ではない。
後天的定住集団社会Ａの家庭においては、先祖代々、夫が威張って、妻が服従的な態度を取ることが繰り返され、それが、後天的定住集団社会Ａの家庭は、男性優位という印象を与えてきたわけであるが、実際には、その高飛車な夫が、その母親である姑の全人的な密着した支配下に置かれた「姑の付属品、出張所」に過ぎない存在であることを考えれば、後天的定住集団社会Ａの家庭は、実際には先祖代々恒常的に、母性＝女性優位である、と言える。
おとなしく夫に従属しているかに見える妻も、実際のところ、その子供と強力に癒着して、何者も割って入ることのできない強烈な一体感のうちに、自分の子供を支配している。妻の子供（息子）は、大きくなっても、その母（夫にとっての妻）と強い一体感を保ち、母に支配された状態のまま、結婚をするということ。そして妻は、その息子を通して、新たな結婚相手の女性とその子供を支配することになる。
要するに、母子連合体においては、母はその子供（息子、娘）の全人格を一体的に、息苦しい癒着感をもって支配する存在であるとい

うこと。後天的定住集団社会Ａの直系家族は、その母子連合体が、上世代の連合体が下世代の連合体を支配する形で積み重なって形成されてきた。後天的定住集団社会Ａの直系家族は、「母による子供の支配」の連鎖、重層化によって成り立ってきたと言える。
こうした母子連合体重層化の考え方は、「後天的定住集団社会Ａの家族において、夫婦関係が希薄で、母子関係が強い」、という家族社会学の従来の見解とも合致する。後天的定住集団社会Ａの家族では、各世代の母子連合体に相当する母子関係が非常に強力で家族関係の根幹をなしており、夫婦関係は、異なる世代の母子連合体同士を単にくっつけるだけの糊の役割を果たしているに過ぎないため、影が薄く見えるのである。
以上述べた母子連合体重層化のありさまを、家系図の形で表した図を作成したということ。

左図は、a家の第２世代の妻（○印）（＝同時にb家の第１世代に属する）を中心に眺めた図である。

母子関係にある＝母子連合体を形成している者同士が実線と矢印で結ばれている。

a家の第１世代母子連合体がa1、第２世代がa2であり、第１世代母子連合体a1が第２世代a2を支配している。

b家の第１世代母子連合体がb1、第２世代がb2であり、第１世代母子連合体b1が第２世代b2を支配している。

図 母子連合体重層構造の家系図による説明

母と複数の子供との関係は、母子連合体の重層的なクラスターとして捉えられる。以下の図を参照されたいということ。

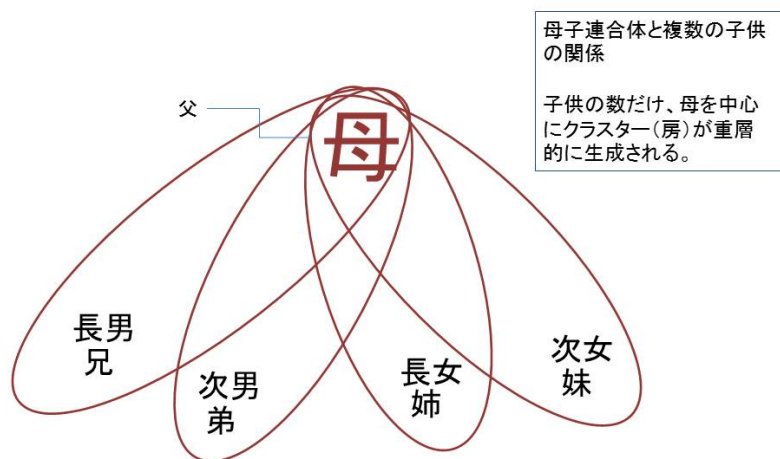



図　母子連合体クラスター

以
上述べたように、後天的定住集団社会Ａでは女性が「母子連合体」を形成して、社会の最もベーシックな基盤である家族を支配している。従来の後天的定住集団社会Ａの家族関係に関する「夫による妻の支配＝家父長制」という現象も、実際は、上世代の母子連合体による、次世代（下世代）の母子連合体支配として捉えられ、それは、母子連合体の中における母による息子・娘の支配という関係を視野に入れることで、「時系列的に上位の世代（前の世代）の女性（母性＝姑）とその配下の子供（息子＝夫、娘＝小姑）による、下位（後）の世代の女性（嫁またはその候補）の支配＝母権制」の現れとして説明することができる。
以上は、後天的定住集団社会Ａの家族について説明したものであるが、この「母子連合体」の概念は、育児における母子癒着の度合いが強い他の定住生活中心社会群ＡＢＣの社会（先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１．．．）における家族関係にも応用可能と考えられる。
（初出 2002年04月）

「母性的経営」　-後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁組織の母性による把握-

[要旨] 後天的定住集団社会Ａの企業定住集団や官庁は、その性質が

母性的と捉えられます。筆者は、その際、成員の母親が、自分の子供(主に息子、男性)を組織へと没入させ、完全帰属させる心理を生み出しており、組織を「母性的」たらしめる原動力・エネルギー源となっていると考えます。母性的組織としての後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁を成立・維持させているのが、成員の母親たちであり、従来「後天的定住集団社会Ａに特有経営」と言われてきた経営のあり方の特徴は、「母性的経営」と呼ぶことができると捉えます。

1.母性的組織と成員との関係
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁といった組織は、成員同士の温かな全人格的一体感、包含感を重んじ、組織の「ウチ」「ソト」を厳しく峻別して閉鎖的な態度を取るということ。成員の組織への依存心を育むということ。（「寄らば大樹の陰。」）成員に対して母親のように接する、母性的な性格を色濃く持っているということ。そうした組織のあり方は、例えば「母性的組織」と呼ぶことができる。
母性的組織に属するのは、その成員にとっては、あたかも実際の「母の胎内」に抱かれているのと同じような温かい一体感をもって捉えられる。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁組織は、それ自体が、一つの大きな「母的存在」として成員の前に現れる。後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって、企業定住集団、官庁に就職することは、「母の胎内」に入り込み、その中に抱かれるのと同じ感覚である。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁組織の成員は、組織と全人格が完全に一体化しており、自分と企業定住集団を、ドライに切り離して考えることができない。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は、母性的組織なので、成員は全人格を拘束され、捧げなければいけない。成員は、自分の周囲を、母性的組織としての企業定住集団・官庁に完全に包囲されており、逃げ場がない。
後天的定住集団社会Ａの男性は、企業定住集団・官庁で全てのエネルギーを使い果たす。企業定住集団が、自分の人生にとって100％である。その点、母性的組織は、成員の全てを包み、呑み込み、吸い取る、と言える。
全てのエネルギーを企業定住集団で使い果たした男性は、自宅に戻って、母や妻に対して「自分の世話をしろ」と寄っ掛かってくる。母の場合は、自分の子供だからその態度を十分許容できるが、

妻の場合は、元は赤の他人なので、男性（夫）の態度に、気遣いが足りないと感じ、不満に思う。
組織で働く男性たちは、そもそも疲れていて気遣いする余裕がない。もともと、「自分のことを世話してくれて当然」と思っているので、思わず横柄な態度に出てしまうということ。
組織の成員が、組織に全人格を束縛されても、何ら意に介さず、むしろ満足感を得ているようなそぶりを示すのは、成員の持つ、組織に温かく一体感をもって抱かれたいという欲求が根底にある。それは、母親を求める欲求と根が一緒である。母性的組織の持つ温かい一体感が、成員を仕事から抜けにくくさせている。
成員にとっては、企業定住集団の組織目標に自己の人生目標が一致している。と言うよりは、企業定住集団の目標に自己を没入させている。組織目標に自分を合わせているということ。合わない面を無意識のうちに殺しているということ。これは、一種のマゾヒズムである。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団、官庁のような母性的組織は、成員の全人格を呑み込み、掌握・管理し、成員の全エネルギーを吸い取る。成員に全エネルギー、全時間を自分のために費やさせるということ。
後天的定住集団社会Ａでは、所属する組織に全時間を費やすことが理想的な男性像とされている。遅くまでサービス残業をして組織に尽くさせるような心理的な仕組みが出来上がっている。所属組織のための労働を最優先に考える「労働至上主義」、自分の所属する組織のことを何をさておいても第一に優先させる「所属組織第一主義」が、母性的組織のイデオロギーである。
成員は、組織の中で、自分の全てを消費・燃焼させる。残りは、もぬけの殻状態である。
一方、成員にとっては、母親に対するのと同じ、周囲との一体感を求める要求を、企業定住集団・官庁組織に属することで満たすことができるというメリットがある。企業定住集団・官庁組織が、母親の温もりと同じ快感を成員に対して与えている。成員は、自分が心の奥底で求めている温かな相互一体感を満たすために、積極的に、企業定住集団・官庁組織に入ろうとする、という側面もあることを忘れてはならない。
2.母性的組織と「専業主婦」
組織のために100％働いた成員は、自分で自分のことを世話する余力、余裕がない。そのため、組織の外側に成員のサポートをする役目の人間、成員の管理・世話役の存在が必須となる。それが、従来「専業主婦」と呼ばれてきた人々である。彼らは、母性的組織の外側にいながら、実は、母性的組織の申し子、協力者なのである。

専業主婦が家族定住集団を守らずに外に働きに出るということ。（兼業になるということ。）それは、組織成員の心理的バックボーンとしての役割がおろそかになるということ。組織成員のサポートが十分でなくなるということ。成員が不安を覚えて十分な働きができなくなるということ。そのように、組織で働く側からは見なされ、非難の対象となる。専業主婦がいないと、母性的組織は、成員のサポートが不十分になり、維持ができなくなるのである。
専業主婦は、組織成員を心理的に支えるために「100％専業」でなければならない。後天的定住集団社会Ａにおいて女性一般の職場進出を阻んでいる理由が、実は後天的定住集団社会Ａの職場組織が母性的だからであって、成員に組織に対して100％の一体化・献身を求めるからだということになる。この現象は、キャリア指向の「女性」と「母性」的組織との対立として捉えられる。
後天的定住集団社会Ａにおいて、女性に学歴が求められず、企業定住集団でも昇進差別があるのは、女性が劣った存在と見なされているからでは全くない。それは、若い女性に対して、「専業主婦」という、母性的組織の維持に非常に重要な役割を果たすことを受け入れる方向へと進路を取るように、「専業主婦」以外の道をわざと魅力なく見せるというやり方で社会的誘導が行われている証拠である。
専業主婦業の内容と学歴とは今のところあまり関係がないので、わざわざ高い学歴を取ってもあまり意味がない。また、母性的組織にとっては、大勢の女性たちに企業定住集団に居残られることで、成員の組織外サポート役としての「専業主婦」の供給が不足するのも困る。（成員の結婚相手が「専業主婦」でないせいで、成員が組織のために全力投球してくれなくなるから。）なので、わざと待遇を悪くしているということ。
ちなみに、専業主婦は、組織成員の全人格的な管理・制御を行う「管理者administrator」として、振るうことのできる実質的な権力は、管理される立場である男性を上回る。それは、特に、専業主婦が成員の母親である場合に言えることである。
母性的組織の成員が女性の場合、組織外のサポート役、世話役に異性の男性を見つけることが難しい。男性は、組織で働くことがデフォルトとして考えられているからである。組織外の世話役は同性の女性が想定されてしまう。そのため、組織で働き続ける、組織内で出世しようとする女性は、結婚出来ず、独身を貫く事になってしまいやすい。
そうかといって、結婚すると、男性に、組織の外でサポート役になることを求められ、組織内で働き続ける事を止めなくてはいけなくなる。これは、江戸時代の御殿女中以来の、母性的組織で働く女性

が抱える根本的な課題である。
もちろん、組織外でのサポート・世話役（専業主婦）の役目には、家計管理の元締め、子供の全人格的統制・教育といった重要でうま味のある役得がある。特に、「母」になると、自分の子供（特に息子）を完全に「子分」にして操縦でき、企業定住集団や官庁に好きなように再投入できるようになるため、そのうま味が格段に上昇する。
3.母性的組織と成員の「母親」
従来は、専業主婦というと、妻の立場ばかりがクローズアップされ、関心を集めてきた。しかし、実は、母の立場の方がより重要である。つまり、自分の息子・娘を、組織に送り込む存在としての「母」であるということ。
成員を、母性的組織の一員として、組織内での自己のエネルギーを完全燃焼へと向かわせるのに、成員の母親の果たしている役割が非常に大きい。母親こそが、自分の子供（主に息子、男性）を組織へと没入させ、完全帰属～全エネルギーを燃焼させる心理を生み出しているということ。また、組織を「母性的」たらしめる原動力・エネルギー源となっているということ。母性的組織を成立・維持させているのが、成員の母親なのである。
母性的組織の主役は男性であり、母性の本来の担い手である女性ではないという、逆説的な現象が起きている。男性が母性的な行動を取っている。彼らは、母なる組織に一体感・甘えを求めて、没入・帰属している。そうした母性的な行動を取らせているのが、男性たちの母親である。彼女たちが母性的組織の本当の生みの親なのである。
母親がなぜ息子を組織に強く一体化させるかと言えば、母親が息子を自分の自己実現の駒、道具として使っているからである。母親は息子を組織へと駆り立て、組織内での出世競争に邁進させる。息子が組織内で偉くなる事が、すなわち、自分にとっての自己実現ということになる。妻も、母親と同じ考えを継承する。
母親は、また、息子以上に「（息子の企業定住集団の人間。）企業定住集団人間。」である、という側面を持つということ。彼女らは、息子の勤めている企業定住集団の業績や社会的なステータス。（どの位、格が高いかなど。）の上下に、まるでわがことのように一喜一憂するということ。母親自身が、息子の所属する組織と心理的に一体化したかのように振る舞うのである。
母親は、息子に組織に全人格的に一体化させて、息子が「自分（息子自身）⊆組織」と見なすように仕向けるということ。そして、息子に、「企業定住集団人間」として、所属組織の中で全エネルギーを出して組織の業績向上・格上げに寄与させ、他の成員との間で昇

進競争をさせることで、息子の組織の格上げ＝母親自身の格上げ、息子の昇進＝母親自身の昇進、のように見なすということ。組織の社会的格式の上下は、組織成員の母親の社会的格式の上下と連動している。組織成員同士の昇進競争は、実はその背後に、彼らの母親同士の競争という側面を隠し持つと言える。
（注）この場合、上記の官庁・企業定住集団に入った息子を昇進に駆り立てる母親の行動は、「教育ママ」の取っている、自分の子供を少しでもいい学校に入学させるために、子供を叱咤激励する行動と共通する。
こうした母親による息子（＝組織成員）の私物化やコントロール。それは、母親と息子が、相互に癒着し、強い絆で結ばれる「母子連合体」を形成しているということ。（「母子連合体」の概念の説明は、本書の他セクションを参照して下さい。）息子が、程度の差はあれ、自然と母親の意を汲んで自発的に行動するということ。それだからこそ可能となる。
母親にとって自分の子供、特に息子を活躍させるのに望ましい組織像を実現したのが、母性的組織としての後天的定住集団社会Ａの企業定住集団、官庁である。息子の組織での活躍が、そのまま母親の自己満足につながる。言わば、母性的組織は、組織成員の母親にとって、主要な自己実現の場なのである。一方、組織にとっては、成員の母親は、成員（自分の息子）に一生懸命組織のために働くように仕向けてくれる、組織活動のエネルギー源として欠かせない存在であるということ。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団、官庁の性格が母性的なのは、成員がその母親の意を汲んで行動するため、相互の一体感や相互依存を重んじるなどといった、成員の母親の意向・価値観を反映した、母親好みの性格を持つように至ったと言える。その点、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁の真の主役は、表面的に主役として振る舞っている男性成員ではなく、彼らを自分の自己実現の駒として、より上位の地位を目指して働くようハッパをかけている母親たちであると言える。母性的組織の真の支配者は、成員（企業定住集団の代表、管理職～企業定住集団の普通メンバー）の母親であるということ。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団、官庁は、自分の母親たちによって母性色＝真っ赤な赤色に染められた「真っ赤な戦士」「赤色兵士、兵隊」（それは、男性のことが多い。）の着ぐるみのキャラクタが表に出て活躍しているさまを思い浮かべて貰えると分かりやすいかも知れない。活躍しているのは確かに男性メインなのかも知れないが、彼らは自分たちの母親によって、完全に赤い母性の色に染まり、その行動は、母性的、女性優位色彩の強い、集団主義、和

合、協調性の重視、年功序列、リスク回避メインのものになっている。この場合、男性自身が活躍しているというよりは、男性を母性色に染め上げた大本の母親、女性が実質的に活躍していると捉えることができるのではないだろうか。こうした、上辺だけの男性の活躍の場である企業定住集団、官庁。（それらは、実質母性に支配されている。）それらを、男社会だと呼ぶのは不適当である。
また、母親は、組織のために100％エネルギーを尽くす自分の息子に対して、彼をサポートする次世代の世話役、専業主婦を、自分の嫁として求める。その点、キャリア志向の若い女性を邪魔する「専業主婦」「良妻賢母」イデオロギーは、実は、男性の「母」「姑」の要請に基づくものである、とも言える。要するに、フェミニストや女性学者によって批判されてきた、女性は専業主婦であれとする「専業主婦」イデオロギーは、実はキャリア志向の女性と同性である、（男性たちの）「母」「姑」＝女性によって担われてきた側面があるのである。
また、企業定住集団で働く女性の中には、「男性が仕事に専念して、企業定住集団の重役とか偉い地位を独占している。自分たちは偉くなれない。」と男性を批判する人たちがいる。実際のところ、そうした、企業定住集団の仕事ばかりを一生懸命やって、家事をほとんど手伝わず、企業定住集団で昇進することに必死な男性たちを作り出しているのが、彼らの母親や、母親代わりの専業主婦指向の妻たちなのである。彼らの母親たちが、彼らに、もっと仕事をしてもっと偉くなりなさいとハッパをかけているのであり、彼らを必死になって働かせる影の原動力となっている。企業定住集団で働いていて、男性たちのせいで昇進できないと不満をもらす女性たち。彼女たちは、自分たちの本当の敵が、以下の女性たちであることに気づいていない。自分たちと同性の女性たち＝（男性の）母親たちであるということ。あるいは、それは、（男性の）母親代わりの専業主婦指向の妻たちであるということ。
企業定住集団の中で女性たちが昇進するようになるには、男性たちの母親や妻たちが、自分の自己実現の駒として男性たちをあてにするのを止めさせるしかない。つまり、男性たちの母親や妻たちが、自分の自己実現を、男性経由でなく、自分自身で行おうと決心させるしかない。彼女らが、男性を昇進へとせき立てるのを止めれば、男性は、必死になって家庭を省みずに働くのを止めて、自ずと仕事以外にも生きがいはいろいろあることに気づくだろう。そうすれば、従来男性にかかっていた仕事への圧力が弱まり、昇進へせき立てられる気持ちも弱まり、女性に道を譲るようになる。その分、女性が活躍して、昇進する余地がどんどん開けてくる。
要は、男性たちの母親（妻）が、息子（夫）の昇進を自分の生きが

いとすることを止めさせるのが、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁組織において、女性たちが（男性並に）昇進するようになる一番の早道と言えるということ。このことは、今までほとんど誰も言及して来なかった重要事項である。
その他、自分では給与を稼ぐことをせず、息子（夫）の経済的稼ぎをあてにしてATM（現金を女性側で一方的に勝手に引き出せる、自動現金預け払い機）扱いし、少しでも多く稼いでくるように、尻を叩いて働かせ、昇進をせき立て、かく言う自分は、家庭の財布の紐をがっちり掌握しているのをいいことに、息子（夫）に最低限の小遣いしか渡さない一方、自分は握っている家計の弾力的運用で自由に高い買い物を楽しみ、なおかつ「三食昼寝付き」の生活を希望し、息子（夫）の稼ぎが悪くて、自分も働かなければならなくなったら、「甲斐性のない息子（夫）だわね」と悪態をつきながら、仕方なく働きますか、というところが本音の、専業主婦指向の女性たちが未だに数多く存在するということ。（彼女たちが、未だに社会で主流であるということ。）、彼女たちが、男性を精神的余裕なく、給与稼ぎや昇進目当ての仕事に没頭させるのに多大な貢献をしているのである。こうした女性たちをなくすのも、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁組織において、従来男性にかかっていた仕事への圧力が弱まり、女性たちが（男性並に）昇進できるようになる上で極めて重要であると言えるということ。
ちなみに、後天的定住集団社会Ａにおいて、従来、性別役割分業を支持し、妻に対して、「専業主婦になって欲しいということ。仕事して欲しくないということ。」と宣言する夫は、たいがい、上記の母親の欲求を、そのまま汲んで妻に対して反映しているのが実情であると言える。
4.母性的組織の持つ隠れた罠
母性的組織には、母親の視点から見ると、もう一つの隠れた側面がある。それは、息子を嫁から切り離すため、息子を嫁に奪われないようにするため、息子を嫁の待つ家庭に帰らせずに、組織（企業定住集団、官庁）に没入させる、という側面であるということ。それは、母親自身と息子との母子連合体（相互癒着関係）を維持するとともに、嫁の世代における母子連合体を再生産するということ。
夫は「家族（妻子）のため一生懸命働く」と言うということ。彼らは収入を得て、家族の経済的な支えとなろうとして、仕事に自分の全時間を注ぎ込む。しかし、そのことが、夫の思いとは裏腹に、家族（妻子）とのコミュニケーション不足をもたらし、家庭内での妻子からの疎外につながっているということ。
実際のところ、夫の注意・関心は、自分の働く組織に全面的に絡め取られている。と言うのも、夫は、関心・注意を、自分の属する企

業定住集団・官庁組織に専ら向けるように、母親によって無意識のうちに仕込まれているからである。夫の家族（妻子）とのコミュニケーション不足や、家庭内孤立。それは、夫の母親によって暗黙のうちに仕組まれた事態であるということ。（息子に自己実現の夢を託すということ。息子と嫁を切り離そうとするということ。）
そうした、（自分の所属する企業定住集団を一次として）自分の家庭（妻子）を二の次にしてしまう後ろめたさが、「自分は家族のために一生懸命自分を犠牲にして働いているんだ」という言い訳になる。そして、家族のために働いているという言説の正当化のために、自分の家庭に対して及ぼす力を最大限に見積もろうとし、それが、自分自身を家父長と強迫的に見なそうとする原動力となる。
単に、夫-妻のラインを見ただけでは、夫妻のコミュニケーション不足、夫によるコミュニケーション能力の欠如としか見えない現象が、実は、母 - 息子（＝夫）のラインに注目する事で見えてくるということ。なぜ、息子＝夫が一生懸命企業定住集団勤めをするか、なぜ妻とコミュニケーションしないかが見えてくる。
緊密な母子一体感のうちに、母親が息子（自分の子分）に対して、母親自身の自己実現の手段として、組織で一生懸命働いて出世・昇進するようにハッパをかけるということ。組織で働く息子は、母の自己実現のための手先である。それとともに、母は、息子に組織で全ての力を吐き出させ、妻＝嫁との間でコミュニケーションを行うためのエネルギー余力が残らないようにして、夫妻。（息子と嫁）間を分離させようとするということ。
5.母性的組織と白紙採用・終身雇用
母性的組織は、内部で強固な（成員相互の）一体性・同質性を保持する分、対外的には閉鎖的であり、集団内と外とを厳格に区別し、よそ者に対して門戸を閉ざす。
例えば、後天的定住集団社会Ａにおける中央官庁や大企業では、成員の採用の機会は新規学卒一括採用がほとんどで、白紙状態でまだどの社会集団の色にも染まっていない若者に対してのみ門戸を開く。（「色」とは、しきたり、組織風土などである。）この慣習は「白紙採用」という言葉で言い表すことができる。そこでは、本格的な中途採用の道は閉ざされている。純血性を保った自集団（「ウチ」）内で他集団に対抗する形で強固に結束し、内部に縁故（コネ）の糸をはりめぐらすということ。
後天的定住集団社会Ａにおける母性的組織は、強固な閉鎖性、純血指向性を持ち、基本的に新規学卒一括採用の際しか外部に対して採用の門戸を開こうとしない、中途で所属する社会集団を変更することを許さない。学生は事実上一生に一回しか、中央官庁、大企業といった、社会的に大きな影響力を持つ組織に入れるチャンスがない

ので、そこでうまく希望の組織に入ることができるように、学歴や、学閥のようなコネの獲得に躍起となるのである。
また、いったん集団に入ると、「定年やリストラなどで用済みになるまでその中にずっとい続けるということ。（浮気をしないということ。）」＝「終身雇用」が要求される。
白紙採用や終身雇用がなぜ必要か？組織内成員の同質性を確保し、成員間に強固な一体感を持たせることを可能とするために必須である。
いったんある組織に入った成員は、全人格的にその組織固有の色に染まることになる。この場合、「色」とは、その組織固有の規範、しきたり、慣習、心理的風土といったものを表している。
成員は、「白紙」の場合のみ、その組織固有の「色」に染め上げることができる。同じ「色」を持つ成員同士は、互いに同質であり、強固な一体感で結ばれる。こうした組織内の同質・一体性を強く求めるのが、母性的組織の特徴である。そうした点から見ると、組織成員を同一の色で染め上げる上での前提条件となる「白紙採用」は、組織成員の同質性・一体性を確保しようとする母性的組織にとって必須であることが分かる。
成員が既に「他の色付き」の場合には、既に付いている色がじゃまをして、組織本来の色に染め上がらないため、「色」の面で他成員との間の一体性、調和を乱すこととなる。母性的組織では、「他の色付き」は、そうした点で、本質的に忌避されることになる。
白紙状態の若者は、一回ある組織に入ると、その組織固有の色に染まった「色付き」になる。そうなると、他の組織にとっては既に「他の色付き」となり、忌避すべき存在となる。そのため、いったんある組織に入ってその組織固有の色が付いた者は、他の組織に移ることができず、一生、最初に入った組織で過ごさなければならない。
母性的組織においては、自分たちとは違う「他の色付き」のよそ者は、自分たちとは異質な分子であり、自分たちと行動様式が異なり、何を考えているか分からないので安全でない、一緒になると自分の属する集団のしきたりや風紀を乱すことを平気でされるのではないかと不安で、安心できないと考える。「他の色付き」のよそ者を中に入れることが、組織成員相互の一体感の保持に悪影響を与えるという母性的な心配が、気心の知れた安全な身内だけで身辺を固めようとする、閉鎖的な風土を生み出す要因となっている。
なお、この「他の色」付きの忌避は、身内集団内部の一体感を保つため、よそ者が入るのを防いでいるという点、母性が好む互いの一体融合性を維持しようとする働きに通じるものがある。
成員は、ある組織の色に染まると、他の組織には、「既に、他の色

付きである（白紙でないということ。）」と見なされ、自分たちとは違う「色」を持つ者＝組織の同質性、調和を乱す者として疎んじられ、移ったり入ったりすることができない。そのため、よくも悪くも最初に入った組織に「飼い殺し」になり、一生をその組織で過ごすことになる。これが母性的組織において「終身雇用」現象が起きる真の原因である。
成員の「終身雇用」は、成員の「白紙採用」と表裏一体の関係にある。この両者は共に、母性的組織における成員の出入りを決定する慣習であり（「白紙採用」が組織への「入り」、「終身雇用」が組織からの「出」に関わる。）、互いに切り離せないものであるということ。その点、「白紙採用」も「終身雇用」も、両方とも組織の母性性を保つ上での根幹に関わる重大な特徴である。
こうした、「組織内＝同一色への染め上げ」へのこだわりが、後天的定住集団社会Ａの中央官庁・大企業のような母性的組織において、成員の中途採用を妨げる大きな要因となっている。
また、ある組織にいったん入ってその組織の色に染まると、他組織への転進が効かないという現象は、「どの組織に入るか」という最初の選択で失敗した若者にとって、そのままでは人生のやり直しが効かないことを意味する。最初の組織選択で失敗した者は、一生後悔しながら、その組織に「飼い殺し」になる他ない。組織から出て、「ベンチャー起業家族定住集団」として自分で一旗上げる途も存在するが、困ったことに、後天的定住集団社会Ａのような母性的な（女性優位の）風土の社会では、「ベンチャー」は、冒険的過ぎる、危険すぎるとして嫌われ、十分な社会的サポートが得られないのが現状である。
こうした「組織選択における、やり直し不能性」は、母性的組織の抱える大きな問題点の一つである。
こうした「終身雇用」「中途採用の忌避」といった性質は、成員間の全人的一体感を重んじる閉鎖的な母性的組織において本質的、不変的なものであり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の父性的組織（それは、成員の出入り流動性、組織の開放性を重んじる。）が優勢になった際に一時的になりを潜めるだけで、その本質は変わっていないので、時流の変化に伴い、再び不死鳥の如く生き返ると考えられる。
6.「母性的経営」 - 組織分析における「母親中心」視点の重要性 -
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁の組織が母性的となるのは、組織成員が母親の色に強く染まっているためであり、成員の母親たちの力が強く作用している証拠である。組織成員は、母親の意向を汲んで仕事をしている側面が強い。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁組織は、男性たちが主に活躍しているので、男

性中心と一見間違えやすいのであるが、実際は、彼らの母親の強い息がかかった、彼らの母親の意向によって左右される、実質的には母性中心の組織であるということ。（それは、ある意味、女性中心とも言える。）
要するに、男性が彼ら自身の母親の支配を受けているため、いくら要職を男性が占めていても、組織は母性的となるのである。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのように、ドライな父性的社会では、父親＝男性を、社会の中心に据えて、社会を分析するのが有効である。しかし、それを、今まで後天的定住集団社会Ａの学者たちがしてきたように、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ生まれの「家父長制」社会の理論を、後天的定住集団社会Ａのようなウェットな母性的社会にそのまま当てはめようとすると、社会はうまく分析出来ない。
後天的定住集団社会Ａのようなウェットな母性的社会では、母親役の女性を、社会の中心に据えて、母親の社会に及ぼす影響を常に念頭に置きながら、社会を分析すべきである。すなわち、母親を分析対象となる社会の中心に据えて考える、「母親中心の視点」が求められるのである。それは、母性的組織の分析においてもそうであって、組織の外にいて、組織とは一見関係ないはずの、組織成員の母親の持つ、組織に対する影響力の巨大さを、今後はもっと重視すべきであろう。
従来言われてきた「後天的定住集団社会Ａに特有経営」は、その経営のあり方が、組織構成員の母親の息のかかった、母性の影響下にある「母性的経営」であり、その特徴（集団主義、年功序列、終身雇用、護送船団、規制と談合・・・）は、総じて女性優位・母性的な価値観に基づくものである。一方、バラバラに独立した個人の自由競争に基づく「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的経営」は、「父性的経営」と呼ぶことができる。今後は、後天的定住集団社会Ａに特有経営の分析において、その女性優位・母性的性格により重点を置くことで、経営組織のあり方をより的確に把握できる、と言える。
後天的定住集団社会Ａの官庁・企業定住集団のような、成員相互の一体感、対人関係や協調性を重んじるウェットな組織は、もともと、個人主義的で互いにバラバラなのを好む、その本質がドライな男性にはとうてい作れない。こうした後天的定住集団社会Ａに特有経営組織の実現には、ウェットさを備えている女性、母性の強い力が必要なのであって、その点、後天的定住集団社会Ａに特有経営組織の真の作り手、創造者は、成員たちの母親であるということができる。
7.企業定住集団マザコン

後天的定住集団社会Ａの男性は、所属する企業定住集団や官庁に、心理的に強力に帰着、癒着しているということ。そこには、企業定住集団との強力な一体化、企業定住集団への甘えが見られ、企業定住集団に対して、強い紐帯を感じていると言える。というか、所属する企業定住集団無しには、何もできない、自我が成り立たない感覚がある。
例えば、後天的定住集団社会Ａの男性では、定時後に彼女とデートの約束をしている時に、企業定住集団から追加の仕事を命じられると、デートをキャンセルして企業定住集団の仕事をこなすということが、まだ多く見られる。この場合、男性は、彼女よりも、企業定住集団を、心理的に優先させており、企業定住集団が最終的な心理的帰着の対象となっていると言える。
後天的定住集団社会Ａの男性が、企業定住集団で働くことをひたすら優先し、家庭を省みない、育児に参加しないのも、彼が、企業定住集団に心、魂を完全に奪われ、支配されているからだと言える。この場合、一体化、甘えの対象である企業定住集団は、当の男性にとって、母親と同じ役割を果たしていると言える。対象との一体化、甘えは、父性ではなく母性につながるものであり、マザコン男性における母親の役割を、企業定住集団が果たしているのである。こういう後天的定住集団社会Ａの男性の企業定住集団に対する、企業定住集団を母親代わりとしてその中に帰属しようとする、根本的な心理的依存は、「企業定住集団マザコン」といった言葉で呼ぶ事ができる。
8.企業定住集団母艦説
後天的定住集団社会Ａの男性は、企業定住集団で働く、給与を稼ぐことに専ら心を奪われ、家庭を省みない、重んじない。それは、彼にとって、家庭ではなく、企業定住集団が「母艦」だからである。専業主婦の妻とかからの見方だと、企業定住集団は、自分の運営する家庭から企業定住集団に出かけ、仕事をして、また自分の家庭に帰ってくる存在だと考えられている。これは、夫を、家庭という「母艦」から、飛行機として飛び立って、また舞い戻ってきて、休息する存在と捉えるものであり、こうした考え方は「家庭母艦説」と呼べる。
しかし、後天的定住集団社会Ａの男性の企業定住集団への癒着ぶりを見ていると、上記の「家庭母艦説」は、彼には当てはまらないと考える方が理に適っている。この場合、後天的定住集団社会Ａの男性が実際に取っているのは、「企業定住集団母艦説」（ないし職場母艦説）であると考えるべきであるということ。
「企業定住集団母艦説」とは、企業定住集団こそが、自分の本質的に帰着、癒着する対象であり、家庭は、仮の帰着場所、立ち寄り場

所に過ぎないとするものである。要は、自分が、企業定住集団という母艦に直接つながっている一級の主要構成員であり、一方、自分の家族は、そこに依存的にぶら下がる、厄介になっている二級の、劣った構成員と見なす考え方である。自分が主である家庭を、自分が所属する企業定住集団という母艦に結びつけ、その配給管、パイプ役を担い、企業定住集団という主要な幹から、家庭という従属的な枝に、養分を供給する元締めの役割を担っている、という高いプライドが、そこには存在する。
まず企業定住集団があって初めて自分がある、という「まず企業定住集団ありき」という見方を取ると共に、自分の家庭は、自分という企業定住集団からの養分を供給するパイプ役無しには成り立たないんだという強い自負、自分の家庭に対する優越感が、後天的定住集団社会Ａの男性には見られる。
生きていくための養分をくれる企業定住集団を最も重要な存在と考えて、そこにしがみつくと共に、自分の家族をそのおまけと考え、自分の役割を、企業定住集団から配給される養分を家族に与える主要なパイプ役と捉える「企業定住集団母艦説」こそが、後天的定住集団社会Ａの男性が、企業定住集団に対してやたらとヘコヘコすると共に、自分の家族に対して、何事も企業定住集団優先で、高圧的に接し、尊大な態度を取る理由である。
この場合、後天的定住集団社会Ａの男性とその家庭に対して、生きていくための養分をくれる企業定住集団は、ちょうど、胎児にへその緒を通じて養分を与えてくれる母親と同じ存在であると言える。この点、後天的定住集団社会Ａの男性とその家族にとって、「企業定住集団＝母」なのである、と言えるということ。企業定住集団のために我を忘れて一生懸命に企業定住集団の発展のために尽くそうとする、何事も企業定住集団、職場第一の後天的定住集団社会Ａの男性は、「母なる企業定住集団」にどっぷり浸って生きているのである。
9.母性的組織からの男性解放
以上見てきたように、後天的定住集団社会Ａの男性がよりどころとしてきた企業定住集団・官庁の組織のあり方は、実は、彼らの母親（母親代わりの妻）の意向に沿うものとなっているということ。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁は「母性」によって牛耳られている面が強い。男性たちが、そうした企業定住集団組織の「母性による支配」を終わらせ、企業定住集団組織からの自立を図るには、根本的には、組織成員である男性自身が、自分の母親との間の強力な癒着を何とか断ち切って、「母子連合体」を解消させることで、母親によって所有され、母親によってもっと働け、先へ進めと尻を叩かれる「ダービー馬」のような立場から自由になるしか

ない。
10.母性的組織への女性進出
従来の後天的定住集団社会Ａでは、女性は、自らは組織の内部に止まらずに外に出て、「専業主婦」として、男性（息子、夫）を組織に送り込んで業務に邁進するように仕向け、管理することに専念してきたということ。
しかし、専業主婦の仕事は、家事の省力化や、教育機能の学校への委託が進むにつれて「空洞化」が進み、女性たちにとって、次第に「やりがい」が薄れた魅力のない仕事となりつつある。また、専業主婦たちは、彼女たちの居場所が「家庭内」という、外界から遮断された密閉空間となっていることに息苦しさを感じている。
後天的定住集団社会Ａの女性たちは、息子や夫を自らの操りロボットとして操縦して組織で活躍させる、従来の「専業主婦」になることによる「間接的な自己実現」のやり方よりも、自分自身が直接企業定住集団や官庁に乗り込んで、そこで自ら活躍し、自分の手で業績をあげる、「直接的な自己実現」に、より生きがいを感じるようになっているのは確かである。女性たちは、その生涯を、男性たち同様、組織人として過ごすことを求めている。
彼女たちは、子育てで主導権を握ることにより、従来の専業主婦同様、自分の子供を自らの操りロボットとして出世競争に邁進させて自己実現を図るとともに、自分自身も組織で働いて業績をあげることで自己実現を行うという、「二重の自己実現」を狙おうとしている。
しかるに、従来の後天的定住集団社会Ａの官庁・企業定住集団組織で活躍しているのは専ら男性であり、女性は男性の補助的作業に回ることが多かった。それは、女性は「専業主婦」になることを求められていたからであり、女性の業務は、女性が「専業主婦」になって退職するまでの間の短期間の腰掛け業務と捉えられていたため、重要視されなかったのである。
後天的定住集団社会Ａの女性たちは、既に本腰を入れて、官庁・企業定住集団業務への進出を始めているが、官庁・企業組織のあり方は、依然として旧来の「専業主婦コース」を推奨するものとなっている。このミスマッチを是正するため、ごく近い将来、後天的定住集団社会Ａの経営組織のあり方を、女性が一生組織人として働き続けることができるように根本的に見直すことが必要となる。
母性的性格・風土を持つ「母性的経営体」である後天的定住集団社会Ａの官庁・企業定住集団組織は、本来、男性よりも女性により適した組織であり、現在組織の中で大きな顔をしている男性が働くよりも、女性が働いた方がより優れた業績をあげることができると考えられる。

今まで、後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁の風土を、「定住集団社会（後天的定住集団社会Ａの伝統的な農耕村落共同体）的」として、不愉快だとして批判をしてきたのは、ほとんど男性であり、女性は批判していない。これは、女性にとって、「定住集団社会」が、女性にとって居心地のよい、女性、母性向きの社会であることを意味している。
従来男性が仕切ってきた後天的定住集団社会Ａの官庁・企業定住集団組織で、スムーズに女性が主導権を握り、男性を凌ぐようになるには、女性が単に組織内で男性に負けない業績をあげるだけでなく、女性が、組織の中で「母親」「姑」「姐御」的存在になることで、男性たち（上司も部下も。）を、母親代わりに心理的に依存させ、自分の言うことを聞かせるように仕向ける、精神的・心理的戦略が重要である。
母性による支配下で成長してきた後天的定住集団社会Ａの男性は、年配、年下を問わず、「母親」「お袋」「姐御」的な、自分たちを強い一体感で包み込んで依存させてくれる存在に弱い。そこで、女性たちが男性たちを、自分たちの「大きな子供」扱いすることで、男性たちは簡単に女性の軍門に下り、組織上の重要ポストを女性たちに譲ると予想される。これは、女性の年齢が男性よりも年下である場合にも当てはまり、彼女たちは、母性的態度を男性たちに対して取ることで、「リトルマザー」「小さな姐御」として自分よりも年上の男性を精神的に支配可能である。
こうした、組織における、女性による男性の「母性」を通じた支配は、女性が専業主婦を止めることで、男性が感じる心理的バックアップ感の不足を補う効果を持っている。要するに、男性が従来専業主婦である自分の母親や妻に潜在的に求めていた心理的依存、甘えの感情を、職場の（特に上司の）女性に向けるように仕向けることで、女性たちが専業主婦でなくなっても、男性たちが心理的支えを得て困らなくなるようにすることができる。
従来、企業定住集団・官庁組織で自己実現を図ろうとする女性たちにとってネックだったのが、出産・育児に忙しくて、いったん退職・休職せざるを得ないことであった。
女性が生涯を組織人として業績をあげることに注力できるようにするには、この退職・休職がもたらすハンディをなくすことが必要である。それには、女性に中途採用、再雇用の道を幅広く用意することが、企業定住集団・官庁の経営上メリットとなることを本格的に実証する必要がある。つまりいったん出産・育児のために退職した女性たちも、企業定住集団のメンバー・職員として組織中枢部で再雇用すれば、従来の男性同様の重要な業績をあげ得るのだ、ということを実例で示す必要がある。

女性たちは、いったん出産・育児で退職した女性を経験者待遇で再雇用した方が、一から新卒採用者に業務を覚え込ませるよりも、即戦力の企業定住集団の正規メンバー（定住民）として使えることを、自ら示すことが必要である。あるいは、同じフルタイムで働いてもらうなら、男性企業定住集団のメンバーより、女性企業定住集団のメンバーを雇った方がより有能であり、より企業定住集団・官庁の業績向上に役立つことを示す必要がある。
こうしたことを実証するには、実際の官庁・企業の組織を使った「実験」が必要である。実際にいったん出産・育児のために退職した女性企業定住集団のメンバー・職員を再雇用して組織の中枢で数多く働かせる官庁・企業を「パイロットケース」として数多く用意して、そうした「パイロットケース」組織の中で彼女たちがあげる業績が、従来の男性中心組織があげる業績に見劣りしないことを、実証データとして示せれば良い。こうした実験には、行政による費用・制度両面での援助もある程度必要となって来よう。
あるいは、女性たちがそもそも出産・育児に伴って退職・休職をしなくて済むようにする手も考えられる。そのためには、働く女性たちが、組織人、企業定住集団人間として組織で働きながら、なおかつ子育てができる環境を、女性主導で用意する必要がある。例えば、各職場とインターネットでつながった、24時間利用可能な保育所、幼稚園、小中学校を設け、そこに自分の子供を通わせ、インターネットを介して子供たちとコミュニケーションを取ることで、女性たちが職場にいながらにして、我が子へのフォローを可能にすることが考えられる。そうすることで、女性たちは、従来我が子との間形成してきた「母子連合体」を維持したまま、組織人として仕事に打ち込むことができる。
女性たちが、育児にも、仕事にも両方打ち込める環境を作り、女性の自己実現を支援することで女性の力を引き出すことが、後天的定住集団社会Ａの経営組織の体質強化には必要である。後天的定住集団社会Ａの「母性的」な経営組織には、従来の男性よりも、母性の担い手である女性の方がより組織の体質にマッチしており、女性主導で組織運営が進む方がより生産性が上がることが予想されるからである。母性的体質を持つ後天的定住集団社会Ａの官庁・企業定住集団では、いったん女性の組織中枢への進出が進めば、男性が女性たちに経営権限を譲らざるを得ない事態は、比較的短期で訪れると考えられる。
そのためにも、女性たちは、従来のように、単に結婚しない、子供を産まないなどといった消極的・受動的な抵抗ばかりするのでなく、自ら積極的に、官庁・企業定住集団に対して、「保育所の充実、24時間保育の実現」「組織中枢での再雇用」などを、社会運動

の形で働きかけると共に、「自分たち女性を組織で使えば、確実に業績が向上しますよ」という証拠を見せる必要があると言える。
社会運動をするに当たっては、従来、家庭の中でくすぶっている専業主婦たちを取り込めるかどうかが鍵となる。「組織人として働き続けることで、今までのように家庭の中にとどまるだけよりも、こんなに、よりよい生活と自己実現が得られますよ。」という明るい青写真を、彼女たち専業主婦に対して、実例を示して説得する必要がある。
また、後天的定住集団社会Ａの女性学には、従来のように「性差別はいけません」といった、男性たちを責め続けるネガティブなキャンペーンを張るばかりでなく、「自分たち女性は、組織の中で、男性に負けないor男性にできない高い業績をあげる能力がありますよ。それは、出産・育児による退職後の再雇用時にも有効ですよ。私たちを、組織の中で積極的に利用しないと損しますよということ。」ということを実証するポジティプな姿勢が、今後求められると言えよう。
なお、女性の負担となっていた食事作りや掃除、洗濯のような家事についても、例えば、栄養士の監修による弁当をコンビニで安価で販売するようにしてそれを購入すればよいようにしたり、洗濯・掃除ロボットを導入することで、家事雑用をできるだけなくすようにする必要がある。そのためには、「家事雑用をしない主婦は主婦にあらず」という考え方をなくし、主婦の仕事を、家計管理、子供の教育といった根本的に重要なものへと集約することが必要である。この場合、男性は今まで専業主婦をデフォルトとして育ってきているので、家事をしない女性（妻）に対して違和感を感じて「もっと家事をしろ」と文句を言うことが考えられる。それについては、男性の母親である姑の世代の女性が、積極的に外に働きに出て、家事をアウトソーシングする姿勢を見せれば、母親の子分である男性たちも従うようになると考えられる。このためには、姑が、専業主婦がメインだった世代から、職業人、組織人がメインである世代へと、世代交代をする必要がある。姑が外働きをすることが当たり前となっている状態への世代交代には、あと10～20年位かかるかも知れない。
後天的定住集団社会Ａの男性にとって、女性たちが上記のような戦略に出て、どんどん組織内で昇進して、自分たちを追い抜くようになっていった場合、どういう対応をしたらよいであろうか？これは、難しい課題と言えよう。一つ言えることは、後天的定住集団社会Ａの男性は、従来のような「お母さんの手下」的存在でいるままでは、いつまで経っても社会的に浮かばれないということである。「母との精神的決別」こそが、後天的定住集団社会Ａの男性を新た

な精神的段階へとステップアップさせるための鍵なのではないか？要は、母への親孝行のために働くのではなく、自分自身のために働くのである。そうしたドライな風を心にまとうことが、後天的定住集団社会Ａの男性が働き手として真に成熟して、女性に対抗していくために必要である。それは、「浪花節的」「ムラ的」と言われた従来の後天的定住集団社会Ａの企業定住集団組織風土を、ドライに塗り替えることにつながっていく。男性たちによる「企業定住集団組織風土のドライ化」こそが、真に後天的定住集団社会Ａの男性を企業定住集団組織の中で、女性と互角に渡り合っていくことを可能にするための条件と言える。
（初出 2003年06月、2013年12月追加）

職場中心視点から家庭中心視点への転換が必要。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨも、現在の後天的定住集団社会Ａも、女性の社会への関わりの強さの指標として、職場進出の度合い、職場で管理職に就くことの度合いで図ろうとする傾向がある。

しかし、実際には、社会への影響力の度合いとしては、より基礎に当たる家庭における女性の影響力の行使の度合いを優先すべきである。後天的定住集団社会Ａの女性は、家庭における影響力が、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとは段違いに強い訳であり、そういう点では、後天的定住集団社会Ａの女性の強さを測るのに、従来の職場中心視点から家庭中心視点への転換が必要であると言える。

（初出2015年3月）

空母、充電器、チャージャーとしての後天的定住集団社会Ａ家庭

後天的定住集団社会Ａの家庭は、そこから戦闘機が整備を受けて飛

び立つ「空母」としての役割を負っていると言える。

あるいは、各種機器を接続して充電させる「充電器」「チャージャー」、燃料等の補給と整備の施設と言えるということ。

戦闘機としての男性や子供の活躍のみ見るのではなく、空母としての女性の働きも見ないと片手落ちである。

（初出2015年3月）

後天的定住集団社会Ａにおける母性と女性との対立

[要旨] 後天的定住集団社会Ａでは、以前から母性が父性よりも優位にあると主張する「母性社会論」が存在します。母性は女性性の一部であり、母性が父性よりも強いとする母性社会論は、後天的定住集団社会Ａにおける女性優位を示すと考えられます。しかし、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは、なぜか、女性が優位であるという結論を決して導き出そうとしません。筆者は、その原因について、嫁姑の対立という、女性内部の対立があると考えます。
◇
後天的定住集団社会Ａでは、母性の父性に対する優位を主張する後天的定住集団社会Ａ＝母性社会論が、松本滋や河合隼雄らによって、以前から唱えられて来た。
母性は、女性性の一部であり、母性が父性よりも強いとする母性社会論は、女性優位を示すと考えられる。
これに対して、後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、女性が強いという結論を導き出そうとしない。むしろ、母性は、女性への育児の押しつけとなり、企業定住集団とかでの女性の自己実現を阻む、有害なものであるといった主張を展開している。いわば、女性と母性を互いに敵と見なす、対立させて捉える見方が横行しているのである。
実際のところ、後天的定住集団社会Ａを強い母性の力で牛耳る子持ちの年長女性、特に姑においては、女性と母性はスムーズに統合されているのであり、対立は特に見られない。

後天的定住集団社会Ａの女性学者やフェミニストによる母性の敵視は、実際のところ、母性を肯定し、後天的定住集団社会Ａの女性の強さを表す後天的定住集団社会Ａ＝母性社会論が、女性が弱い立場に置かれていることを前提として発展してきた後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの存在理由を根本から脅かすものであり、後天的定住集団社会Ａの女性学者やフェミニストたちは、触らぬ神に祟り無しということで、後天的定住集団社会Ａ＝母性社会論を無視したり、わざと歪曲した見方をして、正面切って扱うのを避けているのである。
そのため、母性社会後天的定住集団社会Ａをリードしている姑の権力の強さとか、今までほとんど後天的定住集団社会Ａの女性学で取り上げられないという、異常事態を来しているのであるということ。
（初出 2000年07月）

姑と「女性解放」

後天的定住集団社会Ａの女性による家族制度批判が行われる場合、女性は、自分を嫁の立場に置いて、制度を批判する。
姑の立場に自分を置いて、家族制度を批判する女性を見たことがない。
姑の立場では、家族制度は、それなりに心地よい、批判の対象とはならないものなのではないか？
同じ女性なのに、姑と嫁という立場が違うと、協同歩調が取れない。
従来の後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、嫁の視点ばかりで、姑の視点は取ったものは見当たらない。
同じ女性なのに、姑は、解放の対象からは外れている？解放できない＝十分強くて、する必要がない、というのが本音であろう。
そこには、根底に、嫁姑の対立という、同性間の対立がある。一方、同性間の連帯意識というのが建前として存在するので、対立を公にできない。
嫁の立場の女性から見ると、姑と、その息子＝夫が、一体化して、嫁に対して攻撃をしかけてくる。
姑は、その家族定住集団では、しきたり・慣習に関する前例保持者、先輩としての年長女性である。
姑は、嫁や息子に対して、先輩、先生である。家風として伝えられて来た前例を教えるとき、威張るということ。威圧的になるということ。

嫁の立場に立つ女性は、本来は、男性＝息子も支配している、姑を、自分を抑圧する者として、批判の対象とすべきなのではないか？
女性は、自分と同性の姑の批判ができない、しにくいから、代わりに、男性（姑の息子）を批判するのではないか？
同性間では、見かけだけでも仲良いことにしておきたい、複雑な事情があるのだろう。
後天的定住集団社会Ａのフェミニストによる「後天的定住集団社会Ａの家族＝家父長制」攻撃の本当の目標は、夫＝男性ではなく、姑＝同性である女性の権力低下にあるのではないか？本当は、「後天的定住集団社会Ａの家族＝（姑＝）母権制」攻撃の方が当たっている。でもそれでは、女性の地位を高めようとする、フェミニズム本来の目的と矛盾するということ。
「後天的定住集団社会Ａ＝母性社会」は、女性を母性の枠内に閉じこめる、いけない考え方であるとするフェミニストによる攻撃も、まだ子供を産んでいない嫁の立場からは理解できるが、子供を産んで自らのコントロール下に置くことに成功している姑の立場からは理解不能である。
同じ女性なのに、嫁の立場と姑の立場とで、まるで連携が取れていない。
フェミニズムは、弱い立場にある女性しか対象にできない限界がある。
（初出 2000年07月）

後天的定住集団社会Ａの家族における2つの結合

姑は、血縁（親子関係）による結合に基づいた家風の先達者として、嫁を支配し、嫁は姑に服従する関係にある。
「後天的定住集団社会Ａの家族＝家父長制」論者は、以下の通りである。
(1)この姑との間の支配服従関係を、夫による支配と勘違いしたということ。
(2)女同士の対立を表に見せようとしないということ。女同士（嫁・姑）が結束しているように見せかける。
夫婦は、異性間の結合により互いに引きつけ合う。一方、母子、親子は、互いに共通な遺伝子や価値観の共有による一体感により、互いに引きつけ合う。
血縁による結合（親子関係）と、異性間の結合（夫婦関係）とが互いにライバル・拮抗し、互いに強さを強めようとする。強い方が主

導権を握る。
夫は、どちらにも深くコミットする、付くことができず振り回される。ただし、時には、漁夫の利を得ることもある。
（初出 2000年07月）

後天的定住集団社会Ａの女性とマザコン

マザコンは、母親による子供の一体支配を、子供が母親の意を汲んで自発的に受け入れている状態のことである。母性の力が強い後天的定住集団社会Ａでは、結構メジャーな現象であると思われる。
後天的定住集団社会Ａにおいては、マザコンは、女性の立場の違いから、同一の女性にとって否定的にも肯定的にも捉えられる。
これから結婚する、あるいは結婚した嫁の立場の女性にとって、マザコンは、望ましくない、否定すべきものである。
自分の彼氏や夫が、姑と親密にくっついて、姑の同盟軍となって、自分のことをあれこれ批判したり、支配しようとするのに反発したり、彼氏や夫がそうなるのを避けようとして、「マザコン男はダメ」と、マザコンを必死になって批判する。
ところが、そのようにマザコンを批判していた同じ女性が、自分の子供、特に息子を持つと、子供が可愛くて、子供との一体感を楽しみにするようになり、子供を自分の思い通りに動かしたいという支配欲も働いて、子供がいつまでも自分の元にベタベタ愛着を持ってくっつく状態＝マザコンを肯定的に捉えるようになる。「マザコン歓迎」となるのであるということ。
自分の姑や夫に対しては、「マザコン反対」で、自分の子供に対しては「マザコン賛成」という、相反する立場を、両方場合に応じて便利に使い分けて、矛盾に気づかないか、気づいても開き直っているのが、後天的定住集団社会Ａの女性の現状であると言える。
（初出 2007年05月）

稲作農耕文化とマザコン

稲作農耕文化は、マザコン製造機である。社会において、女性、母性の力を強め、子供たちが皆その影響を受けるからである。
一方、遊牧、牧畜文化は、ファザコン製造機である。社会において、男性、父性の力を強め、子供たちが皆その影響を受けるからである。
（初出 2011年9月）

2つのマザコン

マザコンは、従来、マザー・コンプレックスという言葉の略語として用いられてきた。
しかし、それとは別に、マザーズ・コントロール（母親による制御、母親による支配）という言葉の略語としても使用することができる。
（初出2012年6月）

男性解放とマザコン認定

男性が、母権社会からの男性解放に賛成することは、男性自身が現状マザコンであることを表明するのと同じである。母からの男性解放をしようと言うと、女性からマザコン（状態であることを）認定されてしまい、結婚とかしてもらえなくなるということ。

恋愛市場において、マザコン男性は、女性からの評価が低い。それは都合が悪いので、表明のブレーキになる。

男性が、女性に対して良い格好をしたいので、自分がマザコンであることを認めず否定しようとする。

そのため、男性解放論、母権社会論自体を認めないということ。

それゆえ、（母からの）男性解放運動は必要ではありながらも広まりにくいのである。

男性解放運動は、息子の母に対する反乱である。それゆえ女性は、

将来自分の息子に、自分に対して反乱を起こされると思って心配になり、抑えこもうとする。

その点、男性解放運動は、男性が、女性に対して、自分がマザコンから自主的に脱却しようとしているというメッセージも同時に送っていると言える。これは、これから結婚しようとしている女性にとってはプラスであり、女性からの評価は高まると言える。

（初出2011年8月）

後天的定住集団社会Ａの男性の母性化

後天的定住集団社会Ａの著名な教育評論家族定住集団である尾木直樹は、そのオネエ言葉から、「尾木ママ」と呼ばれ、社会的に親しまれている。彼は、本来男性なのに、母性の体現者となり、そのことがごく自然なこととして、後天的定住集団社会Ａに受け入れられているのである。これは、後天的定住集団社会Ａで母性が強く、男性に対して強く影響していることの証拠である。あるいは、後天的定住集団社会Ａにおいて、男性が母性化しやすいことの証拠であるとも言える。
（初出 2011年9月）

後天的定住集団社会Ａにおける母子二人三脚

後天的定住集団社会Ａでは、母子が二人三脚で進むのが伝統的で望ましいやり方であると考えられている。母子連合体、母子ユニオンを形成して、母子が共同歩調で進むのが良いとされている。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨみたいに、母と子を切り離して、それぞれ違う世界を目指すのではなく、母子が一緒になって同じ世界を目指すのが、教育とかで望ましいとされている。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのように、母と子が（父によって）切り離されると、母子の結びつきが弱くなり、母は子を支配できなくなる。それを回避するのであるということ。

生計を立てる職業を持った母親は、そのままでは子供が自分の生業のじゃまになるとして、子供の存在を好まない傾向があると考えられるが、その場合、子供が聞き分けの効く年齢に達するまで辛抱強く待って、母子二人三脚で、母の生きるノウハウを子供に伝え、一緒に目標を目指すのが良いということになる。

母親にとって子供は、母親自身の自己実現のための有効な手段と見なす。子供を自分の自己実現にとってじゃまだとは考えないのが望ましいということになる。子供をじゃまだと考えると、母と子供が切り離され、母の力が弱くなるのである。子供が自分に応えてくれる年齢になるまで辛抱強く待つべきということになる。

女性が社会に影響力を行使するには、母として、子供から離れるな、子供を手放すな、子供を邪魔者扱いするなということに尽きる。子供が自分になついて、自分の後を付いて来てくれるようにするのである。

後天的定住集団社会Ａの女性が社会で、母として、力を振るおうと思ったら、子供を掴んで離さないこと、子どもと絶えず一体でいることが望ましい。

逆に言えば、この母子二人三脚状態を破壊することが、後天的定住集団社会Ａの男性が父として、社会に真の影響力を行使できるようになるための前提となる。

（初出2012年4月）

子の業績は、母の業績。

後天的定住集団社会Ａのように、母が子を包含し、母子連合体、母子ユニオンを形成している状態では、子供の業績は、すなわち母の業績ということになる。後天的定住集団社会Ａにおいて、表面上男性ばかりが活躍しているように見えても、実際の所、彼ら男性は、一人ひとり、社会で活躍中、その母によってずっと包含され続けており、それゆえ、彼らの活躍は、彼らの母の活躍と同義ということになる。

あるいは、後天的定住集団社会Ａにおける、男性による企業定住集団や官庁といった社会組織を支配する活動（企業定住集団の代表や首相就任とか）は、すなわち、男性の母による、その社会組織の支配活動として捉えることができる。男性が母に完全に取り込まれた状態で、活動しているからである。

それゆえ、後天的定住集団社会Ａでは、表面上男性ばかりが活動しているようでも、実際は、その母である女性が、それ以上に社会的に活動していると言うことができる。子供が業績を上げて、高い社会的地位に上り詰めるほど、彼らを包み込む母の業績や、社会的地位も上がるのである。

（初出2012年9月）

子育ての、社会支配に占める重要性

子育てこそが、後天的定住集団社会Ａを女性が支配するための最重要キーワードである。あるいは、子育てを女性が担っていることが、女性が後天的定住集団社会Ａを支配することができる根本理由である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性は、子育てを軽視して、子育てよりも自分のキャリアを大切にせよと主張するが、これが、社会において、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性が弱い根本理由である。
後天的定住集団社会Ａでは、女性が、子育ての役割を独占している。後天的定住集団社会Ａの女性たちは、子育てに多くの時間を割いて、母親、教育ママとして、自分の時間を惜しみなく投下している。
後天的定住集団社会Ａでは、女性と、その子供（特に息子）が一体となって、自己実現に取り組んでいる。子供（息子、娘）の自己実現が、すなわち母親の自己実現となる。例えば、息子が成功、出世すれば、それがそのまま母親自身の成功となる。
後天的定住集団社会Ａの母親たちは、こぞって、自分の子供を、自分の思い通りに操縦するのに必死となる。自分の思い通りに操縦することで、子供が母親の意のままに動くことにより、母親の意思決定を社会全体に、全面的に反映させることに成功している。そこには、母親が子供の独占的支配者となっている実態があり、母権社会の表れとみることができる。

（初出2012年6月）

後天的定住集団社会Ａ＝「男社会」の本当の立役者は「母」だ。

お母さん（実母ないし妻）に、食事や服装の用意、洗濯まで、身の回りの世話一切をやってもらっている後天的定住集団社会Ａの男性は、マザコンだ。
いくら、自分の稼いだ給与を実家に入れているからと言って、お母さんに、炊事洗濯から家計管理も含めて生活全般を依存しているのは、お母さんに生活全体を握られ、包含され、支配されている訳で、実質マザコン状態なのである。
重要なのは、職場が男中心で動くという、いわゆる「男社会」の立役者が、実は、そうした男性の母親（男性の妻）＝女性だということだということ。
男性の母親が、男性の身の回りの世話をかいがいしく全部してあげて、男性が生活面で母親無しで暮らしていけないように依存させることで、男性が母親に精神的に支配される事態が生じている。
男性がやたらと企業定住集団でやたらと仕事熱心なのも、自分の母親に「頑張って昇進しなさい」とハッパをかけられていることと関係がある。
男性は、その母親の自己実現の道具、操りロボット、愛玩対象となるペット、奴隷なのだ。
「母の奴隷」、それが、後天的定住集団社会Ａの男性の実像だ。
男性が勉強や仕事に専念して、それ以外に関心を向けさせないようにわざとし向けているのが、後天的定住集団社会Ａの母親だ。
後天的定住集団社会Ａの母親にとって、自分の息子は、受験競争、企業定住集団での昇進競争にまい進させる「ダービー馬」と一緒だ。息子が、そうした競争に勝って出世して社会的勝者となることが、すなわち自分の自己実現が果たされることと一緒だと考えて必死に息子の尻をひっぱたく。
そのため、息子は勉強人間、仕事人間と化すのだ。
企業定住集団はそうした「ダービー馬」と化した息子たちで溢れている。「男社会」の出現だということ。ひたすら企業定住集団の仕事に専念する男性＝ダービー馬たちの集まり＝「男社会」を生み出しているのは、その母親たちなのだ。
後天的定住集団社会Ａの母親は、炊事、洗濯といった家事や身の回りのことに対して息子が余計な気をかけることで、本来の受験競争、企業定住集団での昇進競争に遅れてしまうことを防止するため、必死になって、息子の身の回りの世話をかいがいしく焼こうとする。
そうした母親の姿勢が、息子が、勉強、仕事以外のことをやらなくなり、身の回りのことを、財布とかも含めて全て母や妻にやらせようとするあり方をもたらす原動力となっているのだ。
息子に競争に打ち勝てとハッパをかける後天的定住集団社会Ａの母

親は、企業定住集団で、部下に成績を上げろとハッパをかける上司と同じだ。母親が上司、息子が部下だ。
そうやって必死に息子＝「母親が自分の生涯を賭けたダービー馬」の身の回りの世話をする母親の姿が、息子から見ると、自分に無償の愛を提供する理想的な恩人に見えるのだから皮肉なものだ。
妻と対比させる形で、やたらと実母を理想化して捉えるのは、思考がマザコン化している証拠だ。
母は、息子にとっては、高齢の存在であり、やがて死んでしまう。そこで、仕事以外何もできない息子が頼るのが次に妻だ。そこで起きるのが、妻＝専業主婦の「お母さん」化だ。
専業主婦を実母代わりにして、彼女に精神的に依存する現象が起きる。
財布も子供も、家庭の実権も、全て専業主婦に握られてしまい、男性は、自分自身はただ企業定住集団人間としてひたすら労働して家庭に給料を入れるのみ、それしか出来ない、依存的で自立できない人間となってしまう。
男性が、妻は、実母同様自分の身の回りの世話をしてくれて当たり前、妻は自分の身の回りの世話を十分するように、それ以外の外仕事はするな、専業主婦でいろと、横柄な、妻を束縛する態度に出るので、妻には嫌われる。これが熟年離婚の原因だ。その原因の源は、自分の息子を自分のダービー馬に仕立てた、夫の母親にある。
また、後天的定住集団社会Ａの女性が、家事負担のため、外での仕事を諦めて専業主婦にならざるを得ない状況を作り出しているのも、息子を仕事人間に仕立てた、男性の母親だ。
そうしてやむなく専業主婦になった妻が、夫や息子を新たに自分の「ダービー馬」と仕立てて、受験、企業定住集団での昇進競争に向けてハッパをかけるとともに彼らの身の回りのことを全部かいがいしく行ってあげて仕事、勉強に専念させることで、妻＝母が自分の自己実現の道を見いだすようになるという「専業化への世代間連鎖」（夫は、仕事専業になる。妻は、家事専業になる。）が起きている。これが、後天的定住集団社会Ａにおいて、いわゆる「男社会」がちっとも解消されない一番の原因だ。
後天的定住集団社会Ａのフェミニストや女性学者らが批判する「男社会」を作ったのは、ほかならぬ女性たちなのだ。もっとそのことに注意を払うべきだということ。
（初出 2008年05月）

「母権社会」という呼び名に変えようということ。

従来、臨床心理の分野とかでは、母親の心理的影響力が強い後天的定住集団社会Ａのような社会のことを母性社会と呼んでおり、世の中ではこの呼び方がなされることが多い。
しかし、この母性社会という呼び方は、どちらかといえば社会の静的な性質を表した呼び方で、後天的定住集団社会Ａにおいて母親が動的に行使している社会的影響力、支配力の大きさを実感するには物足りない。
筆者としては、従来の母性社会という言い方に代えて、「母権社会」（ないし母権制社会）という言い方にすることで、後天的定住集団社会Ａの母親の強大さを少しでも実感できるようになるのが望ましいと思っている。
筆者は、同時に、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのように父親が強い社会は、父性社会と呼ぶよりは、父権社会（ないし父権制社会）と呼ぶのが望ましいと思っている。
（初出 2008年07月）

母権社会が言われてこなかった理由。

母権社会が言われてこなかった理由は、男性の面子を潰さないための女性による配慮の結果である。女性は、自分が強いとあえて言わない。
男性は、自分自身が女性より弱いと感じると、ペニス同様、小さく、弱々しくしぼんで、女性を引っ張る強い行動力を失う。あるいは、女性を守る盾として活用することが出来なくなる。そうなると女性が困るので、女性は、必死で弱い振りをするのである。
男性がマザコン呼ばわりされるのを避けるという問題もある。後天的定住集団社会Ａの男性が、他国の男性に比べて弱く見える、魅力無く映るのが、国防上とかで嫌だというのもある。

(初出2012年04月)

「立てられる」存在としての後天的定住集団社会Ａの男性と「母的存在」

後天的定住集団社会Ａの男性は、わがままな暴君、専制君主であ

る。腕白で威張るのが好きで、いい格好しがちな存在である。
後天的定住集団社会Ａの男性は、精神的には、永遠に母の懐に抱かれた「息子」としての存在であり、母の手のひらの上に乗って威張っているが、心の奥底では、母に甘え、深く依存した、未成熟な子供のままである。
後天的定住集団社会Ａの男性は、結婚しても、実質としては妻のもう一人の子供として、妻に心理的に依存し、父になれない、父未満の存在であり続ける。
未成熟な子供のまま、力任せにわがままに強引に振る舞うので、見かけは、強大な支配者のように見え、それが「家父長」であるかのように見えるのである。
彼ら後天的定住集団社会Ａの男性は、「皆の面前で」格好よく目立ちたい、威張りたい、皆を代表したいとか、上に立って指示、指図、命令したいとか、周囲に有能、できると思われ、周囲よりも早く出世、昇進したいといった、周囲の視線を前提とした「見栄っ張り」の性質を持っている。
後天的定住集団社会Ａの男性は、こうした見栄を張るために、少しでも格好良く皆の前でぴしっと決めたいという欲求を持ちつつ、それを自分一人の力で実現していくだけの心の強さを持ち合わせず、無意識のうちに周囲の自分を包み支えてくれる母的存在に心理的に頼ろうとするのである。それが自分の一人の足では立てない、ひ弱な張りぼてのような「立てられる人」状態を生み出しているのである。
後天的定住集団社会Ａの男性は、基本的に背後から「立てられた」存在である。企業定住集団とか社会の表面に立って威張っているが、その状態を維持するには、支えが必要であり、何らかの「母的存在」が彼を立たせ、支えている。この場合、「母的存在」とは、実母であったり、妻であったり、居酒屋のママであったり、所属する企業定住集団であったりと、多種多様である。
立てられているとは、自分を立ててくれている存在に依存していることを意味する。そこら辺の、自分一人では何もできず、周囲に「立ててもらっている」という自覚がなく、まるで自分一人で自立していると思いこみ、社会の表だった支配者みたいに威張っている点が、後天的定住集団社会Ａの男性の痛いところである。そのくせ、立ててもらわないと、優秀な企業定住集団のメンバーが逃げ出した企業定住集団のように、すぐ不格好に倒れたり、潰れたりしてしまう。
後天的定住集団社会Ａの実際の支配者は、見かけ上威張っている男性たちを立たせてくれる、支えてくれる、依存させてくれる、大きく温かく包んでくれる、甘えさせてくれる側の存在であり、先に述

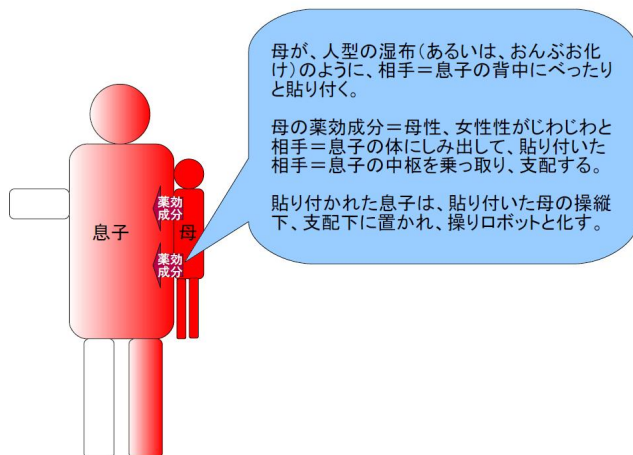
べた「母的存在」がそれに当たる。「母的存在」こそが、後天的定住集団社会Ａの奥まったところに座る真の支配者であるということができる。
こうした「母的存在」が、「立てられる人」である後天的定住集団社会Ａの男性を行動させる、つき動かす原動力、モーター、エンジンとなっている。それは、「母性エンジン。（お母さんエンジン。）」「母性モーター。（お母さんモーター。）」とでも呼べるものであるということ。そうした母性（母的）エンジン、モーターに基づいて行動するために、後天的定住集団社会Ａの男性の行動様式は自然と、所属組織との一体化や集団行動を好む、母性的なものとなるのである。
（初出 2008年07月）

「後天的定住集団社会Ａ＝男社会」説は「後天的定住集団社会Ａ＝母社会」説に修正されるべき。

後天的定住集団社会Ａの職場は、女性の管理職の割合が、他の国に比べて少なく、昇進とかも男性より遅れる等、男性中心で動く「男社会」だ、という社会学者の研究結果が、半ば社会の公式見解になっている。
しかし、そうした見解は、職場とかで表立って支配者みたいに威張って活躍する後天的定住集団社会Ａの男性の背中に、男性の母親が、男性が子供の頃からぴったりと密着して貼り付いて、男性と心理的に一体化して、男性を自分の思いのままに操縦しているという事態を想定していない。
後天的定住集団社会Ａの男性は、表立っては社会の支配者であるが、実はその男性の背中に更に真の支配者である男性の母が貼り付いて、男性を依存させ甘えさせると共に、男性にあれこれ指図、命令を下して支配している。そのため、後天的定住集団社会Ａで表立って活躍するのが男性でも、後天的定住集団社会Ａの性質は、相互の一体感、包含感、集団行動を重んじる母性的なものになる。こうした構図に、「後天的定住集団社会Ａ＝男社会」論者は、気づくことができていない。
その点、「後天的定住集団社会Ａ＝男社会」説は誤っており、「後天的定住集団社会Ａ＝母社会」説に修正されるべきである。
（初出 2008年07月）

人間湿布（息子＝男性に貼り付く後天的定住集団社会Ａ

の母）

図による説明を設けているということ。

人間湿布（息子＝男性に貼り付く日本の母）

後天的定住集団社会Ａの女性が、男性を支配するやり方は、男性の母親としての立場を最大限に利用するものである。
（段階１）母が、人型の湿布（あるいは、おんぶお化け。）のように、相手＝息子の背中にべったりと貼り付くということ。
（段階２）母の薬効成分＝母性、女性性がじわじわと相手＝息子の体にしみ出して、貼り付いた相手＝息子の中枢を乗っ取り、支配する。
（段階３）貼り付かれた息子は、貼り付いた母の操縦下、支配下に置かれ、操りロボットと化す。
後天的定住集団社会Ａの男性は、精神的、心理的に、常に母親を背中に背負っていて、半ば無意識のうちに、背中の母親の意向に沿うように行動していると言える。
（初出 2008年09月）

後天的定住集団社会Ａに特有ファシズムと母性

太平洋戦争中の後天的定住集団社会Ａの心理は、その女性優位、母性的性格をむき出しにした、相互一体感、包含感に基づくヒステリックな精神的高揚として捉えることができる。

すなわち、後天的定住集団社会Ａの女性解放運動においては、太平洋戦争時、以下の通りである。
・高群逸枝に代表されるように、国家の所有者＝（女神であるということ。）天照大御神と見なすことが行われた。後天的定住集団社会Ａの中枢である国家の所有者による社会支配制度を、女性化して捉えていたということ。
・また、母が息子に対して、お国のために死ねと命令することが平然と行われた。これは、母として、自分と非独立で一体化している、自分の命令を聞いてくれる息子に対して、絶大な心理的影響力を行使していたことを示している。
こうした、いわゆる後天的定住集団社会Ａに特有ファシズムと呼ばれる社会的風潮は、女性、母性の強い影響下で作り出されたものであり、後天的定住集団社会Ａにおける女性、母性の強さとして捉えることができると言える。
（初出 2012年03月）

姑社会、姑支配社会としての後天的定住集団社会Ａ - 後天的定住集団社会Ａのメンバーの姑根性 -

後天的定住集団社会Ａで一番力が強いのは、表面に出て威張っている男性ではなく、その母親の姑である。
姑は、息子との間で、強力な母子一体、癒着状態を作り出し、その中で、親こと。→子供の支配従属関係を利用して、息子を精神的に支配するのである。
姑は、普段は、表に出ずに奥に収まって「いつも息子がお世話になっております」みたいに頭を下げて言っているので、家庭で強権を振るっている実態が、なかなか表に出にくいのである。
後天的定住集団社会Ａ全体が、姑の価値観、姑根性に染まっていて、重箱の隅をつつくようなやり方で、社会の中で嫁相当の立場にある弱者をチクチク陰険にいじめているのである。
姑根性は、以下の通りである。
「何事も、「～しなさい」の上から目線の命令、指示口調で行う」
「上位者である姑に対する精神的な絶対服従を、相手に要求し、言挙げは一切許さない」
「細かい所まで隅々まで監視の目を行き届かせ、箸の上げ下げにまで口うるさくヒステリックに文句を言う」
「自分の気が済むまで、ひたすらペラペラ相手に一方的に説教しまくり、話している最中に、次から次へと新たな説教の種を連想して思い出しては説教を続けることで、相手を心理的に窒息させ、逃げ

場がないところまで徹底的に追い込む」
「既存の家風（とか企業定住集団の風土）、しきたりへの一方的な帰依を相手に求め、新たな変革の試みをことごとく前例に反するとして、握りつぶす」
といった特徴を持つ、相手を支配する際に姑が見せる態度である。
これが、後天的定住集団社会Ａのメンバーの、特に弱者に対する態度の基盤になっているように思われる。先輩の後輩に対する態度とかが、この姑根性の典型である。
（初出 2008年12月）

姑思考、姑根性、姑イズム

後天的定住集団社会Ａにおいて、広く社会の上位者、支配者が持つ思考様式、イデオロギーである。
全ての人は、何らかの形で姑の立場、嫁の立場に二分される。
後天的定住集団社会Ａでは、親企業定住集団、職場の上司、学校の先輩、地域の本家が姑相当の立場にいる。
下請け企業定住集団、部下、後輩、分家、小作が嫁相当の立場にいる。
姑は、自分の子供や孫への世話が行き届かないのを嫌う。
嫁が、自分の子供や孫を放って、働きに出ることはもっての他である。
姑は、嫁の手抜き、怠けを一切許さない。
嫁が子供を保育所に入れるのは、嫁による育児放棄であるとして、許さない。保育所の増設を嫌うということ。待機児童の解決が進まない、主な原因となっている。
姑は、嫁の落ち度をくまなく探し、指摘し、延々とエンドレスに説教する。
嫁の反抗、嫁の自分からの逃避、自主独立、嫁が自身の縄張り構築をするのを許さない。
姑思考は、以下の通りである。
嫁を細かく、漏らさず監視、干渉するということ。
嫁に、自分の価値観を押し付けるということ。
上から目線で、嫁をうるさく注意するということ。
姑思考は、以下の通りである。
マイナス点ばかりに注目する減点主義であるということ。
責めるばかりで、褒めようとしないということ。
批判、ダメ出し、潰し、否定するばかりで、肯定や積極的提案が無いということ。

目上から目下への一方的で長時間の説教、自説展開を行うということ。
反論すると、根に持って、いじめる、いたぶるということ。反論自体を許さないということ。
説教の内容が、感情的、情緒的であり、客観性に欠けているということ。
姑思考は、以下の通りである。
我慢を強要するということ。
辛さの回避を甘えと判定して批判するということ。
自分への完全服従を求めるということ。
上から目線であるということ。
サディストであるということ。
姑思考は、以下の通りである。
些細なことに姑息であるということ。細かいということ。
漏れがないということ。嫁にとって閉塞感があるということ。
姑は、以下のことを行う。
嫁が考えた新しい知識、アイデアを否定するということ。自分の知識が無効化するのを拒否するということ。
いわゆる無縁社会の発生と、嫁の姑からの独立達成とは、深い関係がある。
個々の後天的定住集団社会Ａのメンバーにとって、外部社会、世間は、姑の役割を果たしている。彼らは、それを嫌って、内々に閉じこもって、外部社会、世間との連絡を最小限へと絶とうとするのである。
姑の影響力低減こそが、本当の後天的定住集団社会Ａのフェミニズムのねらいであると言えるのかも知れない。
（初出 2010年7月）

母思考と姑思考

母権社会後天的定住集団社会Ａにおける、後天的定住集団社会Ａのメンバーの思考の原型は、母であり、その思考様式は、母的思考、母思考と呼べる。
身内というか、同じ血縁内、派閥、グループ内、内輪に対しては、母思考であり、相手への慈しみと、惜しみない愛情の投入、甘えの受容が見られる。
一方、よそ者、血縁外、グループ外、派閥外に対しては、姑思考であり、相手に対する辛口の評価、批判、説教が先行する。
母思考、姑思考のいずれにおいても、相手を包み込み、呑み込む感

じが強く、相手にとっては、一体感、閉塞感、窒息感、逃げ場のない被支配感が感じられる。
（初出 2010年7月）

後天的定住集団社会Ａの家庭における姑の弱体化

最近の後天的定住集団社会Ａにおいては、夫の妻＝嫁が、夫の母親である姑と同居しなくなったことにより、姑の、息子の家庭への影響力が低下しつつある。
嫁が姑との同居を嫌い、姑と同居しなくて済む男性ばかり選んで結婚している。あるいは、嫁が夫との結婚条件として、姑との非同居を求めることが当たり前になりつつある。
姑の同居しない後天的定住集団社会Ａの家庭は、すっかり妻＝嫁の独立王国となり、夫が妻＝嫁の言うことを聞くようになり、母である姑のことを避ける、付き合わないようになりつつある。
夫は、妻＝嫁の言うことを聞かないと、離婚されてしまい、慰謝料の請求とかで自分の財産を身ぐるみ剥がされた上、ひどい時には、家族定住集団から追い出されてしまう。
また、夫は、マザコンだと、妻＝嫁にとって、離婚する格好の理由になる。したがって、夫は、母である姑とくっつき続けることができず、母子連合体の破壊につながる。
こうした点から見て、従来筆者が主張してきた、後天的定住集団社会Ａにおいて姑が家庭を支配するという構図は、やや改められなくてはならない。かといって、後天的定住集団社会Ａの家庭が母性中心、女性中心であることを止めたかと言えばそんなことは全然なく、子供を出産して母親となった嫁が、母子連合体の形成で、夫を圧倒、疎外する構図は変わらず、また夫が嫁に対して母親代わりに精神的に依存する傾向が強くなることで、従来の姑中心が、新たに嫁中心に変わっただけであるといえる。後天的定住集団社会Ａの家庭が母性、女性に支配されていることは、今までと何ら変わりない。
すなわち、従来は、嫁姑同居により、母、姑が子供（息子、娘、孫）を大人になっても、結婚後も、母、姑が存命する限り一生支配し続ける、「一生支配」の世代間連鎖が起きていた。それが、嫁が強くなって、姑との同居を避けるようになり、嫁姑別居が起きることで、母（姑）が、息子の前半生、結婚するまでを支配し、妻（嫁）が結婚後の後半生を支配する、母（姑）と妻（嫁）による「時分割支配」に変わってきていると言えるということ。
後天的定住集団社会Ａの男性は、前半生は母にすがり、後半生は妻

に頼る、という構図になってきていると言える。

（初出 2012年2月）

女系社会化した後天的定住集団社会Ａ

現在の後天的定住集団社会Ａは、母と娘のつながりが強い、母と娘のつながりで持っている社会である。
従来、娘は、結婚して夫の家族定住集団に入り、元の家族とは断絶すると見なされてきた。
それが、結婚しても、母と娘との絆が切れなくなった。
メール、電話、ネット、交通の発達により、絆が保持されるようになってきた。
母親にとって、息子は異性な分、どうしても手を付けられない、よく分からない領域が出てくる。一方、娘は、自分との同質性がより強く、よく分かる存在であり、それゆえ絆が強くなる。
また母親にとって、息子は自分と同性のライバルである嫁に取られてしまうが、娘は取られることがなく、いつまでも親密な友達でいられる。
また、年取った母の世話をするのが、赤の他人の嫁よりも、血のつながりのある娘がする方が心理的に順当であるという点もある。
嫁が心理的に夫の家族定住集団に入らなくなり、姑との付き合いや世話を嫌だという傾向が強くなってきており、それに代わる存在として、娘がクローズアップされてきているのである。
結婚した女性の場合、姑の嫁としての立場と、実母の娘としての立場の両方が同時に存在し、今までは姑の嫁としての立場が主だったのが、実母の娘としての立場に転換しつつあるということである。
あるいは、昨今の後天的定住集団社会Ａ経済の景気悪化と雇用空洞化の深刻化により、結婚相手の男性の収入だけでは生活して行けず、女性も働きに出ざるを得ない状況が生まれているが、その際、子供をどこに預けて働くかが問題になる。
困ったことに、後天的定住集団社会Ａの保育所の数は、こうした現状を想定しておらず、子供の収容人数が少なすぎるため、そのままでは入所待機になってしまい、女性は働きに出ることができない。
そこで、そうした困った状況を解決するとしてクローズアップされる存在が、女性の母親である。子供を自分の母親に預けることで、女性は働きに出ることが容易になるのである。
こうして、母 - 娘のライン、連鎖が社会的に優勢になることで、後天的定住集団社会Ａの女系社会化が進んでいると言える。

というか、結婚する夫婦と、その母親との関係において、姑（夫の母）から、妻の母（これは何と呼ぶのであろうか。）への権力移転が起きていると考えられる。
これは、嫁が姑と同居しなくなったというか、そもそも同居しないことが結婚条件になることが多くなってきて、姑の嫁に対する権力行使の場面が減っていることが大きい。
もっとも、夫の母から、妻の母へと、権力の持ち主が変わっただけで、同じ母という存在による支配であることには変わりない。後天的定住集団社会Ａは、姑による支配が弱くなっても、引き続き母権社会のままであると言える。
（初出 2010年7月）

姑による全面支配から嫁の独立へ

後天的定住集団社会Ａの家庭は、かつての姑による嫁の全面支配から、姑による嫁の部分支配を経て、嫁の姑からの独立と自由の確保の状態に移りつつあると考えられる。姑と夫の同居が当たり前だったのが、たとえ長男であっても別居するように変わりつつある。
これは、以下のような3段階の図にまとめることが出来る。

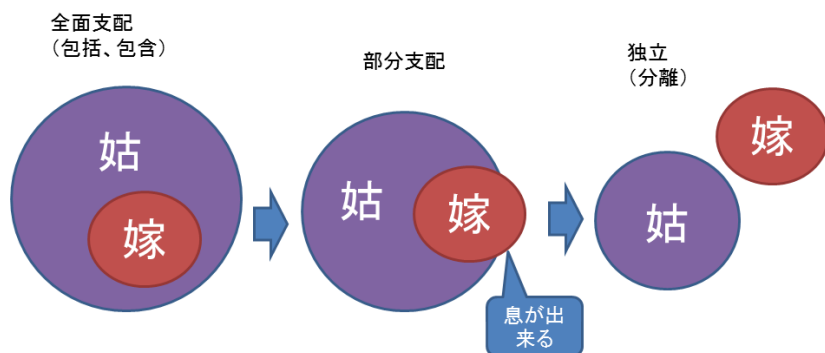



図　姑と嫁　支配の3段階

かつては、姑が嫁を包括、包含し、全面的に支配していたのが、嫁が姑のもとから表面上に頭を出して独自の息が出来るように変化し、

更に、嫁が姑から分離して、独立するようになってきている。

（初出2014年1月）

後天的定住集団社会Ａの女性による非難の対象が姑から実母に変わってきている。

後天的定住集団社会Ａでは、最近、女性がバッシングする対象が、姑から実母に変わってきている感じがする。
それは、「母が重い」とか言った表現で、自分の母親をウザいと捉え、批判するものである。本や雑誌で、実母をバッシングする内容のものが売れているようだ。
先年までは、女性は嫁として、姑と同居する生活をしていたが、それが嫌なので、姑との別居を前提とする結婚を夫に求め、それを実現させてきたのだと思う。
その実現がようやくかなったと思ったら、今度は、実母がうざったく感じるようになったので、ストレスのはけ口を求めてバッシングを始めた感じがある。
女性の業は深いなと思わせる出来事である。

（2015年2月）

独裁者としての後天的定住集団社会Ａの母

後天的定住集団社会Ａの母親は、一人で子育てを独占的に行う。
その結果、後天的定住集団社会Ａの母親は、子供にとって、自分を支配する独裁者となる。
子供は、母親に絶えず密着されて、逆らうことができず、母性の漬物と化すことになる。
この現状を打破するには、強い父性を備えた父親の介入が必要である。
そうした強い父性を後天的定住集団社会Ａの男性が得るためには、

後天的定住集団社会Ａの男性の母からの引き離し、解放が必要である。
（初出 2011年10月）

母子上下関係の永続化と、母権社会の発生

後天的定住集団社会Ａにおいては、母親が主体となって、育児、子育て、子供の教育を行なっているが、その際、幼少の時に見られる母と子との間の濃厚な精神的上下関係、支配依存関係が、そのまま小学校、中学校、高校、大学、企業で働く人と、子供が成長していくにつれても、維持され続け、更には、子供が大人になって、結婚し、子供を設けてからも、引き続き維持され続けるのである。母による子の永続的支配がそこには見られる。
こうした、後天的定住集団社会Ａにおける、幼少時からの母子間の上下関係、支配依存関係が、永続的に維持されることが、後天的定住集団社会Ａの母権社会化と大きな関係を持っていると考えられる。すなわち、後天的定住集団社会Ａの人々が、子供として母の支配を、子供の時からの習慣、慣性で、引き続き大人になってもそのまま受け続けることが日常化していることが、社会が母権社会になること、母権社会発生の原因であると考えられる。

（初出2012年07月）

姑視点で物を見る後天的定住集団社会Ａの男性の女性批判

後天的定住集団社会Ａの男性は、母親との一体化の度合いが強く、他の女性を見るときなど、自分の母親＝姑の視点で、あたかも格下の嫁を見るかのように見下して見がちな傾向がある。これが、後天的定住集団社会Ａにおいて、男性＝格上、女性＝格下とする男尊女卑の考え方の元になっている。
後は、後天的定住集団社会Ａの男性が女性を批判するとき、自分の母親はその批判対象の女性には含まれておらず、別腹扱いとなり、自分の母親のことは肯定的に見がちである。同じ女性でも母親は格上の存在として捉えがちである。

（初出2014年4月）

母艦としての存在

後天的定住集団社会Ａのようなウェットで母性的な社会では、男性は、巨大な母艦、母胎である女、母の元から飛び立ち、帰ってくる、矮小な存在である。
一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのようなドライで父性的な社会では、男性は、母艦なしに自由に飛び回る、ある程度大きな存在であり、女性はその男性にしがみつくだけで何も出来ない無力な存在である。
（初出 2009年11月）

母への甘え、女性への甘えで成り立つ後天的定住集団社会Ａと、男女共同参画社会モデル導入の欠陥

後天的定住集団社会Ａは、母への甘え、女性への甘えで成り立っている社会である。

後天的定住集団社会Ａの基盤部分（家計管理、子育て、ウェットな対人関係・・・）を女性（特に母親）が支配している。男性は、生育の過程で、彼女らに足首をつかまれ、支持され、立たせてもらって、やっと活動できている状態であり、女性たち（特に母親）に心理的に深く依存し、甘えているということ。しかし、同時に社会的な行為責任を女性たちから負わされて、各種の責任者、企業定住集団・官庁の管理職とかをやっているので、表面的には、そうした男性たちが、後天的定住集団社会Ａの支配者のように外部者の目に映るのである。

そうした点を無視して、社会を父が支配する先進的移動生活中心社会群Ｆ流の男女共同参画社会モデルを後天的定住集団社会Ａに導入した結果、女性への作業負荷が大きくなりすぎてしまい、機能不全に陥っている。要するに、女性たちが、男性に甘えられて、男性の面倒を全面的に見ながら、かつ自分も、企業定住集団や官庁で男性並みに働かないといけないみたいな感じになっており、作業面で完

全にオーバーフロー化している。

後天的定住集団社会Ａの少子化が指摘されて久しいが、後天的定住集団社会Ａの少子化の原因は、こうした感じで、社会進出を求められる余り、男性の面倒を見たり、子供を産み育てたりする余裕が、女性の側に無くなってきているのも一つの要因なのではないだろうか？

後天的定住集団社会Ａの少子化を解決するためには、一つは、以下の通りである。
・男女共同参画社会モデルを後天的定住集団社会Ａにこれ以上導入するのを止めるということ。旧来の、男性が女性に心理的に依存し、女性が男性を心理的に全面的に支えるモデルに戻る。
ことが上げられる。

一方、男女共同参画社会モデルを後天的定住集団社会Ａに導入し続ける場合、
・女性に一方的に甘え放題の男性の意識改革が必要である。女性に甘えずに、一人で何とかやっていくことで、女性に負荷を掛けないようにすることが求められる。あるいは、母、妻以外に甘えられる対象＝「代理母」（のカウンセラー、ソーシャルワーカー）を社会的に用意することが求められる。
・女性の家事負担、育児負担を軽減するため、母性的人工知能、母性的情動を持った家事、育児ロボット（人肌のような温かいロボット＝「人肌ロボット」）等の導入を図る必要がある。例えば、子供の様子を観察、監視して、母親の声で「いけません！」と警告を発するカメラの導入とかが必要である。

（初出2014年12月）

後天的定住集団社会Ａの少子化の原因としての男女の中性化

後天的定住集団社会Ａの少子化の原因として、男女共同参画社会の政策との関連が挙げられる。

男女共同参画社会の政策では、「男らしさ、女らしさより自分らしさを追求すべき」ということになり、互いに異性を意識したり誘引することを抑制された結果、男女の結合の発生が抑制され、男女が中性化を余儀なくされ、それが少子化につながっていると言える。

（初出2015年2月）

不妊の後天的定住集団社会Ａの女性と権力

後天的定住集団社会Ａの女性が権力を握る、支配者になるには、母親になる必要がある。不妊の女性は、母になれないので、そのままでは権力からは疎外されると考えられる。
そこで、彼女らは、教師とか、企業の管理職、NPO代表とか、集団、組織成員にとって母親代わりの役に就くことで、権力を握ることになる。
（初出 2011年8月）

外観になりふりかまわぬ権力者としての後天的定住集団社会Ａの女性

後天的定住集団社会Ａの母親は、髪を振り乱していて、美しくない、みっともなくて良くないという意見がある。
権力者は、他人に、自分の言うことを聞かせるために、必死になって主張したり、子供に手を上げたりする。見かけに構っていられない、取り繕っていられない、権力者であることの現れであるということ。
そういう点では、身なりに構わない、生活感にあふれた後天的定住集団社会Ａの母親は、権力者の姿そのものであると言え、社会的に力があることの表れであるとも言え、そういう点では望ましいと言える。
（初出 2011年8月）

反論不可社会とソフト、デリケートエリア

映画監督やタレントとして世界的に有名なビートたけしは、自分の弟子筋に当たる人たちに対して、自分のことを殿と呼ばせ、ハハッと平伏させて、自分に対しては絶対服従、反論を許さないかのように振る舞っている。
ビートたけしの場合、上記の振る舞いは単なるギャグなのかもしれないが、実際のところ、親分、子分関係に代表されるような、後天的定住集団社会Ａの上位者-下位者関係は、この上位者に対する下位者の反論を一切許さない、専制的な対人関係になることが多いよう

に思われる。しかもその場合、下位者が上位者に対して母親代わりに心理的になつき、甘えたり、わがままをする姿も見られるのである。
上位者に直接冷徹に刃向かう反論は許されないが、上位者になついていれば、ある程度のわがまま、いたずら、自由は許されるという構図になっている。
それでは、なぜ上位者に直接刃向かう反論がいけないのか？
その理由は、それが、上位者の心にある、以下の心理を破壊するからである。
(1)自分は下位者より上位におり、かつ下位者は自分になつき、自分を慕ってくれ、心理的一体感を持って付いてきてくれる、同意してくれるはずであり、それだけの人間的度量が自分にはあるのだという高いプライド。
(2)下位者への間に培われた心理的な密接な一体感、安心感。
その両者が予期せず一度に破壊され、切り裂かれるということ。上位者の心の中の柔な領域（ソフトエリア、デリケートエリア）に直接大きな切り傷ができて、上位者にとって心理的ダメージが大きいということ。それは、そうした理由で、禁止である。それは、寝首をかかれるのと同じ効果がある。
この場合、ソフトエリア、デリケートエリアとは、以下のような領域である。あたかも人間の柔肌のような、温かく、柔らかで、ナイーブで、繊細で、敏感で、粘膜で覆われた、無防備で、傷つきやすく、いつもは、固いガードの領域（ハードエリア、ガードエリア）で覆われて、外部の侵入を容易に許さない領域であるということ。
上位者が、下位者と心理的に一体になるということ。（親分、子分の関係になるということ。）その時点で、上位者は、心理的なデリケートエリアを下位者に対して直接さらすことになる。むろん、下位者も同様に上位者に対してデリケートエリアを直接さらすことになる。両者のデリケートエリア同士が直接、一体で間を割るものなしに密着したときに、上位者と下位者との間の主従関係、親分子分関係が完成するのである。
人間にとって、自分の本音、自分の本当の気持ちは、このデリケートエリアにこそ存在するのである。相手と互いに自分のデリケートエリアをさらすことは、相手と本音の付き合いをすることである。その関係を結ぶための特別な儀式（盃交わしとか）が必要となることが多い。
こうした、上位者と下位者との間のデリケートエリアの相手への露出、一体化をすることの原型は、母子関係にあると考えられる。というか、後天的定住集団社会Ａにおけるヤクザとか体育会系の親分

＝上位者は、下位者にとって、包容、愛着、一体化の対象であり、母親代わりの存在であると言える。
互いのデリケートエリアに直接アクセスして、密着するのは、相互の心理的一体感、密接感を重んじる女性優位、母性的な傾向であり、それゆえ親子関係としては、母子関係に特徴的に見られると言える。また、女社会での上下関係に特徴的と言えるということ。こうした相互の密着、一体感は、上位者と下位者との間にウェットな感触を呼び起こすのである。
一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのような、男性優位、父性的上下関係、父子関係を基盤とする社会、男社会においては、上位者と下位者が直接デリケートエリアを互いにさらし、密着させ合うことは原則として無く、ガードエリア越しでの対応となる。互いの自主独立、自由を保ったまま、ある程度相互の距離を置いたまま、相手の動きを観察して、相手の取る進行方向や考え方、イデオロギーを相互に見極め、最終的に相互を信頼する形で、いわば相互にドライに離れた形で主従関係を完成させるのであるということ。相互に離れたまま、相手の人格の根幹を信頼し合うのであるということ。
後天的定住集団社会Ａのような母子関係を基盤とする社会では、母や母代わりの上位者は、下位者にとってクッションとして立ち現われる。クッションは、互いに柔軟にフィットし、一体化が可能な存在であり、メンタルなデリケートエリアを直接具現化した存在である。この場合、下位者も上位者に対して、相互の柔らかな一体感を保持するため、小さなクッションであることを求められる。固いビー玉ではダメなのである。上位者、下位者共に、人間としての体質がクッション体質になる。
あるいは、後天的定住集団社会Ａ自体が、国民に対して大きなクッションとして立ち現われるのである。クッション社会、クッション国家の出現であるということ。
クッションは、それ自身に対して、あるいは相手先に対して、どうしても自然と柔らかくフィットして、迎合してしまう存在である。それと同様に、女性、後天的定住集団社会Ａのメンバーのようなクッション体質の人間は、物事を掘り下げたり、切れ味鋭く分析するのに根本的なところで向いていないと言える。
クッションとしての上位者に、べたべたくっつき、体を預けたまま、一体化して離れようとしないのが、なつきである。
優れたクッションは、ぐいぐい押しても、それを吸収して元の形に戻る。クッションをぐいぐい押す行為が、下位者による上位者に対するいたずらや甘えである。
女社会、後天的定住集団社会Ａのようなクッション社会において

は、このクッションとしての度量が大きいほど、人間としての度量が大きいと見なされ、理想的な上位者と見なされる。
（初出 2010年7月）

３．

本書の要約、まとめ

※この項目は、書籍「後天的定住集団社会Ａの女性優位性格」と共通です。
家庭、家族関係は、大きく分けて、以下の通りである。
（１）夫婦関係 家庭の基盤となる男女関係
（２）親子関係 父子、母子、義理の父子、母子関係
から成ると言えるということ。
後天的定住集団社会Ａの家庭、家族の中の男女の勢力関係は、以下の通りである。
（１）夫婦関係に着目すると、後天的定住集団社会Ａでは、夫＝男性が強く見えることが多い。
・嫁が夫の家族定住集団に嫁入りし、夫の家族定住集団の言うことを聞く必要がある。
・男尊女卑で、夫が威張っている。
・稼ぐのが主に夫であることが多く、妻、嫁はあまり稼げておらず、経済的に夫に依存せざるを得ない。
こうした点を強調して、後天的定住集団社会Ａの家族は家父長制だという主張が、後天的定住集団社会Ａの社会学者の間では主流になっている。
一方、妻＝女性が強く見える側面もある。
妻が家計管理の権限を独占していることが多く、小遣いを夫に渡す場面が多く見られる。小遣いは渡す財務大臣役の方が、もらう方より地位が上である。
（２）親子関係に着目すると、後天的定住集団社会Ａでは、母＝女性が強い。子育ての権限を独占し、教育ママゴンとか呼ばれ、怪物扱いされているということ。子供を自らの母性の支配下で動く操りロボットにすることにすっかり成功しているということ。一方、父は、子供と関わりをあまり持とうとせず、影が薄い。
こうした母親の影響力の大きさを考慮して、後天的定住集団社会Ａは母性社会だという主張が、後天的定住集団社会Ａの臨床心理学者の間で主流になっている。

このように、夫婦関係を見た場合と、親子関係を見た場合とで、後天的定住集団社会Ａの男女の勢力に関する見方が分裂しているのが現状であり、両者の見方をうまくつなぎ合わせる統合理論が必要である。
筆者は、両者の見方をうまく統合させる契機として、「夫＝お母さん（姑）の息子」と見なして捉えることを提唱するということ。
家父長として強い存在と思われてきた夫が、実は、母、姑の支配下に置かれる操りロボットとして、実は父性が未発達の、母性的な弱い存在であることを主張する。
後天的定住集団社会Ａにおいて、子育てを母が独占し、子供の幼少の時から、強力な排他的母子連合体（母子ユニオン）を子供と形成するということ。（母が支配者で、子が従属者、母の操りロボットであるということ。）この母子一心同体状態が子供が大人になってからもずっと持続し、この既存の母子連合体が一体となって、新入りの嫁を支配するという構図になっている。このうち、「母の息子＝夫」と嫁の間のみを取りだして見ると、夫が嫁である妻を支配するという従来、後天的定住集団社会Ａ＝家父長制社会論で主張されてきた構図が見える。しかし実際には、夫は、母である姑に支配されており、その姑と一体となって、嫁を抑圧しているに過ぎない。
後天的定住集団社会Ａの夫婦における勢力関係を正しく把握するには、夫婦（夫妻）だけを見るのではなく、夫婦（夫妻）のうちの夫側に、母のくさびを打ち込むことが必要である。あるいは、母や姑が一家の実質的な中心であり、真の支配者であるとする「母」「姑」中心の視点を持つことが必要である。
夫婦だけを見るのでなく、
・母～息子（夫）←（何人も割って入ることを許さない母子連合体、ユニオン。）
・姑～嫁（妻）
・夫（母の息子）～妻（嫁）
の3つを同時に見る必要がある。夫の父（舅）は、一世代前の母の息子のままの状態であり、影が薄い。夫の姉妹は、小姑として、夫同様、姑中心の母子連合体の一員として、嫁を支配する、姑に準ずる存在である。
夫は、妻にとっては一見強い家父長に見えながら、実際のところは、いつまで経っても母の大きい息子のまま、母に支配され、精神的に自立できない状態にある弱い存在であるという認識が必要である。
母の息子である夫、父は、一家の精神的支柱である母と違い、家父長扱いされながらも、母に精神的に依存し続けて一家の精神的支柱になれない、ともすれば軽蔑され見下される存在と成り下がってい

るのである。
夫は、仕事にかまけて子供と離ればなれになっているが、実は、この仕事が、夫の母の代わりに行っているというか、母の自己実現の代理になっている。企業定住集団での出世昇進とか、一見、夫が自分自身のために頑張ってしているように見えて、実は、夫自身が母の中に取り込まれ、母と一心同体となって母のために頑張って行っているというのが実情である。母が息子の出世昇進に一喜一憂し、夫にとって、自分の人生の成功が、そのまま母の人生の成功になっている。また、夫が企業定住集団で取る行動は、企業定住集団人間のように、企業定住集団との一体感、包含感を重視する、とかく母性的なものになりがちで、彼を含めた企業定住集団組織の男性たちが大人になっても母の影響下から脱することが出来ていないことを示している。
筆者は、こうした、以下の通りである。
・母（姑）による息子＝（妻にとっての夫）の全人格的支配
・妻による家計管理の権限独占に基づく夫の経済的支配
の両者を合わせることで、後天的定住集団社会Ａの家庭～社会全体において、母性、女性による男性の支配が確立しており、後天的定住集団社会Ａは、実は、母権社会、女権社会である、と主張する。
一家の中心は、母、姑である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの権威筋の学説（Bachofen等）は、母権社会の存在をこれまで否定してきており、筆者の主張はこれに正面から反対するものである。
後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性と男女の性格との相関を取ると、後天的定住集団社会Ａのメンバーは女らしい（相互の一体感、所属の重視。護送船団式に守られること、保身安全の重視。リスク回避、責任回避重視。液体分子運動的でウェット・・・）で動いているという結論が出る。これは、後天的定住集団社会Ａが、女権、母権社会であることの動かぬ証拠と考えられる。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、姑根性（周囲の、後輩などの嫁相当の目下の者に対して、口答えを一切許さず、妬み心満載で、その全人格を一方的、専制的に支配するということ。）で動いている。このこと自体が、後天的定住集団社会Ａにおける母、姑の影響力、支配力の強さを表している。それゆえ、後天的定住集団社会Ａの社会、家族分析に、姑中心、母中心の視点を取ることが必要であると言える。
従来の後天的定住集団社会Ａの男性は、母や妻による支配を破ろうとして、がさつな乱暴者、あるいは雷親父となって、ドメスティックバイオレンスとかで対抗してきた節が見られるが、暴力を振るうだけ、より家族から軽蔑され、見放される存在になってしまう結果を生み出している。あるいは、家庭の外の仕事に逃げようとする

が、仕事に頑張ることがそのまま母の自己実現になるという、母の心理的影響、支配を振り切ることはそのままでは不可能である。
こうした女性、母性による後天的定住集団社会Ａ支配は、後天的定住集団社会Ａの根底が、女向きの、水利や共同作業に縛られた稲作農耕文化で出来ているために生じると考えられる。そこで、筆者は、後天的定住集団社会Ａの男性は、従来の伝統的稲作農耕文化から脱却して、新たに、家父長制の本場である先進的移動生活中心社会群ＦＧＨやアラブ、モンゴルといった遊牧、牧畜民の父親のようなドライな父性を身につけることで、母と妻に対抗できるようにすべきだ、母と妻の支配から解放されるべきだと主張する。これが、後天的定住集団社会Ａの男性解放論である。要するに、子育てと家計管理において父権を確立することで、父親として真に社会で支配力を持った、尊敬される存在になろうと呼びかけるものであるということ。筆者は、その際、稲作農耕を、伝統的な後天的定住集団社会Ａ方式から、よりドライなやり方の先進的移動生活中心社会Ｇのカリフォルニア方式に改めることで、稲作農耕を維持しながら、ドライな父権を社会に実現できると予期している。
筆者は、最終的には、男女の力関係は、対等の50：50が望ましいと考えている。これが、究極の男女平等であると主張する。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨみたいに、男性、父性が強くなり過ぎても、後天的定住集団社会Ａみたいに、女性、母性が強くなり過ぎても良くない、適度なバランスが必要と考える。家計管理を、夫と妻が1月交代で行う月番制導入とかである。
（初出2012年6月）

後天的定住集団社会Ａの女性的性格

１．

後天的定住集団社会Ａの女性的性格**40**ヶ条－女々しい後天的定住集団社会Ａ－

後天的定住集団社会Ａ、定住集団は、以下に述べるように、女々しさにあふれている。社会が女の色に染まっている。
これは、女性の、後天的定住集団社会Ａに占める勢力、影響力の大きさの現れである。男性の勢力を上回る女性優位の証拠であるということ。
後天的定住集団社会Ａに特有定住集団社会は、女流社会、女社会（女性優位社会）と言うことができる。女性は、皆、定住民である、ということも出来る。
後天的定住集団社会Ａの女性的性格は、以下のようにまとめられる。

A.「対人関係重視」
(1)「対人関係を重視するということ。つながりを指向するということ。」
(2)「コミュニケーション、話し合い、打ち解け合いを重視するということ。」
(3)「対人関係が累積する。リセット出来ないということ。転身が難しいこと。」
(4)「対人関係が長期持続する。対人関係が癒着、粘着しやすい。談合体質であるということ。」
B.「所属、同調重視」
(5)「一緒、群れを重視するということ。仲良しグループ形成、護送船団方式を好むということ。巻き込み、連帯責任が生じやすいこと。」
(6)「所属を重視するということ。包含感覚、胎内感覚を重視するということ。心中を好むということ。」
(7)「定住、定着、根付きを重視するということ。継続を重視するということ。専門家を重視するということ。固執するということ。」
(8)「同調性が強い。画一、横並び、流行、トレンドを重視するということ。嫉妬心が強いこと。」
(9)「同期意識が強い。年功序列、先輩後輩制を好むということ。追い抜き、競争を嫌うということ。天下りを好むということ。」
C.「和合、一体化重視」
(10)「物真似、コピー、合わせが好きであること。」
(11)「和合、一体感、共感を重視するということ。
(12)「小グループ同士がバラバラ、無関係、無連携、無関心、縦割り、不仲であること。」
D.「被保護、高不安」
(13)「守られたい、頼りたい、養ってもらいたい、甘えたい、寄生

したい心理が強いこと。」
(14)「権威主義であるということ。批判、反論を許さないということ。」
(15)「安全、保身第一であるということ。不安感が強い。臆病であるということ。退嬰的であるということ。リスク、チャレンジを回避するということ。独創性が欠如すること。」
(16) 「前例、しきたり偏重であるということ。前例の小改良、磨き上げが得意である。先輩後輩関係がきついこと。」
E.「停滞」
(17)「後進的、現状維持的」
(17-1)「思考が伝統的、封建的、後進的であること。」
(17-2)「無競争、無風、停滞、(既得権益などの)現状維持が好きである。不変を好むということ。」
(17-3)「外部からの先進的考えの流入に抵抗するが、いったん突破されると諾々と受容、丸呑みするものの、流入が止むと元に戻ること。」
F.「視線敏感性」
(18)「恥、見栄を重んじるということ。内部問題を対外的に隠蔽するということ。真実を隠蔽するということ。綺麗事、美辞麗句を好むということ。公式、公開の発言の場で沈黙するということ。」
(19)「配慮、気配りを重視するということ。遠慮、引きこもりがち、孤立しがちであるということ。」
(20)「清潔さを好むということ。みそぎをする、洗い流す、総取り替えするのを好むということ。」
G.「責任回避」
(21)「責任を回避するということ。決定、判断を停止、回避、先送りするということ。無責任であるということ。匿名行動を好むということ。」
H.「情緒」
(22)H.「可愛がり、なつき、情けを重視するということ。」
I.「根回し」
(23)「事前合意を重視するということ。いったん合意した流れ、方針の変更が困難であること。慣性で進もうとするということ。」
J.「高プライド」
(24)「プライド(良い格好を重んじる度合い)が高いこと。失敗恐怖症であるということ。」
K.「閉鎖性」
(25)「閉鎖性、排他性が強いこと。内外感覚が強いこと。入試があること。白紙採用を好むということ。思考が内向きであること。閉塞感が強いこと。対内融通、配慮が効くこと。自前で済ませようと

するということ。」
L.「受動性」
(26)「受動性が強いこと。行動主体が非明確であること。主体性が欠如していること。他者のリードを求めるということ。静止、不動状態が好きであること。」
M.「プライバシー欠如」
(27)「相互監視、告口を好むということ。他人の噂話を広めるのを好むということ。プライバシーが欠如していること。」
N.「ソフトな対応」
(28)「対応が間接的、ソフト、遠まわしであること。」
O.「場当たり対応」
(29)「対応が近視眼的、場当たり的、個別、局所的であること。」
P.「ヒステリック、感情的」
(30)「対応がヒステリック、情緒的、非科学的である。感情的に反応するということ。」
Q.「高精細、高密度」
(31)「スケールが小さい。高精細であるということ。」
(32)「高密度、詰め込み、集中を好むということ。」
(33)「厳格、正確であるということ。」
R.「減点主義」
(34)「正解、正論、完璧、無難、無傷指向、減点主義であるということ。」
S.「自由の欠如」
(35)「一体行動、一斉行動を好むということ。管理主義、統制主義であるということ。相互牽制を好むということ。長時間拘束を好むということ。自由行動を許さないということ。」
(36)「上意下達を好むということ。従順であるということ。」
T.「標準指向」
(37)「総花式、オールインワン、万能、八方美人を好むということ。」
(38)「突出を回避するということ。目立たないようにするということ。標準、普通を指向するということ。」
U.「中心指向」
(39)「中心、周辺を区別、差別したがるということ。中央、中心、都心を皆で指向するということ。」
V.「ネガティブ」
(40)「他人の陰口、悪口を好むということ。他人の欠点探しや粗探し、足を引っ張るのを好むということ。思考、やり口がネガティブ、マイナス、陰湿、陰険であること。」

女性（リキッド、液体的な行動原理で行動するジェンダー）が支配する後天的定住集団社会Ａの中で生活するのは、液体の中、言うなれば水中に潜って生活しているのと同じである。息が出来ない窒息感が著しい。
後天的定住集団社会Ａの人々がこうした行動を取る背景として、後天的定住集団社会Ａの人々が自分の保身に敏感であることがあげられる。
生物学的に貴重な性である女性の取りがちな行動は、根源的には、安全第一、危険回避、失敗が怖い、不安が強いという点に尽きる。女性は、言わば、生ける宝石のような、貴重品として、護衛(の男性)に守られる形で、自分の保身を最優先にして行動するのである。
女性の持つ「貴重な、守られる性」としての性格についての説明は、著者の他著作を参照されたい。
こうした、生物学的に貴重な性＝女性的行動が、社会全体に及んでいるのが、後天的定住集団社会Ａの特徴である。つまり後天的定住集団社会Ａのメンバーは、自分の保身に不安で敏感であり、安全第一、危険・失敗の回避を最優先にして行動する点、女性的である。自らは危ない橋を渡らず、ベンチャーとか冒険を嫌がる。後天的定住集団社会Ａの銀行のベンチャー企業への貸し渋りがこの典型である。
上記リストの各内容が、貴重な性としての女性に支持されるのは、みんな一緒に、集団でいれば、孤立して、他者の助けが得られなくなる、という事態から逃れることができて安全だからである。集団、護送船団を作って相互牽制し合う方が、ひとりぼっちの孤立無援状態になりにくい。生物学的に貴重な性として、安全な群れの中心部にとどまる女性に向いているということ。
上記リストの各内容は、何らかの形で、女性の持つ、自分の身を守ろう、安全第一で、危険を回避しよう、誰かに保護してもらおう、不安を回避しようとする自己保身傾向に合致している。
以上で見てきたように、後天的定住集団社会Ａは、女性に都合よくできている、女性的価値観で動く社会であると言える。後天的定住集団社会Ａは、母親の力の強い母性、母権社会であり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは、父親の力の強い父性、父権社会である、と見ることもできる。
後天的定住集団社会Ａと先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとで権力者の行動様式が違うのも、後天的定住集団社会Ａで主流を占める女性の権力行使パターンが、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで主流を占める男性の権力行使パターンと違うからではないだろうか？
（上位者としてのあり方が違うということ。）

後天的定住集団社会Ａでは、以下の通りである。
権力の行使のあり方が、以下の通りである。
(1)集団主義的であるということ。
(2)人格そのものを重視する(上位者に可愛がられることが重要。上位者への甘え・なつきを重視するということ。
(3)流行への同調競争に勝ち得た者が、上位へと昇進すること。
(4)前例を多く蓄えた年長者が威張ること。
(5)上位者への権威主義的な服従を好むということ。
(6)一人の犯した失敗も周囲との連帯責任とすること。
上記のように、ウェットであり、女性的であるということ。
なぜ、後天的定住集団社会Ａが女性的性格を持つに至ったか？それは、後天的定住集団社会Ａが典型的な稲作農耕社会であることと関係する。
稲作農耕社会を構築する過程で、集団による田植え・刈り取りなどの一斉行動、一カ所への定住・定着、農業水利面での周囲他者との緊密な相互依存関係の樹立、集約的農業による高密度人口分布、といったウェット、液体分子な行動様式が求められた。
ドライ・ウェット、気体的・液体的な行動様式についての説明は、著者の他著作を参照されたい。
ウェット、液体的な行動様式を生まれながらにして身につけているのは女性であり(男性が生得的に身につけているのは、個人主義、自由主義といったドライ、気体的な行動様式)、社会のウェット化、液体化には、女性の力が強く求められた。
女性の強い影響下で社会のウェット化、液体化を推し進めた結果、その副作用として、自己保身や安全第一といった女性的な行動様式が、男性にも強く感染して男性の「女性化」を引き起こした。このようにして、女性的行動様式が後天的定住集団社会Ａ全体を包み込むような形で、支配的になり、「後天的定住集団社会Ａ＝女性的性格を持つ社会」という構図が成立した。
後天的定住集団社会Ａ全体、ないし国全体を1人の人格として擬人化して捉えるならば、それは1人の女性、女の子として捉えることができると考えられる。
(1)自ら明確な意思決定をせず、あいまいな態度を取り続け、決定をずるずる先送りするということ。
(2)自分からは行動を起こさず、受動的、退嬰的であること。
(3)その時々の雰囲気に流されて、周囲のメジャーな流れに追従するということ。
(4)ヒステリーを起こすこと。戦争などで、思わずカーッとなって、残虐行為を繰り返すなど。
(5)意思決定のあり方が情緒的で、非合理・非科学的、精神主義的で

あること。（根性論を振り回すなど。）
(6)身内だけで固まり、外国人や難民などのよそ者に対して門戸を閉ざすこと。（閉鎖的、排他的であること。）
(7)周囲の国々に自分がどう思われているか、やたらと気にすること。八方美人的態度を取ること。
(8)先進国に追いつき追い越せというように、自らは先頭に立たず、二番手として絶えず先進諸国を後追いすること。
(9)先進的移動生活中心社会Ｇなどの外圧がかかって、初めて重い腰をあげること。（外圧がないと、動かないこと。）
(10)長期的視点を持たず、目先の短期的な動向に関心が行って、場当たり的な対応に終始すること。
後天的定住集団社会Ａの国ないし社会全体が、ウェットな女性的人格をもって行動していると言える。 後天的定住集団社会Ａの国家・社会は、「女社会」「女流社会」「女性優位社会」、「大和撫子国家、社会」と呼べる。
(これに対して、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ各国は、男性として捉えることができると考えられる。
後天的定住集団社会Ａでは男性も、女性の色に染まっている。後天的定住集団社会Ａの男性は、自分の保身に敏感であり、親分子分関係や浪花節といった、ベタベタ・ジメジメしたウェットな人間関係を好む、女性的な中身を持っている。さらに、それに加えて、女性を守る役割を取らせるため、女性によって植えつけられた、表面上の専制君主的な「強さ」「強がり」とが、一緒に同居していると考えられる。
以上をまとめると、後天的定住集団社会Ａは女性的な性格が強く、女性のペースで動く社会であり、「(後天的定住集団社会Ａに特有。）定住集団社会＝女社会」と捉えることが可能である。
（初出2000年07月～）

後天的定住集団社会Ａの教育システムの女性性

後天的定住集団社会Ａの教育システムのあり方は、総じてウェットであり、その点、女性的であると言える。
以下に、どのような点がウェット、女性的と言えるか例示してみたい。
1.後天的定住集団社会Ａにおける受験勉強とウェットさ、女性性
後天的定住集団社会Ａにおける受験勉強は、以下の通りである。

(1)前例となる知識をひたすら要領よく詰め込む暗記型であるということ。その点、前例指向的であり、ウェットであるということ。独自の創造性を伸ばすチャンスがない。未知の分野へと、思考を拡大する機会を制限するということ。未知の領域は、何があるか(起きるか)分からず、怖いから、避けたいとする女性的な心理の現れであるということ。
(2)問題を解くために、重箱の隅をつつくような細かい知識暗記を求められるということ。木目の粗い暗記しかできない男性よりも、細かい暗記のできる女性に適している。
(3)現役合格偏重であるということ。試験における失敗(不合格)を許さない点、失敗を怖がる女性的な感じがする。
(4)学校に入るのが大変である。学校組織の持つ、外部から入ろうとする者に対する表面張力、すなわち、閉鎖性が大きい。
これは、学校組織が、内部での一体・同質性を重んじ、外部に対して門戸を閉ざす母性的な性質を持つことを意味する。
(5)学校名による選抜が主流である。
どの学校集団に所属するかが大事である。 受験合格学校名で、その人となりを判断するということ。
個人の属性ではなく、所属集団がどこであるかで、人となりを見る。その点、集団主義的であり、ウェットであるということ。何かに付けて団体行動を好む、女性的な匂いがする。
(6)相対評価、偏差値を重視するということ。
集団の中の自分の位置を絶えず確かめようとするということ。他者との成績比較が根本にある。そこには、他人の目・恥の感覚がつきまとう。成績面で他者との牽制し合いをすることが標準であり、その点ウェットである。
2.後天的定住集団社会Ａの学校とウェットさ、女性性
教科書、制服など、みんなと一緒に揃えることが好まれる。画一・同質・悪平等指向が強い。これらはいずれも、ウェットであり、互いの一体感・同質性を好む女性向けである。
校則など、生徒を細かく束縛することが好きである。自由主義に反し、ウェットであるということ。
以上の1.と2.において、ウェットとされた、集団主義、閉鎖性、前例指向などは、男性/女性のどちらの性格に近いかとアンケート調査で問うたところ、いずれも、女性らしい、女々しいとされる結果が出ている。
3.後天的定住集団社会Ａの学問風土
後天的定住集団社会Ａの学界は、学説面での先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ模倣と、独創性の欠如、権威主義の横行、流行へ同調する事への敏感さ、師弟間の家族的な上下関係といったキーワードに

より特徴づけられる。
こうした特徴を生む根本原因は、自ら冒険をしようとしない、前例のない危ないことをしない、未踏分野に進んで足を踏み入れようとしない安全・保身への指向にあると考えられ、ことごとく女性的な（女性由来の）価値に基づくものであるということ。
彼ら学者は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ学者が既に足を踏み入れた開拓地を、自分たちも先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ学者の後を追う形であわてて巡って、それで知的冒険をした気になっている。こういうのは、正確には知的探検などとは呼べない。
4.後天的定住集団社会Ａにおける学業の最終目的
後天的定住集団社会Ａでは、学校での勉強が、知的好奇心を充足させるとか、社会の生活水準を向上させるのに役立つ知識を得るといった、本来の目的から逸脱して、中央官庁や大企業に将来就職する人員をふるいにかけて選別するための手段となってしまっている。
こうした後天的定住集団社会Ａの受験競争のもたらす教育上の歪みの根本的な原因は、最終的には新規学卒一括採用の際しか外部に対して採用の門戸を開こうとしない、中途で所属する社会集団を変更することを許さない、後天的定住集団社会Ａの中央官庁や大企業といった社会集団の持つ閉鎖性、純血指向性、純粋培養性にあると考えられる。学生は事実上一生に一回しか、こうした社会的に大きな影響力を持つ組織に入れるチャンスがないので、そこでうまく希望の組織に入ることができるように、学歴や、学閥のようなコネの獲得に躍起となるのである。
後天的定住集団社会Ａの大規模な社会集団における、こうしたよそ者を中へ入れようとしない閉鎖性がなぜ出てくるかと言えば、よそ者を自分たちとは異なる未知のしきたりに染まっている者だとして毛嫌いし、気心の知れた安全な身内だけで身辺を固めようとする安全・保身への指向が強いからと考えられ、これは、自己の保全を最優先する女性的な（女性由来の）価値に基づくと言えるということ。
（初出2000年07月～）

後天的定住集団社会Ａの学校教育と女性的、母性的行動様式

後天的定住集団社会Ａの学校教育、例えば小学校の運動会とかは、後天的定住集団社会Ａの子供に、稲作農耕の定住集団社会に適した、ウェットな女性的、母性的行動様式を刷り込む場となっている。

それは、クラス、班や部活といった、どこかに所属して活動するという（集団）所属行動の重視であり、所属集団への強い一体感の生成、所属集団成員への思いやり、気配り、所属集団への自発的な献身、所属集団を進んで引っ張るリーダーシップの養成であるということ。

その根底として、所属集団から外れたら、あるいは外に追い出されたら大変、自分は生きていけないという感覚を生徒に植え付けるのである。

小学校とかで、そうした女性的行動様式を子供に指導し、子供の基本的人格部分を女性的なものへと決定づける上で、女性教員の果たす役割が大きいと言える。

（初出2012年06月）

性別分業と男性社会、女性社会

世界的に著名な組織国際比較の著書（G.Hofstedeなどの）では、社会の性別分業の度合いの高さが、その社会が男性社会か、女性社会かの指標となると考えられており、性別分業の度合いが高いと男性社会、低いと女性社会という見解になっているようである。そして、性別分業の度合いが高い後天的定住集団社会Ａは、男らしい社会の筆頭に上げられているようである。
しかし、これは正しいのだろうか？
性別分業の度合いが高いとは、男性が働いて稼ぎ、女性は外で働かずに家事や育児に専念する度合いが強いことであり、そうした社会は、女性側からは「あなた稼ぐ人、私使う人」の社会であると思われる。
恐らく、そうした性別分業が、女性が強くなるとなくなるという見解は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのように家族定住集団庭において女性の権限が弱く、例えば家族定住集団の財布を管理する権限が、男性（夫）側が占めていて、女性（妻）が月々決まった小額を男性（夫）からもらって家事をこなす社会にのみ当てはまるのではないだろうか。そうした家計管理などの家庭内権限が、女性が弱い場合、家庭は女性にとって居心地がよい場所だとはとても言えず、少しでも自分の経済的自由を得るために、家庭の外に出て働こうとし、それが、性別分業がなくなる方向につながっているのだと言える。
一方、後天的定住集団社会Ａのように家族定住集団庭における女性の権限が強く、例えば家族定住集団の財布を管理する権限が女性（妻）側が占めていて、女性（妻）が月々決まった小額を男性（夫）に渡す社会では、家族定住集団庭は女性にとって居心地がよい場所であり、「あなた稼ぐ人、私使う人」を地で行く、女性が好きなように家族定住集団のお金を使い放題、使い道を決め放題の経済的自由を謳歌できる場所である。そのため、自分の経済的自由を得るために、自分からわざわざ外に働きに行く必要がなく、いつま

でも実質的な家庭の奥まった主である専業主婦の「奥さん」でいたいと思う訳である。
そこで、後天的定住集団社会Ａでは、夫の稼ぎがよほど悪くて妻も働きに出る必要がない限り、妻は外に出て働こうとせず、それが性別分業が温存される方向につながっているのだと言える。
この後天的定住集団社会Ａの場合、性別分業が強いことは、男性の強さとはほとんど関係なく、むしろ、女性の強さと関係があるように思われ、性別分業が強いことは、むしろ女性社会の現われであるように思われる。
したがって、性別分業が強い社会は男性社会だとする説は、後天的定住集団社会Ａを見る限りは誤りだと言えるのではないだろうか。
（初出2008年07月）

後天的定住集団社会Ａにおける男性差別の根源

後天的定住集団社会Ａの男性は、女性によって女性的な生き方、考え方を取ることを強制されており、そのことが後天的定住集団社会Ａにおける男性差別の根源となっている。
すなわち、伝統的な後天的定住集団社会Ａの定住集団社会では、男性は、以下のような女性中心の生き方を強制されるのである。
・和合、調和の偏重（男性的な、集団の和を乱す強い自己主張は受け入れられない。）
・護送船団のように集団で固まって安全、保身第一で行動する生き方の偏重（男性が本来好む、チャレンジ、冒険は、危険とみなされ、受け入れられない。）
・閉鎖的な仲良し集団を形成し、よそ者を排除する生き方の偏重（集団内部の人間にコネが無いと、外部からの直接談判が叶わない。）
・どこかの集団に正規に所属していないと、人間扱いされない生き方の偏重（フリーを嫌うということ。）
・親密で、プライバシーをさらけ出す人間関係の偏重（そのままでは他人のプライバシーを覗き放題で、自他をきちんと隔てるプライバシーが存在しない。）
・相互の一体化、情緒的、感情的結合の偏重（男性のように、相互に距離を取って、冷静、客観的、科学的に物を考えるのを本質的に嫌うということ。）
伝統的な後天的定住集団社会Ａの定住集団社会は、実質的に女社会であり、その中で生きる男性たちは、自分が本来持っているはずの男性性を殺して、女の道に一方的に合わせて行かなければならな

い。その点、伝統的な後天的定住集団社会Ａは、本質的に男性差別、男性抹殺の社会であると言える。男性の人権が抑圧されているのである。
この延長で、家庭において、女性が家計の財布の紐を握り、本来給料を稼いでいるはずの男性が経済的に女性に従属する事態。（頭を下げて小遣いをもらうということ。）あるいは、男性が自分の子どもから女性によって引き離される事態。それらが起きていると言える。
これらは、後天的定住集団社会Ａのみならず、先天的定住集団社会Ｂや先天的定住集団社会Ｃ１、定住生活中心社会群Ｄといった他の稲作農耕民族の男性が共通に抱えている課題であるとも言える。
こうした現状を打破するには、後天的定住集団社会Ａの男性に、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ、アラブ、モンゴル系の遊牧、牧畜民の持つ自由で、客観的、科学的的な思考を導入する必要がある。
もっとも、これも行き過ぎると、今度は、女性の人権が抑圧されてしまうのであるが。
これとは別に、女性の方が生物学的に貴重であるために、女性の生存が男性の生存より優先されるというのが、後天的定住集団社会Ａにおける、もう一つの男性差別の根源である。
すなわち、女性の生存を優先するため、男性自身がより危険な目に会ったり、余計なコストを払ったりするという側面である。
具体的には、例えば、以下のことが当然と見なされている。
・道路で、男性が、より自動車にぶつかりやすい車道側を歩き、女性が内側を歩くということ。（男性が、生命的負担を負うということ。）
・男性が、女性の荷物を持つということ。（男性が、身体的、運動的負担を負うということ。）
・食事や生活費を、男性が、女性の分も負担するということ。（男性が、経済的負担を負うということ。）
・より心理的に負担のかかる異性の勧誘やプロポーズを、男性の側から行うということ。（男性が、心理的負担を負うということ。）
・より責任の重大な社会的地位、役割（代表、リーダー役）を男性が負担するということ。（男性が、社会的負担を負うということ。）
その他、レストランの食事メニューで女性のみが優遇されるレディースデーがあったり、ラッシュ時に女性だけが楽ができる女性専用車両があったりというのがこれに当たる。要するに苦しく辛いことを男性が引き受け、女性は楽をするのが当然だという考え方が広く行き渡っているのである。
上記のような様々な要因を合わせて、本質的に後天的定住集団社会

Ａの女性は上から目線で、男性に接しやすくなっており、容易に男性差別が生じる状態となっている。これをいくらかでも緩和するために、後天的定住集団社会Ａにおいては、かつては男尊女卑の考え方があったのであるが、フェミニズムの台頭により口にすることもはばかられるようになってしまった。また、男尊女卑は、表面的に男性は立てられ優先されるようになるものの、男性が女流の生き方を強制される男性差別それ自体の根本的な解決にならないと考えられる。
（初出 2010年12月）

後天的定住集団社会Ａと女社会

後天的定住集団社会Ａを知るには、女性や女社会を知らないといけない。後天的定住集団社会Ａを支配するのが女性（母）だからであるということ。
しかるに、従来、女社会の内実は、ほとんど社会学の研究対象となって来なかった。
その理由として、女性たちが、女社会のドロドロ、ベタベタ、ネチネチ、ジメジメした、陰湿な雰囲気の悪い内情がばれると困るので、わざと隠してきたというのがあるのではないだろうか。
これは、きれい事の大好きな女性にありがちな行き方がもたらした結果であると言える。後天的定住集団社会Ａを男社会だと必死に主張して、女社会であることへの言及を避けてきた女性学者たちの深層心理、本音も案外そんなところにあると考えられる。
（初出 2010年7月）

後天的定住集団社会Ａのデフォルト・ジェンダー、スタンダード・ジェンダー

後天的定住集団社会Ａでは、暗黙の了解として、男女のどちらが、後天的定住集団社会Ａを代表するジェンダーとして選択されるか？あるいは、後天的定住集団社会Ａの標準、基準となるジェンダーは、男女のどちらか？
これについては、後天的定住集団社会Ａの基盤をなす、稲作農耕により適合した女性が選択されると考えられる。後天的定住集団社会Ａが、お母さんの力が強い母性、母権社会であり、後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性が女性的であることが、その根拠となる。後天的定住集団社会Ａは、女性として表されるのが、より適切

である。
（初出 2012年2月）

後天的定住集団社会Ａの女性の権力、支配力の源泉と、「女の空気」

後天的定住集団社会Ａで、女性が強いのは、後天的定住集団社会Ａで必要とされる社会的性格に、心理的、社会的性差における女性的性格が合致しているためである。
すなわち、稲作農耕が要求するところの伝統的な後天的定住集団社会Ａの社会的性格が、女性の性格と合致しており、社会的雰囲気において「女の空気」を要求するものとなっているため、男性はその中では呼吸がしにくくて力を発揮できず、一方、女性は、水を得た魚のように、自分に合った空気を思う存分呼吸して、社会の中で活躍できるからである。
（初出 2012年2月）

ブラックホール＝女社会の解明が必要。

女社会は、ブラックホールとして捉えられる。
自分たちからは、何も外に出さない。
受け身、退嬰、閉鎖的で、受信一方であるということ。
周囲の眼を気にして、恥ずかしがって、なかなか内情を漏らさないということ。
内情を漏らすと、仲間から非難されて、仲間はずれにされてしまうので漏らせないということ。
それ故、女社会は、中々内情が分からず、解明が遅れている。
その間に、より開放的で、発信的で、内情が分かりやすい男社会が、社会一般を解析する上での標準的な基準になってしまっており、女社会は、そこから外されてしまっている。
それ故、後天的定住集団社会Ａが、女社会とあり方が似ているということ。（液体分子的でウェットなということ。）同じように、受信一方で発信の無いブラックホールとして捉えられるということ。
それら自体が、ほとんど気づかれていないということ。
後天的定住集団社会Ａと女社会とが同質であることは、後天的定住集団社会Ａが広く女性の強大な影響下にあり、女性が支配していることを示すものであるが、そのこと自体、気づかれていない。
社会学者は、もっと女社会の解明に力を入れるべきだ。
（初出 2010年7月）

後天的定住集団社会Ａの解明と、女社会スパイの必要性

後天的定住集団社会Ａを理解するには、ジメジメ、ドロドロ、ベタベタした女社会の内実を明らかにすることが早道である。後天的定住集団社会Ａと女社会とは、根本的なところで相似だからである。
ただし、女性たちは、きれいごと、表面的な一致結束のデモンストレーションが大好きで、そのままでは、女社会の陰湿な内実を決して見せようとはしないため、なかなか女社会の真実が分かりにくくなっている。
そこで必要なのが、女性内通者というか、女社会の内偵者、スパイである。
ある程度、男社会と女社会との違いが分かる、男社会、女社会共に客観視できる公平な視点を持った男性社会学者が、女社会内偵者に対して、こっそり女社会の実情をインタビュー等で聞き出してまとめるのが、女社会の内情を解明する一番の早道である。
（初出 2011年3月）

後天的定住集団社会Ａと女社会の特徴例

女社会は、男社会に比べて、解明されていない。
なぜ、解明されないのかと言えば、女社会を構成する当事者の女性たちにとって、解明されると都合が悪いからであろう。臭いものには蓋をするということ。女社会そのものに化粧を施して、すっぴんのドロドロ、ジメジメ、ベタベタした中身が、外部から見えないように必死になっているということ。（特に男性に対して、隠すということ。）それらが現状であろう。
以下に、そのままでは見えにくい女社会の分かりやすい特徴を、いくつか上げてみようと思う。これら女社会の特徴は、そのまま後天的定住集団社会Ａの特徴になっており、後天的定住集団社会Ａが女社会であることの証拠であるとも言える。
（１）後天的定住集団社会Ａにおいては、企業定住集団において、企業定住集団の正規メンバー（定住民）の企業定住集団への加入が原則として新規一括採用に限られ、最初に入った企業定住集団に永続的に所属することを暗黙のうちに求められる。これは、従来、終身雇用という呼び方で捉えられてきたが、雇用だと、企業定住集団の業績が悪くなると、本来の建前を崩して首にせざるを得ないの

で、永続性の観点からは、むしろ先ほど述べたような終身所属という言い方のほうが、本来の企業定住集団の建前に適っていると言える。
前の今までいた集団に永続的に所属したままで、次の新しい集団に別途加入するためのお墨付きを得る行為が、「卒業」である。
これと同様に、女子高生などの女社会においては、学年などの初年度に最初に生成したグループ、仲間集団がそのまま外部に対して閉鎖した排他的な形で永続化する傾向が強い。最初に生成したグループから外れたり、どこにも入れて貰えないと、そのままずっと孤立無援の状態が続く。
これは、次のように捉えられる。一度加入した同一集団への終身所属。
（２）後天的定住集団社会Ａの国、県、市町村レベルで頻繁に見られる現象として、原発事故で出た放射能の影響を判定したり、住民避難を優先させたりするための基準を作るのに、県や市町村レベルで独自に判断、決定しようとせずに、国に判断を預けてしまう姿勢が頻繁に見られた。国は、更に先進的移動生活中心社会Ｇに判断を参考として求めるのも見られるようである。
それと同様に、学校や職場での女社会においては、個人レベルで判断しないで、先輩とか上位者の判断が無いと動けない、上位者から指示されないと動こうとしない傾向がある。上位者に対して助言とかはするが、判断はあくまで上位者で、自分たちはその指示をひたすら待つという、指示待ちが広範に見られる。
（３）戦前の後天的定住集団社会Ａで頻繁に見られた現象として、官尊民卑の風潮が根強く、中央官庁、お上の言うことは絶対で、少しでも反抗の姿勢を見せると容赦なく投獄された。今も、表面的には、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の民主主義が信奉されているが、実際は、地方とかに行くと、公共事業の選定とかで、この「お上絶対主義」が幅を効かせている感じである。
これと同様に、学校や職場とかでの女社会においては、先輩とか、先生とか、上位者の決めた決まりとかを、無条件で守るのが当たり前で、疑問を差し挟むことさえはばかられれる風潮がある。一見、従順で良い子のように見えるが、その実態は、自分のレベルで責任を負いたくない、上位者に責任を被せたい、無責任、自己保身の態度である。また、後輩のような下位者の反抗は、心理的に体面を潰されるので一切受け入れられないという高いプライドのなせる技でもある。
（４）後天的定住集団社会Ａにおいては、年功序列という呼び名ですっかり定着している。前例を保持する年長者が常に偉くて、威張っており、若年者がペコペコ従うという保守的な構図が頻繁に見

られる。
これと同様に、家庭の嫁姑、学校や職場の女社会においては、すでにある過去の前例や伝統を何かにつけて、「おばあちゃんの知恵」みたいな感じで持ちだして、先輩が後輩に押し付け、その通りにしないと怒り出したり、否定しようとする、あるいは、後輩による目新しい試みを否定することが当たり前のように行われている。
（５）後天的定住集団社会Ａの教育制度では、テストとかで100点満点が強く指向され、欠点、傷の無い完璧を目指す完璧主義、無傷主義、無難主義が横行している。これは、官庁とかに見られる事なかれ主義と強く結びついている。プラスの長所を積極的に見つけ出そうとせず、退嬰的な態度に終始するのであるということ。
これと同様に、嫁姑などの女社会においては、何かと相手のマイナス点をあら捜しして、減点主義で、見つけた欠点について陰口を叩いて、足を引っ張ることが頻繁に起こる。
（６）後天的定住集団社会Ａのインターネット掲示板とかで頻繁に見られる現象として、他人に自分のことが晒されるのを避けるために、極力、匿名であろうとして、匿名掲示板を利用したり、実名を名乗らずにハンドルネームをSNSで使用したりする。一方、そうした匿名掲示板では、他人のプライバシーを興味本位で晒す行為が頻繁に見られるのである。
これと同様に、女社会においては、例えば女性週刊誌に見られるように、他人に自分のことを晒されるのを嫌がると共に、他人のプライバシーを好奇心丸出しで、噂話の形で暴く、晒すのを好む傾向が見られる。
（７）後天的定住集団社会Ａの企業定住集団とかで頻繁に見られることとして、誰かが世間を騒がせると、当人だけでなく、当人の所属する企業定住集団や官庁の上司とかにまで、監督不行届として責任が及ぶことが頻発である。
後天的定住集団社会Ａは、1人の行動が周囲の関係者に影響しやすく、連帯責任になりやすい「連鎖型社会」であるといえる。一方、1人の行動が周囲と切れていて、連帯責任になりにくいのが「独立型社会」であり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとかがそうであると言える。
同様に、学校、職場の女社会においては、何か騒動を起こすと、当人だけでなく、当人と関わり合いのある周囲の縁者にまで責任が及ぶ連鎖制、連座制、連帯責任の傾向が見られる。
このように、後天的定住集団社会Ａの特徴は、女社会の特徴そのままであることが多く、後天的定住集団社会Ａが女社会であることの証拠になっているといえる。こうした現状は、男性解放のために打破しないといけない。

例えば、江戸時代の大奥とか女性メインの職場の社会的雰囲気、慣行や、現代後天的定住集団社会Ａにおける女子校や生命保険外交員みたいな女性主体の学校、職場の社会的雰囲気、慣行のあり方を、従来後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性と比較、検討することにより、それらが共通、同一の、自己保身、安全第一指向から来る退嬰的で、事なかれ的、護送船団で対内和合重視な女性的な行動様式をルーツとしていることが判明するのではないかと思われ、今後の研究課題として捉えることができる。
（初出 2011年10月）

女社会、男社会と女流、男流

同じ男社会と言っても、後天的定住集団社会Ａと先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとでは、性質が違うと考えられる。
後天的定住集団社会Ａの男性は、母性の影響が強いため、女流の男社会になっていると言える。
一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの男性は、父性の影響が強いため、男流の男社会になっていると言える。
同じ女社会と言っても、後天的定住集団社会Ａと先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとでは、性質が違うと考えられる。
後天的定住集団社会Ａの女性は、母性の影響が強いため、女流の女社会になっていると言える。
一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの女性は、父性の影響が強いため、男流の女社会になっていると言える。
男社会、女社会、いずれにおいても、男流、女流の区別が必要である。
女流の女社会、男流の男社会が一番優れている。女流の女社会を形成している後天的定住集団社会Ａの女性は、一番優れている。後天的定住集団社会Ａの女性は、良い意味でも悪い意味でも、「真に女らしい女性」「女性的女性」（ないし、母性的女性）である。後天的定住集団社会Ａのフェミニストや女性学者が女権拡張の手本にしているはずの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性は、男性化した女性、「男性的女性」（ないし、父性的女性）であり、劣った存在であるということ。
一方、女流の男社会しか形成できない、女性化した男性、「女性的男性」（母性的男性）である後天的定住集団社会Ａの男性は劣っている。優れている、真に男らしい男性、「男性的男性」は、父性が確立されている、男流の男社会を形成している先進的移動生活中心社会群ＦＧＨやアラブ、モンゴル等遊牧、牧畜民の男性（父性的男

性）であるということ。
（初出 2010年7月）

後天的定住集団社会Ａの男社会は実質女社会。

後天的定住集団社会Ａの男社会は、実質女社会である。
後天的定住集団社会Ａの男性は、母親の強い影響で、女並みに、ウェットできめ細かく、陰湿になっている。
例えば、同僚の昇進とかで、嫉妬心が強く、同僚の足を陰湿な手段ですぐ引っ張ろうとする。要するに、自分は自分、他人は他人と切り分けることができないのである。
父性の強い先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会において、自分は自分、他人は他人と冷淡に切り分けて、殺伐、ドライな雰囲気に満ちるのとは対照的である。
（初出 2011年10月）

女脳の後天的定住集団社会Ａのメンバー

後天的定住集団社会Ａのメンバーの行動様式が、集団主義、退嬰的等、女性的なものになっていることは、その根底の後天的定住集団社会Ａのメンバーの脳の仕組み、構成が女性的になっていることの表れであると言える。
遺伝的側面としては、長いこと稲作農耕民族として女性、母性優位で生きてきた結果、後天的定住集団社会Ａのメンバーの脳が、女性的な脳構成へと遺伝的に淘汰されてきたことが考えられる。
後天的、文化的側面としては、脳のニューロン回路や、脳内伝達物質のあり方の構成が、学習により女性的に構成されているということが考えられる。子供の教育の権限を母親が独占したり、人格形成期の幼稚園、小学校における教育を女性教師が独占する結果、子供の脳が女性的に形成されているということが考えられる。
（初出 2010年7月）

後天的定住集団社会Ａのメンバーの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ指向は女性的。

後天的定住集団社会Ａのメンバーの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ指向は、最先端のものを身につけて、良い格好をしたい、格好を付けたいというものであり、見栄の一種であり、周囲の他人の視線を前提とした女性的な考え方であると言える。

（初出 2014年4月）

方向感と性差、社会差

進行方向に方向感のある人が、気体分子的な男性、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバーである。
一方、方向感のない人が、液体分子的な女性、後天的定住集団社会Ａのメンバーである。
それは、例えば地図が読めないといった点に現れてくる。
なぜ、女性、後天的定住集団社会Ａのメンバーに方向感が欠けるかと言えば、周囲の近場の他者と行動を合わせること自体に注意が集中して、自分たちがどこに進んでいるか気づかないというか、どうしても注意が疎かになるからである。
（初出 2010年7月）

高関心社会と低関心社会

世界の社会は、他人が何をしているか、他人のプライバシーが気になって仕方がない社会である高関心社会と、他人に無関心な低関心社会、無関心社会に分かれる。
後天的定住集団社会Ａや女社会は、高関心社会であり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会や男社会は、それと比べると相対的に低関心社会であると言える。
後天的定住集団社会Ａのメンバーや女性は、他人に関心が強く、覗きや他人のうわさ話、当局、上位者への知人の内情通報が好きである。
あるいは、他人の個人情報を流出させることが好きであり、他人の内情に絶えず探りを入れている。他人の内情を暴露することが好きである。
他人（のプライバシー）に関心がありすぎる人たちの集まりが、後天的定住集団社会Ａ、女社会である。

（初出 2010年7月）

比較好き、相対評価好き

女性や後天的定住集団社会Ａのメンバーは、何でも周囲の他の人と比べようとする、比較好き、相対評価好きである。
学校での成績評価が偏差値でなされるところとか、企業定住集団での成果主義ベースの評価が相対評価であるところとか、その典型である。
（初出 2010年7月）

信号文化（暗示的主張文化）、受け取り文化、他力本願文化

女性は、信号を出して、誰かが気づいてくれるのを待つ、信号文化ないし待ち文化の持ち主である。
自分からは明示的に言わず、主張せず、誰かに気づいて欲しいと考えるのである。
これは奥ゆかしい態度だが、気づかれないと、そのままでは放置になってしまう危険性がある。
自分では手を付けず、誰かに察してもらい、何かやってもらおう（させようということ。）とし、その成果をひたすら受け取ろうとする、受け取り文化の持ち主であるということ。
これは、後天的定住集団社会Ａにも当てはまる。
例えば、先天的定住集団社会Ｂのメンバー民元に対して円高なため、貧乏になって、巨額の財政赤字を抱える、といった困った問題が発生したとき、自力で最後まで解決しようとせず、誰か他の人（先進的移動生活中心社会Ｇなど）にやってもらおう、助けてもらおうとする、他力本願が、女性～後天的定住集団社会Ａのメンバーの特徴である。
また、困った問題が発生したことをアピールしたいときに、自分からは明示的に主張せず、信号、サインを出して、気づいてもらおうとする。気づいて貰えないと、相手を鈍感だと感じて不機嫌になって、怒り出してしまうということ。こうした暗示的主張が、女性～後天的定住集団社会Ａのメンバーの特徴である。
（初出 2010年7月）

後天的定住集団社会Ａのメンバーの依存体質、単独行動不可能性と迷惑意識の強さ、「一億総出家族定住集団」状況について

女性や後天的定住集団社会Ａのメンバーは、とかく誰かに頼ろうとする依存、寄生体質を持っている。
男性や先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバーは、自分のことは自分で助けるしかないと考える、独立、自立、自助体質を持っている。
女性や後天的定住集団社会Ａのメンバーは、このように周囲の他者に依存することで、周囲に迷惑をかけながら生きていると感じ、そのことを気にして、周囲にできるだけ迷惑をかけないように、関係を切って閉じこもろう、引きこもろう、出家しようとする性質を持つ。
これが、現代後天的定住集団社会Ａで、人と人との結びつきが切れた「無縁社会」と呼ばれる現象につながっていると言える。言い換えれば、皆が出家族定住集団して、社会との縁を切った「一億総出家族定住集団」みたいな状況が出現しているのである。
こうした女性や後天的定住集団社会Ａのメンバーにみられる迷惑意識は、液体中の各分子同様に、自分一人の行動が周囲にどうしても影響を与えてしまう、いわば単独行動が不可能なために起きるとも言える。
一方、男性や先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバーは、周囲に迷惑をかけずに自分だけで生きているという意識を持っていると考えられる。それは、気体分子同様に、自分一人の行動が、強く自己主張しない限りは、そのままでは周囲に影響を与えず、単独行動可能なためである。
要するに、「単独行動可能性」の大小が、迷惑意識の強弱と逆相関すると言える。
（初出 2010年7月）

後天的定住集団社会Ａのメンバーの責任回避、転嫁と女性

女性は、自分が責任を取らなくて済むように行動する。あるいは、自分で判断しなくて済むように行動するということ。
そのため、女性は、より責任を取ってくれる人、判断してくれる人や集団や組織を、自分の周囲に求めたがるということ。

そして、責任を取ってくれる人を上位者とおだてて、その言う事をひたすら聞く、隷従するということ。そこに、上意下達社会が出現するのである。
なぜ隷従するかと言えば、自分自身が、責任を取ってくれるはずの人が言う事から外れたことをすると、責任を取ってくれるはずの人へと責任転嫁できず、自己責任になってしまうからである。
結局、上位者への隷従のように一見見える現象も、実は隷従する本人が、自己保身、安全確保、リスク回避をしたいがために、上位者をダシに使っているのである。
後天的定住集団社会Ａでは、こうした女性の力が強いため、権力者、あるいは企業定住集団や官庁のような上位集団、組織への隷従が起きやすい、と言える。
この場合、同時に、上位者も保身の権化になりやすく、責任の下位者へのなすりつけ、とかげの尻尾切りを好むのである。
その結果、誰も責任を取りたくない無責任社会が生じるのである。
（初出 2011年5月）

アジア的停滞の原因、アジア的生産様式の担い手、東洋的専制主義の原因は、女性、母性にあり。

後天的定住集団社会Ａや先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１、ベトナム、フィリピンといった定住生活中心社会群ＡＢＣ諸国では、女性や母親が、家計管理の財布の紐を握り、子供の教育を独占して、子供に女性的な思考、物の考え方を注入し、国民性が女性化している。

こうした女性的な定住生活中心社会群ＡＢＣ諸国では、考えが女性的であり、リスクを取らずに、闇には入らずに、光の当たっているところで安全なことばかりしようとして、先進的移動生活中心社会群Ｆや北米、ユダヤ諸国のように、未知の闇の中から新しい考えを生み出すことが無く、その新しい考えの導入、後からコピーに終始しており、それが、新しい知見への接触の遅れにつながり、「アジア的停滞」を招いていると言える。言わば、女性が「アジア的停滞」の原因となっている。

アジア的生産様式は、「稲の生産様式」といえる。定住生活中心社

会群ＡＢＣで女性が強くなれたのは、K.A.Wittfogelの言うところの大規模灌漑で農耕を行う「水力社会」であることが大きい。大規模灌漑は稲作農耕にとって不可欠であり、灌漑は、集落間の緊密な一体協調による共同作業を必要とし、また先祖代々定住するため、住民間で意見が割れるとまずい。そのため、相互一体感の重視、仲良し、和合の重視といった、女性的な心理が、そうした作業に携わる人々を支配するのである。その結果、定住生活中心社会群ＡＢＣの国民の心理、国民性は女性化したのである。稲の生産が、社会を女性化するのである。

定住生活中心社会群ＡＢＣは東洋的専制主義であるということが言われてきたが、それが全体主義的に見えるのは、下の者による上の者への甘えや懐き、わがまま、素直な従い、あるいは逆に上の者による下の者への可愛がりみたいな女性的心理が、彼らの中に同時に存在し、それが、上下関係を和合、一体化に満ちたものにして、社会全体に強力なウェットな一体感、全体感を与えるからである。

異論を許さない独裁的な専制主義に見えるのは、トップが強力だからという訳では特に無く、成員が互いに周囲と仲良く、和合しないと行けないと考えて、周囲への気配り優先で、なかなか異論を唱える訴訟をしなかったり、自分から何かを起こしてその結果責任を取ることのリスクを考えて、とりあえず上の言っていることに従っていれば良いや（責任は上の人に取ってもらおう。）という事なかれ主義による従順が充満しているからである。皆、自分の保身、安全確保が最優先で、危ない橋を渡ろうとしないのであり、リスクを追わない女性的態度が、独裁的な専制主義と関係がある。その点、定住生活中心社会群ＡＢＣ諸国の専制主義は、女性的専制と言える。

M.Weberは、先天的定住集団社会Ｂのような定住生活中心社会群ＡＢＣ諸国を家父長制と捉えたが、確かに表面的には男性が威張っているものの、男性は生育過程で、子供の教育を独占する母親から女性的な相互一体感の重視、リスク回避・・・の考えを心の中に強力に注入され、父性を失い母性化して、母性の色（赤色）に真っ赤に染まった「赤色の兵士」と化して活躍しているということ。なので、定住生活中心社会群ＡＢＣ諸国を家父長制と捉えるのは表面的で思慮が足りない結論付けと言え、実際には定住生活中心社会群ＡＢＣ諸国は、男性に父性が欠如する母権社会と言えるのである。

（初出 2013年12月）

後天的定住集団社会Ａのメンバーの守られ願望

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、外部に守って欲しい、もらいたい、「守られ願望」を強く持っていると言える。
やたらと日米同盟を重んじるのも、根底に先進的移動生活中心社会Ｇに守って欲しいという気持ちがあることの表れである。
いわしの群れみたいな護送船団を好むこと自体、個々の後天的定住集団社会Ａのメンバーが、自分ひとりだけで自立するのが不安で、誰かと一緒に守られた状態でいたいことを願っていることの表れである。
その点、後天的定住集団社会Ａのメンバーと女性には共通点が多い。
（初出 2010年7月）

ミクロ文化とマクロ文化

女性や後天的定住集団社会Ａのメンバーは、細かい点に注意が行き届く反面、大局的な判断が苦手であり、ミクロ文化の持ち主である。
男性や先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバーは、とかく大雑把で細々としたことが苦手な反面、大局的な判断が得意であり、マクロ文化の持ち主である。
後天的定住集団社会Ａは、細かいミクロレベルの一つ一つでは成功しているが、マクロ、大局を見ると失敗していることが多い。あるいは、大きな新しい今までにないトレンドを作るのが苦手である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは、細かいところでは、いろいろ粗や難点が見られるが、マクロ、大局的、大まかには成功していることが多い。IT分野のパソコン、クラウド、スマートフォン等の大きなトレンドの生成は、ほとんど先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ産である。
（初出 2010年7月）

原子型社会と分子型社会、原子行動と分子行動、性差との関連

原子型社会とは、粒子一つ一つがバラバラに自由に独立した原子となっている社会である。
分子型社会とは、各粒子が、何かしらの集団に所属し、構成要素となっている社会である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会、男性社会は、どちらかというと原子型社会であり、後天的定住集団社会Ａ～定住生活中心社会群ＡＢＣ社会、女性社会は、分子型社会である。
原子行動は、粒子が互いに独立して、1個のままで動き続ける行動であり、分子行動は、粒子が、他の粒子と手を組んで、同盟して、構成要素となって動き続ける行動である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー、男性は、原子行動を取りやすく、後天的定住集団社会Ａ～定住生活中心社会群ＡＢＣ人、女性は、分子行動を取りやすい。
（初出 2011年3月）

後天的定住集団社会Ａの社会集団に働く表面張力と、女性、卵子との類似

後天的定住集団社会Ａの官庁、企業定住集団、学校組織は、女性ないし卵子として捉えられる。
後天的定住集団社会Ａの官庁、企業定住集団、学校に入ろうとするのは、女性を強姦しようとする男性と同じである。あるいは、卵子に挑む精子と同じであるということ。
後天的定住集団社会Ａの官庁、企業定住集団、学校は、女性が精神的に支配する、女性の原理で動いていると考えられる。
女性が支配する集団は、ウェット、液体的な性質を持つ。女社会がウェット、液体的だからである。
ウェットな、液体的な集団には、実際の液体、水滴同様に、表面積を最小限に押さえようとする表面張力が働いており、あたかも表面に膜が張っているかのような状態になっている。
それゆえ、液体的な集団である後天的定住集団社会Ａの官庁、企業定住集団、学校組織、集団には、外に対して表面張力が働いており、表面膜みたいなのが存在すると見て良い。
後天的定住集団社会Ａの官庁、企業定住集団、学校にそのまま入ろうとすると、男性にセックスを申し込まれた処女の女性同様、イヤイヤをされたり、激しく抵抗されたりするということ。あるいは精子にアタックされた卵子同様、精子をシャットアウトし続けようとするということ。しかし、いったん処女膜、表面膜が破られ、中に

入ると、うって変わって歓迎され、もっとして、ということになる。
これは、後天的定住集団社会Ａ全体についても言えることで、後天的定住集団社会Ａ自体が女性原理、液体原理で動いており、それゆえ、強大な表面張力を持っているのである。これは、鎖国体質として現れる。
先の太平洋戦争では、後天的定住集団社会Ａが女性、先進的移動生活中心社会Ｇが男性として立ち現れており、先進的移動生活中心社会Ｇが後天的定住集団社会Ａの中に入ろう＝占領しよう＝強姦しようとすると、激しく抵抗されて、表面膜を破って中に入るのが大変であった。結局、先進的移動生活中心社会Ｇが後天的定住集団社会Ａの膜を破って、中に本格的に入り込むには、原爆投下が必要であった。
このように、表面膜を強引に破ることをせずに、そのまま自然に、スムーズに後天的定住集団社会Ａの各種集団の中に入れてもらえる条件は何であろうか？
それは、あたかも母の胎内から、別の母の胎内へ、いわば「内から内へ」の原則で動くことである。互いに内部同士がつながった集団の間を渡り歩くことが必須である。いったん集団の外に出ると、よそ者扱いとなり、再び入ろうとしても表面張力が働いてしまい駄目である。よそ者でなく、ウチの者扱いで集団間を移動することが求められる。
こうした「内から内へ」の原則に適うのは、以下の通りである。
・新卒採用
・2つの集団に同時にコネを持つ仲介人を通して、一方から他方へと綱渡りをする形の、集団外に出ない形での転職（ウェットな転職）
・2つの集団同士の吸収、合併（個人単位でなく、あくまで集団単位での成員を内部に丸抱えした状態での、一方から他方への合体、もらわれということ。）
だけであるということ。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団は、経営危機になると、外部から経営トップ等の幹部を起用したりする。あるいは、極端な人手不足になると、コネ仲介以外の一般外部者に門戸を開放することもある。しかし、これらは、あくまで集団の存亡に関わる非常事態であって、そうでない平時は、外に対して門戸を閉ざしているのである。
それでは、なぜ新卒採用だと、スムーズに中に入れてもらえるのであろうか？それは、新卒内定者は、学校という「ウチ」に所属したままの「内部者」状態でいるからである。一方、既卒者が駄目なの

は、学校の外にいったん出てしまい、よそ者、「外部者」扱いとなってしまっているからである。
新卒者がスムーズに企業定住集団などの中に入れてもらえるのは、「内部者」状態を維持していること以外にも理由がある。
それは、これから入ろう、所属しようとする企業定住集団集団に比べて下位者であり、企業定住集団の言うことを反抗せずに何でも聞く、企業定住集団にとって「使える」ことが保証された存在だからである。
また、他のどこも手を付けていない「白紙状態」（処女状態）であり、企業定住集団の好きな色に染め上げ、調教することのできる存在だからであるということ。
さらに、集団そのものの新陳代謝という側面もある。そのままだと成員がどんどん年を取って老いていくので、新しい若い成員が必要であり中に入れたいという強い動機付けが集団側にあるのである。
こうした集団は、一見利益追求のように見える企業定住集団であっても、実際のところ多かれ少なかれ生活共同体としてのムラの性格を持っており、内部に入った人間にとっては、仕事が忙しくなければ、そこそこ居心地の良いコミュニティ、サロンのように機能することが多い。本音で言えば、企業として利益を出すことは二の次になっていると言える。その点、「企業定住集団」と、利益を出すことが何よりも最優先で、バリバリ仕事できないと人間失格となる「企業」とは本質面で異なっていると言える。
後天的定住集団社会Ａの集団は、また、学校の体育会系部活によくあるように、いったん中に入ると、用済みになるまで外に出られないという体質も持っている。（例えば、企業定住集団への加入するということ。）いったんプールなどの水中に入った虫が、身体に水がまとわりついて離れないため、水の外に出て来られないことと同じである。これは、液体原理で動く集団組織への「終身所属」と呼べる現象である。後天的定住集団社会Ａに特有雇用の特徴とされた終身雇用もこの一環である。出身学校の同窓会とか抜けたくても抜けられないのが実情である。
一方、一見、集団内にいながら集団に入れてもらえない、内輪に入れないよそ者、「集団内部の外部者」とも呼べる人たちが存在する。それが、契約企業定住集団のメンバー、派遣企業定住集団のメンバー、といった外部からの一時的助っ人である。明治時代の外国家族定住集団メンバー教師や、プロ野球の外国家族定住集団メンバー選手と同じ扱いであるということ。新卒で企業定住集団への加入できずに学校の外に出てしまった既卒者が、こうした非正規扱いを受けるはめになる。
こうした、集団内のよそ者＝企業定住集団の非正規メンバー（流

民）は、液体中のバブル、気泡として表現されるのであり、集団とは一体になれず隙間があり、集団側の用が済めば、あぶくの形で一方的に排出されてしまうのである。
（初出 2010年12月）

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにおける女性の「過剰保護」とフェミニズムについて　（「甘え」概念との関連）

先進的移動生活中心社会Ｇとかは、本来の支配者である父神相当の男性が、弱者～永遠の子供である女性を、度を超えてオーバーに助ける社会である。
後天的定住集団社会Ａは、本来の支配者である母神相当の女性が、弱者～永遠の子供である男性を甘やかす社会である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会でも、後天的定住集団社会Ａにおける甘えの概念の裏返しに相当するもの＝「過剰保護」が存在する。
特に女性（そして男性も内心では。）が、父なる神、パトロンに対して心理的に依存し、わがままであり、何かあるとすぐに安直に「パパ」に対して「助けの依頼」をする。「パパ」も直ぐに大げさに過剰に保護をしようとする。
女性が、少しでもキャーキャー叫ぶ、騒ぐと、社会全体が立ち上がる仕組みになっている。
女性解放を叫ぶ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのフェミニズムの女性たちの背後には、そうした娘たちを助けようと一生懸命な「父」的存在がいる。そうした「父」の精神的なバックアップがあって初めて、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムは成り立っているのであり、その点、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムは、父と不可分な存在である。
そもそも先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会で、女性解放を言い出したのが、女性ではなく、男性（J.S.ミル辺り）だったことが、この辺りの事情を説明する。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムは、皮肉にも男性によるバックアップ前提のイデオロギーになっている。
なぜ、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会で「甘え」の概念が無いのか？
行動を起こす主体が男性であること、女性は自分からは行動を起こ

さないことと関係がある。
後天的定住集団社会Ａでは、男性が女性に依存する。その際、男性（被保護者）が、女性（保護者）に対して自分から頼ろうとする行動を起こすということ。それゆえ、男性による女性への甘えが発生する。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでは、女性が男性に依存する。女性（被保護者）は、自分からは行動を起こさず、その場で「助けて」と叫ぶだけである。それゆえ、男性（保護者）が自ら先んじて行動を起こして、女性（被保護者）を保護してあげる必要が出てくる。
被保護者が自発的に保護者の懐に飛び込んで庇護を求めるのが「甘え」である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでは、被保護者が保護者のところに来ようとする前に、保護者が先回りして被保護者を保護する行動に出てしまうため、「甘え」が発生しない。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨなどのドライな父性的社会では、大いなる存在が能動的であり、大いなる存在が先んじて弱者を助けてくれる。（能動的保護、庇護。）
後天的定住集団社会Ａなどのウェットな母性的社会では、大いなる存在が受動的であり、弱者は、大いなる存在に対して、こちらから働きかけて寄りかかっていく必要がある。（受動的保護、庇護。）
寄りかかる行為が「甘え」である。
（初出 2011年3月）

先輩後輩制、親分子分制を打倒せよ！

後天的定住集団社会Ａにおいて、先輩は、単に少し前から既に集団、団体に加入しているというだけで、あるいは、学年とかで1年上だというだけで、後輩に対して、全てにおいて上から目線で、偉そうにして、支配者ぶり、優遇されることを当然のように求めて来る。あるいは、集団、団体に入って年季の入っている古株格だったり、局だったりすると、新参者に対して、自分への絶対服従を強制して来るということ。
後輩格の人は、先輩に対して無条件で、犬みたいに屈辱的に服従し、媚びて、なつき、仕えないと行けない。マゾヒスティックな態度であるということ。特に体育会系の組織で著しいということ。かつ、自分にとって後輩に当たる人に対して、上記のような先輩風を吹かせるサディスティックな態度を取るということ。このマゾ、サドの両者が矛盾せずに同居している。
この先輩後輩の関係は、親分子分、師匠と弟子、姑と嫁の関係と似

ている。かつての先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１と後天的定住集団社会Ａとの関係も似たようなものだったのではないだろうか。
後輩は、先輩の心理的植民地である。先輩の後輩に対する制度化された人権侵害が見られるのである。
年取った人は、先輩になりやすく、その点、年齢が既得権益として作用する。
大抵の人は、後輩であると同時に、先輩でもあり、2つの立場が切り離し難く1人の人格の中に共生している。そこにサド、マゾの支配関係の連鎖が見られる。
学校時代のカリキュラムが、先輩による社会支配の一つの原型になっている。すなわち、1年早い人が遅い人より、学んでいる量が段違いに多く、覆しにくい、覆せないことから、先輩は覆せないものだという強い信念が生まれ、そのままいつまでも大人になっても続くことになるのである。
これは、植物と同じである。先に生えたものほど大きく育って優位に立っており、先に生えた地点のものが優先される先住権がある点が、先輩の後輩に対する優位とそのまま一緒である。後天的定住集団社会Ａの田舎で先住民が新住民に対して威張るのも一緒である。
先輩後輩制は、見るところ、女社会において、より厳格に守られている感じであり、後輩は先輩に対して絶対服従が原則化されているようである。先輩は、後輩に対して威張る代わりに、後輩に対して母親がわりになって、後輩を包含して守るべきとされているようである。後天的定住集団社会Ａの先輩後輩制は、もともと行動する上での安全が確保された前例をたくさん保持する人間を優遇する女社会の特徴であると見るのが妥当ではなかろうか。
こうした先輩の永続的優位は、各人の学んだ前例、ストックが未来永劫有効であることが前提となる。学んだ前例、ストックは、先輩がより多く持っているからである。しかし、現代のように変化が大きく、新しい発明発見が絶えずなされて前例が無効化することが多発する現状では、先輩の永続的優位は、実は成り立たないのだと言える。
それゆえ、先輩による後輩の人権の侵害を絶えず生み出している先輩後輩制は、打倒すべき根拠が十分ある。
同様に、親が子供より偉い、親が上位で子が下位だと考える、後天的定住集団社会Ａにはびこる親分子分の考え方も打倒すべきである。
親が子供より偉いとされるのは、親が生存に必要な前例となる知恵や設備を、子供に対してより多く持っているからである。これも、身に付けている前例が多い人間を上位者と考える、女性にありがち

というか、女性ルーツの考え方だと言える。
しかし、基本的に、親子関係は、代々のバトンを受け渡しする先行世代と後続世代の関係に過ぎず、両者は対等なのではないだろうか。遺伝的にも、子供は、父親と母親から半分ずつそっくりそのままコピーして受け継いでいる訳で、親と全く対等であり、親に対して上下の関係は成り立たない。親が子を養うにしても、子が自分の形質、ものの考え方を自ずと受け継いでくれることを望んで育てているのであり、親にとって子供は育ってくれないと困るのである。その点、親は子供の意思を絶えず尊重する必要が出てくる。また、親は年老いてくると、身体の自由が効かなくなり、子供の世話にならざるを得なくなり、子供の支配下に入ることになる。
後天的定住集団社会Ａの親は子供を育ててやったと、子供に対して恩着せがましい態度に出るが、子供にしてみれば、そもそも産んでくれと頼んだことは一度もない、親が自己都合で勝手に産んで、辛い、苦難の多い人生を子供である自分に勝手にプレゼントしてくれただけ、かえって迷惑だ、親は自己都合で自分のことを産んだのだから自分を育てて当然、というのが真情であろう。
親の子に対する優位の根拠となる、親が持っている前例は、いつまでも有効なものとは限らず、時代の変化に伴って新たな考えが出てくると共に無効化する。そして、親の持つ前例を無効化する新たな考えを生み出すのは、往々にして子供の世代なのである。その点でも、親の子に対する優位は保証されないと考えるべきである。
先輩後輩制も親分子分制も、ルーツは女性にあると考えられるので、無くすには、まずは、後天的定住集団社会Ａにおける女性の力を弱めなくてはならない。
（初出 2011年10月）

後天的定住集団社会Ａと女性のパラレルな関係

後天的定住集団社会Ａと女性とはパラレルな関係にある。

「ドライで先進的な」先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに並ぶ、追いつくことを目指してきた、「ウェットで後進的な」後天的定住集団社会Ａと、「ドライで先進的な」男性並になることを目指した「ウェットで後進的な」女性とは、同時並行的な関係にある。

ちなみに、女性や農耕民は、遊牧民文化を取り入れて、改良を加え、コストダウンをして販売し、富を蓄えることで、男性や遊牧民を逆転できる。

（初出 2011年3月）

雌国、牝国後天的定住集団社会Ａ

女性の力の強い後天的定住集団社会Ａ、先天的定住集団社会Ｃ１、先天的定住集団社会Ｂ、定住生活中心社会Ｅ等は、生物の見地からは、「メスの国、雌国、牝国」と呼べる。
一方、男性の力の強い先進的移動生活中心社会Ｇ、先進的移動生活中心社会群Ｆ、北欧、アラブ等は、生物の見地からは、「オスの国、雄国、牡国」と呼べる。
メスの国は、オスの国に比べて、必ずしも弱いとは言えない。生物においても、クロアリやアシダカグモのように、メスがオスに比べて強大である例は、いくらでも存在する。
（初出 2011年11月）

後天的定住集団社会Ａのメンバーの「武装女子」指向

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、太平洋戦争敗戦後、ずっと、先進的移動生活中心社会Ｇの支配下、影響下で暮らしてきた。
首都東京から数十キロのところに、大きな米軍基地があり、いつでも先進的移動生活中心社会Ｇに攻められるので、言うことを聞くしか無かった訳である。
一方、先進的移動生活中心社会Ｇの庇護下にあるということで、緊

張ある軍事、地政学的懸案事項は、全て先進的移動生活中心社会G任せでOKということになり、平和憲法下で経済的発展にのみ専念すれば良くなり、事実、一度は世界第二位まで上り詰めた。
ところが、頼りにしていた先進的移動生活中心社会G（模範としてきたヨーロッパ）が、だんだん弱くなってきてしまった。（借金まみれ。）代わりに、かつては弱かった先天的定住集団社会Bが経済的に強くなってきた。
力が弱くなった先進的移動生活中心社会Gに今までのように頼れそうもなくなってきた後天的定住集団社会Aは、その事態に気づいてだんだんあわて始め、すっかり強くなった先天的定住集団社会Bやその下僕の先天的定住集団社会Cの連合に飲み込まれないように、急いで自己の軍事的、地政学的自立を図ろうとしているのが現状であり、その一環で、後天的定住集団社会Aでは国家主義、国粋主義が強くなってきているのである。（いわゆるネトウヨの横行。）
後天的定住集団社会Aが軍事的、地政学的自立を図るには、後天的定住集団社会Aは、先天的定住集団社会Bに飲み込まれない程度に国力が強くなる必要がある。軍事的、経済的な攻撃力、防御力が必要であり、そうした武力は、通常丸腰の女性でなく、男性が担うものである。
それゆえ、今後の後天的定住集団社会Aでは、そうした男性性を表面に押し立てて、「男性的国家像」というか、かつての武士道精神の復活が求められるようになると言える。
もっとも、後天的定住集団社会Aの、個人間、組織内の一体感、和合、協調性を重んじて、小集団で排他的にまとまろうとするウェットな女性的な性格の本質は、そのまま温存されると思われ、そういう意味では、後天的定住集団社会Aは、「武装女子」「武装の麗人」という感じで進むのではなかろうか。
例えば、武装戦艦が女性キャラクタに転化した「艦隊これくしょん」あるいは「武装神姫」みたいな位置づけが現に後天的定住集団社会Aのメンバーの若者の間で好まれており、後天的定住集団社会Aでは、これからこういった感じの表面的には男性性、武装性を押し立てつつも根幹では女性的な文化がますます進展していくものと思われる。
もしくは、「プリキュア」「結城友奈は勇者である」「ガールズアンドパンツァー」みたいに、女性が肉弾戦、砲撃戦をやる感じの、やり手の手強い武人的な女性像が今後次々と創造される方向に行くかも知れない。
現状では、後天的定住集団社会Aは、対米従属、精神的依存から、まだまだ抜けきっていない感じというか、むしろ沈み行く先進的移動生活中心社会Gと一緒に心中しようとしている感じがあるのが、

個人的に気がかりである。
後は、後天的定住集団社会Ａの国の財政状態があまりに悪そうなので、いったん経済破綻は免れないかなという気もする。昭和恐慌の再来であるということ。昭和恐慌の際は、後天的定住集団社会Ａは軍事政権化して、勝てない太平洋戦争に突き進んでいったが、今回も、上記の武装指向があることから、同じ轍を踏みそうな気がする。
（初出 2014年11月）

女（母）が強い国＝強国という図式。

後天的定住集団社会Ａの右翼は、強い後天的定住集団社会Ａを希望する。そして、後天的定住集団社会Ａのことを強い男の国でありたい、強い男の国と見られたいと考えているということ。後天的定住集団社会Ａのことを女々しく思われたくないと考えているということ。その考えの底には、女は弱いという考えがある。つまり、女性は、なよなよしていて、柔弱で、筋力が弱く、やろうと思えば強引にレイプできてしまう頼りない存在だ、という考えがある。

この考えは、間違いである。後天的定住集団社会Ａでは、同じ女性でも、母は別格で強い、手強い存在であるという考えが以前から存在する。すなわち、「肝っ玉母さん」「おふくろさん」「オバタリアン」といった、既婚の子持ち女性への呼び方がそれである。

後天的定住集団社会Ａの男性は、女性は叩くが、母は決して叩かない。同じ女性でも母は別格扱いをするのである。

後天的定住集団社会Ａの母は、以下の強力な力を持つ。

・一体化の力、包容力。

・対人面でのコネを作り活用する力。

・ズケズケ物を言う強い心臓。

・連想力の駆使による相手への詰問、問い詰め、小言の絨毯爆撃を行う力。

・重箱の隅をつついて、あら探しをする力。

後天的定住集団社会Ａの母は、以下のことを実現する。
それらの力によって、家族ひいては社会を支配するということ。特に、家庭の家計財務管理、子供の教育の権限をほぼ独占しているということ。

母が強い社会は、同性の女性が強い。

後天的定住集団社会Ａの推進力の源はお母さんであり、後天的定住集団社会Ａの強さの源はお母さん＝女性である。

「強い」後天的定住集団社会Ａの男性は、実際は、母から力を貰っている。見かけは父からでも、実質、その父の母（祖母）から力を貰っているということ。
後天的定住集団社会Ａの男性は、母の力で母色に染まる。後天的定住集団社会Ａは、母である女性の力によって、母色に染まっている。

一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会は、父である男性の力によって、父色に染まっている。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性は、一見自己主張、押しが強く、強力な存在の様のように見える。後天的定住集団社会Ａの男性は、それにたじたじとなっている。

しかし実際は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性は、強力な家父長制、父権制の下、父の色に染まっている。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性は、以下のような存在である。
「出来損ないの男性」「不完全、不十分な父」みたいな存在であり、母性喪失者であり、社会的に劣った弱い存在なのであるということ。その証拠に、彼女たちは、家庭の家計管理や、子供の教育において、副次的な役割しか果たせていない。

一方、後天的定住集団社会Ａの男性は、父性喪失者であると言える。

後天的定住集団社会Ａのように、母の十分強い社会、国は、国際的に十分強力である。あるいは、母が十分聡明な社会、国、子供の教育を独占する母がいる社会、子供に良いしつけ、教育を与える母がいる社会は十分に強力である。

かつての先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１は、母が中華思想に染まって、聡明でなかったため、弱かった。

後天的定住集団社会Ａの右翼は、後天的定住集団社会Ａを後進的な先天的定住集団社会Ｂの一員ではなく、先進的な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの一員と思いたがる。

後天的定住集団社会Ａを女性的とすると、後天的定住集団社会Ａは先天的定住集団社会Ｂの一員になってしまい、男性的な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとは異質になってしまう。後天的定住集団社会Ａの右翼は、そこで、後天的定住集団社会Ａは男性的であると思おうとする。

子育てを独占する後天的定住集団社会Ａの母は、子供、特に息子を先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの色に染まらせることを考え、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ追随を強力に指向、推進した。息子が強い男に見えるのを指向した。それは、見かけ、理想は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の家父長であったが、実際は、後天的定住集団社会Ａ流の侍であった。

後天的定住集団社会Ａの母は、「侍の母」として、子供に対して厳しく接することで、子供を強くしようとした。それは、一見姑根性と近いが、実子への愛情あるしつけである点が違うといえる。

それは、誠実さや勇気を強調したものであり、戦前であれば、「お国のために立派に死ぬ男」を育成しようとした。それは、一般化すれば、自分の所属集団（ムラ、企業定住集団、所属官庁・・・）のために立派に死ぬ男、自分を犠牲にして、所属集団本位で、所属集団と死ぬまで一体で行く男の育成であり、その点、女性的な男性の育成であったということ。

侍の国＝母の国（母が強い国。）であり、両者は矛盾しない。

強い、厳しい母（厳母の精神）が、強い侍、後天的定住集団社会Ａの男性児の生みの親となっている。後天的定住集団社会Ａの侍、後天的定住集団社会Ａの男性児は、武術、戦術は強いが、根本が女性的である。すなわち、思考が、他人の視線、眼差しを前提としたものとなっており、見栄っ張りで、ヒステリックで、強がりであり、恥を重視する。所属組織への一体融合感が強く、所属組織に包含される、甘えるのを好む。見栄を張った結果に対して責任を感じ、見栄が実体を伴うように必死で努力するため、そこが、真の強さ、成果、競争力につながる。これらは、女性的と聞いて即座に連想しがちな、なよなよした柔弱性とは異なる、別の女性的側面であるといえる。

その点、女性的＝力が強い、という図式が十分成り立つのであり、後天的定住集団社会Ａの国が女性的であることは、後天的定住集団社会Ａの国家が力が強いことの裏付けとなっていると言える。

女（母）が強い国＝強国という図式が成立するのである。

（初出 2014年4月）

後天的定住集団社会Ａアニメ女性声優の声の高さについて・・・女性性の原型保持と後天的定住集団社会Ａ

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのフェミニストは、後天的定住集団社会Ａのアニメの女性声優の声が甲高いので、子供みたいだと言って馬鹿にする。

しかし、実際の所、出す声の高さは、通常女性の方が男性よりも高

いのが普通である。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで声が低いことがデファクトスタンダードであることは、男性の力が強くて、女性が男性化していることの現れである。すなわち、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性では、女性性の原型が男性の影響で失われ、男性的な方向に変質しているのである。

後天的定住集団社会Ａのアニメの女性声優の声が甲高いのは、後天的定住集団社会Ａでは、女性性がそのまま原型のまま保たれており、女性が強いことの現れであると言える。

なので、後天的定住集団社会Ａのアニメの女性声優の声が甲高いことは、女権拡張を支持する人たちにとっては、本来望ましいことなのである。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのフェミニストにとっても、本来女性の声が高い後天的定住集団社会Ａの方がデファクトスタンダードになるべきなのである。

（初出 2014年11月）

後天的定住集団社会Ａのメンバーと国内、海外

後天的定住集団社会Ａのメンバーは、相当違う、異質な者同士（先天的定住集団社会Ｂと先進的移動生活中心社会Ｇ）を一緒にして、外人としてひとまとめでくくってしまう。

また、後天的定住集団社会Ａのメンバーは、海外からの自分たちへの反応、評価には敏感だが、海外の人々への関心が薄い。

それは、「思考が内向きなこと」であり、自分たちの所属グループにしか関心のない女性たちと、考え方が一緒である。

（初出 2013年10月）

表と奥

従来の後天的定住集団社会Ａの歴史や後天的定住集団社会Ａ論にお

いては、男性と女性の見方が、表と裏という形で表現されることが多かった。先天的定住集団社会Ｂ古来の陰陽の物の見方にとらわれて、男性を日の当たる明るいメインの表側、女性を日の当たらない暗いサブの陰の裏側に例えて来たということ。これは、男性の優位、女性の劣位というように捉えられてしまう問題を含んでいる。筆者は、これと異なり、後天的定住集団社会Ａの男性と女性の見方を、表と奥という形で表現すれば良いのではないかと考えている。表札に名前の出る表側にいるのが男性で、家族定住集団の中枢の奥の院に入っているのが女性であると捉える訳である。これにより、家族定住集団の周辺部に留まり中枢に入れないのが男性で、家族定住集団の中枢部の奥の院を占有しているのが女性というように捉えられ、男性の劣位、女性の優位として捉えられる。外からは様子がうかがい知れず、その存在を隠すことで、身の安全を図ることができるのが、女性が奥の院に留まるメリットである。
歴史書のような公式記録、表に出た記録は、「表の人」である男性中心になりがちであり、表に出ることを避ける「奥の人」である女性の行動記録は奥にしまわれ、表沙汰にならず、表の公式記録に残らない。そのため、女性があたかも活躍していないかのように見えてしまう。それが、女性の思う壺なのである。すなわち自分自身の活躍した結果の後世への責任を取らなくて済むからであるということ。「歴史的責任の回避」が、女性が歴史の表舞台に出てこない真の理由である。女性は、何事も被害者面して押し通し、責任を取らなくて済むようにしているのである。女性は、自分たちを支配者と見せないことで支配責任を回避する。実行犯にならないのであるということ。
女性は、きれいごと、きれいな建前しか歴史に残そうとしない傾向がある。自分たちのドロドロ、ベタベタ、ジメジメした陰湿で醜悪な内部抗争劇を、外部に対して封印し、きれい事で済まそうと懸命になるということ。そのため、外部に対して、女性が活躍しなかったことにして、男性のみ歴史的に活躍したかのように見せかけるのである。

（初出 2012年03月）

後天的定住集団社会Ａの歴史における女性の地位低下の通説について

後天的定住集団社会Ａの歴史においては、室町時代から江戸時代にかけて、女性の地位が低下し、現代に至るまで余り回復していないとされる。
女性がそれまでの時代で持っていた所領を持たなくなったり、公文書に登場しなくなるのがその理由とされている。要するに財産権を失い、公の活動から締め出されたと捉えられているということ。
これは、果たして正しいのであろうか？
筆者は、女性の地位が低くなったのではなく、単に女性が今までに比べて「奥の院」の住人になる度合いが強まったのがその原因であると考えている。「奥の院」にいることで、所在が直接露出しない、外部から振る舞いが分からないようにして、身の安全をより強固に図ろうとする度合いが強まったと考えている。
姑などの女性は、この時代、自らは直接社会に手を出さず、自らの内に一体化、包含し、精神的に乗っ取った息子を自らの操りロボット、代理として、後天的定住集団社会Ａの間接支配の体制を創り上げたと考えられる。要するに「母権」「姑支配」体制の完成であるということ。女性が、自分の息子経由で、家族定住集団の奥から社会を支配する、「奥様」化が進行したのである。
姑による息子と嫁の支配が確立すると共に、表、公に出てくるのが専ら息子であり、社会の表舞台で活躍するのが専ら息子である男性であるという現象が起きて、それゆえ女性の存在が目立たなくなり、いつの間にか劣位の存在であるというように誤解されるようになったのではないだろうか。
江戸時代とか、夫、男性を独立した存在として見ては駄目であり、彼らは、「母の息子」として見るべきである。要するに、母、姑と一体化し、その支配下に置かれた従属的な存在であると捉えるべきであるということ。
では、なぜ室町時代から江戸時代にかけて、女性が「奥の院」に入る度合いが強まったか？
それは、この時代、社会が戦乱期、戦国時代に入って、女性にとって、表に出ると身の安全がより危険になったことが大きいと考えられる。
戦乱期や武家政権時代は、女性は、身の安全が脅かされたり、丸腰のままであるため、そのままでは立場が悪くなり、弱くなる。一方、社会が平和になり、安定化すると女性は、身の安全を図りやすくなり、立場が良くなると考えられる。
戦国の世になって、身が危険にさらされる度合いが強まったため、姑などの女性は、より安全な「奥の院」に移動し、入って、そこから家族をコントロールし、ひいては外部社会を支配するように、戦略を改めたと言える。要するに、女性は、奥座敷で守られることを

指向するようになったのである。
例えば、所領の名義とか、今までのように、女性のままにしておくと、外部にそのまま自分の存在が露出してしまう、分かってしまうことになり、それでは危ない、身の安全を保てないと考えて、名義だけ夫や息子の名義に変えたと考えられる。名義を男性にすることで、対外的には、表面上男性が存在することになるため、女性は内側で守られることになる。
名目上は、息子が所有者だが、その息子は、母親との結びつきが強く、心理的に母親に乗っ取られた状態であり、母親の言うことに逆らえないようになっているため、実質的には、母親である女性の所有であると言える。
家計管理などの、所領の実質的な家庭内での管理権限は、今まで通り女性が握ったまま、男性を表名義に据えることで、男性のガードがあることを対外的に明示するようにしたと考えられる。これが、女性が表に出てこなくなり、所有権を失ったように表面的には見えたため、女性の地位が低くなったと誤解されたのではないだろうか。
これが、そのまま江戸時代以降、現代まで持ち越されてきたと考えられる。
（初出 2012年03月）

一枚岩ではない先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは、フェミニズムにおいて一枚岩ではない。
今まで、筆者の文章では、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨをひと括りにしてまとめるかたちで言ってきた。
しかし、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨも、先進的移動生活中心社会群Ｆ、北欧と、南欧、東欧とでは、父性、母性の強さ、弱さが違う模様である。
イギリス、フランス、ドイツの先進的移動生活中心社会群Ｆは、父性が強いことが確実である一方、イタリア、スペインの南欧になってくると、社会における母親の影響力が強くなって来て、後天的定住集団社会Ａと似てくる印象がある。
イタリア南部とか、マンミズモ、コネ万能で、オペラに見られるようなドロドロした愛憎に満ちた人間関係が主流であり、女性的、母性的になってくるのである。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでも、純粋に家父長制なのは、先進的移動生活中心社会群Ｆ、北欧辺りのみであり、そのうち先進的

移動生活中心社会群Ｆを代表させて、北米と合わせて、WENA (West Europe and North America) という造語を作り、WENAにおいては、家父長制を前提とする既存のフェミニズムが有効であるが、南欧では母性が強いことを前提とする新たなフェミニズムで捉えた方が良い、とする見方が成立しうると言える。
（初出 2011年10月）

男女闘争史観

世界の歴史は、男性（男性的国家、社会）と女性（女性的国家、社会）との勢力争い、覇権をかけた抗争、闘争の歴史と捉えることが可能である。
先の東西冷戦は、男性的社会、国家である、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ西側と、女性的社会、国家である先天的定住集団社会Ｂ、定住生活中心社会Ｅ、東側との対立、闘争であった。
社会主義と自由主義とのイデオロギーの対立の根底には、女性と男性の力の対立が内包されていた。
鉄のカーテンで閉鎖、排他戦略を取った女性的国家には、男性側からの新規アイデア、物資が入ってこなくなり、社会の発展が止まり、劣勢に立たされた。女性的国家は、自分だけでは、既存の枠組みを壊す新規アイデアを生み出すことができず、どうしても社会の仕組みが古く、後進的になりがちで、競争力の点で劣りがちになるのである。
その結果、東西、男女闘争の第一幕は、西側、男側が勝利した。
東側の女性的国家は、そこで思い切って、ある程度国を開いて、西側の男性的国家の文物、アイデアを受け入れ、そのコピーと小改良で、圧倒的に安いコストで製品を作り、大量輸出した結果、西側の男性的国家の雇用や富を大幅に奪い、西側男性的国家の財政危機や高失業率をもたらし、崩壊寸前にまで追い込んでいる。その結果、東西、男女闘争の第二幕は、東側、女側が勝利を確定的にしたと言える。
後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会Ｇのような西側、男側国家陣営の中に取り込まれた、実質東側、女性的国家という位置づけであった。そのため、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ西側の中で、一人異質な位置づけであったということ。
後天的定住集団社会Ａは、先天的定住集団社会Ｂ、定住生活中心社会Ｅが鎖国中に、西側、男側陣営の生み出した成果を独占して輸入、コピー、小改良し、その成果としての製品を大量にばらまいて世界第2の経済大国にのし上がった。

その点、後天的定住集団社会Ａは、先天的定住集団社会Ｂ、定住生活中心社会Ｅの先鞭を付けた訳であるが、実際のところ、後天的定住集団社会Ａは、先天的定住集団社会Ｂ、定住生活中心社会Ｅと同じ同じ女性的国家で、先天的定住集団社会Ｂ、定住生活中心社会Ｅと比べて社会の内情において大きな違い、差が見られない。
そのため、現状の後天的定住集団社会Ａは、先天的定住集団社会Ｂ、定住生活中心社会Ｅと上手く差別化を図ることができず、通貨が円高のままであることも相まって、製造業を中心に大苦戦中であり、巨大な財政赤字と相まって、沈没は免れない情勢となっている。
将来的に、後天的定住集団社会Ａは、先天的定住集団社会Ｂ、定住生活中心社会Ｅといった女性的国家群の側に統合される可能性が高いと言える。
このように、世界の歴史的な動きは、男性的国家と女性的国家との対立、闘争として捉えることができると言える。
これは、長年続いてきた、女性優位の農耕民と、男性優位の遊牧、牧畜民との世界的な対立、闘争の一環として捉えることも可能である。
それらの根底には、男性と女性との果てしない力比べ、勢力争い、闘争、対立が内在していると言え、男女闘争史観と呼べる。
従来、男女は、互いに性的に惹かれ合って、協力して家庭を作り、子育てをして、次世代へと遺伝、文化を受け継いでいく歴史を紡ぎ続けてきたし、これからもそうあるべきだという、男女協力、協調史観が主流であった。
しかし、実際のところ、男女の持つ性質、行動様式は互いに、気体的、液体的というように、対照的、正反対で対立的なものであることも確かである。それゆえ、そうした互いに対立する性質を持つ男女同士、外部環境の変化に応じて、どちらが主導権を握るか、支配力を得るかで、絶え間なく小競り合い、抗争、闘争を繰り広げることは、家庭の中でも、社会の中でも不可避であり、そこに男女闘争史観の考え方が出てくると言える。

その一環として、将来的に、後天的定住集団社会Ａにおいて、男性側の男性解放、父性確立への流れと、女性側の母性的フェミニズム推進の流れとが、共に隆起して、真正面から衝突することになると筆者は予想する。

（初出 2012年8月）

２．

「家庭内管理職」論

後天的定住集団社会Ａは、政治家や官僚によって支配されている、とされる。
しかし、実際には、その官僚を支配するさらなる支配者がいる。
政治家・官僚の「生活管理者」「さらなる上司としての家庭内管理職」＝主婦であるということ。
後天的定住集団社会Ａの専業主婦＝無給家事労働者論は、打破されるべきである。後天的定住集団社会Ａの女性は、家庭において、実際は、単なる労働者ではなく、家族成員の生活をコントロールする、家庭内管理職とでも言うべき地位についている。
後天的定住集団社会Ａの女性が男性の給料（労働の対価）を全て召し取って、自分の管理下に置くということ。その点、労働者たる男性を支配しているということ。男性が、自分が被支配者の立場にあることに気づいてしまうと、男性が女性に対して反乱を起こしかねないので、一家の大黒柱とか、家父長とか言って、わざと崇め奉って、必死に、気づかれないように取り繕おうとする。
フェミニズムは、女性の弱い面、被害者の面にのみスポットを当てて騒ぎ立て、女性の強い面＝既得権益（家計管理、子供の教育）については、知らんぷりするか、ことさらに無視し否定する。この女性の占める既得権益こそが、「家庭内管理職」としての側面なのである。
家庭内管理職の概念について整理すると、「家族員の生活を、管理・制御する者」と定義されるということ。
1)夫を管理する妻
2)子供を管理する母
として立ち現れるということ。
一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでは、男性が、この家庭内管理職の地位についていると考えられる。
後天的定住集団社会Ａこと。→妻の監督・管理下で、給与稼ぎに従事する夫
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨこと。→夫の監督・管理下で、家

事労働に従事する妻
という図式が成り立つ。
女性が家庭内管理職の地位についていることは、後天的定住集団社会Ａの家庭における実質的な女性優位を示す。
後天的定住集団社会Ａにおける家父長制は見かけだけと考えられる。
女性が、家父長制をやたらと持ち出すのは、妻と姑という同性同士の対立や権力闘争が根本の問題である。
女性は、同性間の相互の一体感を重視する。
同性同士の結束が弱い（仲が悪い、バラバラである。）と見られるのをいやがって、異性の夫（息子）のせいにするということ。
後天的定住集団社会Ａの女性の勢力が、「内部」＝家庭内限定であった理由は、戦闘や戦争状態を前提とした社会である、武家社会の名残と考えられる。戦前の後天的定住集団社会Ａも、陸海軍の発言権の強い、「武家」社会の一種であったと考えられる。戦闘や戦争が多く起きる状態では、外回りに危険が多い。したがって、生殖資源として貴重品たる女性を外に出すわけには行かないからである。
後天的定住集団社会Ａの男性（例えば、九州男児）は、威張って、身の回りの細かいことを妻にやらせることが多い。彼らは、自分からは何もやらず、動こうとしない。その根拠は、「怠け者＝上位者」理論として整理できる。すなわち、仕事をしないでのんびり怠けて過ごせる者が、そうでない者よりも上位にある、という考え方である。
しかし、これでは、妻がいないと、自分一人では何もできない。言わば、妻に生活上の生殺与奪を握られているということ。妻に対して頭が上がらず、結局、弱い立場に追い込まれることになる。
後天的定住集団社会Ａの女性は、家庭に入ることを求められる。職場で昇進しにくいということ。肩たたきで企業定住集団を辞めざるを得ないということ。
それは、職場で無能だから、という訳ではない。
後天的定住集団社会Ａの女性が、社会から家庭に入ることを要請されている本当の理由は、家庭内管理職、すなわち、職場で働く者の生活を管理する者の方が、社会的に重要で、地位も高いから、そちらになってもらいたい、ということなのではないか。
後天的定住集団社会Ａの男性は、本当は、女性に家庭に入ってもらわない方が幸せである。
日常の生活を管理されないで済むということ。気の進まないことへと追い立てられなくて済むということ。（賃金）労働や、組織での昇進競争をしないで済むということ。

しかし、女性への心理的依存があるから、入ってもらわずに済ますのは無理である。
性別分業は、女性差別とされている。
しかし、必ずしも、女性に不利な差別がされている訳ではない。
「女は内、男は外」という場合、「内部」の方が、家庭内管理職の役割を持つことが出来、地位が高い（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとは逆。）ということ。
「内部」の方が、苛酷な自然環境に直接さらされないで済み、生存条件としては良好である。
後天的定住集団社会Ａでは、妻が母艦の役割を果たし、夫は、母艦から飛び立って、職場で労働し、給与と共に帰って来る飛行機である。
母艦は、飛行機に出発や給与渡しなどの指示を出し、管理する。
母艦は永続的な場なのに対して、飛行機に乗るのは、一時的である。
職場は、一時的な滞留の場であり、最終的には母艦に帰らなければならない。
最終的な居場所である母艦たる家庭を支配する女性こそが、社会の強者である。
後天的定住集団社会Ａの父は、子育てに関わろうとしないと非難される。しかし、後天的定住集団社会Ａの父は、例え子育てに参加しても、補助労働者としてこき使われるだけであり、子育ての主導権は握れない。主導権は、女性＝母の手にある。後天的定住集団社会Ａの父親には、子育ての権限がもともとなく、子育てから疎外された存在である。家事についても同様で、決定権が妻の側にある以上、夫は補助労働力に過ぎない。夫が家事にやる気を出さないのもうなずける。一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの父親が、家事や子育てに積極的に関わるのは、彼が、家庭内管理職として、家事や子育ての内容について、最終的な決定権を持っているからだと考えられる。次に何をすべきか決定する権限を持っていれば、当然、やる気が起きるであろう。
専業主婦は、社会的地位が低いと見られがちである。しかし、その様相は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと後天的定住集団社会Ａとで大きく異なると考えられる。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの主婦は、夫の管理下で下請け的に働く、家事労働者に過ぎず、その地位は、本当に低い。
後天的定住集団社会Ａの主婦は、もちろん、家事労働者の側面もあるが、実際には、家庭内管理職として君臨し、管理される夫よりも常に1ランク上に位置する。後天的定住集団社会Ａの主婦は、家族の生活を、隅々まで、制御・規制して、収入管理・分配権限、子供

の教育支配権限を一手に握る。家族の健康な生活を守る、生活管理者、監督としての役割を担っているということ。
後天的定住集団社会Ａ家庭では、買い物の順番として、「子供のものこと。→妻のものこと。→余ったら、夫のもの」という優先順位が付いていると言われる。妻のものが夫のものより優先される点に、女性支配の現実が見える。
（初出2000年07月）

後天的定住集団社会Ａの女性と家計管理権限

1.小遣いと大蔵大臣
後天的定住集団社会Ａでは、自分で他人を養うだけの給与を稼ぐ役割を男性がもっぱら担っていることが、男性優位（家父長制）の証拠と見なされるということ。
女性の立場が弱いのは、自分で給料を稼がないからだとされる。
上記の意見は、おかしいのではないか？
給与を稼ぐ立場にあることが、強い立場にあること（家父長であること）の証拠とは必ずしも言えない。
後天的定住集団社会Ａでは、男性が稼いだ給与は、一昔前の給料袋から、現代の銀行振込に至るまで、男性によってほとんど何も手をつけられずに、女性の下に直行する。
後天的定住集団社会Ａでは、女性が、家計を管理し、家計における、最終的な、予算配分決定の権限を握っている。彼女は、大蔵大臣と称される。
総務庁青少年対策本部「子供と家族に関する国際比較調査」1994では、後天的定住集団社会Ａにおいて、家計管理を行っているのが、夫と妻とを比較したとき、60％以上妻が行っているとされており、後天的定住集団社会Ａの女性が家計管理権限を独占的に掌握していることを裏付けている。
男性は、女性から改めて、小遣いを支給される。
男性は、小遣いの額を、女性と交渉しなければならない。額を最終的に決める権限は女性が握っている。
給与の使い道（予算配分）を決定するのが、本当は、家父長たらしめる役割のはずだが、後天的定住集団社会Ａでは、この役割は、女性に占領されている。
給与を単に稼ぐだけで、稼いで来た給与の使い道配分を決定する権限がないのでは、後天的定住集団社会Ａの男性は、家計管理者＝大蔵大臣としての女性の下で働くということ。（女性にこき使われるということ。）そうした下級労働者に過ぎないということ。

家計管理の権限を最初から剥奪され、小遣いをもらう立場に甘んじるのは、家父長とは言えない。
後天的定住集団社会Ａの女性は、女性は男性に養ってもらう被扶養者であるから、男性よりも立場が弱い、とまくし立てる。しかし、それは、男性の自尊心（「自分は偉い。」）をキープして、よりよく働かせることのための口実に過ぎないということ。（給与を稼がせることの口実であるということ。）
後天的定住集団社会Ａの男性は、お金を生み出す打ち出の小槌（大工道具）であり、女性は、打ち出の小槌を使う大工である。女性は、小槌によって生み出されたお金を取り上げ、自分の手元で管理する。男性は、主体的に自らを管理する能力を持たないため、管理者たる女性に頭を下げて、小遣いを恵んでもらわないといけない。
後天的定住集団社会Ａの男性は、女性によって、一家の大黒柱と持ち上げられるが、本当は、女性の管理下で働く下級労働者に過ぎない。女性によって、収入を吐き出させられ、ちゃんと仕事をするように監視されるということ。後天的定住集団社会Ａは、「鵜飼型社会」であり、男性は、鵜飼である女性の管理下で、魚取りに従事し、捕まえた魚を吐き出させられる鵜鳥の役割をさせられている。
後天的定住集団社会Ａでは、夫は、財産の所有権、名義は持っているが、その財産を自分の自由に動かしたり管理する権限は持っていない。一方、妻は、財産の所有権、名義は持っていないが、その（他人名義の）財産を自分の思い通りに、自由に使ったり管理する権限を持っているということ。
両者のうち、どちらが強いか？
性別を伏せて、Aさん、Bさんとして聞いてみたらどんな結果が出るだろうか？
2.後天的定住集団社会Ａ専業主婦の地位と財産
専業主婦は、自分の食べる分の給料を稼がないから、地位が低いとされてきた。このことは、今までの後天的定住集団社会Ａにおける男性優位の根拠となってきた。
後天的定住集団社会Ａの専業主婦は、家庭における資金の出入りを、最終的に管理し、決定する権限を持っている。家計管理者として、給料の使い道を管理し、何に使うかを決定するということ。こうした財産管理・使用権限は、夫に対しても、小遣い支給という形で行使される。
従来、家庭において認められて来た財産形成（生成）と所有の権限（主に夫が保持。）とは別に、財産管理と使用の権限、配分権限というものの存在を、新たに認めるべきであるということ。いくら、形式的に財産を所有していても、実際に使う権限を持っていなければ、意味がない。その点では、財産管理・使用権限の方に比重を高

く置いてみるべきである。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでは夫がこちらの権限も保持しているが、後天的定住集団社会Ａでは、この財産管理・使用権限は、妻が保持している。

権限の強さ	先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ	後天的定住集団社会Ａ
財産形成（生成）・所有権限	夫	夫
財産管理・使用（配分）権限	夫	妻

従来の後天的定住集団社会Ａにおけるフェミニズムが唱える家父長制についての議論では、財産形成・所有権限の方ばかりに目が行って、財産管理・使用権限について注意が行き届いていない。後者の存在に注意すれば、後天的定住集団社会Ａの家族＝家父長制という結論は、絶対出ないはずである。
ただ収入を入れるだけで、自由に使うことができない（再配分の権限を持たないということ。）、小遣いを、妻に対して、頭を下げて、もらわないといけない夫（彼は、妻の管理下で、下請けの給与稼ぎ作業に従事する。）よりも、最終的な使用権限を持っている妻の方が上位である。（妻は、収入の再配分の権限を持つ。）
後天的定住集団社会Ａにおける、「稼ぎ手（一家の大黒柱）がえらい、強い」コール、大合唱は、財産管理権限を握っている＝本当に力を持っているのが、妻（女性）であることを隠蔽するため、女性によって、意図的に行われているということ。隠蔽することで、男性の自尊心を高い状態に保持し、自分たちに有用な働き（強い盾としての防衛者の役割、給与を稼ぐ労働者としての役割）をさせるのが目的である。「男性上位」を信じ込む男性は、女性によって、担がれているのである。
妻に対していろいろ威張って命令するが、妻がそばにいないと何もできない夫、家族定住集団の中の物がどこにあるか、全て妻に管理されているため、全く分からない夫は、妻によって生殺与奪の権限を握られており、実際には、弱者である。
家計管理権限を、なぜ後天的定住集団社会Ａの女性が取れたか？後天的定住集団社会Ａのように稲作農耕栽培行動が主流の社会では、態度のウェットさを要求される農耕活動により適するのは女性であり、環境適応力・環境合致度が、男性よりも強いのが原因と考えられる。
後天的定住集団社会Ａフェミニズムは、都合の悪い事実を隠す。女性が財布の紐を握ることなど、無視する。臭い物にふたをする、こうした姿勢は改められなければならない。

（初出2000年07月）

後天的定住集団社会Ａの女性と国際標準

フェミニズムは、男性優位社会での女性解放をうたったものである。
これを、後天的定住集団社会Ａへと強引に当てはめた結果、
「後天的定住集団社会Ａは、男社会である（見かけはそうかもしれないが、きちんと調べれば、実態は違うことがすぐ分かるはずである。）ということ。したがって、男性に匹敵することの実現には、男性的にならなければならない。
と考え、女性らしさを捨てようとしたということ。
この際、女性は、誤りを犯そうとしている。
後天的定住集団社会Ａは、本当は、女性優位社会＝「女社会」である。後天的定住集団社会Ａは女々しい。もともと後天的定住集団社会Ａの男性は、男性的でないのに、自分は男性的だと勝手に思い込んでいる。
女性は、男性的になろうとすることで、自ら、女性優位という強さの基盤を捨てて、「女社会」を壊そうとしているということ。
後天的定住集団社会Ａの女性が男性に伍するには、ドライ化＝男性化しようとしても限界がある。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性の二の舞になってしまうということ。
女性の本質を生かした方が、強いのではないか。
ウェットさ＝女性らしさを保ったままで、職場・職域進出すればよいのではないか。
後天的定住集団社会Ａの職場はもともとウェットなのだから、進出は十分可能なはずであるということ。（後天的定住集団社会Ａの職場には、女々しい性格のままで適合できるということ。）
現代後天的定住集団社会Ａは、女性も含めて、ドライで男性の強い先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の規範を真似ている。
筆者が行った、ドライ・ウェットな心理テスト調査結果では、後天的定住集団社会Ａの女性は、「自分の性格に当てはまるのはどちらですか？」という問いに対して、ドライな項目の方を選択することで、自らの女々しさを否定している。
これは、男性的な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国に習おうとしたためである。真似すべき成功の前例である、先進国という権威に弱いということ。
後天的定住集団社会Ａにおいて、ウェットさが否定されることにより、本当は、本来ウェットであるはずの、女性の立場を弱くしてい

る。
見かけは、Lady First ~ 男女平等・同権なので、女性の立場を強くしているように見えるが。
女性は、伝統的な後天的定住集団社会Ａのように、ウェットな社会では、水を得た魚のように、主流派コースを歩めるはずである。自分たちのペースで社会を引っ張れるはずであるということ。
女らしさは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ主導の国際標準から外れた行動様式である。
後天的定住集団社会Ａの女性は、自らの女らしさ（女々しさ）＝ウェットな行動様式を否定し、国際標準のドライな行動様式に合わせて、男らしくなろうとしているということ。しかし、地金がウェットなので、ドライになりきるのは無理であり、「擬似ドライ化」するにとどまる。
後天的定住集団社会Ａの女性は、国際標準の行動様式を、ドライ＝男性的＝先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的と考え、それに権威主義的に同調する。後天的定住集団社会Ａも先進国の仲間入りをした以上、当然ドライであるべきと考える。これは、伝統的な、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の考えに通ずる。ドライな社会向けの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論であるフェミニズムを後天的定住集団社会Ａに当てはめて、何ら問題を感じないということ。国際標準の理論だから、ぜひ後天的定住集団社会Ａにも当てはめるべきと考える。それが正しい研究だと、思い込んでいる。
国際標準の行動様式を、ドライ＝男性的と捉えることは、世界的に、男性優位＝家父長制が標準だ、と考えることに通ずる。家父長制およびそれを告発するフェミニズムを世界標準とみなし、後天的定住集団社会Ａへと、機械的に、「上から」権威主義的に導入しよう、合わせようとするということ。後天的定住集団社会Ａが世界標準に追いついた、とか、標準に合わせている、という考えから、後天的定住集団社会Ａは家父長制社会だとする。後天的定住集団社会Ａは、前近代＝封建制状態では、その性質はウェット＝女性的で、国際標準からは外れているにもかかわらず、後天的定住集団社会Ａのフェミニズムでは、家父長制だとされている。国際標準に合っていても、外れていても、後天的定住集団社会Ａ＝家父長制という結論を導き出している。伝統（前近代、封建）後天的定住集団社会Ａに特有＝ウェット＝女性的という結びつきに気づいていないためと考えられるということ。
後天的定住集団社会Ａについての国際標準から外れた結論（後天的定住集団社会Ａに特有＝女性的＝ウェット）は、いずれ標準に追いつくと考えるなどして無視するか、国際標準に合わせて曲解する。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの研究結果を直輸入し、それにそぐわぬ現象を、無視・曲解するか、後天的定住集団社会Ａの現象を、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論へと強引に当てはめるということ。
例えば、女性が握る家計管理の権限（財布を握ること）には、全く言及しようとせず、給与・収入を自らは稼がない点に固執し、無給の家事労働者の側面のみを強調して、女が弱い証拠とする。
あるいは、女性による育児権限の独占については、父親が育児を手伝わないことを、女性への育児労働押し付けとして、自ら進んで育児権限を放棄しようとしている。子供を自分のコントロール・支配下に置くことができる、とか、自分の言うことを聞く子供を作り出し、自分が生き続ける限り支配することができる、というのは、育児権限を持つことの大きな役得であるが、それを自ら放棄しようとしている。これは、権力論からみれば、自ら手に入れた権力を、進んで放棄する、という馬鹿げた行為を平気で行うことである。
ないし、男尊女卑についても、見かけ上の、行動面における男性優先を、その本質である、弱者である男性の保護、男性の人権保障、弱者優先（年寄りにバスの座席を譲るのと同じ発想）という点に気づくことなく、男性による女性支配の現れと決めつけるということ。
女らしさを世界標準とすることが、フェミニズムの最終目標となるべきである。そのためには、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのドライな行動様式は、手本とすべきでない。
（初出2000年07月）

後天的定住集団社会Ａにおける母性の充満

後天的定住集団社会Ａには、母性が充満しているとされる。これに対して、後天的定住集団社会Ａの女性学者やフェミニストたちは、母性的であることを、いけないこととして、攻撃する。
しかし、少し考えると、以下のことが言える。
・母性は、女性の、自分の子供に対する態度であり、女性性の一部である。
・後天的定住集団社会Ａでは、女性が、男性を、自分の子供のように慈しむ態度が広く見られる。
・後天的定住集団社会Ａの女性は、母親としての地位は、子供の役回りを演じる男性よりも強大である。
これらの事象は、後天的定住集団社会Ａにおける、女性優位・優勢の証拠であるはずなのに、後天的定住集団社会Ａの女性学者やフェ

ミニストたちは、なぜかそのことに気づこうとしない。彼らは、女権拡張を目指しているはずであり、母性の社会への充満は、本来望ましい事象のはずなのである。
論者が、独身者だったり、若い未婚の女性が多いことが原因なのではないかと思われるが、明らかにミスリードとなっているように思われる。
（初出2000年07月）

女性と社会主義、共産主義

女性には、規制、協調、和合、集団本位の社会主義、共産主義が適合する。

男性には、個人本位の自由主義が適合する。

女性が強い後天的定住集団社会Ａは、見かけこそ先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の個人主義、自由主義に追随しているものの、実際は、社会主義的、共産主義的である。
（初出 2011年8月）

後天的定住集団社会Ａ主婦論争に欠けている視点

既存の後天的定住集団社会Ａの主婦論争の視点は、以下の通りである。
(1)主婦＝無給の家事労働者、という視点ばかりであるということ。
家庭の管理者である、男性の生活を管理している、という視点や自覚に欠けているということ。
社会で、女性の生活管理下で働く、労働者の役割を担っているのは、男性の方である。
主婦は、むしろ家庭内管理職として、男性の上に立って、その生活

ぶりを指示・コントロールする役割を担っている。
女性が、家庭における、生活管理者 Life Managerの立場にあるという視点に欠けている。
無給という言葉にふさわしいのは、稼いだ給料をそのまま主婦の手元に直行させて、自分では配分の権限がない、男性の方ではないか？
(2)収入を得る場＝職場中心の視点ばかりであるということ。
「社会進出」の言葉が示すように、家庭を、社会に含めて考えようとしない。
職場を含めた社会の総合的な母艦としての役割を果たす、家庭中心の視点が、なぜか取れない。
(3)家庭の財産の名目的所有者（名義）が誰か、という視点ばかりである。
夫への小遣い額決定など、自分が、強大な家計管理権限を持っている＝家庭の財産の実質的な所有者であることに、目が向いていない。
(4)誰が収入の稼ぎ手か、という視点ばかりである。
彼女たちは、稼ぐのが誰かという方にばかり注意が行って、使う権限を自分たちが独占していることに、ちっとも気づいていない。
彼女たちは、自分たちに欠けている視点に、以下の通りである。
(1)気づこうとしなかった、気づくことを巧妙に避けたということ。
気づいてしまうと、後天的定住集団社会Ａが、自分たちが導入しようとする、フェミニズム理論通りにうまく説明できなくなる。
(2)気づかなかったということ。頭が、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論を消化・吸収することで手一杯になっていて、後天的定住集団社会Ａの現実に対して、無知であった。
（初出2000年07月）

後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの隠れた策略

後天的定住集団社会Ａのフェミニズムにおいては、男性を、女性を支配する家父長と見なし、後天的定住集団社会Ａは典型的な家父長制社会、男社会だと必死になって主張がなされている。
しかし、この後天的定住集団社会Ａにおけるフェミニズムの主張は、実際には、女性的な性格を持つ後天的定住集団社会Ａを支配する側に回っている後天的定住集団社会Ａの女性による、自らの保身、退嬰的体質を温存しつつ後天的定住集団社会Ａを実効支配するための、巧妙な「支配責任」逃れの口上である、という隠れた側面

がある。
女性の本質は、自ら危険な目に遭うことが怖くてたまらず、なるべく男性に危険な役回りを押しつけて、自分は安全、保身が図られる奥座敷で、のうのうと楽をして暮らそう、とか、あえて既存秩序に身の危険を呈して刃向かい、自力で新秩序を打ち立てるリスクを取るよりも、既存秩序にそのまま柔軟に適応し、既存秩序の教えを、前例、しきたりとして何よりも重んじ、既存秩序を維持した中で自らの安全、快適な居場所を上手に確保しよう、という、保身、安全第一、リスク回避、退嬰性のかたまりである。
女性が、こうした保身、リスク回避、退嬰性の本質を保持しながら、強者として社会を実効支配するには、何らかの形で「支配すれども責任取らず、リスクを取らず」の「無責任支配」「無リスク支配」を実現する必要がある。そのためには、自分たちの支配責任、支配に伴うリスクを何らかの形で逃れたり、誰か他の人たちに押しつけたりする必要がある。人々は、支配者と目される人に対して生活の不満をぶつけたり、政策失敗時の責任を追及したりするため、支配者は批判の矢面に何かと立ちやすく、リスキーなのである。
そのための有効な手段が、ひたすら男性を支配者扱いして、自分たち女性は、男性に支配されている弱者ですと、黄色い叫び声をキャアキャアとヒステリックにひっきりなしに上げて、男性をひたすら支配者として責任を押しつけて責め立てる、支配責任を無理矢理でっち上げて、男性に負わせることである。あるいは、自分たち女性を強者とみなす母権制の存在をそもそも認めない、抹殺、無視することであるということ。後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの主張が、まさにこれらにあてはまるのである。
後天的定住集団社会Ａの女性は、自分たちは支配者でない、男性が支配者だと大声で主張し続けることで、後天的定住集団社会Ａを実効支配しながら、それに伴う責任は男性に負わせることにいともたやすく成功しているのである。そうすることで自分たちは批判の矢面に立たない、奥まった安全なところに止まりながら、社会を実効支配できるのである。後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、後天的定住集団社会Ａの女性たちによる後天的定住集団社会Ａ支配の手っ取り早く高い効果が見込めるおいしい道具なのである。
そういう後天的定住集団社会Ａの女性にとって、後天的定住集団社会Ａは母権制社会であるという筆者の主張は、寝た子を起こす厄介な存在であり、彼女たちは、今後も無視を決め込むと予想される。
また、一方的に責任を負わされた、本来無力なはずの後天的定住集団社会Ａの男性も、彼女らの主張により、あたかも自分が強くなった、支配者になったように錯覚して快い気持ちになり、やたらと威張るようになっているのである。そうした状態で、あなたたちは本

当の支配者でないと指摘されるのは、面子を潰された気分になり、受け入れがたいことであろう。
そういう後天的定住集団社会Ａの男性にとって、後天的定住集団社会Ａは母権制社会であるという筆者の主張は、支配者扱いされていい気分に浸っているのを打ち壊す不快な存在であり、彼らも、今後も無視を決め込むと予想される。
（初出2009年5月）

専業主婦を求めて

１．
仕事で家族定住集団を離れる女性は、家庭内での発言力・支配力が低下する。男性にとっては本来喜ばしいことのはずなのに、妻には家族定住集団にいて欲しいとする男性が多いのはなぜか？女性への依頼心がそうさせる。女性を、母親がわりにして頼ろうとするということ。本来ドライであるべき男性の中に、ウェットさや女々しさが蔓延している。
女性は、伝統的な性役割からの解放を唱えている。伝統的な性役割では、自分たちの支配力が強いにも関わらずである。その理由は、ライフコースに従って変化する。
(1)結婚してからしばらくの間は、特に育児の面で、負わされる負担が大きい。とても忙しいということ。子供の都合に合わせて、自分のしたいことを我慢しなければならないということ。家事の面でも、家電製品の導入など省力化が進んでいない頃は、大変だった。
この場合、女性が。
(a)家政面での主導権を引き続き維持しつつ、握りつつ、補助労働力として、男性に期待するのか？
(b)家政面での主導権も、夫婦で分担する。
によって、男性の取るべき態度が変わってくる。補助労働力としてこき使われるのは、拒否すべきである。できるだけ、男女平等の主導権分配を行うべきであるということ。
(2)結婚して大分経って、子育てが一段落し、家電製品の導入で家事の省力化が進むと、ひまになり、生きがいがなくなる。子育て後は、やりがいがなく、時間の空白ができやすい。専業主婦が価値ある職業と映らなくなる。専業主婦以外の職業をメインにしてみたくなるということ。男性の占める職域に進出する機会が欲しくなる。
後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁は、もともと、女性向きと言えるウェットな雰囲気の職場なので、女性は、本来、結構有利なはずである。

後天的定住集団社会Ａの組織のウェットさならではの問題点は、以下の通りである。
同質性や閉鎖性が高く、最初に白紙状態で入った者＝新卒者にのみ心を許し、組織風土を覚え込ませるということ。（白装束を着る嫁入りと同じということ。）組織の外部に一度去った者や他の組織に属していた者が、もう一度入り込むのが難しい。女性の場合、子育てに忙しく、就業にブランクができてしまうので、いったん組織を去る必要があるが、組織の閉鎖性は、これと矛盾する。育児休業制度は、組織に連続雇用してもらうことを前提としたものであり、組織内でのキャリアアップを目指すならば、不十分でも、耐えなければいけないのが現状である。
男性は、自分自身を解放したければ、女性の職場での中途採用への道を開くべきである。
ちなみに、妻が働きに出るのをいやがる夫は、以下の通りである。
(1)自分の稼ぎが少ない、と周囲に映るのが、自分の能力を否定されるようで面白くない。
(2)妻に、自分の家族定住集団を守っていてもらわないと、不安であるということ。
(3)自分が帰宅したときに、温かく出迎えてほしい。
といった欲求を持っているということ。
しかし、それでは、妻に、家計管理や子供の教育の権限を、いつまでも握られ続けて、被支配者の立場に甘んじることになる。
自分が家族定住集団を空ける時間が長いため、家族に対する影響力が少なくなる。
子供たちから、じゃまに扱われ、疎外されるということ。
２．
女性に対する職場での性差別の背景には、女性に家庭にとどまってもらいたいという、「専業主婦願望」とも言うべき、男性側の欲求があると考えられる。
現状を変動させようとする側（女性）は、それなりの、変動しない方向への反発力を受ける。
女性が職場進出してしまうと、男性は、家庭のみならず、職場でも、女性に支配されかねない。男性は、自分たちの居場所がなくなるのを恐れて、女性の進出に反発する。
後天的定住集団社会Ａの男性は、現状では、自分の存在理由が、給与を稼ぐ、収入をもたらすことにのみあるということ。（収入の管理、使用用途別の予算配分などは、女性の手に握られてしまっているということ。）女性が進出すると、男性は、自分の存在理由を失ってしまう。
職場での性差別は、男尊女卑で、女を見下して、組織内の重要な地

位につかせようとしない姿勢ももちろんあるということ。（それ自身、後天的定住集団社会Ａにおいて女性の方が力が強いという実勢を反映しない、空虚な態度である。）
しかし、性差別は、実際のところ、「家庭内管理職待望論」とも呼べる、女性に家庭に入ってもらって自分の事を、自分の母親のように管理してもらわないと不安である、それには、女性に家庭に手っとり早く入ってもらうための方策として、職場に残ってもいいことはないよと女性に示せばよい、という考えによって引き起こされている面が大きい。
そういう点では、職場での性差別は、後天的定住集団社会Ａの男性の、女性を母親代わりにして依存しようとする心と表裏一体のものであり、性差別をなくすには、男性の女性への依頼心をなくし、自立した存在にさせることが必要である。女性側でも、男性（自分の息子など）から自分への依存心をなくし生活面で自立させることが、女性自身の職場への進出を早めることにもっと気づくべきである。そういう点では、女性の職場進出の進展の条件は、後天的定住集団社会Ａの家庭における女性（母性）による男性支配を終わらせること＝従来の母性的主婦観の解体でもある、と言える。
（初出2000年07月）

後天的定住集団社会Ａのフェミニズムを批判するということ。

〔１．
現代の後天的定住集団社会Ａのフェミニストの主張は、以下のような問題点を抱えていると考えられる。
1)女性が、男性より、必ず恒常的に弱い、とする偏見がある。19世紀に先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで出た説である「女性の世界史的敗北（母権こと。→父権への全世界的移行）を、新しい資料と照合せず、無検証のまま、定説として信じ込んでいるということ。もともとこの母権こと。→父権全面移行説は、遊牧、牧畜主体の父権社会であるヨーロッパ人が、自分たちの社会が父権中心であることを正当化するために提唱したものである。この説の提唱に当たって、定住生活中心社会群ＡＢＣの稲作農耕社会の社会心理的な実態（集団主義などウェット＝女性的であるということ。）を、提唱者のBachofenやEngelsらが熟知していたとは考えにくい。母権こと。→父権全面移行説の提唱者たちは、ほとんどヨーロッパとその周辺のみを見て母権こと。→父権の全世界における全面移行説を強引に唱えているふしがあるのに、後天的定住集団社会Ａのフェミニスト

たちは、その欠陥に気付かずに、理論の後天的定住集団社会Ａへの直輸入をしているのである。
2)男女の心理的性差についての研究成果を、考慮に入れていないということ。社会のあり方（ドライ/ウェットなど）と、心理的性差のあり方との照合を行わないまま、女性が優位の社会は存在しないと断定している。後天的定住集団社会Ａについては、「後天的定住集団社会Ａに特有＝ウェット＝女性的」という相関が成立する。後天的定住集団社会Ａでは、女性が男性よりも勢力が強いからこそ、「後天的定住集団社会Ａに特有＝女性的」となるのである。後天的定住集団社会Ａは、事実上、女性優位の社会という見方が成り立つのであって、このことは、後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの主張とは相いれない。
3a)再生産過程についている専業主婦を、生産過程についている職業人より劣ったものとみなす偏見がある。
3b)「男は仕事、女は家庭」といった性別分業を、一方的な男性優位＝家父長制と見なして、性差別と批判する、過ちを犯している。性別分業は、男女間で、生物学的貴重性が異なる以上、女性が強い社会でも、起こりうるということ。（男性は危険な外回りの仕事に従事し、女性は安全な内回りの家庭を主な暮らしの場とする、など。）男女どちらが優勢かは、性別分業が存在するということだけでは決まらない。男女どちらが、社会において、管理者的な重要な役割を果たしているかにより決まる。後天的定住集団社会Ａでは、女性が男性の生活管理者として、家計管理権限などを全面的に掌握しているので、女性の方が優勢と考えられるということ。（たとえ男性が首相だったとしても、その妻は、「首相の生活管理者」として、首相よりもさらに1ランク上の存在として君臨している。）
3c)後天的定住集団社会Ａでは、男性が稼いだ給与の実質的な管理権限を持つのは女性なのに、その事実を無視して、名目的な所有名義のみにこだわっている。
4a)母性の優越（母子癒着）を、女性による社会支配と捉える視点に欠けているということ。
4b)女性主導による育児を、本来なら社会の女性化＝女性優位を実現するものとして喜ぶべきなのに、「社会（職場）進出のじゃま」としてnegativeに捉えているということ。（それによって、男性の育児への介入機会が増加する可能性が増える。それは、男性をむしろ利することになる。）
5)後天的定住集団社会Ａのフェミニズム・女性学自体が、「女性が弱い、差別されている」と大合唱することで、後天的定住集団社会Ａの男性を故意に強く見せようとする後天的定住集団社会Ａの女性の作為や作戦や策略の現れであるということ。

男性を強く見せるのは、男性を自分たちを守る強い盾として使おうとする意識の現れであり、後天的定住集団社会Ａの男性の強さは、そうした女性の意識に支えられて初めて成り立つ、「虚像（虚勢に基づくもの）」であるということ。後天的定住集団社会Ａの見かけ上の主人（公）である男性は、本当の主人（真の主人）には、現状のウェットー女性的な後天的定住集団社会Ａの体制の下では、永久になれない。ウェットな後天的定住集団社会Ａの本当（実際）の主人（公）は女性である。
6)女性の社会進出を阻む男性を攻撃する際に、男性側の心理を考慮していないということ。今まで男性が主に占めてきた職場に、自分とは生理的・心理的に異質な者（女性）が、新たに自分の周囲に進出してくるのを、男性側が、不愉快に思い、阻もうとするのは、人間の心理として妥当である。
〔２．
従来、「後天的定住集団社会Ａの」フェミニズムで主張されてきたことは、間違っているのではないか？
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで主張されているフェミニズムには正当な根拠が認められる。（それは、正しい。）しかし、それをそのまま社会のあり方が異なる後天的定住集団社会Ａに直輸入して、機械的に当てはめようとするのは、正しくない。
伝統的な後天的定住集団社会Ａは、むしろ、女性向きにできており、その中で不利益をこうむっているのは、男性の方である可能性が高い（後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性はウェットー女性的な方向に偏っている、後天的定住集団社会Ａの家庭の財務を管理するのは女性である、．．．といったように、女性が実質的に社会を支配している。）ということ。
同じ男女差別でも、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと後天的定住集団社会Ａとでは、その性質が異なる。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでは女性の立場が本当に弱いのに対して、後天的定住集団社会Ａのそれは、男性に生活面で依存されることによる負担を、女性が一方的に担わされる、というものである。。（男性は、女性向き社会に対して、不適合を起こす。）後天的定住集団社会Ａの男女差別は、むしろ女性の立場が強いために起きている。（女性の立場は、男性を上回る。）
「後天的定住集団社会Ａ」のフェミニストは、こうした現実の（女性が強い。）後天的定住集団社会Ａのあり方を、新たな枠組みで捉え直す試みを行うことで、自らが犯した、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論の後天的定住集団社会Ａへの強制的当てはめによる誤りを認めるべきであるということ。（後天的定住集団社会Ａにおける、男女の力関係について、男性が強いという、誤った説を流した

ということ。それを認めるべきということ。）
現在の、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ（遊牧系社会）生まれの理論を、機械的に後天的定住集団社会Ａ（農耕社会）に当てはめるだけの、後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、以下のような視点を取り入れて、新たな段階に脱皮を図るべきである。
(1)女性が弱いと見なす、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ直輸入の部分を全て取り外し、削除する。そうして、女性が強いことを前提とした理論構成に組み換えるべきである。例えば、女性が強い社会において、「強者の負担」が不合理なほど重いので、男性の、自分たちのところへ寄り掛かってくる度合いを、もう少し減らしてもらうには、男性にどのような形で協力を求めていけばよいかを、議論するなどである。
(2)強いのは見かけだけで、本当は、女性よりも立場が弱い、男性への配慮をもっと示すべきである。単純に、（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニストのように）男性を強者と見なして攻撃するだけでは、後天的定住集団社会Ａの男性は、違和感を感じて心を閉ざしたままであろう。
(3)男女平等を説くのなら、女性に対して、家計管理権限の男性との共有（今までみたいに男性が稼いだ収入の全額を男性から取り上げて、小遣いだけを渡すやり方の廃止。）の他、男性も育児に積極的に参加させて、女性向けに大きく偏った国民性をより男性向きの形に変化させること、などを、女性の側も受け入れるよう説得するべきであろう。
（初出1999年08月)

後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの主張には無理がある。

従来の後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの主張が、無理があることを以下に示す。

女性の経済的自立をうたうことは、職場で女性が男性企業定住集団のメンバー化を目指すことになる。しかし、出産とかで男性企業定住集団のメンバー並みになるのは無理だと判明し、辞めてしまう。

女性管理職、幹部の増大は、女性幹部が責任を取らない、無責任体制を生じさせてしまい、組織崩壊につながる。

セクハラの根絶は、男女のつながりが出来にくくなる副作用があ

り、恋愛の減少や、少子化につながる。

（初出 2013年10月）

後天的定住集団社会Ａにおける女性の「社会進出」について

１．はじめに（家庭は「社会」ではないのか？）
現在言われている、女性の「社会進出」とは、従来、家庭に囚われている女性を、そこから解放して、男性が占有してきた「社会」（官庁、企業．．．といった家庭以外の場所）に進出させる、ことを指すものと思われるということ。
まず、女性の「社会進出」を唱える人たちは、家庭を社会の一部と見なしていない節がある。
家庭は、誰もがそこから出かけ、仕事などをしたあとで、必ず帰着するところの、社会の「空母」のような意味合いを持ち、社会の根幹部分を形成するといえるということ。その意味で、家庭を社会とを別々に捉える、「社会進出」という考え方は、誤っていると思われる。家庭を支配するものこそが、社会全体の根本を支配すると言ってもよいのである。
２．
なぜ、後天的定住集団社会Ａの女性が家庭に囚われてきたか？女性が、家庭に縛られる現象がなぜ起きているか？これについては、(1)生物学的な見地に由来する問題と、(2)後天的定住集団社会Ａなど、農耕社会固有の問題とに分けて考えるべきである。
(1)まず、生物学的側面について考えるということ。女性の方が、男性よりも、担うところの生殖細胞（卵子）の数が少なく、作りがリッチであり、生物学的貴重性が高い。その点、人間の種としての存続をはかるためにも、女性は、貴重性が低い男性よりも、より安全が確保されたところに常時とどまり続ける必要があった。それが、「巣」「内部」としての家庭であった。一方、家庭から切り離されたところの職場は、より危険性の高い「現場」「外」の世界であり、男性により向いた場所であった。
しかるに最近は、ほとんどの職場では、安全性が高くなった。コンピュータ化が進んで、危険な作業は、みな機械が行い、人間は安全なところにいたままで、職務を遂行できるようになった。その結果、職場は、生物学的貴重性の低い男性が占有する必要がなくなっ

てきた。女性の「職場進出」は、十分可能な状態にあると考えられる。
ただし、現状では、職場は、あくまで、日中、家庭から、出かけていって、作業をするだけの場所に限定されており、職場で働いた人間は、家庭に再び帰って、食事をする、寝る．．などのことをする必要がある。
今後は、職場にも、家庭同様の「巣」としての機能を持たせるということ。（一日中占有することのできる、睡眠や食事を取ったりできる、ないし育児の設備が整っている、自分専用の安全な居場所。）すなわち家庭と職場との同一化が、恒常的に安全な場所を求める女性が、職場に完全に進出する根本的な条件となる、と考えられる。
(2)次に、農耕社会固有の問題について考えるということ。家庭は、社会の基盤部分を支配する「空母」としての役割を担っているということ。後天的定住集団社会Ａのような農耕社会においては、そこは、女性が支配している。従来、外働きしていた後天的定住集団社会Ａの男性は、女性に対して、心理的に依存して（甘えて）おり、母親代わりの女性に家庭にいてもらわないと不安であるということ。そのため、女性が家庭から外に出ることに反対する。
したがって、後天的定住集団社会Ａにおいて、女性がスムーズに「社会進出」するには、家庭が男性による心理的依存の場である状態を止めればよい。具体的には、女性が、男性の母親役から降りればよいのである。より根本的には、男性が女性に心理的に依存する元となる、女性による男性支配をやめて、男性を自立させることが必要である。これには、例えば、育児時に、母親や祖母が子供（特に息子）に、心理的な一体感をあまた持たせないように、自分にあまりなつきすぎないように、甘えないようにすることが必要と考えられる。
後天的定住集団社会Ａの男性は、フルタイムの過酷な条件で働けるが、女性は、家事・育児があるからパートタイムでないと働けない、それゆえ、社会進出が遅れているとする見方があるが、これも、家庭において、男性が女性に対して、心理上、全面的に依存しており、それを女性も許容しているため起きる現象である。すなわち、男性が家庭を省みないで働けるのは、女性に、家庭の全てを、心理的に任せているからである。より正確には、家庭は、女性に全面的に支配されているので、任せざるを得ないからである。男性がフルタイムで勤務しようとする強迫感から逃れさせるには、女性が家庭を全面的に支配する状態を改め、男性にも、家庭に心理的な居場所を設けてあげる必要がある。（心理的な居場所とは、自分の存在を明確化・肯定する場。）

３．
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムでは、女性が家庭に縛りつけられることは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの基準から見て、遅れている、として否定するする考え方が強い。しかし、女性が、家庭に留まることを否定すること自体、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的な家庭観を、強引に後天的定住集団社会Ａの家庭に当てはめようとするものであるということ。（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的な家庭観では、家庭が男性主導のものであり、女性はそこから出たがっている。）（後天的定住集団社会Ａに特有な家庭観では、家庭が女性主導のものである。女性はそこから出る必然性は特にない。むしろ女性にとっては、皆を心理的に支配できて居心地がよい。）これは、後天的定住集団社会Ａのフェミニストの、浅慮による後天的定住集団社会Ａの現状把握失敗の現れである。なぜならば、家庭こそが、後天的定住集団社会Ａにおいて、女性によって、社会全体を支配するための効果的道具として使われてきたことに気づいていないからである。
社会のあり方を職場中心に見る、後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、後天的定住集団社会Ａが男性中心に動いているとする、誤った見方に囚われている。これは、この説を見て、「自分も『社会進出』しなければ」と考える女性による、家庭の放棄をもたらし、かえって家庭を、男性を含めた社会全体の管理・コントロールの基地として利用して来た、女性の力を、皮肉にも弱めているということ。（家庭は、社会を支配する力の源である。）（それは、後天的定住集団社会Ａの男性にとっては、都合のよい事態である。）
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの女性にとっては、家庭は自分たちの居場所ではない（男性に支配されている場であり、女性たちはそこから疎外されている。）から、家庭からの脱出を求めたということ。後天的定住集団社会Ａでは、家庭は女性の支配する場であり、男性はそこから疎外されているからこそ、家庭の外である職場に、逃げ出して、そこに安住の地を求めているのである。後天的定住集団社会Ａにおける女性の職場進出は、男性にとって安住の地を脅かされる行為に他ならないということ。（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの男性にとっては、そうではない。彼らは、ちゃんと家庭を押さえている。彼らは、家庭を、自らの支配下に置いている。）
女性の「社会進出」は、後天的定住集団社会Ａの男性にとっては、社会のあり方全般を女性的なものに支配される中で、自尊心（「一家の経済を支えるのは私だ。」．．．）を保つためのの最後の拠り所・牙城を切り崩される由々しき事態に他ならないということ。女性の「社会進出」をスムーズに行われるようにするには、職場が、

男性にとって、自尊心を保つ最後の切り札として働く性格をなくすことが必要である。
女性が従来占有して来た特権を、男性にも明示的に開放するということ。（特権とは、家計管理による収入・支出決定の権限、育児権限などである。)それが、男性が、官庁・企業などの組織における地位に強迫的に固執する心理から解放させる、一番の手であるということ。（男性が、女性を排除しようとする心理。そこから、男性を解放させるということ。）後天的定住集団社会Ａにおいて、女性の「社会進出」を進めるには、こうした男性の「全面的に女性に支配される」という恐怖心を取り除くことが必要である。
４．
女性の「社会進出」の遅れと関連して、女性が組織（官庁、企業．．）で高い地位に就くことが少ないことが、「男性が女性を支配している」ことの恰好の証拠として、後天的定住集団社会Ａのフェミニズムでは、取り上げられている。
なぜ、女性が高い地位に就かないかについては、(1)生物学的側面と、(2)農耕社会特有の「女性が男性を持ち上げる」側面の２つから考えることができる。
(1)高い地位への就任を、組織において、役職に就くことと捉えるならば、高い地位に就くことは、失敗したときの責任を取らされる度合いがそれだけ重くなることを意味する。これは、成功している時はよいが、失敗時には、真先に批判の矢面に立たされることになる。責任を取るには、社会的な制裁（懲戒処分、刑罰、悪い風評．．）を受け入れなければならないが、その際、自らの生活が脅かされる危険が大きくなる。これは、生物学的に貴重な、それゆえ、自らの保身に敏感な女性には、耐えがたい事態である、と考えられる。女性が大事にする、生活上の「安全性」が保たれないのである。男性は、その点、自らの保身に、女性ほど敏感ではないため、役職について、失敗した結果、責任を取ることにも平気である、と考えられる。
あるいは、女性は、男性に比べて、人間関係の維持を重要課題とするが、地位相応の業務に失敗して、周囲の、自分が依存している皆から、後ろ指を指される状態（疎外される状態）が、耐えられない。それゆえ、高い地位を、そういう事態も受け入れる男性により任せるようになる、とも考えられる。
自ら直接は高い地位には就かず、男性に就かせて、その男性を、自分を母親代わりにさせるなどして、自分に心理的に依存させることで、社会全体を間接的に支配するのが、伝統的な、女性による男性支配、社会支配のやり方である、と考えられる。これならば、社会を支配しつつ、なおかつ責任を取る事態からは免れることができ

る。
(2)女性の地位の低さは、「男尊女卑」がもたらしている現象でもある。後天的定住集団社会Ａのような農耕社会では、社会が女性のペースで動いている。（社会は、女性向けにできている。）男性の地位は女性に比べて低い。これをそのまま放置すると、男性は、「自尊心」をなくし、やる気をなくす。（仕事をしないということ。）ということ。
そこで、農耕社会では、男性を、組織において、肩書のある「高い」地位に優先的に就かせて、「自尊心」を満足させ、仕事に打ち込むようにしむけることが必要になる。女性が就く地位は、男性の補助となり、低めになるということ。（男性を立てるということ。）これは、男性の地位が実は低いことを自覚させないことで、男性の力を引き出すために必要である。働けば、自分の地位が高くなると男性に思わせることが、社会の発展の原動力となる。この場合、高い地位は、あくまで、見かけだけのものである（本当に社会をコントロールしているのは、女性である。）が、そのことを隠して、男性を「偉い！」とほめそやすことにより、男性は、女性が支配する社会の中で、「自尊心」を何とか保持できる。
５．
女性が自ら社会的に高い地位につくことを積極的に追求するようにするには、失敗時に取らなくてはいけない責任を小さくすることが求められる。失敗時に、その責任を上下左右の地位へと分散させること、責任を周囲との連帯責任とすることで、本人の取らなくてはいけない責任を軽くすることが必要である。
例えば、女性が責任者のプロジェクトチームで作業を進めている場合、作業が失敗したら、従来のように上司（女性）一人が責任を取るのではなく、チーム員全体で責任を取るようにする。（上司に責任が集中することを避けるということ。）責任をチーム員各員に分散させる。そういった仕組みを作る必要がある。そうすることで、上司の女性の取らなくてはいけない責任が軽くなり、責任を取ることへの心理的圧力が少なくなるため、女性は、より上司の立場に気軽に立つことができるようになり、高い地位につきたがるようになると考えられる。
また、後天的定住集団社会Ａのような農耕社会では、女性が、「男尊女卑」でわざわざ男性を心理的に持ち上げて仕事をさせることをやめ、自分で職場進出を果たすことで、今よりも男性が頼りなくなり、自分に対してより依存的になってしまうことを受容しつつ、自力で、職場での仕事と育児などを両立させていく方向に進むことが考えられる。その際は、女性が、部下の男性に対して、母親のように接することで、後天的定住集団社会Ａの男性の持つ母親的な存在

への依頼心を満足させ、男性はスムーズに上司の座を女性に譲ると考えられる。
なお、従来、後天的定住集団社会Ａの男性が女性に対して生活面で依存的で、食事、洗濯などいろいろ世話を求めることが、職場で働き、高い地位を追求しようとする女性の負担を一方的に増している点は見逃せない。対策としては、例えば、男性に対して、従来のような「妻」「嫁」ではなく、「母親」の態度を取ることで、男性をスムーズに自分に従わせることが考えられる。つまり男性を自分の配下にある「子供」のように扱って、男性自身がそうした自分の世話を自分でやらせる方向へと、男性の母親のような態度を取って絶えず「しつける」「命令する」のである。あるいは、男性が必要とする世話を、家庭外にアウトソーシングすることが考えられる。食事は、コンビニエンスストアの弁当をあてがうといった対処をするのである。その際は、男性の健康をきちんと気をつけていることを男性に対して示すために、例えば、事前に、コンビニ弁当に栄養士の監修が付いていることが当たり前となるような運動をコンビニエンスストアや外食産業などに対して起こすべきであろう。
（初出1998年08月）

後天的定住集団社会Ａの女性の経済的自立について

後天的定住集団社会Ａにおいて、女性の経済的自立が達成されていないと言われてきた。収入を得るのが専ら男性で、女性は収入を自ら得る機会が閉ざされており、その点女性は差別されている、とされてきた。ということ。
しかし、実際には、必ずしも収入を得ることが、経済的自立につながらないと言えるのではないか？いくら、収入を得る力があっても、その最終的な使い道を自分で決められず、管理者を他において、使い道の決定をその管理者にゆだねているのであれば、彼は、管理者に経済的に従属しており、自立していない、と考えられないであろうか？
後天的定住集団社会Ａの女性は、自分は収入を得なくても、収入供給源となる男性の動作をコントロールする主体として現れることにより、家庭における経済活動の主体であることで、自立を果たしているのではないか？
後天的定住集団社会Ａの女性は、収入供給者たる男性に対するコントロールを、隅々まで行き届かせている、と考えられる。後天的定住集団社会Ａの女性は、収入供給者のメンテナンス（世話）～収入供給者への指示（よく働いてきなさいと命令）を行う管理者（収入

管理者、家庭内管理職）としての役割を果たしているということ。男性は自分が稼いできた収入を管理する権限を持ち合わせていない。給料袋の中身は手を付けずに女性のもとに直行する。そういう意味では、家庭における経済行為の主体は、決定権を持つ女性であり、その主体たる女性こそが、経済的に自立しているといえる。
女性（妻）から小遣いを配給されるということ。（家計上の最終決定権を持たないということ。）男性（夫）は、経済的には女性の従属者であり、自立しているとは言えない。（男性は、女性の配分決定に従うだけである。）
以上の女性と男性との関係は、大工道具と棟梁との関係と同じであるということ。大工道具が、男性に当たるということ。棟梁が、女性に当たるということ。その関係と同じであるということ。経済的主体は、管理者たる棟梁であり、大工道具はその従属物。（自らは経済的に主体性を持てない。）これを男女の関係に当てはめて考えると、経済的主体は、管理者である女性であり、男性はその従属物に過ぎないということ。（主体性がないということ。）そういうことになるということ。ただし、大工道具がないと棟梁は生活の手段を奪われるため、生活できなくなる恐れがあり、その意味で、道具に頼りきることはリスキーである。それと同様に、収入を生み出す打出の小槌である男性がいなくなると、女性は、収入をもたらしてくれる生活の手段がなくなるため、管理者としての手腕がいくらあったとしても、そのままでは自活できなくなる。
収入供給者たる男性が都合で（死別、離婚など）いなくなったときに自活できるようにすることを求めるのが、後天的定住集団社会Ａにおける女性のいわゆる「経済的自立」への動機である。
こうした、女性の「経済的自立」は、あくまで、収入保険としての意味合いが強い。たいていの場合は、男性は定年までは生きつづけるので、収入は確保されることがほとんどであり、女性の収入管理者としての地位は安泰である。家庭に収入を入れる者がいる限り、女性は、収入の使い道を最終的に決定する家計管理者としての地位を確保できるので、自ら収入を得ることの必要ないしプレッシャーは弱い。収入供給者側の世界への進出は進みにくい。これが、後天的定住集団社会Ａで女性のいわゆる社会進出が遅れる一つの理由であると考えられる。
収入供給者（男性）のたまり場たる官庁・企業における生存環境が厳しいのは、家庭における管理者（女性）による収奪が激しいから、と考えられる。（女性による収奪とは、給与を男性から取り上げて自分の配下に置くとともに、よりよい収入高を求めてのプレッシャーを男性に対してかけつづけるということ。）男性は、稼いでこないと、もっと稼いでこいという批判やプレッシャーを女性から

受ける。男性は、生活面で女性に全面的に依存しているので、働くのがいやと断れない。（男性は、一人で生活して行けない。男性は、自分自身の生活の面倒を見ることができない、男性は、女性によって生殺与奪を握られている。）男性は、その結果、全力投球で働かざるを得ない。そのことが、男性の家庭内での不在をもたらし、家庭内の居場所がなくなり、存在感がますます薄くなるという悪循環に陥る。
女性が、男性に比べて、パートタイマーのような補助的な仕事にしか就かないということ。（就けないということ。）それは、家庭における、収入・支出額のコントロールを含めた、総合的な「管理職」の仕事が女性の本分であり、最も重要な主たる任務であり、それをおろそかにしてもらっては困る、という社会の要請があったからである、と考えられる。家庭が、社会全体の「空母」としての役割を果たしていることと関係がある。（あるいは、果たしていたということ。）
現代後天的定住集団社会Ａの女性が、自ら収入を得る立場につこうとするのは、以下の理由に基づく。
(1)男性と一緒でなく、一人で生活する自由を確保したいということ。（ないし、一人で生活することになっても困らないようにしたいということ。）そういう傾向によるということ。従来の、収入管理者としての職務を遂行するには、生活面で、男性との二人三脚が必須であったのを、忌避するということ。（男性と一緒に生活することが必須であったのを忌避するということ。）すなわち、男性がいなくても、収入面で困ることがないようにしたいということ。女性が、そう考えるためである。
後天的定住集団社会Ａの男性は、農耕社会においては、弱者の立場にある。後天的定住集団社会Ａの男性は、女性に対して生活面で依存的であり、食事、入浴など生活上のさまざまな面で、いろいろ女性に世話をしてもらうことを要求するのを当然とする気風がある。そのため、それが、生活面で自立を果たしている女性には、うっとうしく、煩わしく感じられる。そこで、男性と一緒でなくて、一人でいる場合でも、十分な収入を得られるようになる状況を予め確保することで、心理的に男性から自由になること、を望むということ。これは、社会における待遇面での男女平等、すなわち社会的負担の大きさにおける男女格差をなくそう、という考えにもつながっている。（女性の方が、社会的に強い分、負担も大きいということ。それを無くすということ。）
(2)「家庭内管理職」の職務が、電化製品やコンピュータの普及、ないし子育ての保育園や学校への委託、すなわち、家事・育児の「アウトソーシング化」により簡易化され、時間的な余裕が生まれたの

で、その分を、自らの生きがいとなることをしたり、探したりすることに充当したい、という考えによる。収入を得る仕事自体が、自分自身にとって、生きがいを生み出す、積極的な意味合いを持つものとして感じられるから、仕事をしたいということ。（その結果として、収入を得たいということ。）そう考えるということ。
今後、女性の、自ら収入を得たいという傾向は、一層強まると考えられるので、その点、今まで主婦が担ってきた、社会の「母艦」的役割を、公共的な役割を担う機関に「アウトソーシング」（外部委託）することが普通になるようにする体制を整えることが、より必要となる。。（食事、洗濯、育児．．など家族の面倒を見る機能の負担を、外部委託するということ。）
（初出1998年08月）

後天的定住集団社会Ａの女性の「社会」的地位

後天的定住集団社会Ａの女性は、より安全な「内部」＝「家庭」にとどまるのを好み、「外」＝「社会」に進出しようとしなかったため、「外」なる「社会」における地位が低かった。地位が低いと弱く見える。「内部」での地位は、外部観察者からは見えにくいため、たとえ本当は高くても、過小評価されやすい。
注）「社会」という言葉の使い方に、注意を払っておく必要がある。それは、以下のように分かれている、と考えられるということ。
1)農耕「社会」という場合のように、広く全体社会を指す場合（広義）
2)「社会」進出という場合のように、企業・官庁などの職場、つまり家庭の「外」の世界を指す場合（狭義）
2)の場合、「家庭」は「社会」とは言えないことになるということ。（社会には、含まれないということ。）
1)では、家族「社会学」といった言い方が存在することから、「家庭」といった「内部」なる世界も、「社会」に含まれるということ。
「社会的地位」という場合の、「社会」は、2)の「外」の世界を指していると考えられる。
女性の「社会」（あくまで狭義）的地位は低い。あるいは、女性は、自ら高い地位につこうとしない。
その原因は、以下の通りである。
1)男性に、自分を弱く見せて、守ってもらおうとするということ。地位の低い者が、弱く見えることを、逆に利用している。
2)「（狭義の）社会」的地位は、従来、職場＝「外」の世界のもの

である。家庭という「内部」なる世界から出かけて（離れて）、外敵や危険に対して直接我が身を露出させながら、働く場＝職場が、「狭義の社会」＝「外」であったということ。職場は、危険な外回りをしなければならなかったり、寝床がなかったりして、究極的には、安全な「内部」なる家庭に帰ることが前提となる。たとえ働く場が（しっかりした建物の中などで）安全だったとしても、そこにたどり着くまでに、危険な目に会う可能性が、少なくとも過去には、大いにあった。要するに、「外」は危険であり、「内部」は安全である。
なぜ女性が「内部」の世界を指向するかと言えば、生物学的に貴重であるため、外敵からより効果的に身を守る必要があり、安全な「内部」なる世界は、「外」の世界に比べて、その要求を満足させやすいからであるということ。女性の「社会」進出（社会的に高い地位につくこと）が遅れたのは、「社会」が「外」なる世界だったからである。女性の「社会」進出が起きるようになったのは、1)「外」なる世界が、交通・通信の便や治安がよくなって、「内部」並に安全になってきたので、外出しやすくなったから、2)「内部」なる世界（家庭）での作業（家事）が省力化され、時間的余裕が生まれたため、である。
3)高い「（狭義の）社会」的地位につくことに伴って生じる責任や、失敗時の制裁・刑罰の増加などを回避しようとするということ。高い社会的地位につくことで増すところの、危険な目に会いたくないということ。自己の保身のため、男性に責任を押しつけるということ。
4)人間に対する指向が強く、周囲の意向を気にするということ。（性格がウェットであるということ。）そのため、失敗して、恥をかいたり、嘲笑されるのを恐れるということ。高い地位につくほど、失敗時にそうした機会が増えるため。
5)(ウェットな社会のみ）男性を優先して高い地位につけようとするということ。（男尊女卑。）男性は、農耕社会への適応の過程で、女性によってドライな性格部分を殺された結果、無能になって、社会的重要性の低い。そうした男性に、見かけ上高い地位を与えることで、男性に自尊心を起こさせ、より効果的に働かせるということ。（自分から進んで働くようにさせるということ。）ということ。モラールを高め、勇気や意欲を奮い立たせて、筋力・武力などの能力を発揮させるということ。
女性が、高い「狭義の社会的地位」（企業・官庁の管理職ポスト）につくことを、そのまま女性解放の度合いを示す指標とは見るべきではない。女性が、失敗時に全責任を背負わなければならない条件のままで高い社会的地位を目指すことは、上述のように、女性の本

来的な保身性向に反する面が強いからである。
女性が自ら「狭義の社会的に高い地位」につくことを積極的に追求するようにするには、失敗時に取らなくてはいけない責任を小さくすることが求められる。失敗時に、その責任を上下左右の隣接する地位の成員へと分散させること、責任を周囲との連帯責任とすることで、本人の取らなくてはいけない責任を軽くすることが必要である。このように、責任分散がはかられた状態で女性が高い地位を目指すのは、女性の本来的な性向に照らし合わせて自然なことである。その際は、女性が高い地位につくことが、女性解放の度合いを示す指標とし得る。
あるということ。広義の社会における、本当の女性解放の度合いを示す指標は、女性本来の性向を示す、行動面でのウェットさが、その社会で、どれだけ高い価値を与えられているか、認められているか、である。。（例えば、以下の内容について高い価値を与えるということ。集団主義、同調指向、前例指向...)ウェットさの価値が高いほど、認められているほど、その社会における女性の地位は高い。後天的定住集団社会Ａは、これらの価値を高く設定しており、見かけとは裏腹に、女性の「広義の社会での地位」が高い。
後天的定住集団社会Ａの職場（生産する場、賃金を稼ぐ場）が男性中心であって、そこへの女性の進出が進まないのは、女性の高い地位につくことを避ける性向以外にも理由がある。それは、そこが、男性の自尊心を保持できる最後のとりでであるということ。（家族を経済的に支えているのは私をおいて他にいない、との誇りを保てるということ。）男性は、そこに女性が進出してくることを、脅威に感じているからだ。男性側は、女性には、簡単に明け渡したくない。明け渡すと、せっかく保って来た見かけ上の高い地位からも一挙に転落し、最後の自尊心が消えてしまう。後は女性のペースに合わせてひたすら従うだけの社会的落伍者に成り果てるからであるということ。（女性は、見かけ・実質両面で男性を圧倒するということ。）
（初出1999年12月）

「女らしさ」はいけないか？　－後天的定住集団社会Ａにおける女らしさの否定についての考察－

現在の後天的定住集団社会Ａでは、男性が女性に「女らしくあれ」を口にすると、性差別だとかセクシャルハラスメントにつながるとして女性から責められる。しかし、そんなに女性が「女らしい」ことが悪いことなのかどうかと言えば、筆者は大きな疑問を抱かざる

を得ない。
「女らしさ」を悪く言うのは、以下の通りである。
1)人々が取るべき態度についての現在の世界標準が、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会のドライな男性的態度にあり、ドライな男性的態度がより望ましい、好ましいと、人々に映るからである。
2)後天的定住集団社会Ａの女性による、今まで男性の拠点だった職場への進出＝社会進出指向にあると考えられるということ。
従来、「女らしさ」＝家庭の中にとどまって、外に出ないこと(外に出て働く男性に対して、母艦の役割を果たすこと)、と短絡的に捉えられてきたということ。この観点からは、それが女性が新たに進めようとしている職場進出へのじゃまになるとして敬遠されているのであろう。
女性が家族定住集団庭の中にとどまる必要があったのは、家族定住集団の中の方が外で働くより安全であったからというのと、もう一つは、乳児の養育や世話で両親のどちらか片方が家族定住集団に残る必要が出た場合、母乳が出たり、子供が産まれる以前に子宮で子育てをしていたのが女性だということから、女性の方が子供の養育に対して親和的であるということで、女性＝家庭という結びつきが自然とできたと考えられる。
現代後天的定住集団社会Ａでは、以下の理由から、女性が職場進出(社会進出)を図ろうとしているということ。
1)治安がよくなって、家族定住集団の外でも安全になったこと、保育園などの子供養育施設が整備されつつあることから、女性＝家庭の結びつきは弱くなりつつある。女性は、家族定住集団の中に必ずしもいなくてもよくなった。
2)従来、後天的定住集団社会Ａの女性は主婦として、家事と子供の教育を通して、自己実現を図ってきた。しかし学校制度の充実により、子供の教育に手がかからなくなった。また家電製品の普及により、家事に割く時間が大幅に減った。これらの理由のため、何もすることがないアイドリング時間が増える結果となり、自己実現のターゲットを家庭以外に求める必要に迫られた。
※なお、従来、女性の社会進出の理由として、女性自身の、男性の収入に頼らない経済的自立への指向というのが散々言われてきた。しかし、もともと後天的定住集団社会Ａの家庭において、経済(家計)面での管理権限は女性が握っていることから、経済的に依存・従属関係にあるのは、女性に給与をいったん全て取り上げられ、取り上げられた金額の中から改めて小遣いをもらう男性なのではないかと考えられる。すなわち、女性＝経済的支配、男性＝従属の関係が成立していると考えられる。支配している側と従属している側とがどちらが自立しているかと言えば、明らかに支配する側の女性で

あろう。
従って、「女らしさ」＝家庭的という見方に囚われている限り、女性は、「女らしさ」を排撃したくなると考えられる。
筆者は、真の「女らしさ」は、もともと家庭的なことそのものではないと考える。「女らしさ」とは、自分のことを貴重な大切なものとして他者よりも優先して守ろうとする「自己保身」にある。
家庭以外の場所が安全になり、そこでも活躍できることが分かれば、そこに進出しようとするのは女性にとって当然のことである。
今までは家庭においてなすべき仕事＝家事はたくさんあったが、今は家電製品などの導入で省力化が進み、女性たちの活躍の場は狭まっている。家庭は自己実現の場としては物足りなくなったといえる。
ただし、女性が職場進出しても、男性のように高い地位につくことを指向するとは必ずしも言えない。
なぜなら、女性は、自己保身のためには、失敗の責任を取って危ない目に会うことをできるだけ避けようとする「安全第一」「責任回避」主義者だからである。女性は、自分からは受動的に行動することで、能動的に行動した結果生じる行動に対する責任を取らないようにする。また、社会的に高い地位につくことに伴って生じる意思決定上の責任を取ることを嫌って、自分からは責任ある高い地位につくのを避けて、男性にその役をやらせようとする。
後天的定住集団社会Ａの女性が社会的に高い地位についていない現状を見て、女性差別だと唱えるフェミニストは多いが、実際のところ女性は高い地位から男性などの外的圧力によって遠ざけられているために高い地位につけないのではなく、むしろ「高い地位につくことによって生じる社会的責任やリスクを回避するために」「社会的に高い地位につくことを自ら進んで回避している」のである。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会のフェミニストのように、失敗時に大きな責任を取らされ、社会的生命を失うことを前提として、女性を高い地位につかせることを奨励すること自体、保身、安全第一で退嬰的な、女性の本性に反する異常な考え方であるということ。
女性が社会的に高い地位につくことを自然なものとし、女性が社会的に高い地位を積極的に追求させるようにするには、失敗時にその責任を上下左右の隣接する地位のメンバーへと分散させること、責任を周囲との連帯責任とすることで、本人の取らなくてはいけない責任を軽くすることが求められる。
社会的地位が高くない、責任を取る立場にいないからと言って、女性の社会における支配力が小さいとは見なせない。特に後天的定住集団社会Ａなどの農耕社会では、女性は、自らは男性の母親役を取

る。（息子の母親となる、妻として夫の母親代わりとなるということ。）女性は、そのことで、男性を自分に対して心理的に依存させた上で、自分の思うままに操縦して社会的に高い地位を目指させる。（競争させる。）女性は、高い地位についた男性に対して自分の思い通りのことをやらせようとするということ。後天的定住集団社会Ａにおいては、男性は、どんなに高い地位についていたとしても、女性（特に母親）の、かいらい・ロボットと化しており、女性の支配下にあるということ。
こうした女性の性格と後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性とがよく似ていることを 筆者は文献調査で確かめた。後天的定住集団社会Ａはもともと女性的な、というか、女性優位の、男が虐げられている社会＝母権制の社会と言える。
女性が優位の「女らしい」「女々しい」後天的定住集団社会Ａでは、女性は、社会的な責任やリスクは取らず、かつ実質的な支配権は握るという「無責任支配」「無リスク支配」の体制を確立していると考えられる。すなわち、「支配すれども責任取らず」「支配すれどもリスクを取らず」という言葉が、女性による社会支配の特徴を言い表すと考えられる。
そういう点では、女性自身による「女らしさ」の否定は、せっかく自分が社会の中で支配力のある有利な状態にあるのを進んで止めようとすることであり、馬鹿げた自己否定以外の何者でもないという感じがする。
特に問題なのは、女性が、男性を「強い」「頼りになる」とおだてると同時にその裏ではしっかり、男性の生活全般を母親の如く隅々まで支配・コントロールする。（家計管理の権限掌握などはその代表例と考えられる。）「アメとムチ」の使い分けを行っている点であるということ。
男性が家庭に帰らないで、職場に長くい続けるのも、家庭が女性の支配する場であり、自分とは異質の雰囲気になっているのが不愉快だからと言える。
家庭における女性（母親）支配が男性を家庭から遠ざけて職場に固定化し、それが家庭の外に出て職場進出しようとする女性の行く手を阻むという、女性にとっては複雑な仕組みになっている。
その点、女性がスムーズに職場進出するには、家庭における自分の主導権を放棄して男性と対等化すること、家庭において男性の居場所を確保することを容認することが求められる、と言える。
なお、後天的定住集団社会Ａにおける職場の雰囲気自体は、集団主義、プライバシーの欠如、対人関係面での調和や前例・しきたり偏重といった女性向きのものとなっており、本来は男性よりも女性の方が、能力を発揮しやすい環境にある。

確かに職場に数の面でたくさんいるのは男性だが、彼らは母親や妻によって、男性本来の個人主義、自由主義、独創性の発揮といった行動様式を骨抜きにされ、すっかり女性化した「母親臭い」存在と化している。そういう点で、男性のたくさんいる後天的定住集団社会Ａの職場は、もともと女性とは相性がいいのである。
（初出2001年11月）

「専業主婦」＝「役人」論

後天的定住集団社会Ａの主婦、特に専業主婦は、役人と性質が似ていると考えられる。
この場合、役人とは、中央省庁、地方自治体の職員、すなわち国家、地方公務員を指す。
後天的定住集団社会Ａの役人と専業主婦との共通点は何か？2つあると考えられる。
(1)自分ではプラスの入金をしなくても、自動的に自分の使えるお金が自分の手の中に入ってくる点である。
(2)その入ってきたお金をどう使うかというのを決める権限をがっちり握っている点であるということ。
(1)に関して言うと、専業主婦の場合、自分では何も生活に必要なプラスの入金をもたらさなくても、夫の給与の振込先銀行口座に、毎月自動的に、自分が自由に使えるお金が、夫の労働によって、入ってくる。
役人の場合、自分ではプラスの入金を何ももたらさなくても、予算を組むのに必要なお金が、毎年、民間企業や労働者から、自分たちの自由に使える税金の形で、何もしなくても、自動的に上がってくる。
後天的定住集団社会Ａの専業主婦や役人は、「僕稼ぐ人、私使う人」と言う表現をするとすれば、「使う人」を地で行っていると言える。
本来、自分の属する組織（これは、家庭でも、企業定住集団でも何でもそうだが。）にプラスの入金をするためには、何かしら、余所から利益を上げないと、儲けないといけない。それに必要な、才覚、知恵、忍耐力が求められる。
企業定住集団だったら、顧客、取引先、上司、同僚から、絶えず文句を言われ、辛い、しんどい大変な思いをして仕事をすることで、やっとそれと交換にお金が入ってくる。楽して利益が上がることはほとんどなく、仕事の中身についても選択の余地がないことがしばしばである。

ところが、専業主婦や役人は、自分ではこの辺の苦労を何もしないで（夫や民間企業の労働者にやらせて）、プラスの入金を自分の手元にいとも易々と手に入れているのであるということ。
官民格差の本質は、給与水準の差がどうのこうの言う以前に、この辺にあるのではないだろうか。要は、自分の手でプラスの入金を確保しなければならず、しかもそのうちのいくらかを自動的に巻き上げられてしまう立場の民間労働者と、自分の手ではプラスの入金を確保するために働く必要がなく、民間労働者から入金を巻き上げれば済む気楽な立場の役人との差が官民格差の本質である。
こうした格差は、給与稼ぎをする夫とその専業主婦との間にも当てはまる関係であると言える。一生懸命働いてプラスの入金をしなければならない役回りの夫と、何もしなくても自分の使うお金が自動的に銀行口座に入ってくる専業主婦との間には、官民同様の大きな格差があり、これは立派な男女差別である（女である専業主婦が上で、労働者の夫が下。）ということ。
要は、自ら苦労せずに、必要なお金を他から巻き上げる搾取者、寄生者としての体質が、専業主婦にも、役人にもあるのである。
次に(2)についてであるが、後天的定住集団社会Ａでは、家庭の家計管理の権限を主婦が独占しているという状況がある。夫の銀行口座から入金されたお金を何に使うか、最終的に決定して、お金を配分するのが、主婦である。家庭のお金を配分する権限を主婦である女性が握っている。夫は、少額の小遣いを、主婦から頭を下げて出してもらわないといけない。
この実態を示すのが、百貨店売り場での女性向け売り場がやたらと大きく広く、男性向け売り場が貧弱なことである。例えば、JR京都駅の駅ビルの百貨店の売り場案内パンフレットとか見れば、この辺の事情は一目瞭然である。家庭のお金の割り振りの権限を女性、主婦が握っているからこそ、女性向けの売り場が立派なのである。
税金についても同じことが言える。税金の使い道を決めるのは、建前上は国民主権となっているが、実際には、役人が自分たちのために決めている。彼らは、縦割りの行政組織の中で、自分たちの部署の取り分、ひいては自分自身の取り分が最高になるように、予算折衝を繰り返しているのである。
この点でも、専業主婦と役人は似ていると言える。
専業主婦は、家事が大変だとか表面上言われながらも、その実態は、「三食昼寝付き」の気楽な稼業であることは確かである。個人的意見としては、今後、専業主婦には、家庭への入金のための労働を夫ばかりに押しつけるのではなく、子供の育児が終わって暇になったら、入金の主要な役回りを、夫としっかりワークシェアリングしてもらいたいと思う。また、家計管理の権限を夫と分け合うこ

ともしてほしいと思う。それが、後天的定住集団社会Ａの家庭で真の男女平等が実現するきっかけになればと思っている。
上記のお金関係以外に、役人と専業主婦とは、もう一つ似ている側面がある。支配者、権力者としての性格であるということ。
役人は、戦前から「お上」「官公庁や役所」として、民間の人々を支配する、言わば「国家の所有者一家の直参、直属機関」としての権力者の性格を持ち続けている。「官尊民卑」という言葉がこの辺の実態を表す言葉である。官庁や地方自治体は、許認可や法律規制の権限を盾に、民間企業や国民を意のままに支配している。戦後は、国家の所有者一家の上に先進的移動生活中心社会Ｇが来たので、それに迎合して、「民主的になりました」という顔を一見しているだけである。
専業主婦も、子供としての息子や娘を「自分の自己実現の駒」として支配、コントロールする「母」（夫を子供扱いする妻もこの同類である。）、嫁や婿を支配する「姑」として、子供を通じて社会を間接的に支配する、社会の最終支配者、権力者としての顔を持っているということ。
多分、後天的定住集団社会Ａで現在一番強い立場にあるのは、役人（公務員）の専業主婦（例えば高級官僚を夫に持つ専業主婦）ではないだろうか？
（初出2005年10月）

少子高齢化対策と後天的定住集団社会Ａの女性、専業主婦

現在の後天的定住集団社会Ａでは、お金を、夫婦共働きで稼がないと生活して行けない。
どちらか一人では、給料が高い要件、雇用が無い。

今まで、後天的定住集団社会Ａの真の支配者は、女性、それも家族定住集団の財布と子供をがっちり握り、経済的に恵まれ優遇された環境にあった専業主婦であった。ウェットで母性優位な社会の雰囲気、国民性がその表れである。

今までの後天的定住集団社会Ａの女性の価値観が「専業主婦は勝ち組で、働く女は負け組、惨め、恥ずかしい」だったのを、「働かない女、稼がない女は負け組、専業主婦だと恥ずかしい。働く女、稼ぐ女は勝ち組織」に変える必要がある。

しかし、母の仕事と、母子一体感の維持の両立が難しい。母子一体感を重視すると、女性は働きに出られない。母子一体感の保持により、我が子を精神的に支配し、自分の子供を通じて、社会に強い影響力を及ぼし、社会を支配するのが、後天的定住集団社会Ａの女性による社会支配のやり方の常套手段であり、それを奪われるのは、女性は嫌がる。上記と対立するということ。

また、母親が育児のため、企業定住集団を一旦辞めると、非正規雇用化してしまい、正規に採用してもらいにくくなる。パート採用になってしまうということ。

白紙採用へのこだわりを捨てることと、白紙から自分の職場の色に新人を徐々に染めることによってもたらされる職場一体感の維持とが対立する。

後天的定住集団社会Ａの職場は、生え抜き重視、偏重からの脱却が必要である。一旦辞める、抜けると駄目という感じだと、母親が育児休業出来なくなってしまう。

相互の一体感を重んじる文化、ウェットな母性的文化を維持したまま、「働く女、稼ぐ女＝勝ち組織」にするのが、実は難しい。

また、なぜ男性ばかり働くのかということ。それは、後天的定住集団社会Ａで、家庭が母子、妻子の占有物であり、家庭内に父、夫の居場所が無く、職場にしか父、夫の居場所が無いからである。

夫、父は、職場に逃げて企業定住集団人間になるが、お金を稼ぐだけしか出来ない。ATMになることしか出来ないということ。お金を使う主体は財布を握る妻と子供になってしまう。夫は、自分の稼ぎから疎外されている。

後天的定住集団社会Ａの夫は、自分の妻、女性が働きに出ると、自

分の稼ぐ能力が足りない、能力不足と感じ、自分がみっともない、恥ずかしい、自分のATMとしての存在意義が失われると感じる。その結果、父、夫が、妻が働きに出るのを妨害する。

もう一つ、後天的定住集団社会Ａの通貨高、円高が、非婚、晩婚、少子化の原因になっている。

通貨高、円高のそのままでは賃金が高くなる。
国際競争力が減って、企業が国内で従業員を雇いにくくなる。
企業が海外移転をして、国内雇用が減る。
国内で、低賃金の非正規雇用企業定住集団のメンバーが増える。
安定した、高い収入が得られなくなる。
経済的安定を必要とする結婚がしにくくなる。
結婚しないので、子供が生まれない。

既存の後天的定住集団社会Ａの国の改革は、以下の通りである。
・家族、ファミリーを重視しよう、見直そうと言うが、実際には、男性が女性を養えないので、そもそも結婚できない、子供が出来ない。
・子育てを支援しようと言って、経済的に育児手当を出したり、機会的に託児所待機児童の数を減らそうとしたり、子育てをする夫をイクメンと言って推奨したりするが、大元の子供がそもそも生まれない。
・女性の社会参加を促そう、働く女性を支援しよう、女性管理職を増大させる政策を取ろうとしているが、そもそも現行の後天的定住集団社会Ａの価値観では、働く女は、働かなくて良い女よりも、地位、ステータスが下位である。
・結婚を促進しようとして、自治体が婚活支援とかしているが、夫が妻を養えないため、結婚できない。

国の政策は、全て空回りして、上手く機能していない。
・専業主婦、働かない女が、働く女よりも地位、ステータスが上だと考えられ、女が働かなくて済むのが良いことだとする社会モデルが続いてしまっているため。
・男が女を養う、夫が妻を養うのが有能な男、夫の印、証だと考えられ、男性、夫が家庭に居場所を作れない状態が放置され、妻子のATMと化すことが男性、夫の唯一の存在意義だと考えられてしまっ

ているため。
であるということ。これを何とか変えないと、今のままジリ貧になってしまうということ。

黒船来航とか先進的移動生活中心社会Ｇ占領とか、外から強制力が働かないと自分からは変われないのが、後天的定住集団社会Ａであり、女性。（と女性化している後天的定住集団社会Ａの男性）であるということ。

後天的定住集団社会Ａの伝統的農村、地域定住集団社会ではどうだったか。
働きに出なくて良い、働かなくて良い、企業定住集団勤めなどの出稼ぎをしなくて良い、自給自足なのがベストであり、これが専業主婦至上主義の原型になっている。

大地主が理想像であり、働きは下男、下女、小作人、奉公人にやらせて、自分からは働かないのが良いという考え方が、伝統的に蔓延している。

ムラの中に、女性的雰囲気が蔓延しており、社会的に男の居場所が無い。
みんな一緒に行動しないと行けないということ。単独行動を許さないということ。周囲への気配り、一体感が重視される、女性的雰囲気に合わせないと行けない。
男性は、無理して母性化しないと、ムラの中にいられない。ドライな男性的な生き方が許されない。稼ぎ手、ATMとしてしか生きられないということ。

母子が強力に癒着して、男性、夫が割って入れない。母による子供の独占支配が行われ、それが、女性による、子供を通した後天的定住集団社会Ａ全体の支配につながっている。
父の子育てからの疎外が生じ、父は精神的にすさんで暴君になるしかない。暴れてDVをする状況が、男性による社会支配と勘違いされている。

社会関係がウチウチ、内々で自己完結している。外部からの成員加入が、嫁入りなどの白紙採用しか手段が用意されていない。中途加入が難しい。いったん別の企業定住集団を辞めてパートで働く女性

が途中から別の企業定住集団の正規メンバー（定住民）になれない。
先祖代々同じところに住み、ずっと動かずに住んでいること、生え抜きを重視するということ。いったん抜けると根無し草扱いされ、まともに人間扱いされないということ。企業定住集団を辞めると、根無し草のフリーター扱いされ、非正規的な非人間的な扱いに甘んじなければならないということ。無論、そのままでは生活が無理な低賃金生活になってしまう。

子供が増えない、少子高齢化から抜け出せない社会の原型は、みな伝統的な後天的定住集団社会Ａのムラに元からある。ムラが原型なので変われない。ムラ茹でガエル状態になっているということ。

変わるには、少子高齢化を解決するには、以下の通りである。
・専業主婦の解体と、稼ぐ女のステータス向上が必要である。働かない、稼がない、稼げない女は恥ずかしい存在だ、社会の恥だとするキャンペーンを後天的定住集団社会Ａ全体で行うことが必要である。先進的移動生活中心社会Ｇやヨーロッパに言ってもらうことも必要である。
・夫、男の家庭内、社会内での居場所を確保することが必要である。夫、男のATM専用状態からの脱却が必要である。夫、男がATM以外の存在意義を見つける旅に出ることが必要である。社会において、個人の自由独立が可能なドライな領域を、社会や家庭の中に確保することが必要である。それは、ドライで遊牧的な父性を自らの内部に新発見することであり、伝統的なムラ的な農耕民的価値観からの脱却である。これを社会全体でキャンペーンを打つことが必要である。
・相互一体感、新規成員の白紙採用、加入、生え抜き重視を断念することであるということ。

こうしたことを実現するには、家庭内の居場所を男性に譲る、自ら働きに出る、といった感じで、女性の大幅な社会的譲歩が必要である。
女、母による既得権益の返上が必要であるということ。それは、母性的な大政奉還に例えられるということ。

現状維持のまま、少子高齢化を防ぐ方法もある。
根本的な通貨安、円安が到来するのを待つことである。それは、後

天的定住集団社会Ａの国家の財政破綻を早期に実現することである。後天的定住集団社会Ａの国家債の日銀引受や円札の刷りまくりを行うことであるということ。
そうすることで、いったん経済的に貧しくなるが、国際競争力が回復し、昭和時代の高度経済成長をもう一度実現でき、伝統的後天的定住集団社会Ａのままでいられる。

後天的定住集団社会Ａで豊富な水資源を海外に売る、ことも考えられる。

（初出 2014年6月）

家計管理の月番化について

家計管理を月番制にしたらどうか？
現状では、後天的定住集団社会Ａの家庭においては、家計管理の権限は、妻や母が独占している。夫は、自分で稼いできた給与を、彼女らに取り上げられ、別途頭を下げて、小遣いを貰わないといけない。
一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにおいては、これと逆の状況となっており、家計管理の権限は、夫が独占している。妻は、家事に必要な小遣いをその都度夫から貰っている。
後天的定住集団社会Ａの事例も、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの事例も、両方とも、家庭内における男女差別であり、解消の必要があると考えられる。
要は、家計管理の権限を、男女平等に受け持つようにすべきではないかということである。
その一つの方法として、家計管理の仕事を、月番で、毎月、夫と妻の間で代わりばんこに交替してやるようにすればよいのではないかというのがある。
要は、奇数月は妻が管理し、偶数月は夫が管理するというようにすればいいのではないか。
これによって、男女の片方が家計管理を独占することがなくなり、男女平等が促進されると言えよう。
また、一人が家計管理を独占することがなくなり、もう一方の他人のチェックが絶えず入るようになることから、いい加減な家計管理をすることが難しくなり、家計管理の透明性が高まると言える。
問題があると言えば、夫妻どちらかが浪費家族定住集団で、お金を

みんな無駄遣いしてしまう場合である。その場合は、しっかりと管理できる片方にずっと任せざるを得ない。要は、一方が能力的に欠けている場合は、男女どちらかにこだわらず、家計管理能力のある方に任せればよいということになる。
（初出2006年01月）

男女の望ましいパワーバランスは50対50。

男女のパワーバランスは、50対50で、男女対等なのが望ましい。現代の後天的定住集団社会Ａのように、女性、母性にパワーが偏っている社会は、男女平等の観点から言って望ましくない。逆に言えば、男性、父性にパワーが偏っている先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会も、男女平等という点では望ましくない。

男女のパワーバランスを50:50にすることを実現するためにも、例えば、男女で役割を固定するのでなく、交代制で行くのが望ましい。 すなわち、責任を取るにしても、家計管理にしても、育児にしても、稼ぎにしても、男女交代制を取って、できるだけ偏りが無いのが良い。例えば、家計管理において、妻に任せっぱなしにするのでなく、夫婦で月番制を実現するとかが考えられる。あるいは、共働き子育ての夫婦で、主に仕事に出る側と、主に育児を担当する側を、週交代で担当するとかが考えられる。
あるいは、社会のメジャーな雰囲気が、母性的、父性的のどちらか一方に偏り過ぎないために、母性的雰囲気を醸し出す産業群と、父性的雰囲気を醸し出す産業群を、社会においてバランス良く配置することが求められる。ウェットで母性的雰囲気を社会に与える産業としては、農業分野では、稲作農耕が代表的であり、ドライで父性的雰囲気を社会に与える産業としては、遊牧牧畜であると考えられる。今後は、農業以外の、工業、商業等の分野においても、どういう仕事が、社会にウェットで母性的な雰囲気を与え、どういう仕事が、社会にドライで父性的な雰囲気を与えるかを分析する必要がある。あたかも管理栄養士が、栄養バランスの取れた食事献立を考えるように、母性、父性のバランスの取れた産業構成を考えるコーディネーターが社会において求められると言える。
（初出 2011年8月）

女性が暴走するとストップが効かない後天的定住集団社会Ａ。

後天的定住集団社会Ａは、女性が「こうだ」と主張すると、その通りにいくらでも通ってしまい、歯止めが効かなくなる社会である。いい例が、後天的定住集団社会Ａのフェミニズムであり、本来女性、母性が強いはずの後天的定住集団社会Ａにおいて、女性が「自分たちは弱いんだ、差別されているんだ」と叫ぶと、「後天的定住集団社会Ａは女性が弱い、差別された、女性解放の必要な社会だ」ということに社会全体が洗脳されたかのように、その意見を諾々として受け入れるようになってしまう。ファッションに限らず、社会のトレンドを決定しているのが女性なのである。
企業定住集団とかでも、大和撫子よろしく控えめな感じの女性企業定住集団のメンバーだと害はあまりないのだけれど、押しの強い、キャアキャア自分の主張をどこまでもわめき散らすタイプ、女帝タイプの女性企業定住集団のメンバーが出てきたり、古株で一番威張っていて誰もが彼女の言うことに従わざるを得ないお局タイプの女性企業定住集団のメンバーが出てくると、彼女たちの暴走を止められる存在がいなくなってしまうのである。今はまだ男性企業定住集団のメンバーを表に立てて自分は背後にまわるタイプの控えめな女性企業定住集団のメンバーが多いので問題は顕在化しにくいのであるが。
後天的定住集団社会Ａでは、社会や集団に、女帝、グレートマザー、お局タイプの女性支配者が出現すると、女性に対して甘えや依存心を強く持っている後天的定住集団社会Ａの男性は彼女たちに太刀打ちできない。今のところは、女性が自分から支配しようとせずに、男性を表面的な支配者として立てているために、男性は自分が一番強いと思わされているだけだ。「男社会」は、見かけ倒しであることに気づく必要がある。後天的定住集団社会Ａの男性は、本来自分たち女性が一番強い社会の最終意思決定者であるにも関わらず、そのことをおくびにも出さず、黙って男性を立てて、「後天的定住集団社会Ａは男社会です」と言ってくれる後天的定住集団社会Ａの女性たちに感謝すべきだろう、というか、その隠れた強大さに恐怖すべきだ。
（初出2008年04月）

「女性的＝後天的定住集団社会Ａに特有」の相関主張に対する反応

筆者は、「女性的＝ウェット＝後天的定住集団社会Ａに特有」という行動様式や性格面での相関を、インターネット上でのアンケート調査等に基づき主張している。

これについての反応は、以下の2通りが考えられる。
(1)何ら驚くべきことではない、当たり前である。
既に、豊富な前例がある。石田英一郎の「農耕-遊牧」社会論や、河合隼雄の「母性」社会論などということ。
(2)とても驚くべきことである、信じられない、間違っているのでは？
フェミニストによる後天的定住集団社会Ａ「男社会」論が大手を振ってまかり通っている現状からは。女性が、後天的定住集団社会Ａを支配しているという結論を導き出すものだから。
従来は、上記の2つの見方が、互いに何ら交流を持たず、別々にバラバラに唱えられて来た。そうなった根底には、後天的定住集団社会Ａにおける、「女性と母性」との対立が、要因として存在する。
「女としては弱いが、母としては強い。」これは、女性の弱さを強調したがるフェミニストの逃げ口上として、使われる文句である。
しかし、これはおかしい。母性は、女性性の一部であるはずであり、分けたり、対立させて捉えるのは変である。
母は、女性ではないのか？常識から考えて、そんなはずはない。
このことは、家庭内での立場に、結婚して子供ができるまでと、子供ができてからとで、大きな格差が存在することを示している。女性の立場は、前者は弱く、後者は強いということだろうか。
大学研究者、特に若い大学院生や、結婚していない、子供のいない大学教授などは、前者の結婚していないか、結婚していても子供のいない女の立場を取るであろう。自分たちの境遇にとって、前者（女性は弱い。）のウケがいいから、女性が強い後天的定住集団社会Ａには適用不可能なはずのフェミニズムが、学説でまかり通る。
このように、後天的定住集団社会Ａの女性の地位を考える上で、弱い方の嫁ばかりに焦点を当て、強い方（姑の立場）に焦点を当てないのは、不公平であり、間違っていないか？
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムでは、女性≠母性、ないし女性と母性を対立するものとみなす。姑と嫁との家庭内での対立が、この捉え方の源となっている。
そうした、女性と母性の対立は、世代間での対立(20～30代の嫁世代と、50～60代の姑世代との。）とも言える。
(1)の後天的定住集団社会Ａに特有＝女性的の結びつきを当たり前とする見方は、母性の立場に立ったものであり、一方、(2)の、両者の結びつきに意図的に気づこうとしない見方は、若い女性の立場に立ったものと見ることができる。
姑は、家族の後継者としての子供を産むと共に、家風を一通りマスターし、家風を伝える正統者として、家庭内で揺るぎない地位を築き、強い立場に立つ。

一方、嫁は、子供がまだ生まれないし（生まれるかどうかも分からない。）、家風にも習熟していないので、家庭内での地位は不安定である。赤の他人である、姑の言うことに、一方的に従わねばならず、ストレス・反発心がたまる。
この立場の差が、女性同士での世代間支配・抑圧をもたらす。ひいては、相互間の反発・対立を招くということ。これが、後天的定住集団社会Ａのフェミニストに、女性性（嫁の立場）と母性（姑の立場）とを、統合して捉えることを止めさせる原因となっているということ。
包含関係としては、母性は、女性性の中に含まれる。女性性は、本来姑も持っている性質である（女なのだから当たり前）ということ。しかるに、後天的定住集団社会Ａフェミニストは、女性性を持つ者を、嫁の立場の者に限定して捉えようとしていないだろうか？これは、後天的定住集団社会Ａにおける女性の地位を正しく測定する上で、見逃せない、偏向である。嫁の立場は弱いので、フェミニズム理論に当てはまる。しかし、姑は、強いので当てはまらない。だからといって、姑をあたかも「女性でない」ようにみなして、検討の対象から外すのは、普遍的な女性解放をうたう、本来のフェミニズムの精神からして問題あるのではないか？この辺りに、女性を弱者としてしか捉えられず、理論の対象にできない、現在の後天的定住集団社会Ａフェミニズムの限界があるように思われる。
無論、中には、家族制度が廃止されて、嫁の発言権がより強まった、姑がより弱くなった、から、現代の後天的定住集団社会Ａフェミニズムは、姑も理論の対象に加えているのだと反論する向きもあろう。
しかし、フェミニズムは、本来、男性支配からの女性解放を提唱するのであって、同じ女性同士の支配からの解放＝姑からの嫁の解放を、フェミニズムで取り扱うのは、おかしいのである。
フェミニズムが成り立つのは、女性が、男性に支配されている場合だけである。後天的定住集団社会Ａでは、男性は、夫婦関係のみを取り出してみれば、家風の習得度において、妻＝嫁を上回っており、優位な立場に立っている、と言えるかも知れない。しかし、後天的定住集団社会Ａの男性は、姑とは、「母こと。→息子」の関係で、心理面では、姑によって、自分の子供として、一方的に支配・制御される立場にある。解放されるべきなのは、強い姑＝母ではなく、支配下にある息子の男性の方なのではないか？こうなると、後天的定住集団社会Ａでは、女性のみの解放を進めようとするフェミニズムは、成り立ちがたくなる。また、嫁が、家風をすっかりマスターし、姑から家計を切り盛りする権限を譲ってもらった時点で、家庭内の勢力としては、夫＝男性を抜きさって、より上位に立つと

いうことも十分考えられることである。
姑と嫁は、さらに、男性（夫であると同時に、息子であるということ。）を自分の味方につけて、対立において、自分が有利に事を進めようとして、男性の取り合いを引き起こす。
姑は、嫁に自分の言うことを聞かせたいと考えて、息子に対して、嫁にこう言えと指図する。（親子関係の利用）ということ。嫁は、姑の支配からの防波堤として、夫を利用しようとするということ。（夫婦関係の利用。）
親子関係（母こと。→息子） と、夫婦関係（夫＝妻）の力比べは、最初は、血縁に裏打ちされた親子関係（母こと。→息子）が強いと考えられるが、姑側の老齢化により、段々拮抗してくると考えられる。
親子関係は、垂直な支配-従属関係なのに対して、夫婦関係は、本来対等であるはずである。しかし、後天的定住集団社会Ａでは、家風学習のレベルの違いと、姑の介入により、夫が有利となる。従って、夫は妻を支配する、家父長だという説が生じる。しかし、ここで注意すべきことは、夫は、自力で有利さを勝ち取ったのではないことである。家風学習レベルの（妻との）差も、姑の存在も、予め外から与えられた条件である。また、妻には、家風先達者として、偉そうなことを言えても、母たる姑には、口答えできないのであれば、女性（母親）に支配された男性（息子）ということになり、家父長制とは言えない。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、この水平面の夫婦関係のみに焦点を当て、親子関係による垂直支配（女性による男性支配、母＝姑による息子＝夫支配）に目が向いていない。
舅は何をしているのか？影が薄い。舅は家父長と言えるか？姑と嫁との間の対立を抑えられない以上、家父長失格なのではあるまいか。
後天的定住集団社会Ａの女性学、フェミニズム、ジェンダー社会論は、「嫁」の立場にたった学問である。
「姑」の立場に立った学問は、作れないものか？それは、権力者としての後天的定住集団社会Ａの主婦を、特に姑の視点から解明するものである。
後天的定住集団社会Ａの女性は、妻・母の両方の立場を兼ねると、矛盾が生じる。
母の立場としては、息子が自分の言うことを聞いて欲しい。
妻の立場としては、夫が自分の言うことを聞いて欲しい。妻として、夫に自分に同調して欲しいと思うということ。（嫁の立場。）
子供が産まれると、母として、息子に、自分に同調して欲しいと思うということ。（姑の立場。次の世代にとって。）

すなわち、嫁の立場と姑の立場を、同一人物が兼ねているということ。（それらが、同一人物の中で共存しているということ。）
嫁姑の対立では、嫁も姑も、夫＝息子を自分の味方に付けようとする。
立場の矛盾を男性に押しつけるということ。
男性は、どっちつかずの立場に立たされて困る。
母性による支配からの解放を！という主張への賛同者は、以下の通りである。
1)男性
2)女性 結婚していない、子供がいない。
となる、と考えられるということ。
この点、後天的定住集団社会Ａでは、女性と母性とが切り離されて捉えられている。（母性は、以下の内容である。結婚したということ。子供を産んだということ。）
後天的定住集団社会Ａの女性にとって、家父長制からの脱却は、名目のみである。姑支配からの脱却が、本当の目的である。
核家族化（親と同居しない、独居老人の増加）も、姑支配からの脱却と関連がある。
それぞれの核家族が、ウェットなまま、自閉、孤立するのも、嫁姑関係の暗さを払拭しようとする努力の現れと見てよい。
後天的定住集団社会Ａの子供は、母親のしつけにより、コントロールされ、父親の影が薄い。
父親－息子のラインはあまり強くない。
後天的定住集団社会Ａの男性は、「若くしては母に従え。老いては妻に従え。」というように、一生を、女性の支配下で暮らしているということ。
女性は、「老いては子に従え」のはずが、実態は、逆に子供（特に息子）を支配しているということ。
家庭内の実権は、祖母にあって、祖父にはないのでないか？
父ないし夫が優位に立てるのは、姓替わりをしなくて済む、家系の跡継ぎ＝本流でいることを保証されている、財産所有権限を持つ点にある。
母ないし妻が優位に立てるのは、財産管理権の把握、子供に自分の言うことを聞かせる育児権限の把握にある。
家庭における支配には、世代間支配と、世代内支配とがある。世代間支配とは、母親が息子に、自分の言うことを強制的に聞かせることであり、世代内支配とは、夫が妻に自分の行動様式を強制することである。
後天的定住集団社会Ａでは、夫が妻に、自分が正統の家風継承者・先達者として、妻に教える立場から、妻を支配して来た。これが、

後天的定住集団社会Ａにおける男性による女性支配の典型とされてきた。これは、世代内支配に当たる。ところが、家族定住集団の中で、夫は母親の息子という立場にあり、母親＝姑によって、夫＝息子は、絶えずコントロールされ、言うことを聞かねばならない。これが、世代間支配である。これは、女性＝母親による、男性＝息子の支配であると言える。一方、母親＝姑は、夫の妻＝嫁にも同時に、自分の行動様式を押しつけ、支配している。姑＝母親こそが、息子と嫁の両方を支配する、世代間支配の主役であり、影の薄い舅に代わって、家族の中の支配の頂点に立っているのである。図式化すると、母（姑）こと。→息子（夫）・嫁（妻）の支配が、世代を超えて繰り返し量産されている。父（舅）は、子育てに介入しないので、父こと。→息子ラインは、母こと。→息子ラインに比べて、あまり強くない、目立たないのが現実である。
しかるに、従来のフェミニズムでは、母‐息子の世代間支配の存在を無視し、姑による支配を、夫による支配と混同している。あるいは、姑（家庭内強者）の立場に立った理論構築を放棄し、いつも嫁＝家庭内弱者の立場に立とうとするということ。
姑こと。→嫁、姑こと。→息子（夫）という、2つの支配のラインについてその存在を無視しているということ。
（初出2000年07月）

夫婦別姓と女性

夫婦別姓に賛成する人、夫婦別姓で得をする人は、自分の姓を捨てて、相手の姓に入る人、すなわち嫁か婿である。
夫婦別姓に反対する人、夫婦別姓で損をする人は、自分の姓を変えずに済んでいた人、すなわち、姑とその息子である。
姓を変えて自分のところに入って来る新入りに比べて、古株として優位に立てるからであるということ。
同じ女性でも、姑、小姑の立場と嫁の立場とで、賛成、反対が異なる。姑、小姑の立場では、夫婦別姓に反対であり、嫁の立場では賛成である。
女性が全て夫婦別姓に賛成という訳では無いことに留意する必要がある。
（初出 2011年3月）

姓替わりと夫婦別姓

現代の後天的定住集団社会Ａの女性がいやがることは、以下の通り

である。
(1)姑との同居 対応策として、次男との結婚を好むということ。
(2)姓替わり 対応策として、夫婦別姓を好むということ。
であるということ。原因は、夫の家風を強制されるのが嫌なことである。強制するのは、同性である姑である。
後天的定住集団社会Ａの家庭では、男性が保護されている。
(1)男尊女卑 男性が優先して、いろいろな身の回りの世話をしてもらえる。
(2)姓替わりしなくて済む 家風習得の苦労をしなくてよいということ。新しく入った家族先で、ストレスがたまったり、既に構成員となっている人たちからいばられたりする体験をしなくて済む。
こうした点は、後天的定住集団社会Ａの女性が弱く見える理由ともなる。
姓替わりする方（嫁、入り婿）は、「イエ」の、ないし家風の新参者として、弱い立場に立つ。
強い立場に立つのは、元からその姓を名乗っている、姑＋息子（夫）ないし娘（小姑）であるということ。
嫁の弱さは、そのまま女性の弱さと見なされがちだが、嫁にとって敵役の姑は、女性である。
夫婦別姓は姓替わりによる、古参者と新参者との間に勢力面での差別が生じるのを是正しようとするものである。
それは、以下の問題を解決する。
(1)男女（夫婦）間の問題 男＝夫が、家風の先達者として、妻に対して、威張ったりなど振る舞えなくする。
(2)女同士の問題 姑-嫁間の主導権争いを回避するということ。姑が嫁を、同姓だからということで支配できなくする。
夫婦別姓でメリットがあるのは、夫婦同姓で弱い立場に置かれている嫁だけで、姑や夫にはメリットがあまり感じられないのが、夫婦別姓が後天的定住集団社会Ａにおいていまいち賛同者が広がらない原因となっているのではないか。同じ女性でも、嫁にはメリットがあるが、姑にはないのである。
（初出2000年07月）

女社会、男社会と女流、男流

同じ男社会と言っても、後天的定住集団社会Ａと先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとでは、性質が違うと考えられる。
後天的定住集団社会Ａの男性は、母性の影響が強いため、女流の男社会になっていると言える。

一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの男性は、父性の影響が強いため、男流の男社会になっていると言える。
同じ女社会と言っても、後天的定住集団社会Ａと先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとでは、性質が違うと考えられる。
後天的定住集団社会Ａの女性は、母性の影響が強いため、女流の女社会になっていると言える。
一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの女性は、父性の影響が強いため、男流の女社会になっていると言える。
男社会、女社会、いずれにおいても、男流、女流の区別が必要である。
女流の女社会、男流の男社会が一番優れているのであり、女流の女社会を形成している後天的定住集団社会Ａの女性は、一番優れている。
一方、女流の男社会しか形成できない後天的定住集団社会Ａの男性は劣っている。
（初出 2010年7月）

根本的に先進性が欠如する後天的定住集団社会Ａ、女社会。

後天的定住集団社会Ａや、その基盤をなす女社会では、リスクを冒すことを根本的に嫌うため、新しい知見に到達することが、リスクを冒すことを好む先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会に比べて、どうしても遅くなってしまう。その点、根本的に先進性が欠如していると言える。

そこで、後天的定住集団社会Ａは、その欠陥に対処するため、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会が先んじて手に入れた新しい知見を猛スピードで取り入れる、コピーすることで先進性を獲得し、それに小改良を加える事で「後天的定住集団社会Ａの技術は、世界最先端！」と売り込むのである。

（初出 2015年2月）

後天的定住集団社会Ａで一番楽をしている存在は？
後天的定住集団社会Ａで、一番社会の中で楽をして、優雅に暮らしているのは誰か？
それは、専業主婦である。
彼らは、嫌な思いをして、自ら稼がなくてよい。稼ぎは夫から入っ

てきて、そのお金の財布を、彼女自身でがっちり握って、財産管理の権限を握って、好き放題に買い物をするのである。それゆえ、デパートとか、婦人物の売り場ばかりになっているということ。
また、教育ママゴンとして、子供を完全に自分の所有物と化して、受験競争にまい進させる、子供の教育権限の私物化に成功しているということ。
毎日、通勤地獄を味わわなくても良い点も、優雅である。というか、彼女たちが優雅な生活を送るためのマンション立地とかが、夫にとって満員混雑電車生成の主要な原因となっているのである。
次に楽をしているのは、役人である。自ら稼がなくても税金で食べていけて、かつ、自分たちが雇われている国家の所有者一家の威信をフル活用して、国民の生活の生殺与奪を握り、親方日の丸で威張って生活できるからである。通勤も、通勤先の近くに官舎があって、通うのは楽である。
（初出 2010年7月）

後天的定住集団社会Ａの主婦利権を追及しようということ。

後天的定住集団社会Ａの主婦は、家族定住集団の財布を管理する権限や、子供を自分の操り人形として自由に調教できる権限を、結婚して家族定住集団に入るのと同時に手に入れ、独占している。

これは、家庭においてのみならず社会全体から見ても大きな利権であり、そんな大きな利権を女性が占有していることに、社会的関心がもう少し高まるべきだと思う。

まるで、男性を、企業定住集団で働くのに専念させ、家庭にはノータッチでいるのが望ましいみたいな感じの利権である。

後天的定住集団社会Ａの男性の家庭への関与を高めるためには、これらの主婦利権をもう一度見直すべきである。夫との権限共有をもっと進めるべきだということ。
（2015年2月）

女社会の実態が分かりにくい理由。

自分たちで、自分たちのことが、冷静、客観的に分析、批判できないのが、ウェットな女社会の特徴である。 女性学を標榜しているく

せに、女社会の実態分析に無知な後天的定住集団社会Ａフェミニズムを生み出しているということ。 女社会の特徴は、今まで誰も分析して来なかった、来られなかった。それだけ分析しにくいということの表れでもある。 女社会の住人である女性たちは、自分たちからは、自分たちの社会の特性を解明できない。 女社会の特徴は、後天的定住集団社会Ａの特徴でもある。

なぜ、女社会が、今まで正しく分析されてこなかったかと言えば、女性たちは、いつも周囲と一体、一心同体であり、互いに近い、親しい距離にあるためである。絶えず互いに感情移入、共感し合うため、互いに相手を冷静に分析、批判しにくいのであるということ。女社会においては、所属集団の他者と一つになること、一丸となること、協調、同期、和合、溶け込み、排他を強制される。 女社会においては、成員は、周囲と距離を置くことができない。自分の所属集団、仲間から距離を置くと、付き合いが悪いと見なされ、すぐにいじめられたり、迫害されたりするため、自分の所属集団、仲間を客観視するのが難しいのである。 その点、女社会は、冷静、冷淡な客観視を必要とする科学の敵である。

女 同士、表面的に良い外面を見せるために内部で一致結束しようとする結果、女社会は、どうしても排他的、閉鎖的になり、密室政治になりやすい。ある女性が、 女社会内部のことを外部に漏らすと、誰々のことをこういうふうに批判していると当事者に特定されてしまい、親密な内情をばらしたとして陰湿な報復が待って いるため、漏らせない。後天的定住集団社会Ａで会企業定住集団のメンバーが企業定住集団の内情を暴露、内部告発すると、退職強要されるのと根は一緒である。
（初出 2011年8月）

「弱い」女性の立ち位置

女性は、筋力のなさとかを、自分たちの弱さの根拠として主張するが、実際のところ、筋力、武力では、社会を支配できない。後天的定住集団社会Ａの女性の、社会を支配する力は、稲作農耕の自然環境に適応するために必要な、心理社会的なウェットさであり、心理、社会力である。 後天的定住集団社会Ａの女性のように、自らを弱者だと主張する、あるいは自ら弱者の立場に立つことは、社会を支配できて、かつ自己保身できる絶好の立ち位置である。
（初出 2011年8月）

女性と甘え

甘えの根源は、女性にある。
楽したい、守られたい、養われたい、といった生物学的貴重品に当たる個体としてのもてなしを女性は、周囲に要求しがちであり、それが甘えと直結していると言える。
後天的定住集団社会Ａが甘えが目立つ社会になっているのは、女性の力が強いからである。

（初出 2012年6月）

後天的定住集団社会Ａの女性の専業主婦指向はリーズナブル。

後天的定住集団社会Ａで、専業主婦になりたい若い女性が多いのは、リーズナブルである。

それは、家族定住集団の中にいて、養ってもらえる、守ってもらえる、楽ができるからである。

また、家族定住集団計管理や子育てといった、経済的権力や教育面での権力を持つことができて、実質的な家族定住集団の主になることができるからである。家族定住集団そのものが自分の生きがいになるのである。

後天的定住集団社会Ａの主婦は、経済、防衛面で、寄生者でありながら、権力者になれるのであるということ。家庭内役人、家庭内公務員と呼べるということ。

これに対して、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの女性は、家族定住集団で権力を持つことができず、家族定住集団から疎外されている。それゆえ、家族定住集団の外に、生きがい、キャリアや仕事を探そうとするということ。後天的定住集団社会Ａの男性と同じであるということ。

後天的定住集団社会Ａの家族においては、女性の保身が確保されやすい。奥さんとして、完全に奥の人でいることができ、奥で守られるからである。それゆえ、女性に有利であるということ。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの家族においては、女性の保身が確保されにくい。それは、女性に対しても個人の自立を要求する結果、女性が十分に守られず、表に露出してしまうからである。それゆえ、女性に不利であるということ。

（初出 2012年6月）

お局と姉御？

職場での女性の権力を考えた場合、従来のいわゆるお局というのは、独身高齢で、仕事ができなくて昇進無しで、それにもかかわらず権力者として威張るというネガティブな存在として捉えられている。それとは別に、恋愛・結婚していて、仕事ができて、昇進していて、しかも自分で威張らず、周囲が自然と自発的に後を付いてくるタイプの女性企業定住集団のメンバーも相当いると思われる。

後天的定住集団社会Ａの職場のお局は、女性の高齢独身で、ヒラ企業定住集団のメンバーで、仕事ができないのに、彼女が威張るのを誰も止められないのであり、圧倒的なパワーを持っている存在だと言える。彼女が管理職だったり、仕事が出来る企業定住集団のメンバー、すなわち局型上司、上役局であれば、もっと声が大きくなると考えられる。そうした存在がなかなか見られないのは、本来そうなるべき存在の女性たちが、結婚して専業主婦とかになって、家庭でパワーを振るっているためと考えられる。

（初出 2010年7月）

女性的生き方の押しつけ

後天的定住集団社会Ａの女性は、女性的な生き方を男性に押しつけている面がある。
女性的な生き方とは、ウェットで、安全第一、退嬰的な生き方であ

る。
具体的には、集団主義とかになって現れる。
（初出 2009年11月）

世間、空気と女性

後天的定住集団社会Ａの「世間」「空気」を作っているのは女性である。
「世間」は、女性の作り出した女流の相互監視、相互牽制社会である。
「空気」は、液体分子のように、互いに身を寄せ合って一体となっている集団＝「世間」内の人々の間に共通に漂う、その場の雰囲気、暗黙の了解である。
いずれも、互いに一体化するのを好む女性由来である。
（初出 2009年11月）

後天的定住集団社会Ａを支配する4つの女性類型

後天的定住集団社会Ａを支配する女性は、4つのタイプに分かれると考えられる。
(1)ヒステリータイプ いつもピリピリしていて、キャーキャー金切り声を上げて、自己の正当性を主張するということ。ハイミスの、フェミニストがこれに当たる。
(2)パワフルタイプ　腹が据わった行動力のある、肝っ玉母さんがこれに当たる。
(3)クッションタイプ　あらゆることを呑み込む、包容力に満ちた、優しい、慈しみに溢れた、慈母がこれに当たる。
(4)キャリアタイプ　企業定住集団とかで仕事をそつなくこなす、できる有能なキャリアウーマン
、やり手がこれに当たる。
（初出 2009年11月）

後天的定住集団社会Ａの女性が専業主婦になりたがる本当の理由。

後天的定住集団社会Ａの女性が専業主婦になることにこだわる本当

の理由は、従来言われてきたような、単に賃金労働をせず、働かずに楽をしたいとか、優雅な生活を送ることにあこがれるためだけではない。
自分が子育て専従者になりたいからである。
後天的定住集団社会Ａの女性は、子供を独占、占有しようとする欲求がとても強い存在である。「この子は私のもの」という感じで、子供の私物化が行われている。そうした後天的定住集団社会Ａの母親による「この子は、私が育て上げる」という教育者としての自負が、子育て専従者になることを求めさせるのである。要は、子供を自分の思うままに操りたいのであるということ。
子育て専従になる場合、家庭外の企業定住集団とかでの仕事を掛け持ちだと、子育てに十分な時間が割けない。そうかといって、子育てだけをして、企業定住集団とかでの仕事をしないと、自身の収入が途絶えてしまう。この問題を解決するために、自身では企業定住集団とかで仕事をせずに、子育て専従でも、暮らしていけるように、夫には高収入でいて欲しいと考えるのである。
また、子供を保育園に預けると、子供が自分と一緒にいる時間が短くなり、自分との一体感を喪失するので、良くないと考える。
夫婦が共働きをすると、妻が夫に対して、子育て上のアドバンテージを持てなくなるので、良くないと考える。
自分の子供を自分が独占したい、子供を夫に渡したくない、自分の子供に自分の息吹をできるだけ吹き込みたいという思いが、後天的定住集団社会Ａの女性を子育て専従の専業主婦になることへと駆り立てているのである。それは、後天的定住集団社会Ａの成員が母親である女性に支配され、その思うままに動く母権社会の成立に不可欠である。
逆に言えば、夫婦共働きが、妻による子供独占を阻止できることにつながり、父親の育児への介入の機会を増やし、ひいては母からの子供の解放を可能にすると言える。後天的定住集団社会Ａの男性は、夫婦共働きを目指すべきである。
（初出 2011年11月）

後天的定住集団社会Ａの女性と仕事と家庭の両立

現代の後天的定住集団社会Ａの女性は、仕事と家庭との両立に苦しむ例が多いとされる。
ただし、後天的定住集団社会Ａの女性は、経済的に困窮しているので無い限り、社会的にわざわざ外働きする必要が無い。好きで働く分には構わないけれど。
家庭内に居場所の無い、それゆえ外に仕事に出る必要のある、先進

的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性や後天的定住集団社会Ａの男性と異なり、後天的定住集団社会Ａの女性の居場所は、母、姑として、家庭内に十分確保されていると言える。彼女たちは、実質的に家庭の中心であり、家計管理や子育ての権限を握り、家庭内の既得権益を独占している。
後天的定住集団社会Ａの女性が、家庭の外の社会で仕事をするには、自分の分身、付属物である自分の息子を使って、自分の代わりに思う存分外働きさせれば良い。事実、今まではそうやってきたのである。
ただし、後天的定住集団社会Ａで女性自身が外の仕事に強い興味がある場合、仕事か家庭かの二者択一ではなく、仕事も家庭も、貪欲に、どちらも実現し、主導権を握りたいと考えるのが自然の成り行きである。
それゆえ、本来、後天的定住集団社会Ａの女性は、仕事も家庭も、両方十分楽に、50:50で、やって行ける形に、後天的定住集団社会Ａの社会を自ら改造すべきであると言える。
ところが、後天的定住集団社会Ａの女性は、その改造を、自己の保身のため、自らは手を出さず、汚さず、男性にやらせようとする。自分からは、なかなか社会を変えようとしないのである。
しかるに、後天的定住集団社会Ａの男性は、仕事オンリー、仕事100パーセントで生きる存在である。それは、家庭から疎外されていて居場所が無いから、外仕事に専ら情熱を傾けるというのもあるし、自分の母である姑の自己実現の手段となっているから、というのもある。
なので、後天的定住集団社会Ａの男性は、家庭に対する配慮が足りず、社会改造は上手く行かない。
現状、後天的定住集団社会Ａにおいて、仕事と家庭の両立を図る社会改造を、本格的に実行する人がいないのが現状である。
一つは、現在、外仕事ばかりしている後天的定住集団社会Ａの男性に、家庭内の居場所を作り、家庭内の権益を分け与えることである。これは、家族定住集団庭内において、男性の発言権が強くなり、家族定住集団計管理、子育て、家族定住集団自体の管理といいった女性の既得権益が脅かされることにつながる。男性の家庭内地位の向上であるということ。
もう一つは、姑役の女性が、息子以外に、自ら社会を変革する、社会に働きかける自己実現の手段を持つことである。ないし、息子を自己実現のダシに使うのを止めることであるということ。
そもそも、後天的定住集団社会Ａの女性による母、姑としての社会支配、社会に向けての自己実現が、男性としての息子がいないと始まらない側面があるのは事実である。これは、根本的なところで男

性頼みであると言える。
ただし、母、姑は、子どもとしての息子、男性を命令、支配するより格上の存在であり、それゆえ後天的定住集団社会Ａ支配の主体は、あくまで母、姑であると言える。
母、姑としての後天的定住集団社会Ａの女性と、息子としての後天的定住集団社会Ａの男性との関係は、大工と大工道具との関係に似ている。
大工は、大工道具が無いと、生計を立てることができず、自己実現ができず、生きていけない。大工道具は、そういう点で、大工の生殺を握る存在である。
しかし、大工道具は、所詮は、只の道具である。上位にいるのは、大工である。
大工が後天的定住集団社会Ａの女性、大工道具が、その息子として捉えられるのである。

（初出 2012年8月）

後天的定住集団社会Ａの男性による女性蔑視の根源

後天的定住集団社会Ａにおいて、母、姑は、嫁や、同世代の若い女性を、自分の可愛い母子連合体、母子ユニオンの仲間である、自分の息子の世話をする道具、下僕、メイド、奴隷として、目下の存在として捉える見方が根強いと言える。自分の息子が、母、姑自身の自己実現のために、仕事に100パーセント打ち込めるようになるための道具、支え、下世話役となることを、嫁に対して望むのである。

この考え方を、息子である男性も、母、姑からそのまま継承するのである。すなわち、同世代の女性を、自分の世話をする道具、下僕として、目下の存在と見なすのであるということ。これが、後天的定住集団社会Ａの男性による女性蔑視の根源であると言える。結局、根源は、息子の親玉、親分の母、姑による、嫁への蔑視にあると言え、子分の息子である男性がそれに従った結果が、後天的定住集団社会Ａにおける男尊女卑であると捉えることができる。

これは、上の世代の上位母子連合体、母子ユニオンによる、下の世代の下位母子連合体、母子ユニオンの絶対的支配と蔑視の結果として捉えられる。

嫁が、母、姑の立場に転化して、同じことが世代を越えて繰り返されるのである。すなわち上世代、下世代母子連合体の上下関係の世代間連鎖として捉えられるということ。

これは、後天的定住集団社会Ａにおいて、先輩に当たる人間が後輩のことを、自分の世話をする道具、下僕と見なしがちなのと、根が一緒であると言える。後輩が先輩の立場に転化して、同じことが繰り返される。

また、目下の嫁となる、娘である女性も、小姑としては、嫁に対して目上の存在であり、嫁を蔑視する存在であると言える。

（初出 2012年8月）

孤立無援になりがちな後天的定住集団社会Ａの女性

後天的定住集団社会Ａのメンバー女性は、液体分子的であり、あまり積極的に動かない、待ちの姿勢が顕著である。
そのまま一人放っておかれると、いつまでも一人ぼっちのままで、助けが得られなかったり、知り合いができない。
互いに出会う、意気投合するきっかけとなる、誰か他の人がセッティングした会合への出席、同席が、どうしても彼女たちには必要になる。そういう点では、仲人頼みである。
子育て転勤族の母親がそのままでは孤立しがちで、放っておかれると孤立無援になってしまい、個人～家庭レベルで閉鎖的な密室育児を行いがちになりやすいのが、事例としてあげられる。
一方、ドライな気体分子的な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバーは、布教者、伝道師のように、自分から積極的に動いて、どんどん知り合いを作っていく。

（初出 2012年6月）

後天的定住集団社会Ａの主婦利権を追及しようということ。

後天的定住集団社会Ａの主婦は、家族定住集団の財布を管理する権限や、子供を自分の操り人形として自由に調教できる権限を、結婚して家族定住集団に入るのと同時に手に入れ、独占している。

これは、家庭においてのみならず社会全体から見ても大きな利権であり、そんな大きな利権を女性が占有していることに、社会的関心がもう少し高まるべきだと思う。

まるで、男性を、企業定住集団で働くのに専念させ、家庭にはノータッチでいるのが望ましいみたいな感じの利権である。

後天的定住集団社会Ａの男性の家庭への関与を高めるためには、これらの主婦利権をもう一度見直すべきである。夫との権限共有をもっと進めるべきだということ。

（初出 2014年2月）

主婦、姑の院政

後天的定住集団社会Ａは、主婦、姑の院政下に置かれている。
表立った支配者である男性には、実は実権が無く、主婦や姑が持っているのである。
（初出 2009年11月）

院政と女性による社会支配の類似点

共に、実質的な権力を握りながらも、保身のため自分からは直接手を下さず、自分の操り人形に手を下させることで、自分は責任逃れをするところが似ている。

共に、自ら表舞台に出ることを避け、奥からその実態が見えにくいようにして、介入するところが似ている。

（初出 2014年2月）

後天的定住集団社会Ａにおける女性上位

後天的定住集団社会Ａの女性は、男性によるクリスマスプレゼントやデートコースのプラン立てを厳しく評価している。クリスマスイブのディナーでファミリーレストランでの食事はダメだとか、ダメ出しをする側に回っている。
その点、女性は、成果主義企業定住集団の上司、管理職のような評価者、あるいは学校の先生のような採点者の立場に立っており、評価される側（部下）、採点される側（生徒）の男性よりも立場が上であると言える。
あるいは、女性は、顧客、上客として、接待を受ける側の享受者、消費者であり、基本的に楽である。一方、男性は、接待する側の供給者、生産者、労働者であり、基本的に苦しい。この点でも、女性は、男性よりも立場が上であると言える。
こうした点が、女性による男性差別につながっているのではないだろうか。
（初出 2012年1月）

後天的定住集団社会Ａが女性的な社会のままで、先天的定住集団社会Ｂ□先天的定住集団社会Ｃ１上位の定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序に呑まれない方法。

後天的定住集団社会Ａが女性的な社会のままで、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１上位の定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序に呑まれないようにするには、どうすれば良いか？
一つは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの中で、相対的に女性的、母性重視な国に接近することである。ほんの少しだけだが、ありそうである。
南イタリア、ローマなどのコネ社会、マンミズモの社会に接近することであるということ。
もう一つは、先天的定住集団社会Ｂと隣接し、先天的定住集団社会Ｂと反発し合う、先天的定住集団社会Ｂと仲の良くない、後天的定住集団社会Ａ同様に女性的な国に接近することである。
親日の台湾とかが考えられる。

あるいは、大国の定住生活中心社会Ｅとかインドとか考えられるということ。農耕民主体と考えられるということ。
あるいは、定住生活中心社会群Ｄ諸国（ベトナム、マレーシア・・・・）が考えられる。後天的定住集団社会Ａと同じ稲作農耕民であり、親近性が高い。華僑の経済的支配に悩まされているので、抱える悩みは似ている。

（おまけ）北方領土の上手な返してもらい方
とりあえず二島を返してもらい、同時に、見返りとして、LNG等の経済利権を確保するということ。
その後、政権が変わったので、残り二島を返せとしきりにゴネるということ。（先天的定住集団社会Ｂのやり方と同じことをするということ。）実効支配するということ。
（初出 2013年10月）

国策としての後天的定住集団社会Ａフェミニズム、ジェンダー論

・・・なぜ後天的定住集団社会Ａ＝母権社会論は議論の俎上に取り上げらないか？
後天的定住集団社会Ａは、定住生活中心社会群ＡＢＣの中心である先天的定住集団社会Ｂ、その懐刀である先天的定住集団社会Ｃ１に対して、自分が劣位だというコンプレックスがある。先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１は、後天的定住集団社会Ａに対して、上から目線で接しており、後天的定住集団社会Ａが自分たちより劣位の者として振る舞うべきだというのが定住生活中心社会群ＡＢＣの歴史的認識である。後天的定住集団社会Ａは、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１にあまり会わないように、なかば鎖国状態であった。
後天的定住集団社会Ａがこうしたコンプレックスを打破すべく暴れたのが、日韓併合と先天的定住集団社会Ｂ侵略であり、先天的定住集団社会Ｂと先天的定住集団社会Ｃ１に対して上位になろうとしたが、太平洋戦争で負けて、結局なれなかった。
後天的定住集団社会Ａは、コンプレックスを打破すべく、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想で先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの仲間入りを指向し、強い先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに認めてもらいたい、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１を見返したいと思っている。後天的定

住集団社会Ａのメンバーは、映画とかノーベル賞とか、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに認められると、有頂天になって喜ぶ体質がある。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、ドライ・ウェット性格診断テストで、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的なドライ、気体分子運動パターンの方を、自分に合っているとして選択する。それは、自由主義の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国にあやかりたいという気持ちと、不自由な後天的定住集団社会Ａの中に暮らしていて、自由が欲しい、本当は自分は自由なんだと自分自身に言い聞かせたいという気持ちがある。
自由の確保と、後天的定住集団社会Ａのメンバーや女性の好きな安全、保身の確保とは相反する。
後天的定住集団社会Ａは、今や先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを凌ぐ勢いの先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１から将来ネチネチと陰湿に報復される可能性が大きい。それを恐れて、より先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにしがみつくようになっているということ。
ちなみに、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１の歴史認識は、「自分たちの方がもともと伝統的に上位なのに、後天的定住集団社会Ａがその面子を潰してけしからん。当面、戦争で被った損害への謝罪を要求するが、それだけではなく、後天的定住集団社会Ａの、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１上位の伝統的構図への復旧を要求する。先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１上位の伝統的定住生活中心社会群ＡＢＣ的秩序への後天的定住集団社会Ａの平伏を要求するということ。」というものであるということ。
ここから、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ第一主義と後天的定住集団社会Ａにおけるジェンダー論との関連について述べるということ。
後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ色に競って染まろうとして、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論を直輸入してきた。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨジェンダー理論は、差別された弱い女性の権利獲得のための闘争、フェミニズムメインだった。
後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ色に染まろうとすると、導入するジェンダー理論は、フェミニズムの色眼鏡付きへと、自動的になってしまう。すなわち、後天的定住集団社会Ａを先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ同様、あるいはそれ以上に家父長制的だと主張することになるということ。

これは、母権が強い後天的定住集団社会Ａの現状と矛盾する。
後天的定住集団社会Ａの母権の強さを強調すると、後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ家父長制社会の一員では無くなってしまう。後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の中で異質だということになる。あるいは、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１の仲間だということになってしまうということ。それは、後天的定住集団社会Ａが定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序の下で生きることになり、後天的定住集団社会Ａにとってはまずいことである。
後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの家父長制を前提としたジェンダー理論を後天的定住集団社会Ａに適用させないと、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとの一体化、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化が成し遂げられないので困る。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの一員から外されるので困るということ。
定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序を避けるには、イデオロギーで、対先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ一体化、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ第一主義をどうしても国策で取る必要があり、後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとの一体化で必要なのは、後天的定住集団社会Ａを、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと同質の家父長制社会だと宣言することであった。それが、後天的定住集団社会Ａのジェンダー学者の役割だった。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズム、ジェンダー学者は、後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの一員として認められる、一員でいるための一種の切り札であった。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズム、ジェンダー論が、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズム理論をそのまま受容したことは、あるいは受容して後天的定住集団社会Ａに当てはめ、後天的定住集団社会Ａ＝先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ並みあるいはそれ以上の家父長制社会とみなしたのは、後天的定住集団社会Ａの伝統的な女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策に合わせたものであり、その点、後天的定住集団社会Ａのジェンダー学者は、御用学者である。
後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを先進国と崇めて、高速で追従する、すがりつくために、その文物を見境なく、大量に恒常的に直輸入した。その一環として、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ産のジェンダー理論、フェミニズムがあった。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにとって後天的定住集団社会Ａが自分たちと同質な仲間だということを認証するために、後天的定住集団社会Ａ異質論の否定の一環として、あるいは後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに近づいていこうとしてい

ることの証明の作業の一環として、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨジェンダー理論の後天的定住集団社会Ａ直輸入と定着が行われた。
本来後天的定住集団社会Ａにあるべきジェンダー論である母性社会論、母権社会論は、後天的定住集団社会Ａの定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序引き戻しにつながる、あるいは、後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化指向に逆行する、後天的定住集団社会Ａの国策にとって都合の悪い理論である。
後天的定住集団社会Ａは、本来、自分たちとは異質な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の理論を、有り難いお経みたいに崇拝、信仰して、そのまま自分たちにも、矛盾、非整合部分を多く抱えたまま、強引に後天的定住集団社会Ａに適合、普及させ、後天的定住集団社会Ａのメンバーに自分たちは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ並みかそれ以上の家父長制社会、男社会だと感化させることに成功した。
家父長制としては、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと同類、お仲間だという訳である。後天的定住集団社会Ａにとって、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの理論は絶対に正しいというか、正しいとして従わないと先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの一員から外されてしまい、後天的定住集団社会Ａ劣勢の定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序に帰って行かないといけない。
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、本来、定住生活中心社会群ＡＢＣの一員なのに、何でも先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の枠組みで考えたがる。思想、科学、テクノロジー、社会把握、全てにおいて、その傾向がある。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムを、後天的定住集団社会Ａに強制的に導入して、後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを先生とおだてることによって、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨをヨイショする、持ち上げることで、自分たちも先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの一員になって、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１と差を付けるという魂胆だった。
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想イデオロギーと、後天的定住集団社会Ａにおける先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズム、ジェンダー論の受容は、後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと仲良くして、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの仲間内から外れないための大きな戦略である。それは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ追従で、定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序から逃げるのに効果的であり、今後も続く。

後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化を引き続き推進していくためには、後天的定住集団社会Ａ＝母権社会の枠組みを出すのは、せっかく出来た後天的定住集団社会Ａと先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとの一体化を否定し、定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序に戻すもので、到底、後天的定住集団社会Ａ支配層には受け入れられない。理論としては合っていても、有害として無視して、議論の俎上に乗せることは殆ど無い。
後天的定住集団社会Ａは、ノーベル賞にしても、映画賞にしても、音楽コンクールにしても、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの賞を貰うことに汲々として、貰ったら、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに認められた、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの一員とみなされたように感じられて大喜びする。そうしたことが、後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーを上機嫌にさせる。
後天的定住集団社会Ａでは、国を挙げての対先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ一体化の活動があり、その一つとして、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨジェンダー理論、フェミニズムの強引な後天的定住集団社会Ａへの当てはめが行われた。それは国策であった。
後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨジェンダー論のようには動かないことを否定するために、後天的定住集団社会Ａは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨジェンダー理論通りに動くのだと主張するために、「後天的定住集団社会Ａは男社会で、女性は低い社会的地位に甘んじている」と、後天的定住集団社会Ａの国家のメンバーを教化して、絶えず啓蒙活動を行っている。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが強ければ、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想と、対先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ一体化をそのまま続けることになるが、だんだん先天的定住集団社会Ｂが強くなり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが弱くなっている。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムが後天的定住集団社会Ａを先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ以上の男社会、家父長制とみなすのは、後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを世界のスタンダードとして見なし、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の一員として見られ続けるための故意の手段、出汁にすぎない。
後天的定住集団社会Ａ＝家父長制論は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ追従の国策の一環なので、後天的定住集団社会Ａの学者はそれを、検証、否定せず、最初から「それありき」の前提としてジェンダー研究に入った。検証してしまうと、後天的定住集団社会Ａ＝母性的、女性的となってしまい、対先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ一体化のイデオロギーにとって都合が悪いので、意図的にしな

い。
後天的定住集団社会Ａ＝家父長制論は、一種のお経みたいなもので、間違っている訳が無いと信仰せざるを得ない。信心しないと、伝統的な定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１の下位国扱いされること、先天的定住集団社会Ｂの属国扱いされることを甘んじて受けると見なされ、非難されるということ。
後天的定住集団社会Ａの家父長制家族、ジェンダー理論を受け入れるかどうかは、対先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ一体化主義者（欧化主義者）か、定住生活中心社会群ＡＢＣ重視、定住生活中心社会群ＡＢＣ所属主義者かの踏み絵になると考えられるということ。
後天的定住集団社会Ａ母権社会論も、一部では、社会の父性化を目指して先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ指向となっているので、欧化という点では同じだが、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ産の理論ではない（無名の後天的定住集団社会Ａのメンバーの個人的な言説であるということ。）ので、検討すらされず、放置状態であるということ。
後天的定住集団社会Ａ＝家父長制社会論は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ有名学者のお墨付きで、格式がより高く信用できると見なされる。理論が合っているかどうかはどうでもよい。自分たちが理論を直輸入して、後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと同質だと主張できれば、それで良い。
後天的定住集団社会Ａのジェンダー論、フェミニズムが正しいかどうか、後天的定住集団社会Ａに適合的かどうかは、そもそも問題ではなかった。どうでも良かった。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの学説をそのまま受け入れることで、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨとの同質化、一体化が図れる、進むことが一番重要だった。
国の政策として、国家戦略として、「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ後天的定住集団社会Ａ同盟」が理想であり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論直輸入の、後天的定住集団社会Ａ＝家父長制社会を主張する後天的定住集団社会Ａのジェンダー理論は、その「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ後天的定住集団社会Ａ同盟」を実現するための戦略的ツールだった。そのジェンダー論の内容が、後天的定住集団社会Ａの現状に即しているかどうかは問題では無かった。
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の存続という、体制維持側の国策として、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論そのままの形でとにかく後天的定住集団社会Ａに導入することが求められた。それが女性優位遅滞地域を脱して、男

性優位先進地域へ加入しようとする思想に一番効果的と考えられた。
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想できるなら、後天的定住集団社会Ａの真実を把握することは問題外だった。
とにかく、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論の早期丸ごと無修正での吸収と、一般国民、民衆、大衆への速やかな啓蒙（直接的で機械的で無理矢理なということ。）が必要だった。そうした先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論の一つとしてジェンダー論があった。
後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと国情が違うのでそれだけ導入し甲斐があり、後天的定住集団社会Ａに応用する大義名分になる。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ直輸入のジェンダー論を学んだ学者を、社会的影響力の大きい有名大学（東京大学等）の教員に優先的に登用して教えさせたということ。あるいは、男女共同参画社会論を、政府主導で流行らせたということ。
後天的定住集団社会Ａのジェンダー論、フェミニズムは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ直輸入ということに、そしてそうすることで後天的定住集団社会Ａを先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ並みに大きく変えることができるということに意義があった（国側として）ということ。そこには、後天的定住集団社会Ａを先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ並みに出来るという読みがあった。
後天的定住集団社会Ａの現状把握（定住集団社会で、稲作農耕民的で、母性的で女性が強い・・。）は、国にとって、あるいは国民にとってどうでも良かった。後天的定住集団社会Ａの真実把握はそもそも不要、問題外であった。真実を把握してしまうと、定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序のことを思い出してしまい、政策的に都合が悪かった。
後天的定住集団社会Ａの実情で、進んでいると見なす先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論に合わない点を、片っ端から遅れているとして否定的に断定し、そこを先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ並みに変えていくことで、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ並みの先進国の立場を持とうというのが、大元の思想である。
後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化と、定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序からの脱却こそが、真の目標である。
後天的定住集団社会Ａにとっては、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論が絶対的な先生で、それに強迫的に合わせよう、従おうとしている。それを疑うと、頭の中で抑えていた定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序が途端に顔を出すので、疑う訳には行かない。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論の早期、効果的な導入のためには、後天的定住集団社会Ａの真実の探究は考慮しない、無視する、放棄するのである。
現状の後天的定住集団社会Ａは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論に頼らないで、自分の文脈で掘り返した場合にはどうなるのか、どう捉えられるのかということは、何も考えられていない。というか、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論導入の邪魔なので、考えてはいけない。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの社会理論という正解と照らし合わせて、後天的定住集団社会Ａはどうなっているか、どこが間違っているか、足りないかと考えがちなのである。有賀喜左衛門らの後天的定住集団社会Ａの家族理論とかは例外であるが。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論を除くと、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの後ろ盾を失うと、戦時中の軍部や右翼などのナイーブな国家の所有者による社会支配制度に基づく神国後天的定住集団社会Ａ論が再登場するだけである。先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１にそれで直に対応しようとするということ。
客観的で冷静な分析視点が持てないのが後天的定住集団社会Ａの社会学者の欠点である。
自分の頭で考えず、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ学者の頭で考えるのが、後天的定住集団社会Ａの社会学者である。
後天的定住集団社会Ａ＝母権社会論は、定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序を脱却し、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化したいと考える後天的定住集団社会Ａの国側、体制側にとって都合が悪いので、「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ後天的定住集団社会Ａ同盟」指向、欧化主義が続く限り今後も無視されるだろう。ただし、後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの後ろ盾を失ったり、後天的定住集団社会Ａが先天的定住集団社会Ｂの属国になった暁には、見直される、注目されるだろう。
現在の後天的定住集団社会Ａのジェンダー論（というか大元の社会学理論も。）は、女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想したい、定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序を脱して先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに近づき、その一員になりたいという欲求、人為的意図の実現が目的であり、そのための先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会理論の学習啓蒙活動となっている。
定住集団社会である後天的定住集団社会Ａの科学的真実を知りたい、探求したいというのが目的ではない。最初から、科学的でない、特定の目的実現のためのイデオロギーとなっているということ。
後天的定住集団社会Ａの社会学は、後天的定住集団社会Ａがどれだ

け定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序から遠ざかり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会に近づいたかを測定、評価する学問、ツールと化している。あるいは、後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会に近づけるよう、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の社会的ノウハウを直輸入して後天的定住集団社会Ａに提供する学問、ツールと化している。そして、後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会に近づいたと分かったら喜ぶのである。純粋な科学ではなく、内容に偏りがあるのである。
一応、社会分析をやって、社会を照らしてはいるが、肝心の急所、局部（後天的定住集団社会Ａで女性が強い。）を外しているということ。
後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの一員と見なすには、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ学説を何が何でも後天的定住集団社会Ａに適用可能にする必要があり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会が家父長制だったので、後天的定住集団社会Ａも先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会理論が当てはめ可能となるように、家父長制を擬制することにしたのである。
後天的定住集団社会Ａの国家は、自由や民主主義を先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会同様に信奉し、女性の活用を提言する。伝統的な後天的定住集団社会Ａの母性流ではなく、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の父性的フェミニズム（父性社会、家父長制社会の中での女性勢力拡大）による女性活用であるということ。伝統的な後天的定住集団社会Ａの母性流では、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流の自由や民主主義は当てはまらなくなる。

後天的定住集団社会Ａのあり方を先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会に合わせたということ。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは父性社会、家父長制社会なので、後天的定住集団社会Ａも同じ仲間で父性社会、家父長制社会だと言いたい。後天的定住集団社会Ａが母性社会であることを強調すると、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨから仲間はずれになってしまう。後天的定住集団社会Ａで家父長制に似ている所（男尊女卑、父系、職場が男性中心。）をピックアップし、後天的定住集団社会Ａも家父長制だと主張する。あるいは、後天的定住集団社会Ａは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ並みの男社会と主張する。

後天的定住集団社会Ａの特徴は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化にやたらと一生懸命、必死なところ。（もう後が無いみたいな感じで。）それも香港みたいに植民地だからでなく、自発的にやっているところ。それらが、他の定住生活中心社会群ＡＢＣには無い特

色だと言える。

（初出 2013年10月）

女性が管理職になりにくい理由。

女性が上に立つ局面が少ない、増えない理由、女性が管理職になりにくい理由は、以下のように考えられる。

女性は、支配すると、失敗しても、責任を取らせにくいし、自らもすぐ周囲に責任転嫁する。卵子数の相対的な少なさや子宮の子育て上の必須性から、女性は生物学的に貴重な存在であり、自ら傷つくのはまずい大切な存在なので、失敗の責任は周囲がかぶる、負担することになる。

その結果、女性は、何をしてもとがめられないことになりやすく、とかく専横しやすい。支配すれども責任取らず、を地で行くことになるのであるということ。

女性に対しては、処罰しにくい、信賞必罰の原理を貫通しにくい、厳しい態度を取りにくく、問責等の対応がとかく甘くなりやすい、という欠点があり、それが社会的に害毒となるので、それゆえ女性の上位者への登用が回避されてきたと考えられる。

それゆえ、女性による直接支配は嫌われるのである。女性による直接支配は、避けられる傾向があり、代わりに、女性は自分自身の息子や夫を自分の操りロボットにして、彼らに責任を取らせる間接支配がなされるように落ち着いてきていると言える。

もう一つは、学校や職場などで、女性は、能力発揮を人為的にわざと抑える、控えめにしているということが挙げられる。

女性が上を行くと、男性が能力的に萎えてしまうということ。（稼がなくなる、出世しようとしなくなるということ。推進力が無くなる。これらは、家庭に経済的安定をもたらすために必要。）それを防ぐためであるということ。

女性としては、家計管理と子供の教育（子供の私兵化）といった家庭支配の実権が掌握できれば、それで十分である。男性、夫、父は、単に稼いでくれればそれだけで十分である。

家庭支配の実権掌握のプロセスに学歴は余り必要無い。強いて言えば、能力ある男性と出会って結婚できるようにするために必要である、といった程度であるということ。なので、女性は、高学歴取得に男性ほど熱心でない。

後天的定住集団社会Ａの女性は、表面上は男を立てて、一方、実権は自分が握る。

後天的定住集団社会Ａの子供が、息子も含めて母性的になるのは、母が強いからである。

（初出 2013年10月）

後天的定住集団社会Ａにおける男性と女性の関係は、政治家と役人、国家の所有者の関係に似ている。

後天的定住集団社会Ａにおける男性と女性の関係は、政治家と役人、国家の所有者の関係に似ている。

男性や政治家は、表舞台に立ち、表面的な権力を行使するが、責任を取らされ、容易に首をすげ替えられる。

女性や役人は、裏方である。（政治家の国会答弁内容を書くなど。）しかし、彼らは、実権を掌握し、かつ責任は政治家に取らせて、自分は安泰である。

国家の所有者も女性に似ている。最高権力者ではあるが、表舞台には出ずに、御簾の向こうに隠れている。最高権力を隠れて持ちつつ、かつ普段の政治は政治家に行わせて、自分は責任を取る必要が無く、安泰である。

国家の所有者と、役人は、根本的な所で保身が効くのであり、女性

的であるといえる。政治家が肝心な所で地位が必ずしも高いと言えないのは、この辺りに理由がある。

後天的定住集団社会Ａにおいて、役人が、政治家でなく、国家の所有者の直属の親衛隊（直参）なのも、この辺と関係有るのではないか。政治家は、所詮は外様なのである。
（初出 2013年10月）

３．

本書の要約、まとめ

※この項目は、書籍「母権社会後天的定住集団社会Ａ」と共通です。
家庭、家族関係は、大きく分けて、以下の通りである。
（１）夫婦関係 家庭の基盤となる男女関係
（２）親子関係 父子、母子、義理の父子、母子関係
から成ると言えるということ。
後天的定住集団社会Ａの家庭、家族の中の男女の勢力関係は、以下の通りである。
（１）夫婦関係に着目すると、後天的定住集団社会Ａでは、夫＝男性が強く見えることが多い。
・嫁が夫の家族定住集団に嫁入りし、夫の家族定住集団の言うことを聞く必要がある。
・男尊女卑で、夫が威張っている。
・稼ぐのが主に夫であることが多く、妻、嫁はあまり稼げておらず、経済的に夫に依存せざるを得ない。
こうした点を強調して、後天的定住集団社会Ａの家族は家父長制だという主張が、後天的定住集団社会Ａの社会学者の間では主流になっている。
一方、妻＝女性が強く見える側面もある。
妻が家計管理の権限を独占していることが多く、小遣いを夫に渡す場面が多く見られる。小遣いは渡す財務大臣役の方が、もらう方より地位が上である。
（２）親子関係に着目すると、後天的定住集団社会Ａでは、母＝女性が強い。子育ての権限を独占し、教育ママゴンとか呼ばれ、怪物扱いされているということ。子供を自らの母性の支配下で動く操りロボットにすることにすっかり成功しているということ。一方、父

は、子供と関わりをあまり持とうとせず、影が薄い。
こうした母親の影響力の大きさを考慮して、後天的定住集団社会Ａは母性社会だという主張が、後天的定住集団社会Ａの臨床心理学者の間で主流になっている。
このように、夫婦関係を見た場合と、親子関係を見た場合とで、後天的定住集団社会Ａの男女の勢力に関する見方が分裂しているのが現状であり、両者の見方をうまくつなぎ合わせる統合理論が必要である。
筆者は、両者の見方をうまく統合させる契機として、「夫＝お母さん（姑）の息子」と見なして捉えることを提唱するということ。
家父長として強い存在と思われてきた夫が、実は、母、姑の支配下に置かれる操りロボットとして、実は父性が未発達の、母性的な弱い存在であることを主張する。
後天的定住集団社会Ａにおいて、子育てを母が独占し、子供の幼少の時から、強力な排他的母子連合体（母子ユニオン）を子供と形成するということ。（母が支配者で、子が従属者、母の操りロボットとなるということ。）この母子一心同体状態が子供が大人になってからもずっと持続し、この既存の母子連合体が一体となって、新入りの嫁を支配するという構図になっている。このうち、「母の息子＝夫」と嫁の間のみを取りだして見ると、夫が嫁である妻を支配するという従来、後天的定住集団社会Ａ＝家父長制社会論で主張されてきた構図が見える。しかし実際には、夫は、母である姑に支配されており、その姑と一体となって、嫁を抑圧しているに過ぎない。
後天的定住集団社会Ａの夫婦における勢力関係を正しく把握するには、夫婦（夫妻）だけを見るのではなく、夫婦（夫妻）のうちの夫側に、母のくさびを打ち込むことが必要である。あるいは、母や姑が一家の実質的な中心であり、真の支配者であるとする「母」「姑」中心の視点を持つことが必要である。
夫婦だけを見るのでなく、
・母～息子（夫）←（何人も割って入ることを許さない母子連合体、ユニオン。）
・姑～嫁（妻）
・夫（母の息子）～妻（嫁）
の3つを同時に見る必要がある。夫の父（舅）は、一世代前の母の息子のままの状態であり、影が薄い。夫の姉妹は、小姑として、夫同様、姑中心の母子連合体の一員として、嫁を支配する、姑に準ずる存在である。
夫は、妻にとっては一見強い家父長に見えながら、実際のところは、いつまで経っても母の大きい息子のまま、母に支配され、精神的に自立できない状態にある弱い存在であるという認識が必要であ

る。
母の息子である夫、父は、一家の精神的支柱である母と違い、家父長扱いされながらも、母に精神的に依存し続けて一家の精神的支柱になれない、ともすれば軽蔑され見下される存在と成り下がっているのである。
夫は、仕事にかまけて子供と離ればなれになっているが、実は、この仕事が、夫の母の代わりに行っているというか、母の自己実現の代理になっている。企業定住集団での出世昇進とか、一見、夫が自分自身のために頑張ってしているように見えて、実は、夫自身が母の中に取り込まれ、母と一心同体となって母のために頑張って行っているというのが実情である。母が息子の出世昇進に一喜一憂し、夫にとって、自分の人生の成功が、そのまま母の人生の成功になっている。また、夫が企業定住集団で取る行動は、企業定住集団人間のように、企業定住集団との一体感、包含感を重視する、とかく母性的なものになりがちで、彼を含めた企業定住集団組織の男性たちが大人になっても母の影響下から脱することが出来ていないことを示している。
筆者は、こうした、以下の通りである。
・母（姑）による息子＝（妻にとっての夫）の全人格的支配
・妻による家計管理の権限独占に基づく夫の経済的支配
の両者を合わせることで、後天的定住集団社会Ａの家庭～社会全体において、母性、女性による男性の支配が確立しており、後天的定住集団社会Ａは、実は、母権社会、女権社会である、と主張する。
一家の中心は、母、姑である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの権威筋の学説（Bachofen等）は、母権社会の存在をこれまで否定してきており、筆者の主張はこれに正面から反対するものである。
後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性と男女の性格との相関を取ると、後天的定住集団社会Ａのメンバーは女らしい（相互の一体感、所属の重視。護送船団式に守られること、保身安全の重視。リスク回避、責任回避重視。液体分子運動的でウェット・・・）で動いているという結論が出る。これは、後天的定住集団社会Ａが、女権、母権社会であることの動かぬ証拠と考えられる。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、姑根性で動いている。（姑根性とは、周囲の、後輩などの嫁相当の目下の者に対して、口答えを一切許さず、妬み心満載で、その全人格を一方的、専制的に支配するということ。）このこと自体が、後天的定住集団社会Ａにおける母、姑の影響力、支配力の強さを表している。それゆえ、後天的定住集団社会Ａの社会、家族分析に、姑中心、母中心の視点を取ることが必要であると言える。

従来の後天的定住集団社会Ａの男性は、母や妻による支配を破ろうとして、がさつな乱暴者、あるいは雷親父となって、ドメスティックバイオレンスとかで対抗してきた節が見られるが、暴力を振るうだけ、より家族から軽蔑され、見放される存在になってしまう結果を生み出している。あるいは、家庭の外の仕事に逃げようとするが、仕事に頑張ることがそのまま母の自己実現になるという、母の心理的影響、支配を振り切ることはそのままでは不可能である。
こうした女性、母性による後天的定住集団社会Ａ支配は、後天的定住集団社会Ａの根底が、女向きの、水利や共同作業に縛られた稲作農耕文化で出来ているために生じると考えられる。そこで、筆者は、後天的定住集団社会Ａの男性は、従来の伝統的稲作農耕文化から脱却して、新たに、家父長制の本場である先進的移動生活中心社会群ＦＧＨやアラブ、モンゴルといった遊牧、牧畜民の父親のようなドライな父性を身につけることで、母と妻に対抗できるようにすべきだ、母と妻の支配から解放されるべきだと主張する。これが、後天的定住集団社会Ａの男性解放論である。要するに、子育てと家計管理において父権を確立することで、父親として真に社会で支配力を持った、尊敬される存在になろうと呼びかけるものであるということ。筆者は、その際、稲作農耕を、伝統的な後天的定住集団社会Ａ方式から、よりドライなやり方の先進的移動生活中心社会Ｇのカリフォルニア方式に改めることで、稲作農耕を維持しながら、ドライな父権を社会に実現できると予期している。
筆者は、最終的には、男女の力関係は、対等の50：50が望ましいと考えている。これが、究極の男女平等であると主張する。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨみたいに、男性、父性が強くなり過ぎても、後天的定住集団社会Ａみたいに、女性、母性が強くなり過ぎても良くない、適度なバランスが必要と考える。家計管理を、夫と妻が1月交代で行う月番制導入とかである。
（初出 2012年6月）

後天的定住集団社会Ａの男性解放論 - 真の父権確立に向けて -

１．

後天的定住集団社会Ａの男性解放宣言

[注]●印の付いた文章が、宣言本文である。
宣言の内容は、具体的には、以下の通りとなる。
◇[宣言1]
1-1●その心をもっとドライにせよということ。男性の本分たる乾いた空気を、自らの行動様式の中に取り戻せということ。個人主義、自由主義、契約思想を体得せよということ。親分子分や、先輩後輩関係に代表される、ウェットなベタベタした人間関係から脱却せよということ。自分より大きなもの(企業定住集団組織など)に頼ろうとするなということ。
1-2●母親や身の回りの女性によって強いられた、集団主義、同調指向、権威主義、リスク回避指向のくびきから、自分自身を解き放てということ。
1-3●男性が強い先進的移動生活中心社会群ＦＧＨをモデルにするので構わないから、真の男らしさとは何かに一刻も早く気づけ。後天的定住集団社会Ａにおける、ドライ＝真に男性的な価値の認知、すなわち、個人主義、自由主義、独創性の重視の実現を目指せということ。
[解説1]
国民性(社会の雰囲気)という面からは、「後天的定住集団社会Ａに特有＝(ウェット)＝女性的」である。
後天的定住集団社会Ａの男性は、「浪花節」に代表される相互一体感、集団主義や、「和合」に代表される相互同調・協調性、「先生」という呼称に代表される権威者を崇め奉る権威主義、冒険や失敗を恐れ、前例やしきたりを豊富に持つ年長者をむやみに重んじる年功序列(先輩後輩)関係を偏重してきたが、それらは本来ことごとく女性的・母性的な価値観に基づくものである。こうした価値観は、男性の生育過程で「母子癒着」関係にある母親の支配・影響下で自然と身に付いたものであり、その点、後天的定住集団社会Ａの男性は「母性の漬け物」と化している、と言える。
後天的定住集団社会Ａの男性が、いかに女性によってウェットさを

強いられて来たか、それは、集約的な稲作農耕社会という条件がもたらしたくびきであった。
後天的定住集団社会Ａでは、工業化、都市化、能力主義の浸透により、徐々にウェットさから解放され、ドライ化が進む兆しが見える。この方向が今後も続けば、やがて後天的定住集団社会Ａの男性は、女性(母性)の支配から解放されるだろう。 後天的定住集団社会Ａのドライ化に当たっては、社会における先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化の風潮を追い風にすべきである。ただし、社会を先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化すると言っても、従来のような先進的移動生活中心社会群ＦＧＨへの一時的な権威主義的同調で終わらせてはならない。このまま先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化が進めば、着実に、後天的定住集団社会Ａのドライ化＝男性化が進む。
◇[宣言2]
2-1●自分が社会的弱者であることに気付け。自覚せよということ。男尊女卑をはじめとする「後天的定住集団社会Ａ＝男性中心社会」の神話にだまされてはいけない。
[解説2]
「後天的定住集団社会Ａ＝男社会(男性中心社会)」という言説は、全てまやかしのものである。「男尊女卑」にしても、見かけだけの男性尊重であり、男性の強さである。実際の社会の実権は、女性(母性)に握られているのが現状である。こうした「後天的定住集団社会Ａ＝男性社会」神話は、後天的定住集団社会Ａの女性による、本来のドライな男性らしさを一度骨抜きにした(男性をウェット化した)後で、自らの保身に役立つ「強い盾」、および収入を得るための「労働力」として、道具扱いしてこき使おうとする心の現れであり、これが後天的定住集団社会Ａの女性の毒である。
◇[宣言3]
3-1●女性に生活を管理されるなということ。女性に身の回りのことを何でもやってもらおうとするなということ。蔑称「粗大ゴミ」「濡れ落ち葉」を脱却せよということ。妻に生活面で頼ろうとするなということ。妻に家庭内管理職として君臨されないように、できるだけ生活面で自立せよということ。
3-2●女性に家庭の外に出て働くように促せということ。女性の、家庭における影響力をなくす(女性に支配されないようにする)には、外に出て働いてもらうのが一番である。専業主婦を望む既存の男性は、こうした点で、認識不足である。そのままでは、生活の根幹を女性に支配されてしまうからである。
3-3●女性、特に母親に甘えるなということ。依存しようとするなということ。妻を母親代わりにしようとするなということ。母親から自立せよということ。

[解説3]
今まで、後天的定住集団社会Ａの男性は、家庭における生活の根幹を、女性(母、妻)の管理下に置かれて来た。家庭における家計管理、子供の教育といった主要機能は、女性(母)が独占している。その点、「後天的定住集団社会Ａの家庭＝家父長制」というのは、実は見かけだけの現象に過ぎない。後天的定住集団社会Ａの男性の立場を向上させるには、この現状から脱却する必要がある。
◇[宣言4]
4-1●子育てに介入せよということ。自分の行動様式・文化をもっと子供に伝えよということ。自らの内に秘められたドライな男らしさをもっと出してということ。子供(特に男の子)を、ウェットに女々しくさせるなということ。育児権限を母親に独占させるなということ。
[解説4]
後天的定住集団社会Ａの父(夫)は、大人へと育つ間に、母親(女性)によって、父性を殺されている。後天的定住集団社会Ａの父は、力不足で、密着する母と子の間に割り込めない。これは、母子一体性および父性殺しの再生産の原因になる。
後天的定住集団社会Ａの父親は、子育てを母親に任せっきりである。結果として、育児権限(育児機会)は母親が独占する。
父親は、母子関係に介入しない～できない。子供(特に息子)の人格のウェット化＝女性化をもらたすということ。
このことは、後天的定住集団社会Ａの男性の育児意欲を、子供のうちに削除し、後天的定住集団社会Ａの男性の育児機会からの疎外を、世代間で再生産している。これは、子供の社会化において、子供の人格をウェットにするために、ドライな父性の影響を排除する仕組みが、社会的に出来上がっているためと考えられる。
夫婦関係が薄く、母子関係(母娘関係だけでなく、母-息子関係も)が濃いのは、父親を子供から遠ざける効果(父性隔離効果)を持っている。母子癒着は、母親による子供の独占支配の再生産である。こうした現状は、変えられなければならない。
◇[宣言5]
5-1●いばるなということ。男尊女卑から自由になれということ。女に都合のよく作られた、盾として作られた強さを捨てよということ。本当の強さは、個人主義、自由主義といったドライな態度を自分の力で獲得することにある。
後天的定住集団社会Ａの本当の支配者は、自分たち男性ではなく、女性であることに早く気付け。見かけにだまされてはいけない。
5-2●母親＝姑に反逆せよということ。伝統的な家風という前例に従うな、自分で作れ(創造せよ)ということ。「家族定住集団」に頼る

な、家族定住集団を出て自立せよということ。そのためにも、夫婦別姓を積極的に考えるべきである(結婚相手を、自分のイエに巻き込むな。姑と嫁との権力争いに巻き込まれ、姑と嫁の両方から非難されるはめになるからということ。
5-3●家族定住集団の財布を妻に取られるなということ。収入管理と支出用途決定は、夫婦対等の協同管理に持ち込め。
[解説5]
後天的定住集団社会Ａが、本当は女性優位、女性的な風土なのに、男性優位、男社会と言われる理由はなぜか？
そこには、3つの打ち崩されるべき壁・神話がある。
(1)男が威張る。男尊女卑。
(2)男中心の家族制度。父系相続。男性側は姓替わりをあまりしなくて済む。
(3)男が収入を得る。一家の大黒柱として君臨。
それぞれ現実は、以下の通りである。
(1)実際は、女性によっておだてられて、単なる「(女性、母性を護衛する)強い盾」「(女性、母性に対して)給与を貢ぐ労働者」の役割を果たして喜んでいるだけに過ぎない。
(2)後天的定住集団社会Ａにおいては、家庭の実権は母・姑にあり、「粗大ゴミ」扱いされる男性にはない。
それなのに、女性がなぜ「後天的定住集団社会Ａの家庭は家父長制だ」と主張するかと言えば、女性は、自分たちが、前例指向的なものだから、家風という前例による支配の序列(姑こと。→嫁)を否定できない。また、同性である姑には反抗できない。女性＝嫁は、嫁いじめされる悔しさを夫に向けるので、夫が支配者ということで非難の対象になってしまう。
(3)男性はあくまで収入を家族にもたらすにとどまる。もたらされた収入を実際に管理して、歳出面での配分などの最終権限を握るのは、女性側である。男性側は、一方的に小遣い額を決められるのみである。男性は、「ワンコイン亭主(一日一枚のコイン分の小遣いを支給されるだけの存在)」という言葉に代表されるように単なる労働者であり、一方、女性は、家庭内管理職(大蔵大臣、厚生大臣..)として君臨する。
後天的定住集団社会Ａの男性は、女性に強いと持ち上げられて、自分が本当に強いと錯覚し、虚構の強い自分の姿に酔っている。女性も、自分が、男性に比べて弱いかのように錯覚している。ここから、後天的定住集団社会Ａフェミニズムの不幸な歴史が始まった。
後天的定住集団社会Ａの家庭は、実質的に女性の支配下にある。
男性は、家族定住集団族制度のもとでの、父系であることの有利さ・気楽さの原因である、姓替わりをしなくて済む(最初から他家

族定住集団の家族定住集団風を習得しなくてよい)ため、「家族定住集団」と自分とを一体化しがちである。
家族が父系であることと、男性(父性)支配とを混同してはならない。父系制が多いのは、男が表に出て、女が奥に隠れた方が、女性の生物学的貴重性に対応するために便利だからである。この場合、自分の身の安全を男性によって保障される女性の方が、生物学的地位や価値としては、男性よりも上である。
(付記)後天的定住集団社会Ａの男性解放論の目新しさ
以下の3つの命題の結びつきに今までの人は気がつかなかった。これに初めて気づいたのが、後天的定住集団社会Ａの男性解放論である。
(1)後天的定住集団社会Ａは女性的である。
(2)後天的定住集団社会Ａにおいては、女性が強い、優勢である。
(3)後天的定住集団社会Ａにおいては、解放されるべきなのは男性である。
上記の結びつきは、理屈から行って自然なはずであるが、「女性が、全世界共通に弱い、解放されるべき存在である」という既成概念に支配され、じゃまされて着想されなかった。
この既成概念は、男性の強い先進的移動生活中心社会群ＦＧＨやアラブのような遊牧系社会でのみ通用する概念のはずなのに、いつのまにか国際標準の概念となってしまい、そうした国際標準や権威といったものに弱い後天的定住集団社会Ａの学者が、何も考えずに強引に、(本来女性が強いはずの)後天的定住集団社会Ａに当てはめてしまった。
したがって、そうした既成概念から自由になることで初めて生れた、後天的定住集団社会Ａの男性解放論は、学説として十分目新しい。
◇(付記)後天的定住集団社会Ａで男性解放論が広まらない理由。
男性解放論が、今までの後天的定住集団社会Ａで注目されたり、歓迎されてこなかったのは、男性自身が、自分のことを強い者と思い込まされ、自己満足感に浸っているのを打ち壊すため、男性に不快感を与えるからである。
後天的定住集団社会Ａでは、本来解放されるべき男性が現状に満足し、支配者である女性が現状に不満を持ち、「解放」を唱えている。
男性は、男尊女卑や結婚時の姓替わりなしといった表面的な優遇措置に満足している。
真の男性解放を実現するには、後天的定住集団社会Ａの男性のこうした表面的な満足感を突き崩す必要がある。これが、上記の後天的定住集団社会Ａの男性解放宣言の存在理由となる。

(初出2000年07月～)

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの常識を否定することの必要性と男性解放論

その本質がウェットで女性的なのに、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの立場を導入して、ドライで男性的な振りをしたがるのは、後天的定住集団社会Ａのメンバーの悪い癖である。

後天的定住集団社会Ａにとって、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会が、何かを新たにする際の正解供給基地として機能している。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの言う通りにすればうまくいくと考えるということ。後天的定住集団社会Ａは、何か自分たちにとって未知のことを判断するに当たって、必ず先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにお伺いを立てようとする。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは、正解判断基準の提供者としての役割を果たしている。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは、世界社会を牛耳ってきた強者、成功者であり、後天的定住集団社会Ａはまだ勝てない。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの言うことを聞いていれば、従っていれば上手くいく、という考えが後天的定住集団社会Ａ側にある。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは、今までにない新機軸を出すのに優れており、先導役である、後天的定住集団社会Ａは新機軸を出すのが相対的に苦手で、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに従おうとする。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの常識をそのまま上様扱いで肯定、取り入れるのではなく、あるいは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに認めてもらおうとするのではなく、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの常識をひっくり返す、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの常識を否定 して、新境地を打ち立てることが必要である。世界的に男性が上位で、女性が下位であるとする、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの常識をひっくり返すことが、筆者の後天的定住集団社会Ａの男性解放論の一つの目的である。

（初出2011年8月）

男尊女卑（男性優先）の本質について

〔１．
男尊女卑は、物事一般を進める上で、男性が(女性よりも)尊重・優先されることを指しており、(先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにおける)レディーファースト(女性優先)の対概念と考えられる。
従来、男尊女卑の概念は、後天的定住集団社会Ａなど定住生活中心社会群ＡＢＣにおける、男性による女性支配（家父長制）の実態を示すもの、あるいは、女性の（男性に比較したということ。）地位の低さを示す象徴として、女性解放の立場を取る人々からの非難にさらされてきたということ。
一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨなどでのレディーファーストの概念は、女性の地位の高さを示すものとして、後天的定住集団社会Ａのような男尊女卑の社会慣例を持つ社会が、女性解放を進める上で、積極的に学ぶべき手本となるもの、と、女性学者や女性解放論者(フェミニスト)によって主張されてきた。
レディーファーストは、身近な例をあげれば、例えば、自動車のドアを男性が先回りして女性のために開けてあげるとか、レストランで女性のいすを引いて座らせてあげるとか、の行為を指す。この場合、見た目には、男女関係は、女王と従者の関係のように見えると

いうこと。（女性が威張っていて、男性は下位に甘んじている。）
しかるに、女性解放を目指すウーマンリブ運動はレディーファーストの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで始まっている。
それと同様のことを男尊女卑に当てはめると、女性は男性に対して、見掛け上のみ従属することを示しており、勢力的には女性の方が男性よりも強く、必ずしも女性は弱者ではないと言えるのではないか？
以下は、こうした疑問をきっかけにして、男尊女卑という概念を、社会を取り巻く自然環境への適応度という観点から、もう一度吟味し直した結果について述べたものである。
〔２．
農耕社会(ウェットな行動様式を要求する)における女性(ウェットな行動様式を生得的に持つ)、および遊牧社会(ドライな行動様式を要求する)における男性(ドライな行動様式を生得的に持つ)は、その環境下で生き抜く上で有益な行動様式(プラスの機能)を持ち、より適応的である。
一方、農耕社会(ウェット)における男性(ドライ)、遊牧社会(ドライ)における女性(ウェット)は、環境下で生き抜く上で有害な行動様式(マイナスの機能)を持ち、適応障害を起こす(不適応である)。すなわち、その環境下で構築された社会の中でマイナスの価値を持ち(存在を否定され)、勢力が弱い(弱者の立場に立つ、影が薄い)。。
上記の内容の詳細については、後天的定住集団社会Ａにおける母権制の再発見についてのページを参照されたい。
男女は、生物として生殖を行う必要上、同一環境下に、必ずペアで存在する必要がある。したがって、当該環境下の社会では、適応的な側の性だけでなく、適応障害を起こす側の性もその場に同時に存在する必要がある。例えば、農耕社会(ウェット)では、適応的な女性(ウェット)と、適応障害を起こす男性(ドライ)とが、同一の場に共生しなければならない。適応障害を起こす側の性の個体の遺伝レベルでの行動の発現を、そのまま放置しておくと、(1)社会に当該環境下の生存にとって不適切な行動様式をもたらすことで、社会全体の環境適応力を著しく損ない、社会そのものの消滅につながる、(2)適応障害を起こす側の性の個体が、環境不適応の末に死滅してしまうので、当該社会下での生殖活動が不可能となり、ひいては社会そのものの消滅につながる、といった甚大な被害を、社会全体に引き起こす。
こうした被害を未然に防ぐためには、以下の通りである。
(1)適応障害を起こす側の性が持つ不適応な部分を、社会化(育児・教育)の過程で、適応している側のそれに対応する部分によって、打ち消す(パッチを当てて中和、無力化する)必要がある。

(2)適応障害を起こす側の性を、適応している性の側で絶えず、生活全般にわたって、社会的弱者として、大事に保護する(サポートする、面倒を見る)必要がある。
こうした必要性は、農耕社会では、(1)は、育児・教育上の母子癒着(母親主導)として、(2)は、男性尊重(男尊女卑)となって現れる。遊牧社会では、(1)は、育児・教育上の母子分離(父親主導)として、(2)は、女性尊重(レディーファースト)としなって、現れる。
人間の周囲の自然環境への適応は、その自然環境下で必要とされる生活様式(湿潤(ウェット)環境では農耕、乾燥(ドライ)環境では、遊牧)に合わせて、行動様式の「湿度」(ウェット~ドライの度合い)を調節する過程として捉えられる。
行動様式の湿度調節は、環境に適応する側の性が、環境に適応障害を起こす(湿度が逆の)性の行動様式(特性)に対して、一方的に中和するかたちで行われる。各性の持つ中和の役割は、女性(遺伝レベル=ウェット)は、液化(ウェット化)、男性(遺伝レベル=ドライ)は、気化(ドライ化)である。
農耕社会(文化レベル=ウェット)では、女性が男性に対して、一方的に液化を行い、逆に遊牧社会(文化レベル=ドライ)では、男性が女性に対して、中和(気化)を行う。パッチ当てを受けた側は、結果として、本来持っていた行動様式が使えなくなり、無力化されて、社会的弱者の立場に転落する。
文化レベルのウェット~ドライな行動様式の実現には、遺伝レベルでの性差において、ウェット~ドライな行動様式にすでに従っていることを積極的に利用すべく、自分の性に固有な行動様式を、人間の社会化の過程、特に行動様式の可塑性の大きい、育児最初期の段階で、子供に対してそのまま直接流用するのが、効果的であり、現実に、流用が起きている。
流用のあり方は、例えば[増田1964]では、以下のように描写されている。先進的移動生活中心社会Ｇ社会(遊牧系:注筆者)では、子供の面倒を見るのはたいてい男性である夫の仕事であり、赤ちゃんは夫(男性)に抱かれているか、ゆりかごに入れて夫(男性)が抱えている。それに対して、後天的定住集団社会Ａ(農耕系:注筆者)では、母親(女性)が赤ちゃんをおんぶして、上の子の手を引いて、おまけに...といった調子で、育児は母親(女性)の役目となっている。幼少期に自分の性に固有の行動様式を、育児という形で、子供に注入する権限を持つのは、遊牧系の社会では、男性、農耕系の社会では、女性、という図式が成り立つ。
以上の内容をまとめると、次のようになるということ。
1)女性が主導権を持つ農耕社会では、男性は、女性側がデファクト・スタンダードとする、ウェットな社会的行動様式に、無理やり

合わせないと生きて行けない。農耕社会という環境下では、性格がよりウェットな女性のペースで物事が進むため、それに合わせて生活しなければならない、女性の流儀にいやいやながら従わなければならないのであり、それを、幼少から強要され、拒めなくなっているところに、男性の弱さが認められる。男性本来の個人主義的、自律的．．．といった特性を打ち消され、殺され、抑圧されているということ。そして、男性本来の特性とは逆の、集団主義的、他律的．．といった、ウェットな女性的特性に従って行動させられるため、社会的不適合者、弱者としての地位に甘んじることになるということ。
2)男性が主導権を持つ遊牧社会では、女性は、男性側がデファクト・スタンダードとする、ドライな社会的行動様式(個人主義、同調を嫌う．．)に、無理に合わせないと、とりまく自然環境の中で生き延びられないということ。遊牧社会では、性格がよりドライな男性のペースで物事が進行するため、それに合わせて生活する必要があり、女性本来の集団主義的、同調的．．．といった特性は抑圧・消去の対象となる。その結果、女性は、社会的不適合者、弱者の立場に転落する。
〔３．
ウェットな農耕社会（後天的定住集団社会Ａ）は、男性の表面的な尊重(優先)・女性の実質的支配が生じている社会、ドライな遊牧・牧畜社会（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ）は、女性の表面的な尊重(優先)・男性の実質的支配が生じている社会、とまとめられる。
ウェットな社会の男性およびドライな社会の女性は、自分とは異質な（反対のジェンダーに適したということ。）原理で動いている社会に、無理やり適応させられているのであるということ。そうした点で彼ら（彼女ら）には、自分たちとは異質な性の行動原理に合わせる生活上、足りなかったり至らぬ点が生じてくるが、そうした適応不足を補償するのが、男性優先（男尊女卑）、女性優先（レディーファースト）である、と考えられるということ。これらは、社会の中でより弱い立場の性の行動を優先する、「弱性優先」という言葉でまとめることができる。
優先(priority)には、1)強者優先(力ある者が優先される。権力者がよりよい待遇を受ける)と、2)弱者優先(年寄りや子供など、弱い者が、優先的に、食事にありついたり、座席を譲ってもらったりなど、よりよい待遇を受ける)との、相反する2種類が存在する。優先されるのが、必ずしも強者だからとは限らない。
あるいは、ウェットな社会では男性が、ドライな社会では女性が、社会に対して不適応であり、社会における存在意義・理由が、その

ままでは、欠乏する(社会の中で、じゃま者扱いされ、軽蔑される)。それでは、彼らの人間としての尊厳(人権)が保たれず、モラル(やる気)の維持などに重大な支障が出ることが予想される。そこで、たとえ表面的であっても、不適応者である彼らのことを、尊重・優先して、自尊心を保ってあげる必要が出てくる。そうした自尊心を補完する社会的な仕組みが、男性優先（男尊女卑）、女性優先（レディーファースト）である、と考えられるということ。
これをまとめると、
男尊女卑＝強い女性が、弱い男性の、農耕(ウェット)社会への適応不足を、補償する。
レディーファースト＝強い男性が、弱い女性の、遊牧(ドライ)社会への適応不足を、補償する。
であるということ。
ここで、「男尊女卑」の原因をまとめると、以下のようになるということ。 基本的には「弱性優先」の考え方に基づくものである(1～3)が、「男性優位」の作為的演出(4)、という面もある。
1)「福祉」モデル (農耕社会に向かない)無能者＝弱者である男性の世話・サポートを優先的に行うということ。弱者福祉が目的である。乗り物などで年寄りに優先的に座席を譲るのと同じ考え方であるということ。農耕社会の男性は、家庭ではゴロゴロして何もしない。それは、自分とは異質なウェットな人間関係に取り囲まれ、それに無理に適応しなければならず、無意識のうちに心が疲れて、何もする気が起きない(無気力となる)からである。それゆえ、女性が、家事・洗濯・炊事などで、かいがいしく世話をする必要が生じる。あるいは、男性に無理を言われても、「はいはい」と聞いてあげる寛容さを持つ(弱い子供をあやすように振る舞う)必要が生まれる。
2)「自尊心・モラール」モデル 自尊心を向上させて、(農耕社会にとって有害なため無力化された)男性に、自らを「有用視」させて、勤労・防衛意欲を出させるということ。(個人主義、自由主義などのドライな＝有害な要素を殺したあと)残った能力(筋力・武力)を有効利用するということ。物事を優先的に行ってよいとされれば、自尊心が起きやすい。
3)「人権」モデル 社会的弱者たる男性の人権保全に配慮するということ。女性が、男性のことを優先して取り扱ってくれれば、男性の人権がより保たれやすい。(農耕)社会的に有害・無力であることを悟らせず、人間としての尊厳を保たせるということ。女性に全生活を管理・制御されていることを気づかれないようにするということ。
4)「貴重」モデル 生物学的に貴重な女性は、自分を「盾」として

守ってくれる者を作り、どうせならなるべく強く見せようとする。その方が、外敵を恐れさせることができるからである。農耕社会のように、女性が優位に立っている場合には、女性には、自分を守る「盾」としての男性が、相対的に弱く見える。それだと、女性が、外敵から自己防衛・保身を行う上で不安であり、不都合である、と農耕社会の女性自身が感じた。そのため、男性に、わざと積極的に恐い態度を取らせたり、威張らせたりする(強圧的な態度を取らせる)。女性に意図的に仕向けられて強がっている男性は、「張り子の虎」のような存在であり、女性の(男性を強く振る舞わせようとする)心理的支えがないと、見かけの強さを維持できず、潰れてしまい、元の、(農耕社会特有の)無能な、頼り無い姿に戻る。
レディーファーストの原因は、上記の「男尊女卑」の原因説明における、男性についての記述を、女性に置き換えたものとなる。
1)「福祉」モデル (遊牧社会に向かない)無能者 = 弱者である女性の世話・サポートを行うということ。
2)「自尊心・モラール」モデル 女性を表面的に敬うことで、女性に自尊心を与え、物事を行う意欲をかきたたせて、(集団主義、同調指向などのウェットな = 有害な面を打ち消したあと)残った家事や職業労働能力を、有効利用するということ。
3)「人権」モデル 遊牧社会での社会的弱者たる女性の、人間としての尊厳を保つということ。
4)「貴重」モデル 遊牧社会での男性が、生物学的に貴重な女性を、高貴な存在 = 「貴婦人」として崇拝し、より守護しがいがあるものとして捉えることにより、自分自身が内蔵する、女性を守ろうとする欲求を満足させる。
男尊女卑・レディーファーストは、共に、社会の中でより弱い性を保護しようとする「弱性保護」の思想 (弱者保護の一種) と言えるということ。依存するということ。 (寄りかかる、もたれかかるということ。) そうする方の性 (農耕社会の男性、遊牧社会の女性) は、その依存を受け止める方の性 (それは、農耕社会の女性と、遊牧社会の男性である。) よりも、力がなく、弱い (自分ひとりでは立てない。) ということ。
受け止める方の性は、力があり、強いからこそ、余裕を持って、依存する相手をしっかり支えることができる。
男尊女卑 (男性優先) は、男性保護の思想である (通説のように、男性の強さを示しているのではなく、むしろ逆である = 弱いから女性によって大切にされる、わがままを聞いてもらえる。) ということ。レディーファースト (女性優先) の裏返しであるということ。
(ウーマンリブ運動は、レディーファーストの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで生まれている。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで

女性の社会的立場が弱い証拠である。）
全世界どこでも、（フェミニズムが訴えるように。）女性が弱い、というわけではない。勢力面で、女性の方が男性を上回る社会。（母権社会。）それは、現在でも確実に沢山存在するということ。（それが、例えば後天的定住集団社会Ａや、定住生活中心社会群ＡＢＣの稲作農耕社会などである。）ということ。従来、母権社会は存在しないなどというのが定説となっているが、それは母権についての議論が不十分なためであるということ。（母系制との混同。男尊女卑を父権制と混同。）このことの詳細については、後天的定住集団社会Ａにおける母権の再発見についての項目を参照されたい。
男尊女卑（男性優先）の社会では、見かけは男性が強い。男性は、自分が（女性よりも。）強い立場にいると錯覚するため、男性の自尊心が満たされやすく、男性は自己の立場の弱さに気づきにくい。男性中心社会の神話は、こうして生まれた。この場合、男性には、自分の置かれている立場の弱さ・悪さの自覚がない（男性優先の本当の意味を取り違えて、自分は強いとうぬぼれている。）ということ。
男尊女卑が、男性の強さを象徴する行動様式であると見なす、従来の後天的定住集団社会Ａフェミニズムの見解は、否定されなくてはならない。男性優先だから、男性が強い、支配的であるとは言えない。男尊女卑（男性優先）は、実質的には、農耕環境に不適合な、弱い立場にいる男性を（強い女性が。）サポート・保護する思想であるということ。言い換えれば、男性が弱く、環境適応に手間がかかる分を、強い(農耕環境により適合的な)女性に肩代わりさせる思想である。
後天的定住集団社会Ａでは、封建的とされる第二次大戦前からも、女性の方が強かった形跡が認められる。
[Benedict1948]によれば、一家の財布・事務処理を一手に切り回すのは姑（女性）であったということ。
姑（女性）は、息子の嫁を一方的に離縁させる権限を握っていた（舅は何もしていない。）ということ。
家庭の父（男性）は、子供たちがあらゆる義務を尽くしてその恩に報いはするが、ややもすれば「あまり大して尊敬されない人物」であった、とされている。
男女平等が唱えられ、男性の女性に対して当然のように世話や奉仕を要求できる特権＝「男尊女卑」が剥奪されるようになったことにより、社会の実権を握っている女性の強さが、前面に徐々に出て行き始めた。
〔４．
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、女性の弱さ、性差別（女

性が不利。）を訴えるということ。これは、女性の弱い先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会で生れた理論を、女性が強い後天的定住集団社会Ａへと、何も考えずに直輸入して、強制的に当てはめようとするものである。かえって、男性の、実質的根拠のない自尊心（自分の方が立場が上、女性は哀れむべき存在。）を満足させ、男尊女卑の表面的理解につながっているということ。後天的定住集団社会Ａの本当のあり方（女性主導、女性支配）を見えなくさせる原因となり、有害であるということ。
男尊女卑は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流フェミニズムによる批判の対象とは、もともとならない。男性の弱さを原点とする、強い女性が弱い男性を保護する(サポートする・面倒を見る...)、という考え方が根底にあるからである。男性の強さを前提とするフェミニズムは、女性の弱い遊牧社会（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ）向きであり、農耕社会（後天的定住集団社会Ａ）には馴染まない。
男尊女卑は、男女両者の立場を、少なくとも表面的には対等にするためにやはり必要ではないか。（見かけ・表は男性が強い、実質・裏的には女性が強い、ということで、表裏合わせると、ちょうどバランスが取れる。）女性が支配する社会で、男性の自尊心(人間としての尊厳)を保つために必要と考えられる。
ただし、女性にとっては、男性が一方的に依存しようとして寄り掛かってくる重みを、自ら受け止める必要があり、負担が大きいのは確かである。男性は、女性に負担がかかるのを当然と思っている。この負担面での男女不平等（性差別）は、後天的定住集団社会Ａのフェミニズムでも、家事負担が一方的に女性に押しつけられるなどの形で、問題にされてきたが、(先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ直輸入の部分を無視して)この部分だけを取り出せば、それなりに理に適っている、と考えられる。
[参考文献]
Benedict,R. The Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture, Boston Houghton Mifflin, 1948 長谷川松治訳「菊と刀 - 日本文化の型」社会思想社1948
増田光吉:アメリカの家族・日本の家族,日本放送出版協会,1964
(初出1999年08月)

後天的定住集団社会Ａの男性＝「強い盾」論　 - 後天的定住集団社会Ａの男性の虚像 見せ掛けの強者 -

戦前から、後天的定住集団社会Ａの男性は、本当は無力な弱い存在なのに、女性によって強大な者と見せかけられている。「差別される弱い女性」を演出するフェミニズムもこの一環である。
女性は、生物学的貴重品として、男性に守ってもらおうとする。男性に、強い盾となってもらうことを必要とするということ。そのためには、男性に自分は強い、役に立つ人間だという自尊心を持ってもらうことが必要である。
後天的定住集団社会Ａの女性は、男性の自尊心を保つのに、躍起となっている。
男性が強い、強くなければいけないという神話の起源は、以下の通りである。
生物学的貴重性が強い女性を、外敵から守らねばならない。守るには、襲ってくる相手より、強くなければならない。男尊女卑(男性が偉くなければいけない)とは別である。あくまで、盾、防衛的な役割について、強いことが求められる。それ以外の側面では、強いことは必ずしも求められない。
「強い盾」としての男性の生成過程は、以下のようなものである。
男性は、本来持っているドライさを、稲作農耕社会のようなウェットさを要求される自然風土下では有害であるとして、生育過程において、育児権限を独占する女性によって剥奪され、無力なかたわ者となる。
男性は、そのままでは社会のお荷物となるので、生得的な筋力の強さ、武力指向および、生物学的に生き残らなくても、人間の子孫の継承にあまり影響が出ない点を生かし、(生き残らないと、種の保存に支障をきたす)女性を守る「強い盾」として、もっぱら活用され、訓練される。
後天的定住集団社会Ａにおいて、男性が優位に立っているというのは、男性に、強い盾になってもらおうとする女性による、作為的な見せ掛けである。
後天的定住集団社会Ａの女性は、自分の掌のうえで、男性を泳がせている。後天的定住集団社会Ａの女性は、その気になればいつでも社会の本当の支配者が誰かを見せつけることができる。ただし、それをすると、男性が、自尊心を失って萎縮してしまい、防衛・強い盾の機能を果たさなくなるので、しないだけである。
強い自尊心、プライドを女性によって与えられた男性は、わがまま・専制君主的になりやすい。
後天的定住集団社会Ａの父親(特に戦前)が「家父長的」に見える理由は、以下の通りである。
1)強引であること
2)威圧的・威張ること

3)厳しい、威厳がある、厳格である。

5)専制的、わがまま
6)断定的、責任を取る(取ってくれる)、決断力がある。
といった点にあるということ。

いずれも、人間的には、決して成熟しているとは言えない。
そこには、女性が望む「強い盾」としての側面ばかりが強化されている。
また、ドライさとは無関係のものばかりである。
個人主義、自由主義、合理性など、ドライさを削除されている点、男性としては、精神的に奇形である。

一方、強さは、確かにある。それは、筋力、攻撃力(怒り)といった、女性を守る道具としての強い盾として用いられる。
後天的定住集団社会Ａの男性の良く取る行動である、女性に代わって責任を取る、決断をするというのも、女性に欠けており、女性が欲しがる資質である。失敗したときに、責任を男性になすり付けることができる。
女性にとって、自らの保身を行う上で、都合のよい性質であるということ。
女性が、男性にウェットさを強いて、男性を支配下に置いたまま、自分の保身を図るため、うまく使いこなす際に、上記の性質を男性が持っていると重宝する。
ウェットな男性は、いかに強引、専制的…であって(強く見えて)も、本来のドライさを失っている以上、心理的には奇形、障害者であり、社会的弱者である。
後天的定住集団社会Ａの男性は、強い盾、ないし、給与を差し出す下級労働者としての、女性に都合よく限定した役割しか果たせない、それ以外の点では無能である。本質的には弱者であり、女性によって搾取される存在である。
後天的定住集団社会Ａの女性は、自分が社会の支配者であることを、必死に隠そうとしている。
男性の自尊心を傷つけて、強い盾として機能しなくなることを恐れるということ。
後天的定住集団社会Ａにおける女性への差別待遇も、男性の自尊心を確保するために必要である。
後天的定住集団社会Ａは、もともと、女性優位なので、そのままでは、劣位にある男性の自尊心が確保しにくく、人権問題となる。
後天的定住集団社会Ａの女性の男性に対する見方は、男性固有の、

個人主義、自由主義など、ドライな側面を、(稲作農耕社会にとっては)有害なので消したいが、かといって、自分たちを守る盾としての存在ではいてほしい、というものである。そこで、根底では、ドライな、本来の男らしさを否定し、男尊女卑といった、見かけ上の男性尊重と、女性によって人為的に作られた強さでしのごうと考えている。
後天的定住集団社会Ａに特有な「男らしさ」は、ドライさに基づく男性本来の男らしさとは異なるのである。そのことにほとんどの後天的定住集団社会Ａの男性は困ったことに気付いていない。
(初出2000年07月)

後天的定住集団社会Ａの男性が、その本質は女性的にも関わらず、強く（男らしく）見える理由

後天的定住集団社会Ａの男性が、その本質は女性的にも関わらず、強く（男らしく）見える理由を以下にまとめたということ。

・姑気質で、自分よりも立場が下と思う相手を馬鹿にして、強く、高飛車に出る。
・周囲にどう見られているかがとても気になり、見栄張り、強がりである。
・仲間との運命共同体意識が強く、敵に対して、自分たちが丸ごと滅ぶまで、徹底抗戦し、自害しようとする。

後天的定住集団社会Ａの男性は、基本的に、腕力、筋力、武力の強い女性相当だと考えられる。
(初出2014年04月)

後天的定住集団社会Ａの男性の弱さについて

後天的定住集団社会Ａの男性は、以下の点で、女性よりも弱い立場にあり、女性による支配の対象となっていると考えられる。こうした現状を打破する必要がある。これが、男性解放論の骨子である。
(1)自分の生得的傾向に反する「ウェットさ」を、育児過程で、母によって強制的に身につけさせられているということ。男性が本来持つべき、個人主義、自由主義といったドライさを失っている。
(2)女性にあたかも首輪を付けられて職場で給与稼ぎをさせられるかのような「鵜飼型社会」の中で、生活を女性によって全面的に管理

されているということ。自分の稼いだ賃金の使い道を決定する権限がない。自己賃金からの疎外が起きている。
(3)母性への依存心、甘えがある。すぐに母親やその代わりの存在に頼ろうとするということ。
(4)育児から疎外されているということ。子供が自分になつかない、子供から馬鹿にされる。自分の持つ文化を子供に伝えられないということ。
(初出2000年07月)

後天的定住集団社会Ａの男性はなぜダメか？

後天的定住集団社会Ａの男性は、総じて、世界的に見て魅力に乏しい存在であるとされている。後天的定住集団社会Ａの男性が、なぜ魅力に欠けるダメな存在なのか、どうした点を改善すべきなのか、以下に考えられる点を列挙してみた。
(1)所属する組織との一体感を追求し、集団主義、安定指向、年功序列(先輩の言うことを何でも聞き、後輩に対して威張る)意識が強い、といったように女性的な性格を持つ。個人主義、自由主義、未知領域への積極的探検といった男性が本来持つべき性格に欠けている。
(2)本当は社会の中では、女性に従属する下位者なのに、上位者と思って、命令口調で威張る。
女性に比べて優遇されるの(男尊女卑)を当然と思い込んでいて、スポイルされているということ。
自分のことを上位者と思っているだけに、プライドが高く、傷つきやすい。相手が自分に対して失礼かどうかやたらとうるさい。気難しく短気で、すぐ暴れたり怒ったりするということ。ガサツな乱暴者であり、暴君であるということ。
なぜ、後天的定住集団社会Ａの男性がスポイルされるかについては、母親の影響が大きい。
後天的定住集団社会Ａの男性＝息子は、母親によって甘やかされ、かしずかれ、何でもしてもらえる状態に置かれる。身の回りの世話を全部されている、焼かれているということ。
息子は、そういう状態が続いているうちに、いつの間にか自分を中心に世界が回っていると思いこむようになり、尊大で、わがままで、それでいて傷つきやすい性格を持つようになると見られる。
しかもその根底には、母親に心理的に頼り切り、甘えきった、依頼心が根強く息づいており、表面的にいくら威張っていても、母親に心理的に支配されきっていると考えられる。

(3)女性に対して、母親代わりに甘えようとするということ。女性を、観音様、マリア様みたいなと見なすということ。女性に対して依存的であり、その際、女性に対して当然のごとく寄りかかり、のしかかってきて、それに対してごめんなさいとか、ありがとうとか、一言も言おうとしない。女性に対する思いやりに欠けるということ。
(4)自活・生活能力に欠けるということ。身辺の世話を自分で行うことができず、皆、女性にやってもらおうとする。
以上を総括するに、後天的定住集団社会Ａの男性は、本来の男性性を失い、女性に頼りきりになっていて、人間的な成熟に乏しい存在であると言える。しかも、そのことを認めようとしない偏狭さを持ち合わせているということ。
女性からの解放を唱える以前に、こうした欠点をまず改めない限り、後天的定住集団社会Ａの男性の明日はない。
◇
（2007.4 追記）
しかし、インターネット掲示板の書き込みとかを見る限り、後天的定住集団社会Ａの男性は、今まで通り、母親や、母親代わりの女性（妻とか飲食店の女性とか）、女性代わりの組織（企業定住集団、学校等）に対して甘えつつ、威張ったり、わがままを通したりして、好き放題したいと考えているようであるということ。
つまり、母の支配の枠内にとどまりつつ、その中で好き放題するのが望みのようである。
同じ女性でも、「お袋」「母」~「姉」「姉御」には甘え、頼り、支配されるのを気にとめることもないが、一方、母以外の女や妻は叩いたり、見下す、低く見る、自分の性欲を満たす道具と見るのが通例である。女叩きをする男性は多いが、母を叩く男性は少ないかほとんどいない。
また、自分の甘ったれた現状に対する批判、耳の痛い言葉を、それが建設的なものであっても、全て自分に対する悪意の攻撃とみなして怒り出し、牙をむく、ひねくれた心を持っている。
少しは、父権の強い、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨやユダヤ、アラブ、モンゴルといった遊牧・牧畜系社会の家父長を見習って、母に対する依存心を捨てて、母から解放されて、男性として成熟してはどうなのだろうか？
筆者にとって気がかりなのは、実際のところ、後天的定住集団社会Ａにおける「男性解放」は、母からの解放ではなく、女性が社会的に優遇されていることを撤廃するための「解放」になっている点であるということ。（楽ができる、おいしい思いができるということ。）

女性ばかり優遇されるのは確かに問題であり、そうした状況から男性一般が解放される必要があるのは明らかであるが、その一方で、自分たちを根底で支配する母なる女性の存在や、そこからの解放に鈍感なのは、どうしたものであろうか？
(初出2003年06月)

今後の後天的定住集団社会Ａの男性が取るべき途。

現状の後天的定住集団社会Ａの男性が取ることのできる途は、大きく分けて2通りあると考えられる。

1つ目は、従来通り、男尊女卑によって、女性によって表面的に立てられ、上座に座って良い思いをすることで満足し、実質的には、ウェットで液体的な社会的雰囲気をかもし出す母や妻の精神的支配下に置かれ、従属的な地位に甘んじる途である。子育てや家庭の財布の紐といった重要な家庭内の権限を妻や母任せにするか、妻や母に取られた状態のまま、自らは、ひたすら働いて家庭に給与を振り込むだけに特化して他は何も機能しない人間ATM（自動預金預け払い機）になるか、都合の良い便利屋扱いで、母や、あるいは妻と子供の母子連合体にこき使われるだけで終わる途であるということ。

2つ目は、自らドライで気体的な父権を確立し、妻や母を表面的にレディーファーストで立てながら、子育てや家計管理権限といった実質的な家庭の支配権を握る途である。

後天的定住集団社会Ａの男性の立場を真に強化する観点からは、2つ目が望ましいと言える。そのためには、後天的定住集団社会Ａの男性は、母や妻によってかもし出される気持ち良い母性の麻酔薬の効果から一刻も早く醒めて、父性に目覚めないといけない。

(初出2012年08月)

後天的定住集団社会Ａのメンズリブを批判する　- 今後の後天的定住集団社会Ａのメンズリブが取るべき途 -

従来の後天的定住集団社会Ａのメンズリブは、今まで男尊女卑の考え方や家父長制的な家族制度、男性による企業・官庁などでの給与をもたらす社会的役職の独占などで、忍従的な役割を強いられて来た、とする女性側の抗議に押されて、男性の従来取って来た性役割をしぶしぶ見直す、言わば、女性に突き上げられた受け身の形で、進展して来たと言ってよい。
もう一つ、後天的定住集団社会Ａのメンズリブを特徴づけるのは、女性に対して優位に立っていることを前提として、弱い女性を助けようとする同情心である。劣位の立場に置かれた、解放されるべき女性に対して、自らの優位にある立場を、少し譲ってあげようとする、「強者の余裕」に裏打ちされた親切心がそこには見られる。職業面での役職を女性に明け渡すこと、育児や家事に負われる女性を手伝ってあげること、などが、従来のメンズリブが取って来た方策であった。
後天的定住集団社会Ａのメンズリブには、劣位にあるとされる後天的定住集団社会Ａの女性の解放に自ら歩調を合わせることで、自分は女性に対して優しいのだ、人格者なのだ、と周囲に(特に女性に対して)印象づけるねらいもあると見られる。
しかし、後天的定住集団社会Ａのメンズリブを押し進める人々が、こうした男性の優位を前提とした、悠然とした態度を取っていられるのは、彼らが、後天的定住集団社会Ａの持つ本当の性格に対して無知だからである。
伝統的な後天的定住集団社会Ａは、実は、ウェット＝女性的な性格を持っている。それは、集団主義、周囲との同調指向などといった、対人的な相互牽制、規制から成り立っている。こうした女性的性格は、後天的定住集団社会Ａにおける女性の勢力が、男性のそれを上回る、すなわち、女性が優位に立っていることで成立する。
また、後天的定住集団社会Ａの女性は、社会の中で、家計管理権限の掌握など管理職的な役割を果たし(男性は単に労働力としてこき使われているに過ぎない)、育児・教育面でも子供を支配し(この間、男性は自動的に、蚊帳の外に置かれている)、子供が成長しても、自分に対して甘えや依存心を持ち続けるように絶えず制御することで、強固な「母性社会」を築き上げている。
後天的定住集団社会Ａのメンズリブに関わる人々は、こうした、自分の「男性優位」の価値観を根底から突き崩す社会的事実から、無

意識のうちに目を背けてきた。後天的定住集団社会Ａのメンズリブの弱さは、まさに実質的な女性優位という、後天的定住集団社会Ａの現実に対応できていない、その点にある。
これからの後天的定住集団社会Ａのメンズリブには、その考え方を、従来の「男性優位」から、「女性優位」を前提としたものへと、180度転換させせることが必要である。「強者の余裕」など、もはや存在しないのであるということ。
後天的定住集団社会Ａのメンズリブは、少なくとも、女性と対等な立場に立つために、従来、ウェット＝女性的であった後天的定住集団社会Ａの性格を、少しでもドライ＝真に男性的なものに変えることを目指すべきである。そのためには、ドライな行動様式、すなわち真の個人主義、自由主義などを、少しでも早く、よりよく、身に付けるための「精神のドライ化」運動を起こすべきだろう。
また、従来、「一家の大黒柱」などとおだてられて来たのが、実は、単なる労働力として、母や妻の管理下でこき使われて来ただけ、という真実にも、早く気づき、その現状から一刻も早く脱却すべきである。女性の管理下から脱却するには、例えば、家計管理権限を、女性と共同で持ち合う比率を高める運動を進めることなどが考えられる。あるいは、女性が独占して来た、子育てにも積極的に関わり、自分の価値観を、少しでも子供に伝える努力をすべきだろう。また、女性の持つ家庭内での影響力を少しでも少なくするために、彼女らを積極的に、職場という「外の世界」へと進出させるべきであるということ。家庭の外に出ようとする女性と入れ替わりに、家庭の中に入ればよいのだということ。
最大の障害は、後天的定住集団社会Ａの男性が無意識に持つ、女性への「甘え」、依存心である。後天的定住集団社会Ａのメンズリブは、女性を「母性」の権化として、母親や妻などに、精神的に頼ろうとする現状の後天的定住集団社会Ａの男性の持つ傾向から、男性を何とかして脱却させる方策を練らなければならない。
(初出1998年08月)

お母さんの息子、お父さんの娘

後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちが家父長と思い込んでいる後天的定住集団社会Ａの男性たちは、只の「お母さんの息子」で

あり、父性未満の存在である。女性を守る、経済的に稼ぐ等、男性、夫としては機能しているが、一家の家計を管理するとか、子供の教育をするとか、一家の精神的支柱になるといった父親としては、あまり機能していない。

後天的定住集団社会Ａの男性たちが、父性を持つ、父権を実現する、真の家父長になるには、自分を包み込み、呑み込んでいる母の懐から脱出すること、母から自由になること、母性からの解放、「お母さんの息子」状態からの脱却が必要である。

一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの女性は、強い父性に支配された「お父さんの娘」状態から脱することの出来ない、母性未満の存在であると言える。

ちなみに、後天的定住集団社会Ａの女性は、「お母さんの娘」、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ男性は、「お父さんの息子」として表される、と言える。

(初出2012年06月)

後天的定住集団社会Ａの男性＝「母男」（母性的男性）論

[要旨] 後天的定住集団社会Ａの男性は、母性に支配された母性的男性＝「母男」として捉えることができます。これは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性が父性に支配された父性的女性＝「父女」として捉えられることと対をなしています。なぜ「母男」「父女」が問題なのか？それは、彼らが、両者とも共通に、自分とは異質の異性によって支配される社会的弱者、本来持つべき生物学的特性を異性によってそぎ落とされ、殺された社会的無能者と化した存在だからです。
◇
後天的定住集団社会Ａの男性は、個人の独立や自由といったドライ

で父性的な価値ではなく、相互の一体感、甘え、懐きの重視、集団への所属の重視といった、ジメジメ、ベタベタしたウェットで母性的な価値観に支配されている。要は、父性を失った母性的な男性なのであり、「母男」(母性的男性maternal male)と呼べるということ。「母男」は、母によって母性の麻酔を打たれた、母性の漬け物と化した男性である。
一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの女性は、個人の独立や自由、自己主張といった父性的価値観に支配された、相互の一体感、相互依存を重視する母性を失った父性的な女性であり、「父女」(父性的女性paternal female)と呼べる。「父女」は、父によって父性の麻酔を打たれた、父性の漬け物と化した女性である。
それに対して、後天的定住集団社会Ａの女性は、本来の母性を保った母性的な女性であり、「母女」(母性的女性maternal female)と呼べる。
また先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ男性は、本来の父性を保った父性的な男性であり、「父男」(父性的男性paternal male)と呼べる。
「母女」「父男」は正常であるが、「母男」「父女」は問題である。
では、なぜ「母男」「父女」が問題なのか？それは、彼らが、両者とも共通に、自分とは異質の異性によって支配される社会的弱者、本来持つべき生物学的特性を異性によってそぎ落とされ、殺された社会的無能者と化した存在だからである。
それに対して、「母女」「父男」は、本来の生物学的性の持つ特性をそのまま社会の中で発揮できる理想的な存在であり、社会的強者でいられるのである。要は、「母女」は相互の一体感、協調性を基調とする母性的態度が必要な農耕社会＝母性的社会、「父男」は個人の独立を基調とする父性的態度が必要な遊牧・牧畜社会＝父性的社会の中で、メジャーな支配者として君臨できるのである。
一方、「母男」「父女」は、それぞれ、母性的農耕社会、父性的遊牧・牧畜社会の中で、マイナーな被支配者としての立場に甘んじることになる。
後天的定住集団社会Ａは、稲作農耕社会の例にもれず、母性の支配する社会であり、そこでは、男性は「母男」、女性は「母女」となり、女性の勢力が男性を上回っている。
「母男」である後天的定住集団社会Ａの男性は、母親と強い一体感で癒着したまま成長し、その過程で、本来持つべき父性の発達を母親によって阻害され、精神的に母親に依存したままの状態で大人になる。その点、「母男」は、いつまでも母親の息子の立場から脱し得ない男性の問題を明らかにするマザー・コンプレックスの概念と

深い関係があると言える。（同様に、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性＝「父女」は、父親に精神的に依存し、父親の娘の立場から脱し得ない点、ファザー・コンプレックスと関係する。）
「母男」＝後天的定住集団社会Ａの男性は、企業定住集団などの所属集団に母性的に包容されることを要求する。後天的定住集団社会Ａの企業定住集団や官庁は、その主要な構成要員が男性なのにも関わらず、相互の一体感、所属感を重視する母性的な雰囲気に包まれているというのが実態である。
彼は、家庭に帰れば、「母女」である妻に対して、母親代わりに心理的に依存する「大きな子供」である。また、家計管理や子供の教育といった家庭の主要な機能は「母女」である妻に独占されていて、家庭の中では居場所がなく、疎外された存在である。
彼は家庭内で子供に対して、精神的な影響力を持つことができず、その子供は再び「母」と癒着し、父性の発達を阻害されることを繰り返す。
「母男」である後天的定住集団社会Ａの男性は、社会的弱者の立場を脱するためには本来、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ男性のように、父性を正常に発達させた「父男」となるべきなのであろうが、仮にそれを実現すると、旧来の稲作農耕社会の伝統と対立することになり、社会の混乱を招くことになるという側面もあり、問題はさほど簡単ではないと言える。
(初出2006年08月)

後天的定住集団社会Ａの男社会は実質女社会。

後天的定住集団社会Ａの男社会は、実質女社会である。
後天的定住集団社会Ａの男性は、母親の強い影響で、女並みに、ウェットできめ細かく、陰湿になっている。
例えば、同僚の昇進とかで、嫉妬心が強く、同僚の足を陰湿な手段ですぐ引っ張ろうとする。要するに、自分は自分、他人は他人と切り分けることができないのである。
父性の強い先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会において、自分は自分、他人は他人と冷淡に切り分けて、殺伐、ドライな雰囲気に満ちるのとは対照的である。
（初出2011年10月）

後天的定住集団社会Ａの男性はなぜ家事をしないか？

後天的定住集団社会Ａにおいても、近年、男女共働きの家庭が増えている。その際、女性の側から問題とされるのが、後天的定住集団社会Ａの男性が家庭において、炊事、洗濯等の家事をほとんど手伝わず、職場に直行して仕事ばかりしているということである。
それでは、なぜ、後天的定住集団社会Ａの男性は家事をほとんどしようとしないのであろうか？
筆者は、その答えは、実は、後天的定住集団社会Ａの女性側に原因があると考える。この場合、女性というのは、男性の母親や、専業主婦の妻を指す。
従来、後天的定住集団社会Ａにおいては、男性の母親は、自分自身では社会的出世を直接行わず、自分の息子を「自己実現の駒」として、学校、職場で、いい成績を取らせて出世、昇進させ、自分自身は彼らの管理者となることで、社会的に偉くなった息子の内側から、後天的定住集団社会Ａを間接的に支配してきたのである。
そのように、息子を、学校、職場でいい成績を取らせて、ひたすら出世、昇進の道を歩ませるには、息子の母親は、学校での勉強や、職場での仕事以外の、それらに差し支えるような家庭の様々な家事は、なるべく息子にさせず、自分が代わりに全てやってあげようとする。息子の方も、母親のそのような態度にいつの間にか慣らされて、自分は勉強、仕事だけやっていればいいのだ、その他のことは皆母や妻がやってくれるのだと思い込むようになる。
これが、後天的定住集団社会Ａにおいて男性＝母親の息子が、勉強、仕事以外の家事をしなくなる一番の原因であると言える。原因は、男性を社会的になるべく効率的に出世、昇進させようとする男性の母親の態度にあるのである。
この男性の母親の態度は、男性の(専業主婦の)妻にも引き継がれる。妻は、男性が社会的に出世、昇進して、偉くなり、それに伴って、自分の社会における扱いが例えば「企業定住集団の代表夫人」とか言われるようになって向上したり、男性が出世したりするのに伴って収入が増えて、自分もよい暮らしができるようになることを望んでいる。
そこで、妻は、男性を、職場での仕事に専念させて、それ以外のことに神経を使わなくて済むように、仕事以外の家事は全て自分が賄うという姿勢を見せる。それが、男性に、「ああ、自分は家事をやらないでいいのだな、仕事だけしていればいいのだな」と思わせるのである。
最近は、後天的定住集団社会Ａの若い女性も、あまり家事をしなくなってきているという話がある。これも、娘の母親が、娘のことを「自己実現の駒」として、勉強、仕事に専念させ、家事は全部自分が代行する態度を見せているからに他ならない。この背景には、男

女雇用機会均等法などの導入で、女性も、職場で一生懸命仕事をすれば、男性と同じように出世できるとする、「女性による社会の直接支配」の道の整備が開始されたことと関係している。
今までは、娘は、自分自身は直接社会的出世を行わず、男性のもとに嫁いで、家事を全部やる代わりに、男性(夫や息子)を職場での仕事に専念させ、ひたすら男性(夫や息子)の尻を叩いて、出世させようとしてきた。言わば、夫や息子を経由した間接的な社会的出世（間接出世）を行っていたのであるということ。それが、今度は、自分自身が直接出世する道が開けたため、今までのように、家事を女性ばかりする(男性がしない)のが急に不公平に見えるようになって、不満の声を上げているのが実態であろう。
この問題を解決するには、どうしたらいいか？それには、男性を「自己実現の駒」としてその尻を叩いて出世させようとする、言わば「社会の(男性を通じた) 間接支配」をしようとする女性の数を減らすことが第一である。男性が勉強、仕事ばかりして、家事をしないのは、彼女らの態度が根本原因であるからだ。
そういう点で、「男性が家事をしないのは不公平だ」と非難の声を上げる女性たちの本当の敵は、実は男性ではなく、(男性を「自己実現の駒」として極限までこき使うために、家事を男性に代わって全て代行しようとする)男性たちの母親や、専業主婦指向の妻であると言える。そういう女性たちが減らない限り、職場での仕事指向の女性の(男性に対して)感じる不公平感はなくならないであろう。
要は、彼女たちに、男性を通さず、自分自身で、直接社会の中で偉くなるように方向転換させる必要がある。特に、男性の母親たち＋専業主婦指向の妻たちをそういう「自己実現を男性に頼らず、自分自身で行う」方向に持っていく必要がある。
そのためには、そうした女性たちに、家事以外の、職場での仕事をこなしていくための能力を付与していくことが必要となる。要は、彼女たちに「職業訓練」をさせるのであるということ。
ここで問題なのが、彼女たちが、家事以外には、余りこれといった職業的能力が身についていないことがあげられる。そこで考えられるのが、家事それ自身の職業化である。要は、各家庭において、家事の全面的なアウトソーシングを行い、家事の外部委託を大幅に増やすのであるということ。その委託業務に、「家事のプロ」である彼女たちを投入するのであるということ。要は、炊事、洗濯を外部企業定住集団のメンバーが代行するようにし、その外部企業定住集団のメンバーとしての仕事を彼女たちが行うと言う訳である。
それも、家政婦として働く訳ではなく、炊事なら、食事を外部の大規模な給食企業定住集団センターで作って配達する。洗濯なら、洗濯物を各家庭に集配に来て、従来のドライクリーニング業と同様に

工場で集中的に洗濯を行い、再び、各家庭に済んだ洗濯物を届けるというのを、大きな企業定住集団組織として分業して行うのであるということ。そして、その企業定住集団の主要業務を、それらに慣れている女性たちに担わせるのであるということ。そして、それらの企業定住集団で、彼女たち自身が、自ら(従来の男性同様)職場での仕事に専念して、昇進、出世競争を行うのである。
こうすることで、そもそも企業定住集団の仕事と、家庭の家事という分け方自体が消滅する(全て企業定住集団の仕事に一本化される)ので、従来の、「男性は家事をしないので、一方的に家事の負担が来る女性には不公平」という論調は成り立たなくなる。要は、従来の家庭における家事を、炊事、洗濯企業定住集団の職場での仕事として外部委託することで、「男性も女性も、(仕事以外で)家事をしなくて済む」ようにすればいいのである。
これは、子育ても同様であり、手間のかかる作業は、保育園、幼稚園によるアウトソーシングを積極的に活用することで、従来女性に負担が偏りがちだった作業を低減することができ、女性が職場での仕事に専念できるようになると考えられる。
男性にとっても、家事や育児をせずに、今までどおり職場での仕事に専念しても、何ら非難をされる筋合いがなくなることになり、「男は仕事」という価値観をそのまま維持することができるというメリットがある。もっとも「女は家庭」という価値観は放棄しないといけない。
あるいは、男性たちは、女性たち(母、専業主婦指向の妻)による「自己実現の駒」としての役割、プレッシャーから解放されることで、今までみたいに母、妻の(男性自身の社会的昇進に対する)期待という精神的重圧から解放され、より自由に精神的余裕を持って生きることができるようになるメリットもあると言える。
(初出2005年10月)

仕事人間、企業定住集団人間になりやすい後天的定住集団社会Ａの男性

後天的定住集団社会Ａの男性は、なぜ仕事人間、企業定住集団人間になりやすいのか？
後天的定住集団社会Ａの男性は、仕事ばかりに打ち込んで、家庭のことを犠牲にしやすい体質を持っている。
それは、なぜであろうか？
(1)自分の母親から、仕事に打ち込むようにコントロールされているからであるということ。母親の自己実現のための道具、操りロボッ

トと化しているためであるということ。
(2)結婚すると、妻に、家計管理、子育てといった家庭機能の中枢を占領されるためであるということ。中枢の大事な機能を妻に全部取られる結果、夫の機能は、給料を家庭に入れるだけしか残っていない。それにひたすら専念しないと自らの存在意義が失われると考えるのである。
(3)家庭内で、妻と子に仲間はずれにされるためであるということ。母と子が緊密に癒着して母子連合体、カプセルを形成し、そこから父親を排除するため、夫は家族定住集団の中にいても、邪魔者扱いされるか、便利な家事労働力提供者としてこき使われるだけである。それなら、家族定住集団の外で過ごしたい、家族定住集団から逃げたい、役所や企業定住集団で仕事に打ち込みたい、妻の支配から自由になりたいと考えるようになるのであるということ。
こうした現状を打破するには、以下の通りである。
(1)男性自身が、母親による干渉、支配から自由になることが必要である。
(2)結婚時に、家計管理、子育てといった家庭機能の中枢部分を、妻と五分五分で公平に分担できるように影響力を強めることが必要である。
(3)父子の心理的絆を、母子の絆に負けないように強めることが必要である。
（初出2012年1月）

「鵜飼型社会」からの脱却

後天的定住集団社会Ａのような農耕社会は、優位に立つ女性による、劣位の男性に対する生産管理が行われている、「鵜飼型社会」である、といえる。男性は、魚(給料)を取ってくる鵜鳥である。一方、女性は、鵜鳥(男性)を、魚(給料)を取らせるために、船(家庭)から漁場(職場)へと追いやる形で、働かせつつ、鵜鳥(男性)が働いた成果である魚(給料)を、鵜鳥(男性)から、(給与袋まるごと召しあげる、ないし給与振込銀行通帳を我が物にする形で)強引に吐き出させて、取り上げて自分の管理下に置く、鵜匠の役を実行している。鵜鳥(男性)は、実質的には、鵜匠(女性)の下で一方的にこき使われる下級労働者である。
農耕社会におけるメンズリブ＝本当の男性解放は、本来男性が生得的に持ち合わせていたが、ウェットな社会に適応する過程で失った、個人主義、自律・自立指向、非人間(メカ)指向など、ドライな生き方の回復にある、と考えられる。

上記のことが果たせぬまま、家事・育児などに参加しても、下級労働者として、女性にこき使われるだけの存在に成り果ててしまう。
育児に参加する場合も、次世代の子供に、自分の生得的に持つドライな行動様式を注入できる場を確保することが条件となる。
女性への職場開放は、従来後天的定住集団社会Ａの女性が家庭で占めてきた権限を縮小する(女性が、外の仕事に忙しくなって、家庭内の管理に回す時間が少なくなる)。これは、従来、家庭内で影が薄かった後天的定住集団社会Ａの男性が、家庭運営の主導権を女性と対等に持てるようになるチャンスである。したがって、「鵜飼型社会」からの脱却のためにも、男性は、女性の「社会進出」に対して寛容になるメリットは、十分あると考えられる。
(初出1999年08月)

後天的定住集団社会Ａの男性ジェンダー学者について

現在の後天的定住集団社会Ａの社会学、女性学においては、女性のみならず、男性のジェンダー学者が少なからず存在し、後天的定住集団社会Ａにおける女性差別の撤廃と、女性の勢力拡大を、女性の学者、運動家族定住集団と一緒になって声高に叫んでいる。
はっきり言って、彼らは、母が支配する社会としての後天的定住集団社会Ａの現状を完全に取り違えており、後天的定住集団社会Ａを女性の立場が悪い社会と誤解しているのである。
これらの男性学者たちは、後天的定住集団社会Ａにおいて、自分たち男性が置かれている立場の悪さに気付かず、自分たちを社会的強者、優位にある者として、より劣位にあるとする女性たちに慈悲的に接しようとしているのである。
彼らの心の奥底では、男性が女性よりも弱いことを認めることのできないプライドの高さがあり、その点、彼らが表立っては否定している男尊女卑に、彼らは強く染まっていると言える。女性差別撤廃を声高に叫ぶことで、彼らは、後天的定住集団社会Ａにおける女性の弱さを再確認したつもりになり、そのプライドを満足させているのである。
こうした、姑や母といった女性たちが強権を握っている後天的定住集団社会Ａの実情を正しく捉えることに失敗しつつ、そのことに気付かず、女性が弱い社会と見なし続ける彼ら男性学者たちの姿は、滑稽であり、冷笑の対象としてふさわしいものである。
興味深いのは、彼らのような、後天的定住集団社会Ａの現実の把握に失敗する学者がなぜ次々と輩出するのかということである。
彼ら男性学者は、基本的に、明治時代以来変わらない後天的定住集

団社会Ａの学者(特に国家の所有者一家の御用学者)の伝統的な役割である、先進先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論の消化吸収と小改良、後天的定住集団社会Ａへの導入、当てはめの役割にひたすら則っているのである。
彼らは、自らは、独自の正しい理論を生み出す力を持たない。彼らは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを、「正しい」「正解の」理論の供給基地と見なし、「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ＝先生」という図式に基づいて、フェミニズム、ジェンダー理論のような先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論を何も考えずにひたすら導入する。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論から離れて、自ら独自の理論を打ち出して主張することは、先生役である先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを乗り越えようとする一種の越権行為と見なされ、学者仲間から足を引っ張られることになる。
彼らは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論を「正解」ないし「権威ある正しい学説」と見なし、その理解と暗記、小改良と後天的定住集団社会Ａへの導入、当てはめに夢中になる。
それは、伝統的な大学入試や学者になるための門になる大学院入試に向けて、手っとり早く既存の「正解」を求める教育を受けてきた彼らにとっては、ごく自然な、疑問の余地のない行き方なのである。
ジェンダー理論のように、その当てはめの対象となる社会領域のあり方が、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと後天的定住集団社会Ａとで女性の持つ社会的勢力が大きく異なるといったように社会の実情が大きく異なる場合、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論を後天的定住集団社会Ａに直輸入しようとする行為は、「そもそも元々一定条件下でのみ有効であり、その条件の元で使用されていた化学薬品等を、それらとは性質の異なる条件の現場に対して、その性質や条件の違いを認識しないまま、投入する」ことと同じであり、危険な自殺行為となる。その危険を、彼らは、ほとんど認識しないまま、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ産の「正解」理論を後天的定住集団社会Ａに広める第一人者となって尊敬を受けようと必死になって、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論を後天的定住集団社会Ａに導入するのである。
彼らは、自分が真っ先に目を付けてシンパになった先進先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論を後天的定住集団社会Ａに、その理論の第一人者となって広めることができ、それによって自分の名声が上がればそれでよいのであり、ジェンダー理論も、自分たちの名声を上げるための手っとり早い道具なのである。
彼らにとって、後天的定住集団社会Ａの現状ははっきり言ってどうでもよいのである。彼らは、自分たちが導入しようとする先進的移

動生活中心社会群ＦＧＨの理論に合わせた形で、後天的定住集団社会Ａの現状を曲げて把握する。
これは、ジェンダー理論についても同様であって、彼らは、自分たちが導入しようとする先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのジェンダー理論、フェミニズム理論に合わせた形で、姑や母が社会的に大きな勢力を持つ後天的定住集団社会Ａを「正しく」曲解するのである。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのジェンダー理論は、女性の立場が弱いことを前提とした理論であり、彼らはそれを後天的定住集団社会Ａに導入するに当たって、後天的定住集団社会Ａにおいて女性が弱いと考えればうまく直輸入でき、理論の後天的定住集団社会Ａへの第一の最先端の紹介者となれておいしい思いができて好都合だと考える。そこで、後天的定住集団社会Ａの女性のことを、自分たちが導入する「正しい」「正解の」先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論に合わせて、社会的に弱い存在だということにしようと半ば無意識のうちに考えるのである。
そして、後天的定住集団社会Ａの女性が弱いことを示す証拠のみを専ら集めようとする。その際、後天的定住集団社会Ａにおいて、表面的に男性が女性よりも威張っている男尊女卑とかに着目する。男尊女卑は、自分たちが導入しようとする先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論に合致した現象なので、それを見て「やはり自分の導入しようとする先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論は正しいのだ。自分たちはその先進理論を導入し、後天的定住集団社会Ａに対して啓蒙者となり、社会改革の最先端を行って皆の注目を集めるのだ。」と自己陶酔に陥るということ。
そうして、後天的定住集団社会Ａにおいて、女性が男性よりも強いことを示す証拠は、意図的というか半ば無意識のうちに無視するのである。
その証拠に、彼らの書く論文や書籍には、後天的定住集団社会Ａが母子間の紐帯、癒着が強く、子どもが母の意を自発的に汲んで動く動く形で母が社会を支配している母性社会であるとか、後天的定住集団社会Ａの国民性がとかく受け身で、相互の和合や一体感を重んじる女性的な雰囲気を強く持っており、女性優位であるとか、家庭の財布の紐を握るのが夫ではなく妻や姑(夫の母)であるとか、家庭において、男性と子どもとの間の結びつきが薄く、子どもを教育する権限は女性が独占しているといった、女性が後天的定住集団社会Ａを支配する側面は、ほとんど出てこない。
後天的定住集団社会Ａの女性(嫁や嫁になる予定の娘さんたち)は、本当は姑を批判したいのだけれど、それができないので、心理的な捌け口を求めて、男性を批判しているという点にも彼らは気付かな

い。
こうした先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論の後天的定住集団社会Ａへの強引な、機械的な直輸入と、輸入に伴う矛盾点の無視を行うこと自体、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論を権威ある正解と見なして、それと心理的に一体化して、信仰の対象とし、この理論に付いていけば大丈夫だと考え、その理論のシンパとなって、理論を頼りにし、心理的に依存しよう、甘えようとする女性的な態度に基づくものであり、母性に支配されていることの証と言えるということ。なおかつ、当の理論を直輸入しようとする本人は、そのことに気付かないまま、自分自身に対しても矛盾している先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論をひたすら信仰している点、心理的に矛盾、ねじれを内包していると言える。
彼らはまた、自分の性向が受け身であり、自分からは変われない、新たな機軸を生み出せないのを、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論を身にまとって、自ら改革者になった、変わったつもりでいるのである。そして、自分を改革者としてアピールしようとするのであるということ。
(初出2007年11月)

保守的な後天的定住集団社会Ａの男性の「背後霊」

後天的定住集団社会Ａの男性は、全般に保守的、退嬰的で冒険が嫌いである。
そのことは例えば、学校卒業後の就職先選択で、これから先どうなるか分からないベンチャーではなく、既に安定している、権威がある官庁や大企業をより優先して選択することとかに現れている。
本来、男性は、既存の秩序を破壊、変革し、オリジナルな新境地を打ち立てるのを得意とするはずなのであるが、後天的定住集団社会Ａの男性はそれとは逆のコースを進んで、そのことに疑問とか特に持っていないようである。
後天的定住集団社会Ａの男性は、後天的定住集団社会Ａの大企業とかで、研究開発で、他の企業定住集団にない新製品を作っているではないか、という話もあるが、実際のところ、彼らは、ライバル他の企業定住集団がいるので、ライバル他の企業定住集団との競争に勝って顧客を獲得するために仕方なく新しいことにチャレンジしている、せざるを得ないのだという方が正しいだろう。ライバルがいない寡占状態になれば、彼らも、役人のように、新しいことにチャレンジせずに既存の前例に沿って生きる行き方を選択することになる。

後天的定住集団社会Ａの男性は、なぜ、こうした保守的で、前例、しきたりを重視する生き方を選択するのであろうか？
実際のところ、彼ら後天的定住集団社会Ａの男性の背後に、そうした生き方を取るように仕向けている背後霊のような存在がいるのである。それは、男性の母親であったり、専業主婦の妻であったりといった、後天的定住集団社会Ａの女性である。
女性は全般に、自らの保身、安全に敏感で退嬰的であり、経済的に安定していて、新しいことに手を出して失敗するより、既存の秩序を守ってその枠内で生きることを指向する。
彼女たちは、男性に、そうした自らの保身、安全、経済的安定が確保されることを最優先にして要求する。一方、後天的定住集団社会Ａの男性は、強い母子一体感の中で育ってきている結果、母親や妻に対して、心理的に依存し、甘えているので、そうした彼女たちの要求に対して、反対することが心理的にできない。というか、知らず知らずのうちに、そうした生き方が望ましいのだと自分でも思うようになっているのである。
後天的定住集団社会Ａの男性は、本来女性的な価値観である、既に確立された力を持つ中央官庁や大企業に就職して、その中で出世して、経済的に安定し豊かになるのがよいのだ、という価値観に知らず知らずのうちに深く感染し、既存の秩序、権威を破壊して新秩序を打ち立てるというチャレンジングな男性的生き方を回避するようになっているのである。
こうした、後天的定住集団社会Ａの男性の保守性は、結局、後天的定住集団社会Ａの男性が、女性的価値に支配されているためにそうなっているのだと言える。つまり、後天的定住集団社会Ａの女性の社会的影響力の強さの現れであるということができる。
後天的定住集団社会Ａの男性が本来の男性性を取り戻すには、こうした女性由来の保守性を克服することが求められる。
母親や妻の望む通りに、既存の秩序、権威に適応し、その枠内で生きるのか、既存秩序を破壊して、新境地を打ち立てる男性本来の方向に進むのか、後天的定住集団社会Ａの男性は問われているのである。
(初出2008年03月)

母の掌の上の後天的定住集団社会Ａの男性

後天的定住集団社会Ａの男性のイメージは、お母さん＝後天的定住集団社会Ａの女性の手のひらの上で遊んでいる、腕白でわがままな未成熟な男の子というイメージである。

要するに、母の範囲内、影響内にとどまっており、そこから中々出られないのが後天的定住集団社会Ａの男性なのである。
そこには、母に守ってもらいたいとか、抱かれていたいとか、甘えていたいといったように、母の懐の中にいたいという「胎内回帰指向」が見えるのである。所属企業定住集団組織が母親代わりになっていたりする。
母にとって息子のような子供は一番大切な存在であり、大事に扱われやすい。それゆえ、後天的定住集団社会Ａの男性は、そのように母親に大事に扱われているうちに、自分が一番大切で可愛いと考えるようになり、女性同様、自己保身第一のナルシストになりがちであると言える。
（初出2010年7月）

母への反抗を恐れる後天的定住集団社会Ａの男性

この文書では、後天的定住集団社会Ａの男性に対して、自分の母親との生暖かい一体感を断ち切って、自分の母親の支配から脱却し、独立することを提案している。
しかし、実際のところ、こうした提案に耳を貸す後天的定住集団社会Ａの男性は残念ながら少ないだろうというのが、筆者の読みである。
一つは、後天的定住集団社会Ａの男性が、母親とのぬるま湯のような心地よい一体感、共感に浸りきっていて、そこから自力で抜け出すことが難しいということがある。せっかく母親と一緒に気持ちよい思いでいるのに、何でそこから出てわざわざ寒風に身をさらさなければいけないのか？という拒否反応であるということ。
もう一つは、上記の「母親の支配から脱却しましょう」という提案は、今まで自分を慈しみ育ててくれた恩人である母親に対して、反抗する、弓を引く行為に出る羽目になるからである。「慈母」「恩人」に弓を引くことなんて、心理的に出来るわけがないということである。
こうした母への反抗を拒否する後天的定住集団社会Ａの男性の心情は、それだけ、後天的定住集団社会Ａにおいて、母親と子供との間の一体感、共感が根強いこと、母と子を一つのカプセルと見なす母子連合体の存在が強力であることの現われである。
後天的定住集団社会Ａの男性の母性からの解放には、母子一体感、母子癒着の破壊が必要であるが、当の男性が、母の作り出す強烈な母子一体感に心地よく浸りきることによってそれを阻まれているのが現状と言える。

(初出2009年5月)

女性による支配に対して声を上げない後天的定住集団社会Ａの男性

なぜ後天的定住集団社会Ａの男性は、女性による支配に対して、声を上げないか？
(1)男が女によって立てられる、優先される、伝統的な弱者優先の男尊女卑に満足しているためである。
(2)自分、男は強いというプライドを壊されるので、女性によって支配されていることを認めたくないためである。
(3)母親に支配されるのを、気持よく思っているためであるということ。母との心地よい一体感に満足している、出たくないためであるということ。
(4)女性による、支配責任回避や被害者意識の充足を目的とした「後天的定住集団社会Ａは男社会である」という大合唱に思わず感化され、説得され、呑まれているためである。
(5)性的に惹かれている女性（奥さん、恋人）に怒られたくない、嫌われたくないためであるということ。
（初出2012年1月）

後天的定住集団社会Ａの勝ち組男子は、実は負け組。

後天的定住集団社会Ａにおいて、収入や地位の面で上位を確保した、いわゆる勝ち組の男性たちは、実際のところ本当に勝ち組なのであろうか？
後天的定住集団社会Ａにおいて勝ち上がるには、それなりに後天的定住集団社会Ａに適応、適合することが必要であるが、その際問題となるのが、ウェットな後天的定住集団社会Ａは、女性的であるということ。（集団重視、相互一体感、和合の重視・・・）それは、実質母性の支配下にあるというということ。
つまり後天的定住集団社会Ａで成功するには、ものの考え方を女、母に合わせないといけないということである。女流にならないと成功できないということ。
後天的定住集団社会Ａにおける勝ち組男性の人生は、往々にして男性当人の人生ではなく、その母の人生になっていることが多いのではあるまいか。一見自分の意志で動いているように見えながら、実は母の意志で動いているのではないだろうか。後天的定住集団社会

Ａのシステムは、母のためのシステムなのである。
要するに後天的定住集団社会Ａで勝ち上がるには、自らの男性性（個人の自立、自由の確保・・・）を捨てて、女流になり、母の言うことを聞いてその通りに動くことが必要であり、その点、男らしさの喪失という点で負け組になってしまうのである。
これと対比して、女性は、女流の後天的定住集団社会Ａでは、存在するだけで勝ち組であると言える。
（初出2009年6月）

伝統的稲作農耕が後天的定住集団社会Ａの男性弱体化の原因。

伝統的な稲作農耕が、後天的定住集団社会Ａにおける、母、姑による社会支配をもたらし、男性の立場の弱体化の大きな要因となっている。

稲作農耕は、一箇所に定住し、農業水利とかで相互に強く依存し合い、集団一斉作業を必須にする。その点、成員の自由な地点移動や別の土地への移転、個人主義に基づく独立したペースでの作業、といった、ドライで気体分子的な男性に有利な行動様式がことごとく制限され、周囲の他定住成員との絶えざる和合、同調、協調、集団主義に基づく周囲との一体感の醸成、といったウェットで液体分子的な女性に有利な行動様式を、稲作農耕に従事する人々は取り入れざるを得ないのである。

その点、男性の立場を強化するには、伝統的な稲作農耕からの脱却が必要である。一つは、牧畜、遊牧をそのまま導入することであり、北海道とかで有望である。 もう一つは、カリフォルニアの稲作農耕のように、遊牧、牧畜的視点から構築された、新たな大規模、自動化稲作農耕を、本州においても実践することである。
（初出2011年8月）

真の男女共同参画社会実現を

真の男女共同参画社会の実現においては、男女が、家庭でも、職場でも参加が対等となる50:50を目指すべきである。男だけの社会、女だけの社会を無くし、男女混同を目指すべきであるということ。
後天的定住集団社会Ａの職場は、男の数が多い、男メインのいわゆる男社会になっており、男女比がアンバランスになっている。これ

は、勤め人である男性の母親たちが、息子＝男性のことをコントロールして、自己実現の道具として互いに競う場として職場を一斉に利用していることが原因である。あるいは、男性の妻たちが、自分では稼ぎの労働をしなくて良い、楽な専業主婦の立場から出ようとしないことが原因である。要するに、妻たちは、夫に働かせて、その給料をぶん取る剥奪者、寄生者、働かない有閑階級であろうとしてきたのであり、その姿勢が、妻の職場からの退去と、職場における男性の氾濫を招いてきたのである。
しかるに、後天的定住集団社会Ａの男性の給料は、先天的定住集団社会Ｂとかがのしてきたのに伴って、確実に下がってきており、その結果、妻も働きに出ざるを得なくなってきている。これは、稼ぎの労働の男女共同化にとって望ましい傾向であると言える。
一方、後天的定住集団社会Ａの家庭は、母や妻の主導する女社会になっている。家計管理や、子供の教育といった重要な家庭の権限が女性へと集中しており、後天的定住集団社会Ａの男性はそこから疎外されている。今後は、家庭における男女共同参画の実現が必要であり、男性にも、そうした権限を分けるべきである。幸い、後天的定住集団社会Ａ経済における不況の進行に伴い、男性の勤務が暇になり、家庭に力を向ける余裕が生まれつつある。男性は、この機会を利用して、家庭に積極的に入り、女性が独占している家計管理、子育ての権限を半分奪取すべきである。
（初出2012年2月）

子育ての男女平等の実現

女親が女の子を責任を持って育て、男親が男の子を責任を持って育てるのが、育児の、従来の女親片親に偏らない、男女平等を実現する効果的な方法であるといえる。これは、同時に、育児担当の性による子供支配、すなわち、子供の自分の性への一方的な染め上げを回避させることにつながる。女親がべったり育てると、女の子だけでなく、男の子も、女の色に染まってしまうのである。
（初出2012年1月）

後天的定住集団社会Ａ、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１における男の子優遇の本当の理由

後天的定住集団社会Ａや先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１においては、男の子供が優遇、優先され、女の子供が冷遇さ

れる。 子供の支配者は母親であり（父親は除け者にされている。）、女性による社会支配が貫徹されているのであるが、一見女性に不利な状況が生じている。 婿母の姑の方が嫁母よりも偉そうな態度に出る。 同じ子供でも、男女差別される。 母親自身が女の子を差別している。これは、自分で自分のことを差別しているのに等しい。 な ぜ、男の子供が優遇されるかと言えば、男性の持つ家族代表機能のせいである。男子は、いざというときに家族の前面の矢面に立つ必要があり、表に立つもの、 代表者として日頃の心構えが必要である。代表であることを自覚させるために、周囲がわざと尊重する振りをするのである。 女子は、自分は安全な奥座敷に隠れて、自ら矢面に立つのを避けるのである。男性を矢面に立たせるため、わざと優遇し持ち上げているのであるということ。 本来奥で保護されるべき女性を、男性並みに矢面に引っ張り出すのが、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの文化であり、女性にとっては不利である。
（初出2011年8月）

男性が女性に対して抱く矛盾した感情。

男性は、女性に性的に惹かれる。魅力を感じるということ。あるいは、男性である自分には無い優れた才能を持っていると感じる。
一方で、男性は、女性を、男性である自分はドライに振る舞いたいのに、女性によってウェットさを強制されるとして、自らを抑圧する、自らと敵対する存在として位置づけ、その勢力を押さえ込もうとする。押さえ込みに成功したのが、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ男性であり、失敗したのが後天的定住集団社会Ａの男性である。

（初出2012年6月）

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨマスキュリズムと後天的定住集団社会Ａ

マスキュリズムは、男性に対する性差別、男性差別の撤廃を目指す思想や運動であり、主に先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで広まっ

ている。社会において、兵役等、男性のみが不当に不利益を課されていると主張するものである。
これは、男性主導社会、家父長制社会での男性問題を指摘する立場であると言える。男性が、生物資源、生殖資源として女性よりも劣る存在であることがもっぱらクローズアップされることになる。
メスは、カニの漁でみられるように、オスに比べて漁期を短く制限される。メスはたくさん獲ると生物の個体数の現象に直結するため、資源保護のためにメスは獲らないのである。
それと同様に、人間でも女性は貴重な生殖資源とされるのである。女性を自らの命を張って守らないといけないとか、戦争や水難で、女性の生存を優先させて、自らは死に行かないといけないという不利益が問題とされるのである。
こうした先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのマスキュリズムに対して、後天的定住集団社会Ａのように、男性が社会において主導権を持ち得ない、女性、母性の強い国、社会の存在をアピールすることが、今後必要である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでは、男性が社会において主導権を持てない後天的定住集団社会Ａのような社会があることが、きちんと知られていないからである。
今後のマスキュリズムの本場は、従来のような先進的移動生活中心社会群ＦＧＨではなく、後天的定住集団社会Ａのように父性がか弱い、頼りない母権社会に移るのではないだろうか。
（初出2011年11月）

真に支配力のある男性と、周囲の女性から立てられている男性とを区別するには？

真に支配力のある男性と、周囲の女性から立てられている男性とを区別するにはどうすれば良いか？

それは、男性自身が取っている行動が、ドライかウェットかで判断できる。ドライであれば、男性は自立支配を行うことが出来ている。ウェットであれば、男性が威張っているのは女性が立ててくれているお陰であり、本当は女性が支配している。

（初出2013年10月）

夫婦、男女の権力の強さを測定する尺度

夫婦、男女の権力の強さを測定する尺度は、以下の通りである。

（１）家計管理の権限をどちらがどれ位独占しているかを測定する。家計簿を主に付けているのが夫婦のどちらかを尋ねる。

（２）子供の教育の権限をどちらがどれ位独占しているかを測定する。学校父母会に主にどちらが出席しているかを尋ねる。

（初出2013年10月）

２．

後天的定住集団社会Ａの家族は「家父長制」と言えるか？

１．

血縁は、社会の最も根本をなす相互結合の部分であり、血縁レベルの権力を制する者が、その社会を制するといっても過言ではない。血縁社会は具体的には家族であり、その生活が営まれる場が家庭である。家庭で実権を握る側の者が社会の根本部分を支配すると考えられる。

「家父長」制とは、父親が、家庭内の権力を掌握している状態であるということ。（家庭で実権を握るということ。）その状態が当該社会に普及して、社会全体において半ば制度化された事実を指す。

従来の家父長制に関する理論は、普遍主義的理論であり、世界中どこでも女性が男性の統率下にあり弱いとするものであった。この考え方は後天的定住集団社会Ａでもそのまま機械的に受容され、後天的定住集団社会Ａは典型的な家父長制である、とされてきた。

以下においては、家庭において行使される権力の種類をいくつかに分類し、それぞれについて、後天的定住集団社会Ａの家庭において、男女どちらが持っているかを明らかにした上で、後天的定住集団社会Ａの男性が果たして「家父長」と言えるかどうかについて考察したい。

２．
家庭内権力は、経済的側面と、心理・文化的側面に分けられると考えられる。ここでは、まず、経済的側面について見ていく。
２－１．
２通りの説明が可能である。すなわち、Ａ．収入起源説と、Ｂ．管理起源説との２通りの説明ができる。

Ａ．

これは、収入をもたらす方がより発言権が強い、とする考え方である。

すなわち、「俺が稼いできたんだ。（俺は、一家の大黒柱だぞ。）みんなは俺のことをありがたいと思え。」ということということ。収入をもたらしているということ。（一家を収入面で支えているということ。）そのことを根拠に権力を振るう、というものであるということ。後天的定住集団社会Ａにおいては、こちらに当てはまるのは、夫（父親）の側が多いと考えられる。

Ｂ．

これは、家計における資金の出入りを管理する方がより発言権が強い、とする考え方である。

すなわち、「つべこべいうと（私に逆らうと）、お小遣いあげないわよ」などと、家計全体のやりくりの決定権を握っていることを根拠に、権力を振るうことを指すということ。後天的定住集団社会Ａでは、こちらに当てはまるのは、妻（母親）の側が多いと考えられる。

Ａ．収入起源説と、Ｂ．管理起源説とに関しては、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでは、両方とも夫が掌握していることが多いので、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の夫（父親）は、すんなり家父長と言える。しかし、後天的定住集団社会Ａでは、Ｂ．の管理起源に関しては妻（母親）が持つ。

すなわち、後天的定住集団社会Ａの場合、夫が得てきた収入が全額妻のもとに直行する。支出だけでなく、収入の管理も、夫がしているのではなく、妻がしているというのが適当であると考えられる。また、単なる生活費だけでなく、預金など家族全体の資産運用も妻が行っている場合がほとんどであると考えられるから、そういう意味で、妻の振るう権力は大きいと考えられる。現に、妻に対しては、「我が家の大蔵大臣」などと呼ばれる事が多いようである。後天的定住集団社会Ａの官庁組織で最も権力が集中しているのが大蔵省と考えられることから、そういう点では、妻に「管理者」としての一家の権力が集中しているとも考えられる。

Ａ．の収入起源説においては、夫（父親）がいくら稼いできても、その資金の家庭における出し入れを自分でコントロールできないのであれば、あまり実際の経済面での権力には、結びつかず、結局は、妻（母親）の管理下で働かされて、働いて得た給料をそのまま何も取らずに妻（母親）に差し出す労働者（下僕みたいな存在）にすぎない、とも言えそうである。言い換えれば、妻は働いてきた夫から収入を取り上げて、自分の管理下に置くのであって、夫は、「鵜飼」において、飼い主（妻、母親）に言われて魚（給料）を取ってきて、船に戻ってきたら、その魚を飼い主によって強制的に吐き出さされる。（魚（給料）は飼い主（妻、母）のものとなるということ。）その点、夫は、「鵜飼の鵜」のような存在にすぎないとも言えそうである。一家の大黒柱ということで、家族の構成員からある程度尊敬はされるかも知れないが、一種の「名誉」職としての色彩が強いのではあるまいか。

これと関連して、後天的定住集団社会Ａの家庭において資産の名義は夫（父親）になっていることが多いので、それが後天的定住集団社会Ａの家庭内で男性（夫、父親）の権力が強く、女性の地位が低い証拠であるとする見方がある。しかし、上でも述べたように、後天的定住集団社会Ａの家庭では、男性は、資産の管理権限（家計管理の権限、いわゆる財布）を女性に奪われている場合が多い。資産の管理権限を持たない名目上の所持者（男性）と、資産の出し入れ

をコントロールする実質上の所持者（女性）と、どちらが権力的に強いかと言えば、財布を握る実質上の所持者である女性であると考えるのが妥当なのではあるまいか。この場合も、男性は表面的に尊敬されるだけであり、実質的な権限を喪失した「名誉」職にとどまっているのが実状ではなかろうか。

土地などの財産名義は夫（男性）である。実際に証書・帳面などを管理するということ。（実際に資産を運用しているということ。）それを行っているのは女性である。

後天的定住集団社会Ａにおいては、母の代用言葉として、「おふくろ」という言葉があるが、その語源は、一家の財産を入れた袋を持つ人の意味という説がある。
この語源が正しければ、一家の財産を管理していたのは、男性ではなく、女性であるということになり、かつ、財産の使用する／しないの権限などを持つ者が、そうでない者よりも、より上の地位にあるとすれば、女性の方が、男性よりも、地位がもともと高いことになる。

後天的定住集団社会Ａでは、女性が、夫名義で銀行口座を作るなどして、家庭の資産の全面的な運用をする場合がほとんどなのではないか。夫の名前を表面的にせよ名義に利用することで、夫の顔を（一家の代表であるとして）立てるということ。（面子を潰さないということ。）しかし、実質的な資産運用権限は、女性（妻）がしっかり掌握して、男性（夫）の手には渡そうとしない。

後天的定住集団社会Ａの女性フェミニストは、被害者意識ばかりが先行して、いかに自分たちが家庭生活上、強大な権限を振るっているかについての自覚が足りないのではないか？

いずれにせよ、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでは、家庭の資産の出し入れ（財布）を一手に握る夫（父親）のもとで、家事に必要な金額をその都度もらって家事を行うだけの妻（母親）は、「家事労働者（家政婦）」に過ぎず、その家庭の中での地位は低いので、「家父長」制を告発したくなる理由は明白で理解しやすい。これに対し、後天的定住集団社会Ａにおいては、妻（母親、姑も含む。）のほうが財布を握っているのだから、その地位は単なる家事労働者ではなく、他の家族構成員の上にたって彼らの生活をコントロールする「家庭内管理職」「生活管理者」と見なすのが妥当なのではないか。

後天的定住集団社会Ａの女性がみずからが所持する実質的な経済的権力のことに目をつぶり、男性が持つ名目的な権力を「家父長」制だと言って攻撃するのは、アンフェアであると言えないだろうか（それとも実質的な権力と名目的な権力との両方を手に入れたいとの意欲の現われなのか）？

後天的定住集団社会Ａにおいては、女性が一家の財布の紐を握る。（それは、財産の管理をするということ。）それは、全国世帯の少なくとも６０～７０％を占めるとされる。家計簿の付録が、男性雑誌でなく女性雑誌（主婦の友とか）に付いてくるのもこのことの現れと見てよい。

妻は、家庭の財政上の支出権限をにぎる。夫自身には自分の稼いできた給料を管理する権限がない。家族定住集団に給料を入れるだけの存在であるということ。（単なる給料振込マシンに過ぎないということ。）彼は昔は給料袋をそのまま妻に渡していた。彼の給料は現代では銀行振込で通帳を握る妻のもとへと直行する。彼がせっかく稼いできた給料は、彼自身の手元には残らず、みな妻のもとに直行してしまうのであり、彼自身の自由にはならない。彼は自分の稼いだ給料から疎外されているのである。

なぜ、後天的定住集団社会Ａの男性は、自分にとって最低限必要な資金（それは、本来家庭とは関係ないところで自分が使う資金。）まで、みんな妻に渡してしまい、改めて小遣いのかたちでもらうことが多いのか。しかも、夫自身の小遣いの額を最終的に決める権限は妻にあって、夫自身はそこから疎外されている。夫は自分自身のことを自分で決められない（決定の主導権を妻に渡してしまうということ。）ということ。後天的定住集団社会Ａの男性(夫)は、自分の立場をわざわざ弱くするようなことをするのか？自分がせっかく稼いだ賃金からの疎外現象が起きている。（「自己賃金からの疎外」）

何故、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと後天的定住集団社会Ａとで「大蔵省」になるジェンダーに差が出たか、の原因解明は今後の課題である（後天的定住集団社会Ａにおいて、夫が妻に対して自分の稼いだ給料をまるごとそのまま渡してしまう慣例がいつどのようにして出来上がったのであろうか？）が、一つの考え方として、遊牧社会と農耕社会との違いが考えられる。地理学や文化人類学の知見によれば、遊牧社会は男性向きなのに対して、農耕は女性が始め

たものであり、女性により向いているという。稲作という、女性向きの環境適応（食料の確保など）

家庭における支出（小遣いなど）決定（予算編成）の権限を女性が握っているといっても、男性に、予算編成の能力がないのではない（現に後天的定住集団社会Ａの国家の大蔵省では、主に男性が予算編成をやっている。）が、家庭においては、過去（いつかは分からない。）に権力闘争に敗れた結果、ずっと女性のものとなってしまった、と考えられるということ。

２－２．

(1)夫の妻・母（姑）への心理的依存

後天的定住集団社会Ａでは、夫に、妻を母親がわりにして心理的に依存する傾向があると言われる。自分の母親が姑として生きているときには母親に甘え、母親亡き後は妻に甘える、というものである。こういった現象を一つの文化と見なして、「母ちゃん文化」と呼ぶ人もいるようである。また、「結婚して、大きな子供が一人増えた」などと言う主婦の声も多い。

また、後天的定住集団社会Ａの家庭で多く発生する「嫁姑問題」は、夫（息子）と姑（母親）との絆が強く、夫と妻との絆と拮抗するために起きると考えられている。後天的定住集団社会Ａが、母性優位で動いている一つの証拠とも見られる。夫が本当の家父長ならば、夫は妻と姑の上に立って、即座に両者間の葛藤を解決できるはずなのであるが、後天的定住集団社会Ａの夫は、実際には、妻と姑の両者に振り回されて、どっちつかずの中途半端な態度しか取れない場合が大半なのではないか？また、潜在的にマザーコンプレクスである（自分の母親に対して頭が上がらない。）

女性(妻、母)に心理的に依存し頭の上がらない男性(夫)が、本当の意味での家父長と言えるかといえばはなはだ疑わしいのが現実ではあるまいか？

(2)家庭における夫の不在

後天的定住集団社会Ａの家庭においては、特にサラリーマン家庭においては、夫が仕事人間で、家庭のことを省みないことが多いとされる。その結果、夫の家庭における影が薄くなり、ひいては他の家

族成員から疎外される現象が起きている。これは、自分の父親が家庭にいなかったため、自分の父親の家庭人としての観察学習ができなかったことが原因と思われる。夫は、予め家庭・子供の育児などに興味を持たないようにこと。→家庭から自発的に疎外されるように、家庭において妻が経済・教育上の権限を自動的に掌握することが、家族において代々続いて起きるように、社会的に仕組まれている、と考えられる。

家庭に不在な者が、家庭の心理的な面で権力を握るとは考えにくい。結局、妻によって「お父さんはえらいんだよ」とか人為的に立ててもらわない限り、後天的定住集団社会Ａの男性（夫）は、力を振るえない。

(3)子供の教育権限の女性への集中

後天的定住集団社会Ａの家庭においては、子育ては母親（女性）が独占する割合が、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに比べて高いと見られる。そういう点で、後天的定住集団社会Ａの男性は、自分自身の子供の教育を行う権限から、自ら進んで疎外されてきた、といってよい。子育てを行う結果、子供が自分になつき、自分の言うことを聞くようにさせたり、自分が持っている価値観を子供に伝えたりできるのは、子育てをする者にとって、大きな役得である。その役得を得る者が、後天的定住集団社会Ａでは女性に集中し、男性は、「男は家庭に振り回されるべきではない、給料稼ぎに専念すべきだ」とする周囲の、男性を家庭から切り離す価値観によって、自ら子育て・子供の教育を行う権利を失っているのである。結果として、家族内で子供を実質的に統率する役目を、父親ではなく、母親（女性）が占めることが多くなる、と考えられる。

子供の管理者としての妻は、子供の教育面での実権を握る。妻は（女性）は、夫に賃金供給者としてよりよく働くように、プレッシャーを与えて（となりのＸＸさんの御主人は課長になったそうよ、あなたにも一生懸命働いてなってもらいたい、などと言う。）、夫（男性）から、子供を無意識のうちに近づけないということ。（自分が独占するということ。）その結果、夫（男性）には、子供からの疎外とも言うべき現象が生じる。（子供の教育の権限を奪われるということ。子供から無用者、粗大ゴミ扱いされるということ。）

家庭や自分自身の子供から切り離された存在である後天的定住集団社会Ａの男性が、家庭において、自分の子供を思うままに統率できる「家父長」にそのままずんなりなれるとは、考えにくい。実際の権力を握る女性側のお膳立て（「お父さんはえらいんだよ」と子供の前で持ち上げるなど。）

子供と母親の間の一体感や絆が（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに比べて）強い、裏返せば子供と父親との間の絆が弱い、ということも、父親が子供にとって一家の中心的存在からかけ離れている。（むしろ母親の方が一家の中心にいる。）

結局、心理・文化的側面においても、後天的定住集団社会Ａにおいて、男性（夫）は、女性（妻）に対して依存的でかつ家庭内で影が薄い、ということになれば、後天的定住集団社会Ａに家父長制が成立しているという、従来の後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの論説は、はなはだ怪しいと見るべきではあるまいか？

３．

家父長制と紛らわしい慣行として、男尊女卑と嫁入りがあげられる。

３－１．

男尊女卑とは、男性が女性よりも尊重される、女性の男性への服従であり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにおけるレディーファーストの反対の現象であると考えられる。
従来の後天的定住集団社会Ａでは、男尊女卑は、女性の、男性に比較した地位の低さを示す象徴として、フェミニストのやり玉に挙げられてきた概念であったということ。

後天的定住集団社会Ａで男尊女卑に反対して女性解放運動を起こすという後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの解釈が正しいのならば、レディーファーストの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでは、男性解放運動が起きるはずである。（レディーファーストの慣行では、女性が男性よりも尊重される、男性が女性に服従する。）

レディーファーストは、身近な例をあげれば、例えば、自動車のドアを男性が先回りして女性のために開けてあげるとか、レストランで女性のいすを引いて座らせてあげるとか、の行為を指す。この場

合、見た目には、男女関係は、女王と従者の関係のように見える。（女性が威張っていて、男性は下位に甘んじている。）

しかるに、女性解放を目指すウーマンリブ運動はレディーファーストの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨで始まっている。

それと同様のことを男尊女卑に当てはめると、女性は男性に対して、見掛け上のみ従属することを示しており、勢力的には女性の方が男性よりも強く、必ずしも女性は弱者ではないと言えるのではないか。

男尊女卑は、女性が男性に対して、見かけ上も、実質上も支配下に置かれる状態をさすので、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのレディーファーストよりも、女性にとって問題は深刻であるというのが従来の後天的定住集団社会Ａのフェミニストの見方であろうが、後天的定住集団社会Ａにおいて、実質的な支配力という点で、女性が男性に服従していると見なすことには、いくつもの反論が可能である。

後天的定住集団社会Ａの女性が、経済的に、家庭における家計管理全般の権限（夫への小遣いの額を決める権限など）を握っている点、あるいは文化的な面として、子供の教育の権限を一手に握っており、その影響下で子供（特に男性）が育てられる結果、後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性（社会的性格）が女性化している(父性よりも母性原理に従って動く、人間関係で和合を重んじる、集団主義的であるなど)点、などが、後天的定住集団社会Ａではむしろ女性が男性を支配しているのではないか、と思わせる証拠には事欠かないと考えられる。

後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性が女性的であると思われる根拠としては、例えば、以下のような点があげられる。

・人間関係を重要視するということ。（女性の方が、男性よりも、赤ん坊の頃から、人間に対する興味が強いとされる。）

・外圧がないと自分からは動こうとしない（外交など）こと。→受動性

・就職などの大組織（官庁・大企業）指向　寄らば大樹の陰こと。→安全指向

・前例のないことはしない（科学分野で、独創的な理論が少なく、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論の追試ばかりしている。）

・理性的というよりは、情緒的である（社会学の家族理論で、情緒面でのリーダーは、女性に割り当てられている。）

・集団主義（女性のほうが、男性よりも、互いに集まること自体を好むとされている。）

後天的定住集団社会Ａにおいて、女性（妻）が、家庭内で男性（夫）に従うように見えるのは、見掛け上、夫を立てているからである。（それは、夫の収入供給者としてのやる気を出させるなどのため、必要である。）妻が夫を立てるのを止めると、もともと確固たる足場を持たない夫の権威はたちまち地に落ちてしまうと考えられる。

実際、後天的定住集団社会Ａの男性は家庭内では、「粗大ゴミ」とか「濡れ落ち葉」などと称されて、存在感のないことはなはだしい。これらは、男性の実際の家庭内の地位の低さを示す言葉だと言える。

前にも触れたが、後天的定住集団社会Ａの一般的な家庭生活においては、女性が、経済面での家計予算編成権限（夫の小遣い額の決定など）だけでなく子供の教育権限（母子一体感の醸成に基づくということ。）を一手に握っているため、後天的定住集団社会Ａの家庭は、実質的には男性ではなく女性の支配する空間となっている。（家父長制は表面だけ。）

マードックのいう核家族の４機能のうち、後天的定住集団社会Ａでは、二つの機能（経済、教育）を女性が独占している。あとの二つは、性と生殖という、どちらが優勢とは言えない項目である。

むしろ、後天的定住集団社会Ａの女性は、特に専業主婦の場合は、その権限の強さから、「家庭内管理職」「(家族生活の)管理者」として、夫や子供など他の家族よりも上位にある存在として捉えるのが適当なのではないか？つまり、家庭を官僚制組織のように見なした場合、後天的定住集団社会Ａでは、女性が男性の生活全般を管理する管理職の立場につき、男性はその下で生活する単なる労働者として、自分が働いて得た給与を、女性に全額差し出す行動をとって

いるのが、後天的定住集団社会Ａの現状であると考えられないか？

後天的定住集団社会Ａにおいては、女性が官庁や企業などで管理職につく事が（男性よりも。）大幅に少ないとされ、それが後天的定住集団社会Ａの女性の地位の低さを示している、と後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの批判の対象となってきたが、これも、上記の見方を適用すれば、夫が、家庭の外でどんなえらい地位。（例えば首相）に就いても、妻がその「生活管理者」となる。（「首相」を管理する「（家庭内）管理者（管理職）」）それは、いかなる場合も、女性が男性にとって管理職になるということである。それは、根本的な女性上位を示す。

３－２．
家族定住集団庭における妻の夫への服従というのは、夫個人への服従というよりは、夫の家族定住集団の家族。（姑とか）への服従と考えるべきであるということ。

従来の直系家族における（新たに嫁入りしたということ。）
つまり、妻は、「新入り」家族定住集団族の一員として、外から夫の家族定住集団へと、影響力ゼロの状態から入ることになる。従って、入り立ては地位が低く、夫他の家族に比べて弱いことになる。しかし、この「新参者効果」というものは、妻が家庭内の慣習などに慣れて実力をつけていくにつれて、やがて消えることになり、妻の力は次第に強くなっていくと考えられる。夫の家族定住集団に入って間もない時点で地位を測定すると、夫に対して弱いように見えるが、姑から家計管理の権限などを譲り渡された時点では、地位の面で夫を上回っていることが考えられる。また、夫婦別姓になると夫の家族定住集団への服従がなくなる分、強く見えるようになると考えられる。

夫の家族との同居が妻を萎縮させる原因となる。漫画のサザエさんのように同居しないと強くなるということ。妻の服従は、夫の家族定住集団への服従、夫の親への服従であり、特に同性の女性である姑への服従である。その意味では、妻の服従とは女性(姑)と女性(義理の娘)の間の問題になる。夫への服従は、夫の家族定住集団の家風などへの一連の恭順の一部であり、夫個人に対してのものとは必ずしも言えない。夫が「家父長」だから従っているわけではない、と考えられる。夫個人をその属する家族定住集団から分離させる形で取り出して、妻と一対一で向かい合わせたとき、夫が優位を保てるかは、甚だ疑わしい。

４．

以上の点を勘案すると、必ずしも女性が弱いとは言えない。 また、後天的定住集団社会Ａにおいて正しい意味での家父長制があったと言うことはできない。男性（夫、息子）の方が女性よりも弱く、女性（妻、母）の方が男性よりも強い。

現状の後天的定住集団社会Ａのフェミニズム理論は、将来的には、理論の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨからの直輸入と、後天的定住集団社会Ａへの機械的当てはめが失敗に終わった事例として、後世に汚名を残すのではあるまいか。

後天的定住集団社会Ａの男性たちは、仕事のためと称して家庭に遅く帰り朝早く出て行く生活を送っており、家庭における父親不在をもたらしている。なぜならば彼らは家庭の中で自分の部屋が持てないなど居場所がなく、家族成員から疎外されており、家庭にいるのが不愉快だからである。彼らは家計管理や子供の教育についても主導権を持てないでいる。家庭内の実権はすべて女性に握られており、後天的定住集団社会Ａの家庭は実質的に母権制なのである。

このように後天的定住集団社会Ａの家庭において男性の影が非常に薄いにもかかわらず、女性が男性のことを「家父長」呼ばわりし続けるのには、それなりの理由と戦略があると考えられる。

一般に、組織において「長」の付く役職にある人の果たす役割は、大きく分けて1)代表、2)責任、3)管理の３つがあると考えられる。代表機能は、組織の顔として、外部環境に対して自分自身を直接露出する役割、責任機能は、組織成員が失敗を犯したときにその責任を取って社会的制裁を受ける役割、管理機能は、組織成員の行動を強制力を伴って管理・制御する役割である。

後天的定住集団社会Ａの家庭では、このうち管理の役割は女性がほぼ独占している。女性(妻、母)は家計管理や子供の教育の権限を持ち、男性(夫、息子)を自分に対して心理的に依存させることで、男性(夫)や子供が自分の思い通りに動くように、自分の言うことを聞くように仕向けている。管理者＝「長」と見なす考え方からは、後天的定住集団社会Ａの男性は「家父長」の資格を明らかに欠いている。

しかし、代表と、責任の役割については、女性はその役割を遂行することを回避し、男性に押しつけようとしている。女性が家庭管理の権限がない男性のことを意図的に「家父長」呼ばわりするのは、家庭という組織を対外的に代表し、運営がうまく行かなかった時の責任を取る役回りを男性に全部やらせようと策略を巡らしているからに他ならない。ではなぜ女性は、代表・責任役割を自ら取ろうとしないのか？それは、女性が根源的に持つ、我が身を危ない立場に置こうとせず、常に安全な位置にいようとする自己保身の指向に基づく。

女性は、代表者として対外的に表面に出るのを嫌う。それは、危険にさらされる外側よりも内側の世界に留まった方が安全が確保しやすいからである。家庭を対外的に代表するということは、外部に対して我が身を露出することであり、直接攻撃や危害を加えられる立場に立つことである。そのため、女性は、男性を対外的な「盾」となる代表役に仕立てて、自分はその内側で安全を保証された生活を送ろうとする。男性を家族定住集団庭を代表する「家族定住集団父長」に仕立てるのは、男性を家族定住集団の外の風にさらして、自分はその内側で気楽に過ごそうとする魂胆があるからに他ならない。

女性は、また、失敗時に責任を取らされて社会的制裁を受けるのを嫌う。制裁を受けることにより、社会的生命を失い誰からも助けてもらえなくなり、自分の身の安全を脅かされることを恐れるからである。そのため、自分からは行動上の最終的な決断をせず、決断をする役回りは全て男性に押しつけようとする。

責任逃れの口実として、男性を家庭内の物事を最終的に決断する「家父長」に仕立て上げて「あなたが決めてよ」と言って決めさせ、失敗時には「決めたのはあなたよ。あなたがこうしなさいと言ったから、私はそれに従ったまでよ。あなたがいけないからこうなったのよ。私の責任ではないわ。」と逃げられるようにするということ。男性が物事を自分からは決めようとしないと、「優柔不断な男は嫌い」ということで、その男性を非難する。

「家父長」の呼称は、彼が、女性による責任押し付けの標的・対象となっていることの現れであり、その意味で、ありがたい呼称とはお世辞にも言えない。後天的定住集団社会Ａの女性は、普段は男性をやっかい者扱いしながら、行動結果の責任なすり付けに都合の良

いときだけ男性を頼りにしよう、利用しようとするのであり、それが女性が家庭内での実権を持たない男性のことをいつまでも「家父長」呼ばわりする真の理由なのである。このことを知らずに、女性から「あなたは家父長」とおだてられていい気になっている後天的定住集団社会Ａの男性たちは、救いようのない愚かな存在なのかも知れない。

(初出1998年08月)

見かけだけの家父長制社会後天的定住集団社会Ａ

後天的定住集団社会Ａが家父長制に見えるのは、見かけだけである。

後天的定住集団社会Ａの女性は、失敗したとき、自らの責任逃れをするために、男性に責任ある「長」の地位を押しつけている。その点、女性による、男性優位の演出が行われている。後天的定住集団社会Ａの男性は、女性の厚意で威張らせてもらっている、と考えておいた方が身のためである。

後天的定住集団社会Ａが本当に家父長制の社会なら、国民性が、男性的＝ドライとなるはずである。しかるに、伝統的な後天的定住集団社会Ａの国民性は、ウェットで女性的である(女々しい)。国民性が女々しくて、かつ家父長制というのは成立しえないのではないか？後天的定住集団社会Ａ＝母権制ではないかと、疑うべきである。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのような真の家父長制においては、以下の通りである。
・父親－子供の紐帯が、母親－子供の紐帯よりも強い。
・父が子育ての最終的な権限を握っている。子供がドライ＝男性的に育つのは、父親の影響力が大きいからである。
・近親相姦は、父親と娘の間に起こりやすい。

一方、後天的定住集団社会Ａのような母権制においては、以下の通りである。
・母親－子供の紐帯が、父親－子供の紐帯よりも強い。
・母が子育ての最終的な権限を握っている。子供がウェット＝女性

的に育つのは、母親の影響力が大きいからである。
・近親相姦は、母親と息子の間に起こりやすい。

後天的定住集団社会Ａでは、夫が妻に、心理的に依存する程度が、妻が夫に、心理的に依存する程度よりも、ずっと強い。
夫婦の間に子供が生れたとたんに、夫は、妻の事を、「ママ」とか「お母さん」と呼ぶようになり、実の母親に対する甘えを、妻に移行させる、とされる。
妻に対して心理的に依存している夫が、妻を支配する家父長であるというのは、依存される方が、依存する方を支配する、という常識と矛盾している。

(初出2000年07月)

後天的定住集団社会Ａにおける家父長像の誤解について

真の家父長となる条件は何か？
後天的定住集団社会Ａにおける家父長像は、本来のものとはずれており、誤解されている。

(1)後天的定住集団社会Ａの父親のように、自分からは何もしないで、「ＸＸしろ」「ＸＸ持って来い」というように、自分は座ったままで何もしないで、妻に、身の回りのことを、威張って命令口調でやらせる(やってもらう)のは、家父長とは言えない。皆妻にやってもらわないと、自分の力では、何一つできない。本来、家父長は、動的に、自ら進んで体を動かす、家族の手本となる行動様式を示す指導者でなくてはならない。能動性が必要である。単なる怠け者や快楽主義者では、家族は、自分の事を家父長とは見なさず、厄介な「お荷物」としてしか、見ないであろう。

(2)後天的定住集団社会Ａの父親が持つ、浪花節的な、ベタベタした親分子分のような関係は、男性的ではない。メンタルな面で母性の支配下にあり、家父長とは言えない。家父長たるには、ドライな合理性、個人主義、自由主義などを、身につける必要がある。

(3)後天的定住集団社会Ａの父親は、どっしりとして(どっしり座って)、てこでも動かない、重い存在であることが、理想的であるとされてきた。
一カ所から動かないのは、定着指向であり、静的(ウェット)であ

り、母性的である。

(初出2000年07月)

不在家長

後天的定住集団社会Ａの男性は、深夜まで残業するなど、職場に引きつけられて家庭に帰らない。これは、「不在家長」現象と呼べる。

この現象が起きるのは、以下の原因によると考えられる。
1.家庭で、父親の姿を見ずに育った(父親不在の家庭)ということ。家庭にいる父親像を学習していないということ。
2.職場で、昇進競争をするように、母や妻から圧力がかかる。夫(息子)の肩書(表看板)が、そのまま管理者たる妻(母)のえらさになる。いかにうまく管理したかの証拠となるということ。

こうした原因が、男性を、職場に長くい続けさせ、家庭において不在となり、影が薄くなることにつながる。

(初出2000年07月)

後天的定住集団社会Ａの家庭を父権化する計画について

従来、母性の支配下にある後天的定住集団社会Ａの家庭は、男性の立場からは、少しでも父親の力を取り戻し、父権化、家父長制化することが必要である。

そのためには、まず、最近の、社会進出を優先して、子育てに母性が不可欠とする母性愛神話を打破しよう、子育てを放棄しようとする女性側の動きを利用することが望ましい。

つまり、女性学、フェミニズムによる育児回避・放棄運動に乗じ

て、「母親たちが育てないならば、父親が育児を一手に引き受けよう」「父性主導の子育てを実現させよう」と運動するのである。

3歳児までの、子供の人格の基盤が固まる時期を、母性を排除し、父性側で押さえる。父性の介入を最大限にして、母性による子供の独占を阻止するということ。

従来の後天的定住集団社会Ａの子供は、母親と癒着した、「母性の漬け物」と化している。これを改め、子供から母性分を「脱水」し、代わりに、「父性の漬け物」とするのであるということ。

そのためには、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの父権制(家父長制)社会を手本にして、母性偏重の後天的定住集団社会Ａ家庭に父性の風を持ち込むことが重要である。

父親主導のドライな雰囲気の子育てを行うということ。例えば、川の字添い寝を廃止し、母親と子供の密着を阻止するため、子供を、早期に個室に入れるということ。子供が、一人で自分自身を律することが早い段階で可能になるようにする。そうすることで、子供もドライな父性的な風を身につけることができ、父親主導の子育てが可能となる。

そうすることで、子供は、父親になつく、父親を頼りにするようになり、今度は、逆に、母親の方が子供たちから疎外される感じになるであろう。そうすればしめたものであるということ。家庭の中心に、父親が位置するようになる日は近い。

父権制における真の父親は、戦前後天的定住集団社会Ａの父親のように、家庭の中で、ワンマンの暴君、専制君主のように、わがままな大きな子供のように振る舞うことはない。父権制の父親は、ドライで合理性を持った、自由で個人主義で自律的で明確な自己主張を持った、必要な時には危険に直面し、きちんと責任を取り、探検好きで、進取の気性に富んだ、ドライな存在である。

真の父親は、レディーファーストで、表面的には母親を立てるが、裏では、彼女を愛人兼家政婦として、その上に立つ形で支配する。もちろん家計も父親が管理し、母親に、家事労働に必要な小遣いを渡すのである。

後天的定住集団社会Ａ家庭において、こうした父権制化を実現する

ためには、何よりも、後天的定住集団社会Ａの父親たちが、従来の母親べったりのウェットな存在から脱却して、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ並みのドライな考え方を取るようになる必要がある。そのために、父親がドライな態度を取れるように訓練する、教育プログラムを、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにおける父親の意見を参考にしながら、後天的定住集団社会Ａで開設する必要がある。

特に、キリスト教系の学校では、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバーの宣教師が、父権的なドライな接し方で、子供や児童に接するので、後天的定住集団社会Ａの男子生徒～父親たちは、それを参考にして、早くから父性的な振る舞いを身につけるようにすることが考えられる。

父権モデルは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが白人のため、後天的定住集団社会Ａと人種的に離れていて問題だというのであれば、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ同様遊牧・牧畜民であり、かつ後天的定住集団社会Ａと同じ人種であるモンゴルとかでもよい。

後天的定住集団社会Ａの家庭を、女性、母性の支配の場でなくすには、家庭を「妻の王国」「母の王国」として、そこに君臨する妻や母たちを、家庭の外に出して、家庭の中での女性、母性の支配力、影響力をできるだけ減らし、その代わりに父性をどんどん注入することで、後天的定住集団社会Ａの家庭を女性、母性支配の場から、男性、父性支配の場へと転換させる必要がある。

その意味で、後天的定住集団社会Ａにおいて、女性を、家庭の外の、企業定住集団などに社会進出させることは、社会の根幹をなす家庭において、男性の影響力をより増やす上で、有効かつ重要な戦略である。

後天的定住集団社会Ａの女性の家庭における支配力を弱めるため、後天的定住集団社会Ａの女性が家庭を離れて職場社会進出するのを促進することこそが、現状の後天的定住集団社会Ａの男性の社会的地位向上のために重要なのである。

現状では、後天的定住集団社会Ａの男性は、女性に社会進出されて、給料を稼がれると、自分の経済的な甲斐性、女性を経済的に養う力を否定されるように感じて、女性の社会進出に反対することが多い。

しかし、重要なのは、誰が稼ぐかではなく、誰が財政の紐を握るかなのである。いくら、稼いできても、その稼ぎを妻に取り上げられて、妻から小遣いを渡される「ワンコイン亭主」でいるようでは何もならない。男性が「財布の紐を握る」「財布の紐を女性から奪い取る」ことこそが、後天的定住集団社会Ａにおける家庭ひいては社会全体の父権化、家父長制化(男性による支配の実現)にとって本質的である。その点、後天的定住集団社会Ａの男性は、誰が稼いだかには、これまでのようにはこだわらず、むしろ、誰が(家族が)稼いだ金を管理するか、誰が家計を支配するかという点にこだわるべきなのである。

子供の教育についても同様である。子供の教育を母親、妻任せにしていると、子供は母親の言うことを聞いて、父親の影が薄くなる。これが、後天的定住集団社会Ａにおいて、父性の欠如した次世代の子供を繰り返し再生産することにつながっており、家庭や社会における父権の強化のために、父親が子供の教育を主導する形へと改める必要がある。その際、父親は、子供を母親から切り離して独立した自律的存在とすることに心を砕くべきである。そうすることで、子供に対する(子供を包含し一体化し、強い紐帯を子供との間で維持しようとする)母親の影響力を弱めることができる。

女性を社会進出させて、家庭内における影響力を低下させ、その間隙を突いて、家庭の中枢をなす機能(家計管理、子供の教育)を奪取することこそが、後天的定住集団社会Ａの男性にとって必要である。

(初出2004年08月)

父性が母性に呑まれている。

一見威張っている後天的定住集団社会Ａの男性は、母性によるコントロールを受けている。父性が母性の中に呑み込まれ、取り込まれ、弱体化、消滅している。その結果、父性が無いとか、家庭における父親不在の現象を生み出している。
後天的定住集団社会Ａでは、本来、父性の担い手たるべき男性が母性の担い手となっている。彼は、母親に精神的に呑まれて、父性を失っている。

そこで、ヤクザ、野球の監督、学会ボスといった親分のように、まるで母親のような包容力が重視され、後天的定住集団社会Ａの男性に求められるようになっている。これが、浪花節の世界である。
あるいは、後天的定住集団社会Ａの男性は、母親代わりの家事労働力としてのみ働こうとする。父親ではなく、第二の母親として、子供に接しようとする。
あるいは、そもそも子育てを避けて、父親の役割から逃げて、母の息子としての役回りのみに留まろうとするということ。
こうした現状は、改められるべきである。
例えば、
母性的な包容力では無く、父性的な判断、決断、理屈付け、行動力で動くようにするとか、以下の通りである。
母親と同じ事をするのではなく、冒険、探検のように父親しかできないことをするとか、以下の通りである。
母の息子の役回りから卒業することとか、
が必要なのではないだろうか。
（初出2012年1月）

父性無き「男社会」（だったということ。）

後天的定住集団社会Ａは、社会の基盤は母性が支配している、実質女社会である（典型的な農耕民の社会）ということ。
後天的定住集団社会Ａの男性は、経済的な稼ぎ手として重宝するため、女性によって、立てられ、おだてられてきたということ。（プライドを持たせないと、しぼんでしまい、仕事をしなくなるため。）
男性は、父性が欠如し、実権が無いにも関わらず、威張ってきた。見かけの地位が高かった。（実質的地位は低かったが、そのことは隠蔽されてきた。）男社会とおだてられ、それに何の疑問も持たなかった。
ところが、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨから入ってきたフェミニズムの影響で、男性が威張っている現状を改めるべきという風潮になった。
女性が男性を立てなくなり、代わりに格下の道具扱いするようになった（アッシーとか貢ぐ君とか）ということ。

男性が見かけの地位を失ったということ。本来の実質的地位の通り、社会的弱者になったということ。（本来の弱い地位に戻ったということ。）
この困った現状をどうすれば改善できるか考え始めることが、後天的定住集団社会Ａの男性が持つべき、共有すべき問題意識である（が、あまり持っている、共有している男性がいないのが現状。）ということ。
この問題は、社会的地位の認識において、見かけの地位と、実質的地位とを区別することが必要であることの好例であるといえる。
男女の見かけの地位（apparent status）と、実質的地位（substantial status）が乖離していたのが、一致するようになったというのが、後天的定住集団社会Ａの変化であると言える。
なお、林道義によって、後天的定住集団社会Ａにおける「父性の復権」が唱えられたことがあったが、それは、女性に立てられ威張っていた戦前の男性の姿を父性的であると誤認し、その状態に立ち戻ろうと主張した内容であった。実際には、後天的定住集団社会Ａには、「復権」するに足る父性はもともとほとんど無かったというのが正しい見方と言えるのではないか。後天的定住集団社会Ａでは、父性の「復権」は成立し得ず、父性の「新規創造」とか「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨなどの家父長制社会からの新規学習、模倣」という言葉がよりふさわしいと言える。

（初出2013年6月～12月）

雷親父と母

定住生活中心社会Ｅの雷帝、ないし後天的定住集団社会Ａで雷親父と呼ばれる存在は、ヒステリックで、怖くて、凶暴で、残虐で、非理性的な存在である。
それは、父性的というよりは、万事に厳しい、すぐヒステリックに怒る姑と体質が同じであり、姑の男性版、母性的存在と言える。
すなわち、母親によって、余計な全能感を植え付けられたガサツな乱暴者の息子であると言えるということ。
自分は、何でもできるという、オールマイティーな感覚は、母親に

よる、息子の無限の受容、クッションによって植え付けられていると言える。要するに、母親が何でも受容してくれるので、息子は、自分に不可能なものはないと考えるようになるのである。
そういう点では、一見家父長のように見える雷帝や雷親父のバックには、強力な母が付いていると言える。
(初出2012年05月)

後天的定住集団社会Ａへの父性的宗教の導入と後天的定住集団社会Ａの男性解放

松本滋の著書「父性的宗教、母性的宗教」によれば、キリスト教、イスラム教は、父性の力が強い父性的宗教であるとされる。

この点、母性に支配されてきた後天的定住集団社会Ａの男性を解放するために、父性的なキリスト教、イスラム教の活用が望ましいといえる。こうした宗教の導入により、社会の父性化が実現できるからである。

既存のキリスト教のように、ミッションスクールを通して宗教心を教育することを後天的定住集団社会Ａに広げるとかいうのが考えられる。
その際、問題なのは、教具や聖典に登場する人物の外見、デザインが、あまりにも先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの文化に直に依拠し過ぎていて、後天的定住集団社会の固有の宗教とかに慣れた既存の後天的定住集団社会Ａのメンバーには違和感が強く、そのままでは受け入れられにくいということである。
教具や教典の表現、デザインを、本格的に、父性を保ったままで、侘び寂びの効いた後天的定住集団社会Ａ化する努力が必要となると思われる。
あと、注意点としては、聖母マリア信仰に陥るのを防ぐ必要がある。母を敬い慕うことにつながるからであるということ。母子一体性を強調する聖母子像イコンの信仰とかも避けるべきである。

（初出2011年11月）

後天的定住集団社会Ａの自然風土と強い父性の導入の是

非

後天的定住集団社会Ａの自然風土は、強い母性をもたらす稲作農耕に適している。ただし、北海道は別であり、強い父性をもたらす牧畜にも適しているが。

稲作農耕に適した自然風土の地に、強い父性を導入すると、稲作農耕を前提とした社会の仕組みを根本から変えないと行けなくなるということ。これは、既存の後天的定住集団社会Ａを根本から崩壊させる危険をはらむものであり、やっていいのかためらわれるとも言える。

そこで、2つの途が示される。一つ目は、父性導入を見合わせる行き方である。すなわち、今まで通り、伝統的稲作農耕の母性優位で行き、伝統的母性的フェミニズムを更に伸ばす行き方であるということ。

もう一つは、伝統的稲作農耕とは異質な、強い父性のもとでも後天的定住集団社会Ａ農業や後天的定住集団社会Ａがきちんと上手く回る仕組みを考える、という行き方である。筆者としては、こちらを取りたい。強い父性主導で行われていると考えられる北米のカリフォルニア稲作農耕でも、稲作がきちんと行われ、大きな収量と良好な品質を誇っているようだからである。すなわち、カリフォルニア稲作農耕では、飛行機を用いた空中散布による大量直播き、あるいは、粗放的な畦畔の管理が行われており、ドライで気体的な稲作農耕を実現できているのであり、この方式を後天的定住集団社会Ａに導入することで、稲作農耕を保ちつつ、社会のあり方をドライで気体的な父性優位のものに変えることができると考えられるのである。

（初出2011年10月）

擬似家父長制から真の家父長制へ

今までの後天的定住集団社会Ａは、擬似家父長制であった。男が前面に出て威張っているが、母に操られているのが実態であった。後天的定住集団社会Ａの男性解放論は、この擬似家父長制を廃して、

真の家父長制実現を主張する。
これは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨをモデルとしてそれに追いつくという伝統的で陳腐なパターンと見られがちであるが、実際のところ、モデルは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨでなくても良く、ユダヤやアラブやモンゴルといった遊牧、牧畜社会が広くモデルとなる。
社会を農耕モデルから牧畜モデルへと移行させることが必要である。

（初出2011年8月）

後天的定住集団社会Ａの「名ばかり」家父長、あるいは、教育責任を取らされる学校

後天的定住集団社会Ａにおいて、子育ての責任は、本来、自分の子供を意のままにコントロールする教育ママの母親、妻が取るはずであるが、実際は、子育て、育児から疎外された父親、夫に押しつけられる。妻によって、家父長の文言が便利に用いられる。
後天的定住集団社会Ａの父は家父長でないと、家父長と呼べないと、母は困るのである。それは、子育てがうまく行かなかった時の責任をそのままでは取らされてしまうので、女故の保身のためには、他人、父親に責任を取らせたいというもくろみがある。
子育てはうまく行かなかったからといって、親が無責任で済ますわけにも行かない。無責任な親と批判される対象となるのは確実で、そこから逃げる訳には行かず、父親か母親かのどちらか、あるいは両方が責任を必ず取らないといけないのである。
後天的定住集団社会Ａが本当は母が強い母権社会なのに、あたかも父親が万能であるかのように、家父長制とやたらと呼ばれる理由は、そこにある。
後天的定住集団社会Ａでは、名目的にせよ、家父長制の文言が、主に母親によって、社会的に必要とされている。それは、母によって作られる「名ばかり家父長制」ないし名目的家父長制である。名目的なのは、実質は母権社会だからである。後天的定住集団社会Ａの父親は、子供と積極的に関わろうとしない傾向が強く、子育ての主体たり得ていないにも関わらず、家父長扱いされるのである。
一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは、実質的家父長制であると言える。子育てに父親がメインで介入してコントロールして、母親は父親に従属する添え物に留まっているからである。
後天的定住集団社会Ａでは、子育ての実質遂行者、子供の実質支配

者は母親であるが、子育ての結果責任者は、父親となるということ。（特に子育てがうまく行かなかった時の責任を取るということ。）
後天的定住集団社会Ａにおける子育てのもう一つの結果責任者は、学校である。子供が通う学校の教師、校長が責任を取らされる。
後天的定住集団社会Ａでは、教師がやたらと聖職者扱いされて、ちょっとした行為の落ち度を親によって厳しく責められる傾向がある。教師の責任が過重になっているのであるが、これは本来、母親が取るべき責任の分も負わされているのである。
本来、子供を支配し、子育ての主体となっている、子育ての責任を取るべき母親が、責任を取るのを心の底で避けているので、そこに女性に責任を負わせるのは酷だという社会的な考えも手伝って、母親の周囲（の父親や、学校関係者）に責任が押しつけられているのである。
責任者とは、失敗時に責められる役回りの人のことであり、そこに、女性が責められるのはかわいそうだという社会通念が加わることで、本来、母親が子育てで取るべき責任を、父親や学校が肩代わりしていると言える。
責任の所在が不明瞭になりがちで、誰もが責任を取りたがらない無責任社会後天的定住集団社会Ａの立役者は、母であると言える。
（初出2012年6月）

湿った父と湿った雪

雪国で、除雪をする時に、乾いた雪だと、作業が楽なのに対して、湿った雪だと、雪が重くて作業が大変になるということをよく聞く。
行動様式がウェットな（湿ったということ。）父親や男性は、ドライな（乾いたということ。）
男性や父親がウェットな行動を取りやすい後天的定住集団社会Ａや先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１で、男性や父親が強いと勘違いされる原因になっていると考えられる。湿った父は、重い父なのである。
一方、先進的移動生活中心社会群Ｆや北米のドライな乾いた父は、軽い（軽快なということ。）父なのであるということ。
（初出2014年11月）

妻、家族に冷遇される夫、父

後天的定住集団社会Ａの夫婦においては、夫が、妻に家計を握られ、妻から一方的に少額の小遣いを渡されるだけで、欲しいものが買えないということが起きている。
あるいは、自分の家族定住集団の中で、居場所が無い、例えば、めぼしい広い部屋とか、母子連合体（母子ユニオン）を形成して仲の良い妻と子供に占領されて、自分たちの家具を置かれて追い出されてしまい、夫である自分は、台所の椅子とかに座って過ごすしか無くなるということが起きている。
後天的定住集団社会Ａの男性、夫は、息子としては、姑である母にいろいろ厚遇され良い目を見ることができる。夫は、母である姑がいる間は、嫁である妻に対して威張って好条件でいることができる。しかし、所詮は、母＝姑頼みなのが問題であり、自分の母がいなくなると、立場が悪くなりっぱなしになってしまうのである。
（初出2012年6月）

企業定住集団人間、「男社会」の生成と、（家庭内での）父の居場所の無さ

後天的定住集団社会Ａでは、昔から「亭主元気で留守がいい」みたいなことわざが存在し、家族定住集団の中に夫や父がいないのが望ましいかのような言われ方をしてきた。
なぜ、夫（父）が企業定住集団人間であること、企業定住集団にばかり居て、家族定住集団にあまり帰ってこないことが妻（母）によって推奨されるのか？
それは、そうであることで、夫（父）が、妻（母）にとって、妻（母）の権力に挑戦してこない無害な存在で居続けてくれるからであるということ。
夫（父）は家庭内に居場所が無いので、企業定住集団にいるしかない。なぜ、夫（父）の居場所が無いかと言えば、家庭内の居場所を妻（母）とその子供が占有、占領しているからである。
後天的定住集団社会Ａでは、家庭の中で、母と子が強力に一体化しており、そこにはウェットな表面張力が働いており、外から中に割って入れない仕組みになっている。父は、そうした母子ユニオン（母子連合体）に入れてもらえずに、家庭の外に弾き飛ばされる存在であるということ。（以下の図を参照するということ。）

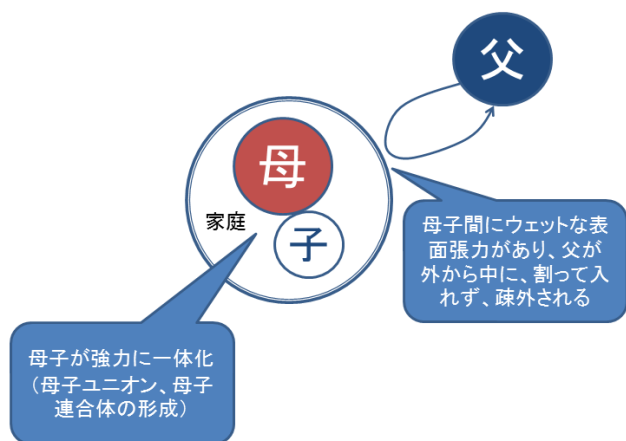



図　母子の間に入れない父

家庭に入れない、中に入れてもらえない者同士の吹き溜まりが企業定住集団であり、中に入れてもらえない存在が父である男性であることから、企業定住集団はそうした男性たちの集まりである「男社会」となっているのである。
後天的定住集団社会Ａでは、夫（父）も母性的でウェットなので、表面張力のある閉鎖的、排他的なウェットな「企業定住集団」空間を形成する。そこには、別の閉鎖的、排他的なユニットである妻（母）とその子供のユニオンは入れないようになっているということ。（以下の図を参照するということ。）

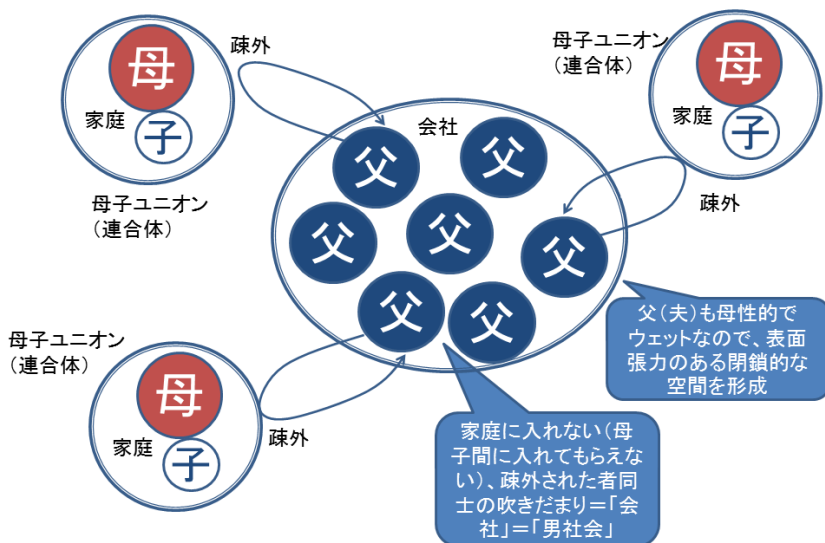



図　日本の会社＝家庭から疎外された者同士の吹きだまり

後天的定住集団社会Ａの夫（父）は、企業定住集団に24時間所属する。あたかも企業定住集団というウェットな液体の中に存在しているかのようであり、企業定住集団からリストラされるまで、企業定住集団の外には出られない（出ても良いが、他に行く所が無く、生存は保証されない。）ということ。
夫は、ウェットな企業定住集団に全人格的に取り込まれていて、心理的に企業定住集団から脱出できず、朝になるとまた仮の居場所の家庭から、本当の居場所の企業定住集団に戻って行く。家庭では、母子の一体性の中に割り込むことができず、家庭に居場所が無いので、仕方なく企業定住集団に戻って行く、という見方も出来る。
（以下の図を参照するということ。）

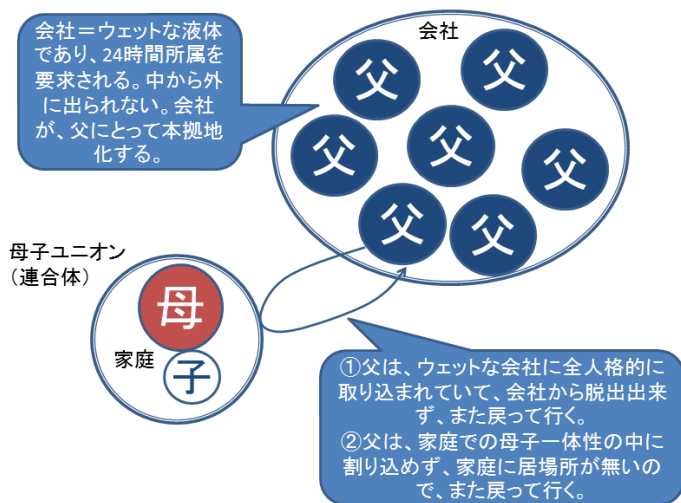



図　会社に居続ける（戻って行く）父

一方、ドライな先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の家庭では、父と子が父から子への命令、指令による強い結びつきを持っており、子との結びつきを父によって断ち切られ、父子関係から閉め出された母の居場所が無い、という状態になっている。これは父の居場所が無い後天的定住集団社会Ａの家庭と逆である。父子中心の社会では、父にとっては、企業定住集団とかも、仮の一時的な所属の場であり、元来企業定住集団から離れたフリーの存在でいることが望ましい、すなわち、父が所属すべきなのは家庭だということになっていると考えられる。
後天的定住集団社会Ａの家庭において、もともと夫（父）は、先代の母親（姑）と共に、家庭内の居場所を占有、占領してきたということ。（先代の父を疎外してきたということ。）そういう存在であったということ。しかし、そこに嫁（妻）が来て、嫁（妻）との間に子供が出来ると、夫（父）は、その嫁（妻）と子供同士が作る母子ユニオンから弾き出されてしまう。夫（父）は、とりあえず姑の加勢を得て、家庭内に居場所を確保し続けるのであるが、次第に姑が高齢化して衰えていくのに比例して、姑の加勢を頼みづらくなり、次第に居場所が消えていくのである。姑がいなくなる場合。（あるいは、次男、三男などのように姑が最初からいない場合。）夫（父）は、家庭内に居場所を持てず、孤立してしまう。そこで、自分と同類の仲間を求めて、企業定住集団に足が向き、家庭に居場所の無い者同士つるんで、企業定住集団三昧の生活を送るようにな

るのである。これが後天的定住集団社会Ａの「男社会」の生成過程である。
こう見てみると、後天的定住集団社会Ａの「男社会」である企業定住集団が、実は、お遍路さんの集団と似た存在であることが言える。企業定住集団は、家庭から疎外された、はみ出た漂流者同士の寄り合い所帯なのである。お遍路さんが社会からはみ出た漂流者同士の寄り合い所帯なのと根は一緒である。
家庭に居場所が無く漂流する、母（姑）の息子たちは、なのにその割には、嫁や嫁候補になる女性たちに対して上から目線で接するのである。つまり、家族定住集団には自分が先に入ったのであり、自分は嫁を迎え入れる先輩格の人間であり、姑の子は、息子（夫）も娘（小姑）も、嫁より立場が上であるため、嫁や嫁候補になる女性たちに対して高圧的に接するのである。これが、男（姑の息子、夫）が偉く、女（嫁）が下位だという男尊女卑のように見えて、批判の対象になったのである。
自分自身は、嫁（妻）と子供が作る母子ユニオンに家庭を占有され、居場所が無くなって不利な立場に置かれているにも関わらず、夫（姑の息子）が高いプライドを嫁（妻）と子供に対して示すのは、自分が先代の母子ユニオンで母＝姑から可愛がられ優遇される存在だったからであり、後天的定住集団社会Ａの農村で先住民が新住民に対して威張るのと根は一緒である。
一方、夫（父）たちの吹き溜まりとしての企業定住集団は、その母親の姑にとって大きな意味のある存在である。企業定住集団は、母親の姑にとって、息子の保育園、幼稚園、学校の延長のような存在である。母親たちが息子同士を互いに競わせ、自分の息子が、よりよい企業定住集団に企業定住集団への加入したり、さらにはその中でより上位になることで、あたかも自分が勝者になったかのように感じ、自己実現を図ることが出来るのである。息子の企業定住集団でのプレゼンと、幼稚園での発表会とが同じ位置づけをもって、母親＝姑には捉えられるのである。その点、企業定住集団は、姑たちの所有物である。
一方、嫁（妻）とその子供の次世代母子ユニオンにとっては、企業定住集団やその所属者である夫（父）は、現金自動支払機（ATM）みたいなそっけない、単なる打ち出の小槌みたいな道具のような存在になってしまうということ。次世代の母子ユニオンの維持にとって居心地の良い環境をひたすらマシーン、労働者のように提供し続けるのが、夫（父）の役目となってしまっているのであるということ。
（初出2013年12月）

後天的定住集団社会Ａにおける父性、父権確立の方法

後天的定住集団社会Ａにおいて、これまで実現して来なかった父性、父権確立の方法は、いくつか考えることができる。
(1)子育てにおける母子分離を実現し、強力な母子連合体（母子ユニオン）の形成と、それによる母権確立を阻止するということ。具体的には、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのように、子供を乳児段階で、母親から引き離して、一日中別室で独立して過ごさせる。子どもと母親との接触を最小限に抑えるということ。そうすることで、母子の紐帯を切るとともに、子供自身に自主独立で、個人主義といったドライで気体的な父性的な気風を身に付けさせることができ、父性による子育てへの介入の機会を根源的に増やすことが出来る。
(2)家計管理権限、財布の紐を、母や妻から切り離し、男性（父）に行くようにすることで、家庭内の経済的意思決定を、男性（父）が出来るようにする。少なくとも、月々家計管理を妻（母）と夫（父）とで回り持ちで行う家計管理の輪番制辺りを実施することで、妻（母）による家庭の財布の紐独占状態を徐々に切り崩していくことが出来る。
(3)後天的定住集団社会Ａの雰囲気、国民性をドライ化、気体化することで、男性が父性、父権を確立しやすくする土台を整備する。社会のウェット化、液体化をもたらす伝統的稲作農耕のスタイルを変えて、稲作農耕スタイルのドライ化、気体化を推進するということ。具体的には、先進的移動生活中心社会Ｇとかで行われているカリフォルニア式稲作農耕などの方式を研究し、稲作農耕従事者の水利面等での成員間相互依存や団体行動の必要性の度合いを大きく減らす方式を導入することで、従来の母性的稲作農耕から父性的稲作農耕への転換を図る。

（初出2012年8月）

家計管理権限を妻から奪取する方法

今の我が家の家計がどうなっているか、見せてほしいと言う。
見せないと言われたら、隠し事、重大問題を抱えているだろう、ますます心配になったと言うということ。
家計簿を見せられたら、（予め入手したファイナンシャルプランナーなどの模範例と比べて）粗探しをするということ。ここが駄目だと、ダメ出しをする。こう直せるはずだと言うということ。
自分ならもっと上手くやれると言うということ。

しばらく1～2ヶ月任せてもらうよと言って、通帳、家計簿を妻からゲットするということ。
その間に、家計上の問題を解決するということ。
これからも自分に任せた方がずっと上手く行くよと言う。

（初出2014年6月）

父性の母性的吸収に陥らないことが必要。

後天的定住集団社会Ａにおける父権社会の確立においては、既に父権を確立している社会（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨなど）の父性的文物を消化吸収することが効果的である。
その際、父性の母性的吸収に陥らないことが必要である。
すなわち、（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的なということ。）ドライ、気体的な父性的文物を、（伝統後天的定住集団社会Ａに特有なということ。）ウェット、液体的な母性的精神によって、とりあえず父性的文物が世界的に優勢だから、上位だから導入しようという姿勢で、権威主義的に、愛情みたいなものをもって一体化、受容して、母性化する形で吸収する過程で、本来あったはずの父性が消えてしまう、無効化されてしまう。
後天的定住集団社会Ａにおける先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ文物の母性的吸収においては、一見先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの価値観に完全に寄りかかっているが、それは先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが強い間だけの暫定的な姿勢であり、父性的な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨが弱くなって、母性的な先天的定住集団社会Ｂが再度台頭すると、吸収対象のあっさり宗旨替えをすることになる。要は、母性的吸収は、その時々の強い者になびいているだけである。
父性を直接吸収するには、吸収する側にも、そこにある程度の父性の素地が無いと難しいと言える。その素地をどうやって母性一辺倒の後天的定住集団社会Ａに作るかが課題である。

（初出2012年8月）

ジェンダーフリー思想と父性強化

従来、後天的定住集団社会Ａにおいて、ジェンダーフリー思想は、フェミニスト(女権拡張論者)主導で押し進められてきた。それは、性差別をなくし、男らしさ、女らしさの枠にはまらない個々人の個性を重視しましょうという主義主張である。

現に、学校での名簿の男女混合化等、性差をなるべく考慮から外すのが先進的で優れた考え方だとする見方が後天的定住集団社会Ａ中に広がっている。
ここで、立ち返って考えてみると、ジェンダーフリー思想のような、各人が、所属するカテゴリーから解き放たれてバラバラになるのを好む行き方は、気体分子運動パターンに近い、ドライな考え方である、と言える。

それは、個々人の(集合からの)自立独立を好む男性、父性向きの考え方であり、一見、性別からの解放を謳いながら、実際には、男性、父性の力を強めている。個々人の相互一体融合化、共通カテゴリーへの集合、一致団結を指向する、母性、女性の力を弱める考え方であるとも言える。

後天的定住集団社会Ａのフェミニストは、ジェンダーフリー思想を導入することで、皮肉にも、後天的定住集団社会Ａにおける母性(女性)の力を弱めることに一生懸命になっていると言える。

後天的定住集団社会Ａにおいて、父性の力を強めるのに、ジェンダーフリー思想は格好のツールとなると言える。要は、個々人の個性重視、集合からの独立を謳うジェンダーフリー思想は、後天的定住集団社会Ａにおける父性強化、母性からの男性解放に役立つのである。

そこで、後天的定住集団社会Ａの男性たちは、フェミニストたちが自分たちの誤りに気づいて、撤回する前に、どんどんジェンダーフ

リーを推進すべきである。

(初出2005年10月)

後天的定住集団社会Ａの父性化革命の方法

効果的な後天的定住集団社会Ａの父性化の方法は何か？

大きく分けて、対子供対策と、対母親対策がある。以下は、順不同で述べる。

一つ目は、母子分離を行うことである。就寝等で、子供を母親とは別室で、母親から大きく離して寝かせるのである。そうすることで、子供は、人と人とが互いに分離したドライな状態が自然であることを体得することが出来る。それを子供に教えこむのであるということ。そうすることで、ドライな父性を、子供に行き渡らせることができる。奥さんを丸め込むには、子供はいずれ自立しなければいけない、その時期は、早いほどよりスムーズになる、と主張すれば良い。赤ちゃんの頃から、特に男の子は、自立の味を心と身体に覚えさせる、感覚を染み込ませることが重要であると奥さんに説くのである。

二つ目は、従来母親が握る家計の財布の紐を、ある程度奪うことである。例えば、家族定住集団の財布は、夫婦相互に代わりばんこで持つことで、内容を互いにチェックし合った方が家庭の財政が健全になると、奥さんを丸め込むのである。そうすることで、夫が家計の財布を持つ機会をより増やすことが出来、家計管理権限を掌握しやすくなり、父性のイニシアティブを発揮しやすくなる。

三つ目は、結婚するときには、男女平等、夫婦平等を宣言し、男女のパワーの比率を、50:50の対等化するように方針を変更することを、夫婦の間で約束し、奥さんにパワーが偏重しないようにすることを、（奥さんに）促すのであるということ。

※その後、ネット匿名掲示板2ch上の書き込み（「後天的定住集団社会Ａのメンバーは女性的民族か」スレ。）で別途参考になる内容が

あったので、要約するとともに、筆者の側で内容拡張して以下に記述します。

四つ目は、父親の家庭での子供の教育に参加する頻度や時間の長さを増やすことである。父親が実際に働いて問題解決を行っている姿を子供に見せたりして、父親としての家庭における存在感を高めるとともに、父親が、学校の父母会、PTAとかに積極的に出席したり、毎日仕事から早く帰宅して子供の根本的な勉強方針、子供が将来就きたい職業の相談への経験者からの助言や子供を理性化する人格教育に直接積極的に関わるとか、子供との接触頻度や接触の質を高めることが必要である。（単なる学習問題の解き方を教える家庭教師では駄目。）

五つ目は、母親の強い影響下で、そのままではとかく感情的、情緒的な好き嫌い中心の女性的思考に偏りがちな自分の子供に対して、論理や理屈に基づく正誤判断、断定による男性的な思考様式を導入し、物事が何故そうなるのかの理屈、原因を自力で考えさせたり、子供が何か物事を実行する際に、なぜ行うかその理由を、周囲が納得するレベルまでしっかり説明させるとかを行うことで、子供の思考様式を論理化、理性化によって父性化していくことが必要である。

六つ目は、子供に自分自身で考えぬいた上で、決断をさせ、その決断とそれに伴う努力を温かく見守り、決断への責任を自身で取ることを教えることである。父性の特徴は、家族を一定の方向に導くための方向、方針の決定、決断をすると共に、その決断が成功に終わるか、失敗に終わるかについて、成功するように最善の努力をし、いざ失敗したとしたら、潔く責任を認めて、自ら責任をかぶり、減給等を受け入れるところにあると言える。このエッセンスを子供に教えこみ、子供を父性化するのであるということ。

こういうのは特に、父性の本来的な担い手である男の子に対して行うべきであると考えるが、女の子に対しても、そのままでは母親譲りで身についてしまう過剰な母性を切り落として弱体化させるためにも必要であると考える。その結果、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの女性のように、男性化してしまい、本来の女性としての魅力が失われることは覚悟しないと行けない。

とりあえず、少なくとも、今の後天的定住集団社会Ａの夫のように、父親が子育てから疎外され、参加すらさせてもらえない（すな

わち、子育て、子供の教育権限が母親独占になっている。）後天的定住集団社会Ａの仕組みになっているのを変えなければいけないということ。

（初出2013年10月）

後天的定住集団社会Ａの男性を子育てさせるには。

女性、妻が家計管理の権限を男、夫に渡せば、後天的定住集団社会Ａの男も自然と子育てするようになる。

後天的定住集団社会Ａの男が子育てをしないのは、家計管理権限を妻に独占され、お金を管理できない子供扱いされて、家庭運営の蚊帳の外に置かれているからである。

（初出2013年10月）

３．

本書の要約、まとめ

家庭、家族関係は、大きく分けて、以下の通りである。
（１）夫婦関係 家庭の基盤となる男女関係
（２）親子関係 父子、母子、義理の父子、母子関係
から成ると言えるということ。
後天的定住集団社会Ａの家庭、家族の中の男女の勢力関係は、以下の通りである。
（１）夫婦関係に着目すると、後天的定住集団社会Ａでは、夫＝男性が強く見えることが多い。

・嫁が夫の家族定住集団に嫁入りし、夫の家族定住集団の言うことを聞く必要がある。
・男尊女卑で、夫が威張っている。
・稼ぐのが主に夫であることが多く、妻、嫁はあまり稼げておらず、経済的に夫に依存せざるを得ない。
こうした点を強調して、後天的定住集団社会Ａの家族は家父長制だという主張が、後天的定住集団社会Ａの社会学者の間では主流になっている。
一方、妻＝女性が強く見える側面もある。
妻が家計管理の権限を独占していることが多く、小遣いを夫に渡す場面が多く見られる。小遣いは渡す財務大臣役の方が、もらう方より地位が上である。
（２）親子関係に着目すると、後天的定住集団社会Ａでは、母＝女性が強い。子育ての権限を独占し、教育ママゴンとか呼ばれ、怪物扱いされているということ。子供を自らの母性の支配下で動く操りロボットにすることにすっかり成功しているということ。一方、父は、子供と関わりをあまり持とうとせず、影が薄い。
こうした母親の影響力の大きさを考慮して、後天的定住集団社会Ａは母性社会だという主張が、後天的定住集団社会Ａの臨床心理学者の間で主流になっている。
このように、夫婦関係を見た場合と、親子関係を見た場合とで、後天的定住集団社会Ａの男女の勢力に関する見方が分裂しているのが現状であり、両者の見方をうまくつなぎ合わせる統合理論が必要である。
筆者は、両者の見方をうまく統合させる契機として、「夫＝お母さん（姑）の息子」と見なして捉えることを提唱するということ。
家父長として強い存在と思われてきた夫が、実は、母、姑の支配下に置かれる操りロボットとして、実は父性が未発達の、母性的な弱い存在であることを主張する。
後天的定住集団社会Ａにおいて、子育てを母が独占し、子供の幼少の時から、強力な排他的母子連合体（母子ユニオン）を子供と形成しということ。（母が支配者で、子が従属者、母の操りロボット。）、この母子一心同体状態が子供が大人になってからもずっと持続し、この既存の母子連合体が一体となって、新入りの嫁を支配するという構図になっている。このうち、「母の息子＝夫」と嫁の間のみを取りだして見ると、夫が嫁である妻を支配するという従来、後天的定住集団社会Ａ＝家父長制社会論で主張されてきた構図が見える。しかし実際には、夫は、母である姑に支配されており、その姑と一体となって、嫁を抑圧しているに過ぎない。
後天的定住集団社会Ａの夫婦における勢力関係を正しく把握するに

は、夫婦（夫妻）だけを見るのではなく、夫婦（夫妻）のうちの夫側に、母のくさびを打ち込むことが必要である。あるいは、母や姑が一家の実質的な中心であり、真の支配者であるとする「母」「姑」中心の視点を持つことが必要である。
夫婦だけを見るのでなく、
・母～息子（夫）←（何人も割って入ることを許さない母子連合体、ユニオン。）
・姑～嫁（妻）
・夫（母の息子）～妻（嫁）
の3つを同時に見る必要がある。夫の父（舅）は、一世代前の母の息子のままの状態であり、影が薄い。夫の姉妹は、小姑として、夫同様、姑中心の母子連合体の一員として、嫁を支配する、姑に準ずる存在である。
夫は、妻にとっては一見強い家父長に見えながら、実際のところは、いつまで経っても母の大きい息子のまま、母に支配され、精神的に自立できない状態にある弱い存在であるという認識が必要である。
母の息子である夫、父は、一家の精神的支柱である母と違い、家父長扱いされながらも、母に精神的に依存し続けて一家の精神的支柱になれない、ともすれば軽蔑され見下される存在と成り下がっているのである。
夫は、仕事にかまけて子供と離ればなれになっているが、実は、この仕事が、夫の母の代わりに行っているというか、母の自己実現の代理になっている。企業定住集団での出世昇進とか、一見、夫が自分自身のために頑張ってしているように見えて、実は、夫自身が母の中に取り込まれ、母と一心同体となって母のために頑張って行っているというのが実情である。母が息子の出世昇進に一喜一憂し、夫にとって、自分の人生の成功が、そのまま母の人生の成功になっている。また、夫が企業定住集団で取る行動は、企業定住集団人間のように、企業定住集団との一体感、包含感を重視する、とかく母性的なものになりがちで、彼を含めた企業定住集団組織の男性たちが大人になっても母の影響下から脱することが出来ていないことを示している。
筆者は、こうした、以下の通りである。
・母（姑）による息子＝（妻にとっての夫）の全人格的支配
・妻による家計管理の権限独占に基づく夫の経済的支配
の両者を合わせることで、後天的定住集団社会Ａの家庭～社会全体において、母性、女性による男性の支配が確立しており、後天的定住集団社会Ａは、実は、母権社会、女権社会である、と主張する。
一家の中心は、母、姑である。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの権威筋の学説（Bachofen等）は、母権社会の存在をこれまで否定してきており、筆者の主張はこれに正面から反対するものである。
後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性と男女の性格との相関を取ると、後天的定住集団社会Ａのメンバーは女らしい（相互の一体感、所属の重視。護送船団式に守られること、保身安全の重視。リスク回避、責任回避重視。液体分子運動的でウェット・・・）で動いているという結論が出る。これは、後天的定住集団社会Ａが、女権、母権社会であることの動かぬ証拠と考えられる。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、姑根性で動いている。（姑根性とは、周囲の、後輩などの嫁相当の目下の者に対して、口答えを一切許さず、妬み心満載で、その全人格を一方的、専制的に支配するということ。）このこと自体が、後天的定住集団社会Ａにおける母、姑の影響力、支配力の強さを表している。それゆえ、後天的定住集団社会Ａの社会、家族分析に、姑中心、母中心の視点を取ることが必要であると言える。
従来の後天的定住集団社会Ａの男性は、母や妻による支配を破ろうとして、がさつな乱暴者、あるいは雷親父となって、ドメスティックバイオレンスとかで対抗してきた節が見られるが、暴力を振るうだけ、より家族から軽蔑され、見放される存在になってしまう結果を生み出している。あるいは、家庭の外の仕事に逃げようとするが、仕事に頑張ることがそのまま母の自己実現になるという、母の心理的影響、支配を振り切ることはそのままでは不可能である。
こうした女性、母性による後天的定住集団社会Ａ支配は、後天的定住集団社会Ａの根底が、女向きの、水利や共同作業に縛られた稲作農耕文化で出来ているために生じると考えられる。そこで、筆者は、後天的定住集団社会Ａの男性は、従来の伝統的稲作農耕文化から脱却して、新たに、家父長制の本場である先進的移動生活中心社会群ＦＧＨやユダヤ、アラブ、モンゴルといった遊牧、牧畜民の父親のようなドライな父性を身につけることで、母と妻に対抗できるようにすべきだ、母と妻の支配から解放されるべきだと主張する。これが、後天的定住集団社会Ａの男性解放論である。要するに、子育てと家計管理において父権を確立することで、父親として真に社会で支配力を持った、尊敬される存在になろうと呼びかけるものであるということ。筆者は、その際、稲作農耕を、伝統的な後天的定住集団社会Ａ方式から、よりドライなやり方の先進的移動生活中心社会Ｇのカリフォルニア方式に改めることで、稲作農耕を維持しながら、ドライな父権を社会に実現できると予期している。
筆者は、最終的には、男女の力関係は、対等の50：50が望ましいと考えている。これが、究極の男女平等であると主張する。先進的移

動生活中心社会群ＦＧＨみたいに、男性、父性が強くなり過ぎても、後天的定住集団社会Ａみたいに、女性、母性が強くなり過ぎても良くない、適度なバランスが必要と考える。家計管理を、夫と妻が1月交代で行う月番制導入とかである。
（初出2012年6月）

母性的フェミニズム - 世界女性の模範としての後天的定住集団社会Ａの女性 -

要旨

本書では、後天的定住集団社会Ａにおいて男女の性差がどのような影響をもたらしているか、従来の後天的定住集団社会Ａの女性学や後天的定住集団社会Ａのフェミニズムに再考を促す形で考察しています。
例えば、従来の後天的定住集団社会Ａの女性学・後天的定住集団社会Ａフェミニズムの通説では、「後天的定住集団社会Ａは、男性中心、家父長制社会である」「女性は男性に比べ、世界どこでも普遍的に、弱い劣位の解放されるべき存在である」とされてきました。
前書「後天的定住集団社会Ａの女性的性格」「母権社会後天的定住集団社会Ａ」「後天的定住集団社会Ａの男性解放論」では、こうした通説に疑問を抱いた筆者が、後天的定住集団社会Ａを調査したり、分析したりした結果をもとに、「ウェットな、液体的な後天的定住集団社会Ａは女性の方が強い、母性中心で動いている母権社会である」「後天的定住集団社会Ａの男性こそが、女性、母性による支配から解放されるべき存在だ」などの主張を展開しています。
本書では、そうした後天的定住集団社会Ａにおける女性、母性の強力さに着目し、伝統的な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流のフェミニズムを180度転回して、母性を軸に女性が社会を効果的に支配する方略としての母性的フェミニズムを、新たに提唱しています。
そして、後天的定住集団社会Ａの女性が、フェミニズムにおいて、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨを含む世界の女性たちの模範とな

るべき存在であると主張しています。

文中、各セクションは、それぞれ独立した読み物、エッセイとなっており、どこからでも読み始めることができます。

前置き

本書の議論の背景

家庭、家族関係は、大きく分けて、以下の通りである。
（１）夫婦関係 家庭の基盤となる男女関係
（２）親子関係 父子、母子、義理の父子、母子関係
から成ると言えるということ。
後天的定住集団社会Ａの家庭、家族の中の男女の勢力関係は、以下の通りである。
（１）夫婦関係に着目すると、後天的定住集団社会Ａでは、夫＝男性が強く見えることが多い。
・嫁が夫の家族定住集団に嫁入りし、夫の家族定住集団の言うことを聞く必要がある。
・男尊女卑で、夫が威張っている。
・稼ぐのが主に夫であることが多く、妻、嫁はあまり稼げておらず、経済的に夫に依存せざるを得ない。
こうした点を強調して、後天的定住集団社会Ａの家族は家父長制だという主張が、後天的定住集団社会Ａの社会学者の間では主流になっている。
一方、妻＝女性が強く見える側面もある。
・妻が家計管理の権限を独占していることが多く、小遣いを夫に渡す場面が多く見られる。小遣いは渡す財務大臣役の方が、もらう方より地位が上である。
（２）親子関係に着目すると、後天的定住集団社会Ａでは、母＝女性が強い。子育ての権限を独占し、教育ママゴンとか呼ばれ、怪物扱いされているということ。子供を自らの母性の支配下で動く操り人形、ロボットにすることにすっかり成功しているということ。一方、父は、子供と関わりをあまり持とうとせず、影が薄い。
こうした母親の影響力の大きさを考慮して、後天的定住集団社会Ａは母性社会だという主張が、後天的定住集団社会Ａの臨床心理学者の間で主流になっている。
このように、夫婦関係を見た場合と、親子関係を見た場合とで、後

天的定住集団社会Ａの男女の勢力に関する見方が分裂しているのが現状であり、両者の見方をうまくつなぎ合わせる統合理論が必要である。
筆者は、両者の見方をうまく統合させる契機として、「夫＝お母さん（姑）の息子」と見なして捉えることを提唱するということ。
家父長として強い存在と思われてきた夫が、実は、母、姑の支配下に置かれる操り人形、ロボットとして、実は父性が未発達の、母性的な弱い存在であることを主張する。
後天的定住集団社会Ａにおいて、子育てを母が独占し、子供の幼少の時から、強力な排他的母子連合体（母子ユニオン）を子供と形成するということ。（母が支配者で、子が従属者、母の操りロボット。）この母子一心同体状態が子供が大人になってからもずっと持続し、この既存の母子連合体が一体となって、新入りの嫁を支配するという構図になっている。このうち、「母の息子＝夫」と嫁の間のみを取りだして見ると、夫が嫁である妻を支配するという従来、後天的定住集団社会Ａ＝家父長制社会論で主張されてきた構図が見える。しかし実際には、夫は、母である姑に支配されており、その姑と一体となって、嫁を抑圧しているに過ぎない。
後天的定住集団社会Ａの夫婦における勢力関係を正しく把握するには、夫婦（夫妻）だけを見るのではなく、夫婦（夫妻）のうちの夫側に、母のくさびを打ち込むことが必要である。あるいは、母や姑が一家の実質的な中心であり、真の支配者であるとする「母」「姑」中心の視点を持つことが必要である。
夫婦だけを見るのでなく、
・母～息子（夫）←（何人も割って入ることを許さない母子連合体、ユニオン。）
・姑～嫁（妻）
・夫（母の息子）～妻（嫁）
の3つを同時に見る必要がある。夫の父（舅）は、一世代前の母の息子のままの状態であり、影が薄い。夫の姉妹は、小姑として、夫同様、姑中心の母子連合体の一員として、嫁を支配する、姑に準ずる存在である。
夫は、妻にとっては一見強い家父長に見えながら、実際のところは、いつまで経っても母の大きい息子のまま、母に支配され、精神的に自立できない状態にある弱い存在であるという認識が必要である。
母の息子である夫、父は、一家の精神的支柱である母と違い、家父長扱いされながらも、母に精神的に依存し続けて一家の精神的支柱になれない、ともすれば軽蔑され見下される存在と成り下がっているのである。

夫は、仕事にかまけて子供と離ればなれになっているが、実は、この仕事が、夫の母の代わりに行っているというか、母の自己実現の代理になっている。企業定住集団での出世昇進とか、一見、夫が自分自身のために頑張ってしているように見えて、実は、夫自身が母の中に取り込まれ、母と一心同体となって母のために頑張って行っているというのが実情である。母が息子の出世昇進に一喜一憂し、夫にとって、自分の人生の成功が、そのまま母の人生の成功になっている。また、夫が企業定住集団で取る行動は、企業定住集団人間のように、企業定住集団との一体感、包含感を重視する、とかく母性的なものになりがちで、彼を含めた企業定住集団組織の男性たちが大人になっても母の影響下から脱することが出来ていないことを示している。
筆者は、こうした、以下の通りである。
・母（姑）による息子＝（妻にとっての夫）の全人格的支配
・妻による家計管理の権限独占に基づく夫の経済的支配
の両者を合わせることで、後天的定住集団社会Ａの家庭～社会全体において、母性、女性による男性の支配が確立しており、後天的定住集団社会Ａは、実は、母権社会、女権社会である、と主張する。
後天的定住集団社会Ａにおける一家の中心は、母、姑である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの権威筋の学説（Bachofen等）は、母権社会の存在をこれまで否定してきており、筆者の主張はこれに正面から反対するものである。
後天的定住集団社会Ａのメンバーの国民性と男女の性格との相関を取ると、後天的定住集団社会Ａのメンバーは女らしい（相互の一体感、所属の重視。護送船団式に守られること、保身安全の重視。リスク回避、責任回避重視。液体分子運動的でウェット・・・）で動いているという結論が出る。これは、後天的定住集団社会Ａが、女権、母権社会であることの動かぬ証拠と考えられる。後天的定住集団社会Ａのメンバーは、姑根性で動いている。（姑根性とは、周囲の、後輩などの嫁相当の目下の者に対して、口答えを一切許さず、妬み心満載で、その全人格を一方的、専制的に支配するということ。）このこと自体が、後天的定住集団社会Ａにおける母、姑の影響力、支配力の強さを表している。それゆえ、後天的定住集団社会Ａの社会、家族分析に、姑中心、母中心の視点を取ることが必要であると言える。
従来の後天的定住集団社会Ａの男性は、母や妻による支配を破ろうとして、がさつな乱暴者、あるいは雷親父となって、ドメスティックバイオレンスとかで対抗してきた節が見られるが、暴力を振るうだけ、より家族から軽蔑され、見放される存在になってしまう結果を生み出している。あるいは、家庭の外の仕事に逃げようとする

が、仕事に頑張ることがそのまま母の自己実現になるという、母の心理的影響、支配を振り切ることはそのままでは不可能である。
こうした女性、母性による後天的定住集団社会Ａ支配は、後天的定住集団社会Ａの根底が、女向きの、水利や共同作業に縛られた稲作農耕文化で出来ているために生じると考えられる。
そこで、筆者は、後天的定住集団社会Ａが母権社会だとすれば、後天的定住集団社会Ａの女性は、女権の拡張という点では、世界の女性、特に先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ先進国女性の模範、先生となる存在であると言え、後天的定住集団社会Ａの女性のような、子育てにおける母子連合体や母子ユニオンの形成、母権を軸にした女権確立、拡張の行き方を、既存の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性が主導してきたフェミニズムと区別して、母性型フェミニズムと呼んで、世界に広めていってはどうかと主張している。
将来的に、後天的定住集団社会Ａにおいては、男性側の男性解放、父性確立への流れと、女性側の母性的フェミニズム推進の流れとが、真正面から衝突することになると筆者は予想する。

（初出2012年6月）

本編

後天的定住集団社会Ａは、実は、フェミニズムの先進国だった！

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのフェミニズムは、所詮は、女性が弱い社会のフェミニズムである。

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの主婦は、だいたいにおいて家族定住集団の財布も子供も、夫に握られてしまい、単なる下級家政婦に成り下がっていて、それが自ら働きに出る、社会進出することで、意趣返ししようというのが、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムの原点だと思う。

女性が強い社会のフェミニズムは、こうでなきゃ行けないと試作したのが本書籍の内容である。

従来、後天的定住集団社会Ａのフェミニズム学者が後天的定住集団社会Ａに導入している先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ産のフェミニズムは、強い女性を未だに実現できていない先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会でもがき苦しむ女たちが作った出来損ないのフェミニズムである。本当に女性が強い社会にしたかったら、女性、母性の強い後天的定住集団社会Ａが、世界のフェミニズムの模範となるはずである。その点、後天的定住集団社会Ａはフェミニズムの先進国であると言える。

家族定住集団の財布と子供をがっちり握っている後天的定住集団社会Ａの女性は、世界最強の存在である。

後天的定住集団社会Ａは、女社会であり、女性による社会支配の極致である。

逆に、後天的定住集団社会Ａを本気で男社会にしたかったら、後天的定住集団社会Ａの女性から家族定住集団の財布と子供を取り上げるべきであるということ。

（初出2015年2月）

女性解放、女権拡張の最先端を行く後天的定住集団社会Ａ

後天的定住集団社会Ａでは、男性は、子供も家計の財布の紐も女性に奪われており、単なる現金供給機＝ATM奴隷と化している。こうした現状からの男性の解放が必要である。
後天的定住集団社会Ａで男性解放が必要であるということは、裏を返せば、それだけ社会における女性の力が強く、女性解放、女権拡張が進んでいるということである。当の後天的定住集団社会Ａのメンバーがそのことに気づいていないだけである。
その点、後天的定住集団社会Ａのフェミニストや女性学者は、後天的定住集団社会Ａを、女性解放、女権拡張の最先端を行く模範ケースとして、全世界に向けて宣伝すべきではないか？
(初出2008年04月)

女権拡張の先進国、後天的定住集団社会Ａ～定住生活中心社会群Ｄ

先進的移動生活中心社会Ｇの国是は、自由、独立、個人主義といった内容であり、いずれも男性性に基づくものであり、女性性に反するもの、女性性を抑圧するものばかりである。
先進的移動生活中心社会Ｇは、女権拡張、女性解放においては後進国である。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ～全世界の女性は、集団行動、相互依存、相互一体化といった女性性を重視する後天的定住集団社会Ａ～定住生活中心社会群Ｄ社会を目指すべきである。
後天的定住集団社会Ａ～定住生活中心社会群Ｄ社会は、女権拡張、女性解放において、先進国である。
（初出2011年8月）

世界の女性たちの模範となる後天的定住集団社会Ａの女性

後天的定住集団社会Ａの女性は、女権拡張という観点からは、世界の女性たちの模範となる存在である。
後天的定住集団社会Ａは、女権拡張という点では、世界の最先端の先進国である。
後天的定住集団社会Ａの女性は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ女性たちに対して、自分たちの方が、女権拡張の面で、先生に当たると言える。
後天的定住集団社会Ａのような母権社会は、フェミニストにとっての理想社会であると言える。
後天的定住集団社会Ａの女性たちは、真の母権社会はこういうものだと、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのフェミニストに対して、逆に教えるべきである。
今まで、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのフェミニストたちを先生と仰いで、必死にその教えを受け入れてきたが、それは間違いであり、父権社会先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニストの言動は、既に母権社会化を達成している後天的定住集団社会Ａにとっては、あまり参考にならない、ということに気づくべきである。
（初出2012年5月）

女権拡張セミナーを開いたらということ。

後天的定住集団社会Ａは、女性がスタンダードの社会であり、男性が女性に合わせている。すなわち、気配りや同調協調、集団行動、先輩後輩制の遵守がそれである。
一方、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは、男性がスタンダードの社会であり、女性が男性に合わせている。すなわち、自立、自分らしさや個性の重視、個人行動の重視がそれである。
非スタンダードの女性が、スタンダードの男性並みになるための運動が先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムであり、それが後天的定住集団社会Ａに直輸入されているのである。
本来なら、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムは、自ら女社会の特徴を分析して、世界の女社会化＝後天的定住集団社会Ａ化を目指すべきであった。
もしも、世界で女権拡張セミナーみたいなのが開かれるとしたら、後天的定住集団社会Ａの女性たち、特にお母さんや姑が、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨや世界の女性たちの先生、教授になるべきである。
そこで何を教えるかであるが、例えば、以下の通りである。
・自分の子供を掴んで離さないノウハウ、母子連合体（母子ユニオン）を作って、子供、特に息子を自分の操り人形、ロボットとするノウハウ
・夫を子供から遠ざけ、子供を夫に渡さないノウハウ
・夫に家計管理の権限を渡さないノウハウ
・姑として、家族全体を支配するノウハウ
が考えられる。
（初出2012年5月）

女性人権侵害、抑圧の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと18禁ゲーム規制

最近、イギリス辺りの人権団体が、後天的定住集団社会Ａのソフトウェア企業定住集団が作ったレイプを主題とする18禁ゲーム（エロゲー）を人権侵害であるとして非難し、それに敏感に反応した後天的定住集団社会Ａ側が、ソフト制作の自主規制を始めたようだ。
しかし、実際のところ、イギリスを初めとする先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ（というか詳しくは先進的移動生活中心社会群Ｆと北米。）は、社会、国家レベルで、女性の人権侵害、抑圧をやっているのである。
どういうことかと言えば、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨは、気体的でドライな社会であり、個人行動、相互のバラバラな独立と自由の確保を何よりも重視するのであるが、実際のところそれらは、

女性の持つ集団指向、相互の一体感や同調性の確保を重視する液体的でウェットな本質をことごとく否定し、消し去ろうとすることにつながっているのである。
女性のジメジメ、ドロドロ、ウェットな本質的性格を社会、国家レベルで否定することは、そのまま女性本来の性質の否定と、女性への男性的性格の強制につながり、それゆえ女性の人権を、社会の根本で否定、侵害、抑圧していることになる。
イギリスとか女王がトップではないかという声が聞こえてきそうだが、実際のところ、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの女性は、本来持っているはずのウェットな性質を殺され、ドライな男性にひたすら合わせて生きる、無害だがあまり役に立たない只の置物であり、男性の専制下で働く家政婦か、所有物、ペットみたいに扱われているのではないだろうか。その実態を巧みにレディーファーストで覆い隠しているのだということ。
一方、ウェットな定住集団社会後天的定住集団社会Ａでは、表向きは男社会ということになっているが、実際は、母親や専業主婦の立場の女性が好き放題に活躍しており、男性（息子、夫）を尻に敷いて支配しているということ。息子を操縦する教育ママの存在や、妻が小遣いを夫に渡す制度とか代表的である。
普段女性に抑えられている後天的定住集団社会Ａの男性としては、例えゲームの上だけでもいいから、女性を思いのままに支配したいと思って、エロゲーを購入してきたのである。それに応えてきたのが女性レイプ性暴力のソフトを作ったソフト企業定住集団である。
女らしさを社会の根本で否定、抑圧している、いわば女性への男性性の押し付けという性暴力を国家、社会レベルで行っている先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会は、その本質面で女性の人権を侵害しており、その社会の産物である先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの人権団体も、本来女流後天的定住集団社会Ａのソフト企業定住集団に女性人権侵害のケチを付けられる立場にはいない。しかるに、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨに頭の上がらない後天的定住集団社会Ａの政府やその配下のソフト企業定住集団の機関は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのメンバー権団体に言われるままにエロゲー規制をなしくずしで始めてしまった。これは問題だと思う。
（初出2009年6月）

母子分離、母子一体・癒着とフェミニズム

これまで女性の力を封印してきた先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会は、女権拡張、フェミニズムの後進国であり、後天的定住集団社会Ａや定住生活中心社会群ＡＢＣ諸国がフェミニズム先進国であ

る。
子供が母親の元を去って行く、母親から独立する母子分離型社会（先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ）は、女性の力が弱い女権拡張、フェミニズムの後進国である。自由、独立、自立といった男性の特質が生かされる社会だからである。
一方、母子融合、母子癒着が起きていて、子の母への永久的、永続的な依存や甘えが見られる母子一体型社会（後天的定住集団社会Ａ～定住生活中心社会群ＡＢＣ）は、女性の力の強い、女権拡張、フェミニズムの先進国である。甘え、一体化、同調といった女性の特質が生かされる社会だからである。
母子一体性の強制は、女の子に対しては自然だが、男の子に対しては不自然である。それは、他者からの分離独立を指向する男性性を殺すことにつながるからである。
（初出2011年8月）

男性模倣型フェミニズムと女性独自型フェミニズム

女性が力を取り戻そうとする時、既にある男性の力のあり方を真似るのが、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの（、および先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ直輸入の後天的定住集団社会Ａの）男性模倣型フェミニズムであるということ。要するに、男性と同様、経済的自立、自由の獲得を目指すのであるということ。
一 方、女性本来の力のあり方を指向するのが、女性独自型フェミニズムである。要するに、職場を女性的雰囲気（相互一体感の重視、団体行動の重視、職場への全人格的没入の重視、下位者の上位者への全人格的服従の重要視・・・）で固め、男性と共働きで、男性と同様に昇進しつつ、家庭において、我が子の全人格や家計管理の権限を奪取し、その状態を維持することを 目指すのであるということ。伝統的な後天的定住集団社会Ａの女性は、この戦略で成功しており、男性を支配下に置いている。伝統的な後天的定住集団社会Ａの女性は、フェミニズムの成功例なのである。
（初出2011年8月）

姑のフェミニズムと、嫁のフェミニズム

後天的定住集団社会Ａのフェミニズムには、少なくとも次の2種類が考えられる。
それは、姑のフェミニズムと、嫁のフェミニズムである。
姑のフェミニズムは、従来の伝統的後天的定住集団社会Ａの現状をそのまま追認する形で、後天的定住集団社会Ａの家庭やひいては社

会全体への姑の立場の女性による支配の維持を主張するものである。この立場では、母と息子の間の強力な連合の維持を図る。
嫁のフェミニズムは、嫁の姑からの自立を主張し、姑とその息子との間の連合関係の切断と、嫁とその母親との連合の強化を新たに図る。
従来の、良妻賢母の考え方は、家庭をベースとした女性の成員管理権限の強化と、自分の子どもの独占的制御、支配の強化を主張するものであり、姑のフェミニズムに該当すると考えられる。
一方、戦前～戦後に先進的移動生活中心社会群ＦＧＨから導入されたフェミニズムは、嫁のフェミニズムに該当すると考えられる。表面的には、男性（夫）からの女性（妻）の解放を主張しているが、実際は、夫を出汁にして、姑に対する嫁の立場の向上、強化、逆転を狙っていると見なせる。
良妻賢母主義は、従来、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちによって、女性を家族定住集団の中に閉じ込める、家父長制的で前近代的な考え方であり、打破すべきであるとされてきた。
これは、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちが手本とした先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の女性について言えば、至極真っ当であり、確かに打破すべきであると言える。それは、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの女性たちは、家族定住集団庭内で家族定住集団計管理や子育てといった主権を夫や父親に押さえられて持つことができず、それゆえ、家族定住集団の外に出口、活路を見出そうとするのが順当であると考えられるためである。
しかし、伝統的な後天的定住集団社会Ａの女性に関して言えば、良妻賢母の型にはまる女性が一番強力で恐ろしい存在である。それは、彼女たちが、家庭内で家計管理や子育てといった主権を完全に掌握し、かつ、夫をその状態で女性に心理的に依存させることに成功しているからである。
ただし、この良妻賢母主義はどちらかと言えば、姑寄りの考え方である。嫁は、ずっと夫の家族定住集団に入って姑の支配を一方的に受け続けなければならず、とても耐えられないので、家庭の外にはけ口を求める必要がある。そこに女性の家庭からの自立を掲げる先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムが来たので、それに嫁の立場の女性が一斉に飛びついたというのが、戦後後天的定住集団社会Ａのフェミニズム受容であったと言える。
同じ女性の家庭からの自立と言っても、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの女性の場合は、支配者である夫からの自立がメインである。一方、後天的定住集団社会Ａの女性の場合は、実質支配者である姑からの自立がメインであり、夫からの自立はおまけというか、夫は姑の子分なので姑の手前従うけれど、親玉の姑を倒してしまえ

ば、姑の子分の夫は自ずと自分にすり寄ってくる弱い存在だと予め計算していると言える。女社会においては、家庭や学校、企業定住集団等の集団への加入順序に基づく先輩後輩の絶対的な上下支配関係が存在し、後輩や新入りに当たる嫁は、先輩である姑を批判できないという不文律というか掟が存在している。それゆえ、嫁は姑を表向き批判することができず、批判の対象として、姑の後ろ盾はあるものの、より弱体な夫にターゲットをすり替えて批判していると考えられる。
それゆえ、従来の後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、以下の点でもう一度検証しなおす必要がある。すなわち、表向きは女性の男性からの解放を目指していたが、実際は、結婚相手の男性の母親である姑からの嫁の解放、女性の女性からの解放を目指していたのではないかということである。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの主張は、建前は、女性の独立、生活の経済的自立であったが、実際は、姑の息のかからないところで自活できる、経済的に自立できることで、姑の支配からの独立であったのではないだろうか。
女性の就業機会を男性並みに権利として確保しようとする男女雇用機会均等法にしても、嫁が、姑の支配する夫の実家から出ていっても経済的に生活していけること、すなわち嫁の姑からの経済的独立、自立を確保するのが真の目標だったのではないだろうか。
あるいは、妻が自分の姓を夫に合わせなくて済むようにする夫婦別姓にしても、「嫁」概念、存在そのものの解消を目指していた節がある。なぜなら、嫁は、姑による支配、姑への服従を前提とした存在であり、嫁の立場の女性としては、そもそも夫の家族定住集団に入らない、嫁入りしないことで、姑の立場の女性が自分を支配するのを阻止できるからである。
子育てなどの男女共同参画にしても、嫁が姑の世話にならずに、姑の支配下に入らずに、自分たち夫婦だけで生きていく、子育てをすることを、実際には目指しているのではないだろうか。
後天的定住集団社会Ａの男性、夫は、その母親である姑に支配されるとともに、姑と一心同体であり、そのままでは嫁である自分ではなく、姑の側に付いてしまう。そこで、後天的定住集団社会Ａのフェミニストが男性を批判する真の目的は、男性が実母である姑の側に付くことをマザコンだとして批判し、男性を実母である姑から遠ざけることで、嫁である自分と夫との間の「夫婦カプセル」が、姑の影響下にまとめて入るのを排除し、夫との関係を妻である自分が独占することである。そして、夫婦カプセルにおいて、妻である自分が、家計管理や子育てとかでの実質的な支配権、主導権を握ることである。そのためには、姑の息子である夫を姑から切り離して

自分の側に付ける必要がある。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ産のフェミニズムは、それを実現するための方便として、嫁の立場の女性によって利用されたのである。
一方、伝統的な後天的定住集団社会Ａの女性の間には、嫁姑順送りの思想みたいなのが存在し、姑に酷い目にあわされた嫁は、自分が姑の立場になったら嫁に同じ酷いことをする、という負の連鎖が無限連鎖になっていると言える。これは、嫁の姑からの自立が起きることでストップする。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムの導入により、嫁の姑からの自立が起きた結果、姑に酷い目にあわされ、嫁には自立されて、姑としての影響力、支配力を行使できない、損をしている、かわいそうな？世代の姑が生まれていると言える。これが、男女共同参画時代以降の後天的定住集団社会Ａの姑である。
戦後後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、姑の既得権益を切り崩す嫁のフェミニズムであった。それは、実質、女同士の戦いであった。見かけは、男社会批判であったが、実際は、「姑社会」批判であった。今までの後天的定住集団社会Ａは、見かけは男性たちの支配する男社会に見えるが、実は、その男性たちがことごとくその母親たちによって支配されている「姑社会」であったと言える。
そして、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムの導入による、表面的な妻の夫からの自立の主張を隠れ蓑にした、妻の、姑が支配する夫の実家からの自立により、姑社会が消滅しつつあると言える。嫁の立場の後天的定住集団社会Ａの女性による男性批判は、男性が姑の子分、一員であり、そうした男性を批判することが姑に一矢報いることにもつながっていたと言える。
これはまた、従来の嫁の立場の女性が、姑の支配下にある夫の実家に入ろうとしないことで嫁概念の弱体化を招いている。すなわち、妻による「夫の姑からの切り離し」作戦が進行しており、それは夫婦単位の見かけ上の強化、見かけ上の夫婦関係のカプセル化の進行となって現れている。この妻による「夫の姑からの切り離し」は、実際は、妻とその実家との結びつきの強化につながる。従来、妻は夫の家族定住集団に嫁入りするに当たって、実家との縁を表面上切らざるを得なかった。それは、例えば、嫁入り衣装が真っ白であることで、結婚する女性が、いったん自分自身を白紙状態に戻して、夫の実家に新入りする気持ちを表現している点に表れているのである。それを切らなくてよくなりつつあるのであるということ。
これは、妻と妻の実家が、夫を支配することに結びついていると言える。すなわち、姑のバックアップが無くなった結果、夫の立場が弱体化し、その結果、入婿と大して変わらない状態に実質的に追い込まれているのである。

嫁入りの実質的な消滅が、後天的定住集団社会Ａでは本格的に起きようとしているか、既に起きている。姑による嫁とその夫の支配から、妻と妻の母による夫の支配（と姑の疎外）への移行が起きていると言える。
これは、後天的定住集団社会Ａの男性の草食男子化とも関連していると言える。後天的定住集団社会Ａの特に若い男性が、女性に対してとかく覇気が無いとされるようになっているのは、男性が結婚すると、実母である姑のメンタル面でのバックアップが期待できなくなりつつあることが理由として挙げられる。従来あった姑という支えに頼れなくなった男性が、嫁というか、同世代の結婚対象の女性全般に対して弱くなってきているのである。
息子を嫁に取られた、姑の実権を失った、いわば「姑未満」の女性たちが大量に生まれつつある。彼女たちは、夫に先立たれて一人になると、「おひとり様」と呼ばれる存在になる。それは、一生結婚しなかったハイミスの女性と同様の存在である。しかし同じ「おひとり様」でもハイミスと違うのは、ハイミスが姑にも嫁にもならなかったのに対して、姑未満の女性は、嫁にさせられ、姑にはなれなかったという点である。ハイミスよりも姑未満の女性の方が損をしているのである。それはどういうことかと言えば、ハイミスは、そもそも結婚しなかったため、嫁として姑の支配を受けずに済んでいるのに対して、姑未満は、嫁として姑の支配を一方的に嫌々ながらに受け続け、そのうっぷんを次の世代の嫁に対して晴らすことが出来ず、負の体験、感情を一方的に貯めこむことになっているからである。姑になれなかった嫁としての姑未満の女性は、負け組なのである。
こうした「おひとり様」は、姑による嫁支配の順送りを断ち切るために、一時的に生じた過渡的な現象であると考えられる。すなわち、妻とその実母による支配の強化への移行をさせるための一時的な「つなぎ」現象であり、将来的には消滅すると考えられる。
良妻賢母主義を、嫁の立場から見ると、「良妻」が姑の息子である夫への奉仕、「賢母」が姑の監視を気にしながらの子育て、として嫁である妻には捉えられ、いずれも夫の実家、姑の影響下にあるので嫌だとして、嫁の立場のフェミニズム、「嫁のフェミニズム」からは批判の対象になるのである。
すなわち、嫁が、姑が支配する夫の実家に一方的に閉じ込められた、同化を強制された感覚が、嫁に取っては嫌なのである。
嫁の立場の女性は、良妻賢母主義の批判によって、見かけ上、男性、夫をひたすら攻撃しているが、実際は、男性、夫の実母である姑を叩いて、姑からの自立、自由を確保するのが、真の目的である。これは、女同士の戦いというか、姑と嫁、嫁の実家との戦い、

勢力争いである。
実際のところ、良妻賢母主義にも新旧が存在し、古い良妻賢母主義から、新たな良妻賢母主義への移行が生じているのではないかと考えられる。新たな良妻賢母主義においては、「良妻」は、妻は、家計管理権限の掌握等により夫を実質支配しつつ、見かけは対等を装って良い妻を演じることを指し、「賢母」は、姑の影響力をシャットアウトした状態で、子供を自分の思いのままに操縦するかたちで子育てすることを指す。すなわち「嫁のフェミニズム」の具現化であるということ。
一方、伝統的な旧良妻賢母主義は、姑が、嫁の立場にある女性に対して、もう一度勢力を盛り返すのに使われるであろう。すなわち、「姑のフェミニズム」の具現化であるということ。
後天的定住集団社会Ａの男性にとっては、姑＝実母による支配から、妻および妻の実母による支配へと、自分の支配者が変わったことになる。男性に取っては、引き続き女性による支配下に置かれていることに変りなく、その点、後天的定住集団社会Ａの男性解放の視点は引き続き必要である。
また、男性に取っては、姑＝実母の権力の傘を着て、妻に対して威張ることが難しくなった点、家庭内での地位の低下につながっている。ちなみに、この夫による妻への威張りは、夫婦別姓が実現することで実質的に不可能になる。後天的定住集団社会Ａの男性が夫婦別姓に消極的なケースが多いのは、妻への実母（姑）の影響力の行使が出来なくなることに伴う自分自身の（特に妻に対する）影響力や地位の低下が予期されるためであると思われる。
では、当初の目的を達成したところの「嫁のフェミニズム」は、この先消滅するのであろうか？と言えば、無くならないであろう。それは、男性を見かけ上支配者ということにして置かないと、女性が支配責任を取らされることにつながってしまうので、自らの保身のため責任追及から逃げたい女性側からは、引き続きニーズがあると言えるからである。
（初出2011年5月）

後天的定住集団社会Ａの母性を無視する後天的定住集団社会Ａフェミニズム

従来の後天的定住集団社会Ａのフェミニズムでは、なぜ後天的定住集団社会Ａに存在する強い母性を無視してきたのであろうか？
それは、彼らにとって、強い母親が、必ずしもプラスの肯定的な価値を持つ存在ではなく、かえって、疎ましい、憎たらしい、苦手である、とマイナスに感じられているからではないだろうか。

女性である自分たちも、自分たちと同性である母親や母性が充満した既存の後天的定住集団社会Ａが不愉快な代物であると、彼らが心の奥底で認識している可能性がある。
「後天的定住集団社会Ａの母」という強大で鬱陶しい存在に支配されているという、その事実から、一時的に目を背けたい、逃げたい、という気持ちが、彼らが後天的定住集団社会Ａにおける強大な母性の存在を無視する原動力になっているのではなかろうか？要するに彼らは、「母から逃げたい」のだ。
こうした想定される原因からは、次のようなことが言える。彼ら（というか彼女ら）は、支配者である母に屈する点、後天的定住集団社会Ａの男性と立場が同じである。母性型伝統型フェミニズムを推進するには、自分の母による、自分への支配を受け入れなければいけないのだが、それが心理的に受け入れがたいというのがあるのではないだろうか。あるいは、母と娘との女同士の支配従属関係が嫌らしい面があるということである。すなわち、同性同士なので、お互い手の内の見える者同士であり、そこに自ずと煩わしい駆け引きが生じる可能性があるのだ。
むしろ、既存の後天的定住集団社会Ａの男性たちの方が、母親とは異性の互いに引き付けあう関係にあることを利用して、かえって強い母性を受け入れ、母親に対して肯定的に甘えているとも言える。
後天的定住集団社会Ａの既存フェミニストら（上野千鶴子氏とか）は、強い父性の家父長制を前提とした議論にすり替えることで、後天的定住集団社会Ａを母性が支配しているという現実からの逃避を図っていると言える。本当は、後天的定住集団社会Ａは母性が強い、家父長制は当てはまらないという現実に戻らないといけない。
現実逃避は、お父さんに強くなってほしいという願望の現れでもあると言える。実母との濃厚で息の詰まりそうな支配従属の人間関係の間に割って入って、自分を楽にして欲しいという、精神的なカタルシスを求めているということ。要するに、後天的定住集団社会Ａの（特に女性の）フェミニストは、心の奥底でこっそり隠れて、父性待望論者なのではないだろうか。母性型フェミニズムの発現を無意識のうちに遠ざけてきたのではないだろうか。後天的定住集団社会Ａに伝統的な強い母性に基づく母性型フェミニズムという考え方を、無意識で知らず知らずのうちに避けているのではないかと考えられるのである。
こう考えると、今まで後天的定住集団社会Ａの男性解放にとって敵とみなされる存在であった、既存後天的定住集団社会Ａフェミニストたちが、実は、実母からの解放を指向するという点では、味方、同志になる可能性があるのである。
この可能性が有効であるとすれば、既存の女権拡張、男権拡張の党

派を超えるかたちで、そうした無意識的行動に身を投じている自分たちを見つめ直す、大局的、客観的、鳥瞰的な視点が、フェミニズムとマスキュリズム、女性学と男性学同士の価値ある、不毛でない戦いのために、あるいは両者の有効な発展のために、必要なのではないだろうか。
（初出2011年10月）

強力な父性の存在が前提の後天的定住集団社会Ａフェミニズム。

後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの「後天的定住集団社会Ａは家父長制」だとする主張は、後天的定住集団社会Ａに、明確で強力な父性が存在することが前提となる。
社会に強い父性が存在しないと、そもそも家父長制は成立しない。
それゆえ家父長制を前提とする、上野千鶴子氏等の主張する後天的定住集団社会Ａフェミニズムも成立しない。
後天的定住集団社会Ａの父性は具体的にどういったものなのか、彼ら後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは答えられるのであろうか？というのも、かつてのグスタフ・フォス「日本の父へ」の著作に見る如く、後天的定住集団社会Ａの父性は実は、母性に押されて弱体で、明確な形で存在しないと見るべきだからである。後天的定住集団社会Ａの男性、父親は、「母、姑の番犬、飼い犬」状態なのではないだろうか。
社会に強い父性が前提となる点が、既存の、父性が十分強い先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の理論を直輸入している後天的定住集団社会Ａフェミニズムのネックであり、根本的なウィークポイントであると言える。後天的定住集団社会Ａ＝家父長制の前提が崩れると、今まで積み上げてきた理論や社会運動の全体が崩壊するからである。
後天的定住集団社会Ａに、強い父性は存在しない、幻であるのではないか？それゆえ、強い父性の存在を前提とした既存後天的定住集団社会Ａフェミニズムはそもそも成立しない、できない、未来は無いのではないか？
その点、強い母性の存在を前提とした後天的定住集団社会Ａオリジナルの伝統的母性型フェミニズムへの転換を行い、世界中へ大声で宣伝することが必要であると言える。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、いい加減、輸入学問からの脱却が必要である。後天的定住集団社会Ａの真の姿を、借り物の理論に頼らず自ら納得の行くかたちで考えぬいて、示せないといけないと思われるということ。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの学

説をいっぱい勉強して知っているだけではダメで、輸入理論を後天的定住集団社会Ａに機械的に当てはめるだけの今までのやり方を根本的に変える必要がある。
（初出2011年10月）

母になる責任逃れとフェミニズム

後天的定住集団社会Ａにおいては、母になる責任から逃げたい女性たちが、フェミニズムを主張している面があると考えられる。
要するに、子育て、子供の教育に対して自分に降りかかる重圧、母親として自分の子供をちゃんと育て上げないといけないという重圧から逃げるために、母となること、母であることを否定しようとするのであるということ。女性にありがちな責任逃れの傾向がそこには見られる。
（初出2012年07月）

「永遠の娘」状態でいたい現状後天的定住集団社会Ａのフェミニストたち

現在の後天的定住集団社会Ａの女性学、フェミニズムにおいては、現状の女性の立場を故意に否定的に捉え、そこからの脱却を図ろうとする偏りがある。後天的定住集団社会Ａの女性の現状の立場を、母権社会のヒロインとして肯定的に捉えるように改める必要がある。
このように現状の女性の立場を否定的に捉えるのは、彼ら（彼女ら）が、永遠の娘状態への回帰を心の底で望んでいるからである。すなわち、結婚せずにキャリアウーマンであろうとしたり、子供を邪魔者扱いしたり、大人の女性が持つ母としての役割全般を否定するのは、大人の母になることを避けて、子供の娘に回帰しようとする心の現われである。
後天的定住集団社会Ａの男性が実現している「永遠の息子」状態への回帰の反対である。後天的定住集団社会Ａの女性は伝統的に「永遠の母」状態にあるのであり、それが心の重荷（子供を支える負担、責任を負いたくないということ。）と感じる女性たちが、母性を否定する現状の女性学、フェミニズムに入り浸っていると言える。要するに、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの女性みたいに「永遠の娘」状態でいたいこと（その方が楽だ。）と考えるのであるということ。いつまでも子供でいたいのである。先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ男性は「永遠の父」状態にあると考えられるた

め、「永遠の娘」状態でいたい一部の後天的定住集団社会Ａの女性たちは、自分たちもそうした頼れる強い父が欲しいと考え、そうした父の存在を、あたかも幻想、ファンタジーのように仮定して、虚構、砂上の楼閣の家父長制を後天的定住集団社会Ａに実現すべく奮闘しているのだと言える。
(初出2012年04月)

ドライ・フェミニズム（父性的フェミニズム）から、ウェット・フェミニズム（母性的フェミニズム）へ

先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのフェミニズムは、女性を男性より劣った存在と見做し、女性が男性並みになること、女性が男性に合わせること、女性の男性化を目指してきた。その点、父性、男性的価値観の影響下にあり、父性的フェミニズム、ドライ・フェミニズムと呼べるということ。後天的定住集団社会Ａの従来のフェミニズムは、このドライ・フェミニズムを踏襲したものである。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムは、今後より発言力を増したいと思うなら、後天的定住集団社会Ａの実態に合わせる形で、後天的定住集団社会Ａにおける女性を男性より優位の優れた存在と見做し、男性を、母性の力で女性好みに、女性的価値観に合うように調教すること、男性が女性に合わせること、男性の女性化を目指す、母性的フェミニズム、ウェット・フェミニズムの道を取るべきである。
（初出2011年3月）

後天的定住集団社会Ａにおける先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズム導入の真の理由

今まで後天的定住集団社会Ａの母性による支配という現実は、後天的定住集団社会Ａのメンバーに受け入れられて来なかった。後天的定住集団社会Ａは家父長制の国であるとされ、女権拡張のフェミニズムがひたすら導入されてきたのである。
それはなぜなのであろうか？
後天的定住集団社会Ａは、明治維新以来、社会の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化路線を突っ走ってきた。それは、旧宗主国の先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１との立場を逆転するために、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１より強く先進的な先進的移動生活中心社会群ＦＧＨの権威に積極的に染まり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の一員となることが必須だっ

たからである。
後天的定住集団社会Ａにおける姑による家庭支配、社会における母性の氾濫という現実を認めると、後天的定住集団社会Ａへの、女性は弱い、女性解放が必要であるとする先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ理論の当てはめがうまく行かなくなり、自分たち後天的定住集団社会Ａが先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の一員であると言えなくなってしまう。その結果、後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化は進まなくなり、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会から異質扱いされると共に、再び、のしてきた先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１の属国になってしまう。
それでは困ると考えた後天的定住集団社会Ａの為政者に当たる立場の人たちは、後天的定住集団社会Ａの母性による支配という現実を直視することを封印し、後天的定住集団社会Ａに先進的移動生活中心社会群ＦＧＨのフェミニズムをひたすら導入する道を選んできたと考えられる。後天的定住集団社会Ａの政府の男女共同参画社会構想とか、その極致であり、後天的定住集団社会Ａの女性学者たちは、後天的定住集団社会Ａにおける母権の強さに目を背けて、政府の御用学者として、後天的定住集団社会Ａの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ化と、それに伴う先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１といった旧宗主国による後天的定住集団社会Ａ再支配の回避の一翼を担ってきたと言える。
（初出2012年2月）

後天的定住集団社会Ａのフェミニズム、男女共同参画運動と、専業主婦への妬みということ。

後天的定住集団社会Ａのフェミニズムとか男女共同参画社会実現を巡っての運動は、表面上は、女性の社会進出促進を掲げているが、実際のところは、以下の通りである。
・経済的に余裕が無くて外で働かざるを得ない立場の女性が、働かずに家族定住集団でのうのうと暮らせる身分の専業主婦に対して妬みを持って、その座から引きずり降ろそうとする運動なのではないか？
・育児、家事がこなせない、あるいは、子育てをする母性が不足した、専業主婦になるだけの器量に劣る女性が、社会進出でその劣勢を挽回しようとする運動なのではないか？
難攻不落の専業主婦帝国への、外野からの攻撃、がその実態なのではないだろうか？

（初出2014年11月）

母性型フェミニズム、ないし伝統型フェミニズムと後天的定住集団社会Ａ

後天的定住集団社会Ａで、母性、母親の力が強いと考え、それを女権拡張に活用しようとする考え方は、「母性型フェミニズム」というように呼べる。
母性型フェミニズムは、母性が社会を支配する現状をそのまま維持、発展させることで女権拡張を図ろうとするものであり、伝統的な母権社会をそのまま活かそうとする点、「伝統型フェミニズム」というように呼ぶことも出来る。
伝統型、母性型フェミニズムは、いわば、姑のフェミニズム、お袋さんのフェミニズム、お母さんのフェミニズムなのである。
こうした母性型、伝統型フェミニズムの現状維持、発展の行き方は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会において女性の力が弱い現状を破壊しようとするラディカル・フェミニズムとは明らかに違うものである。
また、伝統的な母権社会は、個人の自由や、個人のバラバラな意見陳述よりも、全体の一体感、調和、和合、周囲に合わせることを重視する。その点、そうした伝統的な母権社会に基づく母性型、伝統型フェミニズムは、個人の自由独立を目指すリベラル・フェミニズムとも一線を画す。
母性型、伝統型フェミニズムは、従来の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ産のフェミニズムには無かった新しいパターンの女権拡張の行き方として捉えられるのである。
（初出2011年9月）

今後の世界のフェミニズムに必要なもの

空気が読めないと、他の人を批判する場合、その空気にも、男性的な空気と、女性的な空気が存在することを考えに入れるべきである。
男の空気は、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ的な雰囲気であり、殺伐、戦闘、自由、個人の自立、客観、科学、立体三次元といった、気体的でドライな雰囲気である。
女の空気は、一体・仲良し、調和、相互依存、排他、足の引っ張り合い、不自由、陰湿、非科学、平面二次元といった、液体的で

ウェットな雰囲気である。
女の本質は、不自由である。
女性性は、集団主義、束縛・規制主義をその本質とするものであり、個人主義、自由主義の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ社会の根幹を破壊する威力を秘めている。
しかるに、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニストは、「自立」「自由」「解放」といった、男性的なキーワードを、女性に対して当てはめようとしている。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニストたちは、個人主義、自由主義といったドライな男社会、男性的な価値観に縛られ、父性に囚われたまま、女性性に反した言説を行っている。
後天的定住集団社会Ａのフェミニストは、後天的定住集団社会Ａの女性が伝統的に保持している、女性性本来の、安全第一を指向する集団主義、護送船団主義、相互の心理的、情緒的一体融合化を指向する世界を実現することが、本当の女性解放、女権強化に結びつくことを、先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニストに対して主張すべき、教えてあげるべきであった。
しかし、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは、それに気づかず、男性的価値観に縛られた先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムを後天的定住集団社会Ａに直輸入する誤りを犯した。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムの後天的定住集団社会Ａへの直輸入によって、逆に後天的定住集団社会Ａに男性的価値観を注入してしまい、後天的定住集団社会Ａの女性性を弱めて、真の女権拡張に反する結果となったということ。
なぜ、後天的定住集団社会Ａのフェミニストたちは、誤りに気づかなかったか？それは、自分たちが本来拡張すべき、女社会、女性心理、母性的価値観がどのような実態を持つものであるかについての十分な考察、知見に欠けていたからである。
今後は、後天的定住集団社会Ａの中にその原型が存在する、女社会や、母性的価値観の実態をより明らかにして、それらの拡張を目指すことが、世界のフェミニズムにとって必要である（後天的定住集団社会Ａの男性解放の視点からは望ましくないが。）ということ。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムから世界のフェミニズムへの発信の流れが必要である。後天的定住集団社会Ａの大企業、中央官庁の幹部の母（専業主婦）や、後天的定住集団社会Ａ農村の姑を、最強の女性として世界的にモデルにすべきであるということ。
（初出2011年3月）

マザコン社会の世界的拡張

後天的定住集団社会Ａの伝統的な定住集団社会は、母や姑が支配する社会である。子供たちは、息子も娘も、母に対する依存心や甘えの意識を強く持っており、その点、後天的定住集団社会Ａはマザコン社会と呼べる。このマザコン社会を全世界に向けて拡張していくことを、世界のフェミニズムは目指すべきである。後天的定住集団社会Ａ～定住生活中心社会群ＡＢＣのフェミニズトはその旗振り役をすべきである。
（初出2016年11月）

Table of Contents

（２５）『閉鎖的、排他的』
（２６）『受動的』
（２７）『相互監視の重視』
（２８）『間接的対応』
（２９）『局所的（ローカル）』
（３０）『感情的』
（３１）『小スケール』
（３２）『高密度指向』
（３３）『厳格さの重視』
（３４）『減点主義』
（３５）『管理統制主義』
（３６）『従順さの重視』
（３７）『総花的』
（３８）『突出の回避』
（３９）『中心指向』
（４０）『マイナス思考』
（４１）『努力、苦労、労働の神聖視』
（４２）『真実、内実の隠蔽』
（４３）『多数派指向』

後天的定住集団社会Ａ「定住集団の掟」
後天的定住集団社会Ａの定住民度判定テスト
後天的定住集団社会Ａの権力構造
後天的定住集団的思考に囚われた後天的定住集団社会Ａのメンバー
後天的定住集団社会Ａにおける自己責任と無責任の両立
後天的定住集団社会Ａの官学の根本的な誤り。
後天的定住集団社会Ａが、究極の嘘つき社会になっている、根本的な原因。
後天的定住集団の社会における、天皇制の、普遍的な出現。

後天的定住集団社会Ａの家族定住集団（家族）。姑による支配。

説明。後天的定住集団社会Ａの家族定住集団。

後天的定住集団社会Ａの定住集団（あるいは後天的定住集団社会Ａ）と女性優位体質

はじめに
後天的定住集団社会Ａ「定住集団社会」の概要
「後天的定住集団社会Ａ＝女社会」論
後天的定住集団社会Ａと女社会との関連の実態
後天的定住集団社会Ａの理想型としての母子関係
後天的定住集団社会Ａにおける「新たな定住集団への転属の自由」「非定住民の新たな定住集団への加入の自由」「定住集団内部先輩後輩制の廃止」の必要性
「定住集団からの追放」の解消が必要。
負の体験の次世代連鎖の断ち切りが必要。
後天的定住集団社会Ａの論理の実態
上媚下虐の後天的定住集団社会Ａ
没落したアイドルとしての後天的定住集団社会Ａ
空気を読んで動くことは後天的定住集団社会Ａ独自か？
後天的定住集団社会Ａの生きにくさ、生きづらさの根本原因
休まない、休めない後天的定住集団社会Ａのメンバー
後天的定住集団社会Ａの今後の課題

後天的定住集団社会Ａの市街住宅地とその古い体質

説明。後天的定住集団社会Ａの市街住宅地。

後天的定住集団社会Ａの企業定住集団と終身奴隷労働

本文

後天的定住集団社会Ａの学校と、伝統的師弟関係

本文

後天的定住集団社会Ａの権力構造と言論統制

定住集団社会を国ぐるみで隠蔽しようとしている後天的定住集団社会Ａ　-「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』」と言論統制 -
強者に惹かれる後天的定住集団社会Ａの女性優位性質と「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』」
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨから「定住集団からの追放」にされるのを恐れる後天的定住集団社会Ａと

「先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ『出羽守』」
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想の国策からの脱却と近隣女性優位地域と遠隔男性優位地域の両方と親しくしようとする思想の国策への転換が必要。
後天的定住集団社会Ａでの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ流フェミニズムの隆盛と女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想
女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想一辺倒からの脱却が必要だ。
後天的定住集団社会Ａのメンバーが定住集団社会論、女社会論を無視する理由。
後天的定住集団社会Ａの社会学はインチキだ！－女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想という病－
後天的定住集団社会Ａにおける表面的規範と実際的規範と女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムはインチキだ！
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムが無視する後天的定住集団社会Ａの女性の強さ。
社会と家庭と後天的定住集団社会Ａのフェミニズム
後天的定住集団社会Ａの腐敗と女性
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムと、モンスター化した後天的定住集団社会Ａの女性たち
世界のフェミニズムはインチキだ！
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムとお勉強会
御用学問としての後天的定住集団社会Ａのフェミニズム
後天的定住集団社会Ａの女性優位遅滞地域を脱して、男性優位先進地域へ加入しようとする思想と、後天的定住集団社会Ａの男性、後天的定住集団社会Ａの女性
今の後天的定住集団社会Ａでは真の言論の自由は存在しない。
後天的定住集団社会Ａの男性を助けて下さい！
後天的定住集団社会Ａと家父長制ごっこ
スーパー般若としての後天的定住集団社会Ａの女性
後天的定住集団社会Ａにおける後天的定住集団社会Ａの国家憲法の受容と民主主義ごっこ
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズムの後天

的定住集団社会Ａ導入がもたらした結果について。
後天的定住集団社会Ａの右派。後天的定住集団社会Ａの右翼。女性優位社会の視点からの分析。
後天的定住集団社会Ａの左派。後天的定住集団社会Ａの左翼。それらが抱える問題。女性優位社会の視点からの分析。
後天的定住集団社会Ａの政府（上位者）は女性優位である。
社会的性差と後天的定住集団社会Ａ、世界社会
後天的定住集団社会Ａと役人支配
女性優位社会同士の支配従属
女性優位社会、男性優位社会と教科書信仰
後天的定住集団社会Ａにおける言論の自由
後天的定住集団社会Ａ至上論について
後天的定住集団社会Ａにおける社会的地位の性差比較の限界
後天的定住集団社会Ａの家庭生活と男女の勢力関係
男性優位社会での言論統制と男性優位フェミニズムが後天的定住集団社会Ａにもたらす言論統制。
女性優位社会後天的定住集団社会Ａと科学
後天的定住集団社会Ａの少子化問題解消と、後天的定住集団社会Ａの役所や企業の学閥依存体質との関連

母権社会としての後天的定住集団社会Ａ－支配者としての母、姑－

１．

後天的定住集団社会Ａは母権社会である　－行動様式のドライ・ウェットさの視点から－
従来母権制論の問題点
母権と母系、父権と父系の区別の必要性
後天的定住集団社会Ａにおける母権の無視、隠蔽
後天的定住集団社会Ａのメンバーは、母権社会論を読もうとしない。
後天的定住集団社会Ａの男性女の性的役割は「母と息子」
後天的定住集団社会Ａで最強の存在
母なるシステム、後天的定住集団社会Ａ
母の王国、楽園としての後天的定住集団社会Ａ

後天的定住集団社会Ａ近代化と母なるシステム
ウェットな母性的後天的定住集団社会Ａにおける新規一括採用の根本的重要性

２．

母性からの解放を求めて　-「母性依存症」からの脱却に向けた処方箋 -
「お母さん依存症」の後天的定住集団社会Ａのメンバー
「母性社会論」批判の隠された戦略について　-後天的定住集団社会Ａの最終支配者としての「母性」 -
「母」「姑」視点の必要性　- 後天的定住集団社会Ａの女性学の今後取るべき途についての検討 -
後天的定住集団社会Ａにおける母性支配のしくみ　-「母子連合体」の「斜め重層構造」についての検討 -
「母性的経営」　- 後天的定住集団社会Ａの企業定住集団・官庁組織の母性による把握 -
職場中心視点から家庭中心視点への転換が必要。
空母、充電器、チャージャーとしての後天的定住集団社会Ａ家庭
後天的定住集団社会Ａにおける母性と女性との対立
姑と「女性解放」
後天的定住集団社会Ａの家族における2つの結合
後天的定住集団社会Ａの女性とマザコン
稲作農耕文化とマザコン
2つのマザコン
男性解放とマザコン認定
後天的定住集団社会Ａの男性の母性化
後天的定住集団社会Ａにおける母子二人三脚
子の業績は、母の業績。
子育ての、社会支配に占める重要性
後天的定住集団社会Ａ＝「男社会」の本当の立役者は「母」だ。
「母権社会」という呼び名に変えようということ。
母権社会が言われてこなかった理由。

性別分業と男性社会、女性社会
後天的定住集団社会Ａにおける男性差別の根源
後天的定住集団社会Ａと女社会
後天的定住集団社会Ａのデフォルト・ジェンダー、スタンダード・ジェンダー
後天的定住集団社会Ａの女性の権力、支配力の源泉と、「女の空気」
ブラックホール＝女社会の解明が必要。
後天的定住集団社会Ａの解明と、女社会スパイの必要性
後天的定住集団社会Ａと女社会の特徴例
女社会、男社会と女流、男流
後天的定住集団社会Ａの男社会は実質女社会。
女脳の後天的定住集団社会Ａのメンバー
後天的定住集団社会Ａのメンバーの先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ指向は女性的。
方向感と性差、社会差
高関心社会と低関心社会
比較好き、相対評価好き
信号文化（暗示的主張文化）、受け取り文化、他力本願文化
後天的定住集団社会Ａのメンバーの依存体質、単独行動不可能性と迷惑意識の強さ、「一億総出家族定住集団」状況について
後天的定住集団社会Ａのメンバーの責任回避、転嫁と女性
アジア的停滞の原因、アジア的生産様式の担い手、東洋的専制主義の原因は、女性、母性にあり。
後天的定住集団社会Ａのメンバーの守られ願望
ミクロ文化とマクロ文化
原子型社会と分子型社会、原子行動と分子行動、性差との関連
後天的定住集団社会Ａの社会集団に働く表面張力と、女性、卵子との類似
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨにおける女性の「過剰保護」とフェミニズムについて（「甘え」概念との関連）
先輩後輩制、親分子分制を打倒せよ！
後天的定住集団社会Ａと女性のパラレルな関係

雌国、牝国後天的定住集団社会Ａ
後天的定住集団社会Ａのメンバーの「武装女子」指向
女（母）が強い国＝強国という図式。
後天的定住集団社会Ａアニメ女性声優の声の高さについて・・・女性性の原型保持と後天的定住集団社会Ａ
後天的定住集団社会Ａのメンバーと国内、海外表と奥
後天的定住集団社会Ａの歴史における女性の地位低下の通説について
一枚岩ではない先進的移動生活中心社会群ＦＧＨ。
男女闘争史観

２．

「家庭内管理職」論
後天的定住集団社会Ａの女性と家計管理権限
後天的定住集団社会Ａの女性と国際標準
後天的定住集団社会Ａにおける母性の充満
女性と社会主義、共産主義
後天的定住集団社会Ａ主婦論争に欠けている視点
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの隠れた策略
専業主婦を求めて
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムを批判するということ。
後天的定住集団社会Ａのフェミニズムの主張には無理がある。
後天的定住集団社会Ａにおける女性の「社会進出」について
後天的定住集団社会Ａの女性の経済的自立について
後天的定住集団社会Ａの女性の「社会」的地位
「女らしさ」はいけないか？ －後天的定住集団社会Ａにおける女らしさの否定についての考察－
「専業主婦」＝「役人」論
少子高齢化対策と後天的定住集団社会Ａの女性、専業主婦

家計管理の月番化について
男女の望ましいパワーバランスは50対50。
女性が暴走するとストップが効かない後天的定住集団社会Ａ。
「女性的＝後天的定住集団社会Ａに特有」の相関主張に対する反応
夫婦別姓と女性
姓替わりと夫婦別姓
女社会、男社会と女流、男流
根本的に先進性が欠如する後天的定住集団社会Ａ、女社会。
後天的定住集団社会Ａの主婦利権を追及しようということ。
女社会の実態が分かりにくい理由。
「弱い」女性の立ち位置
女性と甘え
後天的定住集団社会Ａの女性の専業主婦指向はリーズナブル。
お局と姉御？
女性的生き方の押しつけ
世間、空気と女性
後天的定住集団社会Ａを支配する4つの女性類型
後天的定住集団社会Ａの女性が専業主婦になりたがる本当の理由。
後天的定住集団社会Ａの女性と仕事と家庭の両立
後天的定住集団社会Ａの男性による女性蔑視の根源
孤立無援になりがちな後天的定住集団社会Ａの女性
後天的定住集団社会Ａの主婦利権を追及しようということ。
主婦、姑の院政
院政と女性による社会支配の類似点
後天的定住集団社会Ａにおける女性上位
後天的定住集団社会Ａが女性的な社会のままで、先天的定住集団社会Ｂ□先天的定住集団社会Ｃ１上位の定住生活中心社会群ＡＢＣ秩序に呑まれない方法。
国策としての後天的定住集団社会Ａフェミニズム、ジェンダー論

保守的な後天的定住集団社会Ａの男性の「背後霊」
母の掌の上の後天的定住集団社会Ａの男性
母への反抗を恐れる後天的定住集団社会Ａの男性
女性による支配に対して声を上げない後天的定住集団社会Ａの男性
後天的定住集団社会Ａの勝ち組男子は、実は負け組。
伝統的稲作農耕が後天的定住集団社会Ａの男性弱体化の原因。
真の男女共同参画社会実現を
子育ての男女平等の実現
後天的定住集団社会Ａ、先天的定住集団社会Ｂ、先天的定住集団社会Ｃ１における男の子優遇の本当の理由
男性が女性に対して抱く矛盾した感情。
先進的移動生活中心社会群ＦＧＨマスキュリズムと後天的定住集団社会Ａ
真に支配力のある男性と、周囲の女性から立てられている男性とを区別するには？
夫婦、男女の権力の強さを測定する尺度

２．

後天的定住集団社会Ａの家族は「家父長制」と言えるか？
見かけだけの家父長制社会後天的定住集団社会Ａ
後天的定住集団社会Ａにおける家父長像の誤解について
不在家長
後天的定住集団社会Ａの家庭を父権化する計画について
父性が母性に呑まれている。
父性無き「男社会」（だったということ。）
雷親父と母
後天的定住集団社会Ａへの父性的宗教の導入と後天的定住集団社会Ａの男性解放
後天的定住集団社会Ａの自然風土と強い父性の導入の是非
擬似家父長制から真の家父長制へ

後天的定住集団社会Ａの「名ばかり」家父長、あるいは、教育責任を取らされる学校
湿った父と湿った雪
妻、家族に冷遇される夫、父
企業定住集団人間、「男社会」の生成と、（家庭内での）父の居場所の無さ
後天的定住集団社会Ａにおける父性、父権確立の方法
家計管理権限を妻から奪取する方法
父性の母性的吸収に陥らないことが必要。
ジェンダーフリー思想と父性強化
後天的定住集団社会Ａの父性化革命の方法
後天的定住集団社会Ａの男性を子育てさせるには。

３．

本書の要約、まとめ

母性的フェミニズム－世界女性の模範としての後天的定住集団社会Ａの女性－

要旨
前置き

本書の議論の背景

本編

後天的定住集団社会Ａは、実は、フェミニズムの先進国だった！
女性解放、女権拡張の最先端を行く後天的定住集団社会Ａ
女権拡張の先進国、後天的定住集団社会Ａ～定住生活中心社会群Ｄ
世界の女性たちの模範となる後天的定住集団社会Ａの女性
女権拡張セミナーを開いたらということ。
女性人権侵害、抑圧の先進的移動生活中心社会群ＦＧＨと18禁ゲーム規制
母子分離、母子一体・癒着とフェミニズム

男性模倣型フェミニズムと女性独自型フェミニズム
姑のフェミニズムと、嫁のフェミニズム
後天的定住集団社会Ａの母性を無視する後天的定住集団社会Ａフェミニズム
強力な父性の存在が前提の後天的定住集団社会Ａフェミニズム。
母になる責任逃れとフェミニズム
「永遠の娘」状態でいたい現状後天的定住集団社会Ａのフェミニストたち
ドライ・フェミニズム（父性的フェミニズム）から、ウェット・フェミニズム（母性的フェミニズム）へ
後天的定住集団社会Ａにおける先進的移動生活中心社会群ＦＧＨフェミニズム導入の真の理由
後天的定住集団社会Ａのフェミニズム、男女共同参画運動と、専業主婦への妬みということ。
母性型フェミニズム、ないし伝統型フェミニズムと後天的定住集団社会Ａ
今後の世界のフェミニズムに必要なもの
マザコン社会の世界的拡張

私の書籍についての関連情報。

参考文献。
私が執筆した全ての書籍。その一覧。
私の書籍の内容。それらの自動翻訳のプロセスについて。
私の略歴。

私の書籍についての関連情報。

参考文献。

== 男女の性差。
/ 総説。

Bakan, D. The duality of human existence . Chicago: Rand-McNally. 1966.
Crandall, V. J., & Robson, S. (1960). Children's repetition choices in an intellectual achievement situation following success and failure. Journal of Genetic Psychology, 1960, 97, 161-168.(間宮1979 p178参照)
Deaux,K.: The Behavior of Women and Men, Monterey, California: Brooks/Cole, 1976
Goldstein, MJ (1959). The relationship between coping and avoiding behavior and response to fear-arousing propaganda. Journal of Abnormal and Social Psychology, 1959, 58, 247-252.(対処的・回避的行動と恐怖を誘発する宣伝に対する反応との関係)
影山裕子 : 女性の能力開発, 日本経営出版会, 1968
間宮武 : 性差心理学, 金子書房, 1979
皆本二三江 : 絵が語る男女の性差, 東京書籍, 1986
村中 兼松 (著), 性度心理学—男らしさ・女らしさの心理 (1974年) , 帝国地方行政学会, 1974/1/1
Mitchell,G. : Human Sex Differences - A Primatologist's Perspective, Van Nostrand Reinhold Company, 1981 (鎮目恭夫訳 : 男と女の性差 サルと人間の比較, 紀伊国屋書店, 1983)
Newcomb,T.M.,Turner,R.H.,Converse,P.E. : Social Psycholgy:The Study of Human Interaction, New York: Holt,Rinehart and Winston, 1965 (古畑和孝訳 : 社会心理学 人間の相互作用の研究,岩波書店,1973)
Sarason, I.G., Harmatz, M.G., Sex differences and experimental conditions in serial learning. Journal of Personality and Social

Psychology., 1965, 1: 521-4.
Schwarz, O, 1949 The psychology of sex / by Oswald Schwarz Penguin, Harmondsworth, Middlesex.
Trudgill,P.:Sociolinguistics: An Introduction, Penguin Books, 1974(土田滋訳：言語と社会, 岩波書店, 1975)
Wallach M. A., & Caron A. J. (1959). "Attribute criteriality and sex-linked conservatism as determinants of psychological similarity. Journal of Abnormal and Social Psychology, 59, 43-50(心理的類似性の決定因としての帰属的規準性と性別関連の保守性)
Wright,F.: The effects of style and sex of consultants and sex of members in self-study groups, Small Group Behavior, 1976, 7, p433-456

東清和、小倉千加子(編) , ジェンダーの心理学, 早稲田大学出版部, 2000
宗方比佐子、佐野幸子、金井篤子(編), 女性が学ぶ社会心理学, 福村出版, 1996
諸井克英、中村雅彦、和田実, 親しさが伝わるコミュニケーション, 金子書房, 1999
D.Kimura, Sex And Cognition, MIT Press,Cambridge,Massachusetts, 1999. (野島久雄、三宅真季子、鈴木眞理子訳 (2001) 女の能力、男の能力 - 性差について科学者が答える - 新曜社)

E.Margolies,L.VGenevie, The Samson And Delilah Complex,Dodd,Mead &Company, Inc.,1986(近藤裕訳 サムソン = デリラ・コンプレックス - 夫婦関係の心理学 - ,社会思想社,1987)

/ 各論。

// 男性単独。
E.モンテール (著), 岳野 慶作 (翻訳), 男性の心理—若い女性のために (心理学叢書) , 中央出版社, 1961/1/1
// 女性単独。
扇田 夏実 (著), 負け犬エンジニアのつぶやき～女性SE奮戦記, 技術評論社, 2004/7/6

// 男女間比較。

/// 1.能力における性差

//// 1.1 空間能力における性差

Collins,D.W. & Kimura,D.(1997) A large sex difference on a two-dimensional mental rotation task. Behavioral Neuroscience,111,845-849
Eals,M. & Silverman,I.(1994)The hunter-gatherer theory of spatial sex differences: proximate factors mediating the female advantage in recall of object arrays. Ethology & Sociobiology,15,95-105.
Galea,L.A.M. & Kimura,D.(1993) Sex differences in route learning. Personality & Individual Differences,14,53-65
Linn,M.C.,Petersen,A.C.(1985) Emergence and Characterization of Sex Differences in Spatial Ability : A Meta-Analysis. Child Development, 56, No.4, 1479-1498.
McBurney,D.H., Gaulin, S.J.C., Devineni,T. & Adams,C.(1997) Superior spatial memory of women: stronger evidence for the gathering hypothesis. Evolution & Human Behavior,18,165-174
Vandenberg,S.G. & Kuse,A.R.(1978) Mental rotations, a group test of three-dimensional spatial visualization. Perceptual & Motor Skills, 47,599-601
Watson,N.V. & Kimura,D.(1991)Nontrivial sex differences in throwing and intercepting: relation to psychometrically-defined spatial functions. Personality & Individual Differences,12,375-385

//// 1.2 数学的能力における性差

Bembow,C.P., Stanley,J.C.(1982) Consequences in high school and college of sex differences in mathematical reasoning ability : A Longtitudinal perspective. Am. Educ. Res. J. 19,598-622.
Engelhard,G.(1990) Gender differences in performance on mathematics items: evidence from USA and Thailand. Contemporary Educational Psychology,15,13-16
Hyde,J.S.,Fennema,E. & Lamon,S.J.(1990) Gender differences in mathematics performance: a meta-analysis. Psychological Bulletin,107,139-155.
Hyde,J.S.(1996) Half the human experience : The Psychology of woman. 5th ed., Lexington, Mass.: D.C.Heath.
Jensen,A.R.(1988)Sex differences in arithmetic computation and reasoning in prepubertal boys and girls. Behavioral & Brain Sciences,11,198-199
Low,R. & Over,R.(1993)Gender differences in solution of algebraic

word problems containing irrelevant information. Journal of Educational Psychology,85,331-339.
Stanley,J.C., Keating,D.P., Fox,L.H. (eds.)(1974) Mathematical talent: Discovery, description, and development. Johns Hopkins University Press, Baltimore.

//// 1.3 言語能力における性差

Bleecker,M.L.,Bolla-Wilson,K. & Meyers,D.A.,(1988)Age related sex differences in verbal memory. Journal of Clinical Psychology,44,403-411.
Bromley(1958) Some effects of age on short term learning and remembering. Journal of Gerontology,13,398-406.
Duggan,L.(1950)An experiment on immediate recall in secondary school children. British Journal of Psychology,40,149-154.
Harshman,R., Hampson,E. & Berenbaum,S.(1983) Individual differences in cognitive abilities and brain organization,Part I: sex and handedness differences in ability. Canadian Journal of Psychology,37,144-192.
Hyde,J.S. & Linn,M.C.(1988) Gender differences in verbal ablility:A Meta-analysis. Psychological Bulletin, 104, No.1,53-69.
Kimura,D.(1994)Body asymmetry and intellectual pattern. Personality & Individual Differences,17,53-60.
Kramer,J.H.,Delis,D.C. & Daniel,M.(1988) Sex differences in verbal learning. Journal of Clinical Psychology,44,907-915.
McGuinness,D.,Olson,A. & Chapman,J.(1990)Sex differences in incidental recall for words and pictures. Learning & Individual Differences,2,263-285.

//// 1.4 運動能力における性差

Denckla,M.B.(1974)Development of motor co-ordination in normal children. Developmental Medicine & Child Neurology,16,729-741.
Ingram,D.(1975)Motor asymmetries in young children. Neuropsychologia,13,95-102
Nicholson,K.G. & Kimura.D.(1996) Sex differences for speech and manual skill.Perceptual & Motor Skills,82,3-13.
Kimura,D. & Vanderwolf,C.H. (1970) The relation between hand preference and the performance of individual finger movements by left and right hands. Brain,93,769-774

Lomas,J. & Kimura, D.(1976) Intrahemispheric interaction between speaking and sequential manual activity. Neuropsychologia,14,23-33.
Watson,N.V. & Kimura,D.(1991)Nontrivial sex differences in throwing and intercepting: relation to psychometrically-defined spatial functions. Personality & Individual Differences,12,375-385

//// 1.5 知覚能力における性差

Burg,A.(1966)Visual acuity as measured by dynamic and static tests. Journal of Applied Psychology,50,460-466.
Burg,A.(1968)Lateral visual field as related to age and sex. Journal of Applied Psychology,52,10-15.
Denckla,M.B. & Rudel,R.(1974) Rapid "automatized"naming of pictured objects,colors,letters and numbers by normal children. Cortex,10,186-202.
Dewar,R.(1967)Sex differences in the magnitude and practice decrement of th Muller-Lyer illusion. Psychonomic Science,9,345-346.
DuBois,P.H.(1939)The sex difference on the color naming test. American Journal of Psychology,52,380-382.
Ghent-Braine,L.(1961)Developmental changes in tactual thresholds on dominant and nondominant sides. Journal of Comparative & Physiological Psychology,54,670-673.
Ginsburg,N.,Jurenovskis,M. & Jamieson,J.(1982) Sex differences in critical flicker frequency. Perceptual & Motor Skills,54,1079-1082.
Hall,J.(1984)Nonverbal sex differences. Baltimore:Johns Hopkins.
McGuinness, D.(1972)Hearing: individual differences in perceiving. Perception,1,465-473.
Ligon,E.M.(1932)A genetic study of color naming and word reading. American Journal of Psychology,44,103-122.
Velle,W.(1987)Sex differences in sensory functions. Perspectives in Biology & Medicine,30,490-522.
Weinstein,S. & Sersen, E.A.(1961)Tactual sensitivity as a function of handedness and laterality. Journal of Comparative & Physiological Psychology,54,665-669.
Witkin,H.A.(1967)A cognitive style approach to cross-cultural research. International Journal of Psychology,2,233-250.

/// 2.パーソナリティの性差

Maccoby, E.E. & Jacklin, C.N.(1974) The Psychology of sex differences. Stanford,CA:Stanford University Press.

/// 3.社会的行動の性差

Brehm,J.W.(1966)A theory of psychological reactance. Academic Press.
Cacioppo,J.T. & Petty,R.E.(1980) Sex differences in influenceability:Toward specifying the underlying processes. Personality and Social Psychology Bulletin,6,651-656
Caldwell,M.A., & Peplau,L.A.(1982) Sex Differences in same-sex friendships. Sex Roles,8,721-732.
Chesler,M.A. & Barbarin,O.A.(1985) Difficulties iof providing help in crisis: Relationships between parents of children with cancer and their friends. Journal of Social Issues,40,113-134.
大坊郁夫(1988)異性間の関係崩壊についての認知的研究,日本社会心理学会第29回発表論文集,64.
Eagly,A.H.(1978) Sex differences in influenceability.Psychological Bulletin,85,86-116.
Eagly,A.H. & Carli,L.L.(1981) Sex of researchers and sex-typed communications as determinants of sex differences in influenceability:A meta-analysis of social influence studies. Psychological Bulletin,90,1-20.
Eagly,A.H. & Johnson,B.T.(1990) Gender and leadership style: A meta-analysis. Psychological Bulletin,108,233-256.
Hall,J.A.(1984) Nonverbal sex differences:Communication accuracy and expressive style. Baltimore:John Hopkins University Press.
Hays,R.B.(1984) The development and maintenance of friendship. Journal of Personal and Social Relationships,1,75-98.
Horner,M.S.(1968)Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situation. Unpublished Ph.D. thesis. University of Michigan.
Jourard,S.M.(1971) Self-disclosure:An experimental analysis of the transparent self. New York:Wiley & Sons, Inc.
Jourard,S.M & Lasakow,P.(1958) Some factors in self-disclosure. Journal of Abnormal and Social Psychology, 56, 91-98.
Latane',B. & Bidwell,L.D.(1977) Sex and affiliation in college cafeteria.Personality and Social Psychology Bulletin,3,571-574
松井豊(1990)青年の恋愛行動の構造,心理学評論,33,355-370.

Nemeth,C.J. Endicott,J. & Wachtler,J.(1976) From the '50s to the '70s:Women in jury deliberations,Sociometry,39,293-304.
Rands,M. & Levinger, G. (1979)Implicit theory of relationship: An intergenerational study. Journal of Personality and Social Psychology,37,645-661.
坂田桐子、黒川正流(1993) 地方自治体における職場のリーダーシップ機能の性差の研究-「上司の性別と部下の性別の組合せ」からの分析,産業・組織心理学研究,7,15-23.
総務庁青少年対策本部(1991) 現代の青少年 - 第 5 回青少年の連帯感などに関する調査報告書,大蔵省印刷局.
上野徳美(1994) 説得的コミュニケーションに対する被影響性の性差に関する研究,実験社会心理学研究,34,195-201
Winstead,B.A.(1986) Sex differences in same-sex friendships. In V.J.Derlega & B.A.Winstead(Eds.) Friendship and social interaction. New York:Springer-Verlag.Pp.81-99
Winstead,B.A., Derlega,V.J., Rose,S. (1997) Gender and Close Relationships. Thousand Oaks, California:Sage Publications.
山本真理子、松井豊、山成由紀子(1982) 認知された自己の諸側面の構造,教育心理学研究,30,64-68

＝＝ 世界の社会の分類。男女間における、優位性の比較。
/ 一般。
富永 健一 (著), 社会学原理, 岩波書店, 1986/12/18
岩井 弘融 (著), 社会学原論, 弘文堂, 1988/3/1

笠信太郎, ものの見方について, 1950, 河出書房
伊東俊太郎 (著) , 比較文明 UP選書 , 東京大学出版会, 1985/9/1

/ 気候。
和辻 哲郎 (著), 風土: 人間学的考察, 岩波書店, 1935
鈴木秀夫, 森林の思考・砂漠の思考, 1978, 日本放送出版協会
石田英一郎, 桃太郎の母 比較民族学的論集 , 法政大学出版局 , 1956
石田英一郎, 東西抄 - 日本・西洋・人間, 1967, 筑摩書房
松本 滋 (著), 父性的宗教 母性的宗教 (UP選書) , 東京大学出版会, 1987/1/1
ハンチントン (著), 間崎 万里 (翻訳), 気候と文明 (1938年) (岩波文庫) , 岩波書店, 1938
安田 喜憲 (著), 大地母神の時代―ヨーロッパからの発想 (角川選書)

, 角川書店, 1991/3/1
安田 喜憲 (著), 気候が文明を変える (岩波科学ライブラリー (7)) , 岩波書店, 1993/12/20

鈴木 秀夫 (著), 超越者と風土 , 原書房, 2004/1/1
鈴木 秀夫 (著), 森林の思考・砂漠の思考 (NHKブックス 312) , NHK出版1978/3/1
鈴木 秀夫 (著), 風土の構造, 原書房, 2004/12/1
梅棹 忠夫 (著), 文明の生態史観, 中央公論社, 1967

ラルフ・リントン (著), 清水 幾太郎 (翻訳), 犬養 康彦 (翻訳), 文化人類学入門 (現代社会科学叢書), 東京創元社, 1952/6/1
祖父江孝男『文化とパーソナリティ』弘文堂，1976
F.L.K.シュー (著), 作田 啓一 (翻訳), 浜口 恵俊 (翻訳), 比較文明社会論―クラン・カスト・クラブ・家元 (1971年), 培風館，1970．

J□J□バハオーフェン (著), 吉原 達也 (翻訳), 母権論序説 付・自叙伝, 創樹社, 1989/10/20

阿部 一, 家族システムの風土性, 東洋学園大学紀要 (19), 91-108, 2011-03

/ 移動性。

大築立志, 手の日本人、足の西欧人, 1989, 徳間書店
前村 奈央佳, 移動と定住に関する心理的特性の検討：異文化志向と定住志向の測定および関連性について, 関西学院大学先端社会研究所紀要, 6号 pp.109-124, 2011-10-31
浅川滋男, 東アジア漂海民と家船居住, 鳥取環境大学, 紀要, 創刊号, 2003.2 pp41-60

/ 食糧の確保の手段。

千葉徳爾, 農耕社会と牧畜社会, 山田英世 (編), 風土論序説 (比較思想・文化叢書) , 国書刊行会, 1978/3/1
大野 盛雄 (著), アフガニスタンの農村から―比較文化の視点と方法 (1971年) (岩波新書) , 岩波書店, 1971/9/20
梅棹 忠夫 (著), 狩猟と遊牧の世界―自然社会の進化, 講談社, 1976/6/1

志村博康 (著), 農業水利と国土, 東京大学出版会, 1987/11/1

/ 心理。
Triandis H.C., Individualism & Collectivism, Westview Press, 1995, （H.C. トリアンディス (著), Harry C. Triandis (原著), 神山 貴弥 (翻訳), 藤原 武弘 (翻訳), 個人主義と集団主義―2つのレンズを通して読み解く文化, 北大路書房, 2002/3/1 ）
Yamaguchi, S., Kuhlman, D. M., & Sugimori, S. (1995). Personality correlates of allocentric tendencies in individualist and collectivist cultures. Journal of Cross-Cultural Psychology, 26, 658-672
Markus H.R.,Kitayama,S., Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. Psychological Review, 98, pp224-253 1991

千々岩 英彰 (編集), 図解世界の色彩感情事典―世界初の色彩認知の調査と分析, 河出書房新社, 1999/1/1

＝＝ 男性優位社会。移動生活。遊牧と牧畜。気体。

/ 欧米諸国。全般。
星 翔一郎 (著), 国際文化教育センター (編集), 外資系企業 就職サクセスブック, ジャパンタイムズ, 1986/9/1

/ 西欧。
// 単独社会。
// 社会間比較。
西尾幹二, ヨーロッパの個人主義, 1969, 講談社
会田 雄次 (著), 『アーロン収容所：西欧ヒューマニズムの限界』中公新書, 中央公論社 1962年
池田 潔 (著), 自由と規律: イギリスの学校生活 (岩波新書) , 岩波書店, 1949/11/5

鯖田 豊之 (著), 肉食の思想―ヨーロッパ精神の再発見 (中公新書 92) , 中央公論社, 1966/1/1
八幡 和郎 (著), フランス式エリート育成法―ENA留学記 (中公新書 (725)) , 中央公論社, 1984/4/1
木村 治美 (著), 新交際考―日本とイギリス, 文藝春秋, 1979/11/1
森嶋 通夫 (著), イギリスと日本―その教育と経済 (岩波新書 黄版 29) , 岩波書店, 2003/1/21
/ アメリカ。

// 単独社会。
松浦秀明, 米国さらりーまん事情, 1981, 東洋経済新報社
Stewart, E.C., American Cultural Patterns A Cross-Cultural Perspectives, 1972, Inter-cultural Press (久米昭元訳, アメリカ人の思考法, 1982, 創元社)
吉原 真里 (著), Mari Yoshihara (著), アメリカの大学院で成功する方法—留学準備から就職まで (中公新書), 中央公論新社, 2004/1/1
リチャード・H. ロービア (著), Richard H. Rovere (原著), 宮地 健次郎 (翻訳), マッカーシズム (岩波文庫) , 岩波書店, 1984/1/17
G.キングスレイ ウォード (著), 城山 三郎 (翻訳), ビジネスマンの父より息子への30通の手紙, 新潮社, 1987/1/1
長沼英世, ニューヨークの憂鬱ー豊かさと快適さの裏側, 中央公論社, 1985
八木 宏典 (著), カリフォルニアの米産業, 東京大学出版会, 1992/7/1
// 社会間比較。
/ ユダヤ。
// 単独社会。
旧約聖書。
新約聖書。
中川 洋一郎, キリスト教・三位一体論の遊牧民的起源—イヌの《仲介者》化によるセム系一神教からの決別—, 経済学論纂 (中央大学) 第60巻第 5 ・ 6 合併号 (2020年 3 月) ,pp.431-461
トマス・ア・ケンピス (著), 大沢 章 (翻訳), 呉 茂一 (翻訳), キリストにならいて (岩波文庫) , 岩波書店, 1960/5/25
// 社会間比較。
/ 中東。
// 単独社会。
クルアーン。コーラン。
鷹木 恵子 U.A.E.地元アラブ人の日常生活にみる文化変化 : ドバイでの文化人類学的調査から http://id.nii.ac.jp/1509/00000892/ Syouwa63nenn
// 社会間比較。
後藤 明 (著), メッカ—イスラームの都市社会 (中公新書 1012) , 中央公論新社, 1991/3/1
片倉もとこ『「移動文化考」 イスラームの世界をたずねて 』日本経済新聞社、1995年
片倉もとこ『イスラームの日常世界』岩波新書 , 1991 .
牧野 信也 (著), アラブ的思考様式, 講談社, 1979/6/1
井筒 俊彦 (著), イスラーム文化－その根柢にあるもの , 岩波書店,

1981/12/1
/ モンゴル。
// 単独社会。
鯉渕 信一 (著), 騎馬民族の心―モンゴルの草原から (NHKブックス) , 日本放送出版協会, 1992/3/1
// 社会間比較。

＝＝ 女性優位社会。定住生活。農耕。液体。
/ 東アジア。
山口 勧 (編集), 社会心理学―アジア的視点から (放送大学教材) , 放送大学教育振興会, 1998/3/1
山口 勧 (編集), 社会心理学―アジアからのアプローチ, 東京大学出版会, 2003/5/31
石井 知章 (著), K□A□ウィットフォーゲルの東洋的社会論, 社会評論社, 2008/4/1
/ 日本。
// 単独社会。

/// 文献調査。
南博, 日本人論 - 明治から今日まで , 岩波書店, 1994
青木保,「日本文化論」の変容-戦後日本の文化とアイデンティティー-, 中央公論社, 1990

/// 社会全般。
//// 著者が、日本人の場合。
浜口恵俊 「日本らしさ」の再発見 日本経済新聞社 1977
阿部 謹也 (著),「世間」とは何か (講談社現代新書) , 講談社, 1995/7/20
川島武宣, 日本社会の家族的構成, 1948, 学生書房

中根千枝, タテ社会の人間関係, 講談社, 1967
木村敏, 人と人との間, 弘文堂, 1972
山本七平 (著),「空気」の研究, 文藝春秋, 1981/1/1
会田 雄次 (著), 日本人の意識構造 (講談社現代新書) , 講談社, 1972/10/25
石田英一郎, 日本文化論 筑摩書房 1969
荒木博之, 日本人の行動様式 -他律と集団の論理- , 講談社, 1973

吉井博明 情報化と現代社会[改訂版] 1997 北樹出版

//// 著者が、日本人以外の場合。
///// 欧米諸国からの視点。
Benedict,R., The Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture, Boston Houghton Mifflin, 1948 (長谷川松治訳, 菊と刀 - 日本文化の型, 社会思想社, 1948)
Caudill,W., Weinstein,H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America, Psychiatry,32 1969
Clark,G.The Japanese Tribe:Origins of a Nation's Uniqueness, 1977(村松増美訳 日本人 - ユニークさの源泉 - , サイマル出版会 1977)
Ederer,G., Das Leise Laecheln Des Siegers, 1991, ECON Verlag(増田靖訳 勝者・日本の不思議な笑い, 1992 ダイヤモンド社)
Kenrick,D.M., Where Communism Works: The Success of Competitive-Communism In Japan,1988,Charles E. Tuttle Co., Inc., (ダグラス・M. ケンリック (著), 飯倉 健次 (翻訳), なぜ“共産主義”が日本で成功したのか, 講談社, 1991/11/1)
Reischauer,E.O., The Japanese Today: Change and Continuity,1988, Charles E. Tuttle Co. Inc.
W.A.グロータース (著), 柴田 武 (翻訳), 私は日本人になりたい—知りつくして愛した日本文化のオモテとウラ (グリーン・ブックス 56) , 大和出版, 1984/10/1

///// 東アジアからの視点。
李 御寧 (著), 「縮み」志向の日本人, 学生社, 1984/11/1

/// 心理。
安田三郎「閥について——日本社会論ノート（３）」（『現代社会学3』2巻1号所収・1975・講談社）
木村敏, 人と人との間 - 精神病理学的日本論, 1972, 弘文堂
丸山真男, 日本の思想, 1961, 岩波書店
統計数理研究所国民性調査委員会 (編集), 日本人の国民性〈第5〉戦後昭和期総集, 出光書店, 1992/4/1

/// コミュニケーション。
芳賀綏, 日本人の表現心理, 中央公論社, 1979

/// 歴史。
R.N.ベラー (著), 池田 昭 (翻訳), 徳川時代の宗教 (岩波文庫), 岩波書店, 1996/8/20
勝俣 鎮夫 (著), 一揆 (岩波新書) , 岩波書店, 1982/6/21
永原 慶二 (著), 日本の歴史〈10〉下克上の時代, 中央公論社, 1965年
戸部 良一 (著), 寺本 義也 (著), 鎌田 伸一 (著), 杉之尾 孝生 (著), 村井 友秀 (著), 野中 郁次郎 (著), 失敗の本質—日本軍の組織論的研究, ダイヤモンド社, 1984/5/1

/// 民俗。
宮本 常一 (著), 忘れられた日本人 (岩波文庫) , 岩波書店, 1984/5/16

/// 食糧の確保。
大内力 (著), 金沢夏樹 (著), 福武直 (著) , 日本の農業 UP選書, 東京大学出版会, 1970/3/1

/// 地域。
//// 村落。
中田 実 (編集), 坂井 達朗 (編集), 高橋 明善 (編集), 岩崎 信彦 (編集), 農村 (リーディングス日本の社会学) , 東京大学出版会, 1986/5/1
蓮見 音彦 (著), 苦悩する農村—国の政策と農村社会の変容, 有信堂高文社, 1990/7/1
福武直 (著) , 日本農村の社会問題 UP選書, 東京大学出版会, 1969/5/1
余田 博通 (編集), 松原 治郎 (編集), 農村社会学 (1968年) (社会学選書) , 川島書店, 1968/1/1
今井幸彦 編著, 日本の過疎地帯 (1968年) (岩波新書), 岩波書店, 1968-05

きだみのる (著), 気違い部落周游紀行 (冨山房百科文庫 31), 冨山房, 1981/1/30
きだ みのる (著), にっぽん部落 (1967年) (1967年) (岩波新書)

//// 都市。

鈴木広 高橋勇悦 篠原隆弘 編, リーディングス日本の社会学 7 都市, 東京大学出版会, 1985/11/1
倉沢 進 (著), 秋元 律郎 (著), 町内会と地域集団 (都市社会学研究叢書) , ミネルヴァ書房, 1990/9/1
佐藤 文明 (著), あなたの「町内会」総点検 [三訂増補版] —地域のトラブル対処法 (プロブレムQ&A), 緑風出版, 2010/12/1

//// エリア毎の特色。
京都新聞社 (編さん), 京男・京おんな, 京都新聞社, 1984/1/1
丹波 元 (著), こんなに違う京都人と大阪人と神戸人 (PHP文庫) , PHP研究所, 2003/3/1
サンライズ出版編集部 (編集), 近江商人に学ぶ, サンライズ出版, 2003/8/20

/// 血縁関係。
有賀 喜左衛門 (著), 日本の家族 (1965年) (日本歴史新書) , 至文堂, 1965/1/1
光吉 利之 (編集), 正岡 寛司 (編集), 松本 通晴 (編集), 伝統家族 (リーディングス 日本の社会学) , 東京大学出版会, 1986/8/1

/// 政治。
石田雄, 日本の政治文化 - 同調と競争, 1970, 東京大学出版会
京極純一, 日本の政治, 1983, 東京大学出版会

/// ルール。法律。
青柳文雄, 日本人の罪と罰, 1980, 第一法規出版
川島武宣, 日本人の法意識 (岩波新書 青版A-43) , 岩波書店, 1967/5/20

/// 行政。
辻清明 新版 日本官僚制の研究 東京大学出版会 1969
藤原 弘達 (著), 官僚の構造 (1974年) (講談社現代新書) , 講談社, 1974/1/1
井出嘉憲 (著), 日本官僚制と行政文化—日本行政国家論序説, 東京大学出版会, 1982/4/1
竹内 直一 (著), 日本の官僚—エリート集団の生態 (現代教養文庫) , 社会思想社, 1988/12/1
教育社 (編集), 官僚—便覧 (1980年) (教育社新書—行政機構シリーズ〈122〉), 教育社, 1980/3/1
加藤栄一, 日本人の行政—ウチのルール (自治選書), 第一法規出版,

1980/11/1
新藤 宗幸 (著), 技術官僚—その権力と病理 (岩波新書), 岩波書店, 2002/3/20
新藤 宗幸 (著), 行政指導—官庁と業界のあいだ (岩波新書) , 岩波書店, 1992/3/19

武藤 博己 (著), 入札改革—談合社会を変える (岩波新書) , 岩波書店, 2003/12/19

宮本政於, お役所の掟, 1993, 講談社

/// 経営。
間宏,日本的経営 - 集団主義の功罪,日本経済新聞社,1973
岩田龍子, 日本の経営組織, 1985, 講談社
高城 幸司 (著), 「課長」から始める 社内政治の教科書, ダイヤモンド社, 2014/10/31

/// 教育。
大槻 義彦 (著), 大学院のすすめ—進学を希望する人のための研究生活マニュアル, 東洋経済新報社, 2004/2/13
山岡栄市 (著), 人脈社会学—戦後日本社会学史 (御茶の水選書) , 御茶の水書房, 1983/7/1

/// スポーツ。
Whiting, R., The Chrysanthemum and the Bat 1977 Harper Mass Market Paperbacks (松井みどり訳, 菊とバット 1991 文藝春秋)

/// 性差。
//// 母性。母親。
Caudill,W., Weinstein, H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America Psychiatry,32 1969

河合隼雄, 母性社会日本の病理, 中央公論社 1976
佐々木 孝次 (著), 母親と日本人, 文藝春秋, 1985/1/1
小此木 啓吾 (著), 日本人の阿闍世コンプレックス, 中央公論社, 1982
斎藤学, 『「家族」という名の孤独』講談社 1995
山村賢明, 日本人と母—文化としての母の観念についての研究, 東洋

館出版社, 1971/1/1
土居健郎, 「甘え」の構造, 1971, 弘文堂

山下 悦子 (著), 高群逸枝論—「母」のアルケオロジー, 河出書房新社, 1988/3/1
山下 悦子 (著), マザコン文学論—呪縛としての「母」 (ノマド叢書) , 新曜社, 1991/10/1

中国新聞文化部 (編集), ダメ母に苦しめられて (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1999/1/1

加藤秀俊, 辛口教育論 第四回 衣食住をなくした家, 食農教育 200109, 農山漁村文化協会

//// 女性。
木下 律子 (著), 妻たちの企業戦争 (現代教養文庫) , 社会思想社, 1988/12/1
木下律子 (著), 王国の妻たち—企業城下町にて, 径書房, 1983/8/1
中国新聞文化部 (編集), 妻の王国—家庭内“校則”に縛られる夫たち (女のココロとカラダシリーズ), ネスコ, 1997/11/1

//// 男性。
中国新聞文化部 (編集), 長男物語—イエ、ハハ、ヨメに縛られて (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1998/7/1
中国新聞文化部 (編集), 男が語る離婚—破局のあとさき (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1998/3/1

// 社会間比較。
/// 欧米諸国との比較。
山岸俊男, 信頼の構造, 1998, 東京大学出版会
松山幸雄「勉縮」のすすめ, 朝日新聞社, 1978
木村尚三郎, ヨーロッパとの対話, 1974, 日本経済新聞社
栗本 一男 (著), 国際化時代と日本人—異なるシステムへの対応 (NHKブックス 476) , 日本放送出版協会, 1985/3/1
/// 社会の特殊性。その有無についての検討。
高野陽太郎、纓坂英子, " 日本人の集団主義" と" アメリカ人の個人主義" -通説の再検討-心理学研究vol.68 No.4,pp312-327,1997
杉本良夫、ロス・マオア, 日本人は「日本的」か - 特殊論を超え多

元的分析へ - , 1982, 東洋経済新報社
/// 血縁関係。
増田光吉, アメリカの家族・日本の家族, 1969, 日本放送出版協会
中根千枝『家族を中心とする人間関係』講談社，1977
/// コミュニケーション。
山久瀬 洋二 (著), ジェイク・ロナルドソン (翻訳), 日本人が誤解される100の言動 100 Cross-Cultural Misunderstandings Between Japanese People and Foreigners【日英対訳】 (対訳ニッポン双書) , IBCパブリッシング, 2010/12/24
鈴木 孝夫 (著), ことばと文化 (岩波新書) , 岩波書店, 1973/5/21
/// 独創性。
西沢潤一, 独創は闘いにあり, 1986, プレジデント社
江崎玲於奈, アメリカと日本 - ニューヨークで考える, 1980, 読売新聞社
乾侑, 日本人と創造性, - 科学技術立国実現のために, 1982, 共立出版
S.K.ネトル、桜井邦朋, 独創が生まれない - 日本の知的風土と科学, 1989, 地人書館

/// 経営。
Abegglen, J.C.,The Japanese Factory:Aspects of Its Social Organization,Free Press 1958 (占部都美 監訳 「日本の経営」 ダイヤモンド社 1960)
林 周二, 経営と文化, 中央公論社, 1984
太田肇 (著) , 個人尊重の組織論, 企業と人の新しい関係 (中公新書) , 中央公論新社, 1996/2/25
/// 保育。
Caudill,W., Weinstein, H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America Psychiatry,32 1969
/// 教育。
岡本 薫 (著), 新不思議の国の学校教育―日本人自身が気づいていないその特徴, 第一法規, 2004/11/1
宮智 宗七 (著), 帰国子女―逆カルチュア・ショックの波紋 (中公新書) 中央公論社, 1990/1/1
グレゴリー・クラーク (著), Gregory Clark (原著), なぜ日本の教育は変わらないのですか? , 東洋経済新報社, 2003/9/1
恒吉僚子, 人間形成の日米比較 - かくれたカリキュラム, 1992, 中央公論社
/// 性差。
//// 女性。

杉本 鉞子 (著), 大岩 美代 (翻訳), 武士の娘 (筑摩叢書 97) , 筑摩書房, 1967/10/1
//// 男性。
グスタフ・フォス (著), 日本の父へ, 新潮社, 1977/3/1
/ 韓国。
// 単独社会。
朴 泰赫 , 醜い韓国人, —われわれは「日帝支配」を叫びすぎる (カッパ・ブックス) 新書 – , 光文社, 1993/3/1
朴 承薫 (著), 韓国 スラングの世界, 東方書店, 1986/2/1
// 社会間比較。
コリアンワークス, 知れば知るほど理解が深まる「日本人と韓国人」なるほど事典—衣食住、言葉のニュアンスから人づきあいの習慣まで (PHP文庫) 文庫 – , PHP研究所, 2002/1/1
造事務所 , こんなに違うよ！ 日本人・韓国人・中国人 (PHP文庫), PHP研究所 (2010/9/30)
/ 中国。
// 単独社会。
/// 社会全般。
林 松濤 (著), 王 怡韡 (著), 舩山 明音 (著) , 日本人が知りたい中国人の当たり前, 中国語リーディング, 三修社, 2016/9/20
/// 心理。
園田茂人, 中国人の心理と行動, 2001, 日本放送出版協会
デイヴィッド・ツェ (著), 吉田 茂美 (著), 関係(グワンシ) 中国人との関係のつくりかた , ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2011/3/16
/// 歴史。
加藤 徹 (著), 西太后—大清帝国最後の光芒 (中公新書) 新書 – , 中央公論新社, 2005/9/1
宮崎 市定 (著), 科挙—中国の試験地獄 (中公新書 15) , 中央公論社, 1963/5/1
/// 血縁関係。
瀬川 昌久, 現代中国における宗族の再生と文化資源化 東北アジア研究 18 pp.81-97 2014-02-19
// 社会間比較。
邱 永漢 (著), 騙してもまだまだ騙せる日本人—君は中国人を知らなさすぎる, 実業之日本社, 1998/8/1
邱永漢 (著) , 中国人と日本人, 中央公論新社, 1993
/ ロシア。
// 単独社会。
/// 社会全般。

ヘドリック スミス (著), 飯田 健一 (翻訳), 新・ロシア人〈上〉, 日本放送出版協会, 1991/2/1
ヘドリック スミス (著), 飯田 健一 (翻訳), 新・ロシア人〈下〉, 日本放送出版協会, 1991/3/1
/// 歴史。
伊賀上 菜穂, 結婚儀礼に現れる帝政末期ロシア農民の親族関係：記述資料分析の試み スラヴ研究, 49, 179-212 2002
奥田 央, 1920年代ロシア農村の社会政治的構造（１）, 村ソヴェトと農民共同体, 東京大学, 経済学論集, 80 1-2, 2015-7 https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp › econ0800102
大矢 温, スラヴ派の共同体論における「ナショナル」意識 - 民族意識から国民意識への展開 - , 札幌法学 29 巻 1・2 合併号（2018）, pp.31-53
// 社会間比較。
/// 心理。
アレックス インケルス (著), Alex Inkeles (原著), 吉野 諒三 (翻訳), 国民性論―精神社会的展望, 出光書店, 2003/9/1
服部 祥子 (著), 精神科医の見たロシア人 (朝日選書 245), 朝日新聞社出版局, 1984/1/1
/// 民俗。
アレクサンドル・プラーソル, ロシアと日本：民俗文化のアーキタイプを比較して, 新潟国際情報大学情報文化学部紀要第10号、2007.
/// 血縁関係。
高木正道, ロシアの農民と中欧の農民, ――家族形態の比較――, 法経研究, 42巻1号 pp.1-38, 1993
/// 経営。
宮坂 純一, ロシアではモチベーションがどのような内容で教えられているのか, 社会科学雑誌』第 5 巻（2012年11月）―― 503-539
宮坂 純一, 日ロ企業文化比較考, 『社会科学雑誌』第 18 巻（2017 年 9 月）――, pp.1-48
/// 性差。
Д.Х. Ибрагимова, Кто управляет деньгами в российских семьях?, Экономическая социология. Т. 13. № 3. Май 2012, pp22-56

/ 東南アジア。
// 単独社会。
丸杉孝之助, 東南アジアにおける農家畜産と農業経営, 熱帯農業, 19(1), 1975 pp.46-49
中川 剛 (著), 不思議のフィリピン―非近代社会の心理と行動 (NHK

ブックス) , 日本放送出版協会, 1986/11/1
// 社会間比較。

＝＝ 液体。
/ 液体の性質。液体の動き。
小野周 著, 温度とはなにか , 岩波書店、1971
小野 周 (著), 表面張力 (物理学one point 9), 共立出版, 1980/10/1
イーゲルスタッフ (著), 広池 和夫 (翻訳), 守田 徹 (翻訳), 液体論入門 (1971年) (物理学叢書) , 吉岡書店, 1971
上田 政文 (著), 湿度と蒸発―基礎から計測技術まで, コロナ社, 2000/1/1
稲松 照子 (著), 湿度のおはなし, 日本規格協会, 1997/8/1
伊勢村 寿三 (著), 水の話 (化学の話シリーズ (6)) , 培風館, 1984/12/1
力武常次 (著), 基礎からの物理 総合版 (チャート式シリーズ) , 数研出版, 数研出版, 1986/1/1
野村 祐次郎 (著), 小林 正光 (著), 基礎からの化学 総合版 (チャート式・シリーズ) , 数研出版, 1985/2/1
物理学辞典編集委員会 , 物理学辞典 改訂版 , 培風館, 1992
池内満, 分子のおもちゃ箱 , 2008年1 月19日 http://mike1336.web.fc2.com/ (2008年2月23日)
/ 液体の知覚。
大塚巌 (2008). ドライ、ウェットなパーソナリティの認知と気体、液体の運動パターンとの関係. パーソナリティ研究, 16, 250-252

＝＝ 生命。
/ 総論。
鈴木孝仁, 本川達雄, 鷲谷いづみ, チャート式シリーズ, 新生物 生物基礎・生物 新課程版, 数研出版, 2013/2/1
/ 遺伝子。
リチャード・ドーキンス【著】 , 日高敏隆 , 岸由二 , 羽田節子 , 垂水雄二【訳】, 利己的な遺伝子, 紀伊國屋書店, 1991/02/28
/ 精子。卵子。
緋田 研爾 (著), 精子と卵のソシオロジー―個体誕生へのドラマ (中公新書) 中央公論社, 1991/3/1
/ 神経系。
二木 宏明 (著), 脳と心理学―適応行動の生理心理学 (シリーズ脳の科学) , 朝倉書店, 1984/1/1

山鳥 重 (著), 神経心理学入門, 医学書院, 1985/1/1
伊藤 正男 (著), 脳の設計図 (自然選書) , 中央公論社, 1980/9/1
D.O.ヘッブ (著), 白井 常 (翻訳), 行動学入門―生物科学としての心理学 (1970年) , 紀伊国屋書店, 1970/1/1
// 知覚。
岩村 吉晃 (著), タッチ (神経心理学コレクション), 医学書院, 2001/4/1
松田 隆夫 (著), 知覚心理学の基礎, 培風館, 2000/7/1
// パーソナリティ。
Murray,H.A., 1938, Exploration in personality:A clinical and experimental study of fifty men of collegeage.
Schacter, S., 1959, The Psychology of affiliation.Stanford University press.
三隅三不二, 1978, リーダーシップの科学, 有斐閣
Fiedler,F.E., 1973, The trouble with leadership training is that it doesn't train leaders-by. Psychology Today Feb(山本憲久訳 1978 リーダーシップを解明する 岡堂哲雄編 現代のエスプリ131: グループ・ダイナミクス 至文堂).
Snyder,M., 1974, The self-monitoring of expssive behavior. Journal of Personality and Social Psychology, 30, 526-537.
Fenigstein, A., Scheier,M.F., & Buss,A.H., 1975, Public and private self-consciousness: Assessment and theory. Journal of Consulting and Clinical Psychology,43,522-527.
押見輝男, 自分を見つめる自分-自己フォーカスの社会心理学, サイエンス社, 1992
Wicklund, R.A., & Duval,S. 1971 Opinion change and performance facilitation as a result of objective self-awareness. Journal of Experimental Social Psychology,7,319-342.
Jourard, S.M. 1971, The transparent self, rev.ed.Van Nostrand Reinhold(岡堂哲雄訳 1974 透明なる自己 誠信書房).
Brehm, J.W.,1966, A Theory of psychological reactance. Academicpss.
Toennies, F.,1887, Gemeinshaft und Gesellshaft, Leipzig,(杉之原寿一訳「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」1957 岩波書店)
McCrae, R. R., Costa, P. T., Jr., 1987, Validation of the five-factor model of personality across instruments and observers., Journal of Personality and Social Psychology, 52, 81-90
Eysenck, H. J., 1953, The structure of human personality. New York: Wiley.
Edwards, A.L., 1953, The relationship between judged desirebility

of a trait and the plobability that the trait will be endowsed. Journal of Applied Psychology, 37,90-93
// 情報。
吉田 民人 (著), 情報と自己組織性の理論, 東京大学出版会, 1990/7/1
/ 社会性。
吉田 民人 (著), 主体性と所有構造の理論, 東京大学出版会, 1991/12/1

/ 人間以外の生命。
// 行動。
デティアー(著), ステラー(著), 日高敏隆(訳),小原嘉明(訳), 動物の行動 - 現代生物学入門7巻, 岩波書店, 1980/1/1
// 心理。
D.R.グリフィン (著), 桑原 万寿太郎 (翻訳), 動物に心があるか―心的体験の進化的連続性 (1979年) (岩波現代選書―NS〈507〉), 岩波書店, 1979年
// 文化。
J.T.ボナー (著), 八杉 貞雄 (翻訳), 動物は文化をもつか (1982年) (岩波現代選書―NS〈532〉) , 岩波書店, 1982/9/24
// 社会。
今西 錦司 (著), 私の霊長類学 (講談社学術文庫 80) , 講談社, 1976/11/1
今西錦司『私の自然観』講談社学術文庫 , 1990 (1966) .
河合雅雄 (著), ニホンザルの生態, 河出書房新社, 1976/1/1
伊谷純一郎 (著) , 高崎山のサル (講談社文庫), 講談社, 1973/6/26
伊谷純一郎 (著) , 霊長類社会の進化 (平凡社 自然叢書) 単行本 –, 平凡社, 1987/6/1
/ 無神論。
リチャード・ドーキンス (著), 垂水 雄二 (翻訳), 神は妄想である―宗教との決別, 早川書房, 2007/5/25

＝＝ 辞書。
新村出 (編著) ,広辞苑 - 第5版, 岩波書店, 1998
Stein, J., & Flexner, S. B. (Eds.), The Random House Thesaurus., Ballantine Books., 1992

＝＝ データ分析の方法。
田中敏 (2006). 実践心理データ解析 改訂版 新曜社
中野博幸, JavaScript-STAR , 2007年11月9日 http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/ (2008年2月25日)

私が執筆した全ての書籍。その一覧。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Sex Differences And Female Dominance
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 性别差异和女性主导地位
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Половые различия и женское превосходство
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 男女の性差と女性の優位性

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Female-Dominated Society Will Rule The World.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 女性主导的社会将统治世界
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Общество, в котором доминируют женщины, будет править миром.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 女性優位社会が、世界を支配する。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Mobile Life. Settled Life. The origins of social sex differences.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 移动生活。定居生活。社会性别差异的起源。
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Мобильная жизнь. Урегулированная жизнь. Истоки социальных различий по половому признаку.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 移動生活。定住生活。社会的性差の起源。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) The essence of life. The essence of human beings. The darkness of them.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 生命的本质。人类的本质。他们的黑暗。
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Сущность жизни. Сущность человеческих существ. Их тьма.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 生命の本質。人間の本質。それらの暗黒性。

Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) On Atheism and the Salvation of the Soul. Live by neuroscience!
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) 论无神论与灵魂的救赎。靠神经科学生存！
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) Об атеизме и спасении души. Живи неврологией!
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) 無神論と魂の救済について。脳神経科学で生きよう！

Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) Dryness. Wetness. Sensation of humidity. Perception of humidity. Personality Humidity. Social Humidity.
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) 干性。湿气。湿度的感觉。对湿度的感知。性格湿度。社会湿度。
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) Сухость. Мокрота. Сенсация влажности. Восприятие влажности. Личностная влажность. Социальная влажность.
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) ドライさ。ウェットさ。湿度の感覚。湿度の知覚。性格の湿度。社会の湿度。

Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) Gases and liquids. Classification of behavior and society. Applications to life and humans.
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) 气体和液体。行为与社会的分类。在生活和人类中的应用。

Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) Газы и жидкости. Классификация поведения и общества. Применение к жизни и человеку.
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) 気体と液体。行動や社会の分類。生命や人間への応用。

Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) Elements of livability. Functionalism of life. Society as life.
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) 宜居的要素。生活的功能主义。社会即生活。
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) Элементы благоустроенности. Функциональность жизни. Общество как жизнь.
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) 生きやすさの素。生命の機能主義。生命としての社会。

Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) The laws of history. History as a system. History for life.
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) 历史的规律。历史是一个系统。历史的生命。
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) Законы истории. История как система. История на всю жизнь.
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) 歴史の法則。システムとしての歴史。生命にとっての歴史。

Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Social Theory of Maternal Authority. A Society of Strong Mothers. Japanese Society as a Case Study.
Iwao Otsuka (Sep 20, 2020) 母亲权威的社会理论。强势母亲的社会。以日本社会为个案研究。
Iwao Otsuka (Sep 20, 2020) Социальная теория материнства: Общество сильных матерей. Японское общество как пример.
Iwao Otsuka (Sep 15, 2020) 母権社会論 - 強い母の社会。事例としての日本社会。 -

Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Mechanisms of Japanese society. A society of acquired settled groups.
Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) 日本社会的机制。后天定居群体的社会。
Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Механизмы японского общества. Общество приобретенных оседлых групп.
Iwao Otsuka (Aug 28, 2020) 日本社会のメカニズム。後天的定住集団の社会。

Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) Inertial Society
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) 惯性社会（中文版本）
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) инерционное общество
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) 慣性社会（日本語版）

Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) Neurosociology
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) 神经社会学（中文版本）
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) Нейросоциология
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) 神経社会学（日本語版）

Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) From transportation-centric society to communication-centric society. The Progress of Transition.
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) 从以交通为中心的社会向以通信为中心的社会。转型的进展。
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) От общества, ориентированного на транспорт, к обществу, ориентированному на коммуникации. Прогресс переходного периода.
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) 交通中心社会から通信中心社会へ。移行の進展。

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) The Sociology of the Individual -The Elemental Reduction Approach.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 个人社会学 -元素还原法。

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Социология личности -Элементный подход к сокращению.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 個人の見える社会学　- 要素還元アプローチ -

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Introduction Of A White Tax To Counter Discrimination Against Blacks.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 引入白人税以打击对黑人的歧视
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Введение белого налога для противодействия дискриминации черных
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 黒人差別対策としての白人税導入

Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) Personality and sensation, perception. Light and dark. Warm and cold. Hard and soft. Loose and tight. Tense and relaxed.
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) 人格与感觉、知觉。明与暗。温暖与寒冷。硬和软。松与紧。紧张与放松。
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) Личность и ощущения, восприятие. Светлое и темное. Тепло и холодно. Твердый и мягкий. Свободный и тугой. Напряженный и расслабленный.
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) 性格と感覚、知覚。明暗。温冷。硬軟。緩さときつさ。緊張とリラックス。

Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) Motherhood and Fatherhood. Maternal and paternal authority. Parents and Power.
Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) 母性与父性。母权和父权。父母与权力。
Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) Материнство и отцовство. Материнская и отцовская власть. Родители и власть.
Iwao Otsuka (Nov 22, 2020) 母性と父性。母権と父権。親と権力。

Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) Sex differences and sex discrimination.

They cannot be eliminated. Social mitigation and compensation for them.
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) 性别差异和性别歧视。它们无法消除。对它们进行社会缓解和补偿。
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) Половые различия и дискриминация по половому признаку. Они не могут быть устранены. Социальное смягчение и компенсация за них.
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) 男女の性差と性差別。それらは無くせない。それらへの社会的な緩和や補償。

Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) Mechanisms of acquired settled group societies. Female dominance.
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) 后天定居群体社会的机制。女性主导地位。
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) Механизмы обществ приобретенных оседлых групп. Доминирование женщин.
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) 後天的定住集団社会のメカニズム。女性の優位性。

Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) Ownership and non-ownership of resources. Their advantages and disadvantages.
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) 资源的所有权和非所有权。其利弊。
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) Владение и не владение ресурсами. Их преимущества и недостатки.
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) 資源の所有と非所有。その利点と欠点。

Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) Wealth and poverty. The emergence of economic disparity. Causes and solutions.
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) 财富与贫穷。经济差距的出现。原因和解决办法。
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) Благополучие и бедность. Появление экономического неравенства. Причины и решения.
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) 富裕と貧困。経済的格差の発生。その原

因と解消法。

Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) Social delinquents. A true delinquent. The difference between the two.
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) 社会不良分子。真正的不良分子。两者之间的区别。
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) Социальные преступники. Настоящий преступник. Разница между ними.
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) 社会的な不良者。真の不良者。両者の違い。

Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) How to enjoy game music videos.
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) 如何欣赏游戏音乐视频。
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) Как наслаждаться игровыми музыкальными клипами.
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) ゲーム音楽動画の楽しみ方。

Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) Life worth living. Fulfilling life. The source of them.
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) 值得生活的生活。充实的生活。他们的源头。
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) Жизнь, достойная жизни. Полноценная жизнь. Источник их.
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) 生きがい。充実した人生。それらの源。

私の書籍の内容。それらの自動翻訳のプロセスについて。

ご訪問ありがとうございます！

私は本の内容を頻繁に改訂しています。
そのため、読者の皆様には、随時サイトを訪れていただき、新刊や改訂版の書籍をダウンロードしていただくことをお勧めしています。

自動翻訳には以下のサービスを利用しています。

DeepL プロ
https://www.deepl.com/translator

本サービスは以下の会社が提供しています。

DeepL GmbH

私の本の原語は日本語です。
私の本の自動翻訳の順序は以下の通りです。
日本語→英語→中国語、ロシア語

どうぞお楽しみ下さい！

私の略歴。

私は、1964年に、日本の神奈川県で、生まれた。
私は、1989年に、東京大学文学部社会学科を卒業した。
私は、1989年度の日本の国家公務員採用試験のI種区分の、社会学の職種に、最終合格した。
私は、1992年度の日本の国家公務員採用試験のI種区分の、心理学の職種に、最終合格した。

私は、大学卒業後は、日系大手IT企業の研究所に勤務して、コンピュータのソフトウェアの試作業務に従事した。
私は、現在は、企業を退職して、執筆活動に専念中である。